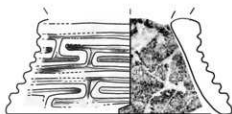


は ん ざ ん ば る い せ ぎ  
平安山原B・C遺跡

— 桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成20・21年度） —



大洞系土器

2016（平成28）年12月

沖縄県 北谷町教育委員会



## はじめに

本報告書は、桑江伊平土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査として、平成20・21年度に記録保存を目的とした平安山原C遺跡、平成21年度の平安山原B遺跡発掘調査についての成果をまとめたものであります。

両遺跡は、旧字平安山と旧字伊礼の間を流れるナガサ川の北側に位置しており、貝塚時代後期以降の生活跡やグスク時代の耕作域などが重複する遺跡であります。

平安山原C遺跡では、貝塚時代後期以後の貝塚が、良好な堆積を残した状態で検出され、出土した資料から土器の新旧関係について地層堆積から400年の差を見だし、貝交易の変化を窺わせる様相、漁網錘に用いられた二枚貝有孔製品の大量出土、ジュゴン骨の一括出土、往時の海がイノ型であることなど、様々な成果が得られております。

この貝塚堆積については、剥ぎ取り保存を行い、本町庁舎のロビーにて常設展示をしております。

平安山原B遺跡では、県内初の大洞系土器が出土しております。東日本を起源とする縄文時代晩期のこの土器が出土したことは、縄文文化の広がりや示す大変重要な意義を有するものであります。更に、グスク時代初期頃に浜堤背後の湿地の条件を利用した耕作域、これに関連する可能性が高い溝・杭列・畦畔状遺構・ウシ蹄跡が発見され、発掘調査での出土例としては県内初の鉄製風呂鉢が出土しております。

また、両遺跡は、近世、近代にかけては集落と耕作地の区割がなされたと見られており、石列や小流路内に築かれた石組遺構等が検出されております。

本発掘調査が、これまで行われてきた旧字平安山における文化財調査の成果を結びつけ、出土品の整理・分析、報告書作成によって、先史時代から現代に至る環境変化や人々の移動が深く関係し展開していく様子が明らかとなったことは、「平安山原地区」が沖縄の先史人のサンゴ礁域における生活モデルとなり得る大きな成果であります。

この大きな成果が、町民はもとより多くの方々へ本町の歴史や文化を実感し、理解する資料の一助となれば幸いです。さらに、本町においては、現在、町立博物館建設を進めており、開館された暁には、活用され町民の心の豊かさと魅力あるまちづくりに繋がるものと考えております。

末尾になりましたが、様々なご指導やご助言、ご協力を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます。

平成28年12月

北谷町教育委員会  
教育長 川上 啓一

# 例 言

1. 本報告書は、北谷町教育委員会が桑江伊平土地区画整理事業に伴い、平成20・21年度「平安山C遺跡」、平成21年度「平安山B遺跡」発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/2,500地形図（昭和54年測量）を元に北谷町役場都市計画課が作成したものである。本書に掲載した緯度、経度の平面直角座標はすべて世界測地系にもとづくものである。

3. 遺物の同定等については、下記の方にご協力をいただいた。（敬称略）記して感謝申し上げます。

陶磁器	大橋 康二（佐賀県立九州陶磁文化館）
脊椎動物遺体	樋泉 岳二（早稲田大学教育学部）
貝類遺体	黒住 耐二（千葉県立中央博物館）
人骨	藤田 祐樹（沖縄県立博物館・美術館）
石質	大城 逸朗（おきなわ石の会）
堆積学	松田順一郎（史跡鴻池新田会所管理事務所）

4. 樋泉岳二氏・黒住耐二氏・藤田祐樹氏には玉稿を賜った。記して謝意を表します。
5. 放射性炭素年代測定は、バリノ・サーヴェイ（株）に依頼した。
6. 本報告書の編集は、土岐耕司の協力を得て島袋春美が行った。執筆分担は下記のとおりである。

第I章 第II章 第III章 第IV章 第3節（21・23・24）	山城 安生
第IV章 第1節 第2節 第3節（7・12～14）第VI章 第1・2節	土岐 耕司
第IV章 第3節（1）	呉屋 広江
第IV章 第3節（2）	上地千賀子
第IV章 第3節（3～5）第VI章 第3節	島袋 春美
第IV章 第3節（6・8～11・22）	比嘉 優子
第IV章 第3節（15～20）	北條 真子

7. 本遺跡の遺物の注記及び、遺構、取上の凡例は次のとおりである。

・注記 HC 地区（平安山原C遺跡H20・21年度調査）

遺跡名	記号	ID	グリッド	群	遺構	層位	日付
⑧平C	台	10813	T15	Ⅲ群		V	H211020

→ ⑧平C 台10813, T15  
Ⅲ群V, H211020

・注記 HB ③地区（平安山原B遺跡H21年度調査）

遺跡名	記号	袋(台帳)No	区	グリッド	遺構	層序	日付
⑩平C	台	271	A-3	S14	SL005	2層	091210

→ ⑩平B, 台271, A13-S14,  
SL005, 2層, 091210

8. 本報告の編年表記は沖縄編年を基本とするが、出土遺物には時代幅があり、その種類によって時代表記が異なる。（伊礼原D遺跡（2013）例言（沖縄・九州時代区分対象表）参考）
9. 本書に掲載した発掘調査に関する写真、実測図などの記録および出土遺物全ては北谷町教育委員会が保管している。



Ⅲ a 層上面（近世面）検出全景（北西より）



近世石列 1 群の遠景（北より）



近代石列と近世土坑群（東より）



近世石列 1 群と大型土坑 SK32 検出（南東より）



近世大型土坑 SK32 完掘（北西より）



同左 断面（東より）



Ⅲb層上面 検出全景 (北西より)



東壁透景 (Q7～10) (南東より)



南壁透景 (Q-R10) (北東より)



ベルト18透景 (R～T18) (南東より)



Ⅲc層上面 検出全景 (南西より)



Ⅲc層上面遺構 完掘全景 (俯瞰)



貝符出土 (Ⅲc層)



カムイヤキ出土 (Ⅲ層)



HC地区まで広がる浜堤域(手前)とⅢd層(奥) (南西より)



浜堤域(左)とⅢd層(中央) (南東より)



SD06 検出状況 (西より)



鉄製風呂鍬出土 (SD06 検出時) (西より)



鉄製風呂鍬出土



III d 層 遺物出土状況 (西より)



III e 層 検出状況 (南東より)



III d 層 遺物出土状況 (北西より)



IV・V層上面検出とHB③南壁 (北西より)





IV・V層上面 検出全景 (北西より)



IV・V層上面 検出全景 (南西より)



下層トレンチ2 断面



下層トレンチ3 断面



調査完了遠景（北西より）



第一浜堤とB流路全景（南東より）



近世石列3群 検出 (北東より)



近世石列3群 検出 (北西より)



調査区全景 (南より、手前は平安山原A遺跡)



近世 石列 2-6・7 群及びクムイ状遺構 検出 (南東より)



近世 石列 2 群 青磁出土 (南より)



近世 クムイ状遺構 検出 (東より)



近世 クムイ状遺構木杭・編物 検出 (北より)



同左 編物部分 (北より)



近世小溝状遺構群 完掘 (北西より)



碗形鉄滓出土



青磁出土



有孔滑石製品出土



貝層Ⅰ群 検出 (南東より)



スコリア (軽石) 範囲 検出 (南東より)



貝層Ⅱ群 f ~ h 検出 (西より)



貝層Ⅱ群 a ~ c 検出 (北西より)



貝層Ⅲ～Ⅴ群 検出 (東より)



貝層Ⅲ群-1b層 検出 (西より)



貝層Ⅲ群-2層下部 遺物出土状況 (北西より)



貝層Ⅲ群-3・4層 検出 (南東より)



貝層Ⅲ群-3・4層 検出 (西より)



貝層Ⅲ群 調査区北壁部分 (南より)



貝層Ⅲ群土層観察用ベルトに西壁 断面 (南東より)



貝層Ⅲ群土層観察用ベルト東側 作業風景 (北から)



町役場ロビーに展示された貝層Ⅲ群の剥ぎ取り土層





大洞A式土器



搬入及び貝塚時代前・中期土器



復元土器



石器



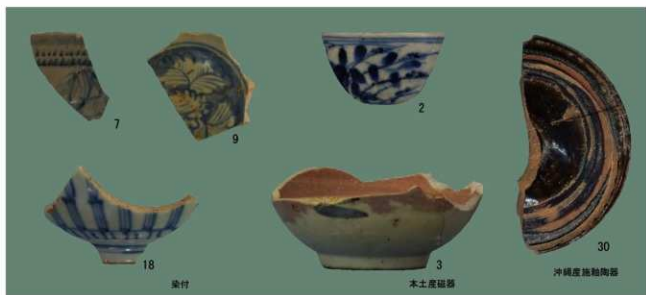
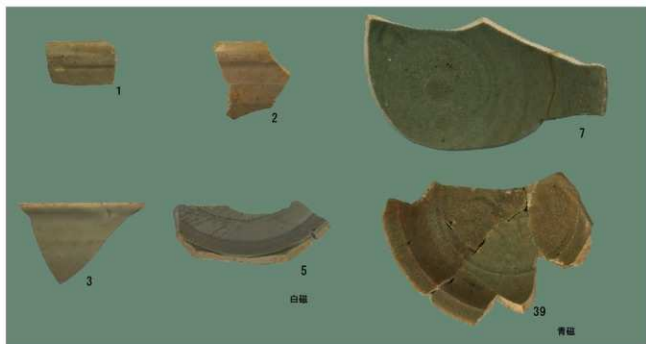
ヤコウガイ製品



ゴホウラ製品



在：シャコガイ 中：マンガイ 右：リュウキウウサルホオ  
 手前：ハイガイ、マヌボガイ、ホソスジイナミガイ、ソメワケグリ、サルガイ、サメザラ、リュウキウウマスコ、カワラガイ、スダレハマグリ、ヌメガイ



巻首図版 16 カムイヤキ・褐釉陶器・白磁・青磁・染付・本土産磁器・沖縄産施釉陶器 (番号は図番号と一致)

# 本文目次

はじめに

例言

巻首図版

第Ⅰ章 調査経緯・経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査経過	3
第Ⅱ章 位置と環境	7
第Ⅲ章 調査の方法	11
第Ⅳ章 調査成果	14
第1節 層序	14
第2節 検出遺構	38
第3節 出土遺物	70
第Ⅴ章 科学的分析	331
第1節 平安山原B遺跡・C遺跡で採集された脊椎動物遺体	331
第2節 平安山原B遺跡と同C遺跡の貝類遺体および本地域の遺跡出土貝類のまとめ	372
第3節 平安山原B遺跡・平安山原C遺跡の年代測定	402
第4節 平安山原B・C遺跡より出土した人骨資料について	406
第Ⅵ章 まとめ	409
第1節 平安山原における遺物平面分布	409
第2節 平安山原の地形と生活空間の変遷	421
第3節 平安山原B・C遺跡の遺構と遺物	431

CD収録

- ・平安山原C遺跡・平安山原B遺跡出土貝類遺体の詳細
- ・平安山原C遺跡・平安山原B遺跡 遺物台帳

## 図版目次

巻首図版1 平安山原B遺跡(HB③地区)	巻首図版10 平安山原C遺跡(HC地区)
巻首図版2 平安山原B遺跡(HB③地区)	巻首図版11 平安山原C遺跡(HC地区)
巻首図版3 平安山原B遺跡(HB③地区)	巻首図版12 平安山原C遺跡(HC地区)
巻首図版4 平安山原B遺跡(HB③地区)	巻首図版13 土器・石器
巻首図版5 平安山原B遺跡(HB③地区)	巻首図版14 貝製品
巻首図版6 平安山原B遺跡(HB③地区)	巻首図版15 貝製品(二枚貝有孔製品)
巻首図版7 平安山原C遺跡(HC地区)	巻首図版16 カムイヤキ・楊輪陶器・白磁・青磁・染付・本土産磁器 ・沖縄産染輪陶器
巻首図版8 平安山原C遺跡(HC地区)	
巻首図版9 平安山原C遺跡(HC地区)	
図版1 貝層Ⅲ群-1a層 検出(北西より)	39
図版2 貝層Ⅲ群-1b層 検出(北西より)	39
図版3 貝層Ⅲ群土層観察用ベルト東面 断面(北東より)	41
図版4 貝層Ⅱ群f~h検出(西より)	41
図版5 貝層Ⅱ群a~c検出(北西より)	41
図版6 SB01~03 完掘(南より)	45
図版7 SB02 検出(東より)	45
図版8 SS01 検出(南西より)	46
図版9 SS02 検出(南西より)	46
図版10 SK03 断面(西より)	47
図版11 SK03 南宋銭出土(東より)	47
図版12 貝層Ⅰ群検出(南東より)	47
図版13 SD06 検出(北西より)	49
図版14 SD06 セクションA(東より)	49
図版15 SD06 セクションC(東より)	49
図版16 SD06 完掘(西より)	49

図版17	SX03 検出(南東より)	49	図版66	土器20	153
図版18	Q14・15付近 ウン蹄痕 検出(西より)	50	図版67	土器21	155
図版19	ウン蹄痕 断ち割り	50	図版68	土器22	157
図版20	SK20～30 検出(南西より)	51	図版69	土器23	159
図版21	SD04 完掘(南西より)	51	図版70	サンゴ有孔製品	172
図版22	耕作関連遺構 畦畔1	53	図版71	石器1	179
図版23	耕作関連遺構 畦畔2～4	54	図版72	石器2	181
図版24	耕作関連遺構 畦畔5	55	図版73	石器3	183
図版25	石列1群検出(西より)	57	図版74	石器4	185
図版26	SK32 断面(南東より)	57	図版75	石器5	187
図版27	石列2群他 検出(南東より)	58	図版76	石器6	189
図版28	SK04 断面(東より)	58	図版77	石器7	191
図版29	籾間の貝集積検出(南西より)	59	図版78	石器8	193
図版30	石列3群 検出(東より)	59	図版79	石器9	195
図版31	石列3群 検出近景(東より)	59	図版80	石器10	197
図版32	石列4群-SL01 検出(西より)	60	図版81	石器11	199
図版33	石列4群-SL06 検出(東より)	60	図版82	石器12	201
図版34	石列5群 検出(東より)	60	図版83	石器13	203
図版35	クムイ状遺構 検出(南西より)	62	図版84	石器14	205
図版36	クムイ状遺構 断面(東より)	62	図版85	石器15	207
図版37	木杭と編物 検出(北より)	62	図版86	石器16	209
図版38	編物 検出(北より)	62	図版87	石器17	211
図版39	小溝状遺構群 検出(北西より)	63	図版88	ゴホウラ・アツソダガイ	215
図版40	土坑列 検出遠景(東より)	64	図版89	貝製品1	229
図版41	HB③-SK01 完掘(北より)	64	図版90	貝製品2	231
図版42	HB③-SK04～09 検出(南東より)	65	図版91	貝製品3	233
図版43	HB③-SK13～19 完掘(南東より)	65	図版92	貝製品4	235
図版44	SL03-04 検出(南東より)	66	図版93	貝製品5	237
図版45	SD01 検出(南西より)	67	図版94	貝製品6	239
図版46	SL05 検出(東より)	67	図版95	貝製品7	241
図版47	土器1	115	図版96	貝製品8	243
図版48	土器2	117	図版97	貝製品9	245
図版49	土器3	119	図版98	貝製品10	247
図版50	土器4	121	図版99	骨製品	249
図版51	土器5	123	図版100	グスタ土器1	257
図版52	土器6	125	図版101	グスタ土器2	259
図版53	土器7	127	図版102	カムイヤキ1	263
図版54	土器8	129	図版103	カムイヤキ2	264
図版55	土器9	131	図版104	滑石製品	265
図版56	土器10	133	図版105	白磁	269
図版57	土器11	135	図版106	青磁1	277
図版58	土器12	137	図版107	青磁2	279
図版59	土器13	139	図版108	青磁3	281
図版60	土器14	141	図版109	染付1	287
図版61	土器15	143	図版110	染付2・色絵	289
図版62	土器16	145	図版111	褐輪陶器・半練土器	293
図版63	土器17	147	図版112	銭貨	294
図版64	土器18	149	図版113	木製品	294
図版65	土器19	151	図版114	鉄製品	296

図版115	SD06検出プラン上での鉄線検出状況(西より) .....	298
図版116	鉄製風呂鍋出土状況 近景(西より) .....	298
図版117	瓦質土器 .....	299
図版118	本土産陶器 .....	301
図版119	本土産磁器 .....	303
図版120	沖縄産施釉陶器1 .....	307
図版121	沖縄産施釉陶器2 .....	309
図版122	沖縄産無釉陶器1 .....	313
図版123	沖縄産無釉陶器2 .....	315
図版124	沖縄産無釉陶器3 .....	317
図版125	陶質土器 .....	319
図版126	鍛冶関連遺物(羽口・鉄滓・炉壁) .....	322
図版127	円盤状製品 .....	325
図版128	瓦 .....	327

図版129	軽石製品・琥珀 .....	330
図版130	脊椎動物遺体1(魚類) .....	366
図版131	脊椎動物遺体2(上段:ウミガメ類・リクガメ類、下段:イヌ・ネズミ科) .....	367
図版132	脊椎動物遺体3(上段:ウマ、下段:イノシシ/ブタ) .....	368
図版133	脊椎動物遺体4(イノシシ/ブタ) .....	369
図版134	脊椎動物遺体5(ウシ) .....	370
図版135	脊椎動物遺体6(ジュゴン・イルカ類) .....	371
図版136	ホシダカラ破損状態 .....	373
図版137	貝類遺体1(巻貝) .....	399
図版138	貝類遺体2(上段:巻貝、下段:二枚貝) .....	400
図版139	貝類遺体3(二枚貝) .....	401
図版140	HC・HB③入骨片 .....	408

## 挿図目次

第1図	北谷町の位置と遺跡分布 .....	5
第2図	遺跡の位置と北谷町域 .....	7
第3図	戦前(1945)の平安山 .....	7
第4図	現在(2002)の平安山 .....	7
第5図	北谷町の地形分類 .....	8
第6図	キャンパス江北川地区の旧地形の復元状況 .....	8
第7図	貝塚時代後期面の断面模式(北西-南東) .....	9
第8図	グリッド設定 .....	13
第9図	平安山原B・C遺跡の位置 .....	13
第10図	平安山原A～C遺跡の各調査区 .....	13
第11図	浜場城・耕作城におけるⅢ層 模式 .....	16
第12図	自然流路の名称と位置 .....	17
第13図	V層堆積変遷 模式 .....	18
第14図	耕作土の人為的作出作業 想定図 .....	20
第15図	Ⅲc・Ⅲd層における貝塚時代後期土器分布 .....	21
第16図	層序1(HB③地区) .....	23
第17図	層序2(HB③地区) .....	25
第18図	層序3(HB③地区) .....	27
第19図	層序4(HB③地区) .....	29
第20図	層序5(HC地区) .....	31
第21図	層序6(HC地区) .....	33
第22図	層序7(HC地区) .....	35
第23図	貝塚時代後期面 当初検出された貝層範囲 .....	38
第24図	貝層Ⅲ～V群各層における地点観測遺物分布 .....	40
第25図	貝層Ⅲ群土層観察用ベルト東面 断面 .....	41
第26図	貝層Ⅱ群 .....	42
第27図	HCIV・V層上面検出遺物配置 .....	43
第28図	HC V層上面検出遺物配置 .....	43
第29図	V層上面 SB01 .....	44
第30図	V層上面 SB02 .....	44
第31図	V層上面 SB03 .....	45
第32図	V層上面 SS01・02 .....	45

第33図	V層上面 SK03 平面 .....	46
第34図	V層上面 SK03 断面 .....	47
第35図	V層上面 貝層Ⅰ群 .....	47
第36図	IV層上面 SD06 .....	48
第37図	IV層上面 SX03 .....	49
第38図	跡底形成過程想定案 模式 .....	50
第39図	耕作関連遺物配置 .....	51
第40図	耕作関連遺物 SD04・SK20～30・木杭群 .....	52
第41図	畦畔状の痕跡 検出箇所 .....	52
第42図	「疑似畦畔B」及び畦畔2・3形成 模式 .....	53
第43図	耕作関連遺物 畦畔2～4 .....	54
第44図	耕作関連遺物 畦畔5 .....	55
第45図	HB③近世面 検出遺物配置 .....	56
第46図	HC近世面 検出遺物配置 .....	56
第47図	近世面右列1群・SK32 .....	57
第48図	近世面右列2群・SK04 .....	58
第49図	近世面右列3群 .....	59
第50図	近世面右列4群 .....	60
第51図	近世面右列5群 .....	60
第52図	近世面右列6・7群 .....	61
第53図	近世面クムイ状遺構 平面 .....	61
第54図	近世面クムイ状遺構 断面 .....	62
第55図	小溝状遺構群 .....	63
第56図	近世面 土坑列 HB③・SK01～03 .....	64
第57図	近世面 土坑群 HB③・SK04～09(左)、HB③・SK13～19(右) .....	64
第58図	近世面 検出遺物配置 .....	65
第59図	近代面 検出遺物配置 .....	66
第60図	近代面 SL03・04 .....	66
第61図	近代面 SD01・SL05 .....	67
第62図	近代面 祝女殿内小屋敷と周辺道路合成図 .....	68
第63図	土器重量 平面分布 .....	71

第64図	HC貝層III群・V層出土土器変遷	72	第113図	石器13	202
第65図	土器(口縁部)平面分布	76	第114図	石器14	204
第66図	土器接合関係 平面分布	78	第115図	石器15	206
第67図	土器(胴部)平面分布	91	第116図	石器16	208
第68図	HC貝層群・V層における底部 出土量	92	第117図	石器17	210
第69図	底部器種別 出土量	93	第118図	巻貝製品 平面分布	213
第70図	土器(底部)平面分布	94	第119図	貝輪 平面分布	214
第71図	土器1	114	第120図	貝符 平面分布	216
第72図	土器2	116	第121図	ヤコウガイの蓋附刀分布	217
第73図	土器3	118	第122図	ヤコウガイ蓋 大きさ別比較	217
第74図	土器4	120	第123図	シレナシジミ(R) サイズ比較	218
第75図	土器5	122	第124図	二枚貝有孔製品 平面分布	222
第76図	土器6	124	第125図	ヤコウガイ重量・製品個数 平面分布	224
第77図	土器7	126	第126図	ヤコウガイの部位名称と割れ方	226
第78図	土器8	128	第127図	タカラガイ製品 平面分布	227
第79図	土器9	130	第128図	貝製品1	228
第80図	土器10	132	第129図	貝製品2	230
第81図	土器11	134	第130図	貝製品3	232
第82図	土器12	136	第131図	貝製品4	234
第83図	土器13	138	第132図	貝製品5	236
第84図	土器14	140	第133図	貝製品6	238
第85図	土器15	142	第134図	貝製品7	240
第86図	土器16	144	第135図	二枚貝有孔製品 地区別重量比較	240
第87図	土器17	146	第136図	貝製品8	242
第88図	土器18	148	第137図	貝製品9	244
第89図	土器19	150	第138図	貝製品10	246
第90図	土器20	152	第139図	骨製品出土 平面分布	248
第91図	土器21	154	第140図	骨製品	249
第92図	土器22	156	第141図	グスタ土器 平面分布	255
第93図	土器23	158	第142図	グスタ土器1	256
第94図	石器 平面分布	161	第143図	グスタ土器2	258
第95図	蔵石 長さとの相関	166	第144図	カムイヤキ 平面分布	261
第96図	蔵石兼磨石 長さとの相関	167	第145図	カムイヤキ1	262
第97図	磨石 長さとの相関	169	第146図	カムイヤキ2	264
第98図	サンゴ有孔製品	172	第147図	滑石製品	265
第99図	石器 石質組成	175	第148図	白磁 平面分布	267
第100図	器種別石質比率	176	第149図	白磁	268
第101図	石器1	178	第150図	青磁 平面分布	275
第102図	石器2	180	第151図	青磁1	276
第103図	石器3	182	第152図	青磁2	278
第104図	石器4	184	第153図	青磁3	280
第105図	石器5	186	第154図	染付・色絵 平面分布	284
第106図	石器6	188	第155図	染付1	286
第107図	石器7	190	第156図	染付2・色絵	288
第108図	石器8	192	第157図	褐輪陶器・半練土器 平面分布	290
第109図	石器9	194	第158図	褐輪陶器・半練土器	292
第110図	石器10	196	第159図	銭貨	294
第111図	石器11	198	第160図	風呂簾の部位名称	295
第112図	石器12	200	第161図	鉄製品	296



第162図	鉄製風呂鉢出土状況 層位模式	298
第163図	瓦質土器	299
第164図	瓦質土器 平面分布	299
第165図	本土産陶器 平面分布	300
第166図	本土産陶器	300
第167図	本土産磁器 平面分布	302
第168図	本土産磁器	303
第169図	沖繩産旋軸陶器 平面分布	304
第170図	沖繩産旋軸陶器1	306
第171図	沖繩産旋軸陶器2	308
第172図	沖繩産無軸陶器 平面分布	310
第173図	沖繩産無軸陶器1	312
第174図	沖繩産無軸陶器2	314
第175図	沖繩産無軸陶器3	316
第176図	陶質土器 平面分布	318
第177図	陶質土器	319
第178図	羽口・鉄滓・か壁 平面分布	321
第179図	鍛冶関連遺物(羽口・鉄滓・か壁)	322
第180図	中国象棋駒参考資料	323
第181図	円盤状製品	324
第182図	瓦 平面分布	326
第183図	瓦	327
第184図	軽石 平面分布(製品含む)	329
第185図	軽石製品・琥珀	330
第186図	平安山原B遺跡(HB③地区)・C遺跡(HC地区)における 脊椎動物遺体の層位別出土数と組成(NISP)	364
第187図	平安山原B遺跡(HB③地区)・C遺跡(HC地区)における 脊椎動物遺体の地区・層位別組成(NISP比)	365
第188図	平安山原B遺跡(HB③地区)・C遺跡(HC地区)における 魚類遺体の地区・層位別組成(NISP比)	365
第189図	平安山原B・C遺跡から得られた優占種のサイズ組成変化	382

第190図	平安山原B・C遺跡 貝類遺体分析地区名	401
第191図	平安山原B・C遺跡 試料採取箇所	405
第192図	人骨出土地点(S-1/1000)	407
第193図	遺物平面分布(平安山原-貝塚Ⅰ期)	410
第194図	遺物平面分布(平安山原-貝塚Ⅱ期)	410
第195図	遺物平面分布(平安山原-貝塚Ⅲ期)	411
第196図	遺物平面分布(平安山原-グスクⅠ期)	411
第197図	遺物平面分布(平安山原-グスクⅡ期)	412
第198図	遺物平面分布(平安山原-近世期)	412
第199図	グスク土器平面分布(平安山原-グスクⅠ期)	413
第200図	白磁・青磁平面分布(平安山原-グスクⅠ期)	413
第201図	骨平面分布(ウシ)	414
第202図	骨平面分布(ウマ)	414
第203図	骨平面分布(ブタ)	415
第204図	骨平面分布(インシロブタ)	415
第205図	骨平面分布(海獣類)	416
第206図	骨平面分布(魚類)	416
第207図	貝平面分布(シャコガイ類製有孔製品)	417
第208図	貝平面分布(リュウキュウサルボオ製有孔製品)	417
第209図	貝平面分布(大形イモガイ)	418
第210図	貝平面分布(ホシダカラ)	418
第211図	貝平面分布(ヤコウガイ)	419
第212図	貝平面分布(小形タカラガイ製鍾)	419
第213図	各期遺物平面分布(模式)	420
第214図	平安山原周辺遺跡 変遷(1)	424
第215図	平安山原周辺遺跡 変遷(2)	425
第216図	平安山原周辺遺跡 変遷(3)	426
第217図	平安山原周辺遺跡 変遷(4)	427
第218図	平安山原周辺遺跡 変遷(5)	428
第219図	時代別出土遺物変遷	429

## 表目次

第1表	北谷町遺跡一覧	6
第2表	HB③浜堤城Ⅲ層における遺物出土状況	15
第3表	HC後層期における遺物出土状況	17
第4表	HB③耕作城Ⅲ層細分層の遺物出土状況	19
第5表	Ⅲa・b層出土遺物	19
第6表	平安山原各遺跡における基本層序の対応	21
第7表	基本層序土層注記一覧	22
第8表	近世面 石列一覧	57
第9表	報告遺構一覧	69
第10表	遺物 出土量	70
第11表	土器分類	71
第12表	輸入土器 出土量	74
第13表	土器(口縁部)出土量	77
第14表	Ⅱ類口縁部 出土量	79
第15表	施文部位別 出土量	80
第16表	文様別(口唇のみ)出土量	80
第17表	文様別(外面のみ)出土量	80
第18表	文様別(外面・内面)出土量	81
第19表	文様別(口唇・外面)出土量	81
第20表	口径サイズ別(Ⅱ～Ⅴ類)出土量	81
第21表	土器(胴部)出土量	89
第22表	土器(底部)出土量	92
第23表	くびれ平底 底径・底厚の関係	98
第24表	土器 観察一覧	100
第25表	土器 出土量	160
第26表	遺構出土土器一覧	162
第27表	石斧 形態別サイズ分類	163
第28表	石斧 観察一覧	164
第29表	敲石 形態別サイズ分類	165
第30表	敲石 形態別サイズ比較(完形)	166
第31表	敲石兼磨石 形態別サイズ分類	166
第32表	敲石兼磨石 形態別サイズ比較(完形)	167

第33表	磨石 形態別サイズ分類	168	第79表	木製品 観察一覧	294
第34表	磨石 形態別サイズ比較(完形)	169	第80表	鉄製品 観察一覧	296
第35表	石皿 使用面×石質相関	170	第81表	各鉄製風呂鉈 特徴一覧	297
第36表	石皿 使用面×残存長相関	170	第82表	本土産陶器 出土量	299
第37表	石器 観察一覧	172	第83表	本土産陶器 観察一覧	299
第38表	岩石の性質と分類	175	第84表	本土産磁器 出土量	302
第39表	器種別使用岩石	176	第85表	本土産磁器 観察一覧	302
第40表	貝製品 出土量	212	第86表	輪色別使用比較	304
第41表	巻貝製品 観察一覧	213	第87表	沖繩産施軸陶器 出土量	304
第42表	貝輪 観察一覧	214	第88表	沖繩産施軸陶器 観察一覧	305
第43表	ゴホウラ・アツソデガイ製品(貝輪)観察一覧	215	第89表	沖繩産無軸陶器 出土量	310
第44表	ゴホウラ・アツソデガイ(自然貝)出土量	216	第90表	沖繩産無軸陶器 観察一覧	311
第45表	貝苎 観察一覧	217	第91表	陶質土器 出土量	318
第46表	大形イモガイ(大さき(殻径)別) 出土量	217	第92表	陶質土器 観察一覧	318
第47表	螺蓋製利器 観察一覧	218	第93表	鍛冶関連遺物 出土量	321
第48表	貝製利器 観察一覧	219	第94表	円盤状製品 出土量	323
第49表	二枚貝有孔製品 出土量	220	第95表	円盤状製品 観察一覧	323
第50表	二枚貝有孔製品(孔位置・重量別) 出土量	221	第96表	瓦 出土量	326
第51表	二枚貝有孔製品遺跡別 出土比較	221	第97表	萩石 出土量(重量)	328
第52表	二枚貝有孔製品 観察一覧	222	第98表	平安山原B遺跡(HB③地区)・C遺跡(HC地区)から 採集された脊椎動物遺体の種名一覧	335
第53表	ホラガイ有孔・ヤコウガイ製容器 観察一覧	223	第99表	平安山原B遺跡(HB③地区)から採集された脊椎動物 遺体の同定結果	336
第54表	ヤコウガイ製品(貝匙) 出土量	224	第100表	平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物 遺体の同定結果	342
第55表	ヤコウガイ製品(貝匙) 観察一覧	225	第101表	平安山原B遺跡(HB③地区)における脊椎動物遺体の 組成(NISP)	362
第56表	ヤコウガイ分類(加工痕有り・自然貝) 出土量	226	第102表	平安山原C遺跡(HC地区)における脊椎動物遺体の 組成(NISP)	363
第57表	カララガイ製品 出土量	227	第103表	平安山原C遺跡・B遺跡の新規報告分およびA遺跡の 近世以降の優占種	381
第58表	カララガイ製品(貝輪) 観察一覧	227	第104表	キャンパ桑江北側地区における各遺跡出土海産 貝類遺体の時代別変遷(暫定)	383
第59表	二枚貝有孔製品の属性	241	第105表	平安山原BおよびC遺跡出土貝類遺体の分類学的位置 と生息場所類型	384
第60表	骨製品 出土量	248	第106表	平安山原C遺跡・平安山原B遺跡出土貝類遺体の詳細	386
第61表	骨製品 観察一覧	248	第107表	放射性炭素年代測定結果	403
第62表	グスク土器 出土量	250	第108表	暦年較正結果	404
第63表	グスク土器胎土分類	252	第109表	平安山原B遺跡および平安山原C遺跡から出土した 人骨片一覧	407
第64表	グスク土器胎土別 出土量	253	第110表	平安山原地区の主な器類出土量	431
第65表	グスク土器 観察一覧	254	第111表	東日本系土器出土一覧(南九州～沖縄)	432
第66表	カムイヤキ 出土量	261	<b>CD収録</b>		
第67表	カムイヤキ 観察一覧	261	第112表	平安山原C遺跡・平安山原B遺跡出土貝類の詳細 (腹足類・二枚貝類)	
第68表	滑石製品 観察一覧	265	第113表	平安山原C遺跡・平安山原B遺跡 遺物台帳	
第69表	北谷町各小字におけるグスク時代初期遺物出土状況	265			
第70表	白磁 出土量	266			
第71表	白磁 観察一覧	267			
第72表	青磁 出土量	270			
第73表	青磁 観察一覧	273			
第74表	染付・色絵 出土量	284			
第75表	染付 観察一覧	285			
第76表	褐輪陶器・半練土器 出土量	291			
第77表	褐輪陶器・半練土器 観察一覧	291			
第78表	銭貨 観察一覧	294			

# 第1章 調査経緯・経過

## 第1節 調査に至る経緯

本報告書は、桑江伊平土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査を行った平安山原C遺跡・平安山原B遺跡を後世に残すため、記録保存を目的とした調査成果をまとめたものである。記録保存調査は、2003（平成15）年3月に返還された在沖米海軍基地（キャンプ桑江北側地区）と既に返還されていた地域を含む、合わせて45.8haにわたる区画整理事業地内で発見された遺跡（「周知の埋蔵文化財」）が対象となった。

本町教育委員会では、1993（平成5）年8月に基地返還の情報を得たことから、それに先立って返還跡地利用の諸開発に対応するため、1995（平成7）年度から1997（平成9）年度に文化庁の補助を得て予備調査を実施した。その成果を踏まえ、更に遺跡の範囲と性格を詳細に把握するため、1998（平成10）年度から2004（平成16）年度にかけて範囲確認調査を行い、9遺跡6遺物散布地（延べ13ha）と周知の2遺跡を合わせた11遺跡が確認された。

跡地利用促進が重要な課題となることから、1999（平成11）年9月から2000（平成12）年10月にかけて、沖縄県内の政府関係機関、沖縄県並びに北谷町で「キャンプ桑江北側地区跡地利用支援関係機関連絡会議」が開催された。

区画整理事業は、2002（平成12）より桑江伊平地権者会が結成されるなどの準備が始められ、2002（平成14）年3月に桑江伊平土地区画整理事業の都市計画決定、2004（平成16）年3月に事業認可（施工者：北谷町）を受け着手された。区画整理事業地内のほぼ全域で盛土造成工事が計画されており、この盛土の造成高は一様でなく埋蔵文化財に悪影響を及ぼす規模であることから、区画整理事業地内の埋蔵文化財は緊急発掘調査を行うこととなった。

この盛土造成工事を行う区画整理事業地は、米軍基地返還跡地が広域幹線道路である国道58号より地盤面が低いため、大雨による冠水が起きる等の問題を含んでいることから、国道との段差を解消し、職住近接型の都市環境の創出及び地域活性化を目指す計画が策定された。

区画整理事業地内に所在する遺跡のうち、1997（平成9）年に発見され、縄文時代の長期にわたる拠点的な集落遺跡であることが判明した伊礼原C遺跡（当時の名称）については、現地保存範囲の確定に向け範囲確認調査が継続され、2004（平成16）年の北谷町庁議で保存が決定、2005（平成17）年に都市計画決定の変更、2006（平成18）年11月の北谷町庁議で約17,000㎡の保存が決定した。そして、2010（平成22）年の文部科学省告示第12号により史跡に指定され、国史跡「伊礼原遺跡」として現状保存されることとなった。

同遺跡を除く他の遺跡は、次善の策として記録保存調査を行うこととなり、2004（平成16）年に北谷町教育委員会と北谷町は、桑江伊平土地区画整理事業施行区域における埋蔵文化財の取り扱いについての協定を締結した。本町教育委員会は、区画整理事業地内の埋蔵文化財の記録保存を目的とする発掘調査について、事務負担量や諸作業の軽減、調査員体制、遺跡面積やその他の事業を考慮し、現地調査の測量及び発掘作業員の手配及び安全管理を民間業者に業務委託することとした。

平安山原C遺跡は平成7年度から平成9年度の予備調査で発見され、当初は貝塚時代前V期（縄文時代晩期）の遺跡であると考えられた。同遺跡は平安山原A・B遺跡に隣接し、その南側に位置する伊礼原D遺跡とは旧河川を挟んで別の遺跡であることが把握された（2008北谷町教委）。今回報告分の発掘調査は、2009（平成21）年3月31日に着手し、2009（平成21）年9月30日に業務を

完了。調査面積は2,460㎡である。発掘調査の着手届は北教社21第303号平成21年4月20日付、終了報告は北教社21第303号平成21年10月21日付である。

平安山原B遺跡(3期)は、予備調査で貝塚時代後期・グスク時代の遺物包含層と戦前の遺構が確認された成果を踏まえ、本調査を4期に分けて行ったうちの1つである。『平安山原B遺跡』(2015北谷町教委)では、調査成果の内容を踏まえ、1・2・4期分(合計4,390㎡)をまとめて報告した。残る3期については隣接する平安山原C遺跡との関連が強いため、今回合わせて報告することとした。3期の発掘調査は平成21年10月14日に着手し、翌年2月19日に業務完了。調査面積は2,720㎡である。着手届は北教社21第2514号平成21年11月11日付、終了報告は北教社21第2514号平成22年3月16日付である。

## 第2節 調査体制

平安山原C遺跡発掘調査及び平安山原B遺跡発掘調査(3期)における調査体制は、以下のとおりである。

事業主体	教育長	比嘉 秀夫(平成20・21年度)
	同	川上 啓一(平成27・28年度)
事業総括	教育次長	謝花 良継(平成20・21年度)
	同	佐久本 盛正(平成27・28年度)
	社会教育課長	大城 操(平成20・21年度)
	同	比嘉 敬文(平成27年度)
	同	池原 誠(平成28年度)
調査総括	文化係長	嘉嘉田 朝栄(平成20・21年度)
	同	米須 健(平成27・28年度)
調査担当	主任主事	山城 安生(平成20・21・27・28年度)
	同	東門 研治(平成20・21・27・28年度)
	同	松原 哲志(平成27・28年度)
	同	島袋 春美(平成27・28年度)
	主事	松原 哲志(平成20・21年度)

### 資料整理作業員(順不同)

(平成27年度)

- 囑託 ・比嘉優子・呉屋広江・上地千賀子・照屋元子・西原美草・佐久間クリエ・曾木菊枝  
 ・東 順子・山城小百合・上間真寿美・富平砂綾子・知念栄子・金城綾乃・大城 光  
 臨時 ・又吉朋子・伊波弘子・泉 恵子・仲宗根円華・仲村渠容子・仲村渠恵子・崎濱あすか  
 ・知花良枝・池原辰樹・仲宗根学・大城明香・照屋朝子・新川弘美・仲里亜希子

(平成28年度)

- 囑託 ・比嘉優子・呉屋広江・上地千賀子・東 順子・上間真寿美  
 臨時 ・大城明香・照屋朝子・新川弘美・仲里亜希子

発掘調査及び自然科学分析に係る業務委託

(平成20年度)

平安山原C遺跡埋蔵文化財発掘調査委託業務委託 株式会社パスコ

平安山原B遺跡埋蔵文化財発掘調査委託業務委託 (その3) 株式会社イーエーシー

(平成22年度)

貝層の額装作成業務委託 株式会社パスコ

(平成28年度)

平安山原B遺跡出土炭化物の年代測定業務委託 パリノ・サーヴェイ株式会社

金属製品保存処理業務委託 株式会社文化財サービス 沖縄営業所

平安山原C遺跡の獣骨年代測定業務委託 パリノ・サーヴェイ株式会社

調査指導及び助言 (敬称略、順不同)

おきなわ石の会	大城 逸朗	早稲田大学教育学部	樋泉 岳二
史跡鴻池新田会所管理事務所	松田 順一郎	佐賀県立九州陶磁文化館	大橋 康二
千葉県立中央博物館	黒住 耐二	沖縄県立博物館・美術館	藤田 祐樹
東京大学大学院人文社会系研究科・文学部	設楽 博巳	東京大学大学院 人文社会系研究科附属次世代 人文学開発センター	国木田 大
沖縄国際大学	宮城 弘樹	沖縄県立博物館・美術館	山崎 真治
鹿児島大学埋蔵文化財調査室	新里 貴之	鹿児島県志布志市教育委員会	相美 伊久雄
青森県埋蔵文化財センター	永嶋 豊	青森県三沢市文化振興係	工藤 司
国際文化財株式会社	吾妻 俊典	国際文化財株式会社	水上 匡彦

### 第3節 調査経過

#### 発掘作業

これまでの調査成果から、平安山原C遺跡の立地が背後の丘陵間から流れる河川(ナガサ川)の右岸に位置することを考慮し、平安山原B遺跡(3期)では、平安山原B・C遺跡が隣接していることから、両遺跡のつながりを考慮して調査を行った。

両遺跡とも、磁気探査中に米軍由来の不発弾が発見され、自衛隊・警察による回収がなされた。平安山原B遺跡では油臭土が確認された。そのため本町教育委員会・沖縄防衛施設局で調整を行い、調査区近接地で計画されていた仮置き場を選定して油臭土をブルーシートで覆い仮置きを行った。同油臭土は、沖縄防衛施設局による土壌処理が行われることとなった。掘削土は、区画整理事業担当部署と調整し、同事業地内に選定された土置場に運搬した。調査終了後は、引き続いて同事業による造成工事が行われることから、調査区埋め戻しは行なかつた。

平安山原C遺跡(HC:平成21年3月31日～9月30日)〔遺跡名の表示(HC、HB①～④)は第10図参照〕

当初貝塚時代前V期(縄文時代晩期)のものとして推定していた川沿いに立地する生活址の様相や、その後の陸地形成の変遷、近現代の耕作地の変遷などの把握を目的とした。調査区を設定後、4月10日より磁気探査を実施し、表土掘削を行った。

5月8日より人力による包含層掘削を開始した。近世面①では石列群、礫集中を伴う土坑(SK)、

耕作痕などが検出された。石列は平安山原A遺跡（HA①）・平安山原B遺跡（HB①）で検出されたものに類似する。近世面②では、ナガサ川に繋がるものと推察される流路が検出され、流路内から石積遺構〔通称：クミイ（調査当時の名称）〕や杭列も検出された。近世面①・②それぞれの全体検出状況の撮影は、高所作業車を用いて行った。引き続きグスク層の検出作業を進めたが、判然としない状況が続いた。

9月1日以降、調査区内の北東側では貝塚時代後期の貝層群（Ⅰ～Ⅵ）が検出された。貝層Ⅱ群は廃棄単位でa～iに分け、貝種の違いによる廃棄傾向にも留意して取り上げを行った。貝層Ⅲ群は本遺跡南側を流れる自然流路へと傾斜する斜面及び湿地へ投棄されたものと考えられた。約1.2mと厚く5枚の堆積は、貝塚時代後期の土器変遷（出土土器は、上層から下層に行くに従い、くびれ平底土器から尖底土器への変遷が見られる。）の様相も示すことから、剥ぎ取り保存処理を行った。

下層調査は、調査区北西側で浜堤を横断する掘削を行った。砂層堆積の下位の内陸側では、固結の弱い状況が確認された。浜堤の範囲は、調査指導員である松田順一郎氏が想定された伊礼原遺跡とその周辺地形分類図（伊礼原遺跡2007）に類似する状況に思えた。

平安山原B遺跡（HB③：平成21年10月14日～2月19日）

HB③の調査区は、HB①・②と平安山原C遺跡から広がる貝塚時代後期・グスク時代から近世の生活址及び浜堤背後湿地の様相等の把握を目的とした。

調査区設定後、11月9日より磁気探査を実施し表土掘削を行い、包含層の掘削作業へと進んだ。

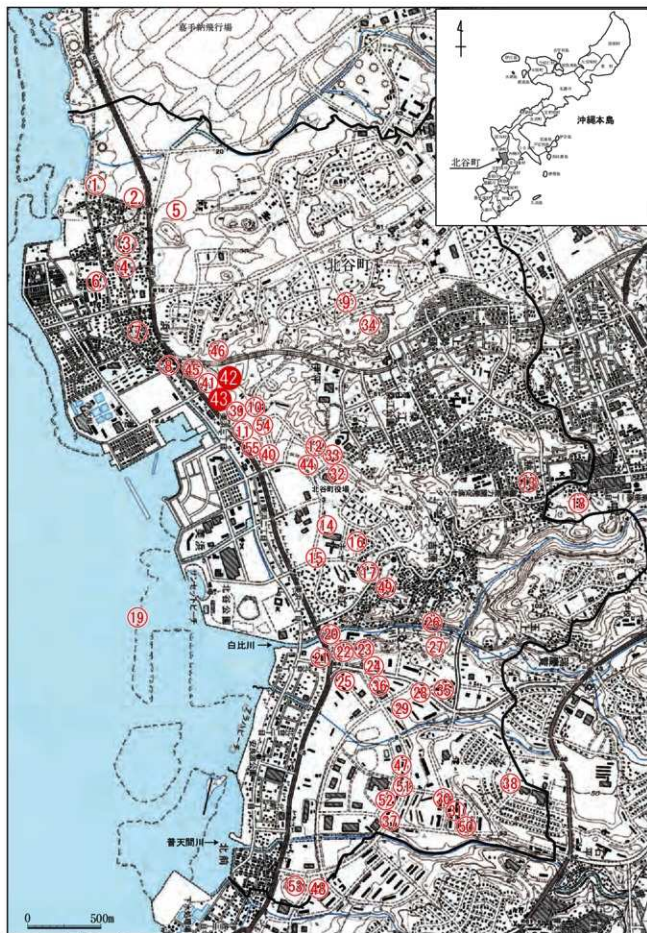
調査区北側では戦前の平安山集落の屋敷に伴う石列が、南西側では早い段階で石列やピットがそれぞれ検出された。またその下から、HB①でも検出されたグスク時代包含層が流路状の堆積範囲にて検出され、遺跡南側のナガサ川に関連する湿地堆積と考えられた。同堆積からの遺物の出土は少ないが、列を成す土坑・溝などの他、耕作の可能性が考えられるウシの足痕が検出され、鉄製風呂鉢も出土した。招聘した堆積学の松田順一郎氏からは、この湿地堆積はグスク時代の遺物を含むレベルでは砂が混ざっており、淡灰色砂質土層（7層）と灰黒色砂質土層（14層）は耕作土であるとの指摘があった。同時に、溝状遺構SD04としたものは単に自然流水ではなく、耕作土をつくる際に何らかの手が加わったものだろうという所見も得ている。同堆積下位（16・17層）では灰白色を呈するシミ状の広がりも検出され、これについても同氏より、地震による噴砂の痕跡でグスク期以後の比較的新しいものと思われるとの所見を得た。

下層調査では、固結の弱い砂礫層の広がりとその上位に堆積する泥炭層の堆積が認められた。調査区南側は河口の可能性が考えられた。

### 整理作業（平成27・28年度）

平安山原A遺跡及び平安山原B遺跡（HB①・②・③）の成果を踏まえ、戦前の平安山集落東側・近世の耕作地・グスク時代の土地利用の様子・貝塚時代後期の生活址などの変遷や広がり、遺物の出土分布による傾向から捉えること、浜堤背後の陸地の変遷を広範囲で把握することを目的に、整理作業を行った。

現場作業中に採取した炭化物サンプル試料の分析及び石質・人骨等の同定については、専門機関へ業務委託・調査依頼を行った。



第1図 北谷町の位置と遺跡分布

※番号は第1表と一致

第1表 北谷町遺跡一覧

2016年3月現在

No.	遺跡名	時期	所在地
1	砂辺(すなへ) サーク原貝塚	貝塚後期	宇砂辺近久原
2	砂辺サーク原遺跡	貝塚前期～近世	宇砂辺加志原
3	砂辺貝塚	貝塚前期～グスク	宇砂辺村内原
4	砂辺ウガン遺跡	貝塚後期	宇砂辺加志原
5	カーシーノポントン遺物散布地	貝塚前V期	宇砂辺加志原
6	クマヤー湖穴遺跡	貝塚前II期～戦前	宇砂辺村内原
7	浜川千原若山(はまがわせんげらゐいむやま) 遺物散布地	貝塚前V期	宇浜川浜川千原
8	浜川ウガン遺跡	貝塚後期	宇浜川浜川
9	上・下勢頭区古墓群(かみ・しもせとくこぼぐん)	近世	宇上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原・下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原(いらいばる) 遺跡	貝塚前I期～戦前	宇伊平伊礼原
11	伊礼原B遺跡	貝塚I～V期・戦前・近世・戦前	宇伊平伊礼原
12	桑江ノ麓(くわえのとうん) 遺物散布地	グスク～近世	宇桑江小堀原
13	栗化石出土地	旧石器	宇吉原栄口原・桃原
14	前原古高(めーばるふるじま) A遺跡	近世	宇桑江桑江原・前原
15	前原古高B遺跡	近世	宇桑江前原
16	伊地差久原(いじさくばる) 古墓	近世	宇桑江伊地差久原
17	前原古墓群	近世	宇桑江前原
18	帆原(とうばる) 湖穴遺跡	旧石器	宇吉原東新川原
19	インディアン・オーク号の産種地	近世	宇北谷地先
20	池(いち) グスク	グスク	宇吉原東宇地原・西宇地原
21	北比川(ちらひがわ) 河口遺物散布地	貝塚前II期	宇北谷西表原
22	北谷城(ちやたんぐすく) 遺跡群	貝塚後期末～グスク	宇大村城原
23	北谷城	貝塚後期末～近世	宇大村城原
24	北谷城第7遺跡	貝塚後期～グスク	宇大村城原
25	北谷番所址	近世	宇北谷北原
26	吉原東角双原(よしはらあがりちめたまばる) 遺物散布地	グスク	宇吉原東角双原・西角双原
27	山川原(やまがーばる) 古墓群	近世	宇大村山川原
28	玉代勢原(たまよせばる) 遺跡	貝塚後期末～グスク	宇大村玉代勢原
29	長老山(ちやうろうやま) 遺物散布地	グスク～近世	宇大村玉代勢原
30	大漕原(うふどうばる) A遺跡	グスク	宇北谷大漕原
31	大漕原B遺跡	貝塚前V期	宇北谷大漕原
32	後兼久原(くしかにくばる) 遺跡	グスク	宇桑江後兼久原・宇桑江小堀原
33	ジュミーチャー古墓	グスク	宇桑江小堀原
34	伊礼伊森原(いらいばるーむいばる) 遺跡	グスク	宇上勢頭伊礼伊森原
35	後原(くしばる) 遺跡	グスク～近世	宇大村玉代勢原
36	塩川原(しやーがーばる) 遺跡	グスク	宇北谷塩川原
37	船千原(ふねちばる) 遺跡	貝塚後期	宇北前船千原
38	横原原(よこたけばる) 遺跡	グスク	宇北前横原原
39	伊礼原D遺跡	貝塚後期～近世	宇伊平伊礼原
40	伊礼原E遺跡	貝塚前II期～近世	宇伊平伊礼原
41	平安山原A遺跡	貝塚後期～近世	宇伊平平安山原
42	平安山原(はんざんばる) B遺跡	貝塚後期～近世・戦前	宇伊平平安山原
43	平安山原(はんざんばる) C遺跡	貝塚後期～近世	宇伊平平安山原
44	小堀原(くわいばる) 遺跡	貝塚後期～近世	宇桑江小堀原
45	千原(せんばる) 遺跡	グスク	宇伊平千原
46	大作原(うふさくばる) 古墓群	貝塚後期・近世	宇伊平大作原
47	東表原(あがりうむいばる) 遺跡	貝塚前V期	宇北谷東表原
48	新城下原(あらぐすくしちやばる) 第2遺跡	貝塚前I期～近世	宇北谷安仁屋原
49	楽宇地原(あがりうじばる) 古墓群	近世	宇吉原東宇地原
50	大漕原C遺跡	近世	宇北谷大漕原
51	大漕原D遺跡	グスク	宇北谷大漕原
52	高峠原(たかぶしばる) 水田跡	近世～戦前	宇北谷高峠原
53	安仁屋原(あにやばる) 遺跡	グスク～近世	宇北前安仁屋原
54	伊礼原A遺跡	貝塚前期～貝塚後期	宇伊平伊礼原

注：時代表記は概ね「グスク」→「10～17世紀前半」・「近世」→「17世紀後半～明治以前」・「戦前」→「1945年以前」

※番号は第1図と一致



## 第II章 位置と環境

### 【地理的環境】

北谷町は、沖縄本島の東シナ海に面した西海岸側にあり、県庁所在地である那覇市から北に直線距離で約16kmに位置している。本町の総面積は13.93km<sup>2</sup>、東西に約4.31km、南北に約6kmを測る。北側に嘉手納町、東側に沖縄市、南東側に北中城村、南側に宜野湾市が隣接する。

町面積の52.3%を米軍基地が占めており、町域北側と南側の大部分、その間の海岸低地と丘陵台地の一部を占有する返還予定のキャンプ桑江（南側地区）や陸軍貯油施設桑江第1タンクファームによって町は東西に分断されている。

町の人口は29,266人（平成28年9月現在）、第三次産業が75.6%を占め、駐留軍用地跡地利用や公有水面埋立により新たな街づくりが進んでおり、商業集積や観光リゾート産業を中心とした産業拠点が形成されつつある。

平成15年3月末に返還された旧キャンプ桑江北側地区が大部分を占める6.3haについて、「町の都市核」として位置づけた桑江伊平土地区画整理事業が進められている。同区画整理事業地内は、盛土造成工事が広範囲に及んでおり、米軍基地の施設整備による盛土造成と合わせると沖縄戦以前の地面との標高差は、国道58号側では約2～3m程度となる。

戦前までの北谷村は、大正期以降の全作付面積の9割以上を芋畑とサトウキビ畑が占めていた農



第2図 遺跡の位置と北谷町域

〔C〕 Nippon 地図データ (C) ZENRIN (加筆) より



第3図 戦前(1945)の平安山

2006『北谷町の地名』より



第4図 現在(2002)の平安山

2006『北谷町の地名』より

村であったが、北谷城の城下町である北谷三箇村（旧字北谷・伝道・玉代勢）の水田は、湧水「チブガー」や普天間川（佐阿天川）の流域に広がる県下の三大美田の一つ『北谷ターブックゥー』として知られ、字伊礼・字平安山を分けるナガサ川、字伊礼・字桑江を分ける「ナルカー」などの河川周辺にも水田が営まれていた。また、現在の国道58号より海側には、貨客の輸送に大きな役割を果たした県営鉄道（軽便鉄道）の嘉手納線（那覇—嘉手納間）23.6kmが走っていた。

### 【遺跡の位置と地形的環境】

平安山原B遺跡と平安山原C遺跡は隣接しており、前者は平安山原A遺跡の東側、後者は南東側に接している（第9図）。桑江伊平土地区画整理事業地内の街区番号では、6・7・10・12街区（平安山原B遺跡：北谷町字伊平小字平安山原140番地一帯）、13・14街区（平安山原C遺跡：北谷町字伊平小字平安山原131番地一帯）にあたる。

両遺跡は標高約3～5mの沖積地に立地している。背後は標高約30m前後の丘陵を刻む浅い谷が発達し、遺跡の南側には丘陵地の谷間にある泉からナガサ川<sup>(註1)</sup>が西流し、東シナ海に達している。

遺跡は広範囲で確認されたピーチロックや固結の弱い砂礫層上に形成された浜堤上に展開し、平安山原B遺跡背後の丘陵麓や岩壁下のサンゴ礫層や石灰岩礫層の上位に形成された砂浜にも貝塚時代後期の生活址があり、その後の陸地の形成の中で耕作地や集落が営まれた。

本町内で確認される遺跡の多くは、海岸低地や小起伏丘陵やその麓に所在している。伊礼原地区では陸地の形成・発達の中で、丘陵麓の湧水に近い一帯から、以後発達する砂浜や浜堤とともに海側へも拡大していく。平安山原地区では、阿波連浦下層式期以後、現代に至るまでの遺跡の広がりが砂浜や浜堤上にて認められている。

遺跡前面の海はやや内湾の様相を呈し、サンゴ礁が発達したため、良好な魚場であるイノー（礁池）や干瀬が続いている。本遺跡から埋立て以前の海岸線までの距離は約200mである。



第5図 北谷町の地形分類

1983『沖縄県地形分類図』（加筆）より



第6図 キャンプ桑江北側地区の旧地形の復元状況

2005『キャンプ桑江北側地区遺産に伴う試掘調査』掲載図に加筆

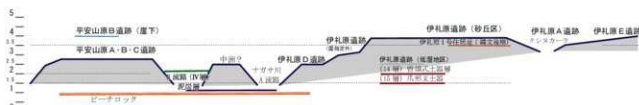
平安山原A・B遺跡では自然流路（B流路：第12図参照）が確認されている。浜堤の発達に伴う後背窪地とみられ、平安山原B遺跡では、丘陵地からの流水に起因するものと考えられる水性堆積が整層状態で確認され、カワナを含む堆積であることから湿地の広がりがあったと判断される。同様の堆積は、伊礼原D遺跡でも確認されている（2013）。

平安山原A遺跡の調査区（HA③）の下層掘削では、波静かな状態での砂層堆積<sup>(註2)</sup>、平安山原B遺跡範囲の西側では、固結の弱い砂礫層が確認され<sup>(註3)</sup>、平安山原や伊礼原一帯のビーチロック形成の基となった。これら海底の二次堆積層中から、縄文時代前期～後期の土器片が発見されており、それより新しく堆積したと思われる枝サンゴ層からは弥生時代相当期の土器が発見されている。

平安山原A遺跡（HA④中央部）の下層確認トレンチにおける、標高1～1.5mのビーチロックに含まれた貝類を試料とする年代測定分析結果からは、 $4,120 \pm 30BP \sim 1,620 \pm 20BP$ の値が得られている。陸から海側へ新しくなる傾向も見られたが、内陸側では $3,109 \pm 26BP$ の結果となりビーチロックの形成は単純でなく、複数の時期に生成され混在していると考えられている（2016）。

キャンプ桑江北側（旧字平安山・字伊礼・字桑江）の沖積地の形成は、試掘調査の成果から飛び石状の小島が連なる海に、沖積層の流入や海成浜堤が形成されていったと判断されている（第6図）（2005）。

第7図に示した平安山原A・B・C遺跡の標高と伊礼原遺跡の標高を比較すると、平安山原B遺跡の崖下（HB②イ地区）の標高は伊礼原遺跡浜堤区と同様に標高約4mと調和的であるが、B流路（第12図参照）を挟んだ海側では標高約2.8～3mで伊礼原遺跡の貝塚時代後期より低い。固結の弱い砂礫層上の海成砂層の堆積は、前述のビーチロックの標高と比較するときほど厚くない。伊礼原遺跡の浜堤形成過程には、縄文時代後期と弥生時代後期相当期に起きた暴浪または大潮等の大きな波力による浜堤の侵食、伊礼原E遺跡では津波による侵食等の自然災害を受けた痕跡が認められており、その後、標高約4mまで浜堤砂が累重する発達が繰り返されていると考えられているが、平安山原では伊礼原遺跡と同様な標高に達していない。



第7図 貝塚時代後期の断面模式（北西～南東）

陸地の形成発達によって町域西部に広がる沖積低地の背後には、本町を北西-南東方向に走る桑江断層が大きな境となっており、町域東・南部は標高100m以上、100～50m、50～30mの段丘地形が見られ、侵食が進んだ台地は起伏に富んだ地形をなし、北部では洞穴やドリーネ・石灰岩堤・石灰岩丘等のカルスト地形が発達している。

地質は、沖繩本島中南部に広く分布する島尻層群、同時異層の琉球石灰岩と国頭礫層から構成される琉球層群、海岸低地を構成する沖積層が分布する。台地・丘陵部は、沖繩本島北部の地質（国頭礫層）と中南部（琉球石灰岩層）の境目にあたり、沖繩島の国頭礫層分布域の西北端をなしている。町域北側の標高50～100m（上勢頭・桑江・浜川・伊平付近）の台地では、風化が進んだ最上部は国頭マージと呼ばれる酸性土壌である。

地形を概観すると東高西低の様相を呈しており、町内を流れる二級河川の白比川・普天間川（佐阿天川）の上流域の崖面、吉原（北玉小学校付近）では島尻層群（泥岩層）、玉上付近に島尻層群（砂

岩)が分布する。

植生は、国頭マージの分布域ではリュウキュウマツ・イタジイ・イジュ・ヤマモモなど、石灰岩質土壌域ではガジュマル・アカギ・オオバギ・ヤブニッケイなど、泥岩層(クチャ)を母材とする風化土壌の「ジャーガル」ではススキ・チガヤ、砂岩(ニービ)の風化した土壌の「ウジマ」ではオオバイヌビワ・タブノキ・ホルトノキなどの植生が見られる。本島北部と中南部の植生が混生しているが、現存する自然植生は少ない。

平安山原と伊礼原の間を流れるナガサ川の左岸となる伊礼原遺跡出土の植物遺体や炭化物から、縄文時代前期の植生・景観は照葉樹林(常緑広葉樹林)が成立し、高木層からなる照葉樹林は遺跡から多少隔たった内陸部に分布していた可能性や、沼沢地性の植物群落・アダン群集が海岸線に沿って成立していたこと、丘陵の縁でマングローブの縁でもあるような生育環境が成立していたことなどが想定されており、多様な植生が形成されていたと考えられている(2007)。

伊礼原遺跡では、汽水域地域の縁辺部のマングローブ林(サキシマスオウノキ・オヒオルギ・サガリバナ)の植生が確認された第X I層出土資料から、1,140 ± 60BP(2012)の年代測定が得られている。伊礼原D遺跡では、マングローブの後背地や川沿いの湿地に生育するサガリバナ(950 ± 30BP)が確認されている(2013)。

#### 【村落変遷(グスク時代~近世・近現代)】

ナガサ川右岸の北側一帯に平安山原A遺跡・平安山原B遺跡、同左岸に伊礼原遺跡や伊礼原D遺跡、これらより約800m南下した、ナルカーと称される河川左岸の小堀原遺跡、その南側約150mに後兼久原遺跡が所在する。小堀原・後兼久原遺跡は出土遺物の違いなどから集落における構造差の指摘(宮城2014)や喜界島勢力の影響(瀬戸2014)、後兼久原遺跡は製鉄・鍛冶等からも喜界島城久遺跡群との関連が指摘されている(村上2015)。町域北側の砂辺サーク原遺跡はグスク時代開始期の集落と考えられている。

さらに、約1km南にあり白比川沿いの急崖となる標高約44.7mの琉球石灰岩丘陵上には北谷城、同じく同河川右岸にイシグサ(北谷城の出城的存在と考えられている)がある。北谷城は、古琉球期の歌謡集『おもろさうし』に「きたたんのてだ」や「きたたんの世のぬし」と謳われた按司の居城で、民間伝承では金満按司・大川按司・谷茶按司の興亡があったと伝えられている。また、1609年の島津侵入時に首里の陥落を聞いて自刃した「雍肇豊佐敷筑登之興道」の伝承が残る。

近世以降の北谷の村落変遷については、『おもろさうし』に「きたたん・くわい・くになおり・やら・やまち」の5つ、近世初期の村名を記す『絵図郷村帳』(1649年)には「北谷・くわい・平安山・すなべ・野国・賀手納(嘉手納)・屋郎(屋良)・山内・あぎな(安仁屋)」の9つの村がみられる。

その後1660~1670年代に間切の分割や新間切の創設などが繰り返され、12の村(字)が出揃う。北谷城の城下の北谷三箇村と呼ばれる北谷・玉代勢・伝道の名は、「翁姓大名家々譜」や「乾隆二年帳」に見られる。「平安山」の名は、同家々譜に「嘉靖年間北谷間切平安山山頭職」とあり、このことから平安山村は18世紀前半までには成立していたと考えられている。『琉球国由来記』(1713年)によると、村落祭祀を主催した女性神役である「平安山ノロ」が5ヶ村(平安山村・浜川村・砂辺村・桑江村・伊礼村)を管轄していたことが分かる。

また北谷間切には、王府の払請地を求めて首里・那覇からの貧窮した士族が北谷に下り、「屋取」と呼ばれる集落が多く形成された。

戦前にはナガサ川を境にして北側を平安山、南側を伊礼と呼び分けており、旧字平安山(41戸)、旧字伊礼(39戸)の畑は、集落の周囲にとどまらず丘陵台地や谷間地形の谷底に、水田は川沿い

や湧水「ウーチヌカー」周辺で行われている。

近代の北谷は、近世の村（字）を引き継いで、沖繩戦の頃までほとんど変化なく存続しており、1908（明治41）年の「沖繩県及島嶼町村制」施行に伴って「間切」は「村」に、「村」は「字」に改称され

た。大正から昭和にかけて屋敷集落が行政字として分離独立し、行政字（区）は22字となり、1944年（昭和19）末には34字、1951年（昭和26）の土地所有権確認事業の際に地籍字が現在の11の字に整理された。遺跡の所在地の名称である伊平（伊礼と平安山）とは、このことによる。

註1：泉と平地に至るまでを「トックガー」、平地に至った流では「ナガサ」と呼称された。現在は徳川排水路として整備されている。

註2：松田順一郎氏の所見による。

註3：大城逸朗氏の所見による。

## 第三章 調査の方法

### 調査区及びグリッド設定

グリッドの設定は、1辺100mの大グリッドで区画整理事業地全体を覆い、大グリッドの中に1辺5mの小グリッドを設けた。同設定は、試掘調査で設定されたメッシュとの整合を考慮している。グリッド名称は、大小ともグリッドの北東隅を基準に、南東へ1～20、南西へA～Tとした（第8図）。

平安山原C遺跡の調査区は、大グリッドB4区の範囲内に位置している。調査区内のセクションベルト位置は、遺跡背後の丘陵間から流れる河川（ナガサ川）の右岸に位置することを考慮し、河川周辺の様相も含めて捉えることを目的に選定した。

平安山原B遺跡の調査区は、大グリッドA・B3・4区にまたがって位置している。調査区内のセクションベルト位置は、調査区を縦横断するグリッドラインに沿って設定した。

### 表土掘削

調査区の設定後、磁気探査及び、機械力による表土掘削を行った。表土掘削は0.8㎡のバックホウと10tダンプにて、米軍基地施設の整備による造成土や確認調査時の埋土等を掘削・運搬した。米軍基地整備による造成土中に見られる様相や、沖繩戦上陸後から基地としての利用が始まったことで攪乱された旧表土の様子を把握しながら、調査対象の遺物包含層検出に努めた。

### 包含層掘削及び遺構検出

遺物包含層は、遺物量や出土状況に応じて小形のスコップや手鍬、ねじり鎌を用いて掘削した。遺構検出作業は基本的にジョレンを用いたが、より精査が必要な箇所についてはねじり鎌を用いた。排土は、ベルトコンベアも併用して場外搬出し、バケット容量0.3㎡級のバックホウと4tダンプを用いて残土置き場へ運搬した。

### 遺構掘削

土坑や柱穴は基本的に長軸で半載し、溝は規模に応じて数箇所の上層観察用畦を残し掘削した。掘削には移植ごてやスプーン等を用いつつ、遺物を傷つけないよう必要に応じて竹串や竹べら等を用いた。出土遺物は原則として層位・グリッド毎、或いは遺構毎に取り上げたが、出土地点の測量

が必要なものについては測量機器による点上げを行った。

### 記録作業

遺構実測は主にトータルステーションを用いたが、写真測量や手実測の方法も用いた。写真撮影は、6×7のフィルムカメラ（カラーリバーサル・モノクロネガ）と、500～1000万画素のデジタルカメラを使用した。遺構検出時と完掘時には高所作業車24mを使用して全景の撮影を行い、できるだけ定点撮影することを留意した。

### 整理作業

本発掘調査から出土した総遺物量は、標準的な遺物コンテナ（60×40×10cm）で、平安山原C遺跡462箱、平安山原B遺跡179箱、土嚢袋95個であった。遺物洗浄・乾燥といった一次整理作業は、現場作業期間中の雨天時等を利用して行った。

本格的な作業は、現地調査終了後の平成27年度から開始した。出土遺物への注記は、膨大な量を短期間で行う事に苦慮した。

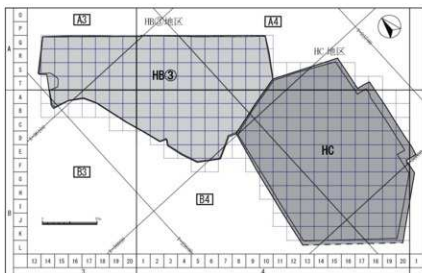
分類・接合を行いながら、遺物に付随する情報等をカード化し、集計表や出土分布図などの作成に続く基礎データ作成を行った。

遺物の実測は、分類された各出土遺物の帰属時期を示すもの、特徴的な資料等を抽出して行い、実測図をスキャンして描画ソフト（Illustrator CS）を用いてデジタルトレースを行った。現場作業時にトータルステーションや写真測量、手実測の遺構図等を描画ソフト（Illustrator CS）で製図したものを、報告書用の図面に整理掲載した。

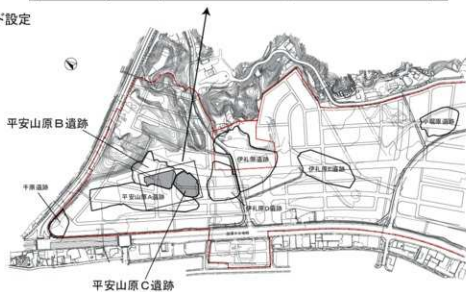
報告書では、遺物についてはデジタルカメラ（1200万画素）で撮影したもの、調査現場で撮影した写真は前述のものを用いた。調査現場で撮影したフィルムカメラの資料はアルバムにて整理・保管した。遺物の撮影画像データは、画像処理ソフト（Photoshop CC）にて補正・切抜きを行い、描画ソフト（Illustrator CS）上で図版を作成した。

土器は、復元可能な資料については焼石膏を用いて復元を行った。復元した資料は土器6点である。

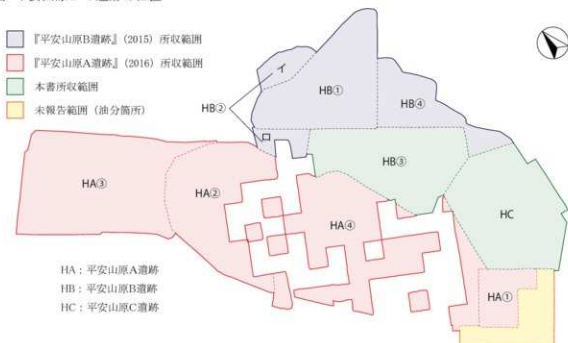
出土遺物のうち、分類作業後の土器・石器・陶磁器・貝類・骨類・人骨については、前掲した調査指導員による分析鑑定・指導を受けた。年代測定は鉄製風呂鍬出土層の上位層中の炭化物6点・獣骨3点・土器付着炭化物1点について、保存処理は鉄製鍬2点について専門機関に委託した（分析結果は第V章第3節を参照）。



第8図 グリッド設定



第9図 平安山原B・C遺跡の位置



第10図 平安山原A～C遺跡の各調査区

## 第IV章 調査成果

### 第1節 層序

土層大別にあたっては、戦後造成土一調査対象となる時期に堆積した有色土壌一貝塚時代後期以降に埋没した流路内堆積土一海浜に順次堆積した砂、という平安山原地区に所在する遺跡共通の基本概念に基づいている。また、明確な帰属時期差や遺構面の間在、性格の違い等が認められた場合は、適宜これらを細分した。

#### I層：戦後の造成土

キャンプ桑江を構築するため、1945年以降、厚い盛土をもって平坦化がなされている。米軍施設に伴って多数構築された攪乱（埋設管等）も、同じくI層の範疇に含めた。

#### II層：近世後半～近代に帰属する土層

最上面は戦前までの生活面をなしていたが、区域によって利用の仕方や性格が異なるため、以下のように細分した。

##### IIa層：近代居住域に施された整地層

戦前の字平安山では、居住域がその北半にあった。この居住域の整備（道路造成・屋敷割り等）は近代に入ってからなされたものと考えられ、その際平坦化を意図した盛土・整地が行われた。このためこの土層には、原位置を失った各時期の遺物が含まれる他、その上面にも生活感の漂う痕跡（瓦溜り等）が明瞭に残っている。今回の報告箇所においては、HB③北西部に僅かに認められただけであったが、戦前の字平安山集落を考える上で非常に重要となる土層である。

##### IIb層：広範で厚く堆積する耕作土層

字平安山の南半、ナガサ沿岸は広く近世・近代の耕作域であったと考えられる。上記IIa層とは分布域が重ならず、完全に二分する格好となっているが、その堆積が始まったのはIIb層の方が早い。厚く均質な土壌で、その供給源が問われるところである。近世中に北谷村の高標高域では屋取による開拓が始まっており、これに伴い多くの森林地が伐開されたと考えられる。裸地となった高台から、大量の土壌が雨水によって低標高地である平安山にもたらされたのではないだろうか。同様の土壌は、戦前の字桑江に所在する小堀原遺跡でも確認されており、後背に丘陵が迫った小河川の近くという地形の類似点も認められる。

##### IIc層：近世半ばに構築された石列に伴う土層

ナガサ川沿岸では、近世中に石列等の構築が盛んになされている。恐らくはナガサ川の氾濫域に土留め等の手を加えることによって、流路を安定させ、耕作域拡大を図ったものと思われる。土木工事とも言えるこの行為には、盛んな地面の掘り返しも伴っており、後述するIII層・V層をも攪乱していた。特にHCではこの影響が大きい。

#### III層：グスク時代前後に帰属する土層

この時期の遺物を包含する土層をIII層として一括した。基本的には砂層上に堆積する黒・暗色系のシルト土壌を指す。特にHC浜堤域では、IIc層期の破壊・攪拌行為の影響を受けており、また層下の貝塚時代後期の遺物包含層とも錯綜しているため、結果として明確な層細分はできなかった。



HB③においては8～13層に分層した。特に13層は細砂質であるため、貝塚時代後期遺物包含層である可能性も考えられたが、グスク期に帰属するものと考えられるピットの掘り込み面との整合から、「砂丘城Ⅲ層」を構成する土層の1つとして取り扱った。これらⅢ層における遺物の出土状況をまとめたのが、第2表である。予想に反して13層出土の遺物は少なく、むしろその上層である12層からの貝塚時代後期遺物の出土量が突出して多い。この12層は後述するⅢd層(耕作土)よりは新しい堆積であり、グスク時代の遺物も定量出土している。このことからHB③における「浜堤城Ⅲ層」についても、層下の貝塚時代後期の遺物包含層との錯綜が看取される。

第2表 HB③浜堤城Ⅲ層における遺物出土状況

層位	國中層名	沖無	本磁	染付	掲輪	青磁	白磁	カムイヤキ	グスク土器	後期後半	後期前半
Ⅲ (浜堤城)	8	1	1	5	4	14	1	1	4	5	181
	9										
	10										
	11	1		13	12	52					
	12										
	13										

これに対してHB③で検出されたグスク期耕作域では明瞭な水平堆積が認められたため、ここにおいてのみⅢa～e層に細分した。この耕作域の範囲は、Ⅳ層で言及する「B流路」が閉塞した範囲に限定されており、各層上面には耕作関連の遺構・痕跡が少ないながらも検出されている。

#### Ⅲa層：シルト質の耕作土層

黒褐色を呈するシルト土壌で、カワニナを均質に含む。この上面は近世後半(Ⅱb・Ⅱc層期)の遺構面をなしている。層直下面(=Ⅲb層上面)においても検出された遺構が4基あったものの、Ⅱb層に類似した埋土をもっていたため、検出の見落としであった可能性が高いものと考え、本層上面遺構として捉え直した。

Ⅲa・Ⅲb層は色調では明確な異なりを見せるものの、混入物・粒度・質感においては非常に似ていると言って良い。当初は単純に時期差のある堆積と捉えていたが、今回の整理作業を経て、これらの両土層は耕作土層と母材層という関係にあるのではないかという考えに至った。両者間には僅かではあるが、層理面の凹凸が認められる。

#### Ⅲb層：シルト質の耕作土母材層

灰白色を呈するシルト土壌で、Ⅲa耕作土層の母材層として捉えた。色調の明るさが最大の特徴であるが、その起源は不明である。基本的にはⅢc層上面に堆積しているが、Ⅲc層より分布幅が広い。これはみ出た範囲での層下には、砂層と分かつかのように悉く黒味の強い薄層が認められ、薄層下には鉄分沈着が伴っている。また、Ⅲc層下の層理面には乱れも殆ど認められない。これらのことからⅢb層は水積と考えられ、透水しにくい範囲にのみ分布したと考えられる。

#### Ⅲc層：砂質の耕作土層①

黒灰色を呈する砂質土壌で、上位層との土質は明らかに異なる。過年度の調査においても検出されていたが、出土遺物が僅少であったため自然堆積の無遺物層として取り扱っており、下層確認以外の目的での調査掘削は行ってこなかった。今回の調査では比較的包含遺物が多かったことから調査対象としたところ、現場所見として遺物が「意図的にクラッシュされた印象」をもったという。松田順一郎氏から、「耕作によるブロック状の塊がみられることから田畑の可能性があり、特に畑である可能性が高い」とのご指摘を得ている。しかし、この時までと同層の掘り下げは終了しており、そのような視点からの検討は充分に行うことができなかった。整理段階に至っ

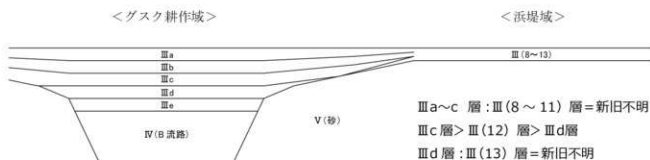
て再度検討を進めたところ、数箇所耕作地に伴う畦畔と考えられる痕跡を確認し、この土壌全体が人為的に作出された空間（耕作域）であると再認するに至った。また層上面においては、同方向に走る溝・土坑列・杭列が検出されている。

#### Ⅲd層：砂質の耕作土層②

松田氏により、Ⅲc層と同様の所見が示された層である。カワニナの混入は認められない。層下に堆積する粘質土層Ⅲe層或いはⅣ層に対して、浜堤地の砂を混ぜるという大掛かりな造成が行われていたものと考えられる。カミヤキが僅かに混じる以外は、貝塚時代後期（特に大当原式期）の土器が圧倒的に多く、これを層序との整合から判断すると、これらの土器は大規模造成の際に混入したものと考えざるを得ない。層直下のⅣ層上面ではウシの足跡も検出されており、当該期に農耕が行われていた可能性を窺わせる。

#### Ⅲe層：粘質の耕作土層

黒味の強い粘質土壌で、Ⅲd層の母材の1つとなった土層と考えられる。この層直下にて溝・炭溜りといった遺構が検出されているおり、溝が導水目的で構築されたとすれば、Ⅲ層細分層の中ではⅢe層が最も分布域が細長で狭いことと何らかの関係があるのかもしれない。松田氏によると、土壌への含有物の状況から耕作土であった可能性は十分にあるとのことであった。この層に含まれていた5点の炭化物を試料として年代測定を行った結果、5点とも大きなズレは認められず、概ね10～11cの値を示していた（第V章第3節参照）。



第11図 浜堤域・耕作域におけるⅢ層 模式

#### Ⅳ層：流路内堆積

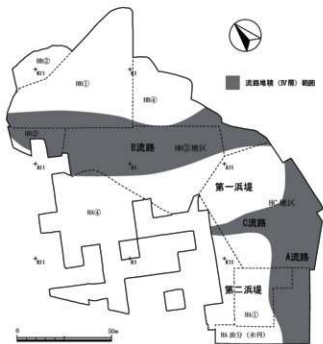
調査区内で検出された流路は、北東→南西に走る「A流路」と、南東→北西に走る「B流路」「C流路」に大別した（第12図）。いずれもその成立時期と埋没過程の間には、大きなタイムラグが発生していることを留意しておく必要がある。

A流路は、現在のナガサ川の流水方向とほぼ一致しているので、その旧流域或いは氾濫域と考えられる。流路底面のほぼ全域で平坦なビーチロックが認められており、これが河川の深化作用を妨げる格好となっている。このため水量が多い折には、堆積物を一斉に洗い流すということがしばしばあったことも予想されるが、少なくとも調査範囲内においては、全ての範囲がグスク～近世までに埋没している。

これに対してB・C流路は、断続的に形成される浜堤間の谷状地形に発生したのと考えられる。海側の浜堤ほど形成時期が新しいため、汀線に平行するようなこれらの流路形成にも新旧があったことが予想される。山側小砂浜と「第一浜堤」間に発生したB流路については、グスク期以前に閉

塞・止水していたものと思われ、その最下層には泥炭層が認められた。『平安山原B遺跡』（2015）において、この泥炭層に含まれる有機物を試料とした年代測定値から、B流路は6c初頭ごろには既に形成されていたことになる。

これより海側に位置する、「第一浜堤」と「第二浜堤」間に発生したC流路の形成は、B流路よりは確実に新しいものである。『平安山原A遺跡』（2016）におけるHA①において、C流路の肩をなす第二浜堤上から出土した最古の遺物がフェンサ下層式土器であったことから、この浜堤は当該期までに形成されたことになる。また、この流路内にて検出されたクミイ状遺構は近世期に帰属するものと考えており、その頃はまだ流路の埋没が始まっていなかったことになる。従って、このC流路については概念上IV層の範疇のものとして捉えられるものの、実際の埋没土はIIc層に該当することになる。



第12図 自然流路の名称と位置 (S=1/2000)

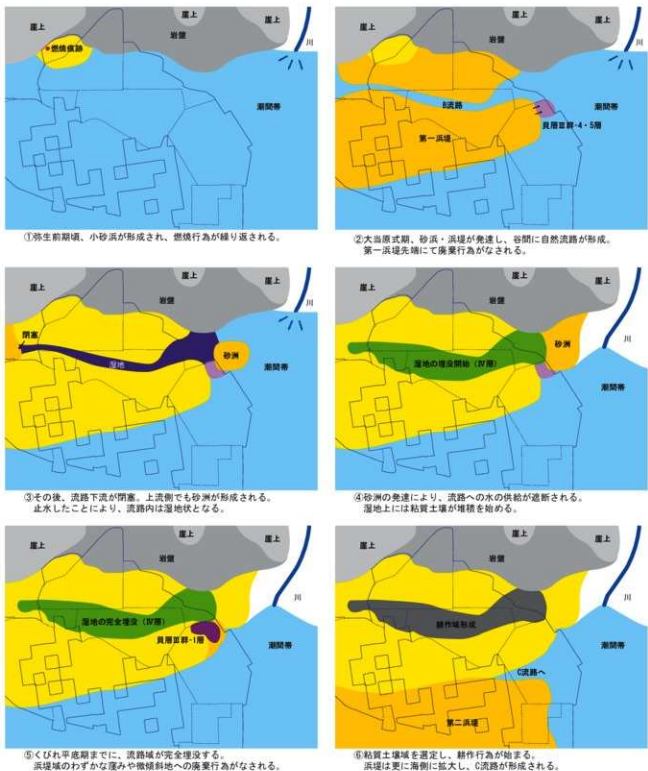
#### V層：砂層

遺跡の最終面地盤をなしている砂層上位を一括した。V層の堆積・形成にあたっては上記IV層と表裏一体の関係（V層形成が進行することに伴い、IV層堆積範囲も決まっていく）にあり、海側に進むほど新しい堆積である。V層形成直後の生活面となったため、砂層上位からは当該期の遺物が多く出土する。HCにおいては浜堤上での土壌の錯綜が激しかったが、貝塚時代後期の遺物量が夥しかったこともあり、混貝層のような特殊なものを除いては、土質にあまり捉われずに「後期層」という土層名を用いて遺物取上げを行っている。この「後期層」のものとして採取された遺物のうち、土器資料についての出土状況を第3表に示した。これによると、グスク期以降の土器の混入率は僅か0.03%ほどであり、層の名称通り概ね貝塚時代後期に帰属するものとして、最終的な集計作業においては「V層」として取り扱っている。

平安山原地区全体における地形変化については第VI章にて取り扱うこととするが、砂層形成の変遷については、以下の想定模式図を参照していただきたい。ただし、調査区外の様相については十分に推測の域を超えないものであることをご容赦いただきたい。

第3表 HC後期層における遺物出土状況

層位	瓦質	染付	色絵	褐釉	青磁	白磁	カムイヤキ	グスク土器	後期後半	後期前半
V層 (後期層)	1	4	1	16	29	2	5	100	1,350	3,418



第13図 V層堆積変遷 模式

「耕作域」におけるⅢ層細分層の年代観

本書での基本層序に関わる特記事項として、「グスク期耕作域」が検出され、その範囲に限ってではあるが、基本層Ⅲ層の細分が明確になされた、ということが挙げられる。細分層各々が比較的厚く、各土層の乱れが少なかったため、判別・分層が容易であった。この要因として、①この耕作域は埋没した自然流路跡の窪地にて形成されたこと、②「耕作」という土壌攪乱行為が居住域に比べ

ると静的で単純であったであろうこと等が考えられ、結果として整然とした堆積状況を示したものである。耕作域であるからこそ同時期の人的遺物が極端に少ないこともまた事実ではあるが、ここではその少ない遺物の出土状況（第4表）から、Ⅲ層細分層について年代観を検討してみたい。

第4表 HB③耕作域Ⅲ層細分層の遺物出土状況

層位	園中層名	染付	褐釉	青磁	白磁	カミイヤキ	グスク土器	後期後半	後期前半
Ⅲa・b層	3～6	9	16	45	4	4	84	33	460
Ⅲc層	7		3	2		6	11	75	1,489
Ⅲd層	14					4	1	376	3,033
Ⅲe層	15・16							43	283
Ⅳ層	17・18						1	52	327

#### 陶磁器類（染付・褐釉陶器・青磁・白磁）

Ⅲa・b層にピークがあり、Ⅲc層で激減、Ⅲd層では出土していない。最も点数の多い青磁は14～16cのものが殆どであり、Ⅲc層出土の2点も15～16cの範疇に収まる。

#### カミイヤキ

Ⅲa～d層で少量ながらも出土を認める。Ⅲc層出土のものは概ね13cに帰属する。

#### グスク土器

陶磁器類と同じく、Ⅲa・b層にピークをもつ。滑石を混入するものや石鍋を模倣したものは全く認められず、グスク土器としてはやや新相を示している。

#### 貝塚時代後期後半土器（くびれ平底土器）

全層位から出土しているものの、Ⅲd層にピークがあることは特記される。グスク土器の状況と併考すると、層位の上下関係と土器の新古関係とが整合的である。

#### 小結

ここまで記述した各種遺物については、上層から新しい遺物が出土し、下層にいくに従って遺物が古くなる、という考古学上のシンプルな理屈に概ね沿っており、現場調査進行段階での一次的所見・実感にも近い。

まずⅢa・b層についてであるが、『平安山原B遺跡』（2015）

では両者を一括して「Ⅳ層上」としている。詳細な年代判別が可能な白磁・青磁・染付について、2015年及び今回の出土結果を統合したのが第5表である。12～18cと出土遺物の年代幅は広いものの、14～16cのものが主体的であると言える。17c以降の遺物が含まれているのは、層上面が近世遺構面をなしていることによる混入とすれば説明はつくものと思われる。『平安山原A遺跡』（2016）において、ほぼ同時期となる明代の柱穴群が非常に密集した状態で検出されている。少なくともこの時期において、居住域は平安山原A遺跡、耕作域は平安山原B遺跡という空間区別がなされていたことが想像できる。

Ⅲc層からは15c代の青磁片が2点出土しているため、Ⅲa・b層とそれほど時期差がないことになる。この事実は最も留意されるべきであるが、各種遺物の出土比率は明らかな変化を示しているため、上層からの混入という可能性を割り引けば、14c以前の堆積である可能性も全くないとは言えない。

第5表 Ⅲa・b層出土遺物

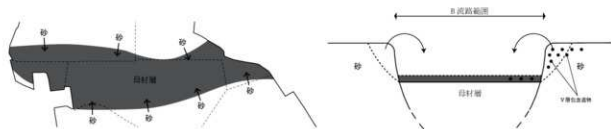
遺物の年代観	白磁	青磁	染付
12～13c	1		
13～14c	5	5	
14c	1		
14～15c	5	36	
14～16c		22	
15c		4	1
15～16c	2	4	4
17c	2		1
17～18c			4
18c			1
合計	16	71	11

Ⅲd層については、カムイヤキの出土状況からグスク時代に相当する、即ち耕作土作出行為がこの頃の出来事であったと考えるのが普通である。しかしながら、グスク土器の出土が激減していることから、なお慎重を期して、カムイヤキが上層からの混入と考えた場合はこの層の年代観もやや古くなり、一定量得られているくびれ平底期の遺物の中には、耕作土作出時に外から混入したもののばかりではなく、耕作期に混入したのものも含まれていた可能性も残る。

Ⅲe層は、同層中から得られた炭化物の年代測定結果から、概ね10～11cの貝塚時代後期末頃に帰属すると考えられる。このことから、層直下で検出された溝(SD06)や炭溜り(SX03)はそれと同時期以前ということになり、SX03出土の土器片がフェンサ下層式に比定されることも整合的である。問題はⅢd層との時間的關係であるが、層下の遺構がⅢd耕作土層作出行為と関連性があるか否かによって、今回の調査成果の解釈が大きく左右されることは非常に重要な留意事項となる。

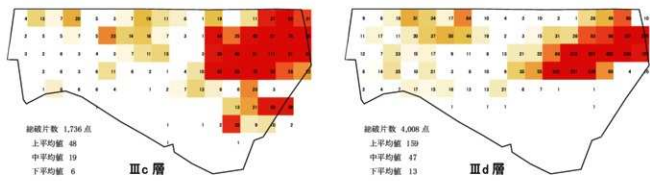
### Ⅲc・Ⅲd層出土の貝塚時代後期前半遺物

ここまでの記述に限っては、貝塚時代後半期(くびれ平底期)の遺物については一定の考慮が必要であるものの、各種遺物の出土状況と層位的新古関係とが、ある程度の整合性をもって説明できた。しかしその一方で、基本土層の設定概念からすればⅣ・Ⅴ層から出土するはずの貝塚時代後期前半土器が、Ⅲ層細分層の各層から大量に出土しており(第4表)、Ⅲc・Ⅲd層では貝塚時代後期後半～グスク時代の遺物点数を凌駕した状況となっている。これは前項で述べた通り、耕作土作出にあたって大掛かりなⅤ層土混入があったことによる、と考えている。耕作域では同時期の遺物に乏しく、母材となった土壌に含まれていた前代の遺物が主体的に出土した格好になることは、『新城下原遺跡』(2006)においても観察・指摘されている。今回の事例は、耕作土層の直下にあった母材層ではなく、周囲の砂(Ⅴ層土)混入による出土、という違いはあるものの、耕作に関わる遺跡を調査する際の1つの重要な視点であろう。



第14図 耕作土の人為的作出作業 想定図

この砂混入作業を想像するにあたってその作業能率をも加味すると、直近の流路兩岸の傾斜地から砂を削り運んだのではないだろうか(第14図)。浜堤斜面地には遺物の包含地が所在することが多く、耕作土を作り出そうとする者によって、意図せず遺物を混入させ結果になったと思われる。また、この貝塚時代後期(特に前半期)の遺物分布には、明らかな偏りが認められる(第15図)。これは直近地から砂を運んだ傍証になるものと思われ、そうであれば、これらの混入遺物は厳密な意味での原位置は失っているものの、その移動距離はそれほど大きくなく、巨視的にはその遺物分布が意味をなし得るものと思われる。これらのことを考慮の上、遺物集計にあたっての層名は「Ⅲd(Ⅴ)層」との表記を用いた。



第15図 III c・III d層における貝塚時代後期土器 分布

### 平安山原地区全体における基本層序の整合

北谷町字伊平小字平安山原にて登録・設定された平安山原A・B・C遺跡は、全て旧米軍キャンプ柔江の返還地内に所在する。これらについて、これまで刊行された調査報告書は5冊に及ぶが、それらの整理・編集作業を行うたびに遺跡全体の調査所見再考に迫られてきた。本書は平安山原地区における遺跡報告の最終のものとなるため、これまでに得られた知見に対して全体的な整合性が求められる。

既刊の5冊のうち、試掘を除いた大規模な調査報告として、『平安山原B遺跡』(2015)・『平安山原A遺跡』(2016)が挙げられる。基本層序に対する概念や大別の方針については、その報告領域それぞれで相対的なものにならざるを得なかったが、今回平安山原に所在する全ての調査区が連結されたことにより、ナガサ川以北の土層堆積について概念整理が可能となった。以下、各調査区における基本層序設定概念の対応を第6表に示した。

第6表 平安山原各遺跡における基本層序の対応

時期	平安山原A (2016)	平安山原B・C (今回)	平安山原B (2015)	測定年代(補正年代) 番号
晩期	I	I	I	1945.4 ~ (米軍上陸)
近代		II a	II	1859 (土地整理法発布) ~ 1945.3 (平安山空襲)
近世	埋設・埋立	II b		239 ± 230P (平A・II層下SK100出土土器付着炭化物)
	↓	II c・C 試掘	III	
ブタ時代	B 試掘 (S-640)	III a	IV 上	560 ± 228P (平B・C+HC-SK03 出土ウマ下顎骨)
		III b		
		III c	IV 下	829 ± 243P (平A・III層下検出11号人骨)
		III d (貝層上)		973 ± 218P 他 (平B・C・III e層中炭化物)
		III e		1072 ± 230P (平A・IV層検出5号人骨)
		IV (B 試掘)	貝層-1層	1140 ± 25・1340 ± 250P (平B・C・貝層遺跡-15層出土イノシシ下顎骨)
			貝層-3層	1598 ± 220P (平B・IV下層中炭化物)
貝塚時代 後期	↓ 形成	IV	V (B 面)	
		V	VI	
			V	1795 ± 260P (平B・C・貝層遺跡-5層出土土器付着炭化物)
				1887 ± 250P (平B・C・貝層遺跡-5層出土イノシシ下顎骨)
				1889 ± 250P (平B・V層出土VI層土器付着炭化物)
				2290 ± 240P (平B・燃焼遺構出土炭化材)
				2345 ± 260P (平B・V層出土IV層土器付着炭化物)
貝塚時代 前期		ビーチロック	VI	1620 ± 23 ~ 4118 ± 271P (平A・ビーチロック中貝殻)

## HB ③ 基本土層注記

層		色・土質	特徴	備考 (旧層序)
大別	細分			
I	1	10YR 4/4 褐色混雑土	米軍による造成土。	1
	2	2.5Y 7/6 黄褐色土	全体に鉄分が混じる。	2
II b	3	2.5Y 4/3 オリーブ褐色シルト	硬くしまる。カワニナを均質に 3% 含む。鉄分が混じる。	3
	4	2.5Y 4/2 暗灰褐色シルト	硬くしまる。カワニナを均質に 3% 含む。鉄分が混じる。	4
III a	5	2.5Y 6/2 灰黄色シルト	硬くしまる。カワニナを均質に 5% 含む。鉄分が混じる。	5
	6	10YR 5/2 灰黄褐色シルト	硬くしまる。カワニナを均質に 7% 含む。鉄分が混じる。	6
III c	7	2.5Y 3/2 黒褐色砂質土	硬くしまる。細砂主体で粗砂が全体に混じる。耕作土。	11
	8	10YR 3/2 黒褐色砂質土	硬くしまる。粘性やや強い。カワニナ微量。鉄分が多く混じる。	7
III	9	10YR 3/2 黒褐色砂質土	細砂主体。軽石少量。	8
	10	10YR 2/1 黒色砂質土	細砂主体。軽石中量。	9
	11	10YR 2/2 黒色砂質土	細砂主体。軽石多量。	10
	12	10YR 2/2 黒褐色砂質土	小へ大型貝類多量。土器を多く含有する。層底部は鉄分が多く硬質。	12
	13	2.5Y 5/2 暗灰黄色細砂	海産貝中量。	14
	14	2.5Y 5/2 暗灰黄色細砂	硬くしまる。細砂主体で粗砂が不均質に混じる。耕作土。	13
III d	15	2.5Y 3/2 黒褐色粘質土	硬くしまる。粘性非常に強い。	15
	16	5Y 3/2 オリーブ黒色粘質土	15 層土主体で、帯状に粗砂が 20% 混じる。	16
IV	17	5Y 3/1 オリーブ黒色粘質土	硬くしまる。粘性非常に強い。漸移層か。	17
	18	7.5Y 5/2 灰オリーブ砂質土	粘性弱い。包含物が少ない。	18
	19	7.5YR 7/4 にぶい橙色砂	海産貝・枝サンゴ多量。局所的に鉄分が多く硬質。	19
	20	10YR 7/6 明黄褐色砂	細砂と粗砂に細分可。	21
	21	10YR 7/4 にぶい黄褐色細砂	枝サンゴ多量。	22
V	22	7.5YR 5/6 明褐色粗砂	枝サンゴ多量。	23
	23	2.5Y 6/3 にぶい黄褐色砂	細砂と粗砂に細分可。古い浜堤を形成。	20

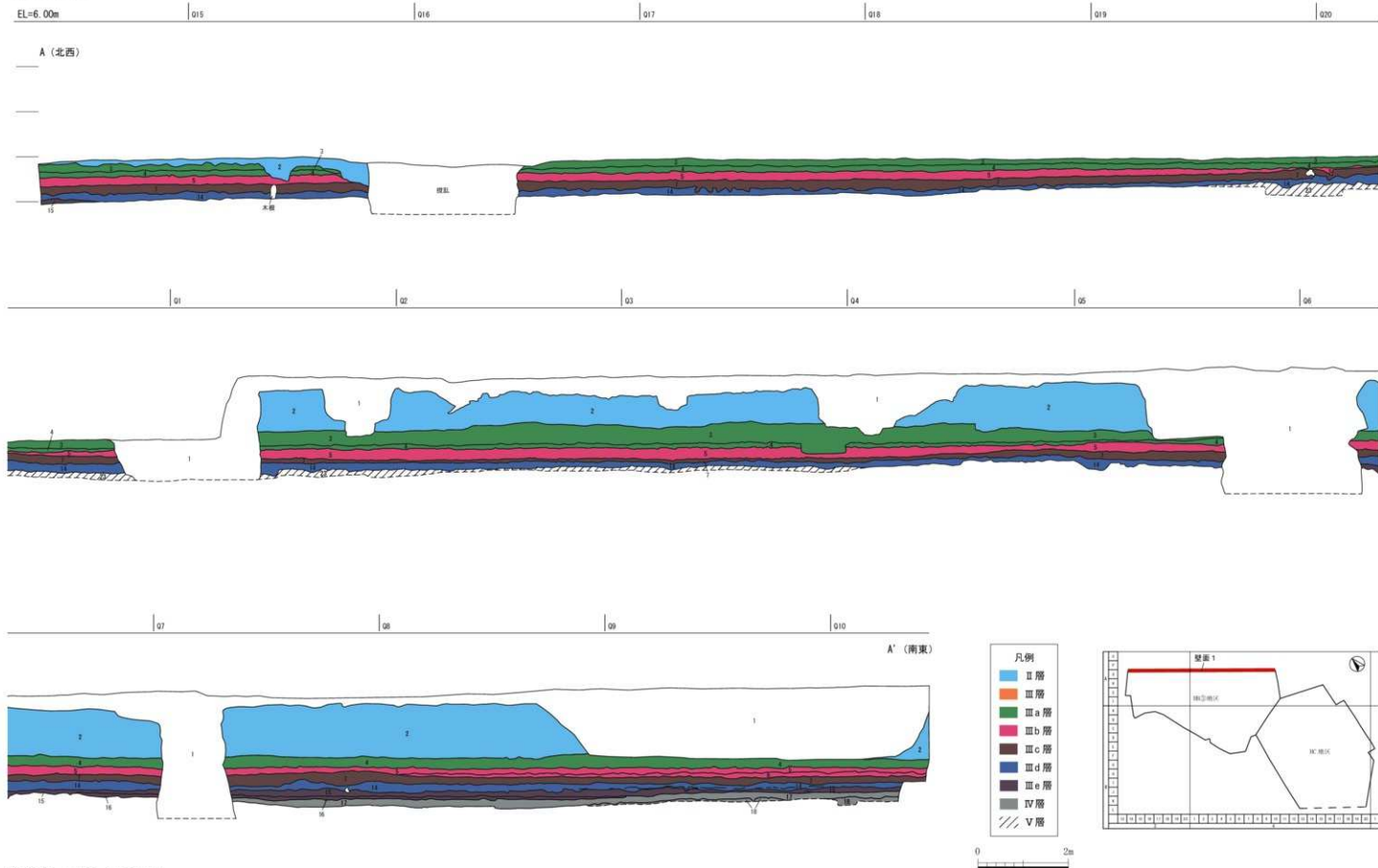
## HC 壁面 基本土層注記

層		色・土質	特徴	備考 (旧層序)
大別	細分			
I	1		米軍による造成土。	1
	2	10YR 5/8 黄褐色土	カワニナ微量。全体に鉄分が混じる。	3~6 7h
II b	3	7.5Y 2/1 黒色混砂土	明褐色粗砂と青黒色粘土の互層がみられる。	10
	4	5B 2/1 青黒色粘質土	マーブル状。粘質土主体で砂・枝サンゴ・自然貝を含む。	11
	5	5B 2/1 青黒色粘質土	マーブル状。粘質土主体で砂・枝サンゴ・自然貝を含む。	12
	6	7.5YR 5/6 明褐色砂	カワニナ・自然貝・枝サンゴ多量。	13
	7	7.5YR 4/1 暗灰色粘質土	カワニナ少量。鉄分が混じる。	5b
	8	10YR 2/2 黒褐色粘質土	硬くしまる。カワニナ微量。	7a
III	9	10YR 3/4 にぶい黄褐色土	カワニナ微量。鉄分が混じる。	12
	10	2.5Y 3/1 黒褐色砂質土	硬くしまる。	III-1a
	11	10YR 3/3 暗褐色土	非常に硬質。カワニナ多量。以下、20 層まで A 流路。	8
	12	7.5YR 4/3 にぶい黄褐色土	鉄分が多く混じり、硬質。	9
	13	10YR 2/1 黒色粘質土	マーブル状。	14
IV	14	10YR 8/2 灰黄褐色粗砂	二枚貝微量。	15
	15	10YR 5/1 褐灰色砂質土	ブロック状・帯状の粗砂を含む。	20
	16	10Y 5/3 オリーブ灰色シルト	自然貝を含む。	17
	16	10YR 5/1 褐灰色砂質土	カワニナ・自然貝微量。	21
	17	2.5Y 4/3 オリーブ褐色砂	自然貝多量。	19
	19	10Y 5/2 オリーブ灰色シルト	自然貝少量。	16
	20	5Y 3/1 オリーブ黒色土	マーブル状。	18
	21	7.5YR 2/1 黒色砂質土	以下、21 層まで B 流路。	III-3
	22	2.5Y 4/6 オリーブ褐色砂質土	自然貝を含む。	III-5
	23	7.5YR 7/4 黄褐色砂	貝・枝サンゴ多量。鉄分が所々で凝固。	32
V	24	10YR 6/4 黄褐色砂	枝サンゴ・自然貝少量。	22
	25	10YR 5/8 黄褐色砂	マーブル状の黒色砂・小礫を含む。	23
	26	10YR 6/8 明黄褐色粗砂	自然貝・枝サンゴ多量。	24
	27	7.5YR 9/4 にぶい橙色砂	枝サンゴ多量。自然貝少量。	25
	28	7.5YR 7/8 黄褐色砂	巻貝・サンゴごく微量。	26
	29	7.5YR 7/4 にぶい橙色細砂	枝サンゴ少量。	27
	30	5B 2/1 青黒色シルト	サンゴ・自然貝少量。	28
	31	5YR 4/6 赤褐色粗砂	サンゴ・自然貝少量。	29
	32	7.5YR 2/1 黒色粘質土	明褐色砂層がマーブル状に堆積。直下はビーチロック。	30
	33	7.5YR 7/3 黄褐色砂	二枚貝・枝サンゴを多量。鉄分が多く混じり、硬質。	31

第 7 表 -1 基本層序土層注記一覧

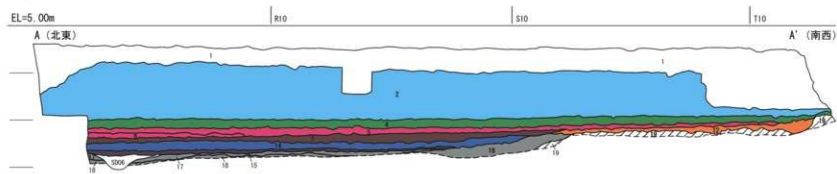


<HB③ 壁面 1>

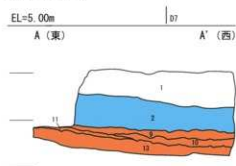


第 16 图 层序 1 (HB③地区)

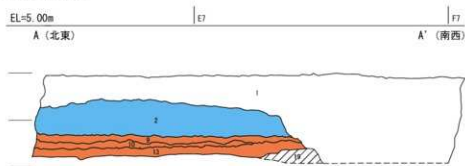
<HB③ 壁面 2>



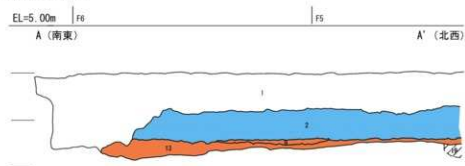
<HB③ 壁面 3>



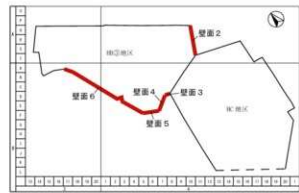
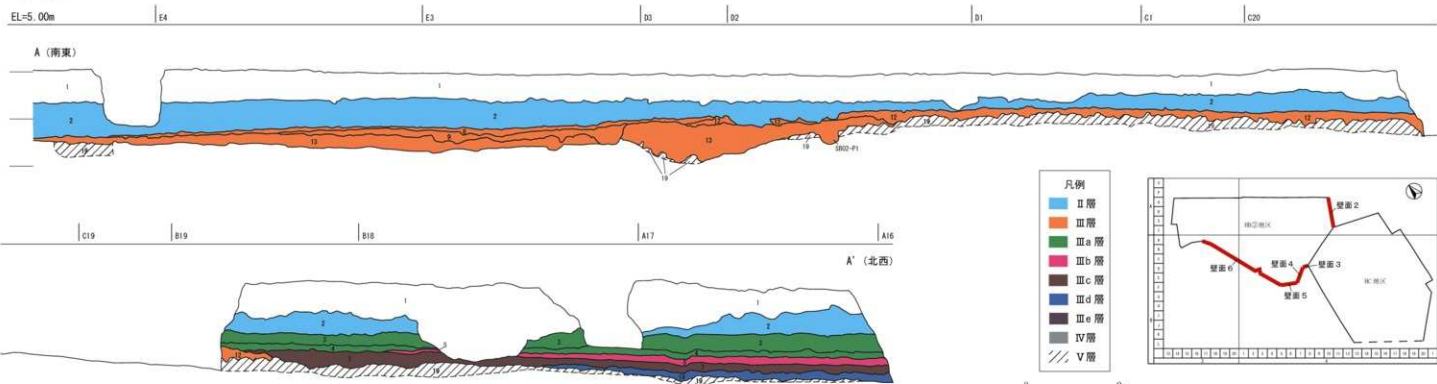
<HB③ 壁面 4>



<HB③ 壁面 5>

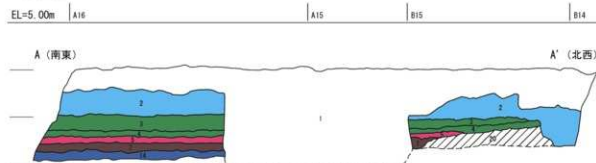


<HB③ 壁面 6>

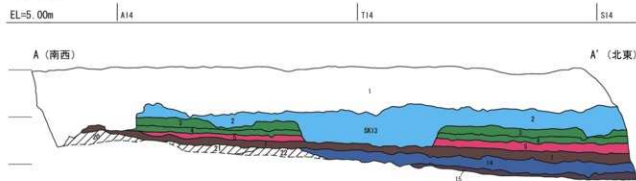


第 17 图 顺序 2 (HB③地区)

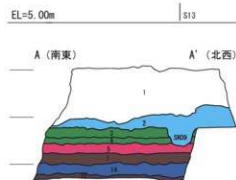
<HB③ 壁面7>



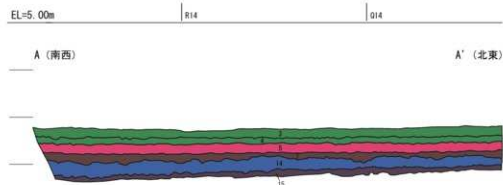
<HB③ 壁面8>



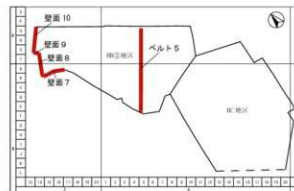
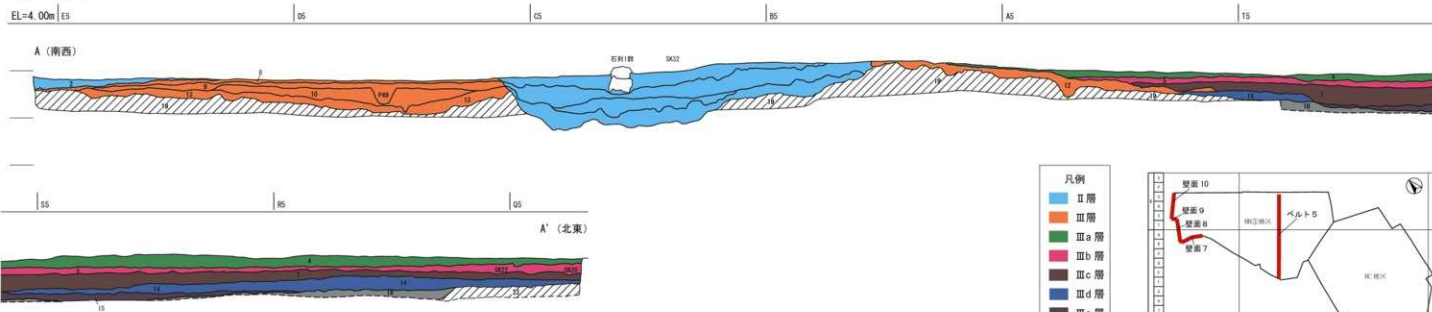
<HB③ 壁面9>



<HB③ 壁面10>

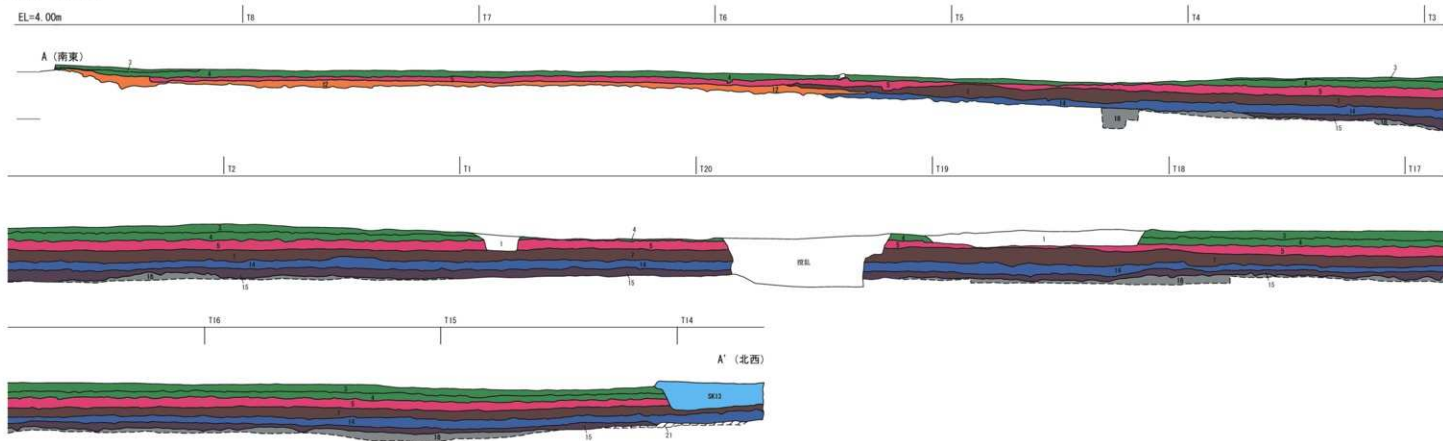


<HB③ ベルト5>

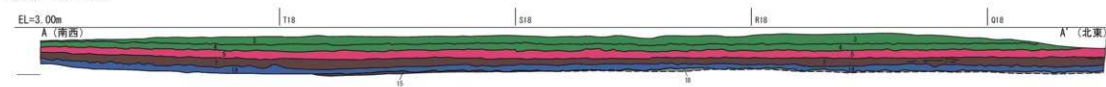


第18図 層序3 (HB③地区)

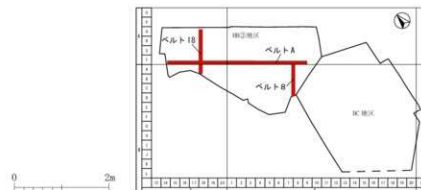
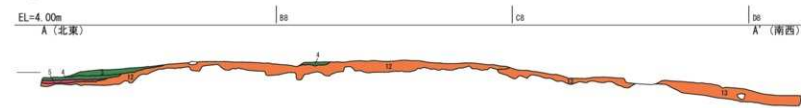
〈HB③ ベルトA〉



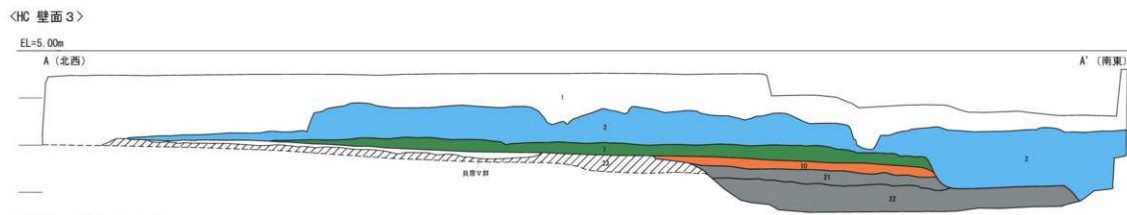
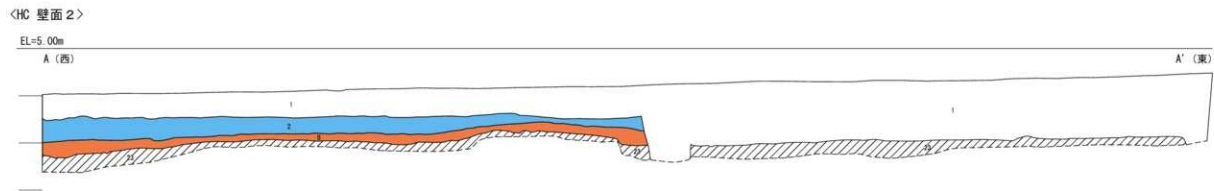
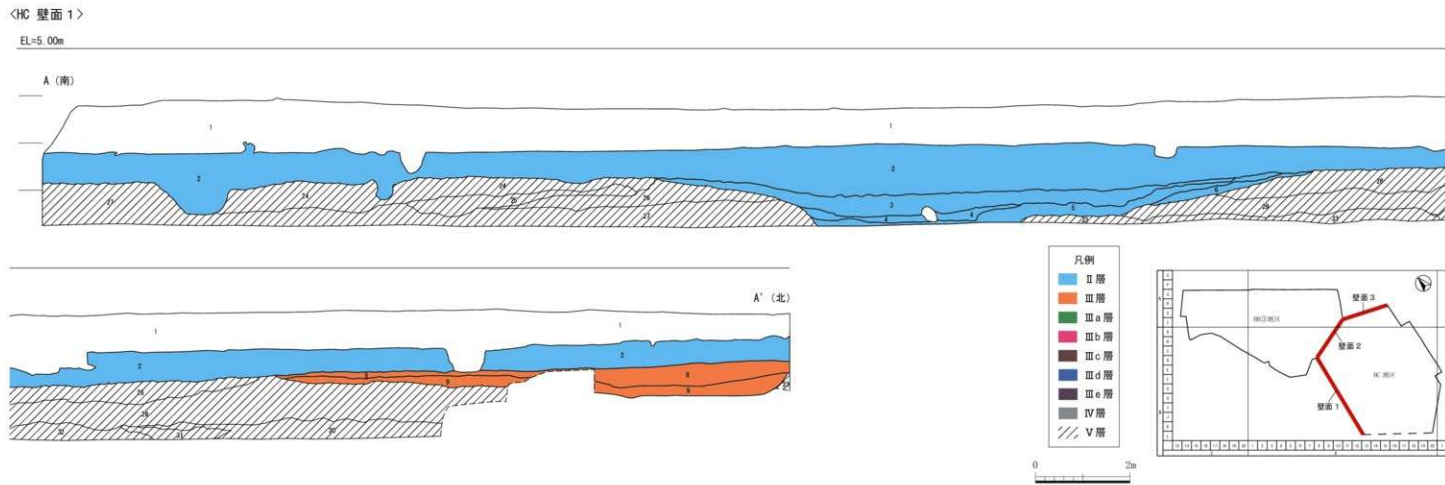
〈HB③ ベルトB〉



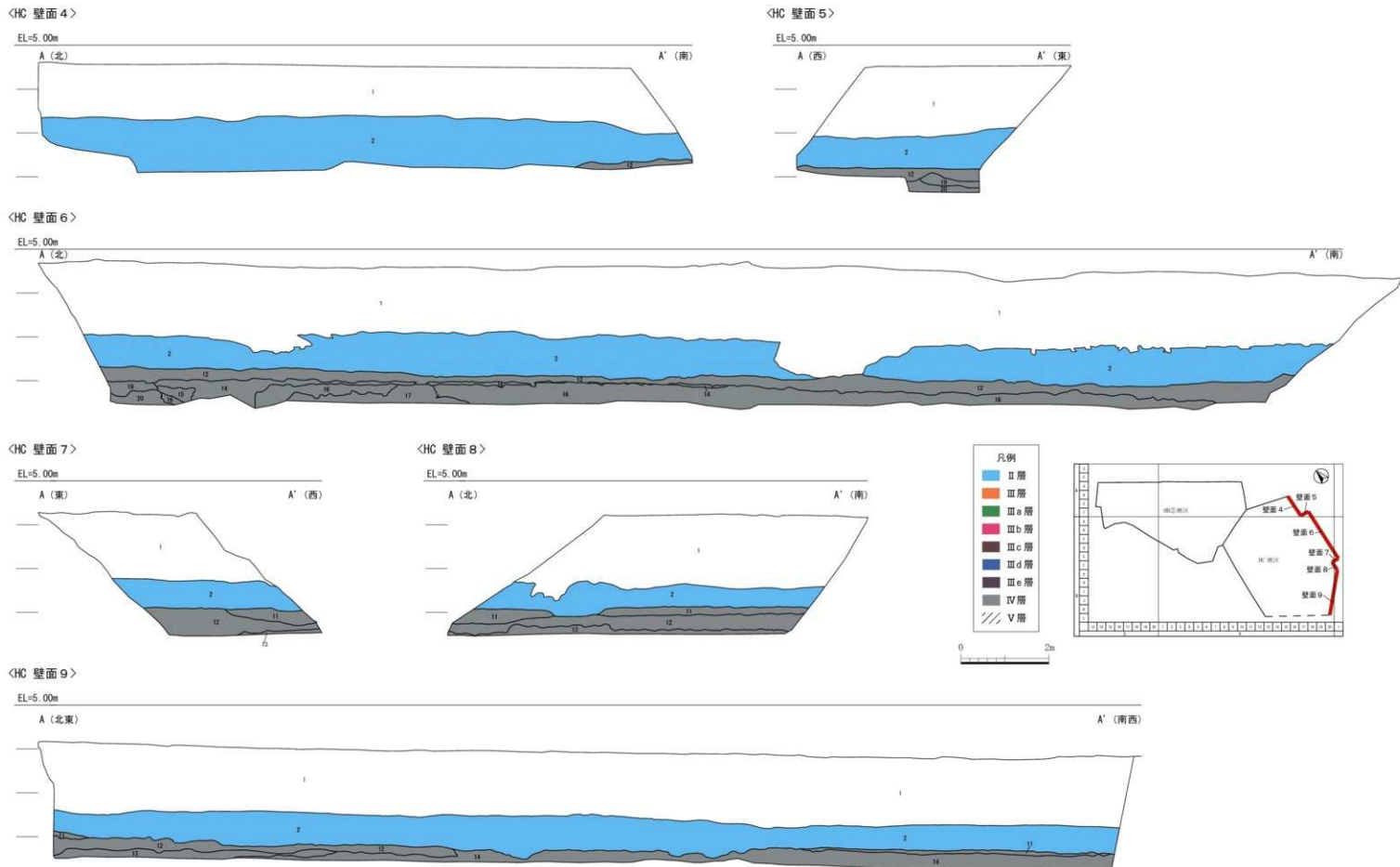
〈HB③ ベルトB〉



第19図 層序4 (HB③地区)



第20图 层序5 (HC地区)

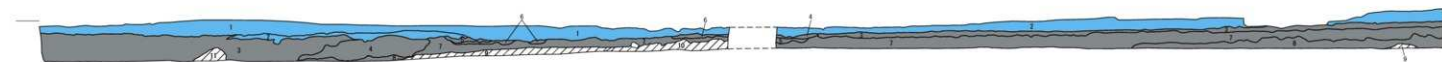


第 21 図 層序 6 (HC 地区)

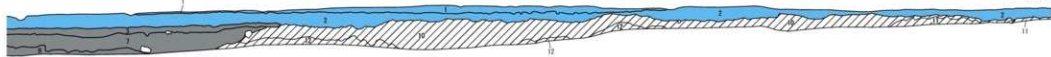
<HC ベルト1・2>

EL=3.00m

A (南西)



A' (北東)

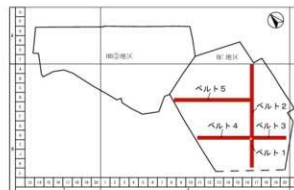
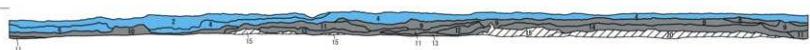


<HC ベルト3>

EL=3.00m

A (南東)

A' (北西)

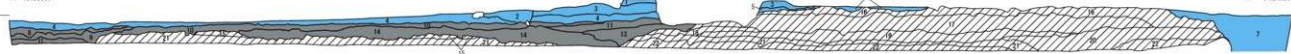


<HC ベルト4>

EL=3.00m

A (南東)

A' (北西)

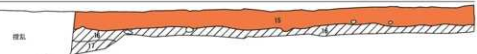
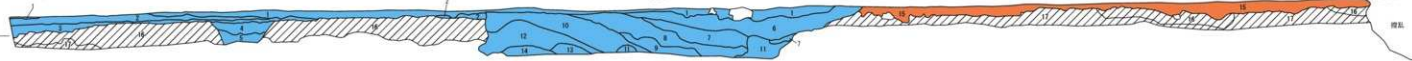


<HC ベルト5>

EL=3.00m

A (南東)

A' (北西)



第22図 層序7 (HC地区)

HC ベルト1・2 基本土層注記

層	色・土質	特徴	備考 (旧層序)	
大別	細分			
II c	1	10YR 3/2 黒褐色土	カワニナ多量。鉄分が混じる。	
	2	10YR 6/3 にぶい黄褐色砂	カワニナ少量。	
	3	10YR 5/8 黄褐色砂	黒色粘質土と互層をなす。	
IV	4	10YR 6/6 明黄褐色砂	粒子の異なる砂が互層をなす。	
	5	7.5YR 2/1 黒色粘質土	所々に白砂を薄くレンズ状に含む。	
	6	7.5YR 2/1 黒色土	白砂・枝サンゴ貝少量。	
	7	7.5YR 3/5 極暗褐色粘質土	木片・カワニナ多量。	
	8	10YR 5/2 灰黄褐色砂	暗褐色と黄褐色砂の互層。	
V	9	7.5YR 4/1 褐灰色砂	木片・二枚貝・枝サンゴ多量。黒褐色土微量。	
	10	7.5YR 4/1 褐灰色砂	木片・貝多量。鉄分が混じる。	
	11	7.5YR 6/3 にぶい橙色粗砂	枝サンゴ・貝多量。	
	12	注記なし		

HC ベルト3・4 基本土層注記

層	色・土質	特徴	備考 (旧層序)	
大別	細分			
II c	1	2.5 Y 8/3 淡黄色砂	硬くしまる。カワニナ・自然貝少量。	1
	2	10 YR 4/2 黄灰色粘質砂	カワニナ多量。わずかに鉄分が混じる。	3
	3	10 YR 6/8 明黄褐色細砂	硬くしまる。カワニナ・自然貝微量。	2
	4	10 YR 4/1 褐灰色砂	カワニナ少量。わずかに鉄分が混じる。	4
	5	7.5YR 3/1 黒褐色砂	小礫・貝片多量。	9a
	6	7.5YR 3/1 黒褐色砂	小礫・貝片多量。	9
タムイ	7	10YR 2/1 黒色粘質土	しまり強い。	9b
IV	8	10YR 3/2 黒褐色粘質土	カワニナ多量。鉄分が混じる。	5
	9	7.5YR 4/1 褐灰色砂質土	カワニナ・炭化物多量。枝サンゴ・白砂少量。	6
	10	10YR 4/2 灰黄褐色砂質土	炭化物微量。わずかに鉄分が混じる。	7
	11	2.5Y 5/2 暗灰黄褐色砂質土	帯状の黒褐色粘質土を含む。	8
	12	7.5YR 6/4 にぶい橙色砂		10
	13	7.5YR 5/2 灰褐色粗砂	枝サンゴ・貝少量。	11
	14	7.5YR 6/1 褐灰色細砂	帯状の黒色砂を含む。二枚貝少量。	12
	15	10YR 2/3 黒褐色スコリア	面的に広がる。汀線の打ち上げ物か。	13
	16	7.5YR 6/4 にぶい橙色砂		10 西
	17	10YR 5/8 黄褐色砂	枝サンゴ多量。	14
V	18	7.5YR 6/1 褐灰色砂	黒色砂ブロック少量。	15
	19	10YR 8/2 灰白色細砂	帯状の黄褐色砂を含む。	16
	20	10YR 5/1 褐灰色砂	貝片・枝サンゴ少量。	17
	21	2.5Y 4/1 灰黄色砂	直下はビーチロック。	18
	22	注記なし		19

HC ベルト5 基本土層注記

層	色・土質	特徴	備考 (旧層序)	
大別	細分			
II c	1	10Y 3/1 オリーブ黒色土	カワニナ多量。鉄分が混じる。	1
	2	10YR 4/1 褐灰色砂	カワニナ多量。二枚貝微量。	2
	3	7.5Y 5/1 灰色砂	ブロック状のカワニナを含む。	3
	4	2.5Y 4/6 オリーブ褐色砂	カワニナ・枝サンゴ・二枚貝を含む。	4
	5	10YR 5/6 黄褐色砂	カワニナ少量。わずかに鉄分が混じる。	5
SK04	6	10Y 4/1 灰色砂	カワニナ微量。	6
	7	10Y 3/1 オリーブ黒色砂	カワニナ多量。黄褐色砂がマーブル状にみられる。	7
	8		カワニナ・黒褐色砂を含む。	8
	9	10YR 4/3 にぶい黄褐色砂	カワニナ・二枚貝多量。鉄分が多く混じる。	9
	10	10YR 6/3 にぶい黄褐色砂	自然遺物多量。鉄分が多く混じる。	10
	11	7.5Y 3/2 オリーブ黒色砂	二枚貝・カワニナ・枝サンゴ・大型貝を含む。	11
	12	2.5Y 3/1 黒褐色砂	鉄分が混じる。	12
	13	10YR 4/4 褐色砂	カワニナ多量。	13
	14	10YR 2/1 黒色砂	カワニナ微量。	14
	III	15	10YR 4/1 褐灰色砂	カワニナ多量。二枚貝微量。
V	16	10Y 4/1 灰色砂		6 外
	17	10YR 6/4 にぶい黄褐色砂質土		16

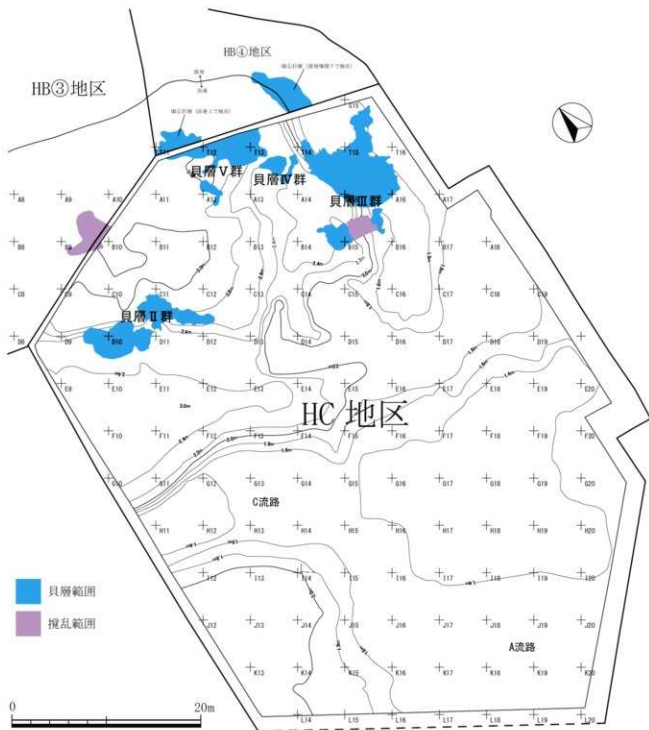
第7表-2 基本層序土層注記一覧



## 第2節 検出遺構

### 1. 貝塚時代後期の遺構 (第23図)

HC第一浜堤のV層砂面において、人為的廃棄活動による貝層範囲が複数個所で検出された。これらを平面的にグルーピングした上で、各々掘り進めていったことは調査進行上の必然と言えるが、上層で面的に検出されたものと、傾斜地にて重層的に検出されたものでは、廃棄主体者及び構築時期が全く異なる別な遺構として捉え直す必要がある。しかしながら、これらの貝



第23図 貝塚時代後期面 当初検出された貝層範囲 (S=1/400)

層からの出土遺物量は膨大であり、既にナンバリング・集計が進んでいた遺物の属性を変更することが工程的にも厳しく、混乱をも招く恐れがあったため、報告するにあたっては現場調査での呼称を踏襲することとした。

グルーピングされた貝層はⅠ～Ⅵ群まであり、廃棄単位で更に細分されるものもある。Ⅰ群は立地する浜堤の新しさを考慮して、グスク期の遺構として捉え直した。Ⅵ群については、Ⅲ群との区別が困難・無意味であったため整理段階で統合している。Ⅲ群の上層及びⅣ・Ⅴ群はほぼ同時期のものと考えて差し支えなく、Ⅲ群の3層以下を別時期のものとして捉え直し、遺物分布等の検討を行っている。

#### 貝層Ⅲ～Ⅴ群（第23～25図・図版1～3）

第一浜堤東側突端部の広い範囲にて、貝層が検出された。近世及びそれに攪乱されたグスク期の有色シルト層除去直後に検出された範囲と、その後には貝包含率の低い「後期層」を除去して検出された範囲とがみられた。以下、細分層ごとに記述する。

##### 【Ⅲ群-1a層及びⅣ・Ⅴ群】

いずれも面的に検出され、貝の混入率が高かった。第23図の貝層範囲は、この段階の状況を示している。人工遺物は比較的少ないが、くびれ平底期に比定される遺物が多くを占める。

##### 【Ⅲ群-1b層】

1a層直下で検出された黒色を呈する混貝層で、分布範囲は1a層とあまり変わらないが、層幅は厚い。層下部には多くの軽石が認められるため、1b層堆積以前は海水に曝され得る環境にあった可能性が高い。



図版1 貝層Ⅲ群-1a層 検出（北西より）



図版2 貝層Ⅲ群-1b層 検出（北西より）

##### 【Ⅲ群-2層】

土色は局所的に1b層に似るが、あまり貝を含まない。分布範囲は広くなり、HB④（2015北谷町教委）にまで広がるはずであるが、近世期の攪乱のせい、HB④では報告されていない。B流路内Ⅳ層（HB④-16層）との新旧の判別が難しいが、その堆積時期はごく近いものであると推定した。

### 【Ⅲ群-3層】

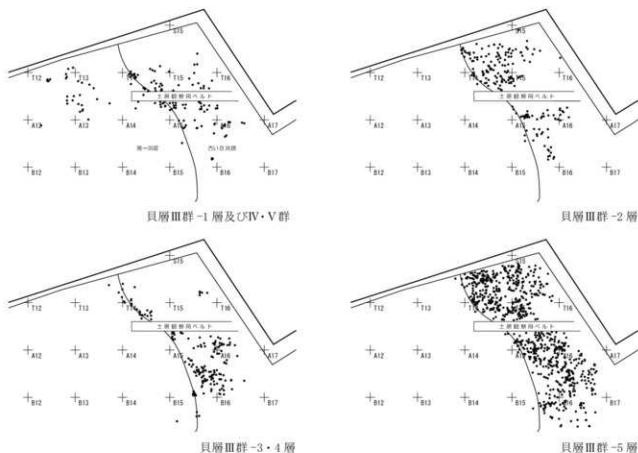
浜堤先端に向かい合うように広がる砂層であり、海成或いは風成自然堆積と考えられる。HB④-25層と連なる可能性が高く、ナガサ流域内の砂洲として形成されたものであろう。

### 【Ⅲ群-4層】

全体として傾斜をもちながら、5層を完全にバックしている。断面図で示した以上に細分される要素が多く、水成の互層が観察されたり、廃棄貝が水平に堆積していたりと、その堆積環境が水辺であったことを物語る。前述3層とともにB流路の閉塞に関わったと考えられる重要な層である。つまりB流路内IV層の堆積開始は、これら3・4層の堆積以後のことである可能性が高い。

### 【Ⅲ群-5層】

浜堤先端の外側に広く分布する。堆積レベルは最も低く、水平の堆積である。出土遺物の点数は圧倒的に多い。貝塚時代後期前半の資料が含まれており、浜屋原式のような古手のものも認められることから、第一浜堤の形成途中の段階から廃棄行為が始まっていた可能性が高い。



第24図 貝層Ⅲ～Ⅴ群各層における地点観測遺物分布 (S=1/400)

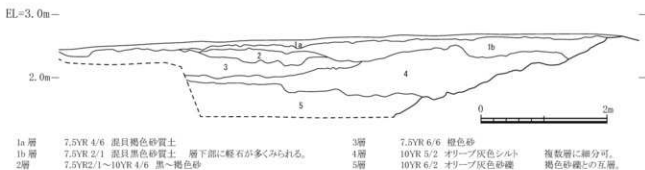
#### 小結

このように、第一浜堤先端部においては、長期にわたる盛んな廃棄行為がなされていた。自然堆積である「貝層Ⅲ群3層」を定点とすると、その下層で概ね大当原式、上層でくびれ平底

式という層位的新古関係が存在する。

発掘調査前には想定してなかった内容であったこともあり、工期内の調査完了は非常に厳しいものとなってしまった。そのために生じた作業上の混乱を完全に克服できなかった部分が多分にあったことは猛省しきりであるが、当該期土器の変遷に大きく関わる内容について、層位的発掘調査が実現できた意味は非常に大きなものであることは間違いない。

なお、本遺構の土層観察用ベルトは、樹脂塗布等の処理のうえ剥ぎ取りを行っており、北谷町役場ロビーにおいて常設展示している（巻首図版12）。



第25図 貝層Ⅲ群土層観察用ベルト東面 断面 (S=1/60)



図版3 貝層Ⅲ群土層観察用ベルト東面 断面 (北東より)

#### 貝層Ⅱ群 (第26図・図版4・5)

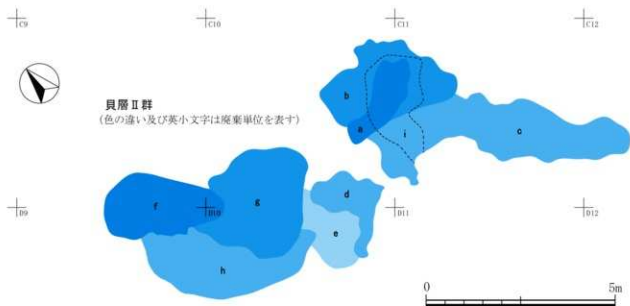
第一浜堤西側の傾斜地において面的に広がる貝層で、廃棄単位からa～iの9グループに分割することができた。グループごとに構成される貝種に多少の違いがみられる。含まれる土器には細片が多く、時期決定の根拠に乏しい。



図版4 貝層Ⅱ群f～h 検出 (西より)



図版5 貝層Ⅱ群a～c 検出 (北西より)



第26図 貝層Ⅱ群 (S-1/100)

## 2. グスク時代～近世前半の遺構

### (1) V層上面で検出された遺構 (第27・28図)

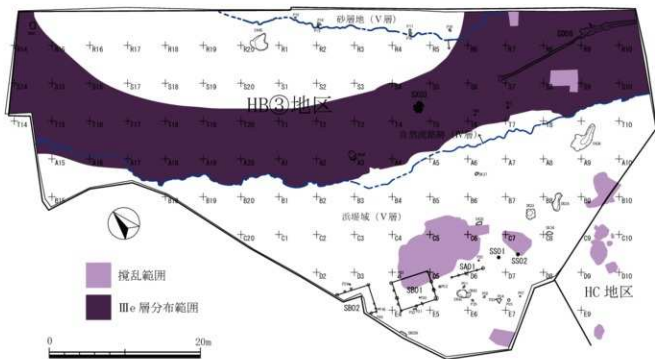
浜堤域のV層上面では、50基以上の土坑・ピット類が検出された。Q1～5グリッドにある6基のピットも、B流路を挟んだ対岸砂層上での検出であるため、このグループに含めた。近世遺構による擾乱の影響を受けているが、配置に規則性があるものが一部に認められたため、整理作業の段階に至って側柱建物等を想定した。これまで調査された平安山原の各遺跡では、遺構の疎密が激しく、密集地では建物想定が不可能なほどであったのに対し、当該箇所では切り合いが少ないこともあり、建物を想定することが比較的容易であった。

#### 建物址 (SB01) (第29図、図版6)

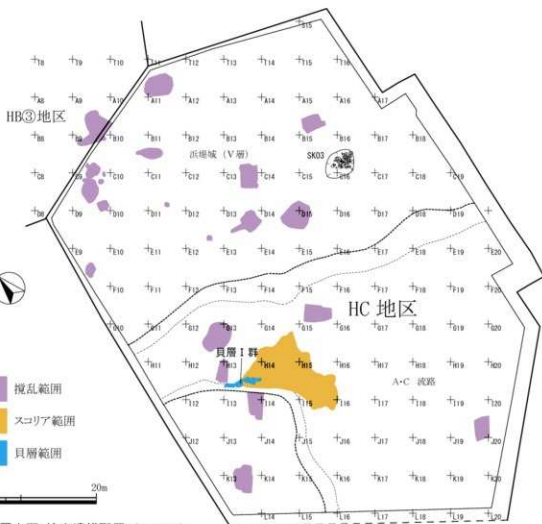
近世大型土坑SK32によって東隅を欠失するが、残存範囲から3間(長辺)×4間(短辺)程度の側柱建物を想定した。長辺は約5mを測る。東辺を構成するP1～3については、土層観察用ベルト上に位置していたため、Ⅲ層の細分層であるHB③-10層上面からの掘り込みであることが確認されているが、その他のピットは全てV層上面での検出となった。P11はP2完掘後のほぼ同位置にて検出されたため、P2の掘り残しであった可能性も残る。遺物は出土していない。

#### 建物址 (SB02) (第30図、図版6・7)

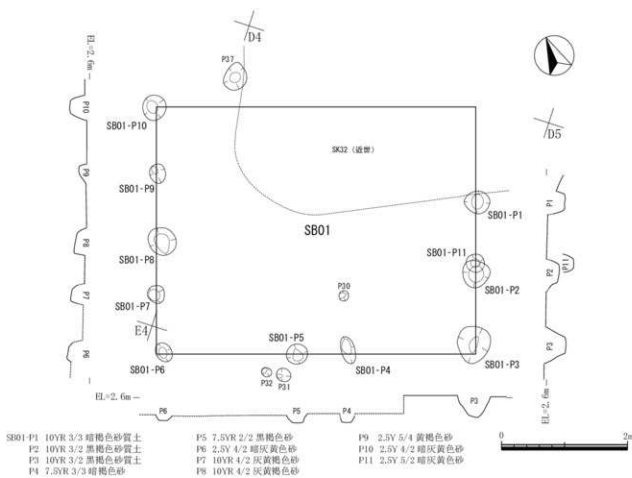
大半が調査区外に位置するため全体規模は不明であるが、3間以上(長辺)×3間(短辺)の側柱建物を想定した。短辺は約3.8mを測る。北東隅柱となるP4が最も深く、柱穴としてはしっかりとしている。SB01とは方向が一致しており、両者が整然と配置されているため、同時存在していたようにも感じられるが、調査区壁面に位置するP1の掘り込み開始面は、HB③-13層下からであり、SB01との層位的な整合性の点で問題が残る。遺物は出土していない。



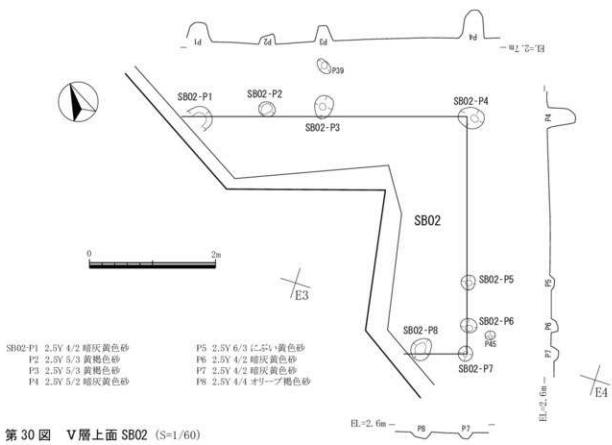
第27図 HB③ IV・V層上面 検出遺構配置 (S=1/500)



第28図 HC V層上面 検出遺構配置 (S=1/500)



第29図 V層上面 SB01 (S=1/60)



第30図 V層上面 SB02 (S=1/60)



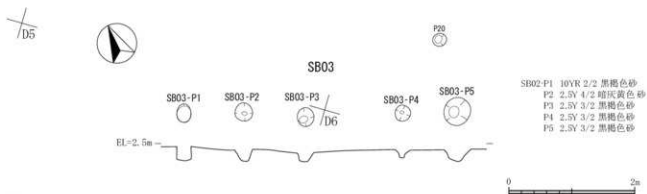
図版6 SB01～03 完掘（南より）



図版7 SB02 検出（東より）

### 建物址（SB03）（第31図、図版6）

1列に並ぶ5基のピットをもってSB03とした。柱列としか言いようがないが、SB01・02との配置関係や方向軸の一致からして、両者に関連する建物或いは施設である可能性が高い。長さ約4.5mを測る。P1から獣骨が得られたのみで、人工遺物は出土していない。



第31図 V層上面 SB03 (S=1/60)

### 貝集積（SS01・02）（第32図、図版8・9）

前述の建物址の外側にて、2カ所の小規模な貝集積が認められた。どちらも主にシャコガイで構成される。帰属時期は不明であるが、便宜上この面に属するものとして報告する。



第32図 V層上面 SS01・02 (S=1/20)





図版8 SS01 検出 (南西より)

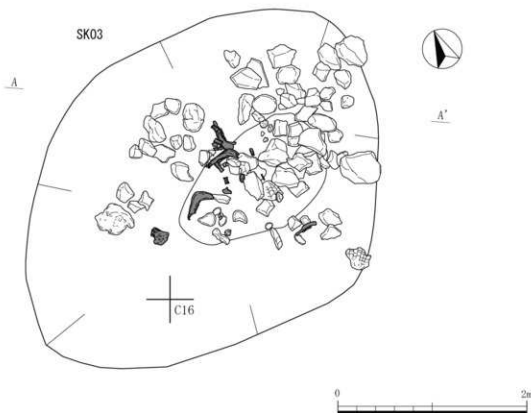


図版9 SS02 検出 (南西より)

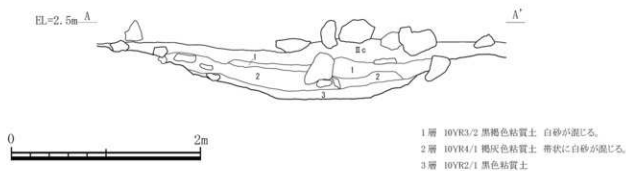
**埋納土坑 (HC-SK03)** (第33・34図、図版10・11)

HC北側の石列2群層直下に検出した。土坑掘り方に礫を敷き詰めていたため、当初は石列2群との混同があり、この土坑の開口部プランは明瞭に判別することができなかったが、整理段階でその平面形状を復元した。最下層からウシ・ウマ幼体の下顎骨が多く見つかった他、南宋の大銭(淳熙元寶・背「十五」、当二銭)も1点出土しており、何らかの祭祀性を伴った埋納土坑という性格をあてることができる。

石列直下に構築された大型土坑は今回2例あり、いずれも近世のものと推定された。そのため本遺構も同様である可能性を考え、出土したウマ下顎骨を試料とした年代測定を行ったところ、 $560 \pm 20$ BPの値を得た。共伴する南宋銭とも調和するため、年代観を改め14~15cのものと考えた。



第33図 V層上面 SK03 平面 (S=1/40)



第34図 V層上面 SK03断面 (S=1/40)



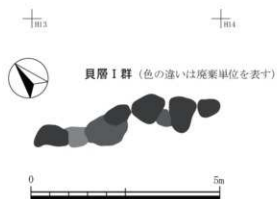
図版10 SK03断面 (西より)



図版11 SK03 南宋銭出土 (東より)

### 貝層I群 (第35図、図版12)

C流路に沿うようにして、第二浜堤際の緩斜面に帯状に薄く堆積する。第二浜堤はフェンサ下層式期までに形成されたものと思われるが、C流路の埋没開始は近世に入ってからであるため、この貝層は便宜上グスク期頃のものと考え、本項にて報告する。貝種はほぼイソハマグリで構成されていたが、廃棄単位から8グループに分割することができた。A・C流路の合流部に広がるスコリア層の上で、この貝層が検出されていることも特記される。人工遺物は出土していない。



第35図 V層上面 貝層I群 (S=1/100)



図版12 貝層I群 検出 (南東より)

## (2) IV層上面で検出された遺構 (第27図)

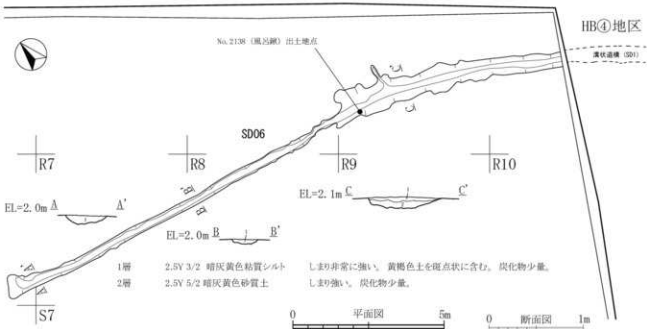
HB③を走っていた自然流路(B流路)は、グスク期までに埋没が進み(IV層の堆積)、平坦で浅い窪地となった。浜堤地とは異なり粘性のある土壌であったためか、グスク期に入るとこの範囲にて農耕が開始されることとなる。

耕作域においては、III d・III e層直下のIV層上面にて溝(SD06)・炭溜り(SX03)・土坑(SK40・41・44)・ウシ蹄痕群が検出された。検出状況からすると、前三者はこの面に伴って然るべきであるが、ウシ蹄痕は杭痕と同じように上層から下に向かって突き抜けが考えられる痕跡であるため、取扱いには一定の注意が必要である。本事例では、耕作土作出時に残された可能性も考慮し、本項において報告する。これ以外にも不鮮明なシミが残されており、これらは人足痕・草木根・鉄痕であった可能性が考えられなくもない。

これに非常に似た検出状況を示しているのが、那覇市那崎原遺跡(那覇市教委1996)である。溝2条・焼土層遺構群・鉄跡群が近在して検出されており、焼土遺構は短期的に使用されたものであるという所見も、今回の炭溜り(SX03)に通じるものがある。ただし農耕における鉄痕は上位に耕すべき土壌があつてこそ下位で残るものであり、実際の作業面は検出面よりやや上となることが考えられる。那崎原遺跡・平安山原B遺跡におけるこれらの遺構セットが、果たして同時期のものとして意味をなすものなのか、そしてまたそれが何を意味するのか、検討にあたっては更なる慎重さが求められる。

## 溝(SD06) (第36図、図版13~16)

耕作域であるHB③東隅のIV層上面において、III e層に完全に覆われた形で1条の溝が検出された。『平安山原B遺跡』(2015)で報告された溝状遺構5(SD1)と同一・一連のものであり、検出総長は合わせて28.4mを測る。底面標高は西側ほど低いため、導排水目的であると推定しやすいが、地勢そのものが微傾斜をなしているため即断はできない。Q9付近で僅かに屈曲



第36図 IV層上面 SD06 (平面 S=1/25、断面 S=1/40)



図版 13 SD06 検出 (北西より)



図版 14 SD06 セクションA (東より)



図版 15 SD06 セクションC (東より)



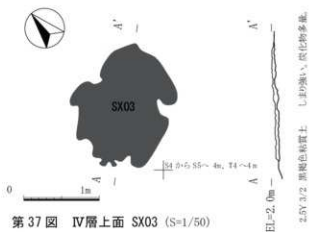
図版 16 SD06 完掘 (西より)

し、溝幅が細くなり、溝肩の乱れもみられなくなる。掘り足しであろうか。

この溝の構築目的は定かではないが、想像を逞しくするならば、耕作域を選定し、土壤改良を始めるにあたっての第一工程ではなかったか。つまり、完全に埋没していたIV層土壌に導水することにより水分を含ませ、そこに周辺の砂を混ぜ込んでいったと考えることはできないだろうか。愚見ではあろうが、検出層位とは整合している。或いは、調査区南壁面での溝断面観察において埋土上部にIIIe層同質土の混入が認められるため、実は構築面がIIIe層上面であり、IIIe層を耕作していた時の用水溝であった、という可能性も想定できる。

**炭溜り (SX03)** (第37図、図版17)

HB③-SD06の延長上に、炭化物が密集する範囲が検出された。検出状況はSD06と同じで、平面的には160×130cmほどの広がりを持つ。被熱・赤化した獣骨・海産貝の他、フェンサ下層式



第 37 図 IV層上面 SX03 (S=1/50)



図版 17 SX03 検出 (南東より)

に比定される土器口縁部片や破損した磨石も含まれていた。完掘底面での強い被熱痕跡は認められなかったため、これらの炭化物や骨等は別の場所で燃焼されたものを廃棄したか、この場所で燃焼したとしても一過性の行為であったことが考えられる。

#### ウシ蹄痕 (図版18・19)

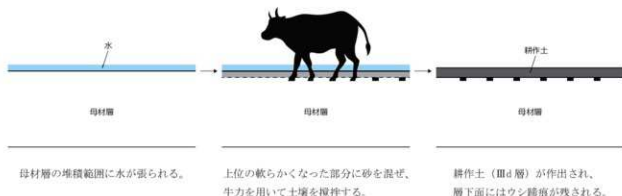
耕作域各所のIV層上面にて、上層土由来の理土を持つ大型獣の足跡が見された。偶蹄であることからウシの蹄痕とした。このウシの歩行が農耕に関わるものとした場合、耕土がよほど薄くでもない限り、土壌にかなりの水分を含んでいる状態(湿田状)を前提としなければ、下層面には蹄痕が残らないものと思われる。また、犁を引かせた際に生じる条痕も認められないため、これらのことから、少なくとも乾地での「田起こし」のような作業は想定できない。貧弱な発想ではあるが、水を湛えた(引き込んだ?) IIIe・IV層上にて耕作土III d層(或いはIII e層)を作出するにあたって、何らかの形で牛力を利用(踏耕等)したのであれば、このような痕跡が残るのではないだろうか。1つの想定案として、第38図に模式を示した。これ以外にも様々な想定は可能と思われるが、蹄痕が土層を突き抜ける要素をもった痕跡でもあるため、その時の土壌の軟弱度合を考慮に入れておく必要はある。



図版 18 Q14・15 付近 ウシ蹄痕 検出 (西より)

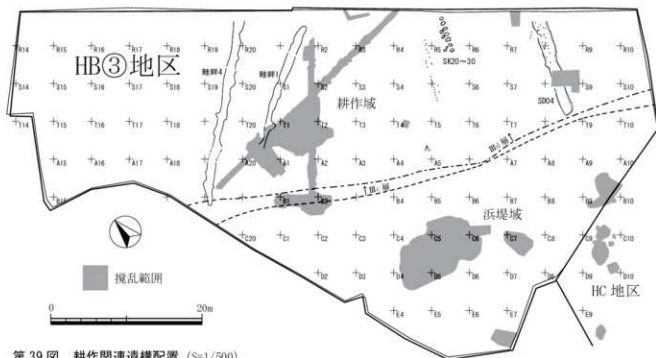


図版 19 ウシ蹄痕 断ち割り



第 38 図 蹄痕形成過程想定案 模式

### (3)耕作関連遺構 (第39図)



第39図 耕作関連遺構配置 (S=1/500)

#### 溝 (SD04)・木杭群 (第40図、図版21)

溝は一部に攪乱を受けていた。検出長約13.3m、幅約186cmを測り、南側は耕作城境から先には延びない。埋土の様相が後述する畦畔痕跡にも類似するが、断面が凹形を呈するため、溝として扱った。深さが殆どなく、底面に不規則な起伏がみられるため、流水した溝ではないように思われる。溝内外に木杭が残存しており、確認された杭数は27本に及んだ。なお、平面図中の木杭は●記号で表しており、原寸径とは異なる。溝内には礫も散見された。

#### 土坑群 (HB③-SK20~30)・木杭群 (第40図、図版20)

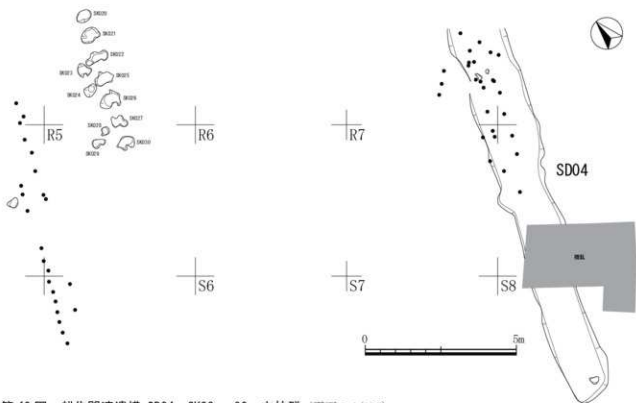
列状に並ぶような11基の土坑が検出された。いずれも浅く、不整形を呈することから、植栽痕跡であろう。遺物は出土しなかった。また、これらと並行するように木杭列が検出され、23本を確認した。



図版20 SK20~30 検出 (南西より)



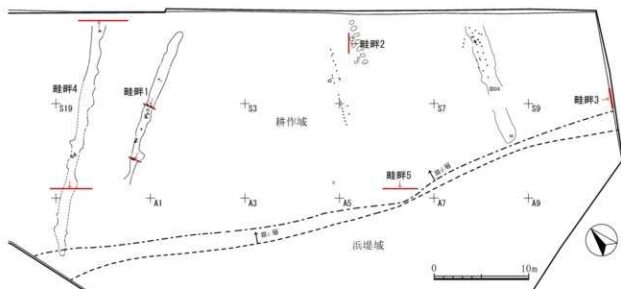
図版21 SD04 完掘 (南西より)



第40図 耕作関連遺構 SD04・SK20～30・木杭群 (平面S=1/125)

畦畔状の痕跡 (畦畔1～5) (第41図)

IIIc・III d層における平面・断面観察を繰り返す中で、不自然な土壌の高まりや土壌攪拌の程度の違い、礫の有無等から、畦畔が存在していた可能性を感じた。推論の域を出ない部分もあるが、看過するのにも躊躇されたため、積極的な解釈をもって以下に報告する。



第41図 畦畔状の痕跡 検出箇所 (S=1/400)

○畦畔1 (図版22)

III d層中で検出した。当初は溝として掘削を行ったが、遺構断面が凹形をなさなかったため、遺構として一度除外した経緯がある。検出プランとなった土色の違いは、下層であるIV層の露

出とその周辺の粗い攪拌土であり、耕作土壌に含まれるには相応しくないような礫の出土も認められた。断面からはIV層の高まりが明瞭に観察される。

今回の耕作域については必ずしも水田を想定している訳ではないが、この下層の高まりについては、水田跡調査における「疑似畦畔B」に近い状況にあると思われる。「疑似畦畔B」とは、実際に構築・使用された畦畔そのものではなく、畦畔があった場所の下位レベルに残る痕跡であり、一義的には耕作土下で検出される自然堆積層の高まりを指す。その形成過程については、第42図左側にて模式を示している。III d層の主たる母材層はIV層と考えられ、断面写真（図版22）のような状況は「疑似畦畔B」の典型的なものと言えよう。

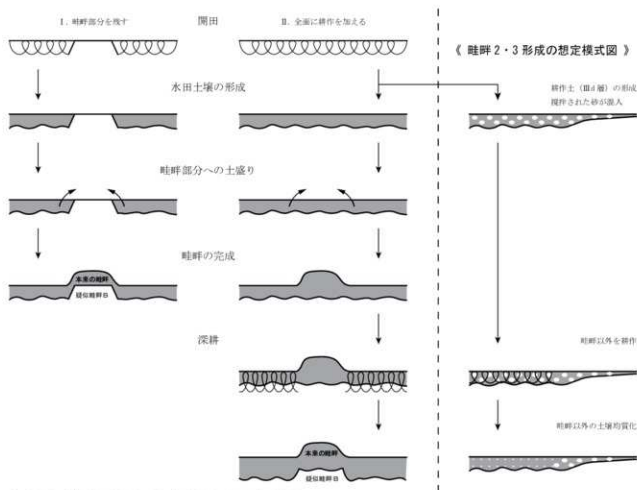


断面A：IV層が高まり、礫が配置される



断面B：断面Aに類似した状況

図版 22 耕作関連遺構 畦畔 1

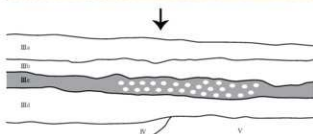


第 42 図 「疑似畦畔B」及び畦畔2・3 形成 模式

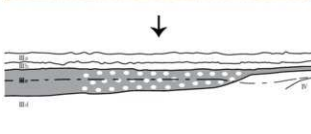


○畦畔2・3 (第43図、図版23)

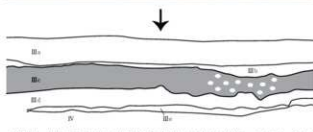
壁面2及びベルトAのⅢc層中にて、砂ブロックの混入状況が周囲とは異なる箇所を発見した。いずれも耕作域の縁辺に近い。Ⅲc層が人為的に作出された耕作土であることは、第4章第1節において述べた通りであるが、この耕作土作出にあたっては、母材層に砂を混入し攪拌するといった行為があったと考えられる。この攪拌状態が粗い箇所について、第42図右のような形成過程を想定し、広義の畦畔(耕作土由来の非耕作範囲)に分類できるものとして取り扱った。今回事例では畦畔以外部分にて耕作を重ねることで、当初混入・攪拌された砂(ブロック)の細小化及び土壌の均質化が起こると想定した。結果として、畦畔(非耕作)部分では粗い砂ブロックが残存することとなる。



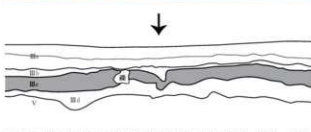
畦畔2 : Ⅲc層中に粗い攪拌土が残る (HD②-ベルト5)



畦畔3 : Ⅲc層中に粗い攪拌土が残る (HD②-壁面2)



畦畔4a : Ⅲc層の高まりの片側に粗い攪拌土が残る (HD②-ベルトA・合成)



畦畔4b : Ⅲc層の高まりの片側に盛り起伏がみられる (HD②-壁面1・合成)

第43図・図版23 耕作関連遺構 畦畔2～4

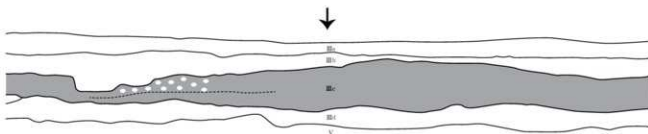
#### ○畦畔4 (第43図、図版23)

Ⅲc層中にて平面的に検出された。畦畔1同様、当初は溝としたものの断面凹形に掘削しきれなかったものである。耕作関連遺構として再度検討を加える中で、畦畔1～3の事例に共通点が認められたため、その1つに加えた。

本痕跡には、①壁面やベルトの観察において畦畔状の高まりが認められる、②その高まりの片側において粗い攪拌が残存している、③この攪拌部分に稾や木杭が配置されたり、上面の起伏が大きかったりして、実際の耕作範囲とは考えにくい、といった特徴が認められる。粗攪拌範囲は帯状に延び、その方向は畦畔1と平行する。しかしこの両者は構築層位が異なるため、併存したものではないと考えられる。

#### ○畦畔5 (第44図、図版24)

畦畔4に類似する状況が、ベルトAの別の箇所にて確認された。Ⅲc層の高まりの片側に、大きな凹みが認められた他、砂ブロックではないが粗い攪拌土が盛られたような土層の違いもうつら看取される。前述の木杭列の延長上に位置していることも併せて、畦畔状痕跡の1つとして報告する。

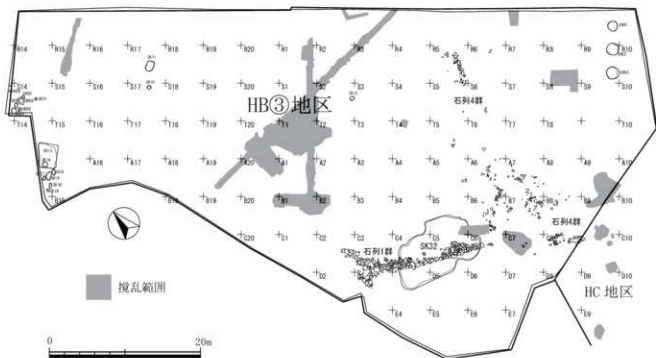


第44図・図版24 耕作関連遺構 畦畔5

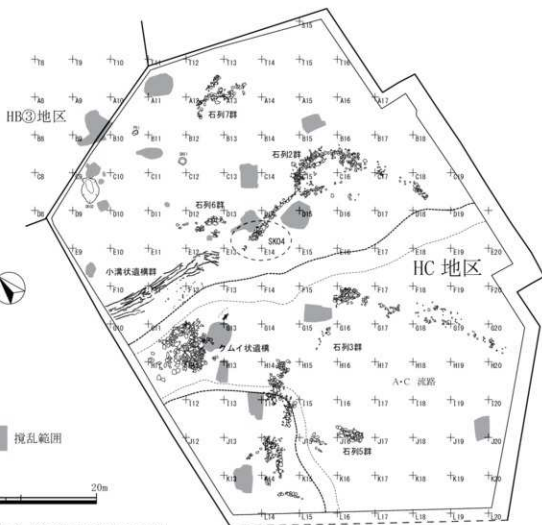
註：第42図の模式図については、佐藤（1999）242頁・第94図を基としてデジタルトレースを行い、本項の内容に合わせて省略等の加工をした。この内容を参考にしつつ、図右半においては筆者の想定を新たに作成し、並置させている。

### 3. 近世の遺構 (第45・46図)

耕作域ではⅡa・Ⅱb層直下において、近世の遺構群を確認した。これらの遺構は大別することができ、一方はⅡb層類似の埋土を持つ土坑群、もう一方は調査区全体にわたって構築される石列群とその関連遺構である。『平安山原B遺跡』・『平安山原A遺跡』における知見から、前者をより新しい遺構として捉えることができるが、全ての遺構を峻別することはできなかった。



第45図 HB③近世面 検出遺構配置 (S=1/500)



第46図 HC近世面 検出遺構配置 (S=1/500)

石列群及び関連遺構

石列遺構は遺構番号の再整理の結果、7群に大別した。文字通り縦が列状をなすもの他、「石込め」或いは「石敷き」と表現した方が妥当なものも含まれる。畠の区画や土留めの性格が考えられるが、検出範囲の広さや規模から、やや大掛かりな土木工事であったと捉えることができよう。

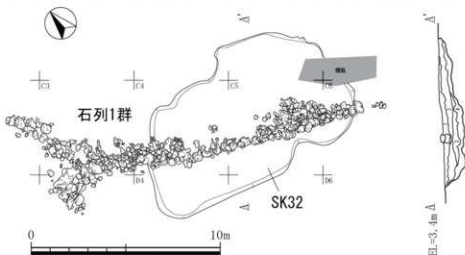
なお、混乱を防ぐために、整理段階で遺構番号の統合・付け直しを行った。現場調査段階に付した旧遺構番号等は第8表を参照されたい。

第8表 近世面 石列一覧

遺構名	期名	旧遺構番号
石列1群	HB③	SI.02
石列2群	HC	石列6
石列3群	HC	石列1～4
石列4群	HB③	SI.01・06～08
石列5群	HC	石列5
石列6群	HC	石列7
石列7群	HC	石列8

○石列1群・大型土坑 (HB③-SK32) (第47図、図版25・26)

HB③南西の浜堤部にて、西北西-東南東に走る石列を検出した。検出長は約18.5mである。ほぼ平行・直角方向に走る石列4群とは関連性が感じられる。耕作地の区画である他に、原地形で最も高標高地に立地していることから、道路の区界であった可能性も考えたい。この石列直下で検出されたのが、大型土坑 (SB-SK32) である。当初この両者は、たまたま重複する異なる時期・目的の遺構として扱っていたが、HCでも類似した事例が確認されたため、石列構築にあたって何らかの関連性があるものと捉えられるようになった。土坑は、平面規模は11.8×7.4m、深さ約1.1mと、今回報告する土坑では最も大型である。埋土は4分層され、最下層にはブロック土が混じる等、堆積に人為性が感じられる。陶磁器片・土器片が出土した。



第47図 近世面 石列1群・SK32 (S=1/200)

- 1層 10YR 4/3 に近い黄褐色シルト  
土の塊、黄褐色土、石灰化・フツラン、炭化物含む。
- 2層 2.5Y 5/4 黄褐色砂質土  
小礫・炭ケツを含む。
- 3層 2.5Y 6/6 明黄褐色砂  
滑石片を含む。
- 4層 10YR 4/3 に近い黄褐色土  
土の塊、径5～20cmのフツラン、炭ケツ・礫を含む。



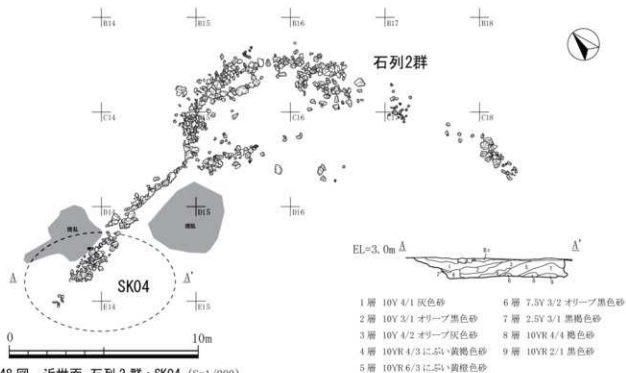
図版25 石列1群 検出 (西より)



図版26 SK32 断面 (南東より)

○石列2群 (第48図、図版27・28)

HC北側のⅡb層直下にて、緩やかな「L」字を呈する石列を検出した。東西列で約19m、南北列で約13mを測る。石列検出面上上下はⅡc層として捉えることができるが、C14グリッド付近の同層上面ではウシ蹄痕が集中する箇所もあった。「L」字屈曲部では、石列が楕円を描くように二股に分かれている。また、石列西端をかすめるように設定されたベルト5において、石列直下の土坑状の掘り込みが確認されている。平面検出ができないまま掘削が進んでしまったため平面形状は不明であるが、土層断面上では長さ約8m、深さ約1mを測る大型のものである(推定平面範囲を破線で図示した)。石列1群と状況が酷似するため、同様の事例として報告する。



第48図 近世面 石列2群・SK04 (S-1/200)



図版27 石列2群他 検出(南東より)

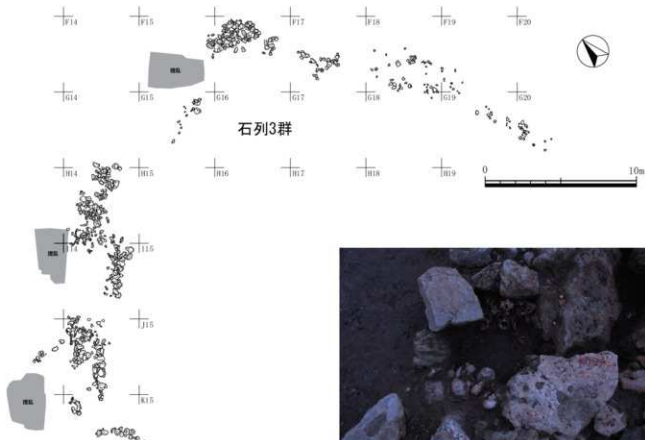


図版28 SK04 断面(東より)

○石列3群 (第49図、図版29～31)

HCで最初に検出された遺構である。石列2群同様、全体として「L」字を呈しており、東西列で約29m、南北列で約21mを測る。列の方向や「L」字屈曲部に礫が集中する傾向も、石列2群に類似しているが、本遺構がより低標高地に立地し、大半がA流路範囲内に含まれる。両者

の各辺間距離は概ね14~15m、検出標高差は概ね20~50cmである。磯間に食料残渣と思われる海産貝の集積がみられる箇所もあった。



第49図 近世面 石列3群 (S=1/250)



図版29 磯間の貝集積 検出 (南西より)



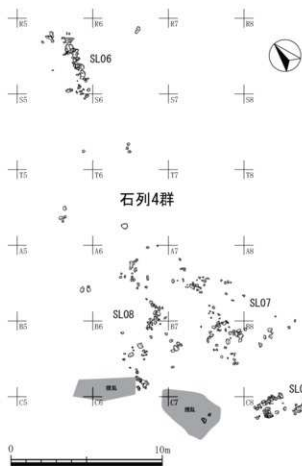
図版30 石列3群 検出 (東より)



図版31 石列3群 検出近景 (東より)

○石列4群 (第50図、図版32・33)

既に述べた通り、いずれの石列も石列1群との関連性が考えられる。規則性が感じられるが散在するため、便宜上現場段階の遺構番号も使用する。SL01は西北西-東南東に走り、検出長は約4.6mを測る。約1mの間隔をもって2条が平行しているようにも見えるため、道路の痕跡であった可能性もある。磯が散在するSL07・08も、同様に互いが並走しているように感じられるが、その間隔は約2.4mと広く、HB③-SL01に対して直角を向く。このSL07の北側延長上にSL06が走り、両者を合わせた検出長は約25mにも及ぶ。大群上の通行路であったか。



第50図 近世面 石列4群 (S=1/250)



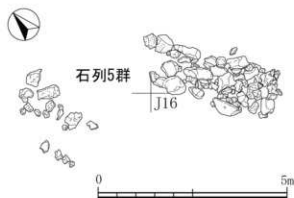
図版32 石列4群-SL01 検出 (西より)



図版33 石列4群-SL06 検出 (東より)

○石列5群 (第51図、図版34)

石列3群に囲まれるようではあるが、一連の石列をなさない一群である。検出されたのがIV層上面であり、同層を掘り込んで礎を配置しているため、他の石列との明らかな検出レベル差が認められる。これは構築時期差とも考えられるが、東側のまともには方向性が認められる。直方体に切石されたサンゴ礎を両サイドに立てるように配置し、人頭大の岩礎で間隙を埋めて平坦化しており、他の石列に比べ丁寧な造りでもある。遺物は出土していない。



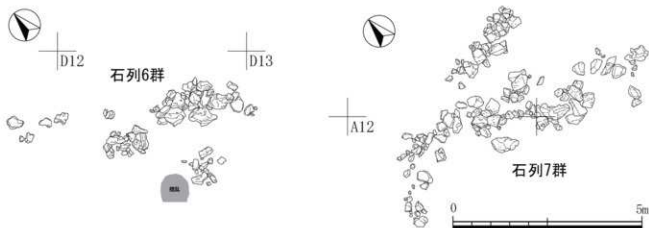
第51図 近世面 石列5群 (S=1/100)



図版34 石列5群 検出 (東より)

○石列6・7群 (第52図)

HCでは更に2群の石列が検出されている。石列6群は前述した石列2群近くに位置し、何らかの関連が考えられるものの判然としない。石列7群についても、北側に石列2群に平行するようなラインが確認できるが、その他の礫とのレベル差が大きいため、石列下部に土坑状の掘り込みを伴っている可能性もある。石列7群からは青磁・染付片が出土している。

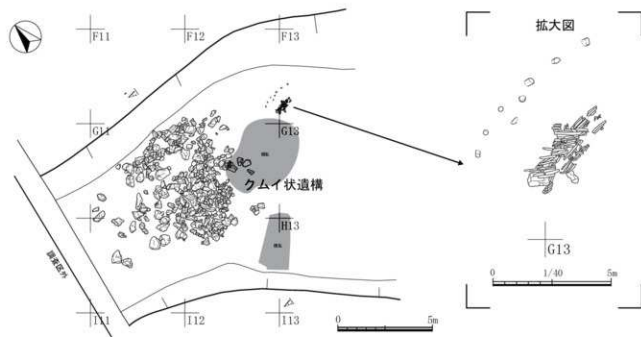


第 52 図 近世面 石列 6・7 群 (S=1/100)

クムイ状遺構 (第53・54図、図版35～38)

C流路の掘削中、人為的に集積された大量の礫を検出した。集積礫の殆どが石灰質砂岩であった。ビーチロック直上に方形の基礎部分を構築し、その後人頭大の礫で間隙を埋めている。基礎部分に比べて上部礫の配置が乱雑であるが、崩落して原位置を保っていない可能性もある。

本遺構構築当時、C流路は開口していたものと思われる。その意味においては、前述の石列遺構より古い段階のものと言えよう。規模・構造から、洗い場(クムイ)として利用されたも



第 53 図 近世面 クムイ状遺構 平面 (S=1/200)



のと考え、「クミイ状遺構」という名称を充てた(クミイは方言で池の意)。

集積礫の東側では、列状に並んだ木杭と植物質(竹?)の粗い編物が検出された。杭に柵(しがらみ)を施してクミイへ降りるためのステップにしたか、或いは水止めに関わる構造があったことが考えられる。



第54図 近世面 クミイ状遺構 断面 (S=1/100)



図版 35 クミイ状遺構 検出 (南西より)



図版 36 クミイ状遺構 断面 (東より)



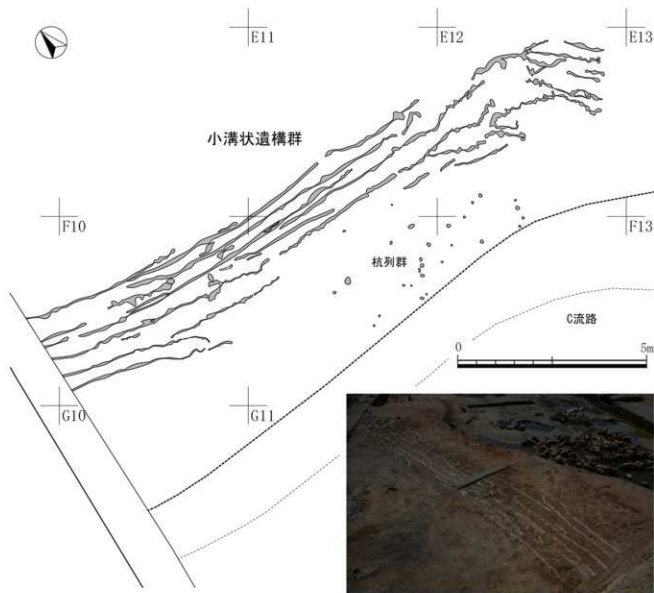
図版 37 木杭と編物 検出 (北より)



図版 38 編物 検出 (北より)

小溝状遺構群 (第55図、図版39)

HC西側浜堤上にて、やや不規則であるが並走する黒褐色土の小溝を検出した。プランが明瞭なもので22条を数え、各々の大まかな間隔は30cmほどである。ピッチの長いものが含まれることから、牛馬に犁を引かせた耕起の痕跡と考えられる。また、南側にも数条並びそうな杭列群が検出されている。帰属時期は不明であるが、石列2群と同方向に走っていることや石列群と切り合いが見られないことから、本遺構面のものとして取り扱った。しかし、既述したグスク期の溝や建物址とも方向軸が似通っていることも留意しておきたい。また、全体として細長い単位を示していることが、地割に関連する事象であるのかも今後検討すべき課題である。

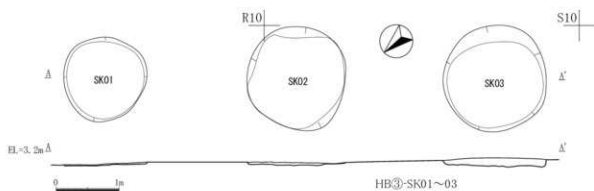


第55図 小溝状遺構群 (S=1/100)

図版39 小溝状遺構群 検出 (北西より)

土坑列 (HB③-SK01~03) (第56図、図版40・41)

HB③東隅において、1列に並ぶ3基の土坑が検出された。いずれもⅡb層由来の埋土を持ち、平面規模の割に非常に浅いことも共通する。構築目的は不明で、遺物も出土していない。



第56図 近世面 土坑列 HB③-SK01～03 (S=1/60)

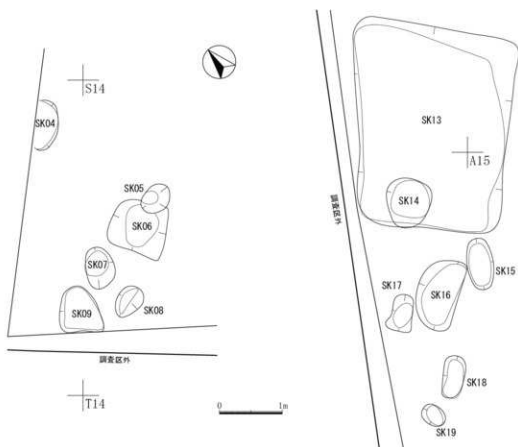
10VR 4/2 灰黄褐色土 しまり強い、カ7=ナ少量。



図版 40 土坑列 検出遠景 (東より)



図版 41 HB③-SK01 完掘 (北より)



第57図 近世面 土坑群 HB③-SK04～09 (左)、HB③-SK13～19 (右) (S=1/60)

土坑群 (HB③-SK04~09・13~19) (第57図、図版42・43)

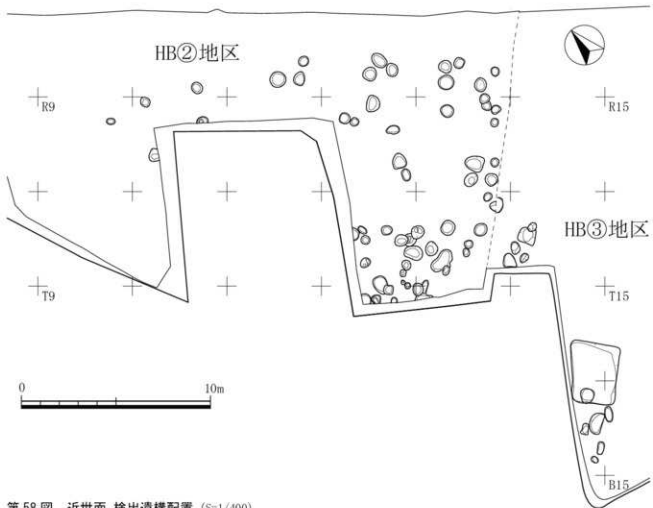
HB③北側に12基の土坑が密集して検出された。前述の土坑列と同様、IIb層由来の埋土を持つ。配置や形状に規則性が認められなかったが、『平安山原B遺跡』で報告されたHB②口地区土坑群と類似した埋土をもつため、第58図にて合わせて図示した。



図版 42 HB③-SK04～09 検出 (南東より)



図版 43 HB③-SK13～19 完掘 (南東より)



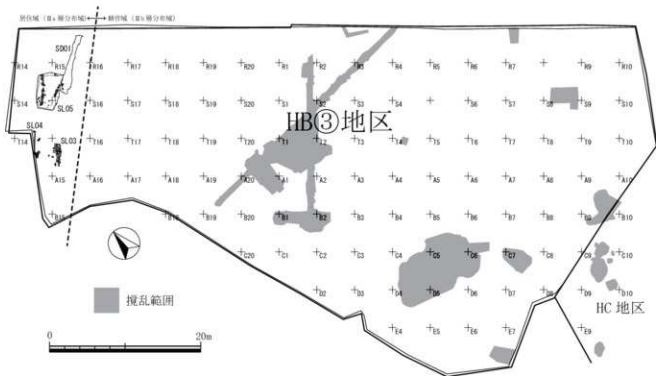
第58図 近世面 検出遺構配置 (S=1/400)

その他

HCで土坑2基 (HC-SK01・02) とピット1基 (HC-P01) を検出した。

#### 4. 戦前の字平安山集落跡（第59図）

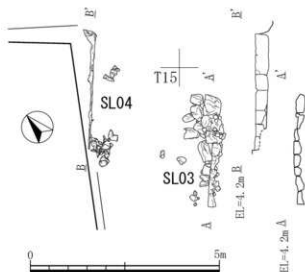
HB③北側の一角において、戦前の字平安山集落の一部が検出された。『平安山原A遺跡』（北谷町教委2016）にて詳しく報告された遺構群に連なるものであり、いずれも「祝女殿内小（ヌンドゥルチグワー）」屋敷の外縁部に相当する。



第59図 近代面 検出遺構配置 (S=1/500)

#### 石列遺構 (HB③-SL03・04) (第60図、図版44)

I層直下において、2条の石列 (HB③-SL03・04) が検出された。向かい合うように面を持っており、両端と石扉であったと考えられる。当屋敷の屋根構造の記録は残っていないが、上面



第60図 近代面 SL03・04 (S=1/100)



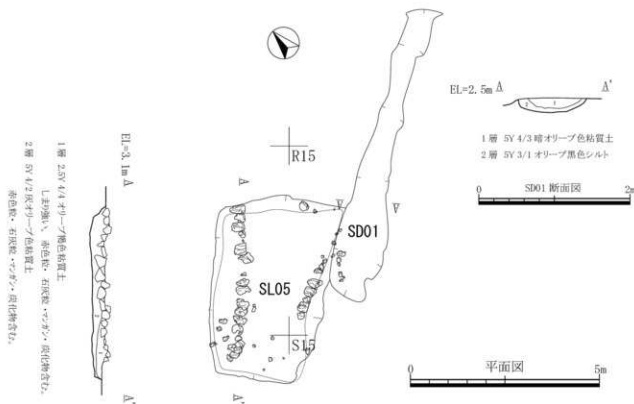
図版44 SL03・04 検出 (南東より)

に赤瓦が大量に残っていたため、瓦葺きであったと考えられる。屋号の通り平安山ノロを輩出する家の一門であり、戦前当時のノロは当家から出ている可能性がある（北谷町教委2016）。このため、比較的裕福な家柄であったことも想像できる。

**溝 (SD01)・石列遺構 (HB③-SL05) (第61図、図版45・46)**

屋敷の北東にて、石列と同方向に走る溝 (HB③-SD01) を検出した。現場段階では攪乱として扱っていたが、祝女殿内小屋敷の外縁を構成する溝として認識できた。

この溝に僅かに切られる形で、長方形に近い掘方を伴う石列 (HB③-SL05) を検出した。列をなす礎は2条あり、掘方を埋めてから配置されている。検出経緯から当初は近世遺構として捉えていたが、掘方埋土から近代の移入品と思われる鉄製鎌が出土したことや石列の走行方向から、当屋敷に帰属するものとして報告する。



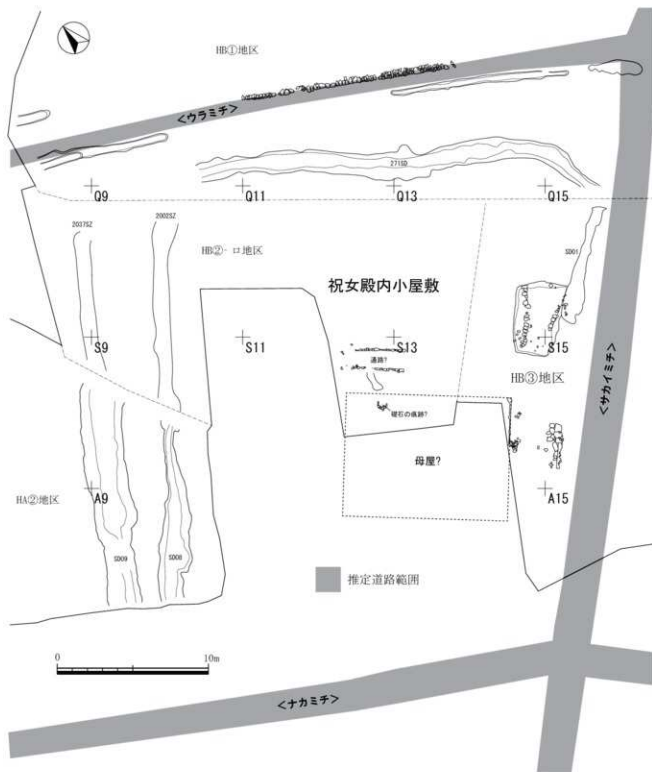
第61図 近代面 SD01・SL05 (S=1/100, 1/50)



図版 45 SD01 検出 (南西より)



図版 46 SL05 検出 (東より)



第62図 近代面 祝女殿内小屋敷と周辺道路合成図 (S=1/250)

この祝女殿内小屋敷については、今回の調査区を含めて計4調査区にまたがっており、全体規模等が理解しづらかったため、第62図を作成した。SD08～2002SZ～271SDは一連の溝と考えられ、近代集落形成にあたっての区画設定の際に構築された可能性がある。2002SZ周辺からは大便器片が出土していることから、屋敷北側に便所があったことを窺わせる。SD09は隣の畠地との区境であろう。母屋は礎石建ちであった可能性があり、そうであれば上位に多くみられた赤瓦片とも整合する。

第9表 報告遺構一覧

第IV章第2節 項番号	地区	遺構名	性格・属性	時期	
1	HC	貝層Ⅲ群-1・2層	廃棄貝層	くびれ平底期	
	HC	貝層Ⅳ群	廃棄貝層	くびれ平底期	
	HC	貝層Ⅴ群	廃棄貝層	くびれ平底期	
	HC	貝層Ⅲ群-3層	自然堆積	5～6cか	
	HC	貝層Ⅲ群-4・5層	廃棄貝層	大当原式期	
2-(1)	HB㊦	SB01	建物址	グスク～	
	HB㊦	SB02	建物址	グスク～	
	HB㊦	SB03	建物址?	グスク～	
	HB㊦	SK33～40、42・43	土坑	グスク～	
	HB㊦	P01～5、7、10、14～18、20、25、30～32、37、39、45、48、58	ピット	グスク～	
	HB㊦	SS01・02	貝集積	不明	
	HC	SK03	埋納土坑	14～15c	
	HC	貝層Ⅰ群	廃棄貝層	グスク期前後	
	2-(2)	HB㊦	SD06	溝	10～11cか
		HB㊦	SX03	炭溜り	10～11cか
HB㊦		SK41、44	土坑	グスク期	
HB㊦		P60、62	ピット	グスク期	
HB㊦		ウシ蹄痕	歩行痕	10c～	
2-(3)	HB㊦	SD04+木杭群	溝	グスク期	
	HB㊦	SK20～30+木杭群	土坑列	グスク期	
	HB㊦	畦畔1	疑似畦畔B	グスク期	
	HB㊦	畦畔2	耕作域内非耕作範囲	グスク期	
	HB㊦	畦畔3	耕作域内非耕作範囲	グスク期	
	HB㊦	畦畔4	耕作域内非耕作範囲	グスク期	
3	HB㊦	畦畔5	耕作域内非耕作範囲	グスク期	
	HB㊦	石列1群	石列	近世	
	HB㊦	SK32	大型土坑	近世	
	HC	石列2群	石列	近世	
	HC	SK04	大型土坑	近世	
	HC	石列3群	石列	近世	
	HB㊦	石列4群	石列	近世	
	HC	石列5群	石敷?	近世	
	HC	石列6群	集石?	近世	
	HC	石列7群	石込?	近世	
	HC	クムイ状遺構	洗い場?	近世(古)	
	HC	小溝状遺構群+杭列群	晶跡	近世	
	HB㊦	SK01～03	土坑列	近世(新)	
	HB㊦	SK04～14	土坑群	近世(新)	
	HB㊦	SK10～12、31	土坑	近世(新)	
	HC	SK01・02	土坑	～近世	
	HC	P01	ピット	～近世	
	4	HB㊦	SL03・04	祝女殿内小屋敷	近代
		HB㊦	SD01・SL05	祝女殿内小屋敷	近代



### 第3節 出土遺物

出土した遺物は28種34,083点(第10表)で、その所属時期は貝塚時代後期・グスク時代・近世・近代～戦前と広い範囲にまたがる。層序はこれまでの平安山原地区の遺跡同様、貝塚時代後期～戦前まで継続的に生活していたため、人為的な攪乱を受けている。特に基盤は砂地ということもあり、攪乱を受けた上層の遺物が下層に紛れ込んだ可能性が高く各々の時期の遺物包含層を把握するのは難しかったが、これまでの報告書と同様、遺物の平面分布と層を加味しながら、各時期の遺物の分析を行った。HCでは貝塚時代後期に属する遺物が主体で、グスク土器、青磁や褐釉陶器は後期土器に比べ圧倒的に少なく、近代の遺物は散見できる程度である。また、貝層群が確認され、中でも貝層Ⅲ群では厚さ125cmの貝層が検出され、層位的に検討できる良好な資料と期待された。30,162点という膨大な量の土器は口縁部・底部および胴部を分類し、従来の大当原式土器(Ⅱ類)やアカジャンガー式土器(Ⅳ類)の層位的変遷を試みた。HB③では貝塚時代後期の遺物のほか、グスク・近世・近代遺物の出土する割合がHCに比べて高い。平面分布をみると貝塚時代後期に属する遺物はHC側に多く、グスク時代の土器や中国産陶磁器などは西(HA④)側に得られ、近世・近代の遺物は平安山集落の端(HA②)にあたる北側に集中している(第10図)。以下、貝塚時代後期から近代とほぼ時代順に遺物を報告する。各々の遺物は出土量と平面分布、主なものを図化し、観察一覧を示す。

第10表 遺物 出土量

遺物	年代	貝塚時代後期		グスク時代・近世・近代～戦前																合計															
		土器	石器	貝製品	骨製品	グスク土器	カムイサキ	滑石製品	白磁	青磁	染付	地輪	色絵	地輪陶器	タイ産手鏡	鏡	木製品	紙製品	瓦質土器		本土産陶器	本土産磁器	丹波産磁器	丹波産陶器	丹波産磁器	丹波産陶器	丹波産磁器	丹波産陶器	陶質土器	鉄器	銅器	瓦	磨石		
HC	Ⅰ	遺物	27	2	11					3	2																							30	
		遺積	119	2	4					3	9	1																						134	
	Ⅱ	遺物	90	2	12																													106	
		遺積	113	5	20																													141	
	Ⅲ	遺物	7		1																													8	
		遺積	3,866	95	619	2	97	5	1	2	29	4	1	16																			6,749		
	V	後期群	遺物	24																														24	
			遺積	84																														84	
		貝層Ⅰ群	遺物	176		21																													197
			遺積	116	1	2																												113	
		貝層Ⅱ群	遺物	30																															30
			遺積	213	1	18																													235
		貝層Ⅲ群	遺物	66		2																													68
			遺積	193		5																													198
		貝層Ⅳ群	遺物	150		7																													151
			遺積	6		9																													15
		貝層Ⅴ群	遺物	1	800	6	32					8																							806
			遺積	202	1	11						3																							211
		不明	遺物	908		2	36																												946
			遺積	3,919	14	139						5																							4,068
		HB③	Ⅰ	遺物	872		16					63																							911
				遺積	859		3					3																							920
		Ⅱ	遺物	4,099	71	860						3	1																						4,638
			遺積	188	2	56						5																							253
		Ⅲ	遺物	63	1	8						4																							78
			遺積	226	1	16						7																							259
		不明	遺物	1,015	34	125						4	2	1	10	25	14	1	24																1,296
			遺積	30,686	261	1742	8	180	7	2	12	68	21	2	51	6	2	1	1	1	4	10	12	20	80	8	19	2	9	9	2	23	23,121		
HB④		Ⅰ	遺物	103	1	6																												107	
			遺積	2	1	1						7	3	10																				172	
		Ⅱ	遺物	35	1	2																													86
			遺積	3		7																													12
		Ⅲ	遺物	147	3	2						9	1	1	12	1																			219
			遺積	1,369	21	118						31	1	2	16	9	5	1																	1,795
	Ⅳ	遺物	48	1																														49	
		遺積	191	25	30						1	29	3	4	38	6	14																359		
	Ⅴ	遺物	380	13	25						55	1		7	2																			489	
		遺積	48	1							11	6		2	3																		1,911		
	Ⅵ	遺物	12	1	40																													53	
		遺積	4,029	18	103						1	4																						4,160	
	Ⅶ	遺物	5																															5	
		遺積	383	4																														387	
	Ⅷ	遺物	422																															424	
		遺積	2																															2	
	不明	遺物	363	3	21																													412	
		遺積	9,476	84	442	2	147	16	0	18	92	39	0	35	1	0	2	1	0	15	52	132	124	31	70	14	103	0				10,912			
	HB④合計		30,162	245	2,181	10	327	23	2	30	180	80	2	86	1	2	3	2	1	21	69	152	191	39	15	16	112	5				31,083			

(1) 土器

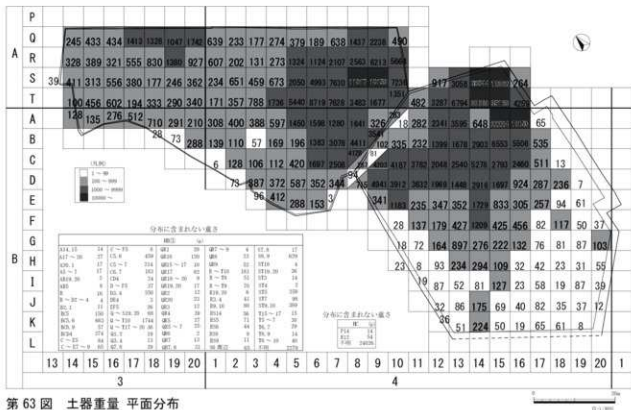
土器はHC20,686点、HB③9,476点、総数30,162点が出土した。出土量が多いため、2.5cm以下は報告から除外している。遺物整理の指標とするために注記時に重量を量り、第63図に土器の重量分布を示した。大半が貝塚時代後期の土器で、僅かに貝塚時代前・中期の土器と搬入土器が得られている。取上げ遺物や接合によって復元された土器は6個体で、その他にも形状の分かる破片が多数得られた。口縁部・胴部は、搬入土器、貝塚時代前・中期の土器、貝塚時代後期の土器(I~V類)に分類し、第11表に示した。底部は、図4のみが搬入であることから搬入土器の項で扱い、その他は全て貝塚時代後期の底部としてまとめた。

第11表 土器分類

- (搬入土器)  
(在出土器)
- (1) 貝塚時代前・中期土器
  - (2) 貝塚時代後期土器
    - I類: 浜屋原式土器相当
    - II類: 大当原式土器相当
    - III類: II・IV類の中間タイプ  
型式不明土器
    - IV類: アカジャンガー式土器相当
    - V類: フェンサ下層式土器相当

第63図の重量平面分布や第13表の口縁部出土量、第21表の胴部出土量から見ると、HCは貝層III群のあるS~A14~16辺りでの出土が多く、地形上、砂層のない南側からの出土は少ない。第IV章第1節の層序で述べたように、V層(後期層:以下V層で表記)は貝塚時代後期に相当する包含層と考えられ、数型式の土器が検出された。そのため、第64図に貝層III群及びV層出土の土器を層別に示した。それからすると、貝層III群においては底部・口縁部・胴部とも尖底系土器が多く得られ、くびれ平底系土器は少ない。また前者は同群2・5層、後者は2層からの出土が多いなど層位の違いが見られる。V層では数量的にまだ尖底系土器が多く出土するが、くびれ平底系土器も貝層群に比べると多く、大きな破片や数個体が復元出来る出土状況を見せる。

また、V層においては貝塚時代後期の土器以外にグスタク土器97点、カムイヤキ5点、白磁2点、青磁29点、染付4点などが出土し、後世の擾乱行為を受けてグスタク期の遺物が混ざり込んでいるものと考えられる。



第63図 土器重量 平面分布

分類 層	搬入土器	貝塚時代				
		前・中期 土器	後期の土器			
			I類 鉢・甕・壺	A	B	C
V層	 	   	  	     	 	
	1		    		 	
	2		     	 		
	3				 	
	4			 	 	
貝層 Ⅲ群	          	         	      	    	   	 
	5		     			

第64図 HC貝層Ⅲ群・V層出土土器変遷

# 貝塚時代

後期の土器

Ⅲ類	Ⅳ類		Ⅴ類	
	A~C (鉢・甕)	D (壺)	A~C (鉢・甕)	D (壺)
<p>(図 128) (図 133) (図 139) (図 140) (図 150) (図 163) (図 134)</p>	<p>(図 174) (図 196) (図 199) (図 190) (図 199) (図 212) (図 204) (図 209) (図 210) (図 207) (図 182) (図 183) (図 193) (図 211) (図 203) (図 206) (図 202)</p>	<p>(図 231) (図 232) (図 233) (図 236) (図 203)</p>	<p>(図 247) (図 251) (図 274)</p>	<p>(図 236)</p>
<p>(図 143) (図 147) (図 167)</p>	<p>(図 214) (図 215) (図 216) (図 208)</p>	<p>(図 237) (図 238) (図 242)</p>	<p>(図 248) (図 279)</p>	
<p>(図 161) (図 330)</p>	<p>(図 227)</p>			
<p>(図 127) (図 144) (図 148) (図 149) (図 142) (図 149) (図 328) (図 329)</p>	<p>(図 187) (図 190) (図 213)</p>			

HB ③は遺跡全域にわたって土器が分布する状況である。重量分布や出土量から見ると、HCに近いS・T7～9からの出土が目立ち、次に南側のB・C8・9で多い。いずれもⅢd層・Ⅲ層（耕作土層）からの出土であるが、遺物はV層由来と考えられる。詳細は層序の項を参照されたい。

第13表の口縁部、第21表の胴部出土量を詳細に見ると、最も多いものはHC・HB ③ともⅡ類（大当原式土器）で、口縁部は約5割、胴部では7～8割を占める。口縁部で形式分類が出来ず、不明土器としたものも2～3割程度ある。有文・無文とも文様や胎土、混和材等の特徴からV類には相当せず、大半がⅡ～Ⅳ類に相当するものと考えられる。

第66図にはHC・HB ③から出土した土器の接合関係を示した。HCはV層での接合関係が目立ち、HB ③は耕作土層故か、25～30m程離れて接合が出来た遺物や、層が異なって接合出来たものなどが見られる。

また、HC 貝層Ⅲ群4層からは尖底の鉢形土器（図101）、2層から明瞭なハケ目調整を持つ泥質の土器（図143）が復元出来た。後者はハケ目痕が明瞭で、胎土等からV類（フェンサ下層式土器）が考えられたが、底部は尖底が想定されることから形式不明土器として扱った。くびれ平底系土器に多く見られるハケ目痕が、本遺跡の形式不明土器やⅡ類でも割と見られることから、移行期または並行期の土器であろうか、それともⅣ類（アカジャンガー式土器）の範疇で捉えるべきか、今後器面調整等に十分な注意を払う必要がある。

以下、搬入土器、在地土器の貝塚時代前・中期の土器、後期の土器の順で記述する。

#### <搬入土器>

搬入土器は僅かの出土であることからまとめて記述する。出土量は第12表に示し、HC7点、HB ③5点と計12点が得られた。図1～4は縄文時代中期～晩期に属する資料で、この時期に相当する層が本遺跡では見当たらないことから、紛れ込みと考えられる。

第71図1～11に11点を図示した。図1・2は胎土や器厚、文様などが本町の伊礼原遺跡（国指定外・2014）等で出土した搬入土器に類似し、縄文時代中期の時期に相当する。本遺跡出土の2点は図1がHB ③ S8 Ⅲd層、図2はHB ③ T7 Ⅲc層出土である。前者は口縁部で、口唇部が平らに強調されるため、外面側に粘土が僅かにはみ出す。外面には細い三角状凸帯文が弧状に貼付される。後者は胴部で、外面に細い三角状凸帯文を横位、それから縦位に二本貼付する。図1に比べて器面は丁寧なナデ調整が行われている。

図3は胎土や文様から面縄東洞式土器の頸部と思われる。縄文時代後期の時期に相当する。胎土に金雲母が混和されており、外面には三角状に尖った工具で横位に緻密な刺突文が施されている。出土地はHC T15 貝層Ⅲ群3層出土である。

図4は胎土が軟質で細かく、文様等も在地の土器には見当たらず、搬入品と思われる。浅鉢の台付の部分に相当し、中空で「ハ」字状に開く。外面には全面にわたって工字文が施され、幅広の凹み線文を規則的に深く施文するため、浮き出た凸部分が貝符の文様にも似る。

また、凹み部には僅かに朱色が見られる箇所があり、何らかの顔料が塗布された可能性がある。出土地はHB ③ T6 Ⅲe層の出土である。同様な文様を持つ土器が奄美のウフタⅢ遺跡（2002）でも

第12表 搬入土器 出土量

遺跡	層	分類	胎元系		面縄東洞		大洞A底	奄美? 胴	不明 口	不明 胴	合計
			口	胴	口	胴					
HC	V							1	2		3
	貝層Ⅲ群	3			1						1
		4								1	1
		5								1	1
	不明									1	1
HC小計			0	0	1	0		1	4	1	7
HB ③	Ⅲb			1							1
	Ⅲc								1		2
	Ⅲe		1			1					2
HB③小計			1	1	0	1	0	2	0	0	5
HC+HB③ 合計			1	1	1	1	1	6	1	1	12

出土している。本品は九州まで影響を与えた東日本の亀ヶ岡系土器の範疇に相当するが、このような文様は亀ヶ岡系土器の中でも新しく、大洞A式土器の可能性が高い。

図5・6は形式不明の精製された有文土器で、文様構図・胎土・混和材・内面の器面調整等から搬入土器の項に含めた。出土地は前者がHC S15 貝層Ⅲ群5層、後者はHC T15 貝層Ⅲ群4層 出土である。前者は貝層Ⅲ群の下位層出土で、付着物の煤から年代測定を行ったところ1795±26BPの測定値が得られた。同層より大当原貝塚(読谷村)の下層で出土した粘土接合面の隆起したタイプが多数出土しており、同土器と時期などの関連性が窺える。口唇部や文様等若干の違いはあるが、類似資料として名護市の大堂原遺跡(2005・図80)がある。図5は口縁部、図6は胴部片で、前者は口唇部に粘土が貼付され、平らな面を呈する。そのために外面側にやや張り出す形状となり、口縁部から胴部へ直線的に移行する。外面には細い三角凸帯文が2本丁寧に貼付されており、上は横位に圍繞、その下は方形状を思わせる。三角凸帯文を境に上下2段に先端の尖った棒状工具による細沈線文がクロス状に施される。横位の凸帯文で区画された文様帯の胴部にも同様の文様が施される。胎土に石英などの混和材が多量に含まれ、内面には丁寧なナデ或いはミガキが見られる。後者も同様な文様が施されていたと考えられる破片で、横位の三角状凸帯文の上部に前者と同じ細沈線の文様がクロス状に施される。

図7は胎土や器面調整等から搬入土器としたもので、文様は見られず形式名は不明である。内面は剥がれているが、外面には僅かにミガキが残る。口縁部の外反度から大型の壺が想定出来る。出土地はHC F16 ㊦302で、層位は不明である。

図8・9は、器面調整等からここに含めたものである。いずれも口唇部に粘土を貼付し、平らで幅広い面を作る。両側に張り出すために断面形は「T」字状を呈する。胎土はやや在地の土器にも類似するが、器面調整は丁寧である。前者の外面にはヘラ状のナデ痕が明瞭に残り、手触りは滑らかである。ミガキの可能性もある。後者の口唇部には1.2×1.0cmの楕円状の粘土が貼付され、ナデ調整が丁寧である。いずれもHB㊸ Q17で前者はⅢb層、後者はⅢc層出土である。

図10は、胎土や文様の仕方等から搬入土器とした。口唇部に横位の沈線文、外面には三角状凸帯文を圍繞させ、その上に刺突文が施される。形状が平安山原B遺跡(2015)出土の奄美系土器に類似するが、具志原式土器(伊江島)にも似る。HC T16 V層の出土である。

図11は口縁部が内傾し、口径より胴径が大きく、甕形か広口の壺と考えられる。口唇部は粘土貼付により1cmと幅広く、外面側に張り出す。外面には小振りな瘤状突起が貼付される。器形や胎土に火山ガラスが僅かに含まれることからここに含めたが、瘤状突起などは在地の土器の特徴を示し、模倣土器の可能性もある。HC D10 V層の出土である。

## <在地土器>

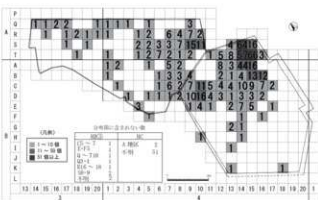
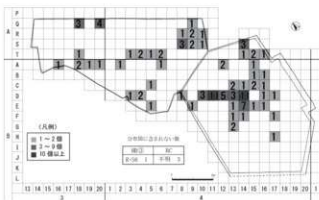
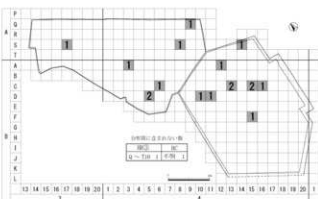
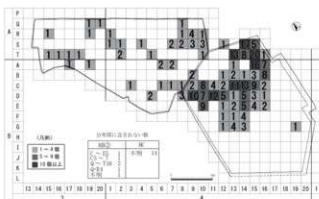
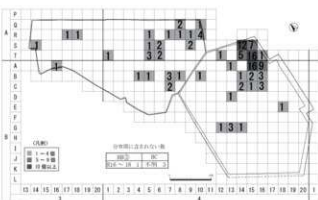
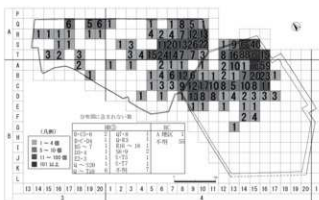
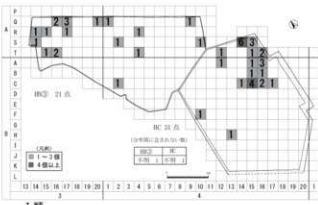
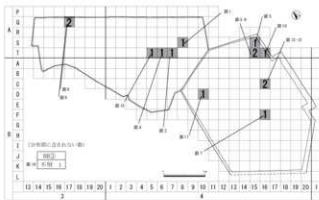
### (1) 貝塚時代前・中期の土器

在地土器の中で貝塚時代前・中の土器が僅か4点得られ、第71図12～15に図示した。図14・15は時期、形式とも不明であるが、胎土等からここに含めたものである。これらの遺物に相当する時期の層が本遺跡では見当たらず、数量的にも僅かであることから、紛れ込みの可能性が高い。

以下、形式が古い順にそれぞれ略述する。

図12は室川下層式土器の胴部である。外面には縦位の連点文が施されているが、摩耗のため不明瞭である。HC C16 V層の出土である。

図13は大山式土器と考えられるものである。外面の肥厚帯に単籠工具による押引文が3条施されている。胎土に石灰質砂粒を含み肥厚帯に文様が施される等、室川貝塚(神国大考古第2号・1978)



第 65 図 土器（口縁部）平面分布

で出土した有文のキャウチバンタ式土器にも類似する。図12と同じ出土地である。

図14・15はいずれも形式不明の頸・胴部で、胎土からここに含めたものである。前者は頸部で、薄く粘土を貼付し肥厚帯を作る。後者は胴部で、外面に円形状の刺突文が施される。2点ともHB③出土で、前者はT5 III c層出土で、後者はII c層の遺構であるSK32からの出土である。

## (2) 貝塚時代後期の土器

貝塚時代後期の土器が多量に出土した。本遺跡の土器は2015年に報告した平安山原B遺跡のIV類土器(大当原式土器)を主体とし、くびれ平底系の土器に相当するV・VII類も2割程得られている。HCは貝層III群、HB③はS6～10、T6～8で大当原式土器の出土量が多く、隣接する平安山原B遺跡のHB④ロも同形式の土器がほぼ同じ出土状況を示す。遺物が多量のため口縁・胴部・底部の出土量を第13・21・22表に示し、各部位別に記述する。

### 1. 口縁部

口縁部はHC1,898点、HB③659点の計2,557点 that 得られ、前区で多く出土する。口縁部以外の主な頸・胴部もここで記述する。第13表の口縁部出土量を見ると、HC・HB③ともII類(大当原式土器)が最も多く、次いでIV類(アカジャンガー式土器)と続く。HCを見ると、II類は貝層III群からの出土が多く、くびれ平底系に相当するIV類やV類(フェンサ下層式土器)は貝層群以外のV層出

第13表 土器(口縁部) 出土量

遺跡	層	分類	遺物	貝塚前・中期	貝塚時代後期										合計					
					I類		II類		III類		IV類		IVorV類			V類		不明		
					有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文		有文	無文			
HC			I			1	7			1	3				1	14	27			
			II			1	2			1						1	5	10		
			IIc	遺構			1	2				1						2	6	
			III			1	3		1	1	3					1	5	15		
			V		1	11	17	207	5	16	63	94	4	5	6	51	11	152	643	
			II群	a					1								1	1	3	
				b					7									1	8	
				c					10	1								2	13	
				d					3								2	2	7	
				e													2	2	2	
				f			1	10					1			1		4	17	
				g				3										1	4	
				h				6					3					4	13	
				i				6	1									6	13	
				V				26				1	5					2	13	47
			III群	1a			1	3		1								1	4	10
				1b			4	13		9	4	3				2	4	31	70	
				2			13	156	1	10	14	8	1			4	11	120	338	
				3			6	37	1	8	6	2				2	11	73		
				4			1	48	1	2	3	2				3	11	71		
5				16	33	260	10	20	8	1			6	40	394					
-				1	5		1	2							6	15				
貝層IV群															3	3				
貝層V群			1	6				1						2	10					
不明			1	20	2	1	8	13	1			8	3	29	86					
HC小計			1	31	79	841	22	69	112	144	6	5	6	67	469	1,898				
HB③			I			1				1					1	1	4			
			IIb						1				1			1	1	4		
			IIc	遺構					8			1	1			1	3	13		
			III			1	5	54	4	1	6	2	1	1		8	10	25	118	
			IIIa					6			1					3	1	1	13	
			IIIb			2		12	1		2	1				1	3	2	24	
			IIIc			1	1	2	59	3	1	2	3	1	1		1	5	22	102
			IIId	遺構				2										1	3	
			IIIe			15	14	145	15	6	11	12		3	3	17	8	58	307	
			IIIe				1	12	1			2				4	1	1	22	
			IV					23				2	3					9	38	
			V													1	1	1	1	
			不明					5				3						2	10	
HB③小計			1	21	22	327	25	8	28	25	3	5	3	36	28	127	659			
HC+HB③合計			2	52	101	1,168	47	77	140	169	9	10	9	103	74	596	2,557			
HC	IIc:SK01.02・クムイ																			
HB③	IIc:SK32 石列1群 石列4群-SL01 III:SK36 IIIc:SD04																			



土が増加する。HB③はⅢd層、Ⅲc層、Ⅲ層からの出土が多く見られるが、遺物はV層由来のものと捉えたい。詳細は層序の項で述べた通りである。

今回、様々な有文土器が得られ、底部の出土状況、有文土器の胎土や文様等を兼ね合わせて分類したところ、IV類以外にII類、III類（両者の中間タイプ）、V類にも有文が見られた。分類可能なものはそれぞれに含め、小破片など判別出来なかったものは形式不明土器の中で扱った。口縁部は伊礼原遺跡（国指定外・2014）、平安山原B遺跡（2015）、本遺跡で復元の出来た土器を参考に分類を行い、以下、順に記述する。

**I類**：破片が小さく形状は不明、胎土はきめ細かく砂質、角閃石や石英を多量に含む、底部は尖底系（浜屋原式土器相当）

**II類**：鉢・甕形主体で大型～小型有り、粘土接合面が隆起（不明瞭なもの有り）、器面調整は雑、底部は尖底系、厚手・薄手有り（大当原式土器相当）

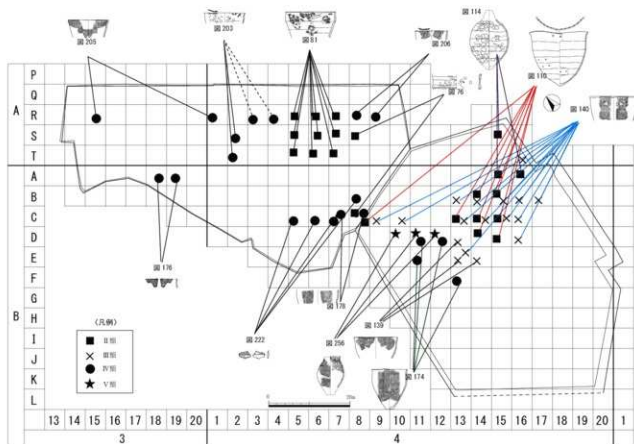
**III類**：鉢・甕形主体で大型～小型有り、粘土接合面がII類に比べて不明瞭、内面にハケ目が見られるもの有り、厚手・薄手有り（II・IV類の中間タイプや一部形式不明土器も含む）

**IV類**：鉢・甕形主体で他に壺有り、有文・無文有り、胎土は精製・赤色粒を含む、底部はくびれ平底、ハケ目痕多い（アカジャンガー式土器相当）

**V類**：胎土は泥質で無文が多い、底部はくびれ平底、小型化する（フェンサ下層式土器相当）

#### I類（浜屋原式土器相当）

HC31点、HB③21点の計52点が得られた。前者は全体の僅か1.6%、後者は3.2%とかなり少ない。第13表の口縁部出土量を見ると、HCでは貝層Ⅲ群5層で16点、V層で11点と多く、HB③では北西側のⅢd層から15点と出土が多い。第65図に示した口縁部平面分布でも同様な出土状況を示す。



第66図 土器接合関係 平面分布

I類を主体とする調査区は平安山原B遺跡の②イ地区で、HB①・HB②ロ地区でも流路の堆積層にI類が僅かに出土することから、HB③出土のI類もHB②イ地区との関係が窺える。HC・HB③出土のI類は殆どが小破片で、復元出来る程の破片は出土していない。図16～37に22点を図示した。鉢・甕形の口縁部は形状からA、Bに分け、壺形はCとした。

A：口縁部が直状するもの（図16～22）

B：口縁部が外反するもの（図23～35）

C：壺形（図37）

Aは口縁部が直状するもので、破片が小さく、胴部以下の形状は不明である。口唇部の形状は平らなものが多く、他には丸や舌状を呈するものも見られる。器面調整を見ると、大半の外面はナデ調整が丁寧で、内面はナデが徹底されずに指頭痕が目立つ。胎土は砂質強で、手触りはざらつく。

Bは口縁部の上端のみが外反し、胴部にかけては直線的な形状を呈する。口縁部以外の特徴はAとほぼ同じである。図30は口径が21.6cmを測り、II類（大当原土器）において第20表に示した口径の大きさからすると、中型②（20.1～25.0cm）に相当する。有孔も見られ、両側から穿たれる。図35は頸部の屈曲が他より強い。

図36はA・Bの形状から外れるもので、口径より胴径が大きい。

Cは図37の1点である。厚手の壺で、口縁部は「ハ」字状に開く。胎土等からI類に含めたが、III類とした有文土器にも類似する。外面には2本1組の浅い沈線文が波状に施されている。

## II類（大当原土器相当）

本遺跡で最も多く、HC920点、HB③349点の計1,269点が得られた。器種を見ると鉢・甕・壺・ミニチュア・皿形が得られている。鉢・甕形が大半を占め、次に壺形である。ミニチュアや皿形は僅か数点である。図125・126のミニチュアは丁寧に製作され、底部や混和材などの特徴からII類に含めた。II類には様々な形状のものが出土することから、特徴的な粘土接合面の隆起を元に口縁部形状などと組み合わせ下記4種に分けた。A～Cは鉢・甕形で、Dは壺形である。皿形やミニチュアは出土数が少ないことから、Dの項で記述する。A・Bは大当原貝塚の下層タイプに相当し、粘土接合面の隆起が明瞭なものはA、やや明瞭なものはBとした。Bに分類したもので粘土接合面がやや不明瞭ではあるが、胎土等からII類に含めたものもある。Cは本町の伊礼原遺跡（国指定外）やナガラ原西貝塚で出土した薄手の土器で、粘土接合面が不明瞭・或いは丁寧にナデ調整のものである。

A：粘土接合面の隆起が明瞭、口縁部は内湾、やや直状、外反・胴部は膨らむ

B：粘土接合面の隆起がやや明瞭、口縁部は内湾、やや直状、外反・胴部は直線的 or やや張る

C：薄手で粘土接合面の隆起が不明瞭、口縁部は外反・胴部はやや膨らむ or 直線的

D：壺形

第65図の口縁部平面分布、第13表の口縁部出土量を見ると、HCは貝層III群のあるグリッドからの出土が多く、層位的には貝層III群においては上位層（1・2層）で少量のくびれ平底系、下位層（4・5層）で多量のII類が出土するなど、時期差が見られた。（3層は間層のために検出遺物から外している）下位層の5層では、同時期の遺物である石器や貝製品も多数出土している。口縁部出土量などを詳細に見ると、HCで得られたII類口縁部920点のうち、V層からは224点、貝層II群は47点、貝層III群は606点と後者が最も多く出土する。貝層

第14表 II類口縁部 出土量

遺跡	層	分類				合計
		A	B	C	不明	
HC	V	76	92	24	32	224
	1	14	2		10	26
	1a	1	2			4
	1b	2	7		8	17
	2	107	31	8	23	169
	3	16	18	4	5	43
	4	23	10	4	12	49
	5	134	67	7	85	293
	-	1	2		2	5
	HC 合計		374	231	47	178

Ⅲ群では上位層（1・2層）で216点、下位層（4・5層）で342点が出土し、後者がやや多い。

また、Ⅱ類で分類したA～C間の出土状況に違いがあるか、第14表に貝層Ⅲ群を中心にV層出土も合わせて示した。Aは貝層Ⅲ群全体で298点の出土と最も多く、下位層（4・5層）では157点も得られ、V層は76点と少ない。Bも貝層Ⅲ群全体では139点が得られたが、上位層・下位層に分けると前者は42点、後者は77点、V層で92点とV層での出土が多くなり、Aの出土状況とやや異なる。Cは全体的に出土数が少なく、貝層Ⅲ群全体では23点、V層は24点の出土で、A・Bに比べて後者での出土が多い。

HB③も第65図の口縁部平面分布、第13表の口縁部出土量で見ると、S6～10、T5～7近辺での出土が多い。層位的にはⅢd層で159点と最も多く、次にⅢc層が63点、Ⅲ層が59点、Ⅲa・Ⅲb層は合わせて18点である。

また、形状や胎土等からⅡ類に分類した有文の口縁部はHCが79点、HB③が22点の計101点で8.0%の割合を占める。形式ごとに文様の施文部位や文様等の違いを見るため、胴部の有文も合わせて第15表に施文部位、第16～19表に部位別の文様をⅡ～V類まで示した。文様は施文部位の多い順に口唇部のみを第16表、口唇部+外面を第19表、外面のみを第17表、外面+内面を第18表に分けて示した。他にも数量的には少ないが、内面のみや口唇部+内面、口唇部+両面等が見られる。

Ⅱ類ではHC・HB③を合わせて口唇部のみが46点、口唇部+外面は7点、外面のみが96点、外面+内面は11点で、外面のみに施文するものが最も多い。口唇部の文様は指圧文が23点と多く、次に刻目文、鞍状凸帯文が9点と続く。口唇部+外面では口唇部に刺突文、外面には沈線文や凸帯文など様々な組み合わせが見られた。外面の文様では不規則な沈線文が最も多く、他に凸帯文や有孔等が見られる（有孔は文様ではないが、有文として扱った）。図110の様に複数の穿孔が並列して施されて

第15表 施文部位別 出土量

遺跡	施文部位	分類					合計
		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	V	不明	
HC	口唇のみ	42	5	46	4	13	110
	口唇+外面	7	4	19	1	2	33
	口唇+内面		2				2
	口唇+両面			2			2
	外面のみ	52	14	78	2	96	242
	内面のみ		3				3
	外面+内面	1		1			2
	HC小計	102	28	146	7	111	394
HB③	口唇のみ	4	7	13	2	3	29
	外面のみ	44	13	26	3	56	142
	内面のみ	1		2		2	5
	外面+内面	10	6			5	21
	HB③小計	59	26	41	5	66	197
	HC+HB③合計	161	54	187	12	177	691

第16表 文様別 (口唇のみ) 出土量

遺跡	口唇文様	分類					合計
		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	V	不明	
HC	指圧文	22		9		3	34
	鞍状凸帯文	6	1	2		7	16
	刻目文	9	2	13	2		26
	刺突文	3	1	21	2	3	30
	沈線文	2	1	1			4
	HC小計	42	5	46	4	13	110
	HB③	指圧文	1	4		1	
鞍状凸帯文		3	1		1		5
刻目文			2	10	1		13
刺突文				3		1	4
押引文						1	1
HB③小計		4	7	13	2	3	29
HC+HB③合計	46	12	59	6	16	139	

第17表 文様別 (外面のみ) 出土量

遺跡	外面文様	分類					合計
		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	V	不明	
HC	円形文		1	1			2
	押引き		1	2			3
	刺突文			2		2	4
	沈線文	19	4	24	1	44	92
	沈線文・刺突文			2		1	3
	凸帯文・沈線文	1	1	6		3	11
	凸帯文	19	5	27		25	76
	瘤状突起					3	3
	肥厚帯		1	11		9	21
	肥厚帯・沈線文					1	1
	肥厚帯・凸帯文					1	1
	有孔	13	1	3		8	25
	HC小計	52	14	78	2	96	242
HB③	刻目文		2				2
	瘤状突起					1	1
	刺突文			1			1
	沈線文・有孔					1	1
	沈線文	19	8	19	1	35	82
	沈線文・刺突文		1			1	2
	凸帯文	3	1	2	2	8	16
	沈線文・凸帯文			1		1	2
	肥厚帯			1		1	2
	肥厚帯・沈線文			1		1	2
	肥厚帯・押引文			1			1
	有孔	21	1	1		5	27
	有孔・凸帯文	1				2	3
HB③小計	44	13	26	3	56	142	
HC+HB③合計	96	27	104	5	152	384	

いるものも見られる。外面+内面は両面とも不規則な沈線文を施すものが殆どである。

その他、本遺跡では分類したA～Cにおいて小～大型まで様々なサイズが見られ、口径が計測出来た資料を第20表に示した。参考までにⅢ～Ⅴ類も一緒に載せている。Ⅱ類の口径が計測出来た遺物は34点で、最も多いサイズは中型と大型がそれぞれ12点ずつ得られ、小型も10点ある。中でも大型①が9点と最も多く、次に小型②が7点、中型の①・②が6点ずつある。分類

第18表 文様別(外面+内面)出土量

遺跡	外面+内面文様	分類				合計
		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	不明	
HC	沈線文・沈線文	1		1		2
	HC 小計	1	0	1	0	2
HB③	沈線文・沈線文	10	6	4	4	20
	凸帯文・沈線文・沈線文				1	1
	HB③ 小計	10	6	0	5	21
HC+HB③ 合計		11	6	1	5	23

第19表 文様別(口唇+外面)出土量

遺跡	口唇文様	外面・文様		有孔					沈線				凸帯文			凸帯文・沈線文		肥厚帯			合計
		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	不明	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ					
HC	指圧文																1			1	
	鞍状凸帯文		1																	1	
	刻目文		1	1	13	1	1		1										2	20	
	刻目文・鞍状凸帯文				1															1	
	刺突文	2	1	2				1	1	1	1			1						1	10
	HC 合計	2	3	1	16	1	1	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	2	1	33	

別に見ると、A・Bには小型土器も得られ、口径は計測出来なかったものの、形状から小型土器と思われるものも数点ある。A・Bは小型①～大型①まで見られ、Bには大型②も2点得られている。大型②の図110は口径が36.1cmと、本遺跡のⅡ類で最大の大きさを測る。Cは出土数が少ないせいか、中型が2点、大型が1点の計3点に留まった。A・Bで見られた小型はCにおいては見られない。以下、分類別に記述する。

Aは図38～76に39点を図示した。Ⅱ類の中では最も多く得られ、特にHCの貝層Ⅲ群5層134点、2層から107点と多量に出土している。粘土接合面の隆起が目立ち、器厚は厚手・薄手の両方が有り、口唇部は舌状を呈するものが多い。粘土帯はサイズに関係なく3.0～4.0cm幅が多く見られた。口縁部の形状により7～9に分けた。

7: 口縁部が内湾し胴部は張るもの(図38～60)

イ: 口縁部が直立し胴部は直線的なもの(図61～71)

ウ: 口縁部の上端が外反し胴部は直線的なもの(図72～76)

A7は口縁部が内湾するもので、図38～60に図示した。胴部が残るものを見ると、殆どが丸みを呈する形状をなす。特徴的なものについてみると、図38は小型で、外面に横位の凸帯文とその下に「U」字状の凸帯文が貼付される。貼付文は奄美のスセン當式土器にも類似する。貼付文のために正確な胴径は計測出来ないが、胴部の湾曲からすると小型土器と思われる。図39～42も小型の土器で、本遺跡では割と多い。図45は口縁部直下に幅4.0cm程の粘土接合面が明瞭に残り、薄い肥厚帯にも見える。外面は全面的に暗褐色を呈し、火を受けた痕跡であろうか。図48はHB③Ⅲd層出土で、口径が僅か7.0cmと小さく、小型土器、或いはミニチュア土器が想定される。図49・50は外面に雑な外耳と思われる凸帯文が半分程残る。前者は口唇部に沿って貼付され、後者も上部が破損しているが、同様な貼付と思われる。

第20表 口径サイズ別(Ⅱ～Ⅴ類)出土量

サイズ	分類	Ⅱ							Ⅲ				Ⅳ			合計
		A	B	C	A	B	C	D	E	G	不明	A	C	A	B	
小	①10cm以下	2	1						1	1		2		1	1	3
	②10～15cm	4	3													15
中	①15.1～20cm	5	1	1	1	1	2	3			1	3	2	1	20	
	②20.1～25cm	2	3	1		1	1	1			2	1			12	
大	①25.1～30cm	4	5	1	1	1	3	1			6				21	
	②30.1cm以上		2	1											3	
合計		17	14	3	2	1	5	5	4	1	1	13	1	3	72	
分類合計		34							19				14			5

52は粘土接合部の隆起が直線状に残り、他に比べて明瞭である。有文は2点で、図57は横位に1.5cm弱の薄い凸帯文を2条貼付し、その上に縦位の凸帯文(幅1.3～2.0cm)が2条貼付され、凸帯文の最

後は中央部を窪ませた円形状を呈する。本資料もスセン當式土器の貼付文に類似するが、形状や胎土からⅡ類に分類した。図60は横位の細沈線文が施される。

A7は図61～71に図示した。A7に比べて出土量が少なく、口径が計測出来たものは図64・68の2点である。有文は図61・69～71の4点で、図61は外面にやや横位の沈線文が浅目に施され、図69・70は両面に曲沈線文、図71は外面にやや幅広い鋸歯状沈線文が施される。図68は粘土接合面の隆起がより明瞭で屈曲部を作る。

A7は図72～76に図示した。粘土接合面の隆起が7の内湾するものに比べて明瞭である。無文が多い。有文は図74の1点で、口唇部に鞍状凸帯文を貼付する。図75・76は胴部で不明であるが、粘土接合面の隆起が明瞭なことからAに含めた。

Bは図77～100の24点を図示した。BはAに比べて全体的に有文が目立つ。Bも形状により以下の様に分けた。

ア：口縁部は直状を呈し胴部が直線的なもの(図77～82)

イ：口縁部はやや直状orやや内湾気味で胴部は張るもの(図83～92)

ウ：口縁部は外反し胴部が張るもの(図93～100)

B7は図77～82の6点を図示した。図77・78は小型土器で、口径は2点とも15.0cm以下である。前者は口唇部に刻目文、外面に不規則な沈線文が施される。図79～82の4点は口縁部が直状を呈し、胴部は屈曲して直線的な形状を呈する。図79の口径は26.0cm、図80・81は30.0cm以上と大きい。図82は22.6cmと中型サイズである。図79・80の2点は有文で、前者は口唇部に刺突文、外面に「O」字状の凸帯文を貼付する。後者は外面に幅太の凸帯文を2条圍繞しており、粘土接合面が余り目立たないが、形状や胎土からⅡ類としたものである。

B7は図83～92の10点を図示した。図83～86・90は凸帯文の施された口縁部である。図83・84は鞍状凸帯文、図85は外面に「U」字状と逆「U」字状の凸帯文が添うように貼付され、図86は口唇部が破損し、外面に「O」字状の凸帯文が貼付される。図90は外面上部に楕円状の薄い凸帯文が貼付される。図88も有文で、外面に長めの鋸歯状沈線文と外→内面に穿たれた孔が見られる。その他は無文の口縁部である。図89～92はいずれも口径が25.0～30.0cm間に収まり、大型のサイズである。

B7は図93～100の8点を図示した。図93～96は無文で、両面とも指頭痕が目立つものが多い。図94は胎土が精製されてきめ細かく、粘土接合面の隆起がやや明瞭なことや形状等からⅡ類に含めた。図96の口唇部は破損しているが、形状からここに含めた。図97～100は有文で、いずれも両面に不規則な沈線文が施される。

Cは図101～113の13点を図示した。いずれも粘土接合面の隆起がやや不明瞭、器厚もほぼ均一であるが、形状、調整の仕方や胎土等からⅡ類の範疇に含めた。図101・110は口→底部の破片が得られ、接合作業により復元が出来た資料である。2点とも口縁部は外反し、胴部はやや張りながら底部へと続く。後者の口縁部の上端は、前者に比べて外反度が強い。底部は両者とも尖底で、後者はやや丸みがある。前者はHC 具層Ⅲ群4層の出土で、上面観は残存部からやや楕円状(19.6×22.8cm)が考えられる。口径に比べて器高は17.4cmと低い。後者は口径が36.1cm、器高32.6cmと大型の土器で、全体的に歪みが見られる。口唇部に刺突文が施され、器面には同間隔の有孔が2孔1組で外面→内面へ並列に穿たれている。孔の位置も口縁部、胴部、底部近くなど様々である。本資料はV層の出土である。他に、口唇部のみに文様が施されるものは図104～108で、図104は斜位の沈線文(約2cm弱)、図105・106は刺突文で、前者は二又状工具を使用している。図107は刻目文、

図108は指圧文が施される。図109は口唇部に指圧文、外面には縦+横位の規則的な沈線文と口唇部に沿って0.8~1.0cm幅の粘土が薄く貼付される。図111は外面に横位の凸帯文が貼付される。図113は無文の胴部で、粘土接合面が不明瞭なことからCとした。器厚はほぼ均一となる。

Dは壺形であるが、僅かに得られた皿形・ミニチュアも壺形の次に記述する。壺形は図114~123の10点、皿形は図124の1点、ミニチュアは図125・126の2点を図示した。壺形は図114・119やその他の口縁部の形状から、後述するIV類の壺に比べると大きい。壺形も口縁部の形状により以下のように分けた。

ア: 口縁部が内湾するもの

イ: 口縁部が直状 or 外反するもの

Dアは図114~117の4点を図示した。いずれも無文である。図114の胴部と図115の口縁部は、出土地や頸径、胎土や器厚などが同じであることから同一個体と考え、接合は出来なかったが図上復元を試みた。底部も口縁部や胴部と同様な遺物を元に図上復元を行った。口縁部は窄まりながら肩部で張り出し、胴部は丸みをもって底部へ移行する。図115の上面形からすると、やや楕円状の口縁部が想定出来る。図116は口縁部のみ破片で、頸部以下の形状は不明である。図117も同様な形状を呈するが、前者の窄まる形状とは異なり、口径が大きくなるものと考えられる。胎土も前者の砂質とは違って堅致で砂泥質である。外面はナデ調整が丁寧、内面は指ナデ痕が雑に残る。器厚が厚く、器面調整等からI類の可能性も考えられる。

Dイは図118~123の6点を図示した。図118は口縁部がやや直状を呈し、そのまま緩やかに胴部へ移行する。図119は口~胴部まで得られ、ナデ肩を呈しながら胴部で屈曲し、そのまま直線的に移行する。粘土接合面の隆起が明瞭で、指頭痕などの調整痕により器面が少しゴツゴツし、左右はやや非対称である。図120~123は頸部で、図120は外面に凸帯文を1条圍繞させる。形状からBとした。図121・122は無文で、図123は外面に不規則な沈線文が施される。

次に皿形であるが、1点の出土で図124に図示した。HB③ III d層出土で、胎土はII類と同じである。口唇部は舌状を呈し、剥がれた痕跡が無いことや底径の大きさ等から皿形として扱った。口径は10.2cm、底径は10.0cm、器高は2.5cmである。底厚も1.2cmと厚く、安定感があり、直に立ち上がる。煤などの付着は見られず、容量などから食膳皿として利用されたものと考えられる。皿形土器の出土例として、若干形状は異なるがシマシーヤー・マ貝塚(1957)が挙げられる。

ミニチュア土器は2点の出土で、図125・126に図示した。いずれも器面調整が丁寧である。図125は口縁部が破損し、底部は尖底である。図126は底部がやや不安定で丸底的な尖底を呈し、口縁部はやや窄まる。口縁部と頸部以下は接合が出来なかったが、同一個体と考えられることから、図上復元を行った。

### Ⅲ類(Ⅱ・Ⅳ類の中間タイプ・形式不明土器)

Ⅱ・Ⅳ類の中間要素を持つものや形式不明土器をⅢ類でまとめ、中にはV類に類似する資料も見られる。全体的に口唇部は丸みを呈するものが多く、舌状や平らなものもある。Ⅲ類はHCで91点、HB③で33点の計124点が得られた。第65図の平面分布を見ると、HC・HB③ともⅡ類と同様の出土状況を示す。中でも貝層Ⅲ群では64点が得られ、HCのⅢ類出土中70.3%の割合を占める。下位層Ⅲ群を層位的に見ると、上位層(1・2層)は21点、下位層(4・5層)は33点と下位層出土が多い。Ⅱ類も下位層出土が多量であったことから、Ⅱ類の可能性が高いと思われる。V層は21点の出土で、貝層Ⅲ群の上位層と同じ出土量である。Ⅲ類にも有文土器が得られ、HC・HB③とも外面のみに文様を施すものが合わせて27点と最も多い。他には口唇部のみ等がある。

HB③を層位的に見ると、Ⅲd層出土が21点と最も多く、次に多く得られたのはⅢ層が5点、Ⅲc層が4点である。平面分布や層位を関連づけると、Ⅲ類はⅡ類の範疇に含まれるものと、Ⅳ類の範疇に含まれるもの、或いはその中間タイプに細分可能であるが、今回は膨大な資料に追われ、Ⅲ類としてまとめている。以下、様々な形状や胎土等から下記のように分けて記述する。

- A：厚手で口縁部の外反が強く、胴部の張りが強いもの
- B：口縁部は外反し、砂質で石英を多量に含むもの
- C：口縁部はやや外反orやや直状で胴部の張りが弱いもの（中にはハケ目痕が明瞭）
- D：口縁部は外反し、頸部で僅かに屈曲部をつくるもの
- E：口縁部は外反し、胴部が張るもの
- F：口縁部は外反し、胴部が直線的なもの
- G：口縁部が直線的に外反するもの

Aは図127～132の6点を図示した。胎土や混和材はⅡ類に類似する。図127は口縁部、胴部が同一個体と考えられるもので、接合は出来なかったが図上復元を試みたものである。図127の口縁部は外反が強く、頸部はくびれて胴部が張り出す。胴部の中央部から底部に向かって窄まることから、器高は低いと想定される。口縁の内面には、竹管状或いは巻き貝の螺旋部による施文工を用いた円形状の刺突文と、それを区切るかのように縦位の短沈線文が2条施される。底部は不明だが、出土地が同じで胎土等も類似することから、図396のくびれ平底が想定される。底径が9.0cmと大きく、Ⅳ類やⅤ類のくびれ平底とは胎土等が異なる。いずれもS14 貝層Ⅲ群5層の出土である。図128は口縁部が外反し、図127と同じ施文工を使用して円形状（径4.5mm）の刺突文が施される。形状は図127の口縁部と同じであるが、文様構成や出土地がⅤ層であるなど、若干の違いがある。図129は外反の口縁部で、破片が小さいせいか、内面のみに弧状の沈線文が施される。図130は頸胴部で、外面に弧状の沈線文を施している。図131は胴部で、1条の凸帯文を横位に囲繞させ、その上に不規則な沈線文を施す。図132は砂質で上記の遺物と胎土が異なるが、器厚等からここで扱った。外面には弧状の細沈線と棒状工具による刺突文が施される。

Bは図133～138の6点を図示した。いずれも砂質で混和材に石英が多量に含まれるもので、図133～135は類似の胎土を呈する。文様を見ると、図134は口唇部に斜位の刻目文、内面に幅広の沈線文が施される。図133・135は胴部で、前者は外面に横位の幅広沈線文を1条施し、その上に弧状の同様な文様を施す。伊礼原D遺跡（2013）で報告した図44・48に胎土や文様が類似し、縄文晩期系かと考えられたが、形状や層位等から貝塚時代後期に含めたい資料である。後者は外面に規格的な細沈線文が斜位に施される。図137は外面に横位の沈線文、その上に「V」字状の沈線文、内面には緩やかに曲がった沈線文が施される。図138は胎土に粗い石英を含み、外面に単篋工具による押引文が施される。

Cは図139～143の5点を図示し、いずれもHCの出土である。外面や内面に明瞭なハケ目痕やナデ調整痕が見られ、形状や胎土はⅡ類に類似する。図139は内面のハケ目が明瞭で、口径は27.0cmを測り、大型①のサイズである。D13・E14のⅤ層出土である。図140・141の内面には粗めのナデ調整が見られる。前者の口径は29.6cm、後者は24.2cmとそれぞれ大型①、中型②のサイズである。前者はC14・15のⅤ層、後者は貝層Ⅲ群3層出土である。図142はⅡ類に近いもので、口唇部に指圧文が施され、両面とも指頭痕が残る。貝層Ⅲ群5層出土である。図143は口～底近くまで復元が出来た資料で、外面に縦位、内面には横位のハケ目が明瞭に残る。口径は16.2cmと中型①のサイズであるが、やや小振りである。器面調整や胎土等はⅤ類にも類似するが、形状はややⅡ類に近く、

底部に尖底が想定出来ることから中間タイプとしてⅢ類に含めた。HC 貝層Ⅲ群 2層出土である。

Dは図144～148の5点を図示した。5点とも口縁部の直下の粘土帯がナデ調整によって僅かに屈曲部を持つ。図144・146・148はHC貝層Ⅲ群5層からの出土で、角閃石を含むことから古手の可能性も考えられるが、口唇部が平らに整えられⅣ類の要素も持つ。図146は片口を持つもので、Ⅳ類に多い形状であるが、胎土に角閃石を多量に含むことからⅢ類に含めた。

Eは図149～153の5点を図示した。図149・152はHC貝層Ⅲ群5層出土で、前者は外面に逆「V」字状の凸帯文を貼付する。凸帯文上は無文で、口径は18.0cmと中型①のサイズである。器面は丁寧なナデ調整を行い、粘土接合面は不明瞭である。図151はHB③Ⅲ層出土で、外面には刻目文が横位に施される。

Fは図154～164の11点を図示した。図154～158の5点は無文で、特徴的なものについて見ると、図155は器厚が1.0cmと厚手で、HC貝層Ⅲ群5層出土である。図156は外反が弱く、器厚が0.6cmと薄手で貝層Ⅲ群2層出土である。図159～164の6点は有文で、口唇部や外面に文様が施される。図159は、外面に弧状の沈線文と竹管状の工具或いは巻貝の螺塔部を使用したと思われる径4mmの円形状の文様が縦位に2個施される。内面にはハケ目痕が見られる。図160は外面に逆「U」字状の凸帯文、図161は外面に刺突文を施した凸帯文が「0」字状に貼付され、浅い幅太の沈線文が規則的に施され、口唇部にも同様の施文具を用いた刺突文が見られる。図162は口唇部に細い刻目文が施され、外面には幅約5cmの薄い肥厚帯が見られる。図163は口唇部に不揃いの刻目文が施され、やや刺突文にも似る。図164は鞍状凸帯文が貼付され、内面には図161の外面に施された文様と類似の規則的な沈線文が見られる。図159はHB③出土、他の5点はHC出土である。図163はV層、それ以外は貝層Ⅲ群より得られ、図160・164は5層、図161は4層、図162は3層である。図160～164は本遺跡のⅣ類の文様に類似するが、胎土がややⅡ類のCに近く、いずれの要素も持ち合わせていることから、今回はⅢ類とした。

Gは図165～172の8点を図示した。図165は口唇部が舌状を呈しⅡ類にも近いが、小破片で胎土等がはつきりしないことからⅢ類に含めた。外面には単籠工具により方形の刺突文が施される。図166・167の2点は外面に中央部が窪んだ円形状の凸帯文が貼付される。口唇部が舌状を呈することからⅡ類の可能性もある。後者はHC貝層Ⅲ群2層の出土である。図168は両面に条痕が見られ、胎土からやや古手の感を受ける。HC貝層Ⅲ群5層出土である。図169はHC貝層Ⅲ群5層出土で、口径が14.4cmと小型の土器である。本資料は粘土積み痕が不明瞭で、Ⅱ類のCにやや近い。図170は胎土に粗い石英が多量に含まれ、両面から穿孔した有孔も見られる。図171は両面に文様が施され、外面には縦位、内面には斜位の沈線文が見られる。胎土はややⅣ類に近い。図172は内面に草木の莖らしきものが胎土に見られる。粘土の中に紛れ込んでいたのだろうか。

その他、図173はA～Gのいずれも分類出来ないものである。口縁部はやや波状を呈し、僅かに口径より胴径が大きい。胎土は堅致で、丁寧な器面調整が見られ、粘土の接合面は不明瞭である。HC貝層Ⅲ群5層出土である。

#### Ⅳ類 (アカジャンガー式土器相当)

HCは256点、HB③は53点で計309点が得られた。両地区を合わせると12.1%の割合を占め、Ⅱ類に次いで多い。第65図の口縁部平面分布を見ると、HCではほぼⅡ類と同様な分布を示し、出土数が割合多いが、HB③では遺跡全体から散見され、出土数も少ない。

層位的に見ると、HCではV層が157点、貝層Ⅲ群は59点と前者での出土が多くなり、Ⅱ類と出土状況が逆になる。貝層Ⅲ群でも上位層(1・2層)、下位層(4・5層)に分けて見ると、前者は35点、



後者は14点と上位層での出土がやや多く、Ⅱ類と異なる。

HB③ではⅢd層から23点と最も多く、次にⅢ層から8点、Ⅲc層・Ⅳ層がそれぞれ5点と続く。同地区ではⅡ類以外は同様な出土状況である。

Ⅳ類は有文の比率がⅡ類に比べて高く、HCが112点、HB③が28点と計140点が得られ、45.3%を占める。無文もHC144点、HB③25点と計169点が出土し、54.7%と半数以上を占め、有文より無文が若干多い。

第15表に示した有文土器の施文部位や、第16～19表に示した文様の種類から見ると、Ⅱ類同様HC出土に有文土器が多く得られた。施文部位はHB③も合わせて口唇部のみが59点、口唇部+外面は20点、外面のみが105点と後者が最も多い。口唇部のみは刻目文が23点、刺突文が24点と両者の文様が主体となる。その他、Ⅱ類で見られた指圧文も見られる。口唇部+外面は口唇部に刻目文、外面に沈線文を施すものが大半である。外面のみでは沈線文が主流で、Ⅱ類の不規則な沈線文と異なり鋸歯状や縦・横など規則的に施文されるものが多い。沈線文以外の文様もあり、Ⅱ類より文様が多様化する傾向が見られた。

Ⅳ類も第20表から口径の大きさを見ると、Ⅱ類と同じく小②～大①まであり、中でも大①のサイズが6点と多く見られた。Ⅱ～Ⅳ類まではほぼ同じサイズを要している。

その他、形状や胎土等においてⅡ・Ⅳ類の中間タイプはⅢ類、いずれにも分類出来ない有文土器は不明土器に分類した。

また、Ⅳ類は底部がくびれ平底になるものと考え、第70図のくびれ平底の平面分布を見ると、HCは貝層Ⅲ群のあるS14を中心とするその周辺とC14・D11を中心とするその周辺で多く、後者では第65図の口縁部平面分布で示したようにⅣ・Ⅴ類がほぼ重なり、貝層Ⅲ群のあるグリッドではⅣ類の口縁部が多く見られ、Ⅱ類とも重なることから、Ⅳ類がやや優勢と思われる。

また、口縁部の図182の胎土と類似する底部に、丸底的尖底の図269がある。伊礼原D遺跡(2013)で報告した第22図39の例からすると、Ⅳ類は底部の一部が丸底的尖底となり、本遺跡で出土した同資料も口縁部がD14、底部がE14と隣同士のグリッドで、共にⅤ層の出土であることから、同一個体の可能性が考えられる。層位的に見ると、S14周辺ではほぼ貝層Ⅲ群の上位層より出土し、他ではⅤ層の出土が多い。貝層Ⅲ群出土の口縁部を層位別に示した第64図から、上位層でⅣ類、下位層でⅡ類の出土が多く見られる。HB③は遺跡全体から得られ、やや目立つのはS9である。層位的にはⅢd層出土が多い。以下、全形が窺えるものが少なく、口縁部の形状を中心に下記のようにA～Dに分けた。A～Cは鉢・甕形で、Dは壺形である。

- A: 口縁部が外反するもの
- B: 口縁部が直状のもの
- C: A・Bより外れるもの
- D: 壺形

Aは口縁部が外反するもので、様々な形状が見られることから下記のようにA～Iに細分した。

- A7: 頸部が僅かにくびれて胴部は張り、底部にかけて直線的な形状
- I: 頸部がくびれて胴部の張り出しがやや強い形状
- 7: 逆「ハ」字状外反で胴部まで直線的な形状

A7は図174～179の6点を図示した。図174は口～底部まで破片が得られ、復元を試みた。無文で口縁部の外反は弱く、頸部が僅かにくびれながら胴の上部で一端屈曲し、底部へ直線的に移行する。底部はくびれ平底であるが、くびれは弱く、底径は5.8cmを測る。口径は21.9cm、器高は24.4

cmと少しスリムである。器面にはハケ目痕が見られ、外面は縦位、内面は横位に施される。HC D11+E11 V層の出土である。胎土は砂質で、赤色粒が顕著に見られる。図175・179の2点は口縁部に2個の角状突起を持つ。図176は現存で1個の角状突起を持つ。いずれも図174と同じ胎土である。図177の口縁部と図178の胴部は出土・胎土・器面調整等が類似することから、同一個体の可能性が考えられる。

A1は、胴部まで得られた図182を参考にした。頸部のくびれ、胴部の張りが7よりやや強く、全体的に胴部が丸みを呈し、無文に比べて有文の比率が高い。図180～201の22点を図示した。

口唇部のみに文様を施すものは図181・192・195の3点で、前者は刻目文、後者の2点は刺突文が施される。図190も口唇部に刺突文が施され、外面には1.2～1.9 cm幅の薄い肥厚帯が見られる。HC 貝層Ⅲ群5層出土である。

口唇部及び外面に文様を施すものは図185・187・188・194・196・199の6点で、このうち口唇部に刻目文、外面には沈線文が施されるものは図185・196・199の3点である。図194・199の2点は器厚が薄く、小型の土器で、前者は口径が11.0 cm、後者は12.4 cmと計測が出来た。口唇部に刺突文、外面には沈線文が施されるものは図194で、外面に凸帯文と沈線文の組み合わせは図187・188で、両方とも刺突文は先端が二叉状になった施文具を使用している。

外面のみに文様を施すものは図182～184・186・189・191の6点である。図182・183は刺突文の施された逆「V」字状の凸帯文、図184は竹管状工具による円形文、図186・189は沈線文が施され、前者は縦位の沈線文間に弧状の刺突文、後者は弧状の沈線文が施される。図191はあまり見られない文様で、外面に頸部と胴部を区別するかのように楕円状のやや大きな指圧文が横位に連続して施され、有孔も見られる。文様が見られる部分は薄く粘土を貼付し、その上に文様を施しているために他に比べて頸部のくびれが強い。今回は形状・胎土等からIV類に含めたが、今後の資料追加を待ちたい。図197は口縁上部に薄い凸帯文が貼付されるが、半分は破損している。外反が他に比べて強く、頸部は外面にはケズリ様の調整痕が見られる。

無文は図193の1点で、丁寧なナデ調整が行われている。

図200・201の2点は頸部で、形状からここに含めた。前者は外面に単籠工具による刺突文、後者は外面に弧状の沈線文と三角状の凸帯文が貼付される。

A7は図202～210の9点を図示した。口唇部のみに文様を施すものは図202・203・206の3点で、いずれも刻目文である。口唇部、外面に文様が施されているものは図208・209の2点で、図208は口唇部に刺突文、外面に弧状の沈線文、図209は口唇部に刻目文、外面に鋸歯状沈線文を施している。図210は口唇部に刺突文を施し、鞍状凸帯文が貼付される。凸帯文の上にも刺突文が施される。外面のみに文様を施すものは図207の1点で、浅目の沈線文が不規則に施される。図204は無文で、口縁部直下には粘土を折り曲げ、約1.8 cm幅の薄い肥厚帯を作る。

Bは図211～215の5点を図示した。大半が小破片で、口縁部は直状を呈する。図211は口唇部に刻目文、外面の凸帯文上とその貼付部分に刺突文が施される。図212は口唇部に刺突文、外面にも刺突文を施した凸帯文を貼付する。図213～215は無文の逆「U」字状凸帯文を外面に貼付し、後者の図215はその下に約1 cm幅の凸帯文が貼付される。

図216～222の7点はA・Bいずれかの胴部片と考えられるもので、いずれも外面に文様が施される。図216は刻目文の施された細い凸帯文を方形に貼付し、図217は刺突文の施された縦位の凸帯文、図218は単籠工具による横位・斜位の押引文、図219は横位・弧状の沈線文、図220・221は弧状の沈線文、図222は外面に横位の凸帯文とその下に5 mm幅の太沈線文が施される。

Cは上記のA・Bに当てはまらないもので、図223～230に図示した。図223～225・229は直状で、図226～228は口縁部の上部が湾曲する。図230は内湾の形状を呈する。本資料は口縁から胴部にかけてそのまま直線的に移行する。文様を見ると、図223～229の7点是有文である。両面に文様が施されているものは図223・228の2点で、いずれも曲沈線文が施される。前者の口唇部には横位の沈線文も見られる。外面に文様が施されるものは図224～227・229で、図224は口唇部に粘土が貼付され、口唇部が内面側に張り出す。文様は外面に縦・横位の規則的な沈線文が施されている。図225は外面に弧状の沈線文、図226・227・229は外面に規則的な細沈線文が施され、前二者はやや深く、後者は浅目に施される。図227の外面には縦位の凸帯文が貼付され、その上は無文である。

図230にはハケ目が見られ、外面は縦位、内面には横位に施される。今回、全体的な形状は異なるが、胎土や調整の仕方等からIV類としたが、今後の課題である。

DはIV類の壺をまとめたもので、図231～243の13点を図示した。形状により、下記のように細分して記述する。

ア：口縁部が外反するもの

イ：口縁部が直状のもの

ウ：口縁部がやや内湾するもの

D7は図231～235の5点を図示した。図231は長頸で無文の壺である。外面は丁寧なナデ調整を行っている。図232～234は短頸の壺で、前二者是有文で、後者は無文である。前二者の外面に施された刺突文は類似するが、図232は先端が細めの単筒工具、図233は棒状工具によるものである。前者の外面には刺突文の他に規則的な沈線文も施される。図235の口縁部は破損するが、頸部の張り具合からD7に含めた。外面に規格的な浅目の沈線文が施される。

D1は図236～239の4点を図示した。図236は口唇部に刺突文（二叉状工具による）、外面に弧状の沈線文が施される。図237は無文で肩部が張り出す。図238・239は頸部で、いずれも外面に凸帯文が貼付される。前者は縦・横位に無文の凸帯文、後者は刺突文の施された凸帯文が横位に2条貼付される。

D7は図240～243の4点を図示した。いずれも凸帯文を貼付し、図241・243の凸帯文上は無文である。有文の凸帯文は2点で、図240は刻目文を施した凸帯文を横位に圍繞させ、その上下に沈線文を浅く施している。図242は刺突文を施した凸帯文をほぼ直角に曲げて貼付し、その周囲にはラフな細沈線文を施している。

## V類（フェンサ下層式土器相当）

図244～256に13点を図示した。出土数が少なく、HC73点、HB③39点で、計112点である。地区別に見てもHCでは僅か3.8%、HB③も5.9%の割合で、全体的に出土量が少ない。第65図に示した平面分布を見ると、HCでは貝層Ⅲ群のあるグリッドでの出土は減り、貝層Ⅱ群辺りのグリッドで多く出土するなど、同じくびれ平底を要するIV類とは若干の違いが見られる。HB③は耕作土層故か、他の土器とほぼ同じ出土状況を示す。層的に見ると、HCの貝層Ⅲ群では上位層（1・2層）で6点が得られたが、下位層（4・5層）では出土せず、同じくびれ平底を持つIV類とは出土状況が異なり、若干の時期差があるものと思われる。

底部では貝層Ⅲ群5層から4点のくびれ平底が出土しているが、いずれもV類には属さない。1点は図127（Ⅲ類）と類似し、図示した図355はIV類、報告外の2点も胎土等からⅢ・IV類の底部の可能性が考えられる。

また、第20表からサイズを見ると、V類は小型②・中型①の小振りな土器が目立つ。V類にも

有文土器が見られるが、II・IV類に比べるとかなり少なく、無文化が進む。第15表を見ると、口唇部のみが多く、両地区合わせて6点の出土である。

V類は鉢・甕形と壺形が得られ、前者は口縁部の形状によってA～C、後者はDとした。

A: 口縁部が外反するもの

B: 口縁部が直状するもの

C: 口縁部が内湾するもの

D: 壺形

Aは図244～248の5点を図示した。図244～246は無文で胴部が余り張らない。図247の口唇部に刻目文が施されている。いずれもハケ目が明瞭で、図248の外面には7本1組のハケ目数が明瞭

第21表 土器(胴部) 出土量

遺跡 層	分類	遺構	貝塚		貝塚時代後期										合計				
			前・中期	I類	II類		III類		IV類		IVor V類	V類		不明					
					有文	無文	有文	無文	有文	無文		有文	無文	有文		無文	有文	無文	
HC	I			5		129			7		1	1		8	1	46	198		
		II		2		75			3		2						46	128	
		IIc	遺構			45									7		26	78	
		III		1		64			3						1		22	91	
		IV				1	2											3	
	V		1	26	5	2,980			395	18	300	5	1	273	17	826	4,847		
		貝塚II群	a				7								1		13	21	
			b				64										11	75	
			c				145										9	154	
			d				41						10			8	38	97	
			e				11										16	27	
			f				137					3					52	192	
			g				27									11	21	59	
			h				110			5						8	2	47	172
			i			1	64					1				12	51	129	
貝塚III群		1						1			1					2	4		
		1a			1	490			3			1		11	6	211	723		
		1b				152				3	16	2		3	2	11	189		
		2		8	4	2,336		154	6	12	15			88	8	783	3,414		
		3		2		577	1	77	2	4	1		4	3	84	755			
	4		6		682	1	12	1				1	2	64	769				
	5		86	10	3,124	1	2		2				10	263	3,498				
貝塚IV群	不明		6		96		18			1			5	1	36	163			
	不明		1		31					1					24	57			
	不明		1	1	167		12			1					22	204			
HC小計	不明		12	1	488	1	39	2	23	9			29	8	239	851			
	不明	1	156	23	12,499	6	774	36	370	45	1	504	64	3,235	17,714				
HB③	遺構	I			3		71			2				2		14	92		
		IIa		2													2		
		IIb					18			1		1			6		4	30	
		IIc		1													1		
		III	1	3	1	112			1				1	1	9		129		
		IIIa		8	7	1177			17	1	12		1	8	8	146	1,385		
		IIIb				40			1						1		3	45	
		IIIc		1		119			4		1			1	1	30	157		
		IIId		10	2	276			6		4			3	1	37	339		
		IIIe		26	6	1,343			35	5	14			5	7	160	1,601		
		IIIf		1		8											9		
		IIIg		72	18	2,652	1	117	6	104	2	1	74	13	476	3,536			
		IIIh				3										1	4		
		IIIi		4	2	248			3		14			16	2	45	334		
		IIIj		4	1	295			35	1	7			4	2	28	377		
IV															1				
V															1				
不明			3		252			1		23			2	3	63	347			
HB③小計		1	138	37	6,614	1	223	13	180	2	2	123	38	1,017	8,389				
HC+HB③合計		2	294	60	19,113	7	997	49	550	47	3	627	102	4,252	26,103				

HC IIc:タムE,SK01.02,F01

HB③ IIa:SD01,祝殿小・SL IIb:SK13 IIc:SK32 右列1群 右列群 SK10 SL07

III:PO4.20 SB02 SB02-P2 SK33.36.38.40 IIIc:SD04 IIId:SK44

に残る。本資料はⅢ類の図143とも類似する。

Bは図249～251の3点を図示した。図249は口唇部に刻目文が施され、口径は16.8cmを測る。図250・251は頸部の粘土接合部分で一端屈曲し、胴部がやや張る。後者の口径は11.2cmを測る。口唇には深い刻目文が1個施され、外面には縦位、内面には横位のハケ目が残る。

Cは図252の1点を図示した。口縁部の上端が内湾し、口唇部はやや波状で舌状を呈する。

Dは図254～256の3点を図示した。図254は口縁部が僅かに外反し、口径が4.4cmと小型の壺である。頸部以下が得られず、全体的な形状は不明である。図255は長頸部の破片で、直状を呈する。上部の上面観は丸みを呈する「V」字状、下部は楕円状を呈することから片口口縁が想定される。図256は口～胴下半部まで得られ、復元を試みた。口縁部は外反し、頸部がくびれて胴部は張る。底部は得られなかったが、くびれ平底を想定し、同グリッド・同層出土の底部を参考にした。両面ともケズリ様の調整痕が残る。口径が10.1cmと大きい。口径の大きさや形状から壺形とした。

その他、口縁部の上部が屈曲し、受け口状を呈する図253を図示した。グスク土器にも類似するが、胎土、混和材等から貝塚時代後期の範疇に含めた。薄手で、屈曲部は明瞭な角を持つ。

また、第13表の土器出土量において小破片のために分類出来なかった不明土器が多数得られた。V類には相当しないことからⅡ・Ⅳ類の範疇と思われる資料である。層位的にも貝層Ⅲ群5層出土が多く、同層における底部の出土量からしても、無文の不明口縁部の大半はⅡ類の範疇に収まる可能性が考えられる。平面分布においてもほぼⅡ類と重なり、同層より得られた不明の有文口縁はⅡ～Ⅳ類のいずれかに属するものと考えられる。

## 2. 胴部

胴部も多量に出土し、地区ごとに出土量を第21表に、平面分布を第67図に示した。主な遺物は口縁部の項で記述している。

HCの胴部は17,714点の出土で、分類別に見るとⅡ類が12,522点と最も多く、胴部出土量の70.7%を占める。次がⅢ類の780点であるが、4.4%の割合とかなり少ない。口縁部と胴部においては分類別の割合に若干の違いが見られた。

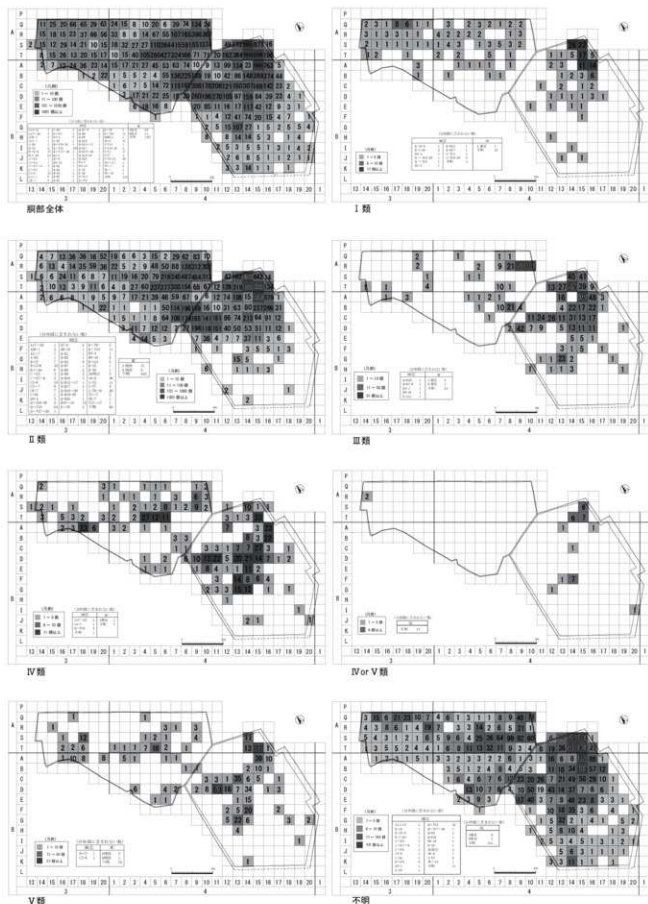
HCの胴部出土状況を見ると、第67図の平面分布においてⅠ～Ⅳ類までは口縁部とほぼ同じ出土状況を示すが、V類のみ若干異なる。貝層Ⅲ群での出土も多く、そこで得られた図143(Ⅲ類c)はV類にも類似し、小破片の胴部だとV類に分類された可能性がありうる。

層位的に見ると、貝層Ⅲ群出土が10,327点と全出土量の58.3%を占める。詳細に見ると、貝層Ⅲ群の上位層(1・2層)で5,142点、下位層(4・5層)で4,267点と胴部においては前者の出土量が多く、口縁部と異なる出土状況が見られたが、破片が多いため個数が増加したものと考えられる。最も多く出土したⅡ類は貝層Ⅲ群で7,928点が得られ、同群の出土量では76.8%と高い割合を示した。V層でもⅡ類が2,985点と多量に出土し、同層で61.6%の割合を占めることから、胴部においてもⅡ類が主体となることがわかる。

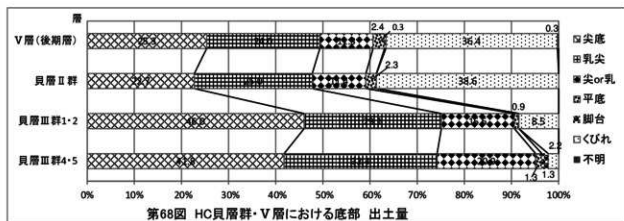
HB③は8,389点が得られ、Ⅱ類が6,651点と最も多く、79.3%の割合を占める。胴部も口縁部と同じく、Ⅲd層出土が最も多く、次にⅢc・Ⅲ層と続く。第67図の胴部平面分布では個数の差はあるが、いずれも口縁部と同じ出土状況を示した。

## 3. 底部

底部はHC1,067点、HB③423点と総数1,490点が得られた。底部まで復元出来た土器は、口縁部として集計を行っている。全体の出土状況を把握するため第70図に平面分布、第22表に出土量を示し、整理作業の指標とした。底部は形状によりA:丸底、B:尖底、C:乳房状尖底、D:脚台、E:



第 67 図 土器(胸部) 平面分布



平底、F：くびれ平底に分類した。平安山原B遺跡（2015）の底部の器種別と比べると、今回は尖底が乳房状尖底より若干多く出土している。第13表の口縁部出土量からⅡ類（大当原式土器）が多く得られるなど、形式の違いによるものと考えられる。Ⅱ類は接合面の隆起が明瞭な大当原貝塚出土タイプの他に、薄手で粘土接合面の隆起が目立たない（Ⅱ類C）ナガラ原西貝塚出土タイプも見られた。後者のタイプは尖底を呈する割合が高いと考えられるが、底部との関係は把握出来なかった。本遺跡の底部は層位的・分布状況、あるいは胎土・器面調整などから

大方A～E（尖底系）とF（くびれ平底）に分けられる。中には並行期？の底部なのか、その分類に当てはまらないものも僅かに見られる。全体の割合を見ると、尖底系はHCで76.1%、HB③で80.9%を占め、くびれ平底はHCが23.5%、HB③が19.1%といずれもほぼ8対2の割合となる。HB③における平面分布（第70図）から見ると尖底系・くびれ平底とも遺跡全体から出土する。その中で北東側にあるⅢd層で大半が出土し、尖底系はS・T6～9辺りでの出土が目立つ。HCは地形の関係上、砂丘のある北側での出土が大半で、特に貝層Ⅲ群辺りのグリッドで集中して出土する。第68図にHCのみ貝層群とV層における種類別の出土状況を横棒グラフに示した。尖底系とくびれ平底の出土量の割合は、貝層Ⅲ群での上位層（1・2層）・下位層（4・5層）ともほぼ8：2の割合、貝層Ⅱ群、V層ではほぼ6：4の割合となり、時期差や併存期があるものと考えられる。貝層Ⅲ群と貝層Ⅱ群、V層では貝製品の出土量や貝種にも違いが見られ、土器の出土状況と関係してい

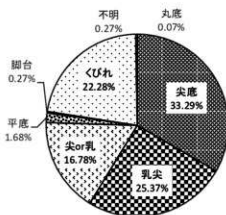
第22表 土器（底部） 出土量

遺跡	層	分類	実							合計	
			丸底	尖底	乳尖	乳or乳	脚台	平底	くびれ		不明
HC	Ⅰ			2	4	3		1	3	13	
		遺構		3				5	2	10	
	Ⅱ				1	1		4		6	
		遺構		1	2	1		1		5	
	Ⅲ							5		5	
		遺構						5		5	
	Ⅳ			94	89	42	1	9	135	1	371
		貝層Ⅱ群	h			1					1
			c		2	4	3				9
			d			1			5		6
			e							1	1
			f		3	2				3	8
		貝層Ⅲ群	g				1		1	1	3
			h		2	1				3	6
			i		3	2	1			2	8
			不明							2	2
	V			11	13	5		1		30	
	Ⅴ	1a				3				3	
		1b		5	6	8			3	22	
		2		82	43	17		1	15	158	
		3		21	8	12		1	1	43	
		4		8	4	5		1	1	19	
		5		86	69	42	3	2	4	206	
不明			3	4	1			1	9		
貝層Ⅳ群			1	2					3		
貝層Ⅴ群			3	5	3				12		
不明			14	22	14		1	55	107		
HC小計			0	345	283	162	4	18	251	4,1067	
HB③	Ⅰ			2	1				4	7	
	Ⅱb			1						1	
	Ⅱc			3				1	1	5	
	Ⅲ			21	15	17			14	67	
	Ⅲ			1	1					2	
	Ⅲa			1	7	3	5		5	21	
	Ⅲb			5	6	3			2	16	
	Ⅲc			25	24	13		3	11	76	
	Ⅲd			72	37	40		3	35	187	
	Ⅲd								1	1	
	Ⅲe				8	4	7		6	25	
	Ⅳ				2	2	2		1	7	
	不明				4	2	1			8	
	HB③小計			1	151	95	88	0	7	81	0,423
	HC・HB③合計			1	496	378	250	4	25	332	4,1490

HC：Ⅱc・Ⅱa・Ⅱb・Ⅱc  
HB③：Ⅱc・Ⅱc32・石列群・石列群4群・S107

HB③：Ⅲ・Ⅲc36  
HB③：Ⅲc・Ⅲc40  
HB③：Ⅲc・Ⅲc30

ることが窺える。貝層Ⅲ群出土の底部は490点で、層位不明なものを除いて1～5層全体では尖底が457点(95.0%)、くびれ平底系は僅か24点(5.0%)の割合である。層位別に見ると尖底系は2層で143点、5層で202点、くびれ平底系は2層で15点、5層で4点の出土である。V層でも尖底系は235点(63.3%)と多く、くびれ平底は135点(36.4%)が出土している。くびれ平底のみを見ると、貝層群よりV層からの出土が多い。このように、層位的にはV層で尖底系土器とくびれ平底土器、貝層群で尖底系土器が多量に出土する状況を見せる。異なる層序から出土する尖底系土器に違いが見られるのか、今回は判別出来なかった。貝層Ⅲ群を上位層(1・2層)、下位層(4・5層)に分けて見ると、尖底系は上位層で195点、下位層で220点、くびれ平底は上位層で18点、下位層で5点の出土である。口縁部・胴部においてV類は出土しないことから、同じくびれ平底であるIV類に相当するものと考えられる。



第69図 底部器種別 出土量

このように貝層群は尖底系を中心とする時期だが、くびれ平底も2割近く出土することから併存していた可能性が想定される。さらに貝層Ⅲ群2層から出土した図143は、口～底部近くまで両面にハケ目が明瞭に残り、全体の形状や大きさ、胎土等から見ると貝塚時代後期後半の型式が考えられるが、底部はほぼ尖底が想定される資料も得られている。底部も口縁部と同じく平面分布を整理作業の指標とし、出土量も合わせて全体の状況把握を行った。以下、個々の遺物の詳細は第24表の観察一覧に示し、特徴的なものについてそれぞれ形状別に記述する。

#### A：丸底

丸底は図257に示した1点のみで、HB③Ⅲa層出土である。平底とも考えられるが、外底が僅かに丸みを呈することから丸底とした。砂質が強く手触りはざらつく。角閃石を混和材としていることから、僅かに出土したI類(浜屋原式土器)の底部が想定される。

#### B：尖底

尖底はHCが345点、HB③151点で計496点と最も多く得られ、図258～293に図示した。第69図の底部器種別の円形グラフを見ると、33.3%の割合で最も多い。第70図の平面分布を見ると、HB③ではほぼ遺跡全体から出土し、HCに近いS6～9で割と集中している。層位的には耕作土層と考えられるⅢd層出土が多いが、これは全てV層由来の遺物と思われる。HCは貝層Ⅲ群のあるS・T14・15、A15・16等から多数出土し、V層からも得られるが、貝層Ⅲ群に比べて出土数は少ない。尖底は外底の形状が様々で、平安山原B遺跡(2015)の分類に合わせて以下のように分けて記述する。

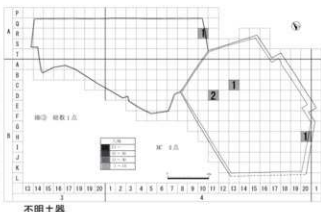
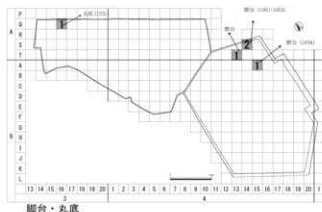
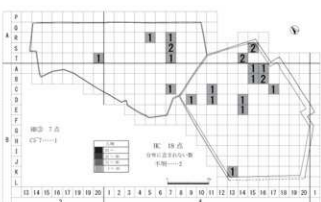
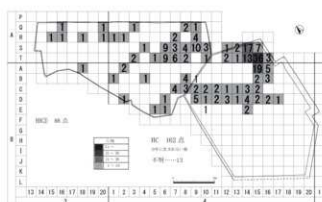
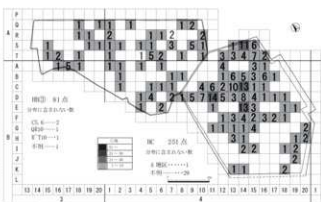
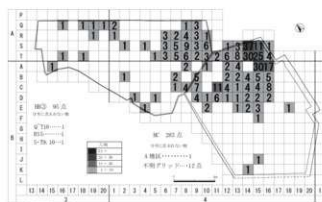
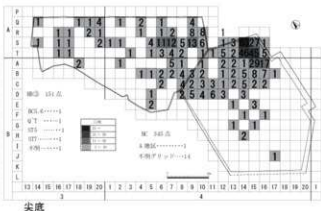
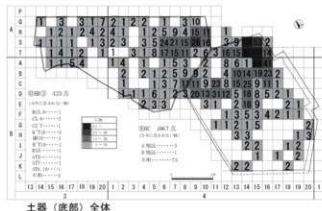
a：外底が丸底的で立ち上がりが急なもの

b：外底が尖り気味なもの

c：外底がやや平らで底径が小さいもの(底径2.5cm以下)

aは図258～274の17点を図示した。図258～260は外底が丸みを呈し、胴部への立ち上がりも膨らみを呈する。外反が急なことから、小型或いは壺の底部の可能性が考えられる。図258の内底には放射状にハケ目痕が4本1組の工具で施され、規則的である。外面の丁寧なナデ調整、胎土等からくびれ平底系の時期の可能性も考えられる。図259は胎土に石英を多量に含み、外面はナデ調整が丁寧である。図260は前二者に比べ立ち上がり部が緩やかであるが、底面の状態からaに分類した。外底の中央部を指で押し、若干円形状に窪ませている。図261・262も外底が丸みを呈するが、立ち





第70图 土器(底部)平面分布

上がりはやや直線的で外反する。このタイプは重量感のある底部が多い。図 261 は外面が指やヘラナデにより器面に起点が残りが、乳房状尖底にも見えるが、全体の形状から尖底とした。図 262 は外底に粘土を貼付し、丸底的な尖底で、他に比べて外反が大きい。図 263 は底厚が厚く、割と大振りで、手に持つと重量感がある。図 264 ~ 274 は上記に比べて外底の丸みがやや小さく、全体的な形状を見ると外呈の尖りがやや目立ってくる。HC 出土の図 267 ~ 269 は外反が大きく、底厚もあまり厚くならない。図 269 は胎土や器厚などの特徴が口縁部の図 182 に類似し、同一個体の可能性が考えられる。ただ、本資料は尖底で、図 182 はIV類（アカジャンガー式土器）と想定したもので、既存の器形より外れる。同資料と施文部位の違いはあるが、伊礼原D遺跡（2013）においても丸底の尖底が見られることから資料の追加を待ちたい。このように、a に分類した中にはIV類の有文タイプの底部が含まれている可能性がある。図 263・265・266 は外反がやや強く、立ち上がりが急である。図 274 は外面の器面調整により乳房状尖底にも見えるが、全体的な形状から尖底に分類した。

b は図 275 ~ 285 の 11 点を図示した。図 275 ~ 279 は底厚があまり厚くなく、外底は尖りが顕著である。器面調整を見ると外面は丁寧なナデ調整が施されている。図 280 ~ 285 は底厚が厚く、外底はやや尖る。外面の粘土接合面は明瞭で、やや雑に仕上げているものが殆どである。図 283 は外底がやや潰れており、混和材も他に比べると粗く多量に含まれる。全体的に立ち上がりは直線的でスムーズに外反する。

c は図 286 ~ 293 の 8 点を図示した。外底が平らなため平底にも見えるが、尖底の底を潰すか、或いは平らに整えていることから尖底で扱った。外底が平らなことから底径が計測出来、大半が 2.8 cm 以下である。図 286・287 は底厚がやや薄く、外面のナデ調整もやや丁寧である。図 288 は底厚が厚く、粘土接合面が明瞭である。図 289 ~ 292 は底厚がより厚く、重量感がある。図 293 は底厚が厚いが、やや泥質で軽い。他に比べて底径が 2.8 cm とやや大きく、くびれながら立ち上がる。

### C：乳房状尖底

乳房状尖底は尖底に次いで多く出土し、その内訳は HC が 283 点、HB ㊸ 95 点の計 378 点である。第 22 表の底部出土量を見ると、25.4% の割合である。第 70 図の平面分布を見ると、尖底と同じ分布状況を示し、尖底 or 乳房状尖底もほぼ同じである。HC では貝層 III 群での出土が最も多く、V 層では少なくなる状況を見せる。HB ㊸ は遺跡全体から得られ、若干 S7 ~ 9 で多く、尖底と同じく III d 層出土が多い。図 294 ~ 326 に 33 点を図示した。大半は大当原式土器と考えられる。乳房状尖底はバラエティーのある形状を呈するものが多く、下記のように a ~ c に分け、さらに外底の違いにより A ~ C に細分した。

- |                            |            |
|----------------------------|------------|
| a：乳頭部が小振り（底径 2.0 cm 以下）    | ア：外底が丸いもの  |
| b：乳頭部が中振り（底径 2.1 ~ 3.4 cm） | イ：外底が平らなもの |
| c：乳頭部が大振り（底径 3.5 cm 以上）    | ウ：外底が凹むもの  |

a は外底の形状を見ると A ~ C の三タイプがあり、それぞれ分けて記述する。a 7 は図 294 ~ 297 の 4 点を図示した。図 294 は胴下半部まで残り、粘土接合面もやや明瞭である。薄手（3 mm）で、外面にはハケ目が残る。図 295 は乳頭部の粘土貼付痕が明瞭である。図 296 は厚手で、重量感のある底部である。外面上部にはハケ目が僅かに残る。図 297 は尖底にも近いが、不明瞭ながら乳頭部に粘土貼付が見られることからここに含めた。

a 1 は図 298 ~ 300 の 3 点を図示した。図 298 は外底に薄く粘土を貼付し、やや不安定な外底である。立ち上がりは急で、小型の可能性が考えられる。図 299・300 は外反が強く、後者は外底に粘土を貼付している。

aは図301・302の2点を図示した。いずれも中央部の凹みは円形状で、やや深い。

bは図303・304の2点を図示した。いずれもHB③の出土で、乳頭部はbの中でも3.2cmと大きい方で、cに近い。前者は底厚が厚く、内外面とも不揃いである。いずれも外底に粘土を貼付しているのか、調整の痕なのか、不明瞭である。

bは図305～314の10点を図示し、若干の凹みが見られるものは全体的な形状からbに含めた。全体的に乳頭部は高いものが殆どである。図305は乳頭部のみが残存し、中央部が若干凹む。図306は不揃いで、粘土接合面が明瞭である。調整も雑で、器面全体の手触りがざらつく。図307の外表面は雑、内面はナデ調整が丁寧である。図308は立ち上がり部が一部器面調整により左右非対称な形状となる。割と堅致な胎土である。外面には調整痕または文様とも思われる2条の長沈線が不規則ながら弧状に施される。図309は胎土から浜屋原式土器の底部と考えられるものである。外底には明瞭に粘土を貼付した痕が見られる。図310は外底が平らで、乳頭部の側面をナデによりくびれ部分を呈する。図311～313はいずれも底厚が厚く、乳頭部の形状が類似し、図313は外底の中央部が若干凹む。図314は他に比べて底厚がやや薄く、立ち上がりの角もやや丸みを呈する。外底の中央部は若干凹み、外底の手触りからすると少し摩耗している。

bは図315～320の6点を図示した。いずれも底径は2.4～2.8cmと小さく、外底の中央部が円形状に凹む。

大振り以外底が丸みを呈するCは出土しなかった。

cは図321・322の2点を図示した。いずれも底厚は厚く、底径は前者が3.7cm、後者は4.5cmと大きい。

cは図323～326の4点を図示した。前三者は外底の凹みが深く、図326のみ浅い凹みである。凹みの形状は図325が方形、他は円形状を呈する。図323の凹みは他に比べて1.5cmとより深い。図323・324は脚台を意図して作製されたのか、凹みの内側も丁寧なナデ調整が行われている。

#### D：脚台

脚台は僅か4点の出土で、全てHCからの出土である。その内訳は3点がHC 貝層Ⅲ群5層、1点はV層の出土で、出土状況は尖底系とほぼ重なる。胎土や大きさなどから全て在地の土器と思われ、図327～329の3点を図示した。本町の伊礼原遺跡(2014)で出土した在地の脚台(第40図24)は搬入土器に比べて小さく、本遺跡出土の脚台も底径を見ると図328は4.8cm、図329は楕円状の外底で5.8×6.4cmと小さい。図327は底面が破損しているが、形状から脚台とした。後者の2点に比べて小型で、内底には煤が付着し、黒褐色を呈する。図328は外底が上げ底で、立ち上がりはくびれて外反する。図329は外底の上げ底が図328に比べて高く、底厚はやや薄くなる。

#### E：平底

平底はHC18点、HB③7点の計25点で、第69図の器種別出土量の円グラフから見ると僅か1.7%の割合でしかない。図330～344に15点を図示した。本遺跡出土の平底は尖底のcに類似し、底径が3.0cm以上のものは平底とした。平底の大半が乳房状尖底と同じ胎土や混和材を呈し、同時期が想定されるが、中にはくびれ平底に近い胎土を持つものも見られる。平底も形状により以下のように分けた。

a：立ち上がりの角がやや丸みを呈するもの

b：立ち上がりの角がやや角を呈するもの

aは図330～343の14点を図示した。は胴部の形状が様々で、以下の様にa～gに分けた。

f：やや丸みを持って胴部へ移行するもの

イ：立ち上りの角から直線的に胴部へ移行するもの

ウ：僅かにくびれながら胴部へ移行するもの

a7は図330～335の6点を図示した。図330は底径が2.8cmと小さく、尖底とも思われるが、外底がより平らで全体的な形状からここに含めた。底厚が薄いものは図330～333、厚いものは図334・335である。A7は全体的に尖底の流れを汲むものと考えられる。

a1は図336～339の4点を図示した。図336は底径が3.6cmと小さく、内底は平らな面を呈する。底厚が薄いものは図336・337、厚いものは図338・339である。図339の内底は盛り上がる。

aウは図340～343の4点を図示した。底厚はいずれも厚く、くびれて胴部へ立ち上がるために外反がやや強い。内底は斜位が殆どである。

bは図344の1点を図示した。本資料は立ち上りに角を持ち、全体的に若干くびれる。本資料はくびれ平底にやや近い。

### F：くびれ平底

くびれ平底はHC251点、HB③81点の計332点が得られ、前者の地区で75.6%を占める。第22表の底部出土量を見ると、くびれ平底は22.3%の割合を占める。第70図の平面分布ではHC・HB③とも遺跡全体から出土する。HCでは尖底系はV層で235点、貝層Ⅲ群で465点と後者で多量に出土するが、くびれ平底はV層で135点、貝層Ⅲ群で僅か25点の出土と、尖底系とは異なる状況を見せる。貝層Ⅲ群の南側にあるグリッドのV層出土が135点と目立つ。

HB③はⅢd層で36点が出土し、くびれ平底の出土数の44.4%と高い割合を占める。次いでⅢ層の14点、Ⅲc層の11点と続く。第23表に底厚と底径との関係を図示した。

また、貝層Ⅲ群の5層より得られた図396は、底径が9.0cmとかなり大きく、胎土が図127と同胎土を呈する。図127は口縁部が外反し、胴部の張りが強い厚手の土器で、胎土は大当原式土器にも類似する。ただ、粘土接合面の隆起があまり目立たず、形状も異なることからⅢ類としたもので、層位的には同層である。形状で分類した為今回はくびれ平底で扱ったが、今後は時期、形式等において注意を要する資料である。以下、くびれの形状によりa～d、底厚の厚さで7～εに分類し、順に記述する。

- |            |                      |
|------------|----------------------|
| a：くびれが微弱   | 7：底厚が厚い（1.4cm以上）     |
| b：くびれが弱    | イ：底厚がやや厚い（1.0～1.3cm） |
| c：くびれが明瞭   | ウ：底厚がやや薄い（0.6～0.9cm） |
| d：くびれがより明瞭 | ε：底厚が薄い（0.5cm以下）     |

aは図345～350の6点を図示した。底径が5.0cm以下の小さいものは図345～349の5点で、前2者は底厚が7、図348はイ、図347・349はりに分類される。底径が6.2cmとやや大きな図350はに分類される。

bは図351～373の23点を図示した。くびれ平底の中ではcと共に多い形状である。底径も様々で、5.0cm以下の小さいものから8.0cmサイズまで出土する。

底径が5.0cm以下は図351～358・360の9点で、底厚が7が図360の1点、イが図351～353・358の4点、ウが図354～357の4点である。図351は底径が3.4cmと小さく、乳房状尖底にも近い。図352～355は形状が類似し、図356は外底の調整が雑で、内面にハケ目が見られる。

底径が5.1～6.0cmは図359・361・362・366・367の5点で、底厚は7に分類されるのは図361・362の2点で、いずれも外底が若干上げ底となる。底厚がイに分類されるものは図359の1点で、底厚がりに分類されるものは図366・367の2点で、外面のナデ調整は丁寧、内面にはハケ目が見られ

る。器厚は薄手である。

底径が6.1～7.0 cmは図363～365・368～371の7点である。底厚を見ると、7に分類されるものは図363の1点、イは図364・365・371の3点、ウは図368・369の2点、エは図370の1点である。図365の外底には円形状の粘土を貼付し、不安定な底面となる。図368は器厚が薄く、内底は盛り上がる。

底径が7.1 cm以上は図372・373の2点である。図372・373は底径が8.0 cmとかなり大きい。底厚は前者がイ、後者がウに分類される。

cは図374～395の22点を図示した。cのくびれ平底は、胎土などからIV類よりV類と思われるものが多い。

底径が5.0 cm以下は図374の1点で、底厚はエに分類される。

底径が5.1～6.0 cmは図375～380の6点を図示した。底厚を見ると、7は見られず、イは図380の1点、ウは図377～379の3点、エは図375・376の2点である。

底径が6.1～7.0 cmは図381～391の11点で、底厚はアが図382の1点、イが図386・388・389の3点、ウが図381・383～385・387・391の6点、エが図390の1点である。図382は他とやや異なり、立ち上がりの角がやや丸みを呈する。

底径が7.1 cm以上の大きなものは図392～395の4点が得られ、底厚は全てウに分類される。胎土は全て砂質である。

dは図396の1点を図示した。底径は9.0 cmと大きく、底厚も1.9 cmを測る。外底には指で押したような円形状の凹みが二個見られ、立ち上がりは外反度が強い。出土地はHC貝層Ⅲ群5層である。本資料は形状からFに分類したが、他のくびれ平底と胎土や厚さ、混和材等に違いが見られ、口縁部の項で記述したように図127に近く、時期が若干異なる可能性が高い。

図397はくびれが弱であることからくびれ平底のaに分類出来る資料だが、他のaと外底の形状が異なることから今回は外して不明とした。外底に円形状の凹みが見られ、高台を呈するような作りとなっている。

第23表に計測可能なくびれ平底を対象に底径と底厚の関係を示し、平安山原A遺跡(2016)とほぼ同じ傾向を見せた。底厚はいずれの地区も0.6～0.9 cmが最も多く、次に1.0～1.3 cmと続く。底径は両地区で違いが見られた。HCでは底径5.1～6.0 cmが49点と最も多く、HB③は6.1～7.0 cmが11点と多く得られた。次に多い底径はHCで4.1～5.0 cmが32点、6.1～7.0 cmが31点とほぼ同数である。HB③は5.1～6.0 cmが6点、4.1～5.0 cmが4点である。両地区を合わせて見ると、底径が5.1～6.0 cmが55点と最も多く、次いで6.1～7.0 cmが42点と続く。4.1～5.0 cmも36点が得られ、くびれ平底の底径はほぼこの範囲に収まる。平安山原A遺跡では、底厚が1.4～1.9 cmの厚手のものは底径が5.1～6.0 cm、4.1～5.0 cmと両方の底径値に多く見られたが、本遺跡では底径4.1～5.0 cmに多く見られ、底径がより小さくなる傾向を示した。

くびれ平底は口縁部のIV類・V類の両形式に伴う底部形状で、両者を区別しようと試みたが、今回も口縁部との関係が掴めなかった。本遺跡で復元出来た図174は砂質で赤色粒を含み、ハケ目により器面調整も丁寧に行われていることからIV類として捉え、本資料と本町の小堀原遺跡(2012)、

第23表 くびれ平底 底径・底厚の関係

遺跡	分類	底厚(cm)	底径(cm)					不明	合計
			4.0以下	4.1～5.0	5.1～6.0	6.1～7.0	7.1以上		
HC	厚手	2.0以上		1				3	4
		1.4～1.9		5	3	1	1	1	11
		1.0～1.3	1	3	7	4	4	10	29
	薄手	0.6～0.9	2	5	12	11	5	20	55
		0.5以下		1	2			3	6
		不明		17	25	15	3	84	144
HC小計			3	32	49	31	13	121	249
HB③	厚手	2.0以上							
		1.4～1.9			1	1		4	6
		1.0～1.3		3	2	3		9	17
	薄手	0.6～0.9	2	1	1		1	18	23
		0.5以下				3		5	8
		不明			2	4	1	19	26
HB③小計			2	4	6	11	2	55	80
HC+HB③合計			5	36	55	42	15	176	329

伊礼原遺跡(国指定外・2014)の復元土器も参考にして両者を比べて見た。IV類はV類に比べてサイズが大きく、胎土も砂質が多い。口縁部が外反し、頸部でやや窄まり胴部は張るものが多い。V類は泥質が多く、小型化する傾向が見られ、口縁部が外反し、胴部は直線的でそのまま底部へと移行するものが多い。いずれのくびれ平底もHC・HB③の両地区で見られるが、HC貝層Ⅲ群におけるくびれ平底を見ると、下位層(4・5層)出土のものは砂質で、底径や底厚等の特徴からIV類かIII類のくびれ平底に相当することが窺える。上位層(1・2層)出土のくびれ平底は泥質が多く、底厚や器厚等の特徴からV類の底部と考えられる。

また、図143は口縁部のみだと泥質でハケ目が見られることからV類とも捉えられるが、底部は尖底が想定されることや形状等から、今回はIII類に分類した。今後、検討を要する。

### 小結

HC・HB③ともII類(大当原式土器)を主体とし、HCではV層や貝層群で多量に出土した。粘土接合面の隆起が明瞭なA・Bが多いことから、両地区のII類はやや古手と考えられる。中には、隆起が目立たないCや内面にハケ目が顕著に見られるものもあり、今後、細分の必要性がある。

また、貝層Ⅲ群ではII類の他に、上位層(1・2層)でIV・V類、下位層(4・5層)でIV類が少量得られており、時期差はあるもののIV類はII類と併用の時期があると考えられる(第14表 貝層Ⅲ群の層別別出土状況、第22表 HC底部種類別の層位出土状況を参照)。

また、V類は貝層Ⅲ群よりV層での出土が多く、貝層Ⅲ群においても下位層出土は殆ど見当たらない。平面分布においてもIV類はII類と同じ貝層Ⅲ群を中心とする分布状況を示したが、V類はD11～14辺りでの出土が多いなど、若干の違いが見られる。IV・V類のくびれ平底系土器にも時期差があることが窺える。

底部については、IV・V類の口縁部に合わせたくびれ平底の分類が、今回も出来なかったことは残念である。ただ、砂質で底径や口径が大きな中振りサイズはIV類、泥質で急な立ち上がりを呈し、小型の土器はV類に属することが窺えた。さらに、IV類には丸底的尖底も有りうる状況が示され、くびれ平底においてもII類かIII類に分類出来るものが得られ、尖底・くびれ平底の併用時期があったことがこれまでのキャンプ桑江返還地区の調査から窺えるのではないだろうか。

その他、注目したい土器として、東日本の亀ヶ岡系土器の大洞A式土器があげられる。本資料を設楽博巳氏に問い合わせる機会があり、「東日本の大洞系土器で大洞A1式併行の可能性が高い」との御教示をいただいた。

また、フェンサ下層土器に類似するIII類とした図143、在地外とした有文の図5・6、図230の器形などは、今後の資料の追加等で型式の判断を待ちたい。

第24表-1 土器 観察一覧

(法量単位:cm, g)

観察図	図番号	分類		部位	形態	法量		原料						器色		器面調整	造器・作り手・産地等 台帳No./法番号
		大	小			口縁高 底径	器厚 底厚	灰 含量	石英	赤色 粘土	○:多 △:少な ◇:僅少	砂 粒	その他	粘土	外面 内面		
第17回・ 国原町	1	個人 (不明)	-	口	口縁外反・口唇角・外三角状凸部文・長付(線)画	-	0.6	細粒 多量	◎		△	砂	両・暗灰褐色	両・ナナ・指痕	HB2 58 器a(1)	12425	
					外三角状凸部文(長付)線1条+その上に線2条	-	0.9	細粒 多量	◎		△	砂	両・暗灰褐色	両・ナナ・指痕	HB2 57 器a(7)	11028	
	3	個人 (国原 東前)	-	口	外一線位の三角状凸部文+その上下に刺突文(並+先端三角状工具)	-	0.5	中粒 多量	◎		△	炭屑 △	両・暗灰褐色	両・ナナ・指痕	HC 115 貝層群3	台10743	
					「ハ」字状付付・外一線位の女字文(並)付・刺突文間に赤色の全体に刺突	6.0	0.5	微細 微量	△	△	△	泥	両・暗褐色	両・ナナ	HB2 76 器a(1)	12292	
	5	個人 (不明)	-	口	口縁外反・口唇角(粘土貼付)・文様・丁寧一線位の外三角状凸部文+刺突文(並)・その間に細状線(線)本ナナ状刺突	-	0.6	中粒 中量	◎		△	○	砂	両・暗茶褐色 内上部は灰付着	外・ナナ丁家 内・指痕(並+?)	HC 515 貝層群5	14400
					外一線位の三角状凸部文+その上に刺突文(並+線)の刺突	-	0.9	中粒 中量	◎	△	△	△	砂	外・暗褐色 内・赤褐色	両・ナナ	HC 115 貝層群4	14612/14678
	7	個人 (不明)	-	口	口縁外反・口唇と内面・外・ナナ?	24.3	0.6	細粒 中量	◎	△	△	△	火山 ダマ	両・茶褐色 内・暗灰褐色	両・指痕(並+?) 134?	HC F16 1202	
					口縁内高・口唇角(刺突)幅1.8cmの粘土貼付	-	0.8	細粒 少量	△	△	△	砂	外・暗茶褐色 内・灰褐色	外・ナナ 内・ナナ・指痕	HB2 Q17 器b(5)	1285	
	9	個人?	-	口	口縁高・口唇角(粘土貼付で1.5cm幅)・口唇部・径1×1.2cm位の横凹部の粘土貼付	-	0.8	細粒 少量	△	△	△	砂	外・暗褐色 内・暗灰褐色	両・ナナ・指痕	HB2 Q17 器a(7)	1548	
					口縁高・口唇角・外一線位の凸部文(丸・楕)・口唇・文(楕)	14.4	0.6	細粒 少量	△	△	△	砂	外・暗茶褐色	両・ナナ・指痕	HC T16 V(後期層)	11021	
	11	個人 (不明)	-	口	口縁内高・口唇角(強刺突)断面三角状の外小突起	17.0	0.6	細粒 少量	◎	△	△	火山 ダマ	砂	外・赤褐色 内・ナナ	外・ナナ 内・ナナ	HC D10 V(後期層)	1261
					口縁内高・口唇角(刺突)幅1.8cmの粘土貼付	-	1.2	中粒 中量	◎		○	砂	外・暗茶褐色 内・暗褐色	外・ナナ 内・指痕	HC C16 V(後期層)	12851	
	13	在産 (大山)	-	口	口縁外反(強刺突)・口唇角・3.3cm幅の肥厚部に文様(甲斐用工具に23条の押し文)	-	0.7	中粒 多量	△	○	○	白色 粘	砂	外・茶褐色 内・暗茶褐色	両・ナナ? (内・刺突・滑ら)	HC C16 V(後期層)	11807
					肥厚部(薄手・長さ不明)・無文	-	0.7	中粒 多量	◎			砂	外・赤茶褐色 内・暗茶褐色	両・ナナ	HB2 T5 器a(7)	11550	
	15	在産 (不明)	-	口	外一刺突文(斜位)	-	0.8	中粒 多量	◎		△	砂	両・茶褐色	両・ナナ	HB2 H14 B c	5832 1613	
					口縁高・口唇角・均一	-	0.6	細粒 多量	◎		○	砂強	両・灰褐色 (内・灰付着)	外・ナナ丁家 内・指痕(痕)	HC A16 貝層群5	12813	
	17	在産 (大山)	-	口	口縁高・口唇角(内面に線のみ有)・均一	-	0.7	細粒 多量	△	◎		砂強	外・淡茶褐色 内・茶褐色	外・ナナ丁家 内・指痕(痕)	HC B15 V(後期層)	12422	
					口縁高・口唇角・均一	-	0.5	細粒 多量	◎	◎	◎	砂強	両・淡褐色	外・ナナ丁家 内・指痕(痕)	HC A16 貝層群5	11039	
	19	A	-	口	口縁高・口唇角・均一	-	0.8	細粒 多量	◎	△		砂強	両・暗茶褐色	外・ナナ丁家 内・指痕(痕)	HC S15 貝層群5	14554	
					口縁高・口唇角・刺突・無文	-	0.6	細粒 中量	◎	△	△	砂強	両・茶褐色	外・ナナ丁家 内・ナナ・指痕	HB2 1 1	12572	
	21	I	-	口	口縁高・口唇角・刺突・無文	-	0.6	細粒 多量	◎	◎		砂強	両・暗茶褐色	外・ナナ丁家 内・ナナ・指痕	HB2 R4 器a(1)	1256	
					口縁高・口唇角・刺突・無文	-	0.6	細粒 多量	◎	◎		砂強	両・暗褐色	外・ナナ丁家 内・ナナ・指痕	HB2 R14 器a	1597	
	23	B	-	口	口縁上端外反・口唇角・均一	-	0.7	細粒 多量	◎	○		砂強	両・淡褐色 内・指痕(痕)	外・ナナ・指痕 内・指痕(痕)	HC S15 貝層群5	11054	
					口縁上端外反・口唇角・均一	-	0.6	細粒 多量	◎	△		砂強	外・暗茶褐色 内・暗褐色	外・ナナ丁家 内・指痕(痕)	HC C16 V(後期層)	15962	
	25	-	口	口縁上端外反・口唇角・均一	-	0.5	細粒 多量	◎	○	○	砂強	外・暗褐色 内・暗茶褐色	外・ナナ丁家 内・指痕(痕)	HC S14 貝層群5	11025		
				口縁上端外反・口唇角・均一	-	0.7	細粒 多量	◎	◎		砂強	外・暗褐色 内・灰褐色	外・ナナ丁家 内・指痕(痕)	HC T16 貝層群5	11029		

◎:非常に多い ○:多い △:少な ◇:僅少 [土]土質 [ド]ドット状上番号 丸:法番号

第24表-2 土器 観察一覧

(質量単位:cm, g)

国産品	図番号	分類		部位	形態	質量		原料						胎土	顔色		器種・7・9・11・器・ 遺構・台帳(2)・番号
		大	小			口徑 口高 底径	口徑 口高 重量	灰 質 含 量	石 英	赤 色 粘 土	○ 向 陽 石	砂 粒	その他		外 面 内 面	外 面 内 面	
第72図・ 編年表	27			口	口縁上端外反・口唇外・胴部直・ 無文	-	0.9 56.4	細粒 多量	◎	△		砂泥	灰・灰褐色	外→ナ丁家 内→ナ丁・指頭直	HB21 T15 Ⅱ4(14) 台1565		
	28			口	口縁上端外反・口唇外・胴部直・ 無文	-	0.7 38.8	細粒 多量	◎	○	△	砂泥	灰・淡褐色	外→ナ丁家 内→ナ丁・指頭直	HB21 K17 Ⅱ4(7) 台545		
	29			口	口縁上端外反・口唇外・胴部直・ 無文	-	0.6 14.5	細粒 中量	○	○		砂泥	灰・茶褐色	外→ナ丁家 内→ナ丁・指頭直	HB21 T16 Ⅱ4(14) 台1669		
	30			口	口縁上端外反・口唇舌・胴部直・ 有孔(7mm 外→内)	21.6 -	0.6 60.5	細粒 多量	△	◎		茶色 粘 土 ○	砂	灰・灰褐色	外→ナ丁家 内→ナ丁・指頭直	HB21 Q17 Ⅱ4(5) 台288	
	31			口	口縁上端外反・口唇外・均	-	0.7 21.3	細粒 多量	◎	○		砂泥	灰・暗茶褐色	外→ナ丁家 内→指頭直明瞭	HC A15 具層Ⅱ群5 台10178		
	32			口	口縁上端外反・口唇外・均	-	0.7 18.0	細粒 中量	△	○		砂泥	灰・黄茶褐色	外→ナ丁家 内→指頭直明瞭	HC S14 具層Ⅱ群5 台10845		
	33			口	口縁上端外反・口唇舌・胴部直・ 無文	-	0.6 29.9	細粒 中量	○	○		砂泥	灰・茶褐色	外→ナ丁家 内→ナ丁・指頭直	HB21 S14 Ⅱ4(14) 台1447		
	34			口	口縁上端外反・口唇舌・胴部直・ 無文	-	0.6 25.3	細粒 多量	◎	◎		砂泥	外→淡褐色 内→灰褐色	外→ナ丁家 内→ナ丁・指頭直	HB21 T4 Ⅱ4(14) 台1611		
	35			口	口縁上端外反・口唇外・均	-	0.5 13.5	細粒 中量	△	○		砂泥	灰・淡褐色	外→ナ丁家 内→指頭直明瞭	HC S14 具層Ⅱ群5 台10844		
	36			口	口縁直・胴部直のみ・口唇外	-	0.6 13.7	細粒 少量	◎	○	△	砂泥	外→黄茶褐色 外下直は黒付着	外→ナ丁・指頭直	HC T15 具層Ⅱ群5 台4722		
	37			頸	「」字状外反・縁外凸・器小・器小 有文(2本)直の蓋状(2本)	-	1.1 75.9	細粒 多量	◎	△		砂泥	外→暗茶褐色 内→暗褐色	外→ナ丁・指頭直	HC S14 具層Ⅱ群5 台10848		
	第73図・ 編年表	38			口	口縁内直・胴部直・口唇外・外 縁位の凸部文・その下に「」 字状の凸部文・小型	-	0.5 7.5	細粒 少量	△	○		砂泥	灰・淡茶褐色	外→ナ丁	HC T15 具層Ⅱ群5 台4666	
		39			口	口縁内直・胴部直・口唇外・外 縁・粘土接合面明瞭(1.0cm幅)	7.8 -	0.4 15.9	中粒 中量	○	△	△	砂泥	外→暗茶褐色 内→灰茶褐色	外→ナ丁・指頭直	HC C14 V(後期)Ⅱ 台1009	
		40			口	口縁内直(波状)・口唇外(覆付 着)・粘土接合面明瞭(2.5cm幅)	11.9 -	0.7 39.1	細粒 少量	△	△	△	砂泥	灰・茶褐色	外→ナ丁・指頭直	HC A16 V(後期)Ⅱ 台2820	
		41			口	口縁内直(波状)・胴部直・口唇 舌・粘土接合面明瞭(2.5~3.0cm 幅)	14.8 -	0.5, 0.7 36.1	細粒 少量	△	△		灰色 粘 土 ○	砂	外→暗褐色 内→灰茶褐色	外→ナ丁・指頭直	HC S14 具層Ⅱ群5 台4201
42				口	口縁内直・胴部直・口唇舌・粘 土接合面や不明瞭(1.0cm幅)	15.0 -	0.8 67.5	細粒 少量	△	△	△	砂泥	灰・茶褐色	外→ナ丁・指頭直	HB21 BCD4 B-c S33 台413		
43				口	口縁内直・口唇舌・胴部直・粘 土接合面や不明瞭(0.5cm幅)	16.4 -	0.5 42.1	中粒 多量	○	△		砂泥	灰・赤茶褐色	外→ナ丁・指頭直	HB21 Q T10 試験品 40 台 503		
44				口	口縁内直(波状)・胴部直・口唇 舌・粘土接合面明瞭(3.0~3.5cm 幅)	15.8 -	0.6, 0.9 60.3	細粒 少量	△	△	△	砂泥	灰・茶褐色	外→ナ丁・指頭直	HC S15 具層Ⅱ群5 台4295		
45				口	口縁内直(波状)・胴部直・口唇 舌・粘土接合面明瞭(3.5~4.0cm 幅)	25.2 -	0.5, 0.7 155.1	中粒 少量	△	△		無色 粘 土 △	灰砂	外→暗褐色 内→ナ丁・指頭直	外→ナ丁・指頭直 内→ナ丁・指頭直	HC T15 具層Ⅱ群5 台455, 456	
46				口	口縁内直(波状)・胴部直・口唇 舌・粘土接合面明瞭(2.5cm 幅)	26.2 -	0.6, 0.9 295.0	中粒 中量	△	○	△	砂泥	外→暗褐色 内→ナ丁・指頭直	外→ナ丁・指頭直 内→ナ丁・指頭直	HC A16 具層Ⅱ群5 台4098		
47				口	口縁内直や波状・胴部直・口唇 舌・粘土接合面明瞭(3.0~ 3.5cm幅)	23.5 -	0.8, 1.0 315.5	細粒 少量	△	△		砂泥	灰・黄茶褐色	外→ナ丁・指頭直	HC S14 具層Ⅱ群4 台4196		
48				口	口縁や内直・口唇舌・ヒツパ	7.0 -	0.96 30.3	中粒 少量	△	△		砂	灰・灰茶褐色	外→ナ丁・指頭直	HB21 T5 Ⅱ4(14) 台1097		
49				口	口縁や内直・口唇舌・粘土接合 面明瞭・外縁其の凸部文(半分 破損)	-	0.7 34.2	細粒 中量	△	○		茶色 粘 土 ○	灰砂	灰・赤褐色	外→指頭直	HC T15 具層Ⅱ群5 台4731	
50				口	口縁内直・口唇舌・外縁位の凸 部文(本来は外反状)	-	0.5 15.2	細粒 少量	△	△		砂	外→暗茶褐色 内→茶褐色	外→ナ丁・指頭直	HC A16 具層Ⅱ群5 台10783		
第74 図編 年表		51			口	口縁内直・胴部直・口唇外や 舌・粘土接合面明瞭(3.5~4.0cm 幅)	17.4 -	0.5, 0.7 181.5	細粒 中量	△	○	△	灰砂	灰・淡茶褐色	外→ナ丁・指頭直	HC B17 V(後期)Ⅱ 台308, 413	
		52			口	口縁や内直(波状)・胴部直・ 口唇外や舌・粘土接合面明瞭 (3.0cm幅)	19.8 -	0.6, 0.8 41.3	中粒 中量	△	○	△	砂	外→暗茶褐色 内→指頭直	外→ナ丁・指頭直 内→指頭直	HC S14 具層Ⅱ群5 台4342	

◎:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 [胎土] P:7・9・11取上番号 K:具番号



第24表-3 土器 觀察一覽

(法量單位:cm, g)

發現編號	調查號	分組		部位	形態	法量		原料					顏色		節面觀察		遺跡・F・M・層・遺構・台帳(F・M)番号
		大	小			口徑 底径	壁厚 底厚	軟度 含量	石英	赤色 粘	中 内 外 右	砂 粒	その他	土質	外面 内面	外面 内面	
第74編・ 観察箱	53	I		口	口縁中々内溝・口唇丸・胴部歪凸・粘土接合面中々明瞭約3.0cm幅)	19.4	0.7	細粒 少量	△	△	△	砂	肉・茶褐色	両十テ・指痕	HB② B7 Ⅱ(12) F1347		
					口縁内溝・胴部歪凸・口唇中々舌・粘土接合面明瞭約3.0cm幅)	27.4	0.7・1.0	細粒 少量	△	△	△	砂	肉・黄茶褐色	両十テ・指痕	HB② C6 Ⅱc (7) F405		
					口縁内溝(波状)・胴部直線的・口唇舌・粘土接合面明瞭約3.0~4.0cm幅)	27.0	0.5・0.8	細粒 少量	△	△	△	砂泥	肉・茶褐色	両十テ・指痕	HC T14 貝層遺群F F4072,4073		
					口縁直・口唇舌・粘土接合面中々明瞭約3.5cm幅)	-	0.8・1.3	中粒 少量	-	-	-	砂	肉・橙茶褐色	両十テ・指痕	HB② CT Ⅱ(9) F205,206		
					口縁中々内溝・胴部直線的・口唇外・粘土接合面明瞭約6.0cm幅(取付)・最後は凹形状・中央は凹形)	-	0.6	細粒 中量	△	○		砂	肉・茶褐色	両十テ・指痕	HC S14 貝層遺群F 台12785		
					口縁中々内溝(波状)・胴部歪凸・口唇中々舌・粘土接合面明瞭約3.5cm幅)	-	0.7	細粒 中量	△	○		砂	肉・茶褐色	両十テ・指痕	HC A15 貝層遺群 F3732		
					口縁中々内溝(波状)・胴部歪凸・口唇中々舌・粘土接合面明瞭約4.0cm幅)	-	0.6	中粒 中量	△	○	△	砂	肉・茶褐色	両十テ・指痕	HC S14 貝層遺群F F4433		
					口縁直・口唇波状・粘土接合面隆起・外一凹(縦1.2~1.5cm・横位)・継ぎ)	-	0.6・1.2	細粒 少量	△	△	△	泥砂	肉・淡灰褐色	両十テ・指痕	HB② R10 Ⅱc(7) 台1204		
					口縁直・口唇丸・粘土接合面明瞭・外一沈(縦文・不規則)	-	0.7	中粒 中量	△	○		砂	肉・茶褐色	両十テ・指痕	HC S14 貝層遺群F 台10827		
					口縁直・胴部直線的・口唇舌・粘土接合面明瞭約4.0cm幅)	-	0.6	中粒 少量	△	△	△	砂泥	外・沈茶褐色 内・沈茶褐色	両十テ・指痕	HC T15 貝層遺群 F4535		
					口縁直・胴部直線的・口唇丸・粘土接合面明瞭約4.0cm幅)	-	0.9・1.2	粗粒 少量	△	△	△	砂泥	肉・茶黄褐色	両十テ・指痕	HB② C8 Ⅱ(9) F281		
					第75編・ 観察箱	II	AF		口	口縁直・胴部直線的・口唇丸・粘土接合面明瞭約3.0cm幅)	21.0	0.4	細粒 中量	○	△	△	砂
口縁直・胴部直線的・口唇丸・粘土接合面中々明瞭約3.5cm幅)	-	0.5・0.9	中粒 少量	-						-	△	砂泥	肉・茶褐色	両十テ・指痕	HB② S9 IV(17) F1547		
口縁直・口唇舌・粘土接合面明瞭約4.5cm幅)	-	0.6・0.9	中粒 中量	△						○	△	砂泥	肉・赤褐色	両十テ・指痕	HB② S9 Ⅱa(14) F1670		
口縁直・胴部直線的・口唇丸・粘土接合面明瞭約3.0cm幅)	-	0.5	中粒 中量	○						△		砂	肉・茶褐色	両十テ・指痕	HC A15 貝層遺群F 台1128, 1129		
口縁直・口唇舌・粘土接合面明瞭(接合面で波状)	12.4	0.7・1.1	中粒 中量	○						○	△	砂	肉・非茶褐色	両十テ・指痕	HB② Ⅱc(7) F552		
口縁直・口唇舌・外一沈(縦文・弧状)・内一沈(縦文・斜位)	-	1.0	粗粒 少量	-						-	-	砂	外・茶褐色 内・沈茶褐色	両十テ・指痕	HB② S8 Ⅱa(14) 台1283		
口縁直・口唇丸・内一曲(縦文・弧状)・粘土接合面2.0cm(平掘5)	-	0.9	中粒 少量	△						△	△	泥砂	肉・赤褐色	外十テ 内一凹(縦)	HB② R10 Ⅱa(14) F1931		
口縁直・口唇欠如・粘土接合面隆起・外一凹(波状・沈(縦文・弧状)・2.5~3.0cm)	-	0.6	中粒 少量	△						△	△	砂	肉・非褐色	外へへへ(縦) 内へへへ(縦)	HB② S9 Ⅱa(14) 台1559		
口縁外沈・胴部直線的・口唇丸・粘土接合面明瞭約3.5cm幅)	-	0.4	細粒 中量	△						○		砂泥	肉・暗褐色	両十テ・指痕	HC T15 貝層遺群F F4478		
口縁外沈・口唇舌・粘土接合面明瞭約4cm幅)	-	0.6	細粒 少量	△						△	△	砂泥	肉・茶褐色	両十テ・指痕	HB② B7 Ⅱc(7) F779		
口縁外沈・口唇舌(波状)・胴文・屈折・1.0cm幅)・土接合面中々明瞭約3.0~3.5cm幅)	-	0.6・0.9	細粒 少量	△						△	△	砂	肉・茶褐色	両十テ・指痕	HB② C8 Ⅱ(12) F908		
粘土接合面明瞭約3cm幅)・最大胴径28.6cm)	-	0.7・1.5	中粒 少量	△						△	△	砂	肉・茶褐色	両十テ・指痕	HB② C5 Ⅱa(6) F2053		
第76編・ 観察箱	77	BF		口	粘土接合面明瞭約3cm幅)・最大胴径30.4cm)	-	0.5・1.5	中粒 中量	○	△	△	砂	肉・非褐色	両十テ・指痕	HB② C8+S8 Ⅱc(7) HB② C8 Ⅱ(12) HB② C8 Ⅱc 右利 IV群-S0.1 F617		
					口縁直・胴部中々歪凸・口唇丸・外一凹(縦文・不規則)・内形状・凹形)・口唇一割(日文)	8.8	0.4	細粒 少量	△	△	△	砂	肉・黄茶褐色	両十テ・指痕	HC 貝層B群 台11536		

○:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 (口上端) F:口径上番号 Ⅱ:表番号

第24表-4 土器 観察一覧

(法量単位:cm)

調査年度	図番 番号	分類		部位	形態	質量		泥和材							顔色		器種・ 用途・台帳(内)番号	
		大	小			口径 器高 底径	器厚 底厚 重量	灰 含量	石膏	赤 色 粘 土	角 閃 石	砂 粒	その他	器 土	外面 内面	外面 内面		
第76期・ 土器版	78			口	口縁直・胴部直線の・口唇丸・粘土接合面々不明(2.5cm幅)	11.8 -	11.2 -	細粒 少量	△						砂灰	両・黄茶褐色	両・ナナ・指痕	HC-A15 V (後期層) F2809
	79			口	口縁々々直・胴部直線の・口唇丸・外・六筋・文(口)字・口唇・朝実文	26.0 -	0.5 -	細粒 少量	△						砂	外・暗褐色 内・茶褐色	両・ナナ・指痕	HC-S15 貝層群3 HC-貝層群 台10730 F4292
	80			口	口縁直・胴部直線の・口唇丸・外・六筋2条(横)	30.2 -	0.7 -	細粒 少量	△						砂	両・暗灰褐色 (外は指痕打着)	両・ナナ・指痕	HC-A16 貝層群3 F4763
	81			口	口縁外反側・口唇舌・胴部直線の・文字記号・胴部直線の・厚平・太形粘土接合面々不明(器底厚)	30.8 -	0.8*1.1 -	細粒 少量	△	△					砂灰	両・黄茶褐色 ・暗灰茶褐色	両・ナナ(内)・指痕 指痕・雑土上	HB③ T5・T6・T7 量① BS 7・+5 8・T5-T7 量① (14) T5・T7 量(12) 88 量①(1) F1900位
	82			口	口縁外反側・胴部直線の・口唇丸・粘土接合面不明(0.5cm幅)	22.6 -	0.5 -	細粒 少量	△	△					砂	両・茶褐色	外・指痕(内)・指痕 内・指痕(内)・目(横)	HC-T14 貝層群4 F4135
	83			口	口縁直・口唇舌・胴部々々直・口唇・朝実六筋(2.0cm幅)	-	0.7 -	細粒 少量	△						砂灰	外・赤・黄茶褐色 内・茶褐色	両・ナナ・指痕	HB③ T8 量①(14) F1243
	84			口	口縁々々内直・口唇舌・朝実六筋(1.5cm・薄)	-	0.3 -	細粒 少量	△						砂	両・茶褐色	外・指痕 内・指痕(ナナ)	HC-D13 V (前期層) F2305
	85			口	口縁々々内直・口唇舌・外・(U)字・口唇六筋(2.0*0.8~1.3cm々々厚)	-	0.5 -	細粒 少量	△		○				砂	両・灰茶褐色	両・指痕	HC-T14 V (後期層) F1764
	86			胴	外・「O」字状の六筋文	-	0.6 -	細粒 中量	△		○				砂灰	両・非茶褐色	両・ナナ・指痕	HC-A15 貝層群2 台10894
	87			口	口縁々々内直・口唇丸・粘土接合面々不明(2.8~3.0cm幅)	-	0.6 -	中粒 中量	△		○				砂	外・暗茶褐色 内・赤茶褐色	外・ナナ・指痕 内・指痕(内)・目	HC-T15 貝層群5 F4491
88			口	口縁直・口唇丸・外・沈没文(朝実状)・有孔(外)・内	-	0.7 -	中粒 中量	△		○				灰砂	両・暗褐色	両・ナナ・指痕	HB③ S4 量①(15) F2446	
89			口	口縁直(波状)・口唇丸・粘土接合面々不明(0.3cm幅)	25.6 -	0.8 -	中粒 中量	○		○				砂	外・灰茶褐色 内・赤茶褐色	両・ナナ・指痕	HC-S15 貝層群5 F4298	
90			口	口縁々々内直・口唇丸・口唇・朝実六筋(2.5cm)・粘土接合面々不明(2.5cm幅)	29.6 -	0.8*1.0 -	細粒 少量	△	△					砂	両・暗茶褐色	両・ナナ・指痕	HC-T15 貝層群5 F4233	
91			口	口縁々々内直・口唇丸・粘土接合面々不明(2.0~2.3cm幅)	29.8 -	0.5 -	中粒 中量	△		○				灰色 粒	砂灰	両・茶褐色	両・ナナ・指痕 雑土上	HC-T15 貝層群5 F4403
92			口	口縁外反側・胴部直線の・口唇丸・外・沈没(直・不明)・粘土接合面々不明(0.5cm幅)	27.0 -	0.7 -	粗粒 多量	○	△					不明 ○	砂	外・茶褐色 内・暗灰褐色	両・ナナ・指痕	HC-A15 貝層群5 F4178
93			口	口縁々々内直・口唇丸・粘土接合面々不明(2.8~3.0cm幅)	22.2 -	0.6 -	粗粒 多量	◎	△					砂	両・暗茶褐色	両・ナナ・指痕 雑土上	HC-A15 貝層群 F3066	
94			口	口縁外反側・胴部直線の・口唇丸・粘土接合面(0.5cm幅)	21.6 -	0.6 -	細粒 中量	○		○				砂灰	両・黄茶褐色	外・指痕 内・内目指痕	HC-C10 V (後期層) 台9547・F1900	
95			口	口縁外反側・胴部々々直・口唇丸・粘土接合面不明(粘土幅3.0cm)	-	0.8 -	細粒 中量	○	△					砂灰	外・暗褐色 内・茶褐色	外・ナナ・指痕 内・指痕(外)・ナナ	HC-B16 貝層群5 F3853	
96			胴	口縁外反側(口唇直)・胴部直線の	12.8 (器底)	0.7 -	中粒 中量	○		○	△			砂灰	両・茶褐色	両・条痕	HC-T15 貝層群5 台10816	
97			口	口縁外反側・口唇丸・胴部々々直・(外)・外・曲沈没文・内・横位の沈没文	-	0.5 -	細粒 少量	△						砂	両・赤・赤褐色	両・ナナ	HB③ S9 量①(14) 台1632	
98			口	口縁外反・胴部直線の・口唇丸・内・外・沈没文(直)・口唇・朝実(横)	-	1.0 -	細粒 少量	△						砂	両・赤褐色	両・ナナ・指痕	HC-T16 貝層群2 台11064	
99			口	口縁直・口唇々々内直・外・沈没(曲)・小型	14.4 -	0.6 -	中粒 中量	△		○				砂灰	両・暗褐色	両・ナナ・指痕	HB③ R2 量①(7) 台725	
100			胴	口縁直・口唇直・外・沈没文(直)	-	0.5*0.9 -	粗・ 中量	○	△					砂灰	両・茶褐色	外・ハナナ 内・ハナナ	HB③ T6 量①(14) F1910	
第78期・ 土器版	101		口・ 底	口縁外反側・波状・上面・横位朝実・胴部々々直・底直(2.5cm幅)	22.8* 19.6 17.4	0.6 1.1 0.6	細粒 少量	△						砂	両・暗灰褐色	両・ナナ・指痕	HC-T16 貝層群4 HC-貝層群 台10632・F4529	
第74期・ 土器版	102		口	口縁外反側・胴部直線の・口唇丸・粘土接合面不明	-	0.5 -	細粒 中量	○	△					砂	両・灰茶褐色 (外は指痕不明)	両・ナナ・指痕	HC-A15 貝層群3 F2699	

◎:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 [土]土 [目]目 [指痕]指痕 [上]上 [下]下

第24表-5 土器 観察一覧

(質量単位:cm, g)

新編 図号	分類		部位	形態	質量		泥和材					器色		器面調整	遺跡・P13・J1層・遺構・台観(○・加番号)						
	大	小			口径 底径	器厚 底厚 重量	灰 含量	石 英	赤 色 粒	○ 角 質 土	砂 粒	その他	新土			外面 内面	外面 内面				
第28図・ 図版54	C		口	口縁外反部(底径)>胴部<や平底 口唇丸・粘土接合面不明瞭	-	0.5 37.0	細粒 多量	◎	△	○		砂	両-茶褐色	両-ナナ・指指痕 残付上付	HC T15 貝層群群5 台11301						
				口縁外反部(底径)<胴部<や平底 口唇丸・口唇・短く織文(斜長・2cm 径)>粘土接合面明瞭(3.5~1.0 cm幅)	-	0.5 26.2	細粒 少量	△						砂	外-茶褐色 内-茶褐色	両-ナナ・指指痕	HC C14 V(後期層) 台9627				
				口縁直・「J」字状外反・口唇丸・ 口唇・刺突文(横位・9mm・二文状 工具)	-	0.6 14.1	中粒 少量	△						砂灰	両-茶褐色	両-指指痕明瞭	HC 貝層群群5 台3074				
				口縁外反・胴部直線の・口唇や 平丸・外・文状(横位)>横位<口 唇・刺突文	-	0.5 34.0	細粒 少量	△	△					砂灰	外-黄茶褐色 内-灰褐色	両-ナナ・指指痕	HC T16 貝層群群5 台650				
				口縁外反部・胴部直線の・口唇 丸・口唇・刻目(縦・横・先細部 平らな工具)	-	0.4 54.3	細粒 中量	○	△	△				砂	両-黄茶褐色	両-指指痕・○目	HC S14 貝層群群5 台4283				
				口縁外反・胴部直線の・口唇丸・ 口唇・指注文	-	0.5 31.3	中粒 少量	△						砂灰	両-黄茶褐色	両-ナナ・指指痕明瞭	HC C11 V(後期層) 台2915				
				口縁外反・口唇丸・外・器厚部 (縦・幅2.5cm)>横位(縦・幅)> 口唇・指注文・粘土接合面不明瞭	-	0.5 33.0	細粒 少量	△						砂灰	両-灰褐色	両-ナナ・指指痕	HC B15 貝層群群5 台3858				
				口縁外反部(底径)>口唇平・胴 部<や平底(底径)>口唇平・胴部 刺突文(有乳上下)に多少・外・内 (有乳)>内・下部平に窪付 部・大型	36.1 32.6	0.6 1.5 2700	細粒 中量	△						砂	両-茶褐色	両-ナナ・指指痕	HC I4+C14+I5+D14 V(後期層) 台3003地				
				口縁外反・口唇平・胴部直線・粘 土接合面明瞭・外・凸文(9mm 幅・平らな横位)	-	0.4 14.0	細粒 中量	○	△					砂	両-赤褐色	両-ナナ・指指痕	HC S10 器台(14) 台1608				
				口縁外反部(底径)<胴部直線<口唇 丸・粘土接合面不明瞭	-	0.5 73.1	中粒 中量	△						砂	両-黄茶褐色	両-ナナ・指指痕	HC C12 V(後期層) 台3543				
第29図・ 図版55	D		口	胴部直線の底径<はや平丸 >粘土接合面や中・明瞭(3.0 cm幅)	18.4 121.9	0.5 31.3	細粒 少量	△				砂	外-茶褐色 内-黄茶褐色	両-ナナ・指指痕	HC B15 V(後期層) 台3858						
				胴部や内底・胴部直線・粘土 接合面明瞭(1.0cm幅)>口唇 一箇体?	23.8 -	0.5 770.0	細粒 少量	△	△	△			砂灰	外-淡灰黄褐色 内-灰褐色	両-ナナ・指指痕	HC A15+A16+S15 貝層群群5 台4837地					
				口縁や内底・口唇丸(底径)> 胴部直線(出寸・無文・径114)> 口唇	3.8 -	1.0 26.0	細粒 中量	△	○					砂	両-茶褐色	両-ナナ・指指痕	HC A15 貝層群群5 台10852				
				口縁内底・口唇丸・無文	5.8 -	1.1 21.2	中粒 少量	△	△	△				砂	赤褐色	両-ナナ・指指痕	HC A16 貝層群群5 台2823				
				口縁「J」字状外反・厚手・無文・ 内・調整部	-	0.6 127.8	中粒 多量	△	◎					砂灰	外-茶褐色 内-灰褐色	外-ナナ・内 内-ナナ・指指痕	HC S10 Q19 器台(14) 台1285				
				口縁直・胴部ナナ層・短時・口唇 丸	6.2 -	0.5 75.2	細粒 少量	△	△	△				灰砂	両-茶褐色	両-ナナ・指指痕	HC C9 V(後期層) 台3140				
				器・口縁直・短時・ナナ層・胴中央 部で直線・粘土接合面明瞭・左 石多量	4.4 -	0.4 732.0	細粒 中量	○	○	△				砂	両-赤褐色	両-ナナ・指指痕	HC S10 器台(14) 台1825				
				胴部直・胴部や内底・外・凸 文(横位・幅7mm)	6.1 (器厚)	0.8 14.0	中粒 中量	△	○					砂	両-赤褐色	両-ナナ・指指痕	HC A15 貝層群群5 台11233				
				胴部直・胴部直線(強)>外・文状 (直・不規則)	8.0 (器厚)	0.8 72.9	中粒 少量	△	△					砂	両-黄灰褐色	外-ナナ・内 内-ナナ・指指痕	HC A15 貝層群群5 台10190, 42457				
				器・口唇破断・「J」字状に横 ・無文・厚手	-	1.4 32.2	細粒 少量	△	△	△	△			砂	両-茶褐色	両-ナナ・指指痕	HC S7 器台(14) 台1281				
第30図・ 図版56	D		口	無筋部「J」字状・口唇破断・外 ・高口縁文	-	0.7 44.1	細粒 少量	△				砂灰	両-黄褐色	両-ナナ・指指痕	HC S7 器台(14) 台1281 HC S7 器台(14) 台1210, 1529						
				直形・口縁直・口唇平・底径<平 底	10.2 2.5	0.4 1.2 10.0 69.8	中粒 少量	○	△				砂	両-茶褐色	両-ナナ・指指痕	HC S7 器台(14) 台2519					
				口縁直・胴部直線・底径平直・外 底実心・口唇破断部(高口縁 以上)>無文・シコナフ	3.0 (器厚)	0.4 0.9 17.8	細粒 少量	△	△					砂	両-茶褐色	外-ナナ・内 内-ナナ・指指痕	HC 貝層群群2 台3079				
				口縁内底・胴上部直線の・下部 実心・口唇丸・底径実底(底径 平丸)>シコナフ	2.8 1.2	0.4 1.1 41.0	細粒 少量							砂	外-黄茶褐色 内-黄褐色	両-ナナ・内 内-ナナ・指指痕	HC C14+I4 V(後 期層) 台2883, 229, 245				
				口縁外反部・胴部<口唇・胴部 直線・粘土接合面明瞭・口唇 丸・内・底径(縦・幅1.2cm)> 内文(縦・幅)・厚手	28.0 -	1.1 249.0	細粒 多量	◎	△	△				砂灰	両-淡灰黄褐色	両-ナナ・指指痕	HC S14+T15 貝層群 群5 台4810地				
				第31 図版57	A	口	胴	口縁外反部(底径)>口唇平・胴 部直線・粘土接合面不明瞭	-	0.5 37.0	細粒 多量	◎	△	○		砂	両-茶褐色	両-ナナ・指指痕 残付上付	HC T15 貝層群群5 台11301		
								口縁外反部(底径)<胴部直線<口唇 丸・口唇・短く織文(斜長・2cm 径)>粘土接合面明瞭(3.5~1.0 cm幅)	-	0.5 26.2	細粒 少量	△					砂	外-茶褐色 内-茶褐色	両-ナナ・指指痕	HC C14 V(後期層) 台9627	
								口縁直・「J」字状外反・口唇丸・ 口唇・刺突文(横位・9mm・二文状 工具)	-	0.6 14.1	中粒 少量	△						砂灰	両-茶褐色	両-指指痕明瞭	HC 貝層群群5 台3074
								口縁外反・胴部直線の・口唇や 平丸・外・文状(横位)>横位<口 唇・刺突文	-	0.5 34.0	細粒 少量	△	△					砂灰	外-黄茶褐色 内-灰褐色	両-ナナ・指指痕	HC T16 貝層群群5 台650
								口縁外反部・胴部直線の・口唇 丸・口唇・刻目(縦・横・先細部 平らな工具)	-	0.4 54.3	細粒 中量	○	△	△				砂	両-黄茶褐色	両-指指痕・○目	HC S14 貝層群群5 台4283
口縁外反・胴部直線の・口唇丸・ 口唇・指注文	-	0.5 31.3	中粒 少量					△						砂灰	両-黄茶褐色	両-ナナ・指指痕明瞭	HC C11 V(後期層) 台2915				

◎:非常に多い ○:多い △:多少 △:僅少 [出土地] 内:P13取上番号 外:貝層番号

第IV章  
3

第24表-6 土器 観察一覽

(質量単位:cm,g)

国号 国名	分組		部位	形態	法量							原料					器色		器面装飾	遺跡・マウンド・層・遺構・台帳の番号
	大	小			口径 高さ 底径	器厚 底厚 重量	粒度 含量	石英	赤色 粘土	黄 褐色 石	砂 粒	その他	粘土	外面 内面	外面 内面					
第12国・ 国名	A	口	口縁外反・口唇丸・厚手・外- 内径4.5cm-具の縁部縮減文 具の厚手	-	1.0 24.2	細砂 少量	△		△		砂泥	両-黄褐色	両-ナナ	指環痕	HC A15 V (後期層) J2907					
			口縁外反・口唇舌・厚手、内- 沈線文(低凸)	-	0.9 9.3	中粒 多量	○		△	○		砂	両-黄褐色	両-ナナ		HC B10 台10327				
			胴-内溝・胴-く字状屈曲・厚手、 外-外部に彫刻状の沈線(幅2 mm)	15.4 (胴径)	0.8 58.6	中粒 中量	△						砂	両-黄褐色	両-ナナ	指環痕	HC F18 台7475			
		胴	外-凸条文(縁位に連続)-その上 に曲線文	-	0.9 59.2	粗粒 中量	△	○		△		砂	両-黄褐色	両-ナナ	指環痕	HC H19 J41				
			外-沈線文(曲・不規則)	-	1.0 31.9	細粒 中量	○	△				砂・ 泥	両-黄褐色	両-ナナ	指環痕	HC T14 具層群5 台10869				
		胴	外-外部に幅状沈線(5mm)を横 位に連続-その上に斜位の沈線 (3mm)	29.6 (胴径)	0.6~1.0 90.7	中粒 中量	○			△		砂	外-黄褐色 内-赤褐色	両-ナナ	指環痕	HC B17・C16 V (後 期層)J1162,100				
			口縁外反・口唇丸(粘土胎丸) 内-縦・斜位に深い沈線2.5cm ×4cm幅(口)	-	0.7 11.3	中粒 多量	◎		○	△	大山 ゴツ	砂	外-黄褐色 内-黄褐色	両-ナナ	指環痕	HC C16 V (後期層) J2713				
		胴	外-縁位の沈線の後に斜位の沈 線を2条1能で施文・図134の例?	-	0.7 32.6	中粒 多量	◎		○	△	大山 ゴツ	砂	外-黄褐色 内-黄褐色	両-ナナ	指環痕	HC 台10160				
			口 外-縁位の凸条文連続	-	0.7 35.6	中粒 多量	○		○	△	茶色 粘土	砂	両-黄褐色	両-ナナ	指環痕	HC S14 具層群5 J4524				
		胴	外部外反・粘土接合面明瞭・外- 縁付文上に5mm幅の沈線文(毛 の)上に沈線文(断面状)内-沈 線文(曲)	-	3.1 53.1	中粒 多量	◎		△			砂	外-黄褐色 内-赤褐色	両-ナナ	指環痕	H2② H8 器(T) J774				
			外-不規則な押引文。(幅6~9 mm)	-	- 25.6	粗粒 中量					紫段 △	砂	両-黄褐色	両-ナナ	指環痕	HC 台10889				
		第12国・ 国名	C	口	口縁外反・胴部赤心・口唇丸(口 唇に沿って粘土胎丸)内-ナ ナ目明瞭・粘土接合面不明瞭	27.0 143.5	0.6 143.5	細粒 少量	△		△		砂	両-黄褐色	外-ナナ	指環痕 内-ナ目明瞭	HC E13+E14+D13 V (後期層) J2307他			
					口縁外反・胴部赤心・口唇丸 粘土接合面不明瞭・厚手・大型	29.6 181.9	0.5 181.9	細粒 中量	○		○	△		砂	両-黄褐色	両-ヘナナ(胴部) 内面は不明瞭	HC C14+C15 V (後 期層) J2099他			
口	口縁外反・胴部やや赤心・口唇丸			24.2 62.3	0.5 62.3	細粒 少量	△	△		△		砂	外-黄褐色 内-黄褐色	両-ナナ		HC A15 具層群5 J3732,3735				
	口縁外反・胴部赤心・口唇丸、 口唇-折戻文			29.8 54.5	0.8 54.5	細粒 少量	△	△		△		砂	外-黄褐色(内) 内-黄褐色	両-ナナ	指環痕	HC A16 具層群5 J4121				
口 底	口縁や今面・上面内反・口唇丸 縁・胴部の赤心・底部は尖底 想定・中型			16.2 17.2 (推定)	0.6 549.5	細粒 少量						泥	両-黄褐色	両-ナナ目明瞭 (外-縁、内-縁-折)		HC T15 具層群5 HC T14 具層群 J4794 台11261				
	口縁外反・口唇や今面、胴部 屈曲粘土胎2.5cm幅)			11.4 37.4	0.6 37.4	中粒 中量	○	○	△			砂	両-黄褐色	両-ナナ	指環痕	HC S14 具層群5 台10825				
口	口縁外反・胴部やや赤心(粘 土胎3.0cm幅)・口唇舌			16.0 43.1	0.7 43.1	細粒 中量	△	○		△		砂	両-黄褐色	両-ナナ	指環痕	HC B16 器(ゴツ) J9300				
	口縁外反・胴部やや赤心(粘土 胎3.0cm幅)口唇丸・注口有・均			17.8 102.7	0.5 102.7	中粒 中量	○	△	△			砂	両-黄褐色	両-ナナヘナナ	指環痕	HC T15 具層群5 J4492				
口	口縁外反・口唇丸・胴部屈曲(粘 土胎3.5cm幅)			22.2 46.9	0.6 46.9	細粒 少量	△					砂泥	両-黄褐色	両-ナナ	指環痕	HC A15 具層群5 J762				
	口縁外反(底付)・口唇丸・胴部 屈曲(粘土胎2.5~3.0cm幅)			26.4 31.4	0.5 31.4	細粒 少量	△		△			砂	外-黄褐色 内-黄褐色	両-ナナ	指環痕	HC A16 具層群5 J4161				
口	口縁外反(底付)・胴部やや赤心・ 口唇丸・外-逆リ字状凸条文			18.0 23.5	0.7 23.5	細粒 少量	△			△		砂	両-黄褐色	両-ナナヘナナ	指環痕	HC T15 具層群5 J4306				
	口縁外反・胴部赤心・口唇舌			18.0 44.0	0.6 44.0	中粒 中量	○					砂	両-黄褐色	両-ナナ	指環痕	HC B15 V (後期層) J4263				
口	口縁外反・口唇丸・胴部やや赤心 外-折目文(縁位)・粘土接合 面やや明瞭(3.0cm幅)			19.4 38.7	0.6~0.8 38.7	細粒 少量						泥	両-黄褐色	両-ナナ	指環痕	H2② H7 器(口) J1348+J1353,1343				
	口縁外反・胴部やや赤心・口 唇丸	-	0.6 71.0	中粒 中量	△	○	△	△		砂	外-黄褐色 内-赤褐色	両-ナナ	指環痕	HC A16 具層群5 J4159						
口	口縁外反・口唇丸・胴部赤心・粘 土接合面不明瞭	20.6 98.9	0.8 98.9	細粒 少量	△	△		△		砂泥	両-赤褐色	両-ナナ	指環痕	H2② B1 器(口) J1949						

◎:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 [出土層] F:ドット取上番号 カ:片番号

第24表-7 土器 観察一覧

(質量単位:cm,g)

国号 国名	分期		部位	形態	法量							原料					器色		器面磨飾	遺跡・土器の番号・ 遺構・台帳の番号
	国番号	大 小			口径 高さ	器厚 底厚	容積 重量	灰 含量	石 英	赤 色 粘 土	白 色 粘 土	砂 粒	其 他	新 土	外 面 内 面	外 面 内 面				
第34国・ 国名59			口	口縁外反(上縁)・口唇凸・胴部 直線的	0.8	0.8	中	△	△	△		砂	灰	外-黄茶褐色	外→下・指頭 内→下→目?	HB25 S14 Ⅱa(14) F1106				
					1.0	1.0	中	△	△		茶色 粘	砂	灰	外-淡褐色	外→下? 外 内-指頭痕跡	HC T15 貝層群5 F4477				
					0.6	0.6	中	△						灰	外-暗茶褐色 (内-煤片着)	外→下?・指頭		HC S14 貝層群2 F4082		
					0.8	0.8	中	△						砂	外-暗茶褐色	外→下?・指頭		HB25 S5 Ⅱa(14) F1883		
第34国・ 国名60	F		口	口縁外反(上縁)・口唇凸・胴部 直線的・厚手	1.0	1.0	中	△	◎			砂	外-暗茶褐色 内-暗褐色	外→下?・指頭	HB25 R19 Ⅱa(14) F1174					
					0.8	0.8	中	△						灰	外-茶褐色		外→下? 内→目・指頭痕	HB25 R17 Ⅱa(14) F913		
					0.6	0.6	細	△	△	△				砂	灰		外-暗灰褐色	外→下?・指頭	HC T15 貝層群5 F4836	
					0.5	0.5	細	△							砂		外-暗褐色	外→下?・指頭	HC T16 貝層群4 F4663	
					0.5	0.5	細	△							砂		外-暗褐色 内-茶褐色	外→下?・指頭	HC A15 貝層群3 F2690	
					0.6	0.6	中	△	△	△					砂		外-暗褐色	外-指頭痕→下??	HC R14 V(後期) F2243	
					0.6	0.6	中	△							砂		外-赤褐色	外→下?・指頭	HC T15 貝層群5 F10818	
					0.8	0.8	中	△							砂		外-灰茶褐色	外→下?・指頭	HB25 Q8 Ⅱa(14) F1286	
					0.9	0.9	中	△							砂		外-灰茶褐色	外→下?・指頭	HB25 Q8 Ⅱa(7) F423	
					0.5	0.5	中	△							砂		外-暗灰褐色 内-淡褐色	外→下?・指頭	HC S14 貝層群2 F10911	
					0.8	0.8	中	△							砂		外-灰褐色	外-指頭痕→目 内→下?・指頭	HC S14 貝層群5 F10842	
					14.4	0.5	細	△							砂		外-灰茶褐色	外-指頭痕→目 内→下?・指頭	HC A15 貝層群5 F4254	
					0.9	0.9	中	△							灰色 粘		砂	外-暗灰褐色 内-茶褐色	外→下?・指頭	HB25 R18 Ⅱa(14) F1268
					0.7	0.7	中	△							砂		外-暗褐色 内-茶褐色	外→下?・指頭	HB25 R12 Ⅱa(14) F1182	
					0.7	0.7	中	△							白色 粘		砂	外-茶褐色	外→下?・指頭 内→下?・指頭	HB25 T6 Ⅱa(14) F975
					第35国・ 国名61	IV	A?	口	口縁外反(上縁)・口唇凸・胴部 直線的	19.4	0.5	細	△					砂	外-暗茶褐色	外-指頭痕→目 内→下?・指頭
21.9	0.6	中	△	○						△	砂	外-黄褐色	外→目明瞭	HC D11+D1 V(後 期群) F26+626						
24.4	0.8	中	△											砂	外-暗茶褐色 内-茶褐色	外→目(縦) 内→目(斜)	HB25 I 台1406			
24.4	0.8	中	△											砂	外-暗茶褐色 内-灰褐色	外→目(縦)明瞭 内→目(斜)明瞭	HB25 A19 Ⅱa(14) HB25 A16 Ⅱa(13) F1629, F2162			
0.4	0.4	中	△											砂	外-黄茶褐色	外→下?・指頭	HB25 C8 Ⅱa(12) F954			
26.0	0.5	中	△	○						△	砂	外-黄茶褐色	外→下? 内→目明瞭(縦)	HB25 C8 Ⅱa(12) (13) 台1001,1436						
0.5	0.5	中	△											砂	外-暗茶褐色	外→目(縦)明瞭 内→目(斜)明瞭	HB25 A17 Ⅱa(14) F1361, F1555			
0.5	0.5	中	△											砂	外-暗茶褐色	外→目(縦)明瞭 内→目(斜)明瞭	HB25 A17 Ⅱa(14) F1361, F1555			
0.4	0.4	中	△											砂	外-暗茶褐色	外→目(縦)明瞭 内→目(斜)明瞭	HB25 A17 Ⅱa(14) F1361, F1555			
0.4	0.4	中	△											砂	外-暗茶褐色	外→目(縦)明瞭 内→目(斜)明瞭	HB25 A17 Ⅱa(14) F1361, F1555			

◎:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 (注:土器) F/P/F:取上番号 Ⅱ:目番号

第IV章  
3

第24表-8 土器 観察一覧

(数量単位:個, g)

第85回 土器 観察	分類		部位	形態	質量		素材					器色		器面調整	遺跡・P・F・層・遺構・台帳P・F番号			
	図番号	大 小			口径 器底径	器厚 器重量	灰 含量	石 灰	赤 色 粒	白 角 閃石 類	砂 粒	そ の 他	胎土			外面 内面	外面 内面	
第85回・ 図帳61	180		口	口縁外反(頸部)・口唇丸・胴部 縹赤・胴部縹赤	-	0.4 10.4	縹赤 少量		△		△	黄	両一次褐色	両十十	指頭焼	HC③ T4 Ⅱ(14) 台1704		
	181		口	口縁外反・口唇丸で直状(眉目 文・縹)	-	0.7 12.4	縹赤 少量	△			△	黄	両一次褐色	両十十	指頭焼	HC③ Q・T10 台503		
	182		口	口縁外反・胴部やや歪る・口唇 丸・外・逆ハ字状凸部文(上 に眉目文)	-	0.5 82.6	縹赤 中量	△	○	△		黄	外一次褐色 内一次褐色	両十十	指頭焼	HC D14 F14 V(後 期層) F2674他		
	183		口	口縁やや外反・口唇丸・胴部縹 赤・外・倒位の逆ハ字状凸部文 (上に眉目文)	-	0.6 73.2	中粒 少量	△			△	黄	両一次褐色 (内・煤付着)	両十十	指頭焼	HC C14 V(後期層) F4274		
	184		口	口縁外反・口唇丸・外・倒位文 (内・竹管状工具・縹)	-	0.6 8.1	縹赤 少量					黄	両一次褐色	両十十		HC③ B9 Ⅱ(12) F1438		
	185		口	口縁外反・口唇丸・外・縹赤状凸 部文・口唇丸(縹)	-	0.6 14.4	縹赤 少量	△			△	黄	両一次褐色	両十十	指頭焼	HC A16 貝層層群3 F3603		
	186		口	口縁外反・口唇丸・外・縹赤の沈 澱文(下に倒位文(倒位文は先端 点部迄))	-	0.5 13.6	縹赤 少量	△	△			灰色 粒 △	黄	両一次褐色	両十十	指頭焼	HC B10 V(後期層) F609	
	187		口	口縁外反・胴部くびれ・胴部縹 赤・口唇丸・外・倒位の凸部文 (上に眉目文)・倒位文・口唇丸 ・又状工具(縹)	-	0.5 57.7	縹赤 少量	△	△			黄	両一次褐色	両十十	指頭焼	HC A16 貝層層群5 台10194, 10196		
	188		口	口縁外反・口唇丸・又状工具 ・倒位文・縹赤・縹赤状凸部文・ 外・又状工具(縹)	-	0.5 8.6	縹赤 少量	△			△	黄	両一次褐色	両指頭焼		HC C14 V(後期層) 台9026		
	189		口	口縁外反・胴部くびれ・口唇丸・ 外・倒位文(縹)	-	0.6 8.6	縹赤 少量	△	△			黄	両一次褐色	両十十	指頭焼	HC G13 V(後期層) F1667		
第86回・ 図帳62	190	IV	口	口縁外反・胴部やや歪る・口唇 丸・外・口唇丸に眉目(縹赤)貼 厚・口唇丸(縹赤)貼厚	-	0.6 53.8	縹赤 少量	△				黄	両一次褐色	両十十	指頭焼	HC S14 貝層層群5 台10839		
	191		口	口縁やや外反・胴部くびれ・胴 部縹赤・口唇丸・外・倒位文 (縹・5cm・下部・下に縹赤の眉目 文)	26.2	0.5 82.5	縹赤 多量	○	○	△		黄	両一次褐色	両十十	指頭焼	HC A15 V(後期層) A15 貝層層群2 F2806, 2682		
	192		口	口縁外反・胴部くびれ・胴部縹 赤・口唇丸・外・倒位文 (縹・縹)	30.0	0.4 61.3	縹赤 中量	○	△	△		黄	外一次褐色 内一次褐色	両十十	指頭焼	HC D13 I 台10835		
	193		口	口縁外反・胴部やや歪る・口唇 丸	29.4	0.8 74.1	縹赤 少量	△	△	△		黄	両一次褐色	外十十	内十十	指頭焼	HC 貝層層群 F3187	
	194		口	口縁外反・胴部縹赤・口唇丸・小 型・外・縹赤状凸部文(口唇丸・ 眉目文)縹(縹)	11.0	0.4 5.4	縹赤 少量	△			△	黄	両一次褐色	両十十	指頭焼	HC A15 貝層層群3 台10889		
	195		口	口縁外反・口唇丸・倒位文・胴 部縹赤・胴部縹赤	-	0.6 8.7	縹赤 少量	△	△	△		黄	両一次褐色	外十十	内十十	指頭焼	HC③ D5 Ⅱ(10-11) 台1476	
	196		口	口縁外反・胴部縹赤・口唇丸・外 ・沈澱文(縹)・口唇丸(縹)・ 眉目文(縹)	-	0.6 21.7	縹赤 少量	△			△	灰色 粒 △	黄	両一次褐色	外十十	内十十	指頭焼	HC C15 V(後期層) F1910
	197		口	口縁外反・胴部くびれ・胴部縹 赤・口唇丸・外・凸部文(倒位文)	30.0	0.5 32.2	縹赤 少量	△	△	△		黄	両一次褐色	両十十	指頭焼	HC G14 V(後期層) F1666		
	198		口	口縁外反・口唇丸・胴部縹赤・ 胴部縹赤・縹赤	-	0.4 18.7	縹赤 少量	△	△		△	黄	両一次褐色	両十十	指頭焼	HC③ A2 Ⅱ(14) F1286		
	199		口	口縁外反・胴部縹赤・口唇丸・外 ・沈澱文(縹)・口唇丸(縹)・ 眉目文(縹)	12.4	0.4 8.3	縹赤 少量	△			△	黄	両一次褐色	両十十	指頭焼	HC A16 V(後期層) F1652		
200		外	外・押し引き文(縹赤)・甲型工具	-	0.7 11.0	縹赤 中量	△	○	△		黄	外一次褐色 内一次褐色	両十十	指頭焼	HC A16 貝層層群3 F3603			
第87回・ 図帳63	201	A7	頸	頸部外反・外・縹赤の凸部文 (その上に直状の沈澱文)	-	0.6 34.2	縹赤 中量	△	○	△		黄	両一次褐色	両十十	指頭焼	HC③ R5 Ⅱ(14) F1709		
	202		口	口縁逆ハ字状外反・口唇丸(縹 赤)・外・倒位文(縹)	16.6	0.6 19.9	縹赤 中量	△	△	△	黄 白 粒 ○	黄	外一次褐色	両十十	指頭焼	HC③ R19 Ⅱ(14) F1290		
	203		口	口縁逆ハ字状外反・口唇部 部やや歪る・口唇丸(縹赤)	25.2	0.5 50.2	縹赤 中量	△	○	△		黄	外一次褐色 内一次褐色	両十十	指頭焼	HC③ S2 Ⅱ(17) F2 Ⅱ(13) 台965, F354, 376		
	204		口	口縁外反・胴部縹赤・口唇丸・ 外・縹赤(縹・縹・5cm前後)	26.6	0.5 114.9	中粒 中量	△	○	△		黄	両一次褐色	両十十	指頭焼	HC D8 V(後期層) F3397, 3358		
	205		口	口縁逆ハ字状外反・口唇部 部縹赤的	24.8	0.5 26.6	中粒 多量	△	○	△		黄	両一次褐色	外十十	内十十	指頭焼	HC③ R1+R15 Ⅱ(14) F1838, 台1229 R1 Ⅱ(18) 台1753	

○:非常に多い, ○:多い, △:少ない, △:僅少 (出土品)のF/F:出土番号 外:外番号

第24表-9 土器 観察一覧

(質量単位:cm, g)

国産 図録 図番 号	分類		部位	形態	法量		泥和材						器色		器面質感		遺跡・F・G・層・遺構・台帳ID・市番号
	大	小			口径 高さ 底径	器厚 器底 重量	灰 含量	石 灰	赤 色 粘 土	白 色 粘 土	砂 粒	その他	粘土	外面 内面	外面 内面		
第78回・ 図録63	A7		口	口縁部<字状凸縁>口唇・ 胴部直線的	19.2	0.5	-	-	中粒	△	○	△	砂	両<灰褐色>	両<ナ>	指頭痕	HB2 87・C7 Ⅱ (12) R9 98 Ⅱd(14) R9 IV(17) F2348
				口縁外反<口唇丸>外<幅広 文様(2mm 二又状工具)>	-	0.5	-	-	中粒	△	○	△	砂	外<暗褐色 内<黄褐色>	両<ナ>	指頭痕	HC G13 V(後果層) F1272
				口縁部<口唇丸>外<幅広文様 (口唇・刻目)>	-	0.6	-	-	細粒	△	△	△	砂	両<赤褐色>	外<ナ> 内<ナ>	口唇(痕)	HB2 89 Ⅱd(14) 台1627
				口縁<今外反>胴部直線的<口 唇丸刻目文>不揃い<彫刻>外<彫 刻状文様(長尺)>	-	0.4	-	-	細粒	△	-	-	砂泥	両<黄褐色>	両<ナ>	指頭痕	HC D8 V(後果層) F2359
				口唇部<胴部直線的>口唇部<削 削文><幅広凸部文(斜位)上に 削削文>外<長尺)>	-	0.7	-	-	中粒	△	○	△	砂	両<黄褐色>	両<指頭痕>	指頭痕	HC C14 V(後果層) F372
	B		口	口縁部<口唇丸>外<彫刻>の 凸部文(上に刻目文)<削削文> <口唇・刻目文>	-	0.5	-	-	細粒	△	△	△	砂泥	両<赤褐色>	両<指頭痕>	→口唇	HC E14 V(後果層) F3209
				口縁部<口唇丸>外<彫刻>の 凸部文(斜位)上に削削文<口 唇・刻目文等)>	-	0.5	-	-	細粒	△	△	△	砂泥	両<黄褐色>	両<指頭痕>	指頭痕	HC C10 V(後果層) F3521
				口縁部<口唇丸>外<彫刻>の 凸部文	-	0.5	-	-	細粒	△	△	△	砂	外<赤褐色 内<黄褐色>	両<ナ>	指頭痕	HC A15 貝層群群5 台10185
				口縁内側<口唇丸>外<彫刻>の 凸部文(上は無文)	-	1.3	-	-	中粒	△	○	△	砂	両<赤褐色>	外<ナ> 内<ナ>	指頭痕	HC S14 貝層群群2・ D13 V(後果層) 台10943, F2303
				口縁部<口唇丸>外<彫刻>の 凸部文(幅広凸部文(3mm) 有孔(壁不明)内<外に穿孔)>	-	0.7	-	-	細粒	△	△	△	砂泥	両<黄褐色>	両<ナ>	指頭痕	HC T15 貝層群群2 台10136
	IV	A-B	側	外<凸部文(方形)>上に刻目 文	-	0.5	-	-	細粒	△	△	△	砂	両<灰褐色>	両<ナ>	指頭痕	HC T14 貝層群群2 台11004
				胴部<凸部文(縦)上に削削文>	-	0.5	-	-	細粒	△	△	△	砂泥	両<黄褐色>	両<→ナ>	指頭痕	HB2 S10 Ⅱb(5) F398
				外<削削文(幅広)>二又状工 具(削削)	-	0.5	-	-	細粒	△	△	△	砂	両<灰褐色>	両<ナ>	指頭痕	HC C16 V(後果層) F333
				外<今や彫削部(1mm)の短状 文を横位>その下に彫削文(溝 文)	-	0.5	-	-	中粒	△	△	△	泥砂	外<暗褐色 内<灰褐色>	両<→口唇(痕)>	指頭痕	HT14 T1 Ⅱd(14) 台1635
				胴部直<粘土層(面)>彫削部 <外<文様(文)>彫削)>	0.6	1.0	-	-	中粒	△	△	△	砂	外<赤褐色 内<灰褐色>	外<ナ>	指頭痕 内<→口唇(痕)>	HB2 A7 Ⅱb(5) 台1481
胴部<今外反>外<文様(面) (彫削)>				-	0.9	-	-	中粒	△	△	△	砂	外<赤褐色 内<灰褐色>	外<ナ>	指頭痕 内<→口唇(痕)>	HB2 S8 Ⅱc(7) 5674,1373	
口縁部<口唇部(外)>三角状 削削文<その下に幅広文様(4 mm)>				-	0.6	-	-	細粒	△	△	△	砂泥	外<黄褐色 内<黄褐色>	両<ナ>	指頭痕	HB2 C5-7 Ⅱc 6,191群 台7 R9 Ⅱa上 F2929	
口縁部<口唇丸(彫削)>内外<花 状の文様>口唇<文様(模)>棒状 工具				-	0.5	-	-	細粒	△	△	△	砂泥	両<赤褐色>	両<ナ>	指頭痕	HC C10 F230	
口縁内側<口唇に<粘土層(付)> <口唇丸>外<文様(文)>彫削)>				-	1.0	-	-	細粒	△	△	△	砂	両<灰褐色>	両<ナ>	指頭痕	HB2 S7 Ⅱd(14) F1538	
口縁部<口唇丸>胴部<口唇丸>外 <文様(面)>				-	0.5	-	-	中粒	△	△	△	砂	外<黄褐色 内<黄褐色>	両<ナ>	指頭痕	HB2 S9 Ⅱd(14) F1661	
C		側	口縁部<口唇丸>外<彫削部 (上)>斜位の細状文様(文)	-	0.4	-	-	細粒	△	△	△	砂泥	外<暗褐色 内<黄褐色>	両<ナ>	指頭痕	HB2 A6 Ⅱb(12) 台1067	
			口縁内側<口唇丸>外<凸部文 (面)><彫削文(斜位)>	-	0.4	-	-	中粒	△	○	△	砂	外<黄褐色 内<赤褐色>	両<ナ>	指頭痕	HC S14 貝層群群4 台10747	
			口縁内側<胴部>直線<口唇丸 >内外<彫削文(面)>	-	0.7	-	-	細粒	△	△	△	砂	両<赤褐色>	両<ナ>	指頭痕	HC A15 貝層群群3 5688	
			口縁部<口唇丸>外<文様(模) (彫削)>	-	0.4	-	-	中粒	△	○	△	泥砂	両<黄褐色>	両<ナ>	指頭痕	HB2 S8 Ⅱd(14) 台1520	
			口縁内側<胴部直線の>口唇 (面)>	21.4	0.5	-	-	中粒	△	○	△	砂	両<黄褐色>	両<→口唇(痕)>	指頭痕	HC B16/C15 V(後 果層) F2299B	
第88回・ 図録64			口	口縁外反<彫削>長柄<ナ>	5.4	0.5	-	-	細粒	△	△	△	砂	両<黄褐色>	両<ナ>	指頭痕	HC E14 V(後果層) F9989, F2182
				口縁<今外反>短柄<ナ>	4.6	0.4	-	-	細粒	△	△	△	砂	両<黄褐色>	両<ナ>	指頭痕	HC C11 V(後果層) F9996
				口縁丸<外削削文(削削文)> <彫削)>	-	7.8	-	-	細粒	△	△	△	砂	両<黄褐色>	両<ナ>	指頭痕	

◎:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 [出土層] ドット記号上番号 丸:市番号

第24表-10 土器 観察一覧

(質量単位:cm, g)

国産 図番号	分組		部位	形態	法量							原料					器色		器面磨飾	遺跡・博物館・蔵 造標・台帳No・図番号
	大	小			口径 器底径	器厚 器底厚	口縁 底径	石 英	赤 色 粘 土	角 閃 石	砂 粒	その他	胎土	外面 内面	外面 内面					
第90図・ 図版65	D (器)	IV	口	口縁外反・短頸・ナブ肩・割文(縦位に2筋)	8.4 - 6.6	0.4 - 6.6	細砂 少量	○	○	△	△	砂	黄-黄褐色	黄→ナブ	HC B13 V (後期層) F406					
				口縁外反・口唇丸・短頸・ 石縁今令に張り出す・無文	5.7 - 12.4	0.5 - 12.4	細砂 少量	○	○	△	△	砂	黄-黄褐色	外→ナブ・指頭 内→目模	HC② T18 Ⅱa(15) F2469					
				短頸・字状外反・口唇縁・ 外・沈線文(器口・横位・浅目)	- - 30.0	0.7 - 30.0	中粒 少量	△	○	△		砂	黄-黄褐色	黄→ナブ・指頭	HC② S7 Ⅱa(14) F1361					
				口縁直・短頸・口唇丸・外・沈線 (不規則)・口唇・割文(文・又状 工具)	6.0 - 7.3	0.6 - 7.3	細砂 少量	△	△	△	△	砂	黄-黄褐色	黄→ナブ・指頭	HC B15 V (後期層) F1107					
				口 口縁直・短頸・口唇丸・無文	7.2 - 12.6	0.7 - 12.6	細砂 少量	△	△	△		砂	黄-赤褐色	黄→ナブ・指頭	HC S15 Ⅱ層Ⅱ群2 F4139					
				口 口縁直・短頸・ナブ肩・外・凸唇文 (口唇・横位の2筋)	5.2 (器底)	0.7 (器底)	細砂 少量	△	△	△		砂	黄-黄褐色	黄→ナブ・指頭	HC B14 Ⅱ層Ⅱ群2 F4038					
				口 短頸に1.6cm幅の凸唇文彫刻 (上に割文・車輪工具)	- - 27.4	0.5 - 27.4	細砂 少量	○	△	△	△	砂	黄-黄褐色	黄・指頭	HC② T10 Ⅱa1035					
	D (器)	A	口	無彫・今令内高・ナブ肩・口唇丸・ 外・凸唇文(器口・上に割文)・上 下に短沈線(不規則)・無	6.8 - 26.0	0.4 - 26.0	細砂 少量	△	△	△	△	砂泥	黄-黄褐色	黄→ナブ・指頭	HC D11 V (後期層) F2526					
				無彫・内高・口唇丸・外・凸唇文 (口唇・横位の2筋)	3.4 - 8.0	0.5 - 8.0	細砂 少量					砂	黄-赤褐色	黄→ナブ・指頭	HC T14 V (後期層) F1765					
				無彫・内高・ナブ肩・外・凸唇文 (上に押印文・先端平ら・工具・沈 線文(横・面))	2.8 (器底)	0.5 (器底)	細砂 少量	△	△	△		砂泥	黄-黄褐色	黄→ナブ・指頭	HC T14-T15 Ⅱ層 Ⅱ群2 F2643他					
				無彫・内高・短頸・一環口(口唇 外・外・凸唇文(横・面))	4.2 - 6.9	0.4 - 6.9	細砂 少量	△	△	△		砂	黄-赤褐色	黄→ナブ・指頭	HC T15 Ⅱ層Ⅱ群5 F10813					
				口縁外反・口唇丸・短頸・縁直・ 割部・外・凸唇文(目模)	15.6 - 29.3	0.7 - 29.3	細砂 少量	△	△	△		泥	黄-黄褐色	外→目(縦・明瞭) 内→目(横・明瞭)	HC② T3 Ⅱa(14) F2496					
				口縁外反・口唇丸・短頸・縁直・ 割部・厚縁	17.4 - 22.9	0.4 - 22.9	細砂 少量	△	△	△		泥砂	黄-黄褐色 内・灰褐色	外→ナブ 内→目模	HC② A18 Ⅱa(15) F2164					
				口縁外反・口唇丸で波状・短頸 縁直・割部・縁直・無文・小型	11.2 - 32.1	0.6 - 32.1	細砂 少量	○	△	△	△	砂	黄-黄褐色 内・灰褐色	外→ナブ・指頭 内→目模	HC② A16 Ⅱa(14) F1289					
V	B	口	口縁外反・口唇丸・外・不規則 形(沈線・口唇・割目文(等間 隙))	- - 17.2	0.4 - 17.2	細砂 少量	△	△	△	△	泥	黄-黄褐色 内・灰褐色	黄→ナブ・指頭	HC C13 V (後期層) F1796						
			口縁外反・口唇丸・外・不規則 形(口唇・割目文)	- - 6.2	0.4 - 6.2	細砂 少量	△	△	△	△	泥砂	黄-黄褐色	外→目(明瞭) 内・指頭	HC T15 Ⅱ層Ⅱ群2 F11033						
			口縁直・口唇丸(割目文・縦)	16.8 - 16.3	0.4 - 16.3	細砂 少量	△	△	△	△	砂泥	黄-赤褐色	黄→ナブ・指頭	HC② S8 Ⅱa(14) F1529						
			口縁外反(波状)・口唇丸・短頸 縁直・割部・縁直	- - 25.5	0.5 - 25.5	細砂 少量					泥	黄-灰褐色	外→目(不規則) 内→目模	HC② A18 Ⅱa(14) F1803						
			口縁直・口唇丸・外・割部 縁直・割部・縁直・無文・小型	11.2 - 21.8	0.4 - 21.8	細砂 少量	△	△	△	△	泥砂	黄-黄褐色	外→目(縦) 内→目模	HC D13 V (後期層) F2303						
			口縁外反・口唇丸・外・不規則 形(口唇・割目文)	- - 17.2	0.4 - 17.2	細砂 少量	△	△	△	△	泥	黄-黄褐色	黄→ナブ・指頭	HC C13 V (後期層) F1796						
			口縁外反・口唇丸・外・不規則 形(口唇・割目文)	- - 6.2	0.4 - 6.2	細砂 少量	△	△	△	△	泥砂	黄-黄褐色	外→目(明瞭) 内・指頭	HC T15 Ⅱ層Ⅱ群2 F11033						
第90図・ 図版66	D (器)	C	口	口縁直・口唇丸(割目文・縦)	16.8 - 16.3	0.4 - 16.3	細砂 少量	△	△	△	△	砂泥	黄-赤褐色	黄→ナブ・指頭	HC② S8 Ⅱa(14) F1529					
				口縁外反(波状)・口唇丸・短頸 縁直・割部・縁直	- - 25.5	0.5 - 25.5	細砂 少量					泥	黄-灰褐色	外→目(不規則) 内→目模	HC② A18 Ⅱa(14) F1803					
				口縁直・口唇丸・外・割部 縁直・割部・縁直・無文・小型	11.2 - 21.8	0.4 - 21.8	細砂 少量	△	△	△	△	泥砂	黄-黄褐色	外→目(縦) 内→目模	HC D13 V (後期層) F2303					
				口縁直・口唇丸・外・薄手	- - 7.5	0.4 - 7.5	細砂 少量	△	△	△	△	砂	黄-赤褐色	黄→ナブ・指頭	HC② T4 Ⅱa(15) F2139					
				口縁外反(波状)・口唇丸	- - 4.7	0.3 - 4.7	細砂 少量	△	△	△	△	砂	黄-赤褐色 内・灰褐色	黄→ナブ・指頭	HC② R8 Ⅱa(14) F1471					
				口縁外反・短頸直・口唇丸・ 小型	4.4 - 3.9	0.4 - 3.9	細砂 少量					泥	黄-灰褐色	黄→目	HC② T18 Ⅱa(14) F1680					
				口 口縁片口(縦長・寸割)・無文	8.4 (器底)	0.5 (器底)	細砂 少量	△	△	△		泥砂	黄-灰褐色	外→目(縦・明瞭) 内→目(横・明瞭)	HC② D8 Ⅱa(12) F0966					
D (器)	口	口縁外反・短頸・ナブ肩・割部 縁直・口唇丸・左右形状波状・外→ 目(明瞭)	10.1 - 23.8 (器底)	0.6 - 1092 (器底)	細砂 少量	△	△	△	△	泥	黄-黄褐色	外→目(明瞭) 内→ナブ	HC D10-D11-D12 V (後期層) F2062他							

○:赤紫に染み ○:赤み △:少砂 △:僅少 △:少量 [胎土] F:Fの取上番号 各:各番号



第24表-11 土器(底部) 観察一覽

(法量単位:cm,g)

器種	図番	分類		形態	法量		混和材							胎土	彩色		器種・グリッド・層 遺構・台(ワグ)番号
		大	小		底径 底厚	底径 底厚	灰 含量	石 質	角 閃石 五・	赤 色 粘 土	白 色 粘 土	砂 粒	其 他		外 面 内 面	外 面 内 面	
第90回 調査 成果	257	丸底	-	外底平丸・内底平丸 底厚やや厚い	-	-	細粒 多量	○	○					砂 (強)	灰-淡褐色	灰-細粒質	HB③ Q16 Ⅱa 77
				外底丸・底厚やや厚い 立ち上がり(急・ゆるい)	11.2	1.0	細粒 中量	○							砂	灰-暗茶褐色	外・ナ 内・ナ(放射状)
	258	-	外底丸・底厚薄い 立ち上がり(急・ゆるい)	-	0.4	粗粒 少量	○							砂	灰-黄茶褐色	外・ナ 内・ナ(放射状)	HC S14.T14 貝層群4 HC S14 貝層群2 HC S14 貝層群1 74194B
			外底丸(上1/3底) 底厚薄	-	0.7	細粒 中量	○	△						砂	灰-赤褐色	灰-細粒質	HB③ Q14 Ⅱa 41.0 71948
	261	-	外底丸・底厚厚い 立ち上がり(緩やか)	-	0.7	粗粒 多量	△		○		黒色粒			砂	外-赤褐色 内-淡茶褐色	灰・ナ <sup>+</sup> ・細粒質	HB③ R9 Ⅱa(14) 71727
			外底丸・底厚やや厚い 立ち上がり(緩やか)	-	0.7	中粒 中量	○			△				砂	外-赤褐色 内-暗褐色	外・ナ <sup>+</sup> ・細粒質 内-暗褐色	HB③ S6 Ⅱa(14) 71797
	262	-	外底丸・底厚厚い 立ち上がり(緩やか)	-	0.9	中粒 中量	○	△			灰山石 3.5			砂	外-暗茶褐色 内-暗茶褐色	外・ナ <sup>+</sup> ・細粒質 内・ナ <sup>+</sup>	HB③ A18 Ⅱc(7) 71919
			外底丸・底厚厚い 立ち上がり(緩やか)	-	0.5	中粒 中量	○				黒色粒 △			砂	外-茶褐色	灰・ナ <sup>+</sup> ・細粒質	HB③ R9 Ⅱa(14) 71716
	263	-	外底丸・底厚厚い 立ち上がり(急・ゆるい)	-	0.6	中粒 少量	△				△			砂	灰-暗茶褐色	灰-細粒質	HB③ S9 Ⅱa(15) 72511
			外底丸・底厚厚い 立ち上がり(急・ゆるい)	-	0.4	粗粒 少量	△				△			砂	外-茶褐色 内-黄茶褐色	外・ナ <sup>+</sup> 丁字 内・ナ <sup>+</sup> Ⅱ	HC C11 V(後期層) 7637
	267	*	外底丸・底厚厚い 立ち上がり(緩やか)	-	0.5	細粒 中量	○				○			砂	灰-暗茶褐色	灰・ナ <sup>+</sup>	HC D9 V(後期層) 73329
			外底丸・底厚厚い 立ち上がり(緩やか)	-	0.5	中粒 多量	○	△						砂	灰-赤褐色	灰・ナ <sup>+</sup> ・細粒質	HC A15 貝層群2 73684
	269	-	外底丸・底厚厚い 立ち上がり(緩やか)	-	0.5	細粒 中量	○	△						砂	外-灰褐色 内-赤褐色	外・ナ <sup>+</sup> 丁字 内-放射状	HC D14 V(後期層) 72446
			外底丸・底厚厚い 立ち上がり(緩やか)	-	0.5	中粒 少量	△					灰色粒 △			砂	外-赤褐色 内-淡茶褐色	灰・ナ <sup>+</sup> ・細粒質
	271	-	外底丸・底厚厚い 立ち上がり(急・ゆるい)	-	0.9	細粒 少量	△				灰色粒 △			砂	外-暗茶褐色 内-灰褐色	灰・ナ <sup>+</sup> ・細粒質	HB③ R10 Ⅱa(15) 72188
			外底丸・底厚厚い 立ち上がり(急・ゆるい)	-	0.7	中粒 中量	○								砂	外-茶褐色 内-赤褐色	灰・ナ <sup>+</sup>
	273	-	外底丸・底厚厚い 立ち上がり(急・ゆるい)	-	0.7	細粒 少量	△				△			砂	外-茶褐色 内-暗茶褐色	灰・ナ <sup>+</sup>	HC A15 貝層群3 73749
			外底丸・底厚厚い 立ち上がり(急・ゆるい)	-	0.8	粗粒 少量	△		○			△		砂	外-赤褐色 内-茶褐色	灰・ナ <sup>+</sup> ・細粒質	HB③ T8 Ⅱc(7) 7971
	274	丸底	外底丸・底厚厚い 立ち上がり(急・ゆるい)	-	0.6	細粒 少量	△				△			砂	灰-黄茶褐色	灰・ナ <sup>+</sup> ・細粒質	HC C14 V(後期層) 72468
			外底丸・底厚厚い 立ち上がり(急・ゆるい)	-	0.7	粗粒 多量	○	△						砂	灰-暗茶褐色	灰・ナ <sup>+</sup> 丁字 内・ナ <sup>+</sup> Ⅱ	HC T16 貝層群4 74798
	277	-	外底丸・底厚やや厚い 立ち上がり(緩やか)	-	0.5	細粒 少量	△							砂	灰-茶褐色	灰・ナ <sup>+</sup> ・細粒質	HC S15 貝層群5 74382
			外底丸・底厚やや厚い 立ち上がり(緩やか)	-	0.6	細粒 少量	○								砂	外-茶褐色 内-暗褐色	灰・ナ <sup>+</sup> 丁字
	279	-	外底丸・底厚やや厚い 立ち上がり(緩やか)	-	0.5	粗粒 中量	○				△			砂	灰-茶褐色	灰・ナ <sup>+</sup>	HC A16 V(後期層) 73339
			外底丸・底厚厚い 立ち上がり(急・ゆるい)	-	0.6	細粒 少量	△								砂	灰-淡茶褐色	灰・ナ <sup>+</sup>
	281	-	外底丸・底厚厚い 立ち上がり(急・ゆるい)	-	0.6	中粒 多量	△					黒色粒 ○		砂	外-淡茶褐色 内-灰褐色	灰・ナ <sup>+</sup>	HB③ S5 Ⅱa(15) 73275
			外底丸・底厚厚い 立ち上がり(急・ゆるい)	-	0.7	中粒 中量	○					△			砂	灰-黄茶褐色	灰-細粒質
	283	-	外底丸・底厚厚い 立ち上がり(急・ゆるい)	-	0.7	粗粒 多量	△				○			中	灰-淡茶褐色	灰-細粒質	HB③ Q20 Ⅱa(14) 71301
			外底丸・底厚厚い 立ち上がり(急・ゆるい)	-	0.5	細粒 少量	△					△			砂	外-淡茶褐色 内-暗褐色	灰-細粒質
	285	-	外底丸・底厚厚い 立ち上がり(急・ゆるい)	-	0.6	細粒 少量	△							砂	外-赤褐色 内-暗褐色	灰-細粒質	HB③ R7 Ⅱa(上) 7414
外底平ら(底径小)			-	2.0	中粒 少量	△								砂	外-赤褐色 内-暗褐色	灰・ナ <sup>+</sup> ・細粒質	HB③ A18 Ⅱc(7) 71418
287	-	外底平ら(底径小)	-	2.0	中粒 少量	△					黒色粒 △		砂	灰-淡褐色	灰・ナ <sup>+</sup>	HB③ S7 Ⅱa(14) 71561	
		外底平ら(底径小)	-	2.0	中粒 中量	△					△			砂	外-茶褐色	外-縁上1/3 内・ナ <sup>+</sup> ・細粒質	HC T15 貝層群5 74809
289	-	外底平ら(底径小)	-	2.3	中粒 少量	△							砂	外-淡茶褐色 内-暗褐色	灰・ナ <sup>+</sup>	HC R16 V(後期層) 73031	
		外底平ら(底径小)	-	2.5	中粒 少量	△								砂	灰-暗茶褐色	灰・ナ <sup>+</sup>	HC T14 貝層群1 73325
291	-	外底平ら(底径小)	-	2.5	中粒 中量	○				△			砂	灰-暗茶褐色	灰・ナ <sup>+</sup> ・細粒質 内・ナ <sup>+</sup> Ⅱ	HC A16 貝層群5 73837	

○:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 [出土地] ドリット取上番号

第24表-12 土器 (底部) 観察一覧

(法量単位:cm,g)

器種	図番号	分類		形態	法量		混和材							胎土	胎色		器面調整	遺構・グリッド・層遺構・台(ワ)の番号
		大	小		直径	器高	粘土含量	石灰	石	角礫石	石英	白色粒	赤色粒		その他	外面		
第91回・ 国原67	292	a	平底	c	外底平ら(底径<小)底厚1.0(厚い)	2.8	0.8	細粒	○				△	砂	外-赤褐色 内-灰茶褐色	両-加温痕	HB② AT II 石内IV群 S-07 f947	
					立ち上がり(急・直線的)	81.4	2.7	中粒										
	293				外底平ら(底径<小)底厚1.0(厚い)	2.8	0.5	細粒	△	△			汚砂	両-灰褐色	両-ナ+	HC 514 貝層群5 f4323		
					立ち上がり(緩やか〜ややぐさぐさ)	52.0	1.7	少量										
	294			a7	乳頸部小振り・外底丸み	-	0.5	細粒	△	△			砂	両-茶褐色	両-→目明線	HC T14 貝層群2 f4032, 4062		
					乳頸部小振り・外底丸み	60.4	1.2	少量										
	295				a7	乳頸部小振り・外底丸み	-	0.5	細粒	△				砂	外-茶褐色 内-灰茶褐色	両-ナ+	HC A15 V (後期層) f3258	
						乳頸部小振り・外底丸み	71.4	1.8	少量									
	296				a7	乳頸部小振り・外底丸み	-	0.9	細粒	○	△			砂	外-茶褐色 内-灰茶褐色	両-ナ+	HC B16 貝層群5 f3845	
						乳頸部小振り・外底丸み	197.3	2.7	中量									
297				a7	乳頸部小振り・外底丸み	-	0.5	細粒	△				砂	両-黄褐色	両-ナ+,加温痕 内-→	HC C9 II c SK02 f3372		
					乳頸部小振り・外底丸み	57.7	1.9	少量										
298				a7	乳頸部小振り・外底やや平ら	2.9	0.7	細粒	△				砂	両-暗茶褐色	両-ナ+,加温痕	HC A16 V (後期層) f1728		
					乳頸部小振り・外底やや平ら	133.3	2.2	少量										
299				a7	乳頸部小振り(やや高い)	2.4	0.6	細粒	△	○		灰色粒	汚砂	外-灰茶褐色 内-灰褐色	両-→	HB② Q1 Ⅱc(7) f456		
					外底やや平ら	27.8	1.7	中量										
300				a7	乳頸部小振り(低い)	2.0	0.4	細粒	△	△			砂	両-黄褐色	両-ナ+,加温痕	HB② I7 Ⅱc(7) f475		
					外底やや平ら	50.2	1.3	少量										
301				a7	乳頸部小振り・外底凹み	1.8	-	細粒	△				砂	両-茶褐色	両-ナ+頭痕	HC 514 貝層群2 f3938		
					乳頸部小振り・外底凹み	13.5	-	少量										
302				a7	乳頸部小振り(高い)	3.2	0.7	細粒	△			△	砂	外-赤褐色 内-茶褐色	両-ナ+,加温痕	HB② S9 Ⅱd(14) f1483		
					外底凹み	30.2	1.5	少量										
303				b7	乳頸部中振り(やや高い)	3.2	0.6	細粒	△			△	砂	外-赤褐色 内-暗茶褐色	両-加温痕	HB② T6 Ⅱd(14) f996		
					外底やや丸み	57.4	2.3	少量										
304				b7	乳頸部中振り(やや高い)	3.7	0.6	細粒	△			△	砂	両-茶褐色	両-ナ+	HB② B7 Ⅱc(7) f471		
					外底やや丸み	35.9	1.1	少量										
305				b7	乳頸部中振り・外底やや平ら	1.8	-	細粒	△	△			砂	外-茶褐色 内-暗褐色	両-ナ+,加温痕	HC 514 貝層群2 f4086		
					乳頸部中振り・外底やや平ら	58.0	3.0	少量										
306				b7	乳頸部中振り・外底やや平ら	2.2	0.8	細粒	△			△	砂	両-茶褐色	両-補仕上げ	HC C11 貝層群6 f4095		
					乳頸部中振り・外底やや平ら	86.2	2.3	少量										
307				b7	乳頸部中振り・外底やや平ら	2.2	0.9	細粒	○	○		黒色粒	砂	両-茶褐色	外-補仕上げ 内-ナ+下家	HC T15 貝層群5 f4542		
					乳頸部中振り・外底やや平ら	90.2	2.9	中量										
308				b7	乳頸部中振り・外底やや平ら	2.6	0.7	細粒	△	△			砂	両-茶褐色	両-ナ+,頭痕	HC A15 貝層群1 f3224		
					乳頸部中振り・外底やや平ら	133.6	2.5	少量										
309				b7	乳頸部中振り・外底やや平ら	3.4	0.5	細粒	△				砂	外-茶褐色	両-加温痕	HC 514 貝層群5 f4367		
					外底一粘土層付(明確)	35.2	2.0	少量										
310				b7	乳頸部中振り(高い)	2.8	0.6	粗粒	△	○			砂	両-茶褐色	両-加温痕	HB② S8 Ⅱd(14) f1320		
					外底平ら	25.1	2.4	中量										
311				b7	乳頸部中振り(高い)	2.4	0.9	粗粒	○	○			砂	外-赤褐色 内-灰褐色	両-ナ+,加温痕	HB② Q19 Ⅱd(14) f1854		
					外底平ら	62.5	3.6	多量										
312				b7	乳頸部中振り(高い)	3.0	0.7	中粒	○			△	砂	外-茶褐色 内-暗褐色	両-ナ+,加温痕	HB② B7 Ⅱc(7) f437		
					外底平ら	51.3	2.3	中量										
313				b7	乳頸部中振り(高い)	3.0	0.8	中粒	△			△	砂	外-茶褐色 内-暗灰褐色	両-ナ+,加温痕	HB② B6 Ⅱc(7) f451		
					外底平ら	68.7	2.3	少量										
314				b7	乳頸部中振り(低い)	3.2	0.8	細粒	△			△	砂	両-茶褐色	両-ナ+	HB② S8 Ⅱc(7) f4674		
					外底平ら	27.6	1.1	少量										
315				b7	乳頸部中振り・外底凹み	2.4	0.6	細粒	△	△			砂	両-灰茶褐色	両-ナ+,加温痕	HC 514 貝層群2 f4065		
					乳頸部中振り・外底凹み	79.2	2.0	少量										
316				b7	乳頸部中振り・外底凹み	2.4	0.5	粗粒	○			灰色粒	砂	両-茶褐色	両-ナ+,加温痕	HC 514 貝層群5 f4536		
					乳頸部中振り(やや低い)	92.3	2.4	多量										
317				b7	乳頸部中振り(やや低い)	2.8	0.5	細粒	△			△	砂	外-赤褐色 内-暗灰褐色	両-ナ+,加温痕	HB② I7 Ⅱc(7) f405		
					外底凹み	25.5	1.3	少量										
318				b7	乳頸部中振り(低い)	2.8	0.6	細粒	△			△	砂	外-赤褐色	両-ナ+,加温痕	HB② T9 Ⅱc(5) f2000		
					外底凹み	23.0	1.2	少量										
319				b7	乳頸部中振り(やや低い)	2.8	0.6	中粒	△				泥	外-淡褐色 内-暗褐色	両-ナ+,加温痕	HB② T5 Ⅱd(14) f2525		
					外底凹み	50.7	1.3	少量										
320				b7	乳頸部小振り(低い)	2.6	0.8	中粒	△			△	砂	外-茶褐色 内-灰褐色	両-ナ+,加温痕	HB② S4 Ⅱd(14) f1147		
					外底凹み	46.0	1.5	中量										
321				c7	乳頸部大振り(やや高い)	3.7	0.5	中粒	△	○		△	砂	外-赤褐色 内-茶褐色	両-ナ+,加温痕	HB② T16 Ⅱc(15) f2173		
					外底やや平ら	64.9	2.9	多量										
322				c7	乳頸部大振り(やや高い)	4.5	-	細粒	○	△		△	砂	外-黄褐色 内-暗灰褐色	両-加温痕	HB② S8 Ⅱd(14) f1320		
					外底やや平ら	38.5	2.4	中量										
323				c7	乳頸部大振り・外底凹み	3.8	0.9	細粒	△				砂	両-灰茶褐色	両-ナ+,加温痕	HC A16 貝層群5 f4761		
					乳頸部大振り・外底凹み	49.9	2.9	少量										
324				c7	乳頸部大振り・外底凹み	3.8	1.1	細粒	△				砂	外-淡褐色	両-加温痕	HC 514 貝層群2 f3790		
					乳頸部大振り(高い)	26.5	1.7	少量										
325				c7	乳頸部大振り(高い)	4.4	-	細粒	△			△	砂	外-茶褐色 内-暗灰褐色	両-加温痕	HB② B9 Ⅱc(7) f1768		
					外底凹み	68.6	2.4	少量										
326				c7	乳頸部大振り(低い)・外底凹み	3.8× 4.3	1.8	細粒	△				砂	両-暗茶褐色	両-ナ+	HB② T7 Ⅱd(14) f1508		
					やや横円状の底	58.1		少量										

◎:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 [出土地] f:フツ取上番号

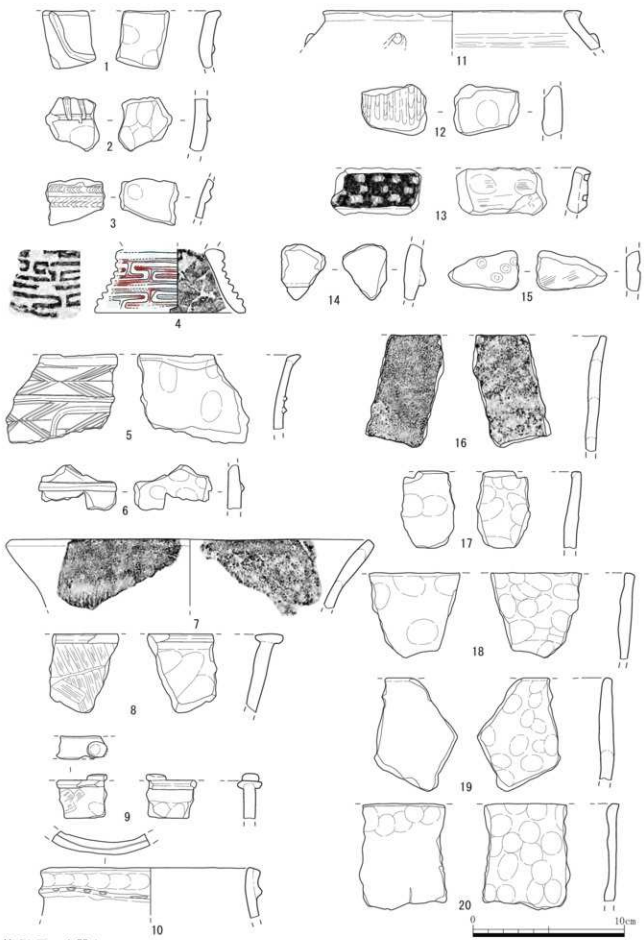


第24表-14 土器(底部) 観察一覧

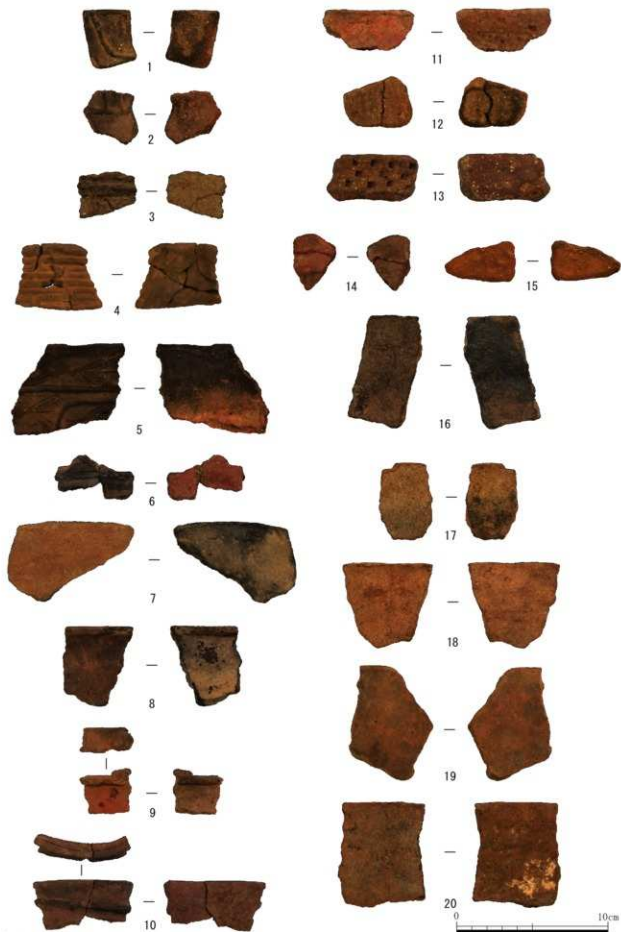
(法量単位:cm, g)

調査年度	図番	分相	形状	法量		混和材							胎土	胎色		器底・ブリティク層遺構・台(フナク)番号
				底径	器底重量	粘土含量	石末	角礫石・石・石	赤色粒	白色粒	鉄粒	その他		外面	器底	
363	b7	くびれ部・底厚い・底径中	6.4 0.6	中粒 中量	△				△	灰色胎	砂	外-茶褐色 内-埋炭褐色	外-ナナク 内-ナナク	H8③ T15 Ⅲa(15) P2506		
															7.1 2.1	1.6
364	b7	くびれ部・底厚や中厚い・底径中	6.3 -	中粒 多量	△		◎			灰色胎	灰砂	外-淡緑褐色 内-黄褐色	外-黄褐色 内-黄褐色	H8③ S17 Ⅲd(14) H8③ T16 Ⅲb(15) P953, P2303		
															32.7 1.1	△
365	b7	くびれ部・底厚や中厚い・底径中 外底上1/3部(新約的粘土層付)	6.4 0.6	細粒 少量	△					砂	砂	外-茶褐色 内-ナナク	外-ナナク 内-ナナク	H8③ 39 Ⅲc(7) P942		
															34.8 1.2	△
366	b7	くびれ部・底厚薄い・底径中	5.4 0.3	細粒 中量	△			○		砂	砂	外-茶褐色 内-茶褐色	外-ナナク・胎面 内-ナナク	H8③ AI Ⅲe(15) P2444		
															35.5 0.9	△
367	b7	くびれ部・底厚薄い・底径中	5.6 0.4	細粒 少量	△					砂	砂	外-茶褐色 内-茶褐色	外-ナナク・胎面 内-ナナク	HC G15 IV(淡路内埋土) P1660		
															66.9 0.6	△
368	b7	くびれ部・底厚薄い・外底や中上1/3部・底径中	6.4 0.3	中粒 多量	△		○	◎	△	砂	砂	外-暗茶褐色 内-茶褐色	外-ナナク・胎面	HC G12 IIc(クムイ) P1884		
															44.4 0.8	△
369	b7	くびれ部・底厚薄い・外底や外9割や中上1/3部・底径中	6.8 0.5	細粒 少量	△					砂	砂	外-灰緑褐色 内-ナナク	外-ナナク・胎面	HC S14 貝層群2 P4628		
															42.5 0.9	△
370	b3	くびれ部・底厚上り薄い・内底平小・底径中	6.9 0.6	細粒 少量	△					泥	泥	外-橙灰褐色 内-ナナク	外-ナナク・胎面	H8③ T18 Ⅲd(14) P1112		
															10.3 0.4	△
371	b7	くびれ部・底厚や中厚い・底径大・外底や中上1/3部	7.0 0.5	中粒 少量	△					泥	泥	外-橙灰褐色 内-ナナク	外-ナナク	H8③ S20 Ⅲc(7) P652		
															24.7 1.0	△
372	b7	くびれ部・底厚や中厚い・底径大	8.0 0.5	中粒 少量	△					砂	砂	外-茶褐色 内-埋炭褐色	外-胎面	H8③ S9 Ⅲd(14) P2087		
															22.7 1.2	△
373	b7	くびれ部・底厚薄い・外底や外9割や中上1/3部・底径大	8.0 0.5	細粒 少量	△					砂	砂	外-淡灰褐色 内-淡茶褐色	外-ナナク丁家	HC D12 V(後期層) P2140		
															64.9 0.9	△
374	c5	くびれ部・底厚上り薄い・外底上1/3部・底径小	5.0 0.3	細粒 少量	△					手揉	泥	外-灰褐色 内-ナナク	外-ナナク・胎面 内-ナナク	HC B14 V(後期層) P400, 500		
															25.8 0.5	△
375	c5	くびれ部・底厚上り薄い・底径中	5.2 0.3	細粒 少量	△					△	灰色胎	灰砂	外-暗褐色 内-灰褐色	外-ナナク 内-ナナク	HC T15 貝層群4 P403, 404	
																10.7 0.5
376	c7	くびれ部・底厚上り薄い・底径中	5.4 0.4	中粒 少量	△				○	砂	砂	外-暗茶褐色 内-淡緑褐色	外-胎面 内-ナナク	H8③ S9 IV(7) P1546		
															14.7 0.4	△
377	c7	くびれ部・底厚薄い・底径中	5.9 0.5	細粒 少量	△					泥	泥	外-淡緑褐色 内-胎面	外-胎面	H8③ C5 Ⅲc(12) P975		
															69.0 0.6	△
378	c7	くびれ部・底厚薄い・外底や外9割や中上1/3部・底径中	5.8 0.7	細粒 少量	△					砂	砂	外-淡茶褐色 内-ナナク	外-ナナク・胎面 内-ナナク	HC E14 V(後期層) P1630		
															35.6 0.8	△
379	c7	くびれ部・底厚薄い・外底上1/3部・底径中	6.0 0.5	細粒 少量	△					茶色	泥	外-橙灰褐色 内-ナナク	外-ナナク・胎面	HC S14 貝層群2 P404, 405		
															19.4 0.6	△
380	くびれ	くびれ部・底厚や中厚い・外底上1/3部・底径中	6.0 0.4	細粒 少量	△					砂	砂	外-灰褐色 内-黄褐色	外-ナナク丁家 内-黄上1/3	HC C13 V(後期層) P1677		
															40.4 1.1	△
381	c7	くびれ部・底厚薄い・底径中	6.2 0.5	細粒 少量	△					泥	泥	外-黄茶褐色 内-胎面	外-胎面	H8③ D4 Ⅲc(13) P1555		
															30.3 0.9	△
382	c7	くびれ部・底厚薄い・底径中	6.3 0.7	細粒 少量	△					砂	砂	外-茶褐色 内-ナナク	外-ナナク 内-ナナク	H8③ Q18 Ⅲd(14) P1655		
															99.0 1.7	△
383	c7	くびれ部・底厚薄い・底径中	6.4 0.4	中粒 多量	△			○		砂	砂	外-灰茶褐色 内-淡緑褐色	外-ナナク・胎面	HC E34 V(後期層) P1154		
															30.8 0.8	△
384	c7	くびれ部・底厚薄い・外底上1/3部・底径中	6.4 0.6	細粒 少量	△					砂	砂	外-橙灰褐色 内-ナナク丁家	外-ナナク丁家	HC S6 V(後期層) P2658, 2659		
															30.9 0.8	△
385	c7	くびれ部・底厚薄い・外底上1/3部・底径中	6.4 0.5	細粒 少量	△					泥	泥	外-橙灰褐色 内-ナナク	外-ナナク・胎面	HC S14 貝層群2 P4013		
															21.0 0.7	△
386	c7	くびれ部・底厚や中厚い・底径中	6.5 0.4	細粒 少量	△					砂	砂	外-橙灰褐色 内-ナナク	外-ナナク	H8③ A17 Ⅲb(15) P2156 H8③ A17 Ⅲb(14) P1585		
															65.8 1.0	△
387	c7	くびれ部・底厚薄い・底径中	6.6 -	中粒 中量	△					砂	砂	外-灰黄色胎 内-胎面	外-胎面	H8③ A17 Ⅲb(14) P1211		
															24.6 0.7	△
388	c7	くびれ部・底厚や中厚い・外底上1/3部・底径中	6.6 0.7	細粒 少量	△					砂	砂	外-灰茶褐色 内-淡緑褐色	外-ナナク・胎面	HC F12 IIc(クムイ) P1246		
															37.1 1.3	△
389	c7	くびれ部・底厚や中厚い・外底上1/3部・底径中	6.8 0.4	細粒 少量	△					手揉	泥	外-灰褐色 内-黄褐色	外-ナナク丁家 内-黄上1/3	HC D13 V(後期層) P1900		
															21.0 0.4	△
390	c7	くびれ部・底厚薄い・外底や中上1/3部・底径大	7.0 0.4	細粒 少量	△					泥	泥	外-黄茶褐色 内-胎面	外-胎面	H8③ F4 Ⅲc(13) P1860		
															37.0 0.4	△
391	c7	くびれ部・底厚薄い・外底や中上1/3部・底径大	7.0 0.5	細粒 少量	△					泥	泥	外-赤褐色 内-灰褐色	外-胎面 内-ナナク	H8③ S10 Ⅲc(7) P1943		
															19.5 0.7	△
392	c7	くびれ部・底厚薄い・底径大	7.2 0.6	中粒 中量	△	△	△	△	△	砂	砂	外-暗茶褐色 内-ナナク	外-ナナク・胎面 内-ナナク	H8③ S8 Ⅲa(14) H8③ S7 Ⅲb(15) P1817, 2235		
															83.5 0.6	△
393	c7	くびれ部・底厚薄い・底径大	7.2 0.4	中粒 中量	△					砂	砂	外-灰茶褐色 内-ナナク	外-ナナク・胎面	H8③ C7 Ⅲb(8-9) P427		
															27.9 0.6	△
394	c7	くびれ部・底厚薄い・外底や中上1/3部・底径大	7.4 -	粗粒 多量	△					砂	砂	外-褐色 内-ナナク	外-ナナク・胎面	H8③ A4 Ⅲb(14) P2304		
															54.9 0.7	△
395	c7	くびれ部・底厚薄い・外底上1/3部・底径大	7.6 0.6	中粒 中量	△					砂	砂	外-暗褐色 内-灰褐色	外-ナナク丁家 内-黄上1/3	HC D13 V(後期層) P2439, 2442		
															65.3 0.9	△
396	d7	くびれ部・底厚上り薄い・外底上1/3部・底径大	9.0 0.8	中粒 中量	△					手揉	泥	外-橙灰褐色 内-ナナク	外-ナナク・胎面	HC S14 貝層群3 P4694		
															108.1 1.9	△
397	-	くびれ部・底厚薄い・外底部(大・明勝)	4.6 0.4	中粒 中量	△					△	灰色胎	泥	外-灰褐色 内-埋炭褐色	外-ナナク・胎面	H8③ Q8 Ⅲd(14) P1472	
																52.5 0.6

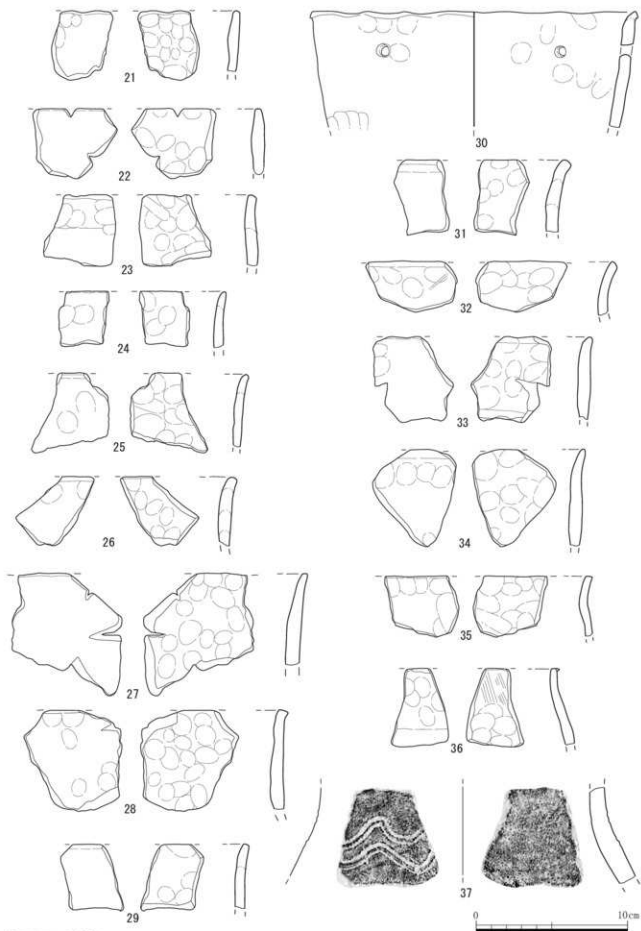
◎:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 (出土層) F:フナク取上番号



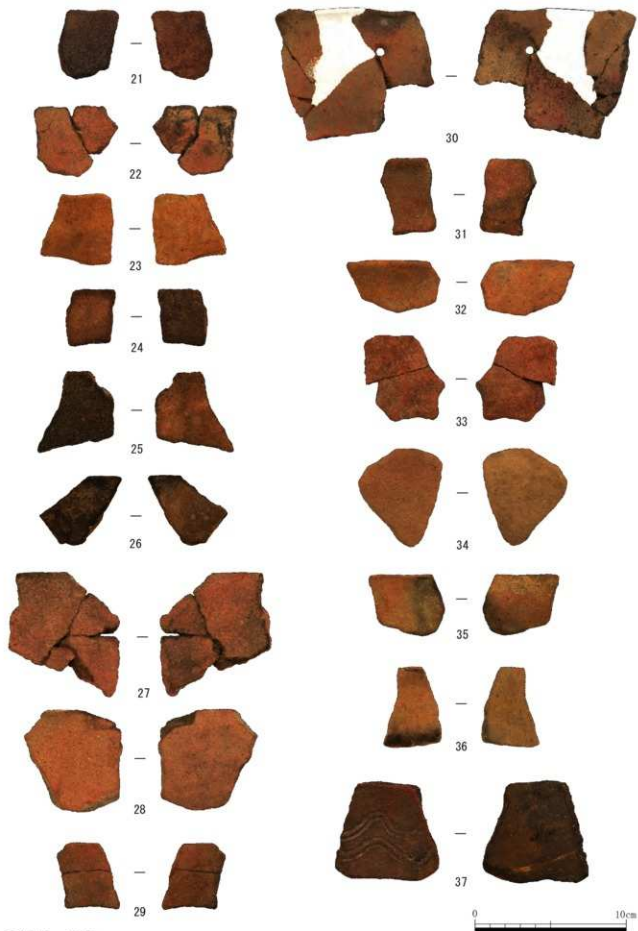
第71图 土器1



图版 47 土器 1

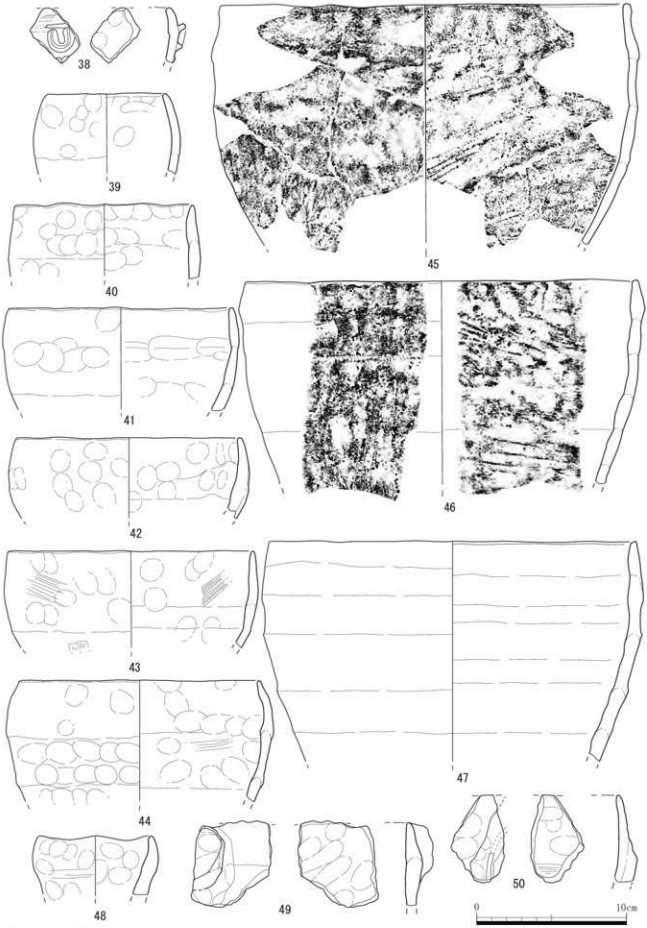


第 72 图 土器 2



图版 48 土器 2

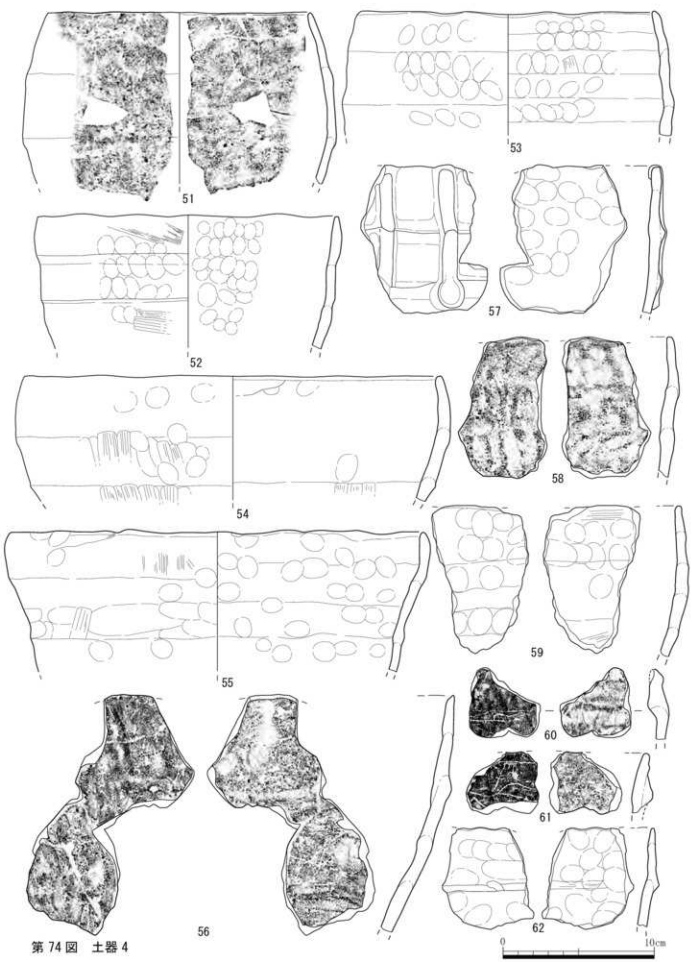




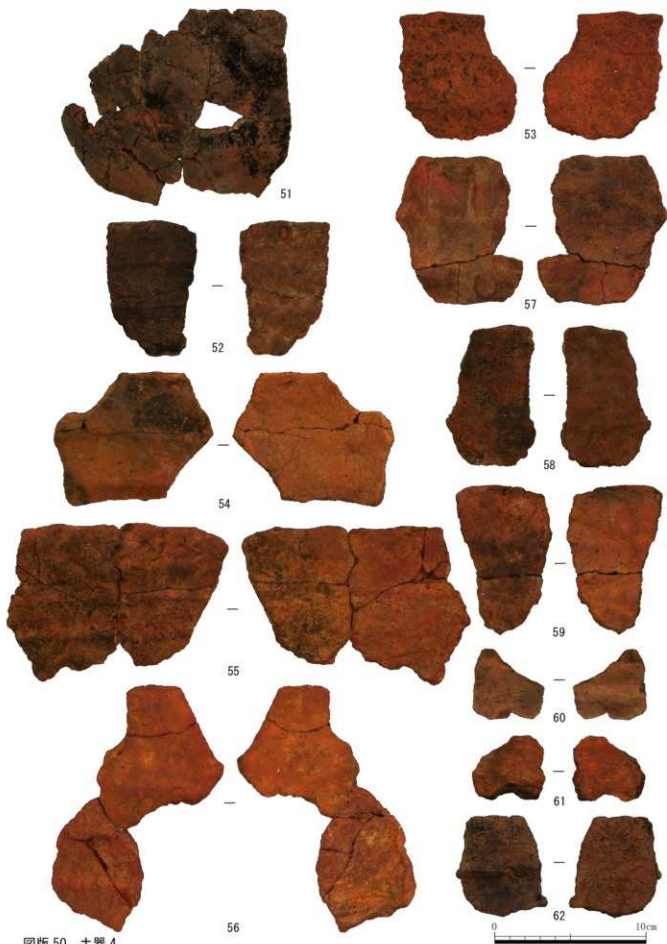
第73图 土器3



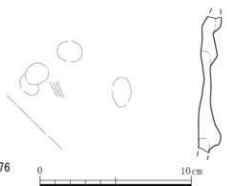
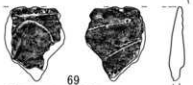
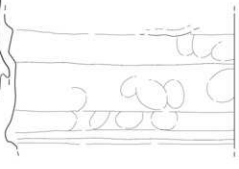
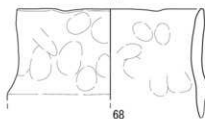
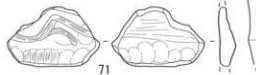
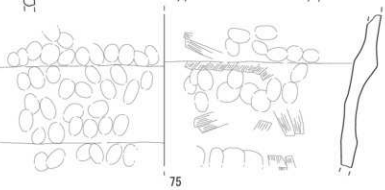
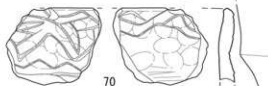
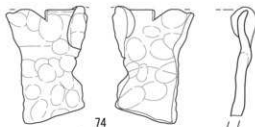
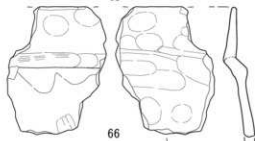
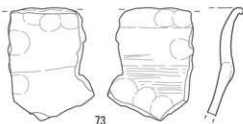
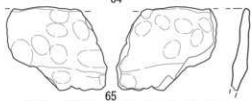
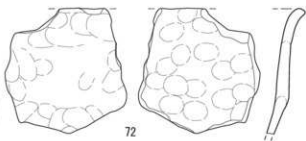
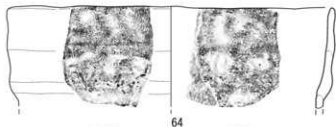
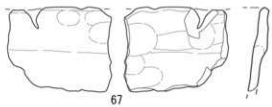
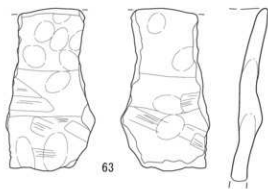
圖版 49 土器 3



第74图 土器4

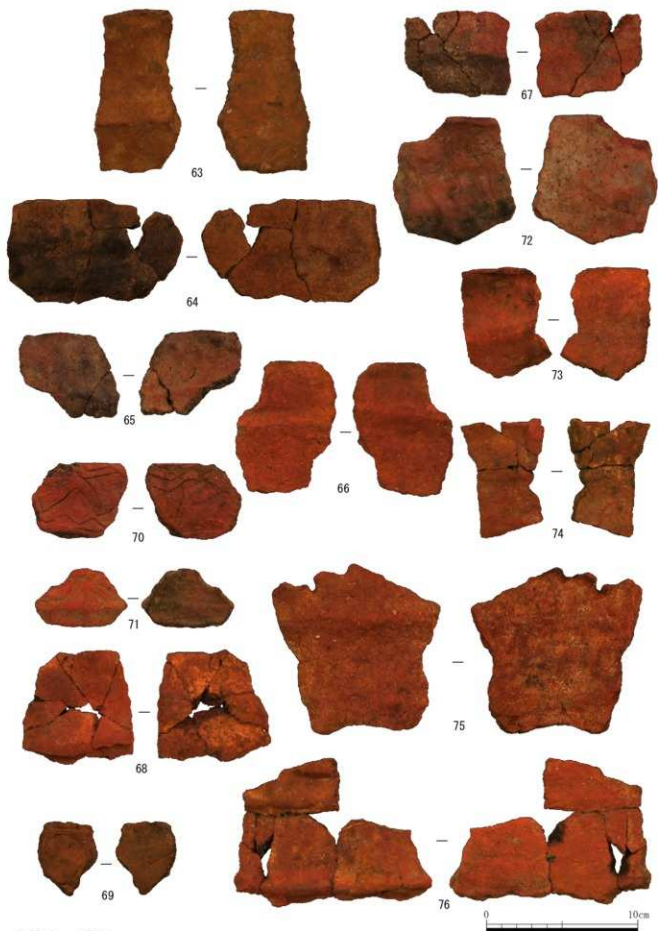


图版 50 土器 4

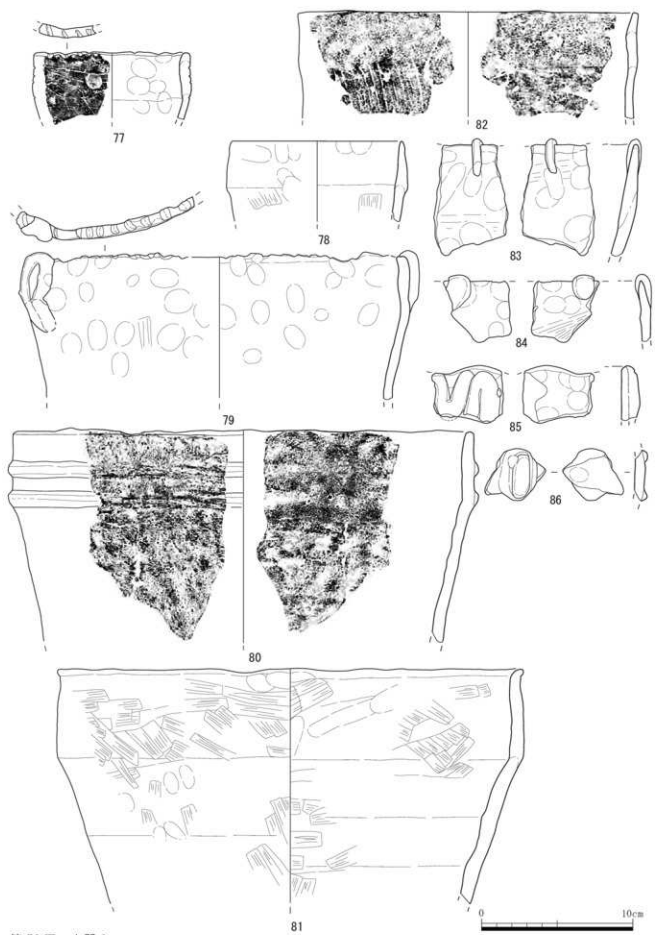


第75图 土器5

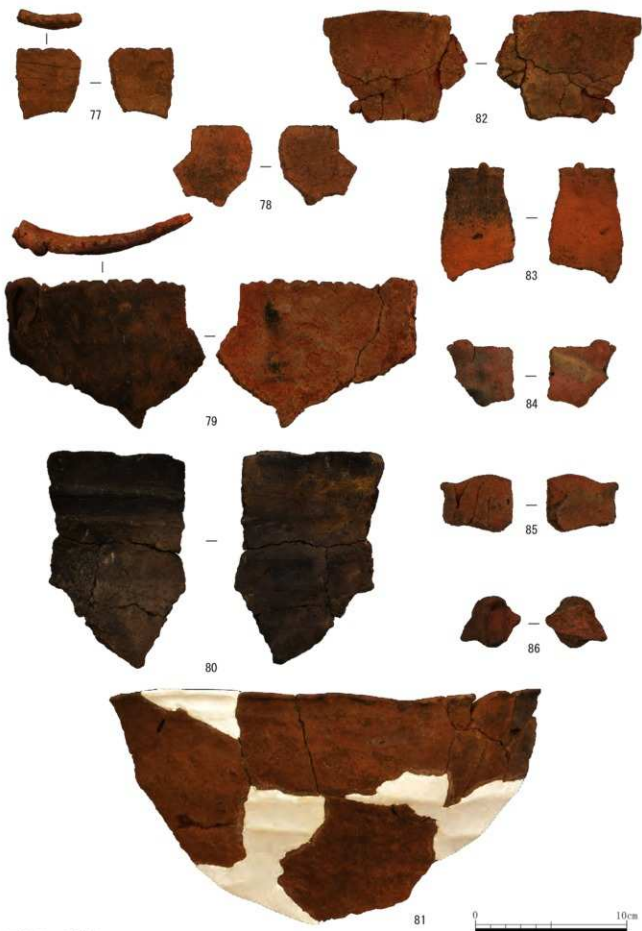
0 10cm



图版 51 土器 5

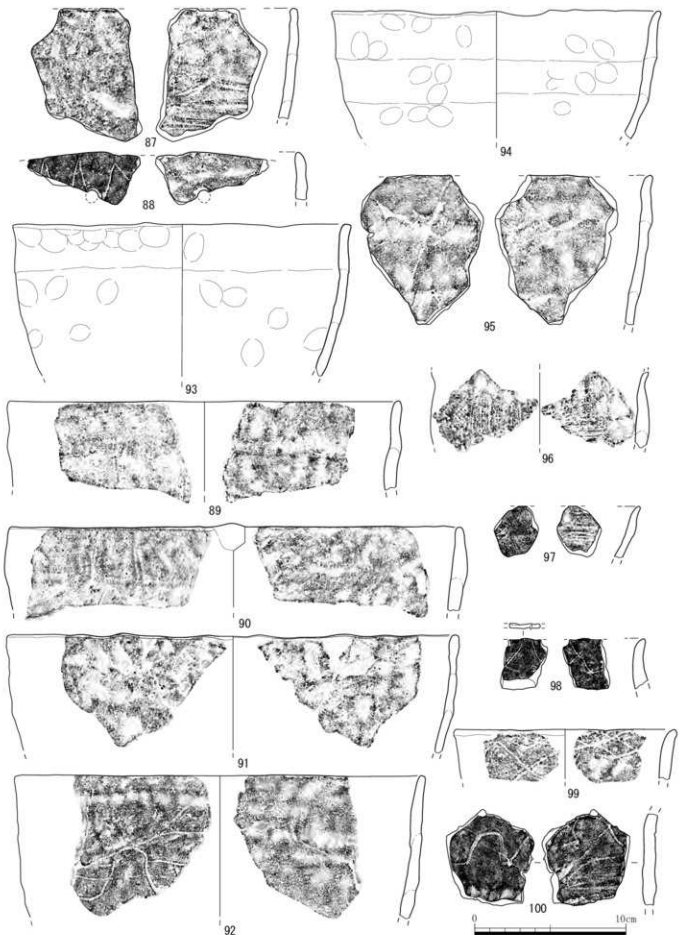


第 76 图 土器 6

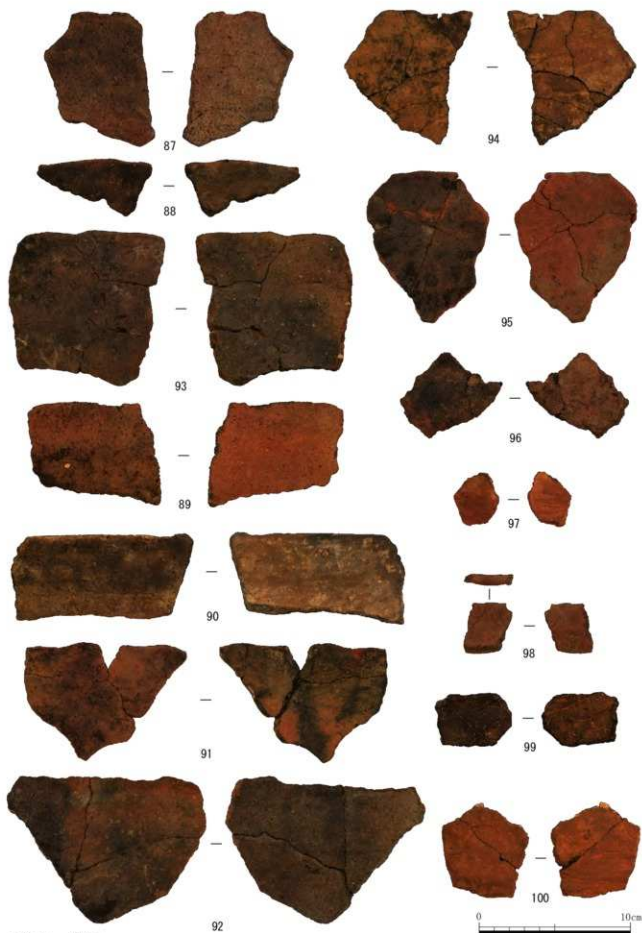


圖版 52 土器 6

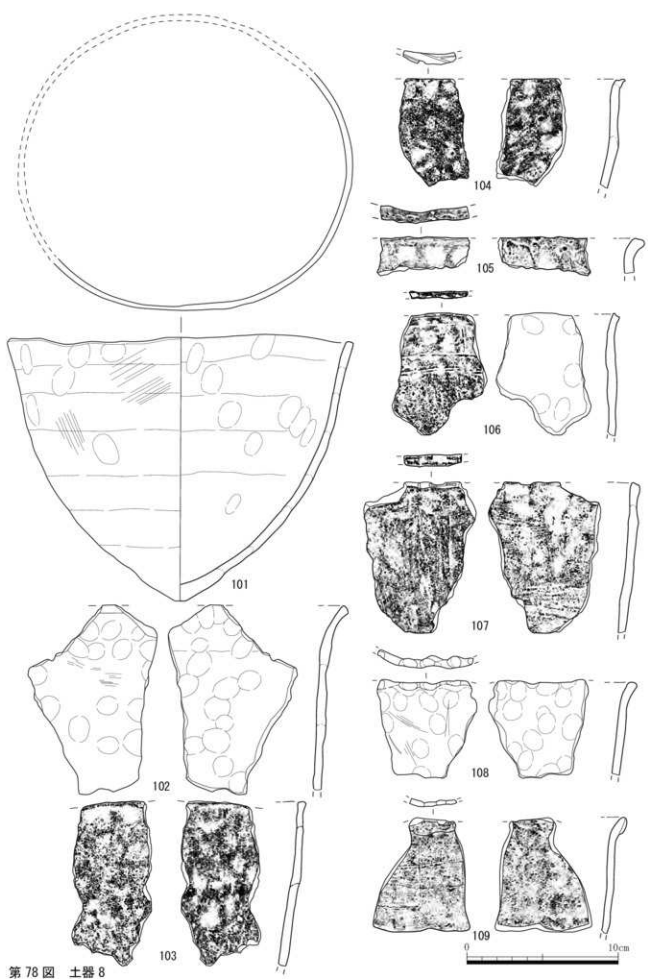




第77圖 土器7



图版 53 土器 7



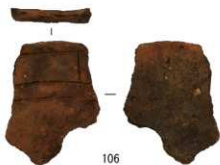
第78图 土器 8



101



105



106



102



107



103



108



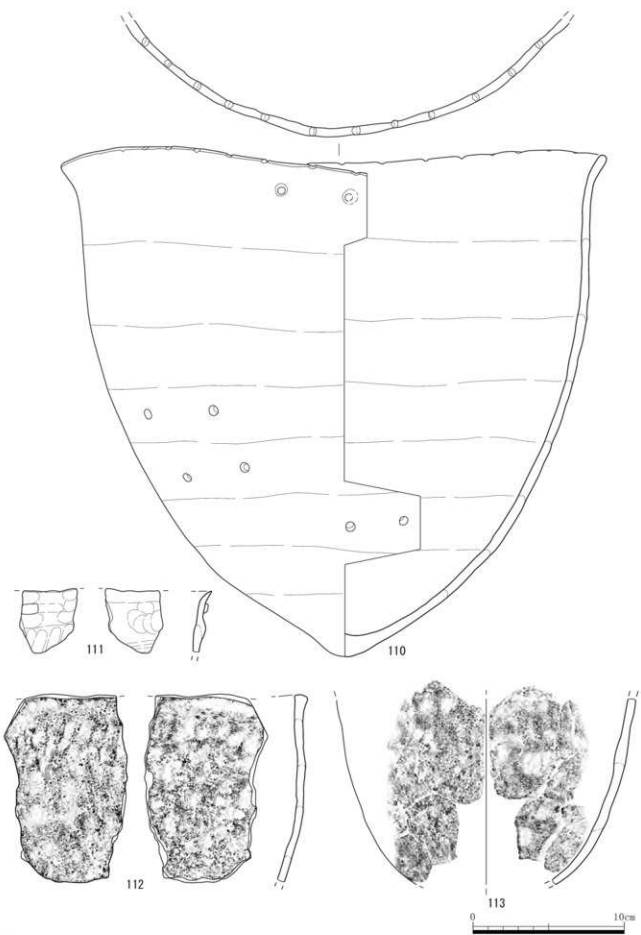
104



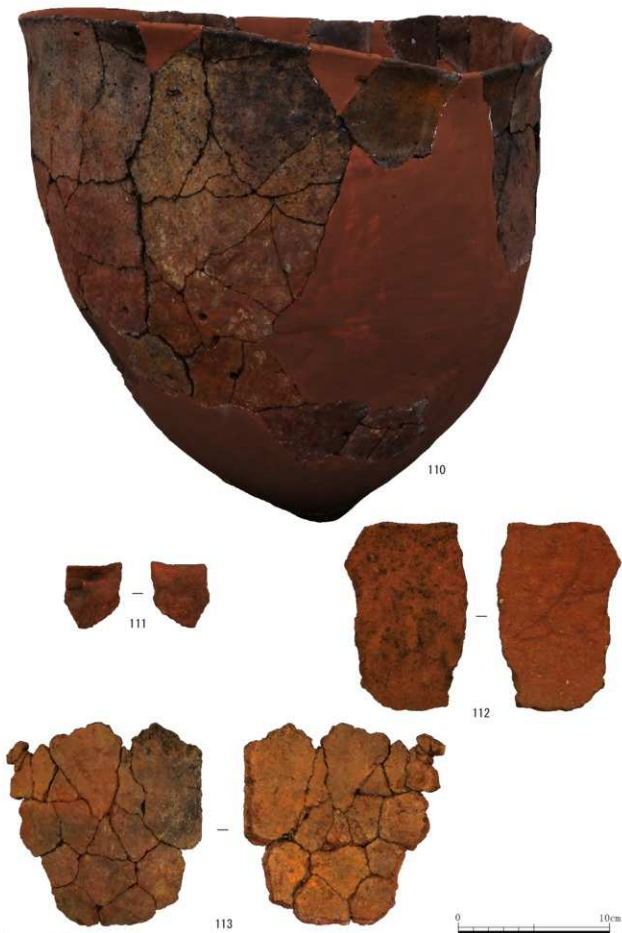
109



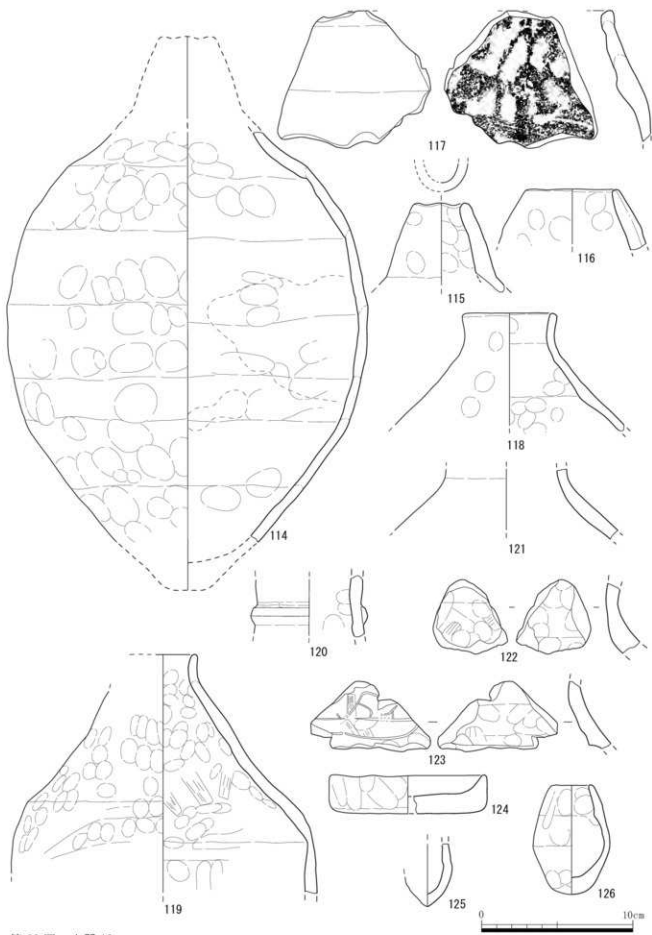
图版 54 土器 8



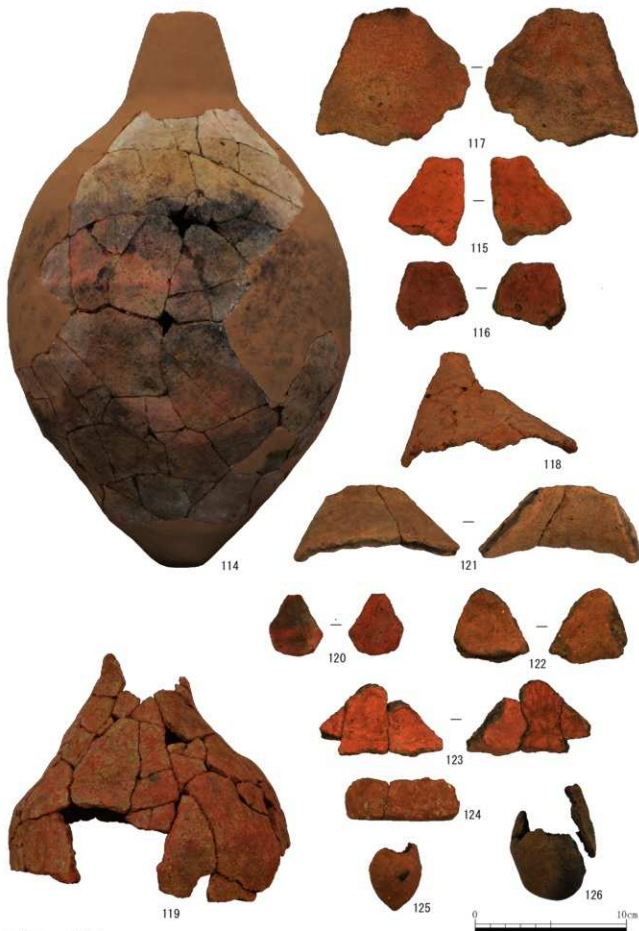
第79図 土器9



圖版 55 土器 9

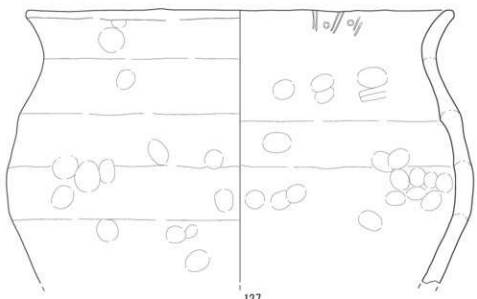


第 80 图 土器 10

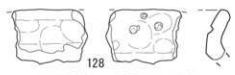


图版 56 土器 10





127



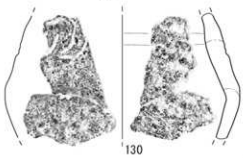
128

129

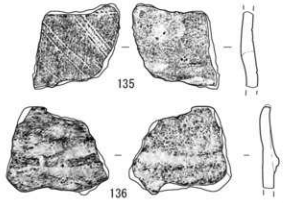


134

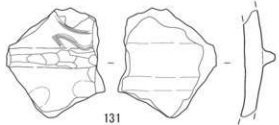
135



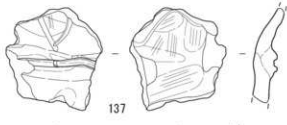
130



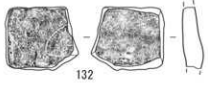
136



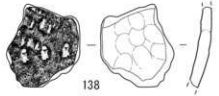
131



132



133



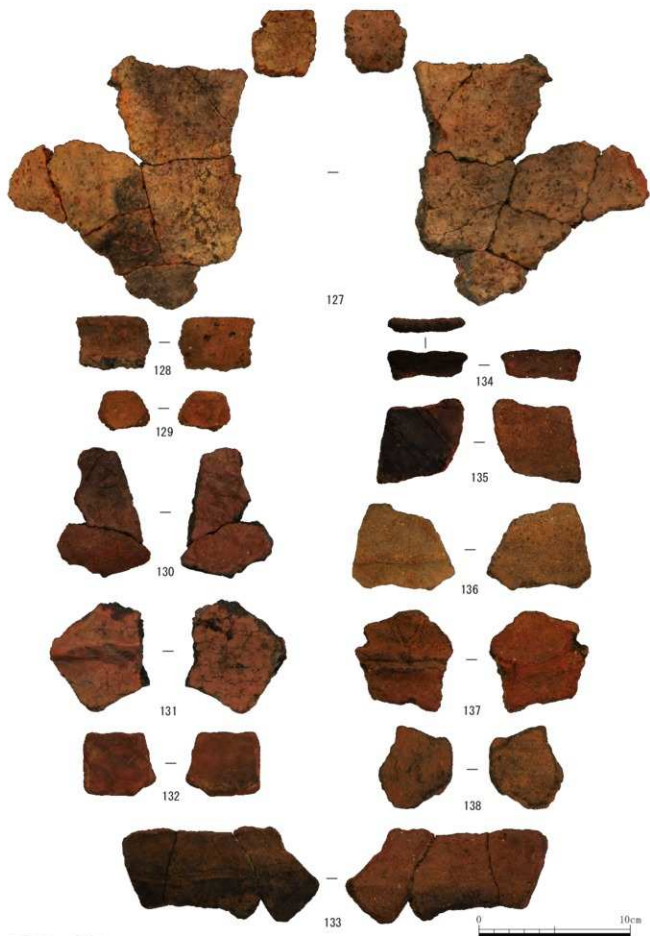
134



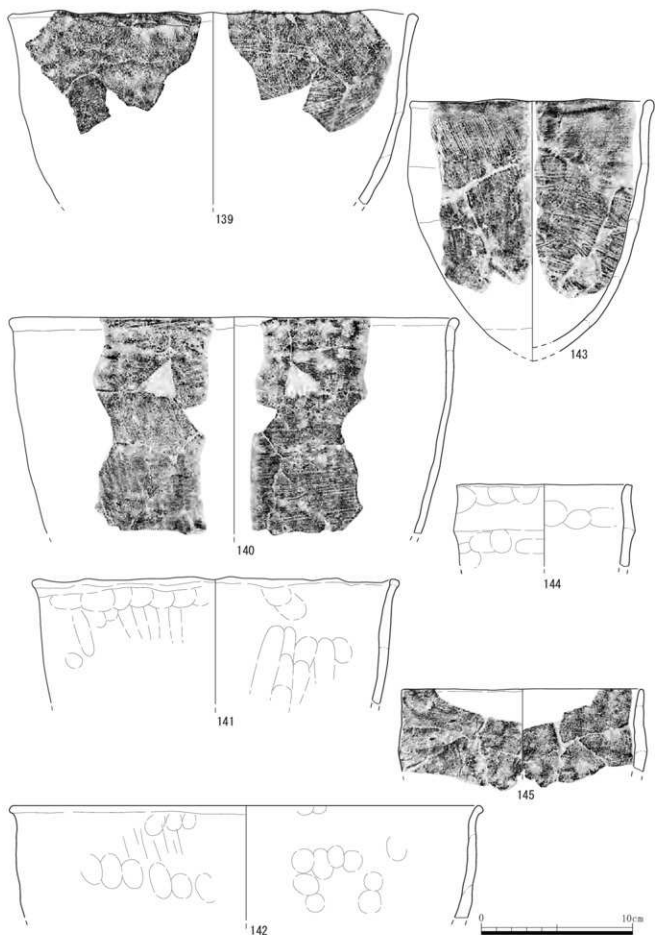
135



第 81 图 土器 11



图版 57 土器 11



第 82 图 土器 12



139



140



141



142



143



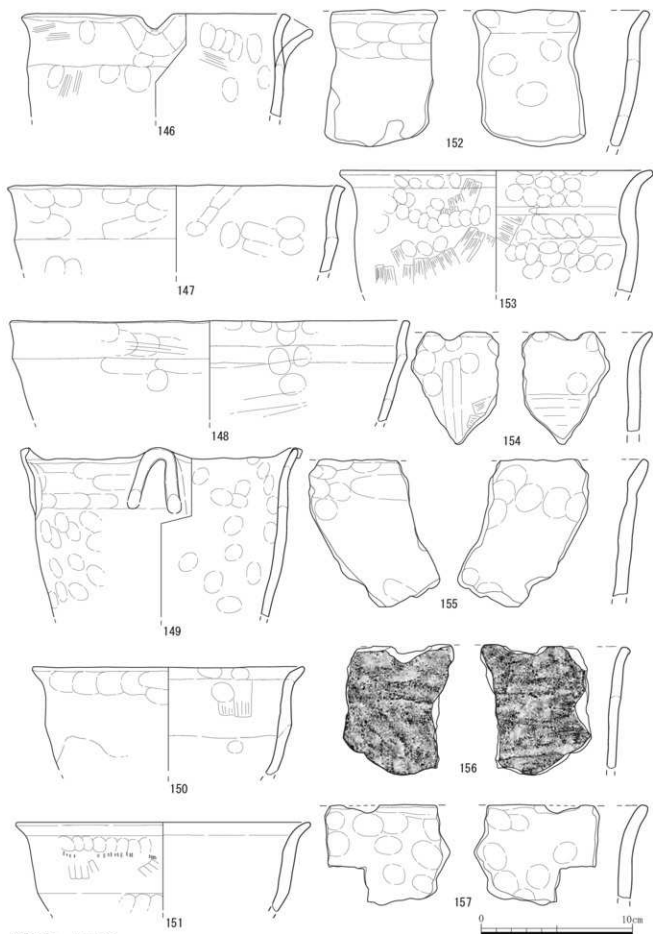
144



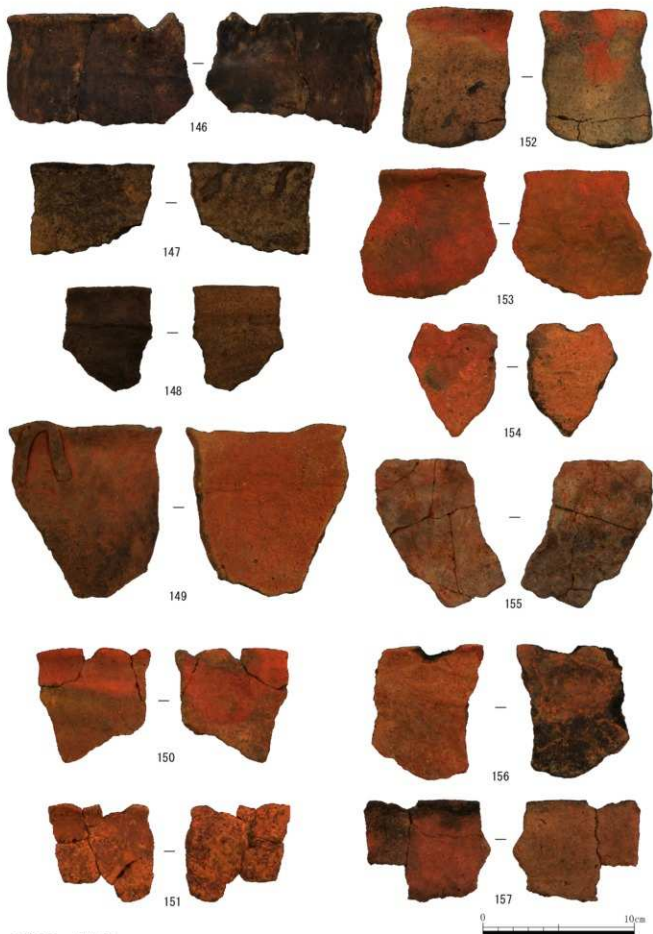
145



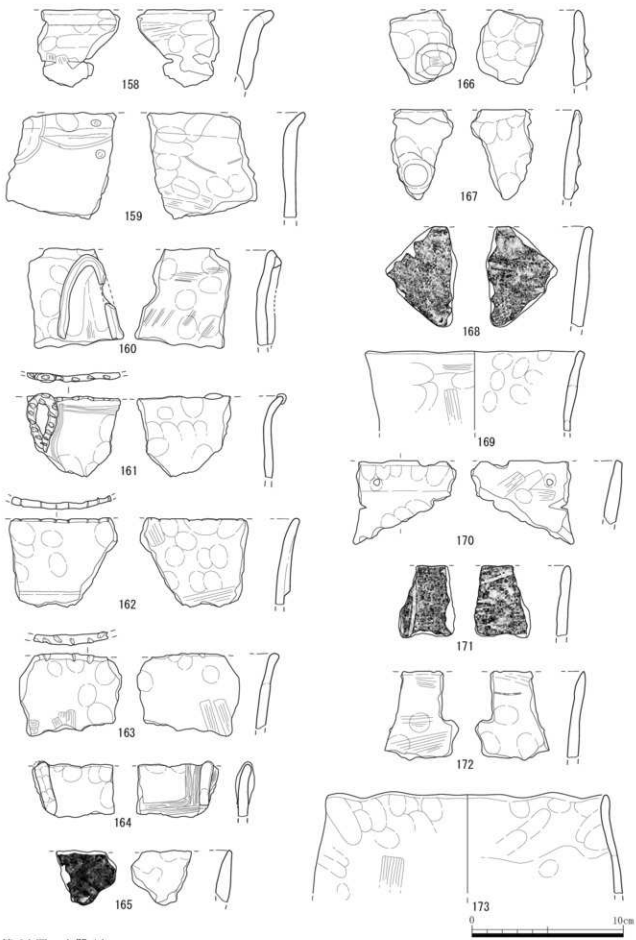
图版 58 土器 12



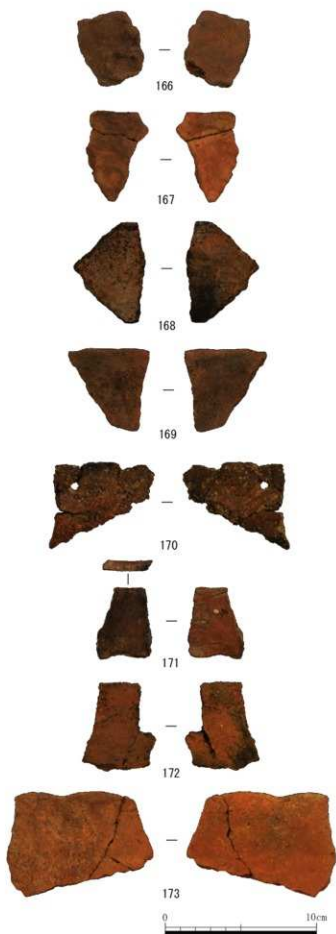
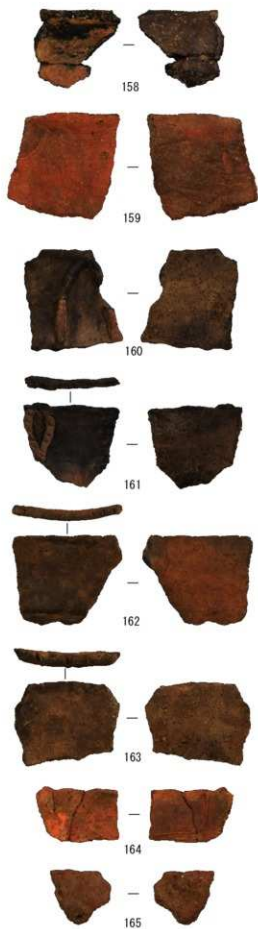
第 83 图 土器 13



图版 59 土器 13

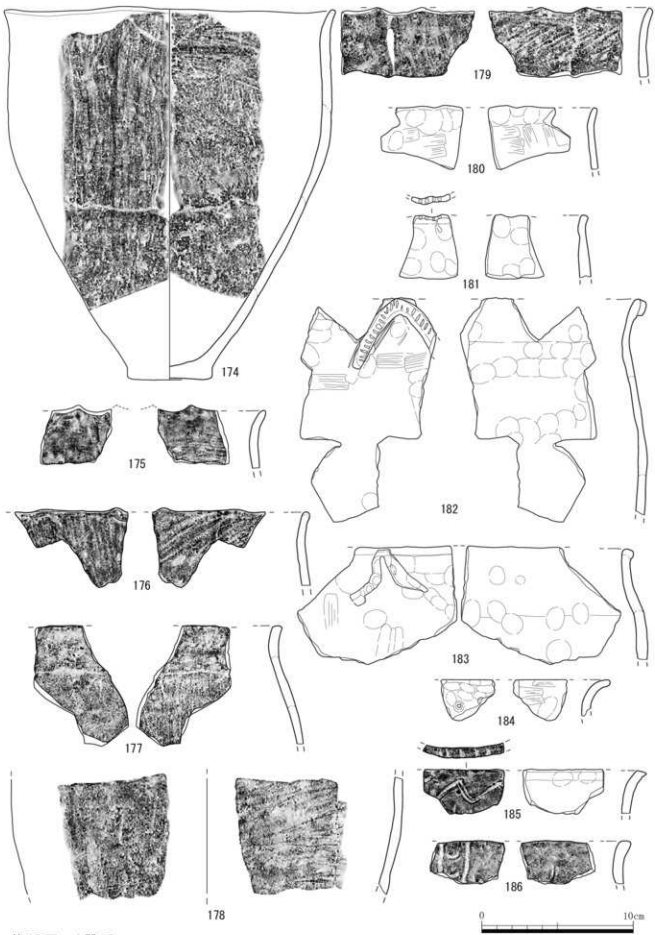


第 84 图 土器 14



图版 60 土器 14

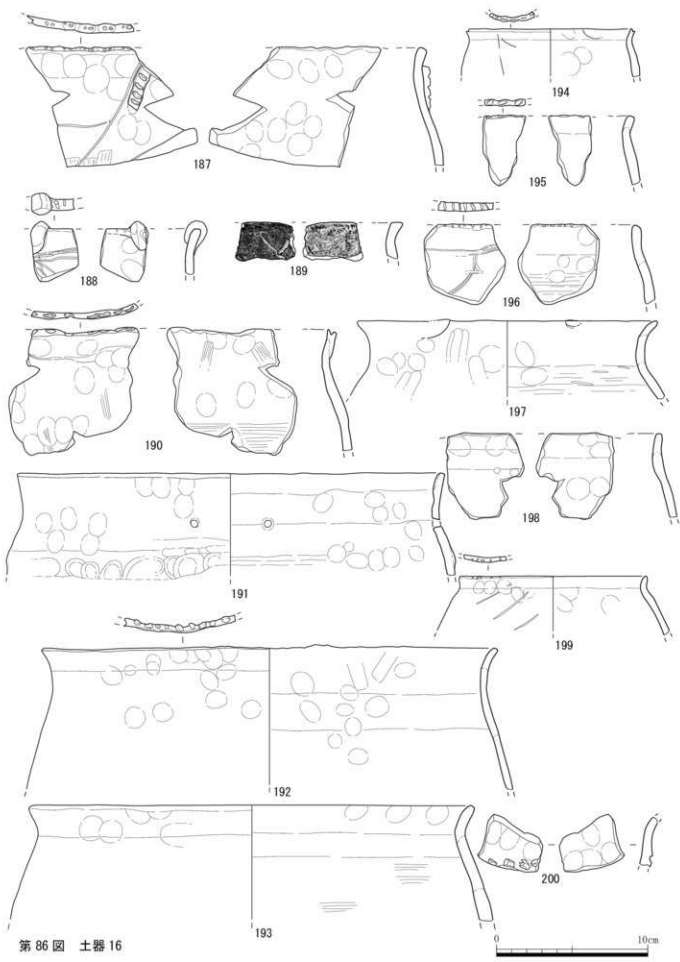




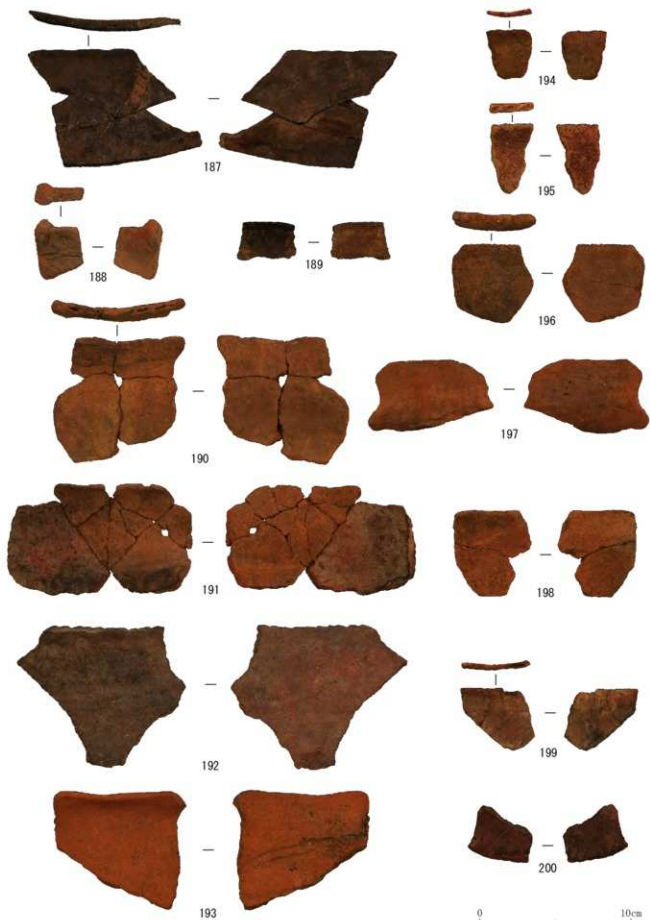
第 85 图 土器 15



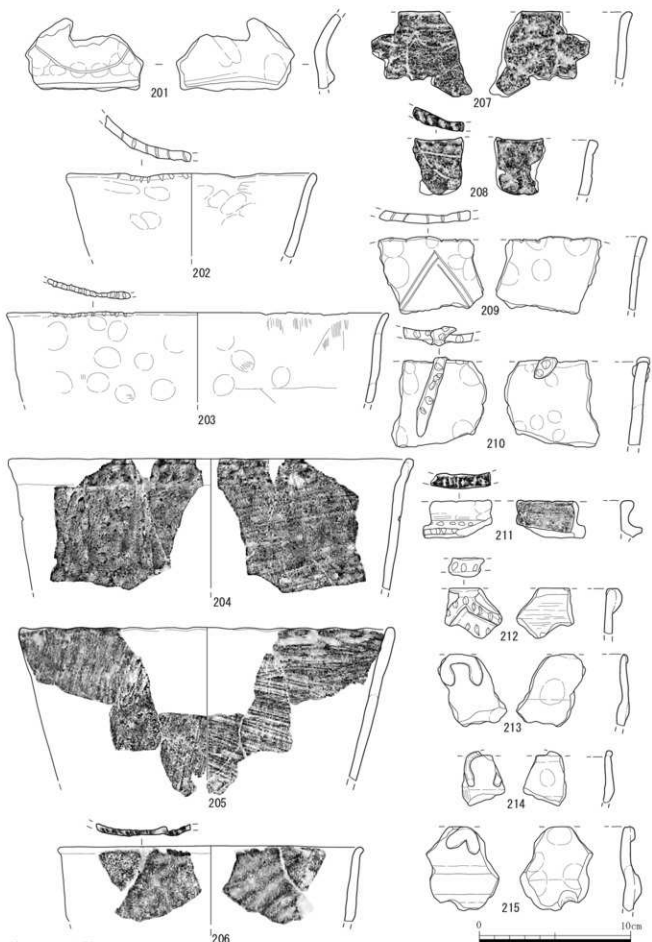
图版 61 土器 15



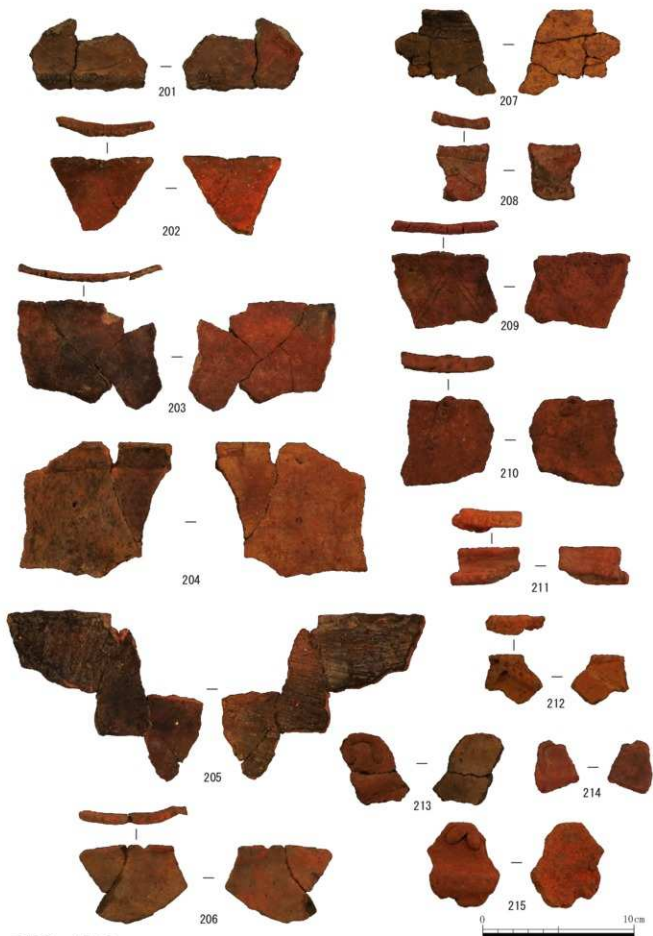
第 86 图 土器 16



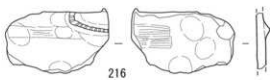
图版 62 土器 16



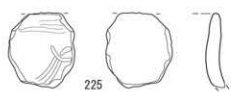
第 87 图 土器 17



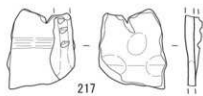
图版 63 土器 17



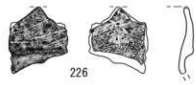
216



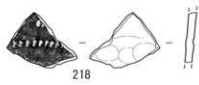
225



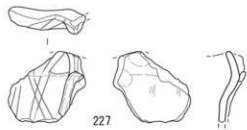
217



226



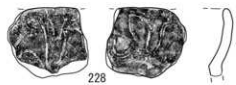
218



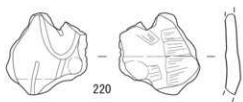
227



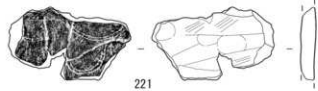
219



228



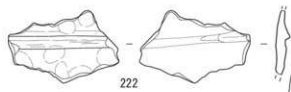
220



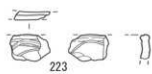
221



229



222



223



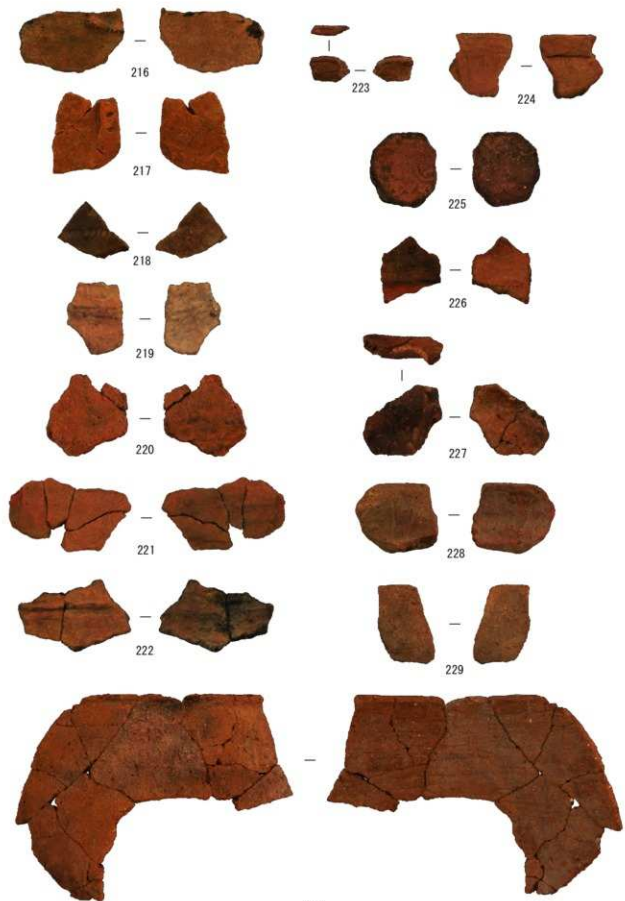
224



230

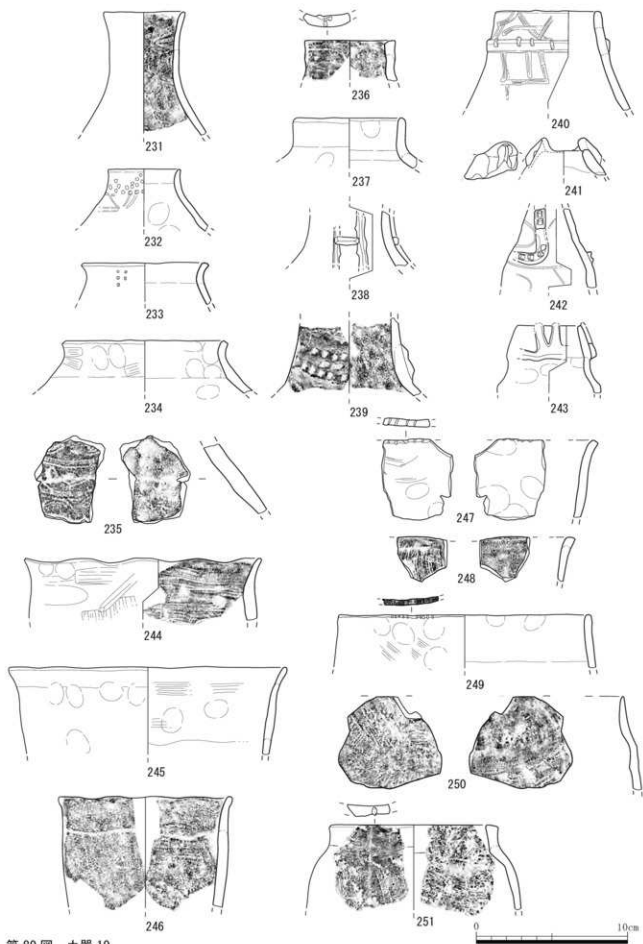


第 88 图 土器 18

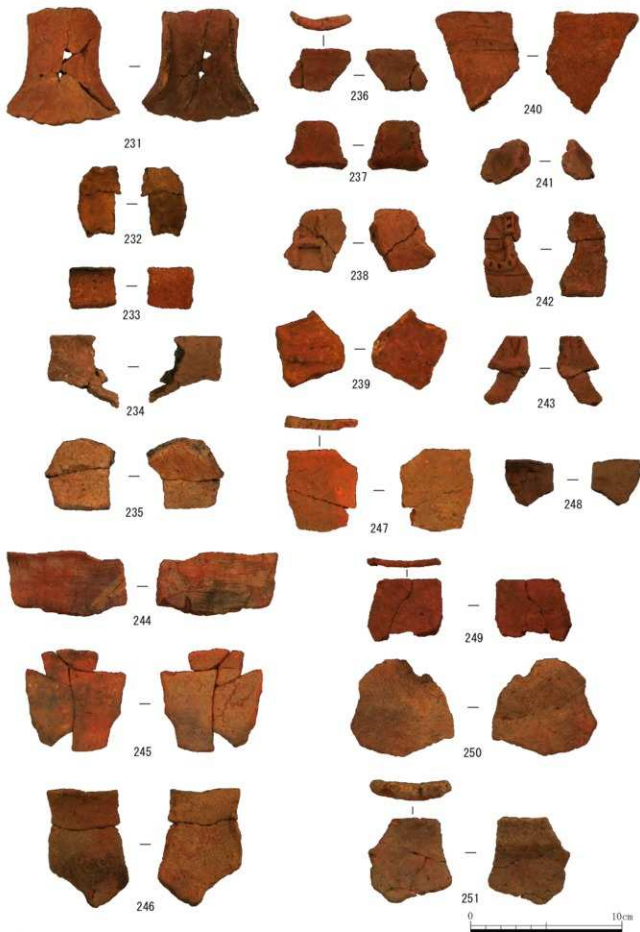


图版 64 土器 18

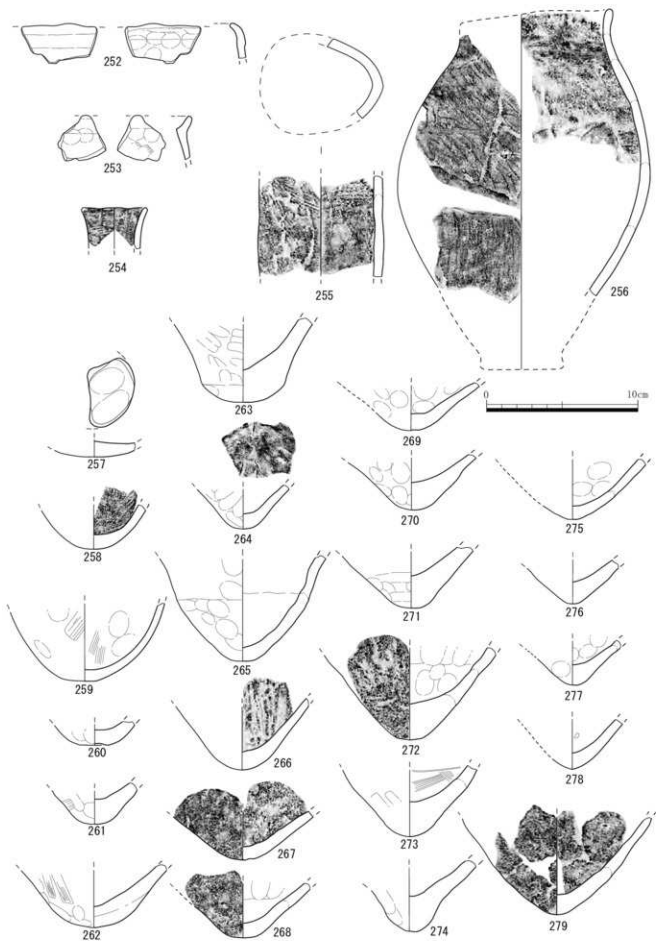




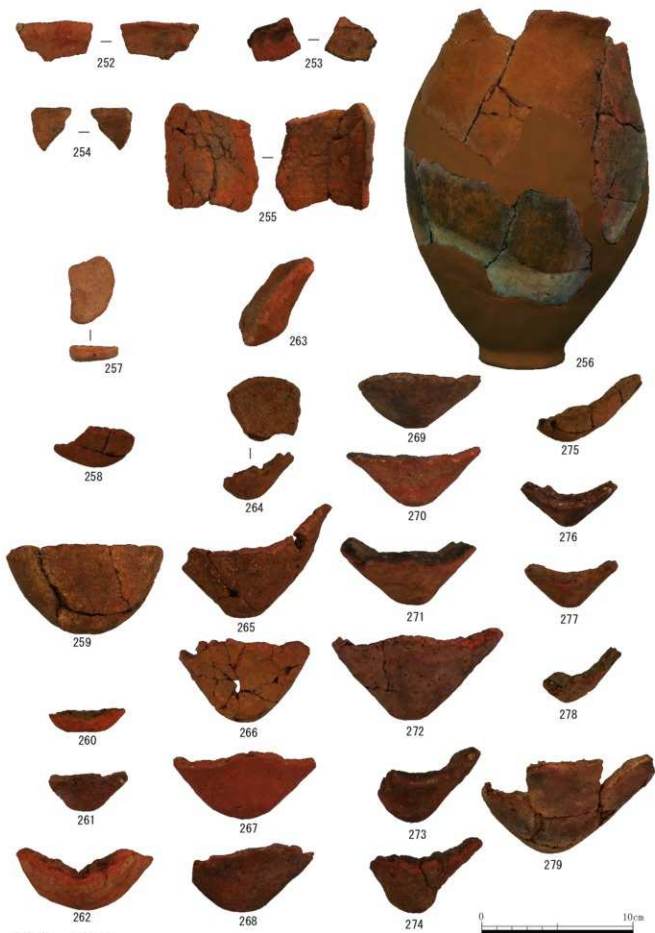
第 89 图 土器 19



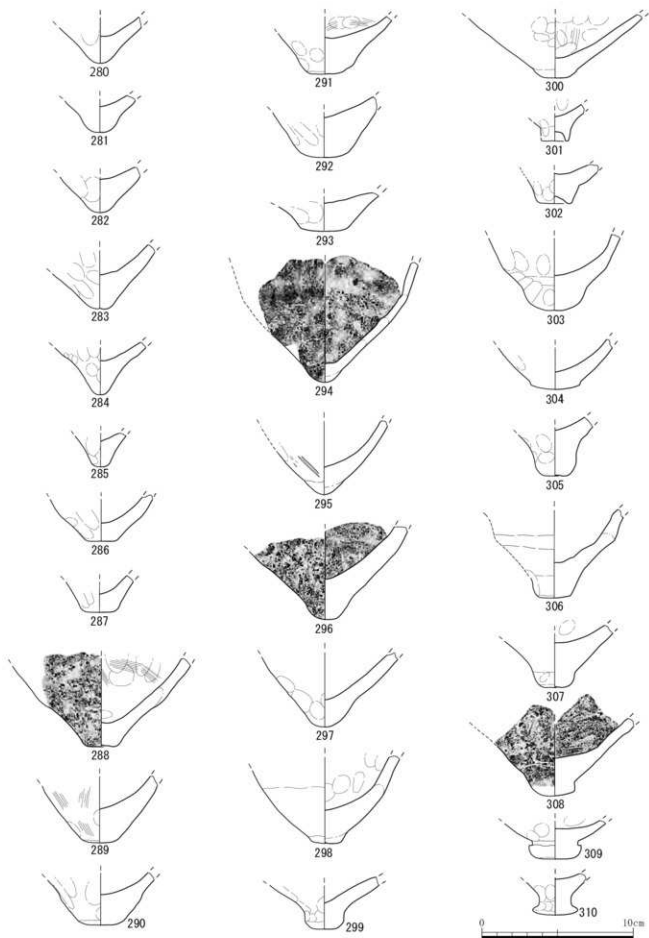
图版 65 土器 19



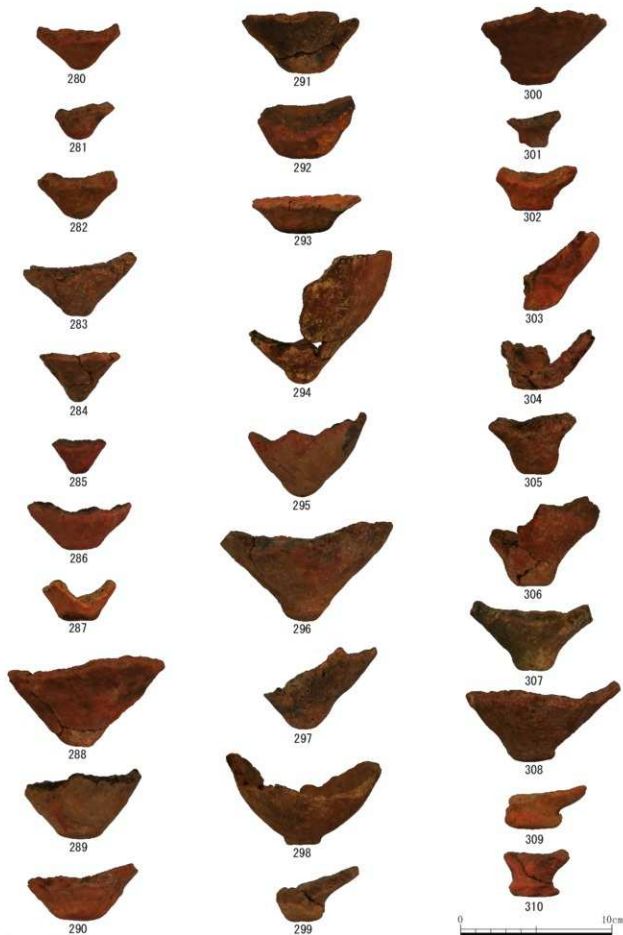
第90圖 土器 20



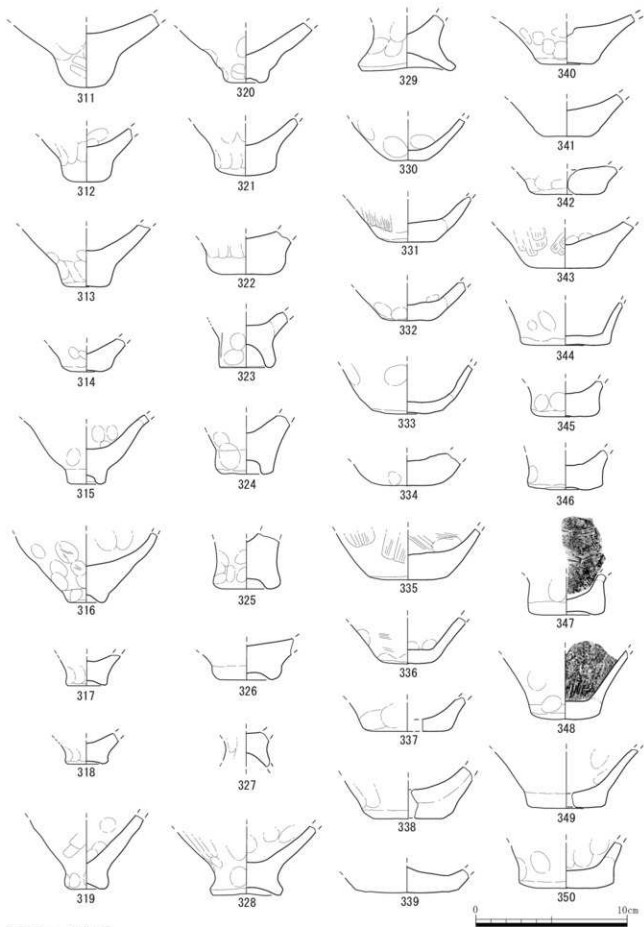
圖版 66 土器 20



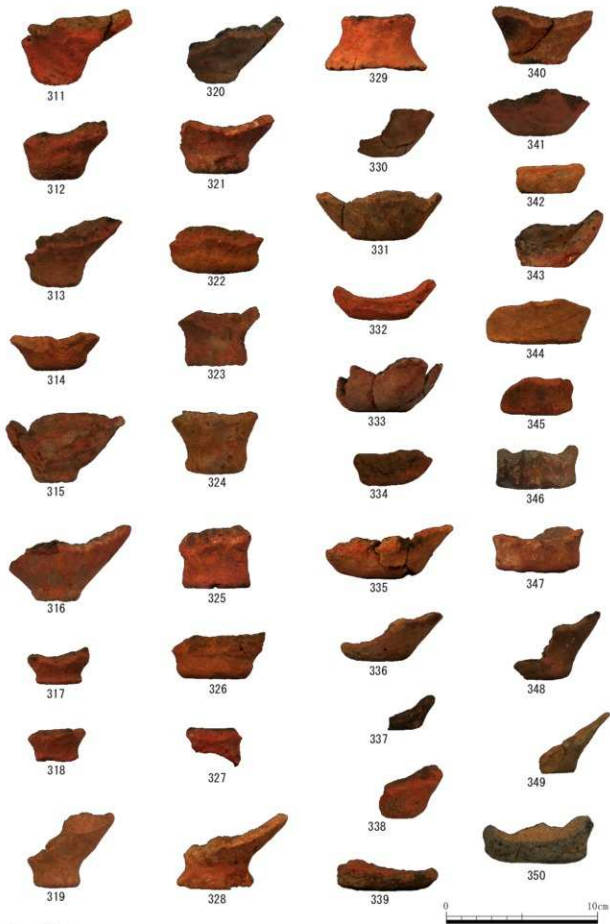
第91圖 土器 21



图版 67 土器 21

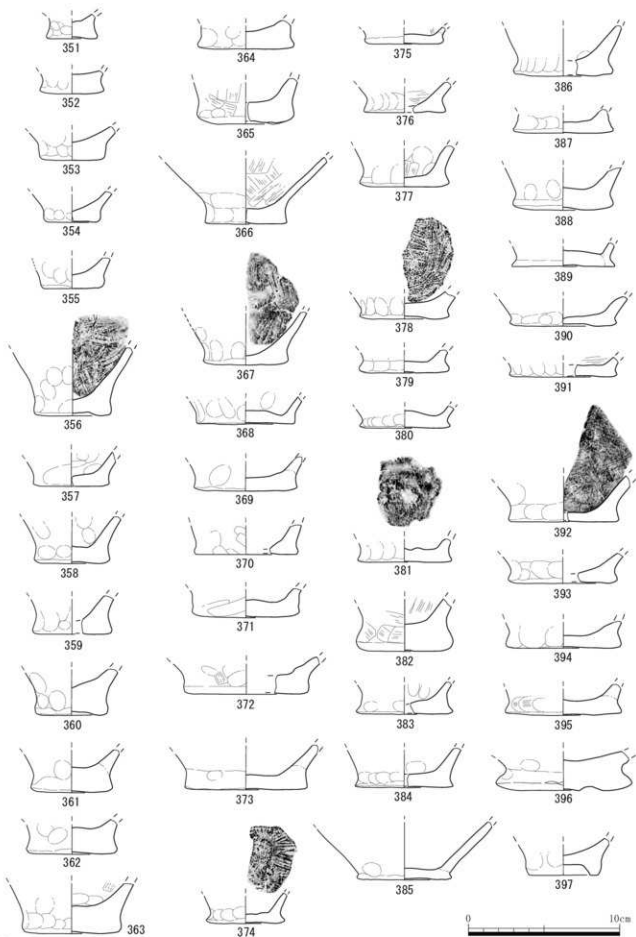


第 92 图 土器 22

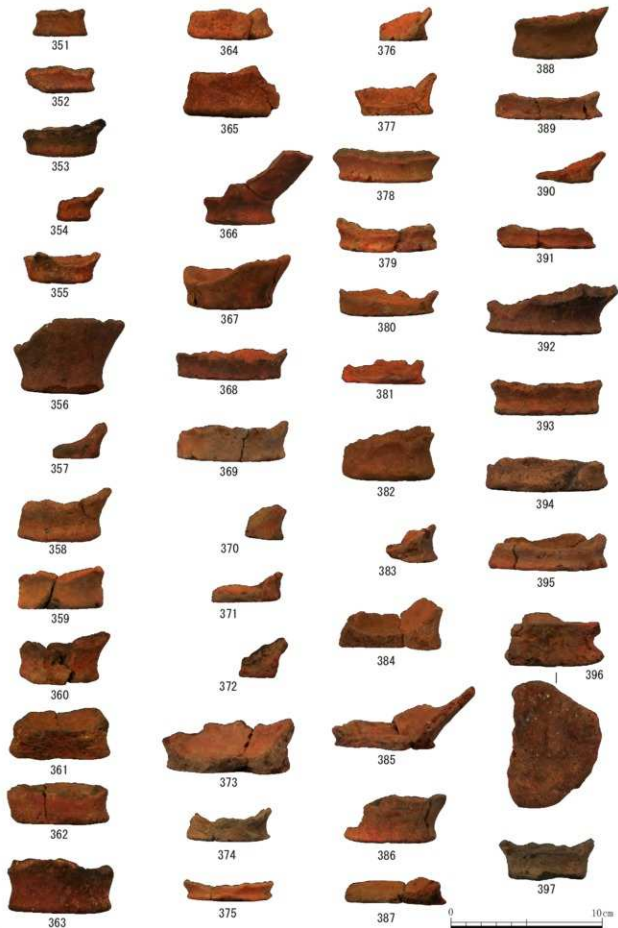


图版 68 土器 22





第 93 图 土器 23



图版 69 土器 23

## (2) 石器

総数345点出土した。器種は石斧・蔽石・蔽石兼磨石・磨石・石皿・砥石・台石・円盤状石器・クガニ石・チャート製品(楔形石器・スクレイパー)・石球・用途不明石器・サンゴ有孔製品である。

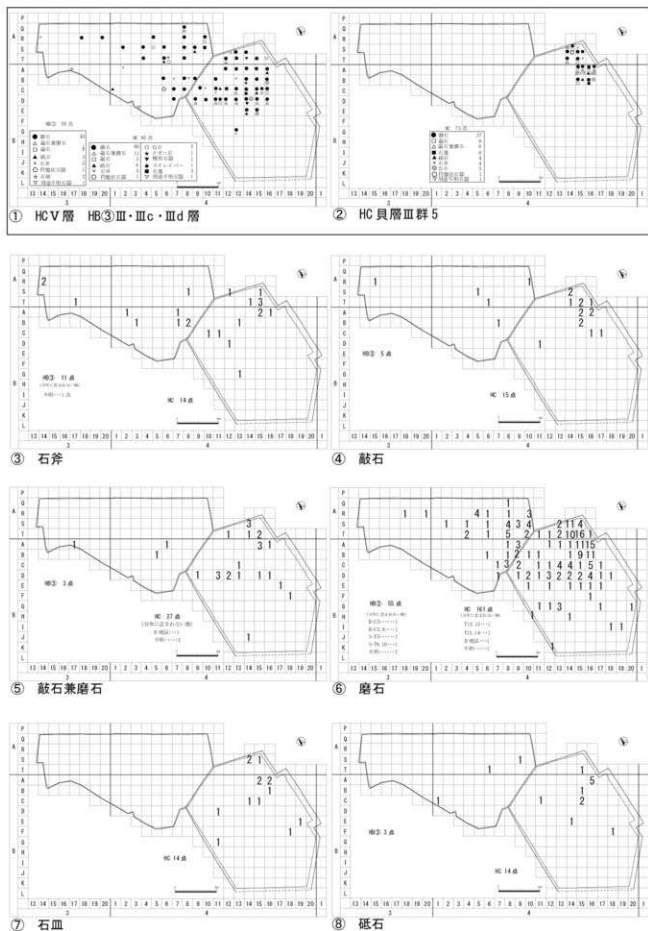
下表のとおり、器種では磨石が216点と最も多く、器種全体の62.6%を占める。他の器種に比べ磨石が多い傾向は、HC・HB③とも同様である。石斧は全体の7.2%、蔽石は5.8%、蔽石兼磨石は8.7%と10%に満たず、砥石・石皿など数量の少ない器種は5%以下である。

層序では、HCのV層(後期層)から95点と多く全体の27.5%を占め、石斧・蔽石・磨石など殆どの器種が出土する。V層は土器においても大当原式土器が主体で、石器と時期も、量的にも一致する。次いで貝層群のI群～V群のうち、石器は貝層Ⅲ群が多く、特にⅢ群5層はV層と並び73点と全体の21.2%を示す。これに貝層Ⅲ群3層と貝層Ⅲ群2層が続く。

HB③では石器の出土量が少なく又、貝層は確認されていない。Ⅲ層(遺構SK36含む)とⅢd層は22点と同数で比率にして6.4%である。これに次いでⅢc層が15点の4.4%、Ⅲb層が13点で3.7%である。

第25表 石器 出土量

遺跡	層	遺構	器種		石皿		砥石		台石		円盤状石器	クガニ石		チャート製品 スクレイパー		石球	用途不明石器	サンゴ有孔製品	合計	
			石斧	蔽石	蔽石兼磨石	磨石	完形	破損	完形	破損		破片	完形	破損	完形					破損
HC	I	検乱				1							1						2	
	II				1													1	2	
	IIc	遺構			2														2	
	III	グスク				3					1						1		5	
	V	後期層	5	3	11	60	3	1	4	1	2	1	1	1	1	1	1		95	
	貝層群	d				1														1
		1	2		1	3														6
		1a				1														1
		1b		1		1														2
		2			2	11			1											14
		3	2	1		12											1			16
		4				1	2													3
		5	4	9	6	37	2	6		4	1	2	1					1		73
		不明				3														3
		貝層IV群				1														1
	貝層V群				1														1	
	不明	1	1	6	21	3	1						1						34	
HC小計	14	15	27	161	2	12	3	8	1	1	5	2	1	2	1	1	3	1	261	
HB③	I			1															1	
	IIa	遺構			1														1	
	IIb				1														1	
	IIc	遺構		1	1													1	3	
	III		2		14			2				1					1	1	21	
	III	SK36			1														1	
	IIIa		2		1														3	
	IIIb		2		2	7												2	13	
	IIIc		1	1	11											1			14	
	IIIc	SD04			1														1	
	IIId (V)		2	2	1	12			1										18	
	IIIe				4														4	
不明		2		1														3		
HB③小計	11	5	3	55	0	0	0	3	0	0	1	0	0	0	0	2	4	0	84	
HC+HB③合計	25	20	30	216	2	12	3	11	1	1	5	3	1	2	1	1	3	7	1	345



第94圖 石器 平面分布

第94図①・②は出土量の多い層に限定し、器種別で平面分布に示した。第94図①に示すHC V層とHB③ III層・IIIc層・III d層は、土器の出土状況も参考として同一の時期としてまとめた。図①は、磨石がHCの調査区北東側からHB③の南側にかけて広く分布し、HB③の北側にも若干散見される。HCでは磨石に限らず敲石兼磨石、砥石などが認められ、HB③でも様々な器種が全体にHC寄りのグリッドに多く確認される。

第94図②はHC 貝層III群5層出土の遺物で、図に示すように限られた範囲で石器が集中する様子が確認できる。貝層III群5層はV層に次いで遺物が多く、下層にいくほど集中範囲が小さくなる。器種では磨石が多く、石皿は14点のうち8点が出土している。

次に点数の多い6器種を第94図③～⑧に示した。図③～⑤の石斧・敲石・敲石兼磨石は、出土量・分布も同様の状況を示す。HCとHB③の比較では、HCに若干多い程度で、僅かにHC北東側の貝層群で数グリッドに3器種とも、やや纏まるように出土する。

HB③では、どの器種も集中せず散見される程度である。特に石斧は、近接する遺跡の中で今回は出土量が少なく、分布にばらつきが見られる。

図⑥の磨石は、HCとHB③では集中度に差がある。HCに殆どの磨石が集中し、調査区北側約半数のグリッド、貝層群の検出された北東側は特に多い。磨石の出土量216点のうちHCだけで161点出土している。北東側の貝層群検出箇所では土器もくびれ平底が多く認められることから、推測の範囲だがグスク時代まで敲打器類を使用していた可能性も想定される。

図⑦の石皿はHCのみで認められ、破損品ながら大型資料が数点認められる。図⑧の砥石も量的にHCが多くHB③では僅かに3点と少ない。又、既報告の平安山原A遺跡(2016)で認められたグスク時代と考えられる砥石は今回確認されていない。

#### 遺構出土の石器

第26表に遺構出土の石器を示した。石器は8点と少なく、HCでは土坑・柱穴、HB③は石列・土坑・溝状遺構から敲石・磨石・用途不明石器が出土した。HC P01では二枚貝有孔製品と、SK02では土器底部・二枚貝有孔製品と共伴出土している。HB③ではSK32・SK36・SD04で土器口縁・胴部・底部などと共に出土した。

HC P01は、埋土中に小礫、自然貝を多く含み4層に分層されるが、石器の詳細な出自は不明。HC SK02の埋土は近世包含層と白砂の互層で、近世期に掘削された可能性があるものの、石器は埋土下層出土である。表中に層序・時期を示したように、グスク時代の場合、石器を使用する可能性はあるが、期的にその範疇かは判断できない。

HB③ SL02・SL05は石列遺構で、試掘トレンチと、重機掘削後の清掃時に出土したもので、近代・近世に該当する時期だが、本来の帰属時期がはっきりしない。SK32の磨石・用途不明石器は、時期がIIc層の近世出土だが埋土下層から出土した。SK36の土坑、SD04の溝状遺構ともに出土時期はグスク時代である。HC・HB③のどちらの遺構も帰属時期はグスク時代・近世・近代に相当するもので、紛れ込みの可能性も否めない。

上記の石器以外に遺構から石材及び礫類も65点出土している。HCでは土坑SK01が白砂層上面で検出され、遺構内から礫片が20点、HB③のSK14、SK32、SK36、SK38、SK40で合計12点、その他HC SP01で1点、HB③ SP18で1点、SP23で2点の計4点、HB③のSL01、SL01・02、SL02、SL04、SL05、SL07で計17点、HB③ SD04で12点出土した。

第26表 遺構出土石器一覧

遺跡	遺構名	遺構番号	層序	時期	器種
HC	土坑	SK02	IIc	近世	磨石
	柱穴	P01	IIc	近世	磨石
HB③	石列	坂女期内小-SL05	IIa	近代	磨石
	石列	石列1群-SL02	IIc	近世	敲石
	土坑	SK32	IIc	近世	用途不明石器
HB③	土坑	SK32	IIc	近世	磨石
	土坑	SK36	III	グスク	磨石
	溝状遺構	SD04	IIIc	グスク	磨石

## 石斧

完形と基部・刃部破損資料、破片、粗加工品を含め25点出土した。石斧は下記の基準とおり全体の器形と刃部で大別、又サイズで分類した。

18点を図化した形態は破損資料が多く、分類不可に含めたものが殆どである。基端から刃部までの長さが短く、頻繁に研ぎ直しが繰り返された痕跡の窺える資料もみられた。

又、刃を付けた形跡がなく石斧として完成されていない資料は粗加工品として扱い、特徴的な点を略記する。

第27表に石斧の形態別分類を示した。I～IV類としたものは完形で形態が確実に把握できる資料を分類した。分類不可には基部、刃部の破損資料と破片を含めた。刃部破損資料が大半で全体量の半数近い。石斧の刃部で用途を考えた場合、観察表に示すとおり両刃の資料が多い。

## 形態分類 &lt;正面&gt;

I類：撥形で基端頭部が小さく刃部に向け末広がり

II類：短冊形を呈し、基部から刃部に向け直線的

III類：棒状形で基部に厚みがあり乳棒状を呈す

IV類：上記のどちらの範疇にも属さない不定形資料

分類不可：基部もしくは刃部が破損、形態把握が不可

粗加工：粗く成形、細かい打割調整はなく刃の研ぎ出しはない

## 刃部形態 &lt;正面&gt;

A：円刃で刃の中心から左右にラウンド状に刃が付く

B：直刃で刃先全体が直線的で刃の左右に角を作る

C：偏刃で刃の付け方が左右でアシンメトリー

## &lt;側面&gt;

I：基部と刃部の境目が厚い

ロ：全体に均一な厚み薄手を呈す

## &lt;側面&gt;

1：両刃で表裏両面から刃を研ぐ

2：片刃で片側から刃を付ける

## サイズ分類

1類：大型の範疇として、基部から刃部先の長さ12.0cm以上

2類：中型とした資料で基部から刃部先の長さが12.0cm～10.0cmの範疇のもの

3類：小型のサイズで基部から刃部先の長さが10.0cm以下のもの

## I類

図1・10は撥形石斧の範疇としたものである。図1は撥形の両刃としたが、側面を見た場合、裏面からの刃の研ぎ出しが強く、やや片刃的な要素もある資料である。図10は撥形を成し右側面の一部が欠損する。研磨状態は特に良好で均一な厚みを呈し、刃部に刃毀れが数箇所見られる。

## II類

この形態に含めた資料は平面観が基端頭部～刃部まで同じ幅をもち、且つ側面が均一な厚みのものを短冊形とし、図8をこの範疇に含めた。完形で厚みが均等、ほぼ全面に顕著な成形が施される。刃は角度が急で刃面が短く、刃部に刃毀れは見られない。又、刃の研ぎ直しも確認できる。

## III類

図7は平面・側面観から棒状に含めた。裏面は基部～刃部に欠けを生じる。研磨痕は明瞭だが部分的に自然面を残す箇所もあり、横断面をみる限り厚みは左右均等ではない。

第27表 石斧 形態別サイズ分類

器形	刃部	形態 サイズ	形態				分類不可		破片	破損	粗加工	合計
			I類	II類	III類	IV類	基部	刃部				
HC	V	後頭部	2	1			1	1			1	5
		片刃	1				1	1				2
		両刃	3			1		1	1			2
		不明	5		1			1	1	1		4
		HC 小計	2	1	1	1	2	2	3	2	14	
HB	③	Ⅱa					2	1			3	2
		Ⅱb					1	1			2	
		Ⅱc					1				1	
		Ⅱd (V)						2			2	
		不明						1	1		2	
		HB ③ 小計	0	0	0	0	1	3	1	1	11	
		HC+HB ③ 合計	2	1	1	1	3	10	4	3	25	

#### IV類

図11は基部～刃部まで角がなく、偏平で均一な厚みを呈す。裏面の一部は欠けを生じ、研磨は基部と刃部に認められる。刃部は円刃で刃は短く、一部に刃毀れを生じる。

#### 分類不可

図6・15は基部資料である。図6は厚みがあり、基端は平坦面を成し擦痕が認められる。基部は成形され研磨は明瞭でないが、全体に丸みを帯びる。基部中央から下部は大きく破損、刃部の形態は想定できない。図15は基端頭部の角を落とし丸く成形、研磨は表裏面・両側面に認められ明瞭、側面の厚みは均一で原形は残存部から短冊形と判断できる。

図2～5・9・12～14は刃部資料である。図2は基端を欠き残存する基部はやや厚く、側面から両刃と判断できる。図3は形態やサイズは判断できないが、刃部の厚みからかなり太形の両刃石斧と推測される。刃毀れはあるものの、研磨はかなり明瞭である。図4は裏面の基部中央～刃部にかけて大きく破損する。研磨は両面とも顕著だが側面まで至らず、刃部形態は刃毀れが激しく不明とした。

第28表 石斧 観察一覧

(数量単位:個)

器種 図版	図 番 号	形態		完成	残存 部位	刃部形態		サイズ	計測値				観察事項	石質	調査・分析・目録 番号・台帳(付)番号
		平面	側面			正面	側面		残存長	残存幅	残存厚	重量			
第10図 図版71	1	I類	イ	完成	-	A	1	3類	9.9	3.9	3.7	334	状態:基端部部、面を成す 研磨:基部・刃部明瞭 刃部:刃は短く、一部に刃毀れあり	砂岩	HC C10 V 13439
	2	分類 不可	イ	破損	刃部	A	1	不明	8.4	6.5	2.9	265	状態:基端破損 研磨:基部・刃部明瞭 刃部:刃は短く、一部に刃毀れあり	砂岩	HC T15 貝塚群第5 F4240
	3	分類 不可	イ	破損	刃部	A	1	不明	6.7	3.8	2.9	113	状態:基部には破損、形態不明 研磨:刃部不明	輝緑岩	H9② R14 III4(14) F1942
	4	分類 不可	イ	破損	刃部	A	1	不明	8.2	6.1	2.4	119	状態:裏面、刃部～基部中央破損 研磨:表面・刃部～基部まで明瞭	片状砂岩	H9② B7 III4(7) F406
	5	分類 不可	イ	破損	刃部	A	1	不明	9.1	5.5	2.4	180	状態:刃部の刃先、欠けを生じる 刃部:刃は短く、側方破損 研磨:基部・刃部不明	砂岩	H9② B8 III4(12) F4279
	6	分類 不可	イ	破損	基部	-	-	不明	8.1	4.3	4.0	205	状態:石斧の基部のみ 基端:頭部一面を成す 研磨:表面・裏面に成す線状	輝緑岩	H9② T17 IIIb(5) 台825
	7	II類	イ	完成	-	-	-	3類	9.5	4.3	3.5	212	状態:基部に多量 基端:頭部一面を成す 表面:大きく破損、刃部形態不明	砂岩	HC A16 貝塚群第5 F4163
	8	II類	イ	完成	-	B	1	I類	12.3	7.2	2.7	484	状態:基端部部、面を成す 研磨:基部・刃部明瞭 刃部:刃の長さ、基部に反比例短く	凝り砂岩	HC C11 V(白砂層上面) 台5078
第12図 図版72	9	分類 不可	イ	破損	刃部	B	1	不明	6.3	4.5	2.5	114	状態:基部中央から破損 研磨:表面面に有り 刃部:刃先やや鈍る	凝り砂岩	HC A15 貝塚群第5 F3227
	10	I類	ロ	完成	-	A	1	2類	10.6	7.6	2.4	331	状態:両側面打削磨、一部研磨 刃部:刃部研ぎ出しの痕、刃は短く、一部に刃毀れあり 研磨:基部・刃部明瞭	砂岩	HC S12 V(最期層) F2788
	11	IV類	ロ	完成	-	A	1	2類	10.0	5.6	2.0	196	状態:全体に角がなく頭先を呈す 基部:一部薄く割断 研磨:表面裏面・刃部明瞭	砂岩	HC T15 貝塚群第5 F4047
	12	分類 不可	ロ	破損	刃部	B	1	不明	7.2	6.5	2.1	110	状態:形状不明、全体につり難い 刃部:刃は付される 研磨:基部不明、刃部研ぎ	片状砂岩	H9② A7 IIIb(5) F211
	13	分類 不可	ロ	破損	刃部	C	2	不明	5.4	4.5	1.4	63	状態:基部形態不明、側面に線状を成す、角を成す、 刃部のみ残存 研磨:基部一部、刃部不明	砂岩	H9② R14 IIIa(4) F3
	14	分類 不可	ロ	破損	刃部	-	-	不明	5.1	2.9	1.3	30	状態:研磨は部分的に明瞭 刃部:刃先の刃線は直線、面を成す	角閃岩	H9② A2 III4(14) 台1620
	15	分類 不可	ロ	破損	基部	不明	不明	不明	7.5	4.8	2.1	156	状態:基部中央～下部破損 研磨:基部、表面面・両側面明瞭	砂岩	HC G13 V 13823
	16	分類 不可	-	破片	-	-	-	不明	7.2	4.8	1.1	65	状態:裏面割断、表面基部のみ 研磨:表面、一部明瞭	砂岩	H9② 調査・分析・目録 番号不明 台1731
	17	粗加工	-	-	-	-	-	-	7.3	5.3	2.0	122	状態:形状局部磨削的、成形途中 研磨:表面基部研ぎ出し、裏面基部・刃部も僅かに有	砂岩	HC B13 V 13833
	18	粗加工	-	-	-	-	-	-	12.6	5.5	2.2	270	状態:成形は粗く打ち削り 研磨:基部中央の一部	砂岩	H9② R3 IIIa 台314

図5は全体に成形され基端も残存するが、石質が泥質の砂岩のため基部の研磨は不明瞭である。刃部は表裏面とも刃の研ぎ出しが確認されるが、刃毀れも多い。図9は基部が僅かに残存、平面視は幅が細く側面は刃部に厚みを持つ。刃部は直刃で刃先が直線的、又、裏面はかなり上部まで刃を研ぎ出し片刃的な様相を呈す。図12は基部中央から破損し形態不明、僅かに残存する基部は雑なつくりで刃部のみ研磨され、刃は扁平な両刃であるが片刃の要素をもつ。図13は基端～基部中央まで破損する。側面の厚みは均一で薄手を成し、刃部は片刃で刃先から刃面までの長さが短い。又、左右の厚さが均等でなく左側面が若干厚くなる。図14は刃部の一部のみ残存し、表裏面に僅かに研磨が見られ裏面は平坦な面を呈す。刃先は研磨で潰れ、刃線は失われている。

### 粗加工品

図17・18は粗加工資料とした。基本的に細かい調整痕や研磨のないものを指すが、ここでは一部に目的不明の研磨が認められる資料も含めた。図17は上部が破損し、全体の形状は粗く成形される。裏面中央と下部に研磨が確認されるが、刃を付けた痕跡や刃の研ぎ出しは全く認められない。図18は転石を利用したもので、形状に若干ねじれと歪みが見られる。表面は粗割り程度で打削調整は施されず、裏面の一部・両側面は自然面を成す。裏面もほぼ加工痕はなく基部中央の一部、高まりの箇所を平坦に研磨した痕跡が窺える。

### 敲石

敲石の形態・サイズ分類は、以下のように行い、且つ分類の範疇にない資料は横幅と厚さの計測値も参考にした。又、長さや幅に対し厚みのある資料は、上下に面をもち敲石に使用される事が多い。使用痕については敲きの痕跡が主に目立つもの、窪みの明瞭な資料を敲石として分類し20点出土した。石質は砂

第29表 敲石 形態別サイズ分類

遺跡	層	形態	I類		II類		III類		IV類		V類		分類不可	合計	
			1類	2類	1類	2類	1類	2類	1類	2類	1類	2類			
HC	V	両面磨			1				1					1	3
		片磨			1										1
		不明			1	2	1		2	2	1				9
		不明													1
		不明													1
HC小計			0	0	2	1	2	1	1	2	2	2	2	15	
III	III	I						1							1
		II							1						1
		III			1										1
		IV			1				1						2
III小計			1	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	5	
HC+III小計			1	1	2	1	2	4	1	2	2	2	2	20	

岩が多く使用され、片状砂岩・礫質砂岩などの堆積岩や斑レイ岩・輝緑岩なども認められた。第29表に形態別サイズ分類を示した。形態ではI～V類のうち、III類が6点でやや多く又、II類とV類が4点と同数出土した。サイズ分類では各々の形態に1類・2類と分け、そのうち2類が10点、1類は8点である。

#### 1) 形態分類

- I類：円形で扁平なものと厚みのある種類に分けられる
- II類：球状形で全体に丸みがあり、1類・2類資料に多い
- III類：楕円形の厚みがあり角のない資料で、1類に認められる
- IV類：依形を呈し全体に丸みをもち筒状の資料
- V類：不定形で達磨や瓢箪様の形状、その他の形状が一般的でない資料

#### 2) サイズ分類

- 1類：中型で長さが14.0～8.0cm、又は重量1.500g～450gの範囲の資料
- 2類：小型で長さが8.0cm以下、又は重量450g以下のもの



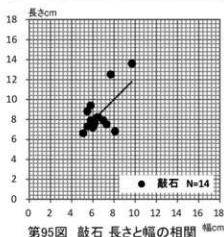
図19・20は石質が脆い素材を利用しており、手短な転石、或いは自然礫を用いたと考えられる。図19は砂質石灰岩を用い、使用痕は四面の5カ所に見られ、敲打は2～5cm台の範囲を示す。図20は自然の転石を利用したと思われる。頭部と下部の上下に敲打が認められ、部分的に面取りされた痕跡と括れをつくる箇所に線状痕らしき跡がみられる。図51も転石を利用したと考えられ、形状は成形されていない。中央部分が括れを成し、且つ一周し部分的に窪みを有す。使用痕は下面に敲打の痕跡を残す。石質は砂岩で粒子が細かい。

第30表で完形14点の形態とサイズを比較した。形態はⅢ類が若干多くサイズでは1類・2類の比較で敲石の全体量20点からすると2類の完形率は高い。形態はⅢ類が若干多く1類・2類では標準的な形態と考えられる。

第95図は長さと幅のサイズを数値でグラフに示した。この図も完形のみを示し、敲石は長さ6～10cm以内、幅4～8cm台の大きさに集中し、1類・2類の範疇ではこの大きさが一般的と言える。グラフ内の近似直線に近い数値に集中しており、やや縦長の形状が多い。

第30表 敲石 形態別サイズ比較(完形)

形態	サイズ		
	1類	2類	合計
I		1	1
II	1	2	3
III	2	4	6
IV		2	2
V	1	1	2
合計	4	10	14



## 敲石兼磨石

### 1) 形態分類

- I類：円形でやや扁平資料と厚みのある種類に分けられ、サイズ分類の2類に多い
- II類：球状形で扁平と厚手に分類され、1類・2類の資料に多い
- III類：楕円形の厚みがあり角のない資料で、1類・2類の完形に多く認められる
- IV類：俵形を呈し全体に丸みをもち筒状の資料で1類・2類資料に多い
- V類a：石蝕状の隅丸で全体に角のないもので2類に認められる
- V類b：分銅形で両側面にノッチ状の窪みが明瞭なもの
- VI類：不定形の形状が特定の形を示さず破損資料や原形が窺えない資料も含む

### 2) サイズ分類

- 1類：大型の範疇に含め、長さ13.0cm以上、又は重量1,300g以上
- 2類：中型で長さ13.0～9.5cm、又は重量1,300～250gはこの範疇に含む
- 3類：小型で長さ9.5cm以下、又は重量250g以下

第31表 敲石兼磨石 形態別サイズ分類

遺跡	層	形態 サイズ	形態別												分類 不可	合計				
			I類		II類		III類		IV類		V類a		V類b				VI類			
			1類	2類	1類	2類	1類	2類	1類	2類	1類	2類	1類	2類			1類	2類		
HC	V	後期層	1	1			1	1	3	1	2							1	11	
		1																1	1	
		2				1							1						2	
		4										1							1	
		5			2		2				1			1					6	
		不明						2											2	
HC小計			1	1	2	1	4	5	1	2	2	1	1	1	1	1	1	2	27	
HD	②	IIIb															1	1	2	
		IIIc (V)															1	1	1	
		HD②小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	3
HC+HD②合計			1	1	2	1	4	5	1	2	2	1	1	1	1	1	1	3	1	30

敲石兼磨石は敲石と磨石の用途を兼ねた資料と捉えた。敲きの痕跡が見られる資料は範囲の小さい敲打の場合も、その度合いに限らずこの項目に含め30点出土した。個体により表裏面でそれぞれ用途を使い分け片面で敲打、片面で磨りの使用痕が確認される資料もある。形態とサイズ分類は前述のように行った。

第31表に形態分類を示し、形態はVI類に、サイズは3種類に分類した。形態はIII類が多く13点、サイズ分類では各々の形態の1～3類に認められ全体で2類が18点と多い。

図27・29は、2点ともIII類の形態に属す資料で、図27は若干幅がなく細身である。どちらも中央に同程度の敲打痕を有し、窪みは図27の方が深く図29は幅広く敲きの痕跡も浅い。図30は、側面の状態から厚手資料とした。完形で表裏面に明瞭な研磨が認められ滑沢である。両面中央に敲打があり片面は深く片面は浅い。風化により鉱物の雲母片が抜け落ち、多孔質の状態では表面の研磨面も脆く剝離する。

図32は表面中央に3cm台の浅い敲打痕があり、裏面の研磨は破損後に再利用した結果、使用痕が残り緩く反りが見られる。図36は、左側面から裏面にかけ破損する。研磨は表裏面の残存箇所認められ、敲打は破損部の左側面に3cm前後の深い窪みを有し、破損後もその面を再利用している。図37・38は、V類aの形態を呈しサイズは2類の厚手の範疇に入る資料である。図37は、用途を使い分けた典型的な資料で片面は磨り、もう片面は敲きに使用している。図38は、表裏面の研磨が特に明瞭で、上下面と側面周囲に浅い擦痕が確認できる。図41は形態がIII類、サイズ1類の厚手資料で、裏面の一部が破損する。使用痕は裏面・下面残存部に敲打が認められるが、石質が砂岩のため敲打痕が不明瞭である。研磨は表裏面全体にみられる。

図53は側面に窪みもち表裏面とも研磨は明瞭で、上下端も面を成し擦痕が認められる。両側のノッチ状窪みは縦4cm、横3cm程度で、手で掴む際の指掛けに適している。

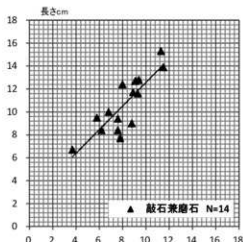
図54・55は側面が厚手の資料で、図54は表裏面に研磨が明瞭、どちらの面も中央に3～4cm台の敲きの痕跡が窺える。両側面は明瞭なノッチ状の窪みを有し、上下面は擦痕が浅く認められる。図55は、表・両側面、上下に敲きの使用痕が観察される。図81の資料と共伴出土した。

図57・58は表面中央に稜をもち下面から見た形態が三角形を成す。図57は整った形状で下面図にあるように中央に稜をもつ。一部に研磨の跡が残るものの、中央の稜を境に左右どちらも多孔質で風化の影響が窺える。又、裏面の平坦な面は研磨が残る。図58も表面中央に稜をもち、左右どちらも研磨が明瞭で、右側に微かに敲きの痕跡が残る。裏面は平坦な面を有し、研磨はかなり滑沢、右側面のみ4cm台の窪みが認められる。

第32表に完形15点をサイズ別に形態を比較した。形態はIII類が多く、破損も含めるとV類aと二つの形態に分けられ、その他の資料は手短な転石を簡易的に使用したと考えられる。第96図に長さとの関係を示し、1類と2類ではサイズの集中する範囲が違う。一般的なものは幅対し長さの比率が高い資料が多いが、長さとの数値が同数の資料で近似直線から外れるものが数点あり、縦長ではなく長さの短いものも認められる。

第32表 敲石兼磨石 形態別サイズ比較(完形)

形態	1類	2類	3類	合計
I			1	1
III	2	4	1	7
IV			2	2
Va		2		2
Vb	1	1		2
VI		1		1
合計	3	8	4	15



第96図 敲石兼磨石 長さとの関係

## 磨石

磨石は最も出土量が多く 216 点出土した。研磨が明瞭で滑沢なものほど破損率が高く、全体のサイズは特定できない。下記のとおり形態とサイズで分類を行った。形態ではⅢ類が 56 点で、サイズ分類では 2 類が 73 点と最も多い。3 類は研磨が浅く使用痕も不明瞭なものが多い。

### 1) 形態分類

- I 類：円形で偏平資料と厚みのある種類に分けられ、サイズはの 3 類に多い
- II 類：球状形を呈し偏平と厚手に分類され、3 類・2 類に多い
- III 類：楕円形で厚みがあり角のない、2 類・1 類の完形資料に多く認められる
- IV 類：俵形の平面観が縦長で筒状で俵の形状を示す資料
- V 類：三角形の平面中央に稜をもち、横断面が三角形を呈すもの
- VI 類：不定形で形状が一般的でないもの、破損資料や原形が窺えない資料も含む

### 2) サイズ分類

- 1 類：大型で長さ 11.0 cm 以上、又は重量 1,300g 以上の資料
- 2 類：中型で長さ 11.0 ～ 9.0 cm、又は重量 1,300 ～ 660g の範疇
- 3 類：小型を呈し長さ 9.0 cm 以下、又は重量 660g 以下のもの

第33表 磨石 形態別サイズ分類

遺跡	層	形態 サイズ	I 類			II 類			III 類			IV 類			V 類			VI 類			分類 不可	合計				
			2類	3類	破損	1類	3類	破損	1類	2類	3類	2類	3類	1類	2類	3類	1類	2類	3類	破片						
HC	I	破片																			1	1				
	II																					1	1			
	IIIc	PG1																				1	1			
	III	ディスク																				2	2			
	V	後期層				1			1													2	2			
	貝類群	d																					1	1		
		1																					1	1		
		1a																					1	1		
		1b																					1	1		
		2																					4	4		
	貝類群	3																					2	2		
		3																					2	2		
		4																					1	1		
		5		1																			1	1		
不明	不明																					1	1			
	不明																					3	3			
HC 小計			1	0	1	1	2	0	1	7	4	23	9	2	0	1	1	1	2	12	1	26	161			
HB	IIa	SR05				1																	1	1		
	IIb																							1	1	
	IIIc	SK32																						1	1	
	III	SK36																						1	1	
	IIIa																							1	1	
	IIIb																							2	2	
	IIIc																							1	1	
	IIIc																							1	1	
	IIIc	SD04																						1	1	
	IIIc (V)																							2	2	
	IIIe																							1	1	
不明																							1	1		
HB 小計			0	1	1	0	1	1	0	0	1	4	4	1	1	0	1	1	0	1	0	10	0	1	26	35
HC+HB 合計			1	1	2	1	3	1	1	7	5	27	13	3	1	1	2	2	2	13	1	36	1	3	89	216
分類別計			4			5			36			2			6			54			89		216			

図23は一部が欠けるが、表裏面とも研磨がかなり明瞭に見られる。表面から側面にかけて角度の違う方向から研磨に至らない擦痕が小さい範囲で幾つも認められる。図24は表面の研磨がない部分は面が潰れ、手慣れの痕跡が見られる。上面・両側面に部分的に研磨が残り、形状から破損品の二次使用の痕跡が窺える。図25は全体に厚みと丸みがあり、平坦な使用面が多面的で形状を変形している。使用面は表裏・両側面の四面に研磨が見られ小範囲ながら明瞭である。図26は石器に不向きと思える程、石英脈が全体に走る。表裏面に浅い研磨が認められ、裏面の一部はかなり明瞭である。下面の一部には研磨に至らない擦痕が窺える。

図40は、破損後も再利用したと考えられる。使用した後の痕跡が形状に表れ多角的に面を成し、六面に使用痕が認められる。歪だが完形とした。破損前の本来の研磨が右側面・下面の一部に明瞭に残り、破損後の研磨は表裏面、左側面の突出部に粗く認められる。

図42は器面が脆く、研磨の痕跡は表面に四箇所、裏面に三箇所と小さい範囲で僅かに残り、おそらく全面に研磨を呈していたと考えられる。石質は花崗岩で鉱物が多く多孔質、風化で残存状態は悪い。図30同様に、酸化で鉱物が風化し茶色に変化する現象が見られた。図45は表裏面とも研磨がかなり滑沢でテカリさえ窺え、使用頻度の高さが窺える。石質は砂岩で鉱物に均一な石英粒を多く含み、研磨が明瞭で滑沢になる。

図49・50は、形態が丸みを帯び表裏面に平坦な面をもたない。図49は全体に丸く研磨は全面に認められ左側面・裏面がより明瞭である。擦痕が上端に三箇所、下端に四箇所認められる。図50は前者に比べ、やや大きなサイズになり研磨は裏面がより明瞭である。使用頻度はそれ程高くなく、器面に細かい凹凸が認められる。

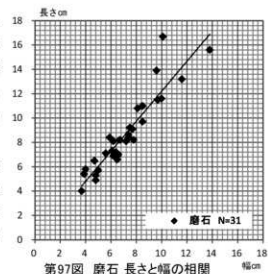
図56・59は、下面から見て三角形を呈す資料である。図56は表面中央が山なりに稜を成し、左右に面をもつ。研磨は全面に認められ、表面左側の敲きの痕は使用時の痕跡でなく後々研磨面を潰した跡と推測される。両側面も稜をもち、裏面は平坦で部分的に研磨が至っていない。石質が輝緑岩のため、研磨がかなり明瞭である。図59は破損資料で、全体に丸みを帯び稜は明瞭でない。図上復元した場合、前者とほぼ同程度の大きさと推測、上面観は丸みのある三角形を呈す。砂岩を用いており節理面から剥離、破損面に石英が張り付く。

第34表に磨石の完形31点を形態別にサイズを比較した。216点と全体量からみると圧倒的に少ないが、1～3類のうち3類に多く残る。1類は各形態の数量が僅かで傾向は把握できず、2・3類は形態のⅢ類に多い傾向にある。破損資料を加えた場合もⅢ類が多く、Ⅵ類が幾つか見られる傾向に変化はない。

第97図に磨石の長さ・幅の相関関係を示した。長さは4cm台から16cm台と範囲が広い。幅は4cm台から14cm台でサイズが大きくなる程、縦・横の比率は縦長傾向にあり、近似直線を示したが敲石、敲石兼磨石の場合と比較し縦長の比率は高い。

第34表 磨石 形態別サイズ比較(完形)

形態	1類	2類	3類	合計
I			1	1
II	1		3	4
III	1	5	13	19
IV			1	1
V	2		3	5
VI		1		1
合計	4	6	21	31



第97図 磨石 長さとの相関

## 石皿

石皿はHCのみで14点出土した。層序では貝層Ⅲ群5層の8点が最も多く、V層で破損資料が3点、その他、層不明3点が確認された。大型に属し、破損資料ながらかなり重量のある資料も出土した。

図79はシルト岩を用い使用痕は表面中央のみ、使用面以外は自然面を呈し、横断面から平坦ながら浅く反りを成す。

図80は砂岩で、使用痕が表裏面に確認できる。特に表面中央の使用痕は深く、平面図を図上復元すると窪みの範囲は四分の一度と判断、その状態から原形は残存部の四倍程度と思われる。裏面も明瞭な使用面が確認できる。

図81は平面が不定形を成し、側面は厚く板状を呈す。表面のみ使用し、石質は黒色片岩である。使用面は平坦で滑沢があり研磨が明瞭に確認されるが、劣化が激しく部分的に剥離している。又、図55の敲石兼磨石と共伴出土した。図82は平面が不定形を成し、側面は板状で均一の厚みを呈す。重量は17.5kgを量り出土した石皿のうち最も重い。

第35表は石皿の使用面と石質を比較したもので、両面使用が3点、片面使用が11点出土した。石質は殆ど砂岩系の岩石で、シルト岩・黒色片岩も僅かに認められる。他に、小堀原遺跡(2012・第78図43)で砂質石灰岩の石皿も確認されている。

第36表では石皿の使用面と残存長でのサイズを示した。14点のうち完形は僅かに2点で片面使用である。破損資料は、両面使用が10～20cm台に3点、片面使用は9点でそのうち40cm以上の長さのある大型資料が2点認められた。石皿の形態・大きさは、県内の遺跡では破損資料が多いが、規格化したサイズはない。大型のものとして伊礼原A遺跡(2014・第74図62)の完形資料で約62cmのサイズが、小型は小堀原遺跡(2009・第38図12)の15cm程度のサイズが確認されている。又、両面使用の場合、中央部が磨り減り、薄くなるため殆どの石皿が破損していると推測される。

## 砥石

出土した砥石は総数15点出土し、石斧や貝製品・骨製品・小型利器などを研ぐ用途と位置づけられた。完形が少なく、ほぼ破損資料でサイズは用途別に大型の置き砥石と、中型・小型の手持ち砥石に分けられる。破損後も手持ち砥石として再度使用されたと考えられる資料もあり、中型・小型が本来のサイズか判断できない。

砥石もHCで12点と多く、V層6点、貝層Ⅲ群2層で1点、貝層Ⅲ群5層で4点、その他、層不明1点、IB③ではⅢ層2点、Ⅲd層で1点の出土である。平安山原A遺跡(2016・第176・177図)ではグスク時代の砥石が出土したが、今回は類似する砥石は認められない。

図73・74は、成形等の手を加えず自然の状態と利用したと考えられる資料である。図73は、やや扁平な棒状を呈し側面の一部が反る状態で、この箇所のみ研磨痕が窺える。図74は全体の形状及びサイズは不明で、不定形を呈し、上下・左右側面は破損、使用痕は表裏面に確認できる。表面は一部に緩い段差が生じ裏面も同様の段差が残存する。

図75は略方形を呈し厚みは一定、上下・左右の面が破損するためサイズは把握できない。表裏面に使用痕が認められ横断面から若干の反りが確認できる。

## 台石

敲石の土台として敲打のある資料6点を扱った。2点を図化したのが、図示したもの以外は破損品

第35表 石皿 使用面×石質相関

石質	使用面	
	両面	片面
砂岩	3	5
細粒砂岩		1
片状砂岩		1
硬質砂岩		1
シルト岩		2
黒色片岩		1

第36表 石皿 使用面×残存長相関

完・破	使用面		
	サイズ	両面	片面
完形	20cm台		2
	10cm台	2	3
	20cm台	1	2
	30cm台		2
	40cm台		1
	50cm台		1
破損			

で10 cm台から20 cmの資料が認められる。又、片面に敲打痕、片面に磨りの痕跡が残る資料もあるが、握り方が悪く使用痕に曖昧な箇所があり、用途を再度検討する必要がある。台石もHCのみで出土、層序はⅢ層で1点、2点がV層、3点は貝層Ⅲ群5層から出土した。

図71は形状がやや方形で縦・横の計測値に厚さが比例し、キューブ状を成す。表裏面に平坦な研磨面を有し、中央に細かく浅い敲打痕が幾つも見られる。図72は、上端が欠ける資料で形状は三角形を呈し、表面中央に敲打の痕跡が見られる。両側面と裏面・下面に研磨が窺える。敲打の土台以外に磨石に使用した可能性もある。

#### 円盤状石器

磨石を二次加工した資料で、素材の縁辺を細かく打ち割り円形を呈す。出土した円盤状石器はサイズが各々異なり、形状も同じ資料はない。破損した磨石を再利用するケースが多く、厚さが均一なもの、やや厚手を呈す資料の二種類が見られた。HCでV層から1点、貝層Ⅲ群5層1点、HB③ではⅢ層から1点の計3点出土した。使用された素材は堆積岩系統の砂岩・片状砂岩のみで地元で手に入る岩石を利用している。

図67は磨石を再利用、側面周縁の角を落とし円形に仕上げた資料である。表面は風化で部分的に研磨が剥離、磨石の研磨面が残存した痕跡が窺える。裏面は自然面を呈し、破損資料を再度使用したとわかる。県内遺跡でも宇佐浜遺跡(1989)等、貝塚時代中期の遺跡からも類例資料が出土する。

#### クガニ石

上辺に1～2 cm程の幅をもつ稜を有し、断面がピリケン形や倒卵形のをクガニ石として扱い、図68～70の3点出土した。図68は上部がやや薄手の資料で、上辺の稜が不明瞭で片面のみ研磨痕が窺える。図69は片側が半欠し、全体に表裏面が粗い印象で研磨面は確認できない。側面の形状からクガニ石と判断した。図70は破損が激しく、全体の形状やサイズは不明、側面や上端の稜などからクガニ石に含めた。石質はひん岩で、鉋物のぬけた小穴が無数にみられ、研磨は表裏面に部分的に確認できる。上端の稜部分は破損で不明だが下端部は厚手である。隣接する平安山原A遺跡で、一遺跡では出土量の少ないクガニ石が8点出土した。

#### チャート製品

##### 楔形石器

楔形石器は通常、形状が縦長、或いは横長の上下端に両極剥離痕が見られる小型ものを楔形石器とする。今回の資料は形態が楔形状を呈す製品と考えられる資料でチャート素材である。HC V層から1点出土した。図76は縦長の形状を呈し、側面の縁辺に細かい調整痕が窺えるが、加工が雑である。剥離痕は下端部の一箇所のみで、上端には認められないため模倣品の可能性もある。伊礼原E遺跡(2010・第126・127図)で楔形石器が出土しており縦長形状のタイプと類似する。チャート製品など小型利器は貝塚時代前期・中期に多く、貝塚時代後期やグスク時代の遺物と共伴する事は不自然な印象を受ける。土器に貝塚前期・中期の資料が僅かに出土し、それに伴う資料と思われる。

##### スクレイパー

掻器・削器を意味し、切る、削る等の用途をもつへら状の形態をスクレイパーとした。本資料もチャート素材でHC V層から1点出土した。図77は形状が嚢形を呈し厚みは薄く、ほぼ均一な形状を呈す。使用された形跡はなく縁辺部は細かく剥離調整を施す。伊礼原E遺跡(2010)でスクレイパーの出土が確認され、又、伊礼原遺跡(2007)では皮利用の小型利器として石匙が出土した。計測値のサイズや重量を伊礼原E遺跡の資料と比較すると、類似する形状の資料が見受けられ遺物の帰属時期として古いタイプの資料である。

## 用途不明石器

形状やサイズも様々で、僅かに使用痕は残るが用途が特定できない資料を用途不明とした。HCではⅢ層から1点、V層1点、貝層Ⅲ群5層で1点、HB③ではSK32 Ⅱc層1点、Ⅲ層1点、Ⅲb層2点の合計7点出土した。

図78は、大型の磨石状を呈す資料で、破損後の残存部は尚、通常の磨石の十数倍あると思われる。抱える程の大きさや重量から何らかの土台の上で転がすことは推測されるが、標準的な磨石と考えるには無理が生じるため用途不明とした。

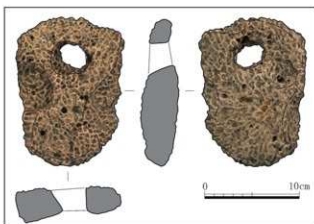
## 石球

形状や大きさの異なる石球が3点出土した。HCから2.5cm程度の資料が貝層Ⅲ群3層で1点、HB③のⅢ層から6cm台のものが1点、Ⅲc層で5cm台の資料が1点出土した。用途は首里城(1995・2001)で出土する石弾と同様のものと想定されるが点数が少ない為、詳細は不明である。類似資料、北谷城(2010・第40図13～15図)でも出土している。

## サンゴ有孔製品

サンゴを素材にした製品と考えられる資料が1点出土した。層序も他の石器に比べ上層からの出土で、時期的に新しい遺物と考えられる。縦長の隅丸方形を呈し、上部に比べ下部が厚く又、左右の厚さは左が厚い。表裏面・両側面とも角がなく手慣れでざらつき感はない。表面は部分的に窪みが見られるが、裏面は平坦な面を呈す。

右図版に示すように上部中央に大きめの孔を穿つ資料で、孔の貫通する内面も若干丸みを帯びる。用途として戦前・戦後に小型の舟やサブニ等に用いる舟の錘として使用していた可能性が考えられる。計測値は最大長15.8cm、最大幅11.4cm、最大厚4.1cm、重量631g、上部中央の孔は縦2.5cm、横2.5cmを呈す。HC T13、近世層出土。



第98図・図版70 サンゴ有孔製品

## 第37表-1 石器 観察一覧

(計測単位:cm,g)

調査 年度	図 番	器種	形態		完形	サイズ	計測値				観察事項	石質	地区・グリップ・層 遺構・台帳(フット)番号
			平面	側面			残存 長	残存 幅	残存 厚	重量			
第 III 群・ 近 世 層	19	磨石	Ⅳ型	厚手	完形	2型	8.8	5.5	5.1	310	状態:成形なし、転石を利用か? 敲打痕:表裏・両側面、5ヶ所に敲打	砂質石灰岩	HC B15 貝層群5 F2052
	20	磨石	V型	厚手	完形	2型	9.4	5.8	5.3	382	状態:二辺部に上下間は砥石を穿つ 敲打痕:上下端に敲打	砂岩	HC A16 貝層群5 F4112
	21	磨石兼磨石	Ⅳ型	厚手	完形	3型	8.4	6.2	5.2	433	状態:側面一部破損、上面に3面ほど面を成す 砥石・表裏面	砂岩	HC D12 V層 F3537
	22	磨石	Ⅳ型	厚手	破損	3型	8.6	4.8	4.7	243	砥石:表裏の2面に見られ、浅い 側面・砥石に至らず	砂岩	HB③ 地区・グリップ不明 遺構(17) F582
	23	磨石	I型	厚手	破損	3型	6.9	6.8	4.6	322	形状:球状を備した形 敲打痕:小さな範囲で中心にのみ 砥石:表裏面中央、明瞭	珪岩	HB③ R5 IIIc(15) F2400
	24	磨石	Ⅲ型	厚手	完形	3型	8.1	6.2	3.8	280	状態:破損資料の二次使用 砥石:全面にあり、3カ所・特に明瞭	砂岩	HB③ R5 IIIc(15) F2461
25	磨石	V型	厚手	完形	3型	7.3	6.1	5.8	377	形状:変形した古状、4面体を成す 砥石:全面にあり、3カ所・特に明瞭	砂岩	HC S14 貝層群5 F4316	
26	磨石	Ⅲ型	厚手	完形	3型	8.2	6.7	4.9	361	状態:一部欠けを生じる 敲打痕:下部敲打 砥石:表裏面明瞭	砂岩	HC C16 V(後期層) F2891	

第37表-2 石器 観察一覧

(数量単位:個)

図録 図番 号	器種	形態		完成 程度	中心 穴径	計測値				観察事項	石質	地区・グループ・層 遺構・台帳(フット)番号
		平面	側面			残存 長さ	残存 幅	残存 厚	重量			
第 34 図 ・ 図 番 74	27	礫石	厚手	完形	2型	9.5	5.8	3.0	248	状態:両面一部欠け 敲打痕:表裏面中央に2cm右の範囲 側面:一箇所を作る。研磨:良好	砂岩	HC D16 V (後期層) F4709
	28	礫石	厚手	破損	3型	8.0	6.0	4.1	288	状態:裏面大きく破損 窪み:表面中央、深さあり 研磨:良好	砂岩	HC T12 V (後期層) F2025
	29	礫石	厚手	完形	2型	10.0	6.8	3.4	349	状態:一部欠け 敲打痕:裏面中央、中央に2cm右の敲打 研磨:裏面中央、良い	砂岩	HC S14 貝層群2 F4909
	30	礫石	厚手	完形	3型	7.7	7.8	4.3	407	敲打痕:どちらにも中央に2cm右の敲打 研磨:裏面中央、良好	花崗岩	HC D11 V (後期層) F2926
	31	礫石	厚手	完形	2型	9.4	7.6	6.2	694	状態:破損品の再利用率 窪み:上面、浅い 研磨:側面両縁	片状砂岩	HC A16 貝層群5 F3874
	32	礫石	厚手	破損	2型	10.5	10.0	7.8	800	敲打痕:表面中央に3cm右の範囲 研磨:敲打両縁はよく、側面もあり、状態:二次使用?	砂岩	HC D12 V (後期層) F651
第 35 図 ・ 図 番 75	33	礫石	厚手	完形	3型	8.4	7.6	4.8	530	敲打痕:表面中央に敲打 研磨:裏面両縁あり 側面:側面両縁に一箇所	輝石角閃石安山岩	HC D15 V (後期層) F2959
	34	磨石	厚手	破損	2型	9.9	6.4	5.0	420	状態:厚型1/2程度の大さき 側面:角が丸みを帯びる程度 研磨:表裏面に浅く磨削	砂岩	HC33 S9 Ⅱ(7) F 387
	35	磨石	厚手	完形	3型	8.2	7.8	4.9	660	敲打痕:上面、下面に細かな敲打 研磨:表裏面中央の明確、中央に2位の2箇所確認	流レイ岩	HC B16 V (後期層) F2468
	36	礫石	厚手	破損	2型	11.2	5.6	5.5	600	研磨面:全体に突出部研磨 敲打痕:側面1カ所	流レイ岩	HC33 A6 Ⅲ(5) F352
	37	礫石	厚手	完形	2型	9.0	8.8	5.4	712	敲打痕:裏面に2cm右の敲打、右側面・下面もあり 研磨:裏面、敲打の両側、表面は略に研磨	輝石角閃石安山岩	HC T14 貝層群5 F4451
	38	礫石	厚手	完形	2型	11.7	8.9	5.2	974	状態:一部欠けを生じる 研磨:裏面中央の明確 敲打:上下・側面中央に浅くあり	砂岩	HC 表土層前時一括 F9186
第 36 図 ・ 図 番 76	39	礫石	厚手	破損	2型	9.4	8.4	7.4	710	使用痕:多面的 研磨:明確な縁部が51面 側面:数カ所あり	斑岩	HC33 A17 Ⅲ(14) F2543
	40	磨石	厚手	完形	2型	9.7	8.5	7.2	879	状態:破損品を再利用率、多角形を成す 研磨:6面のうち4面に磨削 敲打:上下・側面中央に浅くあり	流レイ岩	HC D12 V (後期層) F2151
	41	礫石	厚手	破損	1型	14.4	9.9	7.1	1,064	形状:全体に丸味を帯び 敲打:裏面・側面両縁全面	砂岩	HC D13 V (後期層) F1986
	42	磨石	厚手	完形	1型	13.9	9.6	6.0	1,143	状態:形状整う 研磨面:一部残存、風化で全体の彫物が残らぬ、状態	花崗岩	HC B11 V (後期層) F9182
	43	磨石	厚手	破損	3型	7.4	8.4	5.7	547	状態:残存部1/2程度 敲打痕:下面敲打、表裏面、含まれる彫物が関係、か たや明確	石炭片岩	HC T15 貝層群5 F4309
	44	磨石	厚手	破損	2型	9.2	9.1	5.4	696	敲打痕:明確には認められず 研磨:表裏面、明確	片状砂岩	HC A15 貝層群3 F2342
第 37 図 ・ 図 番 77	45	磨石	厚手	完形	2型	11.5	9.7	5.6	1,030	研磨:表裏面中央の明確 側面:側面両縁に有り	砂岩	HC S14 貝層群2 F4036
	46	礫石	厚手	破損	2型	11.8	8.5	6.0	760	状態:斜位に大きく破損 研磨:全面、特に表面は明確	輝石角閃石安山岩	HC グリッド 層序不明 F1202
	47	磨石	厚手	破損	1型	14.5	8.7	6.8	1,082	形状:1/3程度 研磨:表面中央は明確、側面まで至らず	片状砂岩	HC B15 貝層群 F3723
	48	礫石	厚手	完形	2型	12.8	9.4	6.8	1,259	状態:上下は自然面を成す 窪み:両側面に小さく2カ所ずつ確認 研磨:表裏面は明確	砂岩	HC S14 貝層群5 F4706
	49	磨石	厚手	完形	2型	10.8	8.1	6.6	960	形状:た五角形、部分的に面を成す 側面:上下面にあり 研磨:良好	輝緑岩	HC D12 V (後期層) F3361
	50	磨石	厚手	完形	1型	11.6	10.0	7.9	1,210	形状:全体に丸味 研磨:全面に見られる表裏面は特に明確	砂岩	HC A16 貝層群5 F4182
第 38 図 ・ 図 番 78	51	礫石	厚手	完形	1型	13.6	9.7	8.6	1,430	形状:転石を利用 敲打:敲打が中央を一箇所、下面もあり	砂岩	HC A15 貝層群5 F9205
	52	礫石	厚手	破損	2型	10.8	8.7	4.6	628	形状:全体に丸味磨び 敲打痕:上下面に敲打 窪み:両側面に浅いノックあり 研磨:表裏面に浅く磨削	燧岩砂岩	HC A15 貝層群5 F4177
	53	礫石	厚手	完形	2型	12.7	9.1	5.6	1,110	敲打痕:表裏面中央、浅い 研磨:両面中央の明確 側面:ノック状の窪み	砂岩	HC T15 貝層群2 F4703
	54	礫石	厚手	完形	1型	13.9	11.5	4.6	1,163	敲打痕:裏面中央に3cm右の範囲 窪み:両側面ノックあり 研磨:表裏面良好	燧岩砂岩	HC S14 貝層群4 F4199
	55	礫石	厚手	完形	1型	15.3	11.3	5.7	1,545	状態:表面丸味を帯び 敲打痕:中央に4cm右の範囲 両側面:明確な敲打 研磨:良好、裏面平直で研磨あり	燧岩砂岩	HC A15 貝層群5 F4001



第37表-3 石器 観察一覧

(調査単位: cw.g)

調査年度	図種	形態		完形	サイズ	計測値			観察事項	石質	地区・グループ・層遺構・台帳(フタ)番号	
		平面	側面			残存長	残存幅	残存厚				重量
第10回 調査期	56	磨石	皿型	厚手	完形	2型	11.0	8.5	5.9	928	横断面: 三角形で残存する 厚手: 全面への明瞭 磨打: 部分的に存在	輝緑岩 HC A15 貝層群F2 F3023
	57	磨石(磨石)	皿型	厚手	完形	2型	11.6	9.3	6.9	1,140	横断面: 三角形・鋭角つる, 多孔質, 角閃石のみ 打穴が全面にあり 研磨: 一面のみ	輝石角閃石(安山岩) HC A15 貝層群F5 F4004
	58	磨石(磨石)	V型	厚手	完形	2型	12.4	8.0	7.7	1,315	形状: 横断面は4面体や台形に近い 厚手: 側面・上面/下面あり 研磨: 全面への明瞭	輝緑岩 HB② F15 HB③ F05
	59	磨石	皿型	厚手	破損	2型	11.5	7.7	5.2	650	残存部: 厚手2/3程度 研磨: 全面的に存在 打穴: あり	砂岩 HB② R10 層F(14) F2084
第11回 調査期	60	磨石(磨石)	皿型	厚手	破損	2型	14.0	8.9	7.3	1,229	状態: 残存1/3程度残存 研磨: 表面・側面に磨打 磨打痕: 表面・側面中央に磨打	片状砂岩 HC D11 V (後期層) F3404
	61	磨石(磨石)	皿型	厚手	破損	2型	13.0	11.0	9.4	1,167	状態: 1/2程度 横断面: 三角形で残存する 研磨: 表面面に磨打	砂岩 HC C13 V (後期層) F2545
第12回 調査期	62	磨石	V型	厚手	完形	1型	16.7	10.1	7.6	1,830	形状: 定形三角形, 角はなく, 丸み帯びる 下面中部: 三角形 研磨: 厚手の存在	輝石角閃石(安山岩) HB② C8 層(13) F2096
	63	磨石	V型	厚手	破損	1型	14.8	9.5	9.3	1,892	サイズ: 厚手推測不可, 残存形態より, かなり大型と推測 使用痕: 研磨後に磨りの痕跡	砂岩 HC C16 V (後期層) F2756
	64	磨石	V型	厚手	破損	2型	12.8	9.2	6.3	933	形状: 1/2程度, 全体に丸味を帯びる 研磨: 全面への明瞭 裏面: 平坦面を成し, 残存する	片状砂岩 HC A4 T13 貝層IV群 1層 F3655
	65	用途不明石器	分銅形	厚手	破損	大型	11.2	11.6	4.0	766	形状: 長さ約半分残存を呈す 厚手: 内側面に多量のノッチ 研磨: 表面面にある	輝緑岩 HB② C-D4 Bc 3032 台597
第13回 調査期	66	磨石	皿型	厚手	完形	1型	15.6	13.8	13.6	4,300	形状: かなり大型, ほぼ矩形を呈し, 8cm四方の平坦面を呈す 研磨: 全面への明瞭	ひん岩 HC T15 貝層群F 5 F4820
	67	円盤状石器	円形	厚手	完形	中型	11.2	10.4	3.8	550	打痕: 裏面に細さへ打痕, 側面周縁を円状に磨いた痕跡 研磨痕: 表面 一面に磨打, 多少劣化	片状砂岩 HC S14 貝層群F 5 F4570
	68	タガ石	長楕円形	厚手	完形	大型	17.9	10.2	6.4	1,828	形状: 横断面は楕円三角形 研磨: 一面のみ	砂岩 HC B14 V (後期層) F304
	69	タガ石	楕円形	厚手	破損	大型	15.6	11.4	6.5	1,830	形状: 厚手の2/3程度残存, 下部も一部欠け 磨打痕: 上部の縁を成す部分に磨打	砂岩 HC 1 (覆土) 台9185
第14回 調査期	70	タガ石	長楕円形	厚手	破損	大型	13.0	9.9	6.7	1,060	形状: 厚手1/3程度残存 研磨: 表面面の二面・良好, 多孔質で鉱物がかなり残った状態	ひん岩 HC 1 (表層)E15: F9188
	71	白石	方形	厚手	完形	中型	10.4	9.9	8.3	1,061	形状: 菱子状四角形を呈す 使用痕: 二面 磨打: 中央に浅くあり 研磨: 表面面平坦で良好	片状砂岩 HC A15 貝層群F5 F4753
	72	白石	三角形	厚手	破損	大型	12.6	11.3	8.6	1,600	状態: 1/3欠け 磨打痕: 一面は2cm程度の浅い磨打 研磨: 二面あり明瞭	砂岩 HC A16 貝層群F5 F4250
第15回 調査期	73	砥石	棒状	厚手	破損	中型	12.5	4.2	2.7	255	状態: 上面は面を成す 打痕: 下面 厚さ: 細長く平均的	輝緑岩 HB② T6 層(12) F9184
	74	砥石	不定形	厚手	破損	不明	10.0	5.2	4.1	253	使用痕: 表面面に磨打 研磨: 使用程度は低く, 浅い研磨痕	輝緑岩 HB② C1 層(12) F9198
	75	砥石	略方形	厚手	破損	不明	9.5	7.7	3.2	357	使用痕: 表面・両面使用 研磨: 中央が鋭く磨り減る	砂岩 HC A16 貝層群F5 F4747
	76	磨石(磨石)	縦長形	厚手	完形	小型	2.8	2.3	1.4	9	加工面: 成形痕あり 色調: 赤緑色 磨打痕: 下面部のみ	チャート HC T14 V (後期層) F1885
第16回 調査期	77	タガ石	棒状	厚手	完形	小型	5.4	3.8	1.2	24	状態: 全体につくが丁寧 側面磨打: 左側面は薄い 色調: 赤緑色	チャート HC D14 V (後期層) F9131
	78	用途不明石器	長楕円形	厚手	破損	大型	26.0	18.5	14.8	9,200	状態: 破損状態で, かなり重量あり 使用痕: 磨打・研磨はば全面	珪岩 HC B15 層(グスク) F3324
	79	石皿	長方形	厚手	完形	大型	23.6	14.4	4.2	1,813	成形: 粗雑なし, 表面中央が縦長に反る 使用痕: 上面のみ確認	シルト岩 HC A15 貝層群F5 F2068
第17回 調査期	80	石皿	不定形	厚手	破損	大型	27.0	17.5	8.7	5,900	状態: 表面中央に明瞭, 裏面や浅い 使用痕: 表面, 裏面使用	砂岩 HC B16 貝層群F5 F3888
	81	石皿	不定形	厚手 板状	破損	大型	38.0	28.0	5.4	7,800	状態: 厚面若干欠けあり 使用痕: 二面 研磨: 表面平坦, 全体に研磨 割痕: 部分のみ	黒色片岩 HC A15 貝層群F 5 F4000
第18回 調査期	82	石皿	不定形	厚手 板状	破損	大型	52.0	37.0	7.6	17,5kg	使用痕: 表面のみ 研磨: 中央から, 縦方向に広範囲に平坦な研磨	シルト岩 HC C15 V (後期層) F4320

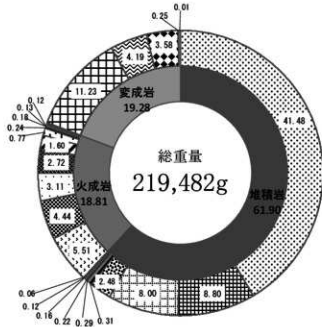
第IV章  
3

<石質>

今回の調査で石器 344 点、石材 385 点、自然礫 513 点の総数 1,242 点が出土した。自然礫にはサンゴ砂利由来の小礫や石灰岩、ビーチロックの岩塊も含まれている。石灰岩・貝化石・サンゴ塊など脆く石器の素材に不適当な破片、剥離し易い資料は集計から除外した。

又、素材として不純物の多い石英礫も出土したが、これらのうち手を加えられた痕跡のある石器のみ抜き出し同定を行った。

第 99 図に石器に使用された全ての岩石組成を系統別に示した。成り立ちから 3 系統に分類され、堆積岩系が 10、火成岩系 10、変成岩系 5 の 25 種類が出土した。石器は約 220kg のうち堆積岩系が 61.92% を占め、火成岩系・変成岩系の割合は約 19% である。全体では堆積岩系の砂岩が約 91kg で 41.48% を占め、これに次ぐ変成岩系の片状砂岩 11.23% と 2 種類で全体の 5 割を超す。上位 5 位までに砂岩、片状砂岩、シルト岩、細粒砂岩、はん岩が並び比率は 10% 未満と少ないものも認められるが、重量は各々 10kg 以上と多い。特に、はん岩は北谷町で産出されない火成岩系に属す一種で約 12kg 出土した。



第99図 石器 石質組成

全体に占める火成岩系の割合ははん岩以外では、比率にして 5% 未満と少ないが火成岩系の合計では 18.82% と約 2 割近い。

第 38 表に岩石学で区分される分類を簡素化しまとめた。系統により岩石のでき方は各々場所や条件で、成り立ちに違いがある。

今回、石器で確認された堆積岩系の種類は沖縄本島で一般的に得ることができる。特に砂岩は石器の様々な器種に多用され、なかには均一な石英粒が鉱物として多く含まれる個体ほど、使用痕の研磨が滑沢になると考えられる。磨石など一部の資料で使

第38表 岩石の性質と分類

<鉱物>	硫黄、滑石、石英など
<火成岩>	
1 深成岩	花崗岩、閃緑岩など
2 半深成岩	石英はん岩、ひん岩など
3 火山岩	流紋岩、安山岩など
4 火砕岩	細粒凝灰岩、シルト質凝灰岩
<堆積岩>	
1 砕屑性堆積岩	シルト岩、細粒砂岩など
2 生物的・科学的堆積岩	
a. 炭酸塩岩	石灰岩、苦灰岩など
b. 珩酸が主成分	チャートなど
c. 金属酸化物が主成分	マンガン/ジュールなど
d. 炭素が主成分	石炭など
<変成岩>	
1 接触変成岩	緑色岩、珩灰岩など
2 広域変成岩	
a. 堆積岩起源	粘板岩、石英片岩など
b. 火成岩起源	緑色千枚岩、輝緑岩など
3 破砕変成岩	破砕礫岩など

用頻度の高いものは、その傾向が見受けられる。

変成岩系の種類も本島で産出されるものの一種で片状砂岩など調査毎に砂岩と同程度の比率で石器に使用される。火成岩系の種類は沖縄本島周辺では久米島、石垣島、西表島が上げられるが、沖縄本島で産出することは極めて稀で、火成岩系の産出される候補は本島中部に最も近い徳之島が可能性として高い。

第39表に出土量の多い6器種の重量を、第100図にその重量比を示した。石斧は25点の出土で6種類認められた。最も多い素材は砂岩で14点の62.15%を占める。重量比の多い順では斑レイ岩が点数2点、輝緑岩・片状砂岩は同率に近く10%台で輝緑岩は4点、片状砂岩は3点である。黒色片岩の1点と角閃岩の破片1点は1%に満たない。石斧に最も多用される輝緑岩は今回少ない。

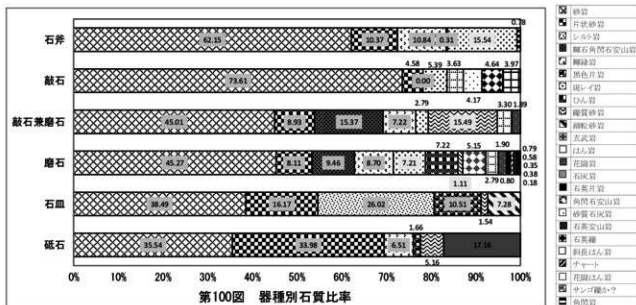
敲石は20点のうち7種類確認された。砂岩の14点が最も多く73.61%を占め、その他の種類は殆ど10%以下である。そのうち火成岩系は斑レイ岩が1点、斜長はん岩1点、はん岩1点の3種類である。変成岩系は片状砂岩の1点で1種類である。堆積岩系は石英礫1点、砂質石灰岩1点と、先に挙げた砂岩の3種類が確認された。

敲石兼磨石は30点出土、8種類が認められた。その中で多いものは砂岩14点で45.01%を占める。次に礫質砂岩3点15.49%、輝石角閃石安山岩5点の15.37%と殆ど同率である。以下、片状砂岩2点、輝緑岩3点、はん岩1点、斑レイ岩1点、花崗岩1点で10%に満たない。これらのうち火成岩系は4種類、変成岩系2種類、堆積岩系2種類が確認された。

第39表 器種別使用岩石

(法量単位:g)

石質	砂岩	片状砂岩	シルト岩	輝石角閃石安山岩	輝緑岩	黒色片岩	斑レイ岩	ひん岩	礫質砂岩	細粒砂岩	玄武岩	はん岩	花崗岩	石英片岩	石炭片岩	角閃石安山岩	砂質石灰岩	石英安山岩	石英礫	斜長はん岩	チャート	花崗はん岩	サンゴ礁か?	角閃岩	合計
石斧	2,391	399			417	12	598																	30	3,847
敲石	5,468	340					800				270						310	345	295						7,428
敲石兼磨石	9,693	1,923		3,311	1,555		600	3,336			710	407													21,535
磨石	30,771	5,511		6,433	5,914		4,901	4,910	755		3,500	1,806	1,289			547	534	395				235	255	121	67,967
石皿	28,569	12,000		19,313			7,800			1,140	5,400														74,222
砥石	1,392	1,331			255	65				202					672										3,917
合計	78,284	21,394	19,313	9,744	8,141	7,877	6,099	4,910	5,433	5,600	3,500	2,876	1,696	672	547	534	310	395	345	295	235	255	121	30	178,918



磨石は216点で16種類認められた。砂岩が最も多く127点で45.27%を占める。次に点数10点～20点台、比率10%未満では輝石角閃石安山岩が12点、比率で9.46%と砂岩に次いで多い。輝緑岩は24点、斑レイ岩15点で片状砂岩も点数11点、8.11%と輝緑岩の次に多い。又、点数10点以下、比率10～1%は、ひん岩2点、玄武岩1点、はん岩6点、花崗岩2点、礫質砂岩が3点、点数10点以下の1%未満は石英片岩1点、角閃石安山岩5点、石英安山岩3点、花崗斑岩1点、チャート2点、サンゴ礫1点である。火成岩系は9種類、変成岩系3種類、堆積岩系4種類である。

石皿は14点出土し6種類認められた。石皿に使用された素材は砂岩が最も多く8点の出土で38.49%である。次いでシルト岩2点、片状砂岩1点の3種類が重量で上位を占め、10kgを超える。重量10kg以下は黒色片岩1点、細粒砂岩1点、礫質砂岩が1点である。火成岩系は石皿に認められず変成岩系が2種類、堆積岩系は4種類認められた。

砥石は15点の出土で6種類が使用されている。砂岩は9点で35.54%、片状砂岩が2点で33.98%と点数に違いはあるものの重量比ではほぼ等しい。その他、石灰岩は1点、比率にして10%台、輝緑岩1点、礫質砂岩1点、黒色片岩1点は10%未満である。砥石も火成岩系の種類はなく、変成岩系3種類、堆積岩系3種類が認められた。

### 小結

本調査で出土した石器はまず、石斧の量自体が少ない。破損資料が目立ち、基部や刃部形態など分類できる資料が少ない為、形態では分類不可の資料が多い。刃部形態のみで判断できるものは、極力分類を行った。形態は左右アンバランスなものや、作りが雑な資料もあり摩滅が著しい。判別のできる範囲で中型石斧、小型石斧などが少量出土し、刃部も破損資料だが両刃、片刃が認められる。又、沖縄本島以外から持ち込みと考えられる石斧も今回は出土していない。石器で時期の判断できる主な器種は石斧のみで、敲打器類はグスク時代まで使用されたと推測される。貝塚時代後期に石斧が減少する理由が、何らかの影響と関係があると思われる。

石質に関して通年の報告では石斧に使用される素材は、輝緑岩が最も多く確認されるが、今報告は火成岩系の割合が少なく砂岩、片状砂岩など地元で容易に手に入る素材が多い。石斧の減少と火成岩系の割合が減る現象の因果関係を検証する必要がある。

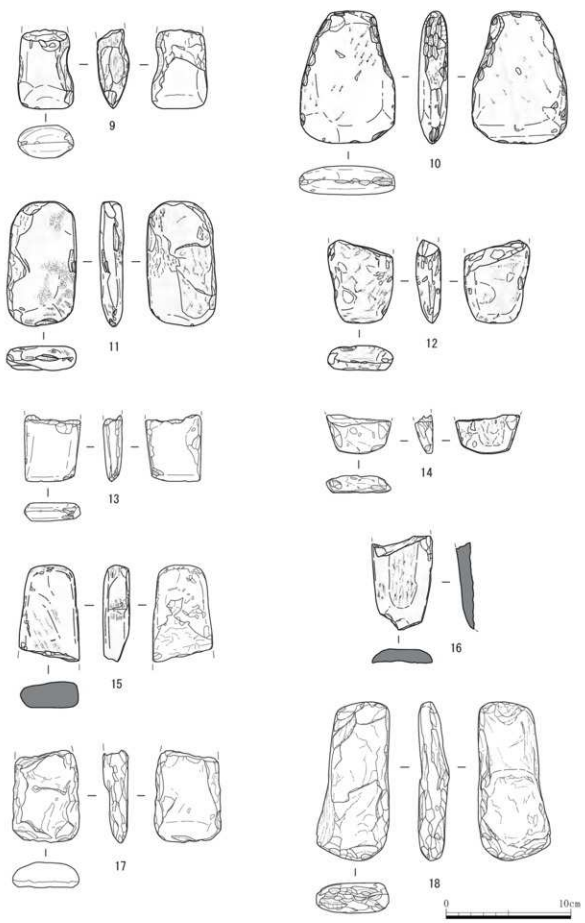
相反して敲打器類は数量が最も多い。一般的な形態の他、敲石兼磨石や磨石に、横断面の形状が三角形の資料が幾つか出土した。図56～62は下面観の形状が三角形を呈す特徴的な資料である。類例資料として小堀原遺跡(2012)、伊礼原A遺跡(2014)、宇佐浜遺跡(1989)や清水貝塚(1989)等で出土している。又、石英の剥片石器がサキタリ洞穴(2014)で出土し、加工に不適当な石英も、チャート同様に石器の素材になり得ると思われた。参考に重さを計量した結果、チャート1.7kg、石英が1.3kg出土した。



第 101 圖 石器 1



圖版 71 石器 1

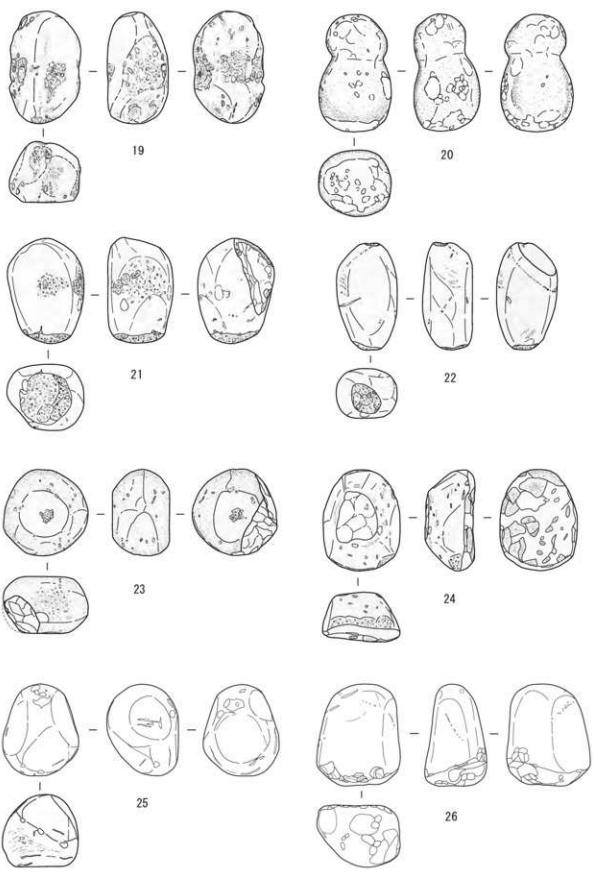


第 102 图 石器 2

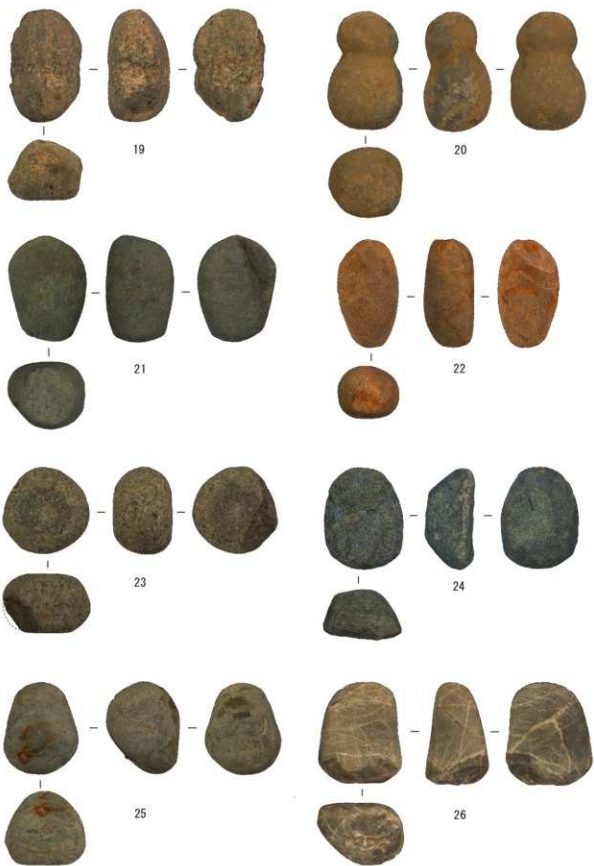


图版 72 石器 2

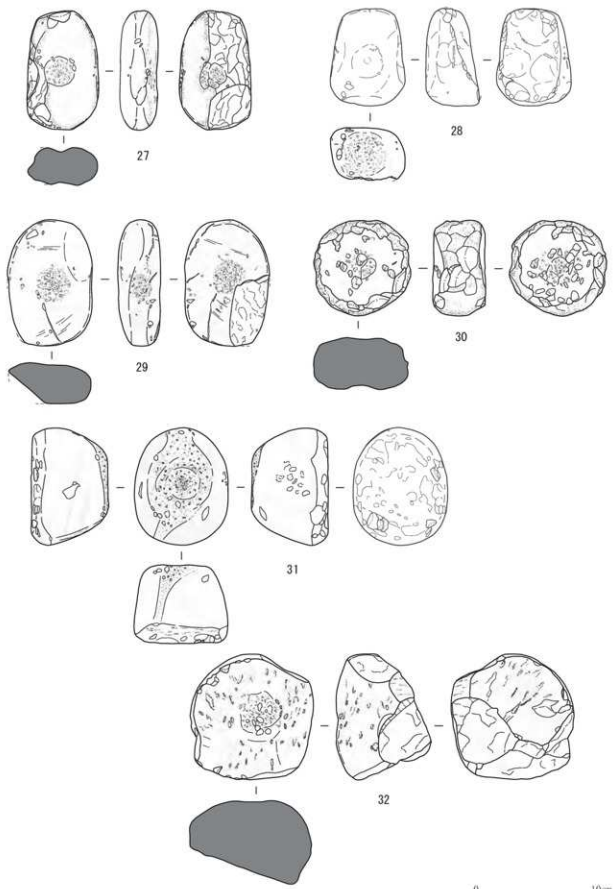




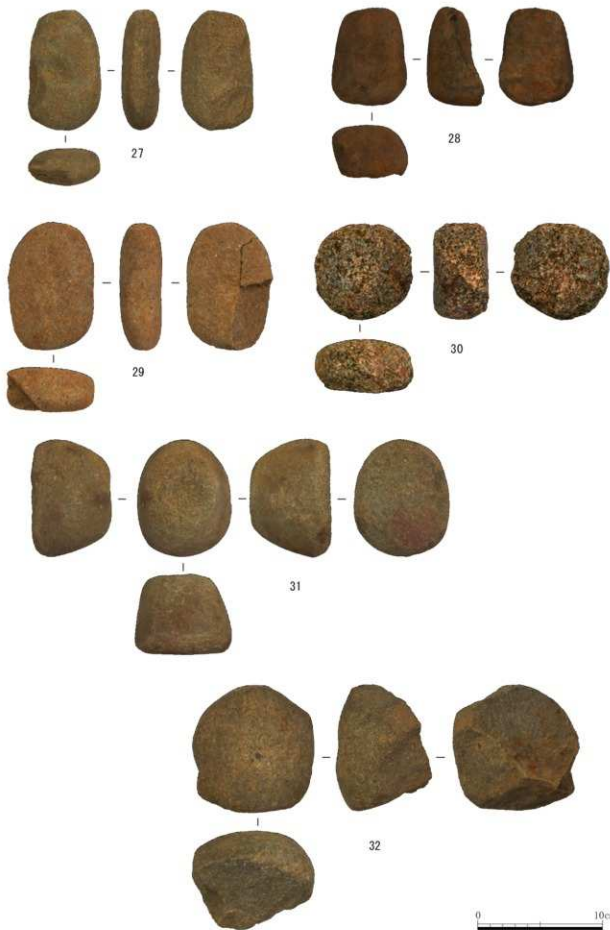
第 103 图 石器 3



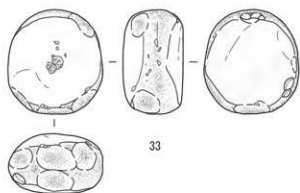
圖版 73 石器 3



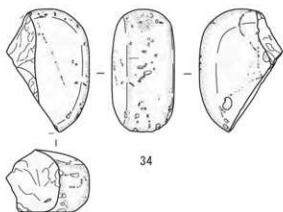
第 104 图 石器 4



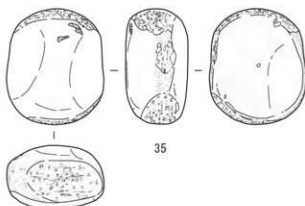
图版 74 石器 4



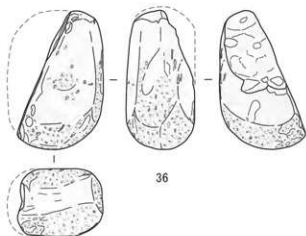
33



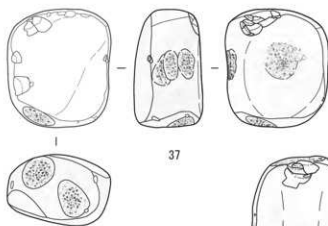
34



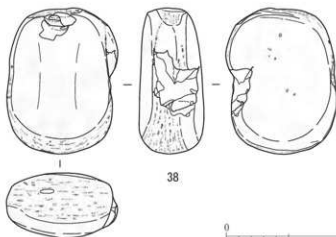
35



36



37



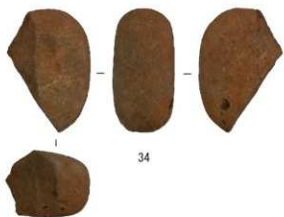
38



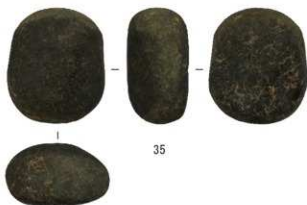
第 105 图 石器 5



33



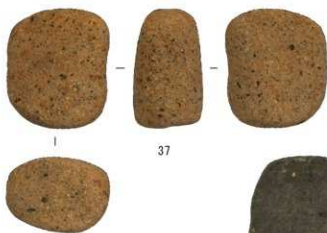
34



35



36

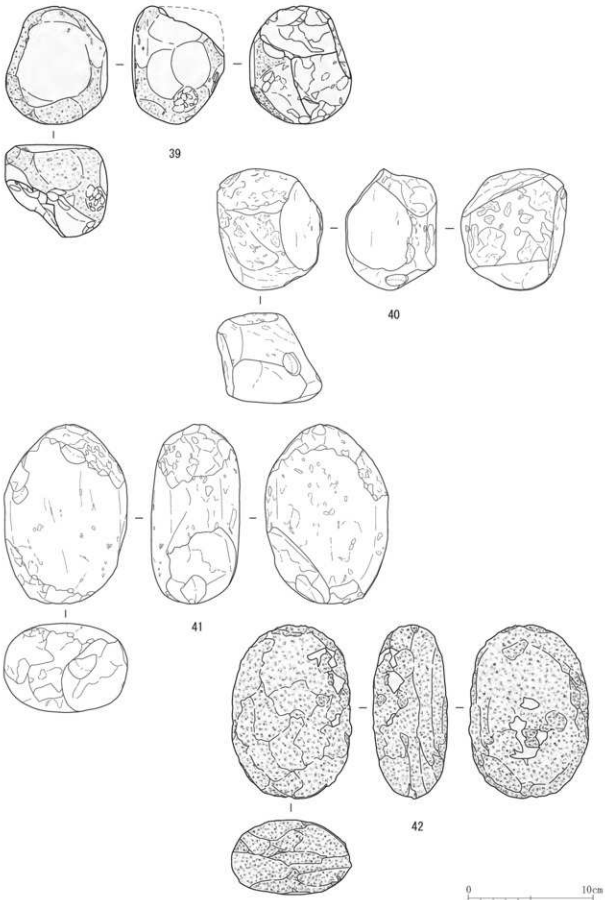


37



38



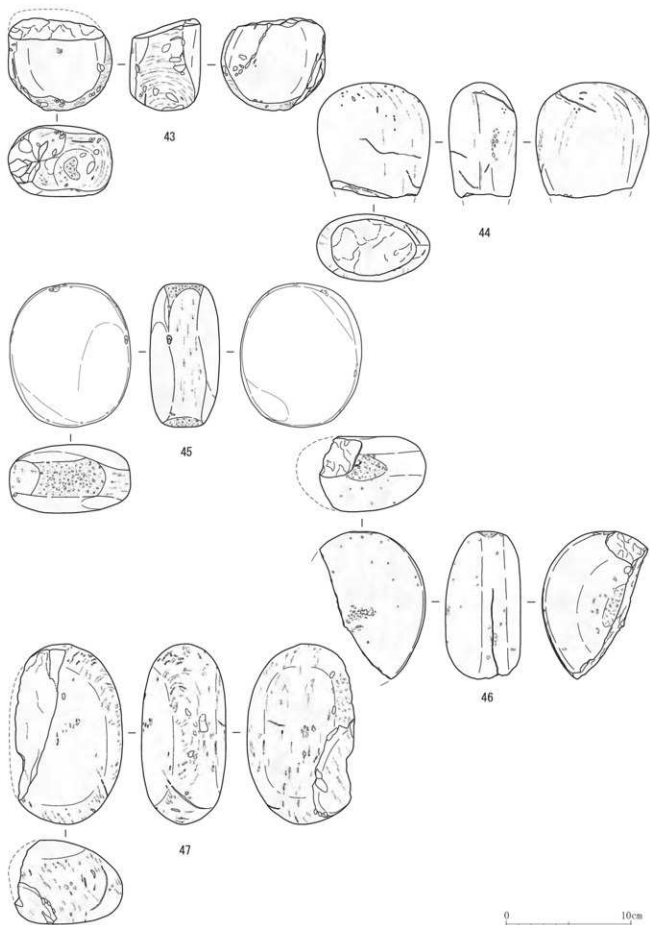


第 106 图 石器 6

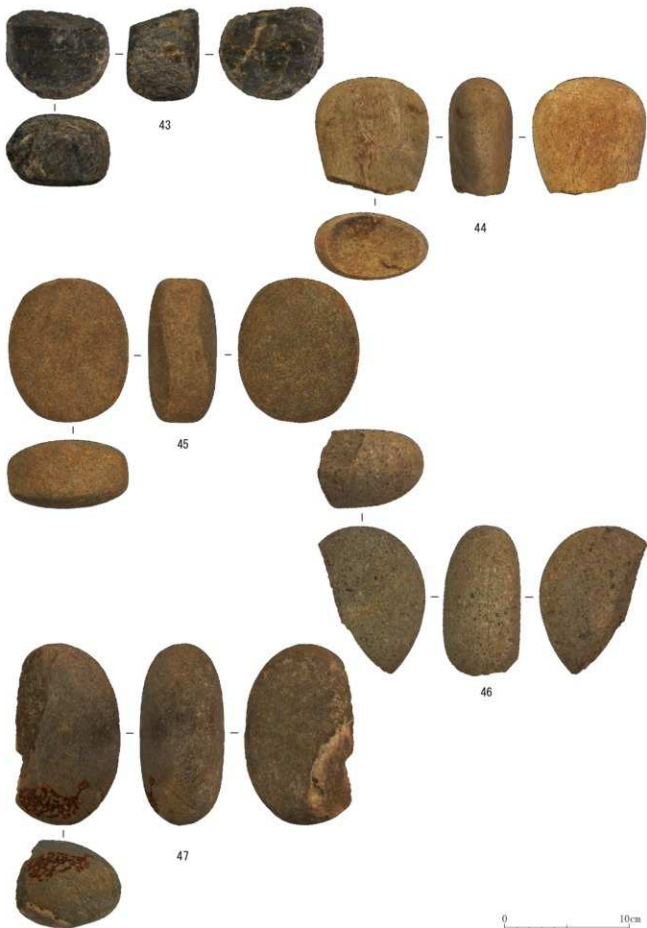


圖版 76 石器 6





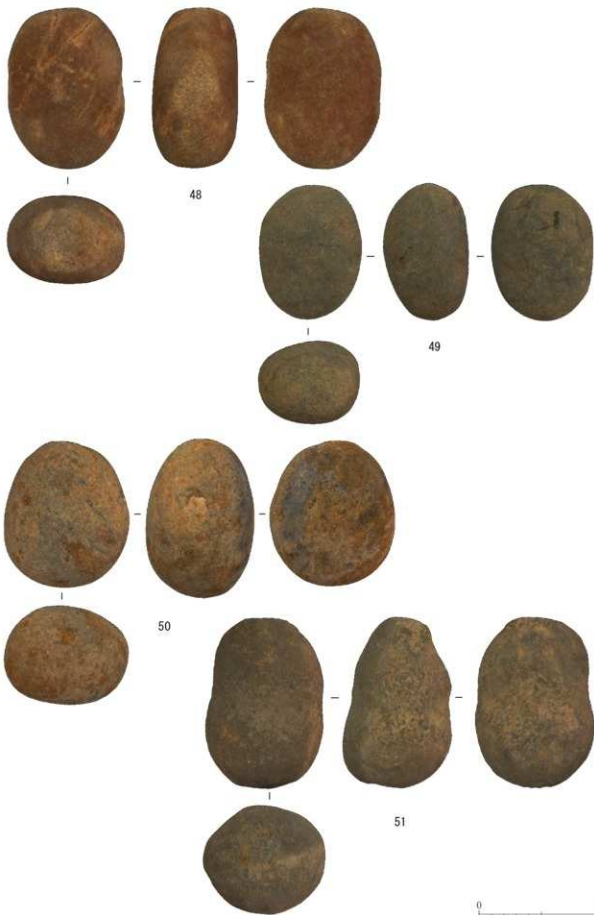
第107圖 石器7



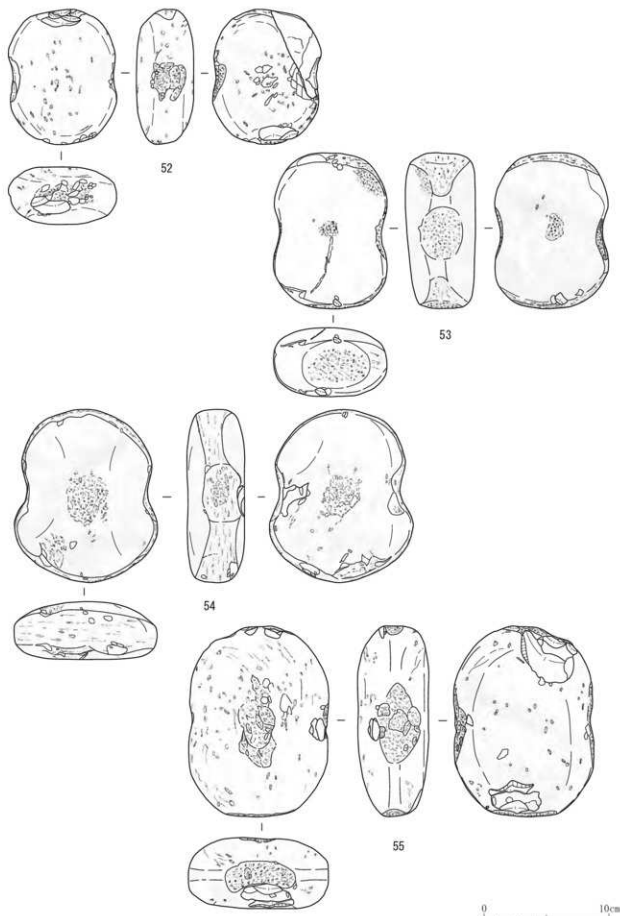
图版 77 石器 7



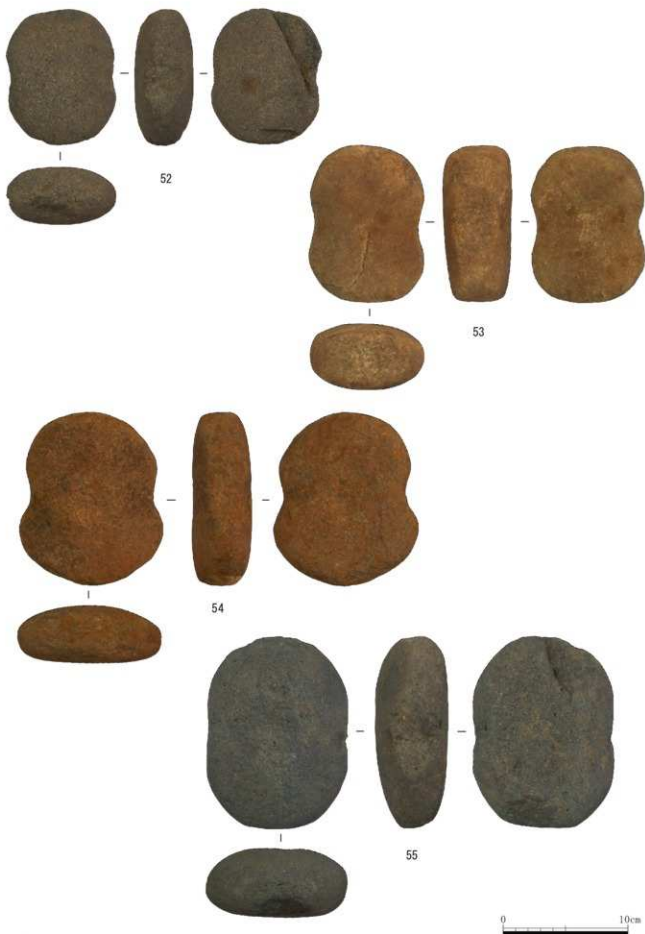
第 108 图 石器 8



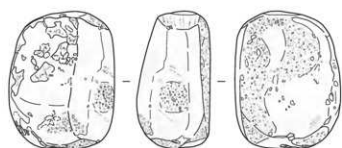
图版 78 石器 8



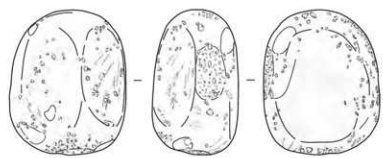
第 109 圖 石器 9



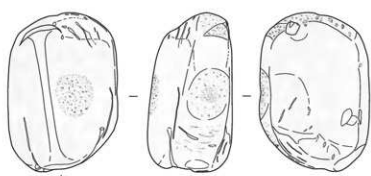
图版 79 石器 9



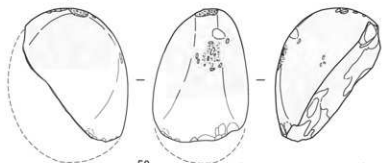
56



57



58



59

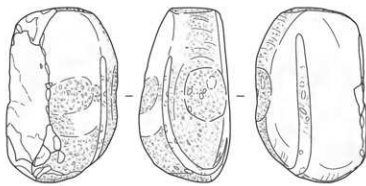


第110圖 石器10

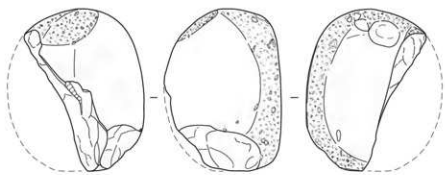


图版 80 石器 10

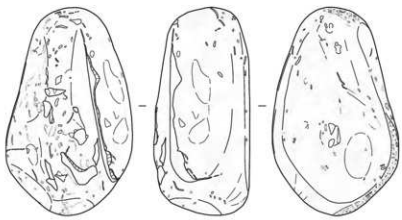




60



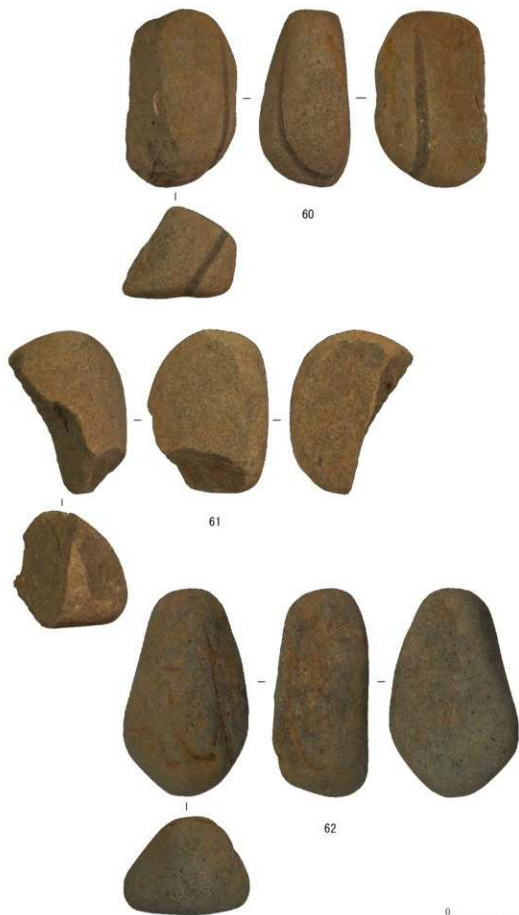
61



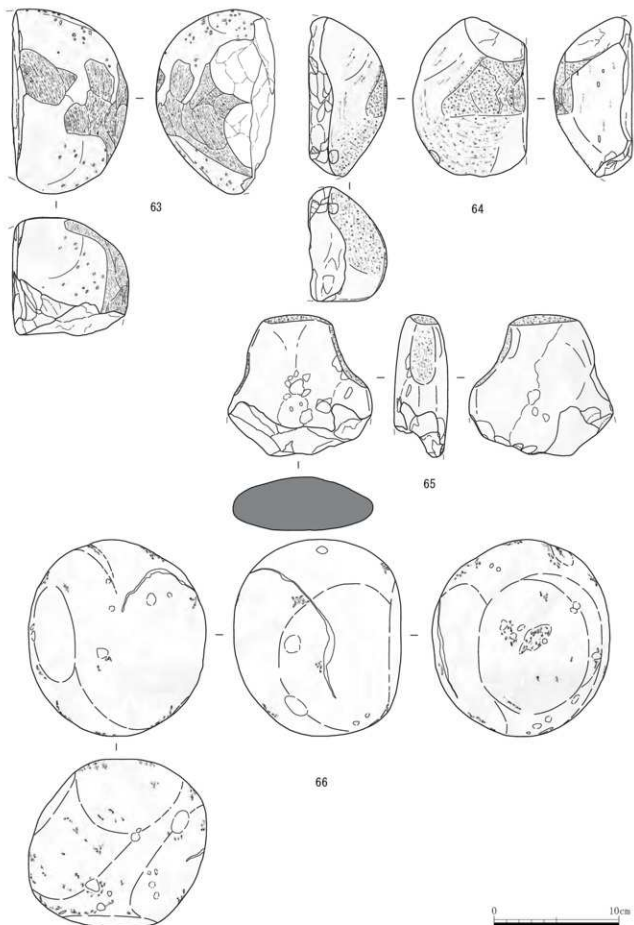
62



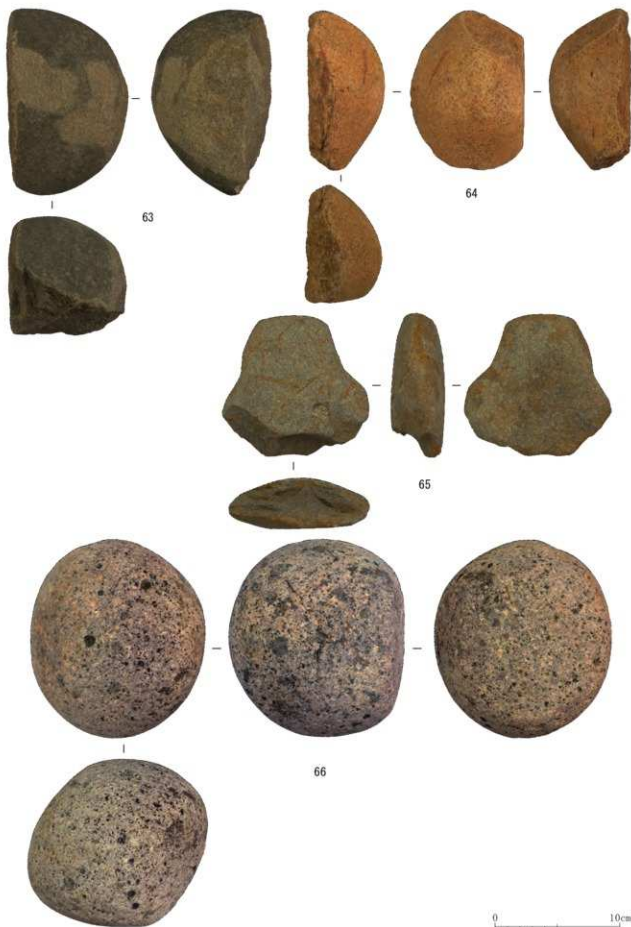
第 111 图 石器 11



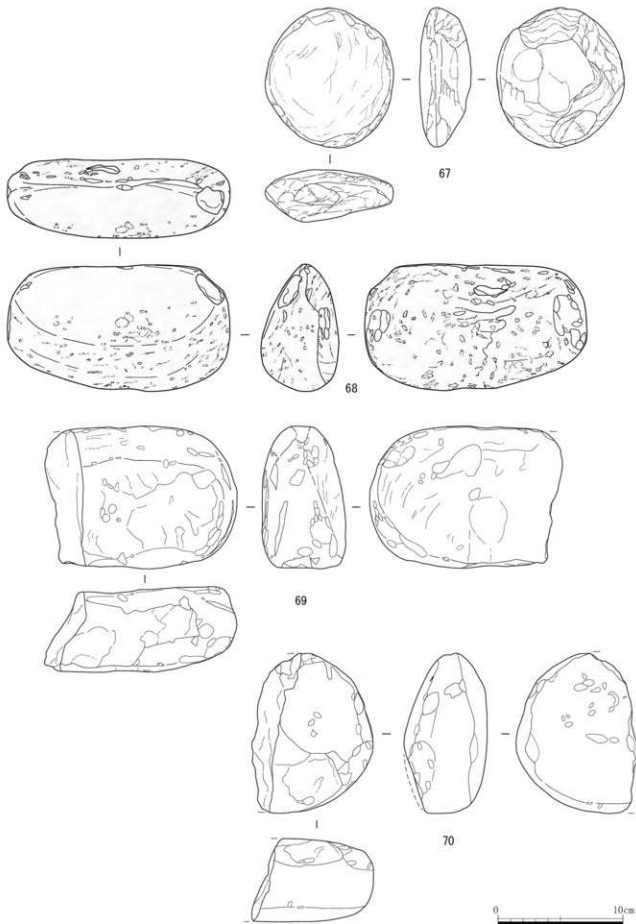
图版 81 石器 11



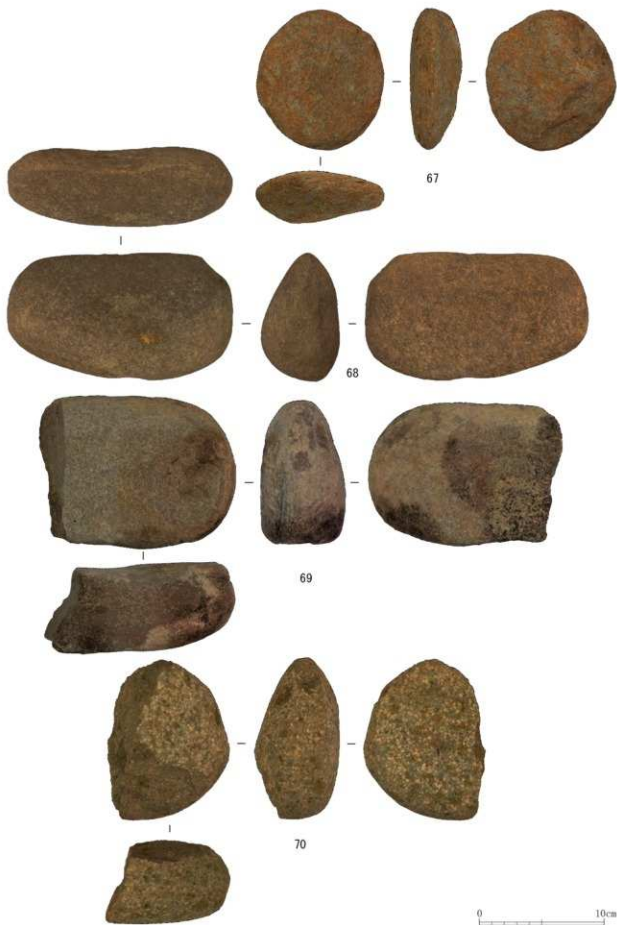
第 112 图 石器 12



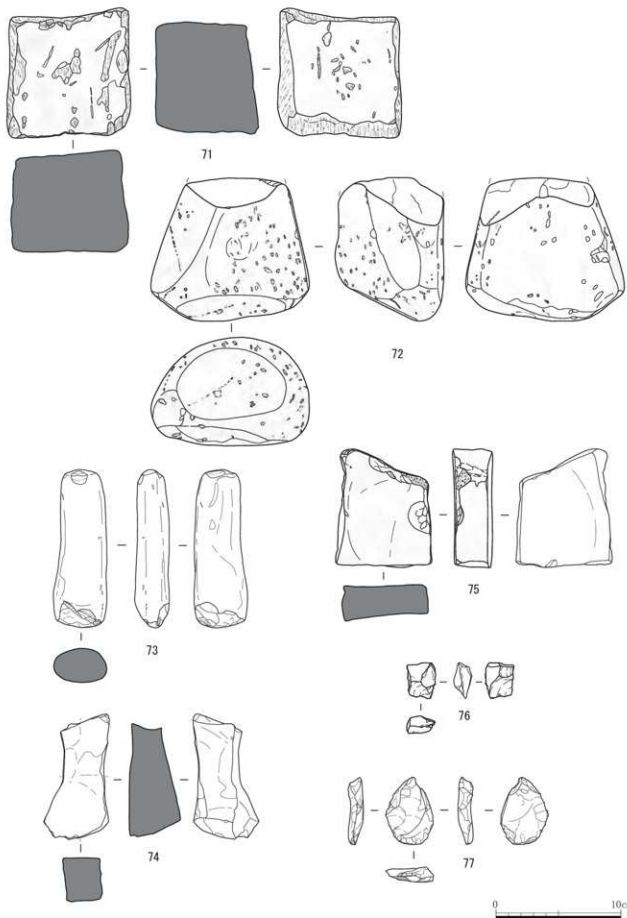
图版 82 石器 12



第 113 圖 石器 13



圖版 83 石器 13

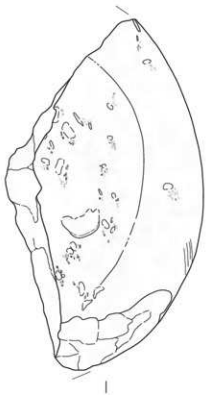


第114圖 石器 14

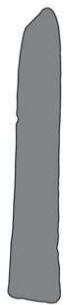
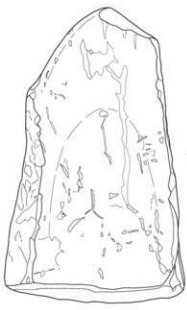
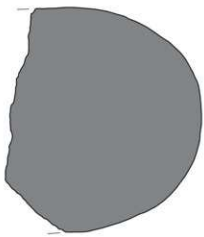


圖版 84 石器 14





78



79



第 115 图 石器 15



1

78



1



1

79

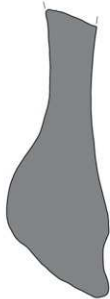


1

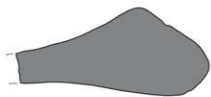
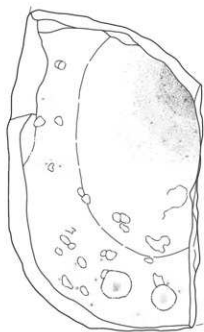




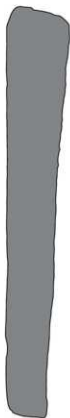
1



80



1



81



第116图 石器16



1

80



1



81



0 10cm



第 117 图 石器 17



图版 87 石器 17

### (3) 貝製品

今回報告する貝製品はHCで1,344点、HB③で308点の合計1,652点である。平安山原A遺跡(2016)で397点、平安山原B遺跡(2015)で261点と比べると約5倍の出土で、中でも二枚貝有孔製品が86.3%を占める。HCをみると貝層Ⅲ群において605点出土と全体の45%が得られている。本貝層群は土器・石器の出土状況から上層(1・2層)と下層(5層)に分けられるようで、1・2層で26.0%、5層で55.4%を占める。なお、HB③Ⅲ層及びⅢc・d層は下位V層とも重なり、土器・石器・貝製品などが多数含まれていることから「V層」所属のものとして扱った(第1節参考)。以上の状況から貝製品のほとんどは貝塚時代後期に属するが、ヤコウガイ製匙やタカラガイ製品など、明らかにグスク時代(Ⅲ層)に属するものもここで報告する。

**装飾品と考えられるもの**(巻貝製品・貝輪・貝符)と**実用品と考えられるもの**(有孔製品・容器・貝匙・二枚貝有孔製品など)に大別される。種類別に観察一覧、平面分布を示し、必要に応じて個別の集計を行った。

第40表 貝製品出土量

遺跡	層	製品 貝種	装飾品							実用品							製品 合計	自然貝								
			貝輪				貝符	貝輪	貝包	有孔	有孔	容器	貝匙	タカラガイ	ヤコウガイ	ゴホウライ		ヤコウガイ	有孔	加工	自然貝					
			オオツタノハ	オオベッコウガイ	メンガイ類	ゴホウライ																イモガイ・他	ヤコウガイ	クロチヨウガイ	シテナシジミ	二枚貝
	I					1		1				9							11						0	
	II											5							5			1			1	
	IIc											10							10	1		1			2	
	III							1				14				1			16	3	1				4	
	IV											1							1						0	
	V		1	1	1	1	3	1	1	1	2	509		2	1	1	11	1	537	17	8	52	5	82	82	
HC	貝層I群											2							2						0	
	b											1							1	1	1				3	
	c											20							20			1			1	
	d											1							1			1			1	
	貝層II群	f	1									7		1					9	1		8			9	
	g											1							1			1			1	
	h											4							4	1					1	
	i											5	1						6			1			1	
	—				2							7							9			1				0
	V	I										21				2			23	1	2	4	2		9	
	la											1					1		2	1		7	1		9	
	1b							1				16					1		19	5	5	12			17	
	2		1		1	1	1		2			106					1		113	6	2	13	5	26	26	
	3											40					1		42	4		14	3	21	21	
	4								1			30							32	5		16	4	25	25	
	5			2	1	3	10		31	3	252	31	3	252	5	1	27		335	17	5	92	11	125	125	
	不明		2	1								31							39	7	4	4	2	17	2	
	貝層IV群											6							6			1	1		2	
	貝層V群		1					1				9							11	5		5			5	
不明			2	1							4							89	2	4	25	5	36	36		
HC小計		5	7	3	7	17	2	42	1	5	<b>1,181</b>	1	10	2	2	54	5	1,344	72	28	259	39	398	398		
HB③	I										3							3			2	1		3		
	IIa																	1	1					0		
	IIb										2							2						0		
	IIc										4							3	7			1	1	2		
	III (V)				2	3		1				53						1	12	72		29	17	46		
	IIIa		1															17	18			7	5	12		
	IIIb			1			1					12						3	17			5	3	8		
	IIIc (V)			1	1	1	1	1				63						1	69			11	9	20		
	IIId (V)			1		2						97			1			2	103			1	23	11	35	
	不明											11							5	16			6	2	8	
HB③小計		1	3	3	6	2	2	0	0	0	<b>245</b>	0	1	0	0	3	42	308	0	1	84	49	134	134		
HC+HB③合計		6	10	6	13	19	4	42	1	5	<b>1,426</b>	1	11	2	2	57	47	1,652	72	29	343	88	532	532		

第四章  
3

## <装飾品と考えられるもの>

### 1. 巻貝製品

装飾品と考えられる小・中イモガイ及びマガキガイなどをここにまとめた。

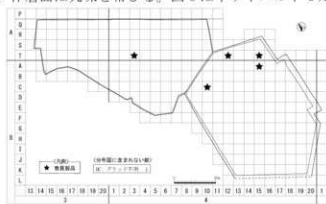
イモガイの形を残し、研磨あるいは穿孔などを行ったものと螺塔部のみを円盤状に加工したものがあ。図3以外はHCの出土である。

イモガイの形をそのまま用いたものには小と中がある。

小:螺塔部を水平に研磨したものと(図1)と貝殻全体が丸味を呈するもの(図2)の2点が得られた。いずれも殻頂に0.4cm前後の孔を施す。

中:図3はクロザメドキの螺塔部を研磨、外唇を打割調整したものである。穿孔もなく、そのまま使用するのは難しく、製作途中の可能性が高い。

円盤状に加工したものにはマガキガイと中・大のイモガイがある。図4はマガキガイで殻頂を打割で穿孔するもので、肩部は部分的に研磨され、体層面は丸味を帯びる。図5は中サイズのイモガイの螺塔部を用い、殻頂に穿孔、体層面は水平に研磨したもので、螺塔部は丸味を帯びることから打ち上げ貝を用いたと思われる。図6は大サイズのイモガイの螺塔部を用いるが、外縁を一卷削り、大きさを調整するものである。螺塔及び体層面に若干の研磨が確認できる。孔は外殻からは自然、内殻から回転穿孔が確認される。体層面は摩耗のため丸味を帯びる。



第118図 巻貝製品 平面分布

(法量単位:cm, g)

第41表 巻貝製品 観察一覧

第41表	図番号	貝種	完	縦	横	縦	孔 径	孔 径	重さ	観察事項	色残摩耗風化	遺跡・グランド・層 遺構・台帳(ド)番号		
第128図・ 図版 89	1	イモガイ(小)	完	1.5	1.6	0.4	0.3	1.9		螺塔部研磨。全体に丸味。孔・積内、破損のため?。外唇及び下部摩擦。製1468	×	○	×	HC T12 貝層V群 #192
	2	イモガイ	完	3.1	1.7	0.4	0.4	1.0		全体丸味。肩部の丸味が強い。外唇摩擦。製1431	×	○	×	HC 貝層II群 #19
	3	クロザメドキ	完	3.7× 3.4	51	-	-	35.9		螺塔及び体層(肩部)の一部研磨。下部摩擦。外唇打割。製308	○	△	△	HB③ T3 IIIa(3) 台1663
	4	マガキガイ	完	2.9	2.5	0.5	0.4	11.4		殻頂、打割穿孔。体層面摩擦。製1467	×	○	×	HC A15 貝層III群 #890
	5	イモガイ(中)	完	3.1	3.2	0.5	0.4	10.7		螺塔のみ。殻頂に外殻から穿孔。製1470	×	○	△	HC C10 V(後期層) #647
	6	イモガイ(大)	完	4.1	4.1	1.1	1.1	19.3		螺塔平ら。研磨?殻頂が抜けて穿孔?体層面摩擦。製1446	×	○	△	HC T15 貝層III群 #3147

○:普通 △:少 △:僅少 ×:なし 製:貝製品番号「出土地」D:ドット取上番号 カ:貝番号

### 2. 貝輪

一枚貝のオオツタノハ・オオベッコウガサ。二枚貝のメンガイ類、巻貝のゴホウラ・アツソデガイが出土した。オオツタノハは沖縄では産しないとされ(黒住1994)、またゴホウラ・アツソデガイは「南海産貝輪交易」(木下1996)の対象の貝である。以下、貝種別に略述する。

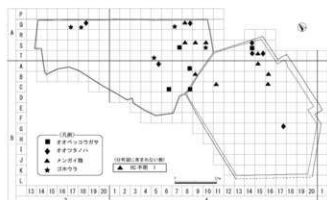
**オオツタノハ:** HCで7点、HB③で3点の計10点得られ、そのうち4点を図示した。キャンブ桑江北側地区調査区内では、最も多く得られている。HCではV層で1点、不明2点、貝層III群で4点、HB③ではIII b・III c・III d層で各々1点の出土で、調査区の北側と南側で得られている。図7は唯一の完形で、大きさは殻長6.2cm、殻高8.0cmで殻は厚い。他をみると殻長7.3cm、殻高9.5cm(図8・10)は大きく外殻の加工も顕著である。特に図10は外縁をかなり削り、角を呈する。図8の内縁は丸い。図9はHC、図10はHB③ Q18の出土である。後者は平安山原B遺跡(2015)の包含層の延長上にあり、縁にあたると思われる。

**オオベッコウガサ:** HCとHB③で各々3点の計6点の出土である。HCはV層、貝層III群5層、不明



で各々1点、HB③はⅢ層で2点、Ⅲc層で1点の出土である。図11は完形で石灰が付着し、色残りもよい。図12は殻長5.7cmと小さめで加工は打割が主である。図13は内外縁を摩耗し、幅0.7cmと細くまた色残りもよく、光沢もある。

**メンガイ類**：HCで7点、HB③で6点の計13点の出土である。他の製品と比べるとHB③での出土割合が高い。図14は完形で内縁を打割、内外殻は部分的に研磨痕が確認できる。この種の製品としては丁寧な仕上げである。HC貝層Ⅲ群5層の出土である。



第119図 貝輪 平面分布

(法量単位:cm, g)

第42表 貝輪 観察一覧

観測 採取 図取 番号	貝種	完	縦 径	横 径	孔 径	孔 径	重さ (g)	観察事項	色 残	厚 残	風 化	遺跡・グロップ・部 遺構・台帳(10-9)番号
7	オオツタノハ	完	6.2	8.0	3.9	5.4	21.9	幅1.3~1.7cm, 内縁研磨, 尚, 外縁やや研磨, 外殻研 磨顕著, 風化で研磨痕不明, 殻厚0.4cm, 製1449	○	×	×	HC C9 V(後期層) F3866
8	オオツタノハ	1/2	(7.3)	(9.5)	-	-	10.6	幅1.4~1.6, 内外縁とも研磨顕著, 外殻-研磨顕著, 製1438	△	△	△	HC T15 貝層Ⅲ群5 8971
9	オオツタノハ	1/2	-	-	-	-	10.4	幅1.7, 内縁, 一部研磨, 外殻一部研磨, 製1469	○	×	×	HC 不明 B110
10	オオツタノハ	1/2	(7.2)	(9.3)	-	-	9.0	縁幅0.6~1.5, 内外縁-研磨, 内縁研磨2重, 外殻-研磨顕著, 風化で研磨痕不明, 製172	△	×	△	HB③ Q18 Ⅲd(14) G1262
11	オオベッコウガサ	完	6.1	7.2	5.2	4.2	14.8	縁幅1.0~1.4, 内外縁-打割, 石灰付着, 製1420	○	△	×	HC S14 貝層Ⅲ群5 G4437
12	オオベッコウガサ	完	5.7	7.2	5.4	4.2	12.6	縁幅0.8~1.4, 内縁-打割, 外縁は自然に近い, 製1452	○	△	×	HC A16 V(後期層) F1541
13	オオベッコウガサ	1/2	(5.7)	(6.4)	(5.5)	(4.7)	2.8	縁幅0.6, 内外縁-摩耗, 製206	○	○	×	HB③ AS Ⅲ(12) G891
14	メンガイ類	完	5.5	6.5	4	3.3	9.7	縁幅1.0~1.6, 外殻は殻頂など, 部分研磨, 縁部周辺の研磨痕明確, 石灰付着, 製1451	○	×	×	HC A16 貝層Ⅲ群5 F4748

( ):推定 ○:普通 △:少 △:僅少 ×:なし 製:貝製品番号 1:出土地 D:F:図取番号 9:貝番号

**ゴホウラ・アツソデガイ**：ゴホウラ・アツソデガイの製品は「南海産貝輪交易」との関係もあるため、平安山原A遺跡(2016)・平安山原B遺跡(2015)と同様、製品および未製品、自然貝も含めて観察し、貝輪や未製品のうち主なものを第129~131図、第43表に観察一覧に示し、自然貝については残存部位を分類し、集計を行った(第40表)。

本遺跡では背面型貝輪のみ(図17~19)の出土で、また、小形貝を用い、貝輪に使用される部位もこれまで出土したものと異なる。形状は種子島広田遺跡(2007)のゴホウラ貝輪に近いようである。出土地をみるとHC貝層Ⅲ群5層に多い。

**半環状製品**：図15はゴホウラの袖部をかなり削り込み、半環状に加工したものである。一端を直線状に加工、さらに側面に「V」字状の抉りを入れ、他端は破損するが、尖るようである。組み合わせの貝輪か、あるいはイノシシの牙に類似することからその模造品の可能性もある。HC V層の出土。しかし、貝塚時代後期にはイノシシの垂飾などの出土はなく、また、貝製の模造品も貝塚時代前V期が最も多いことから矛盾が残る。同じような形状でサラサバティラを用いたものが北原貝塚(1995)で出土している。今後の検討課題である。

**貝輪**：図17~19は背面型貝輪の破片である。図19は前水管溝近くで、幅1.3~1.6cmと細くて薄い。図17と図18は螺塔部近くで、図18は幅1.9~2.2cmとやや太く、貝殻に付着するヘビガイを削り、内外縁の研磨もかなり良く、製品の完成度は高い。図17は、外殻が内外縁に沿うように点刻文が施されている。いずれもHC貝層Ⅲ群5層の出土である。同じような点刻文を施したものに具志堅貝塚(1986)のゴホウラ、嘉門貝塚(1993)のイモガイ製貝輪がある。県外では種子島広田遺跡(2007)や長野県八丁鎧塚古墳(木下2000)でも報告され、南海産貝輪交易の一端を窺わせる。

貝輪未製品：小形のゴホウラを利用、背面・袖部を大きく割り取ったもので、その割れ方は定型化されている。出土した資料から背面型貝輪の製作工程が細かく窺える。①段階-図20・21は内外縁を研磨するが一部に打割が残り、外殻の瘤が研磨される。②段階-図22・23は内外縁を打割し、外殻の研磨は顕著で、その稜線が明瞭にみられる。また、外殻の凸面の研磨は皆同じレベルで、方向も同一であることから、板状のものに外殻を押し付けて研磨したと思われる。図23はHB③Ⅲc、他はHC貝層Ⅲ群5層の出土である。③段階-図24・25は殻頂から袖部を残すもので、外縁は打割で丸く調整、内縁は粗い。外殻は凸部に研磨が施される。図26も外殻が研磨されることからこの範疇に含まれる。④段階-図27



図版 88 ゴホウラ・アツンデガイ

(法量単位:cm, g)

第43表 ゴホウラ・アツンデガイ製品(貝輪)観察一覧

第129回・図版90	図番号	製品	貝種	部位	残存	縦(殻高)	横(殻長)	重さ	観察事項	色残	摩	へ	風	遺跡・ブリード層 遺構・台(凸・カ)番号
第129回・ 図版90	15	半環	ゴホウラ	袖部	完	-	-	33.0	幅1.4~2.0cm, 厚さ1.0cm外唇利用、一端は両側面から「V」字状の抉り、他端はわずかに欠陥、内外縁研磨、内縁は丸み、外縁は角をなす。全面研磨、インジゴ模倣?製1462	×	×	×	△	HC B14 V層(後期層) F3028
	16	貝輪	アツンデガイ	袖部	1/2	-	-	18.0	幅1.8cm, 外縁-研磨顕著、内縁-研磨と打割がある。外殻-研磨、内殻は3個のヘビガイ除去。製71	×	×	○	△	HC T12 貝層V群 #342
	17	貝輪	ゴホウラ	背面	1/4	-	-	12.3	幅2.3~2.5cm, 内外縁研磨。外殻に両縁に沿うように0.1cmの点部を0.2cm間隔で施す。製1441	×	×	×	○	HC A15 貝層Ⅲ群5 #215
	18	貝輪	ゴホウラ	背面	1/3	-	-	11.1	幅1.9~2.2cm, 内外縁-研磨、内縁-打割残、外殻-ヘビガイ削り直、研磨。外殻研磨線あり、黒;ゴホウラからアツンデガイの亜成貝。製1439	×	×	○	△	HC T15 貝層Ⅲ群5 #929
	19	貝輪	ゴホウラ	背面	1/3	-	-	6.5	幅1.3~1.6cm, 薄手、内外縁研磨。外殻研磨。黒;ゴホウラからアツンデガイの亜成貝。製1440	×	△	×	○	HC T15 貝層Ⅲ群5 #584
	20	貝輪未①	ゴホウラ	背面	完	9.2	5.6	22.0	小さい、内縁研磨。一部打割残。黒;研磨。製79	△	×	×	△	HC A16 貝層Ⅲ群5 #4253
	21	貝輪未①	ゴホウラ	背面	1/2	-	-	42.0	幅1.9~2.4cm, 外縁水平に研磨。2面、内縁及び殻輪を打割。製73	△	×	×	×	HC A16 貝層Ⅲ群5 #4143
	22	貝輪未②	ゴホウラ	背面	2/3	9.8	-	76.5	幅2.2~3.6cm, 内外縁-打割後部分研磨。外面部分-研磨。顕著。黒;コキイ付着。小形成貝。製1475	△	×	○	×	HC A16 貝層Ⅲ群5 #759
	23	貝輪未②	ゴホウラ	背面	1/2	-	9.7	68.0	縁幅3.1~4.7cm, 外縁-研磨、内縁-打割。研磨痕一横位-縦位に明瞭。製495	△	×	△	△	HB③ Q7 Ⅲc(7) 台764
	24	貝輪未③	ゴホウラ	背面	2/3	8.8	7.9	104.0	幅2.2~4.1cm, 内外縁打割。外縁は輪状に整える。外殻研磨あり。製70	△	×	×	×	HC A15 貝層Ⅲ群2 #725
第130回・ 図版91	25	貝輪未③	ゴホウラ	背面	1/2	10.5	-	38.2	縁幅1.2~2.7cm, 内外縁に打割。若干の摩耗。風化。製86	×	△	×	○	HC S15 貝層Ⅲ群5 #208
	26	未製品	ゴホウラ	背面	1/3	-	-	26.0	外殻の背面部分を研磨。殻薄手。貝輪の加工ではない。製1454	△	×	×	△	HC 不明 #304
	27	貝輪未④	ゴホウラ	背面	2/3	10	7	61.0	幅1.4~4.2cm, 内外縁。打割。外殻-内殻。石灰付着。螺塔周辺にアタク多し。黒;小形。成貝。製78	×	×	×	×	HC B16 V層(後期層) F2953
	28	貝輪未④	ゴホウラ	背面	2/3	11.6	7.5	93.0	幅1.6~4.4cm, 内外縁打割。殻頂残。製69	△	×	×	×	HC T15 貝層Ⅲ群5 #567
	29	貝輪未⑤	ゴホウラ	背面	1/2	10.3	-	40.0	内外縁打割。打割は粗い。打割は外殻→内殻外殻。ヘビガイ除去の痕跡。黒;成貝。小形。内部に付着なし。製68	×	×	△	△	HC T14-51 貝層Ⅲ群1b #678
	30	貝輪未⑤	ゴホウラ	殻頂	1/2	-	11.3	183.5	縁幅3.9cm, 内外縁打割。螺塔部除去。一部研磨。瘤も研磨痕あり。製504	×	×	○	×	HB③ S10 Ⅲb(5) 台307
	31	貝輪未⑥	ゴホウラ	背面	完	14.5	12.9	283.0	背面中央穿孔。輪状。内殻-外殻に打割。打割一般輪。袖部。外唇も加工。外殻にヘビガイ付着。内殻の外唇にアタクあり。泥が付着。黒;大形成貝。製76	×	×	○	△	HC C16 F2944
	32	未製品	ゴホウラ	背面	完	14.8	11.9	376.0	背面中央穿孔。穿孔位置。中央よりずれる。穿孔は外内。孔縁に凸き痕あり。上袖部を直線状にカット。外唇も調整。黒;大形成貝。製72	△	△	×	△	HC T15 貝層Ⅲ群5 #4486
	33	腹面穿孔	ゴホウラ	体	完	15	12.1	620.0	孔径9.4~9.4cm, 内縁に複数の打割痕。上袖に打割数回。泥付着。背面は泥が十分に暗灰色。殻は打割なし。製1485	×	×	○	△	HC I 台5085

黒:黒住龍二氏同定 ○:普通 △:少 △:僅少 ×:なし 製:製品番号(出土地) F:フット取上番号 赤:貝番号

と図28は殻頂の残るもので、殻はやや風化が進んでいる。螺塔部に粗いアバタが見られ、外殻の近くは研磨で丸みを帯び、後者は殻頂～上袖部の打割が明瞭にみられる。⑤段階-図29～31は殻頂を欠き、外殻にヘビガイ除去の痕跡が確認でき、内外縁を粗い打割で外殻-内殻に施す。⑥段階-図32・33は上袖部を調整、背面あるいは腹面に穿孔があるもので、この段階は貝集積遺構にもみられる。図30以外はHC貝層Ⅲ群の出土である。

自然貝：加工の施されていないものはゴホウラ72点、アツソデガイ29点、計101点得られた(第44表)。出土をみるとHB③Ⅲdでアツソデガイが1点得られた以外はすべてHCで得られ、そのうち、貝層Ⅲ群で58.4%を占め、中でも5層で22点の出土で21.8%を占める。殻の状態をみるとほぼ完形がゴホウラで32%、アツソデガイ55%を占める。

第44表 ゴホウラ・アツソデガイ(自然貝)出土量

近接する平安山原A遺跡(2016)と平安山原B遺跡(2015)のゴホウラ・アツソデガイの出土状況をみると前者が製品2点、製品以外14点の計16点、後者が製品15点、製品以外13点の計28点を数える。本遺跡では製品22点、自然貝は101点と3遺跡中最も多い。ゴホウラはほぼ完形が23点、アツソデガイが16点で全体の38.6%を占める。その中には貝殻の側面を殻頂から斜め方向に割ったもの(図版88)やヘビガイも付着していないものが数例確認できる。以上の状況から貝輪の製作以外に食用の可能性も考えられる。類例は恩納村熱田貝塚(1979)がある。

遺跡	層	貝層					ゴホウラ			アツソデガイ			合計	
		残存	ほぼ完形	外唇	背面	細片	合計	ほぼ完形	外唇	細片	合計			
HC	Bc	1					1					0	1	
	Ⅲ	2				1	3			1	1	1	4	
	V	5	4	1	1	6	17	3	4	1	8	25		
	貝層Ⅲ群	lb		1					1		1	1	1	2
		l	1					1				0	1	
		b	1					1				0	1	
		1					1	1		1	1	2	3	
		1a			1			1				0	1	
		1b					2	5				0	5	
		2	1	1	2	1	1	6	2			2	8	
		3	1				3	4				0	4	
		4		1			4	5				0	5	
		5	5	2	4	6	17	4	1		5	22		
	不明	4	1			2	7	3	1		4	11		
	貝層Ⅳ群						0	1			1	1	1	
不明		1				1	2	3		1	4	6		
HC小計		23	13	7	2	27	72	16	9	3	28	100		
HC	Ⅲd						0			1	1	1		
⑤	HB③小計	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1		
HC+HB⑤合計		23	13	7	2	27	72	16	10	3	29	101		

### 3. 貝符

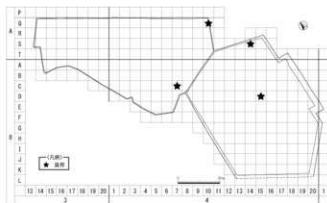
大形イモガイ・ゴホウラを板状に加工したもので、広田下層タイプの有文1点、未製品2点、南島型1点の計4点の出土である。HCで2点、HB③で2点得られたが、平面分布をみると分散している。

図34はやや台形で、縦1.3cmを測り、広田遺跡の貝符と比べると細い。精巧な作りで、文様は渦巻き状の浮き文で、短辺の上端には孔が2個施され、内殻から穿孔する。本品と同様なものは奄美大島宇検村屋純遺跡(2009)、名護市大堂原貝塚(2005)で各々1点得られ、久米島清水貝塚(1989)では一括で5点出土している。

図35は前者と同じく台形であるが、文様は施されてなく、完成品か製作途中かはっきりしない。素材はあまり例がないがゴホウラの外唇部を用いている。

図36は大形イモガイの肩部から体層を幅3.3cmの板状に象り、その隅を丸味を出すものである。穿孔に特徴があり、外殻は孔と孔の間を紐が納まるように溝を施し、裏面は孔から上隅に向かって溝を施す。無文と考えられ、南島型(木下1996)に分類されるものである。

図37は大形イモガイの肩部～体層を板状に加工するが、イモガイの湾曲が残る。切断部分



第120図 貝符 平面分布

第45表 貝符 観察一覧

(法量単位:cm, g)

第132号 埋版 93	国 番号	製品	貝種	完 成	横	縦	孔 径	孔 径	高さ	観察事項	ア バ タ	色 残	摩 耗	ヘ ビ	風 化	遺跡・グラウンド/層 遺構・台帳(バット)番号
第132号 埋版 93	34	貝符	イモガイ	完	2.5 (3.0)	1.3	0.5	0.3	1.9	板状、台形。外面に文様、厚文0.1で左右対称、溝等5文、2カ所に穿孔。孔は内設→外設に回転穿孔。製879	×	×	×	×	△	HB② Q10 Ⅲ(7) D111
	35	貝符	ゴホウソウ	完	4	2.6	-	-	9.6	板状、台形。全面研磨。平面は縦位。側面は斜めに研磨。外面成長線からよがれる。内面の中央に自然面残す。製1414	△	△	×	×	×	HC D15 V(埋版) D1742
	36	貝符	イモガイ	完	3.3 (3.1)	4	0.5	0.5	6.2	板状、隅丸方形。無文。孔5個。外面は溝。裏面は角に向かつて溝。同様に丸味。製880	×	×	△	×	×	HB② C7 Ⅲ(ダス) 台1758
	37	貝符 (未製品)	アンボン クロゾメ	完	4.3	4	-	-	11.9	未製品。体層を方形に切り取り。上面は溝曲。側面は研磨顯著。下面に丸味。製1446	×	△	×	×	×	HC S14 貝層Ⅲ群2 D4028

製:製品番号 △:普通 △:僅少 ×:なし

第46表 大形イモガイ大きさ(殻径)別 出土量

遺跡 殻径(cm)	HC				HB②			合計	平安山原B (2015)	伊礼原D遺跡 (2013)	伊礼原遺跡 (2014)	平安山原A (2016)
	貝層Ⅲ群 アンボンクロゾメ	クロフモドキ	その他 アンボンクロゾメ	クロフモドキ	アンボン クロゾメ	クロフ モドキ	イモガイ (大)					
3.0~3.4					2			2				1
3.5~3.9					3			3	1			1
4.0~4.4	1		4		6	1		12	4			4
4.5~4.9	5		7	1	4	2	1	20	8			8
5.0~5.4	5		6	2	1	2	1	17	31	1		11
5.5~5.9			4	2	2	2		10	17	4		8
6.0~6.4	3		1	2		3	2	11	8	8		7
6.5~6.9			1			2		3	3	9		5
7.0~7.4						2		2	2	8		2
7.5~7.9						1		1		3		
8.0~8.4								0		1		
8.5~8.9								0		1		
合計	14	0	23	7	18	15	4	81	74	35	43	23
遺跡別合計	44				37			81				

HC その他(クロフモドキ) 6.0~6.4cm カバミナシ1点含む

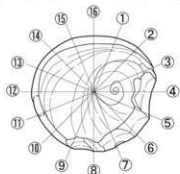
は研磨が顕著である。下端角は丸味を帯びることから、図36の製作途中と思われる。色残りもよく、本品からイモガイの大きさを復元すると殻径5.4cm以上が推測される。

第46表に自然貝の大形イモガイの殻径別の出土量を周辺遺跡と比較を示した。クロフモドキとアンボンクロゾメ、その他にカバミナシを含めた。本遺跡からは大形イモガイを加工したものは貝符のみで、その大きさを復元すると5.4cmと平均値よりは大きめの貝である。伊礼原D遺跡(2013)の貝集積(4317SS)では殻径6.5~7.0cmを中心に得られた。本遺跡では最も多い大きさは4.5~4.9cm前後である。従って本遺跡の大形イモガイは、貝製品の製作というよりは食用を目的に採取した可能性が高い。

## <実用品と考えられるもの>

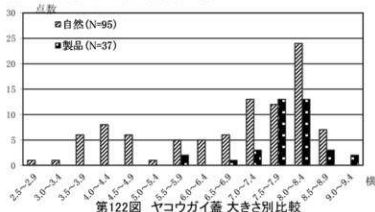
### 1. 螺蓋製利器

ヤコウガイの蓋の縁に複数の剥離を施す。刃として使用するために打割を加えたか、使用により剥離したかは明らかでない。出土地をみるとHCのI層1点、Ⅲ層1点、V層1点、不明4点、貝層Ⅲ群35点の計42点が得られた。そのうち貝層Ⅲ群5層で31点と最も多い。



『シメダキ遺跡』(1985)

第121図 ヤコウガイの蓋削刃分布



第47表に附刃の範囲や大きさ・出土地などの観察一覧を示し、そのうち1点を図化した。図38は附刃の範囲が③~⑩まで連続して剥離するものである。自然貝の出土も多く、製品に用いられたものと自然貝との大きさを比較すると製品に用いたものは横が5.8~9.0cm、縦が5.2~8.5cmの範囲、自然貝は横2.6~8.9cm、縦2.9~8.8cmの範囲にある。第122図に製品と自然貝の横を比較した。これによると製品は大きい方を多く選択していたようである。附刃の範囲をみると①~⑩にみられるが、特に附刃率の高いのは③~⑩の範囲で、「螺蓋製貝斧」(三島1988)、「敲打・打割形」(角田・伊藤1996)としたものと一致する。

第47表 螺蓋製利器 観察一覧

(出典単位:cm, g)

製品 図録 番号	完成 年	縦	横	重さ	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	打割 回数	遺跡・ブリード層 遺構・台帳(○/カ)番号	
第132図38 -図録93	7.4	8.0	200		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		HC D11 V(後葉層) 32960	
2	7.0	8.0	161													HC V(後葉層) 8716	
3	7.5	8.1	163													HC D11 V(後葉層) 82976	
4	8.5	9.0	267		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	HC V(後葉層) 8716	
5	*#	4.0	5.7	39												HC A15 貝層遺跡5 8292	
6	7.0	7.5	137													HC C9 V(後葉層) 82981	
7	7.2	7.5	164													HC S13 V(後葉層) 82783	
8	7.8	8.4	188													HC G12 V(後葉層) 82981	
9	7.4	7.8	143													HC T15 貝層遺跡5 8912	
10	*#	7.5	5.4	114												HC A16 貝層遺跡4 81131	
11	8.0	8.3	195		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		HC T15 貝層遺跡5 81045	
12	6.6	7.2	105		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		HC S14 貝層遺跡5 81511	
14	7.2	8.2	189													HC 不明	
15	6.8	6.8	130													HC 不明	
19	5.9	5.8	70													HC S14 貝層遺跡5 81046	
20	7.6	8.0	202													HC T15 貝層遺跡5 74669	
21	7.1	7.6	186													HC T15 貝層遺跡5 74346	
22	7.9	8.5	166		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	HC T15 貝層遺跡5 74552	
23	6.0	7.8	136													HC S15 貝層遺跡5 82984	
24	6.7	7.6	125													HC A16 貝層遺跡5 74122	
25	7.1	7.9	156													HC S14 貝層遺跡5 74637	
26	7.6	8.5	166													HC T14 貝層遺跡5 74037	
27	7.4	8.0	178													HC D10 V(後葉層) 74875	
28	6.1	7.7	99		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		HC S15 貝層遺跡5 72297	
29	8.0	8.2	174													HC S15 貝層遺跡5 74486	
30	*#	4.3	3.6	25												不明	
31	定	7.0	7.5	124	●											HC S15 貝層遺跡5 74393	
32	6.5	7.4	112													HC B15 遺(ガラス) 82984	
34	6.8	7.8	140		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		HC B17 不明 82980	
35	7.2	8.0	155													HC A15 貝層遺跡2 73616	
36	6.8	7.0	120													HC B16 貝層遺跡5 7479	
39	8.1	8.2	204													HC T15 貝層遺跡5 74819	
41	7.4	7.8	156													4回	HC C13 不明 72297
42	定	7.9	8.4	189												3回	HC T16 貝層遺跡5 8285
44	7.3	8.1	154													2回	HC A16 貝層遺跡5 8292
45	7.4	7.9	171													6回	HC B16 貝層遺跡5 829
46	*#	-	-	20													HC C9 V(後葉層) 82981
47	6.4	7.1	110													1回	HC B16 貝層遺跡5 864
48	定	7.9	9.0	228												4回	HC B16 貝層遺跡5 7478
49	定	7.9	8.7	201												4回	HC A16 貝層遺跡5 8784
50	定	7.2	7.9	166.5												4回	HC S14 貝層遺跡1b 8678
51	定	5.7	5.9	64.8												3回	HC B16 貝層遺跡5 865

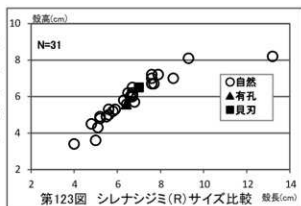
\*# : 附刃範囲不明 1 ● : 貝層(出土地) ドット取上番号 方 : 貝番号

## 2. 貝刃

図39はシレナジミの腹縁を打割して刃状にしたもので、HC V層で1点出土した。最高6.5cm、殻長7.0cmを測る。マングローブに生息する貝で、自然貝の出土数は多くない。自然貝と比較する(第123図)と手持ちしやすい手頃な大きさを用いられている。

## 3. 貝包丁

クロチョウガイの腹縁を研磨し、刃状にしたもの



第123図 シレナジミ(R)サイズ比較 殻長(cm)

第48表 貝製利器 観察一覧

(法量単位:cm, g)

第132号 遺跡・ 図版 93	第48表 図 番号	製品	貝種	完破	LR	殻長 備	殻高 備	高さ	観察事項	ア パ ヤ	色 残	摩 耗	風 化	遺跡・グランド・層 遺構・台帳(ド・ウ)番号
	39	貝刀	シレンナンジ	完	R	7.0	6.5	26.1	腹縁のほぼ全域を打割で剥離。 剥離幅0.3~0.5cm。製1464	△	×	×	△	HC D13 V(後期層) D5080
	40	貝包丁a	クロチョウガイ	完	L	6.8	7.8	22.8	腹縁を外殻研削し刃状をなす。研削面積は大きい。真珠層の露呈。製1453	×	○	×	△	HC S14 貝層Ⅲ群5 D4287
	41	貝包丁a	クロチョウガイ	完	R	8.0	8.2	30.7	腹縁中央部分、研削により附刃、弧状、使用によるものか。丸味。製977	×	○	△	△	HC T14 貝層Ⅲ群5 D4712
	42	貝包丁c	クロチョウガイ	完	L	6.2	7.5	18.4	腹縁研削？有孔(1.2×1.4cm)、内一外。製974	×	×	×	△	HC B15 貝層Ⅲ群5層
	43	貝包丁b	クロチョウガイ	完	R	5.6	6.1	11.5	外殻の研削。後背縁・前背縁を打割により方形に整形。外殻ははがれ、部分的に真珠層露呈。附刃は明確でない。腹縁は自然のラインを残す。製976	×	○	×	△	HC C12 V(後期層) D3550
	44	貝包丁c	クロチョウガイ	1/3	不明	5.1	5.1	10.0	腹縁に刃状。使用前一部。製1494	×	○	×	△	HC C10 V(後期層) 9813

○:普通 △:少 △:僅少 ×:なし 製:貝製品番号 ↑土壌: ↓フット取上番号 カ:貝番号

でHCのV層で2点、貝層Ⅲ群3点の計5点の出土である。複数の加工がみられ、貝をそのまま利用したものa(図40・41)、後背縁と前背縁を割取り小さくしたものb(図43)、大形の貝殻を方形に加工し附刃したものc(図44)がある。また、二枚貝有孔製品と同じく粗孔を施し、腹縁に刃状にしたものがあり、a①(図42)とした。近接する平安山原A遺跡(2015)ではリュウキュウマスオ、クロチョウガイのaタイプが出土している。

#### 4. 二枚貝有孔製品

二枚貝の殻頂近くに1.0~2.0cm前後の粗孔を施したもので、製品の性格上、自然に割れる可能性も高いため、右記の二枚貝有孔製品の条件に当てはまるものを扱った。その結果、21種類、1426

##### <二枚貝有孔製品の条件>

- 二枚貝の殻頂に1.0~2.0cmの粗孔を施すものである。
- 条件①孔の穿孔に複数の打割が見られるもの
- ②孔に複数の切り合いが見られるもの
- ③腹縁に複数の剥離あるいは摩耗(使用痕)が見られるもの
- 2個以上の条件を満たすものを製品として扱った。

点の出土であった。キャンプ桑江北側地区で最も多い出土である(第51表)。貝塚時代後期の遺跡の中でも多く、リュウキュウサルボオ、シャコガイ科は漁網錘と考えられるが、出土した貝種も多いことから、用途を検討するため、各々の貝の重量と孔位置について分析してみた。

全体の合計1426点で出土地別にみるとHCが1181点で82.8%、HB③が245点で17.2%とHCの出土が多い。層別にみるとHCはV層で509点、貝層群ではI群2点、II群46点、III群497点、IV群6点、V群9点、貝塚時代後期に属するところで90.5%を占め、IIc層(クムイ)で10点、III層で14点得られている。HB③ではI層で3点、IIb層で2点、IIc層で4点、III層で53点、IIIb層で12点、IIIc層で63点、III d層で97点、不明11点の計245点の出土である。所属年代は層序や土器・石器などの出土遺物を検討するとIII・IIIc・III d層は貝塚時代後期に相当するものと思われる、これらを勘案すると貝塚時代後期に属するV層で213点(86.9%)を占める。本製品は貝塚時代後期に属するものと判断される。貝種別にはHCはシャコガイ科が683点(57.8%)、リュウキュウサルボオ270点(22.9%)、メンガイ類が105点(8.9%)、HB③ではシャコガイ科96点(39.2%)、リュウキュウサルボオ123点(50.2%)、メンガイ類11点(4.5%)を占め、HCではシャコガイ科、HB③ではリュウキュウサルボオが主体をなす。

HCの貝層III群で497点と二枚貝有孔製品の42.1%を占める。貝層III群は土器の出土状況から1・2層でくびれ平底系(アカジャンガー式・フェンサ下層式)と5層で大当原式と新旧の差が見られ、また、HB③も土器の出土状況が若干異なる。本品は民俗事例から網の錘とされ、これらの地区の貝種別の重量を比較してみた(第135図)。これによるといずれの地区も10~19gが最も多く、次に20~29g、0~9gと続き、他の遺跡と同様に一定の法則性が見られる。重量のあるシャコガイ科は50g以上も見られ、貝層III群5層とHB③で100g以上まで連続して出土するが、HC貝層III群1・2層

では途切れるようで、網の変化が想定される。また、貝種ではHB③ではリュウキュウサルボオが多く、平安山原B遺跡(2015)のHB④ロと類似する。貝層Ⅲ群ではいずれの重さもシャコガイが主体をなす。腹縁の加工をみるとリュウキュウサルボオやメンガイ類では少なく、シャコガイ科がHCで全体の43.3%、HB③で67.7%の加工が認められることから腹縁を調整し、重量の均一化を計っているものと思われる(図54・55)。時期的問題はあるが、少なくとも貝層Ⅲ群の5層段階(大当原式)からシャコガイの腹縁を調整し、1・2層(くびれ平底系)では0~9gの出土が増えることから重量調整がさらに進んだといえる。このことからシャコガイ科は重さを調整するのに適し、民俗事例(上江洲1973)にもあることから漁網錘とされる。

今回出土した21種類の貝について、すべてが漁網錘とは考えにくくことから、貝の属性を見るため、第59表に出土した貝の平均の重さと大きさから1gあたりの示数を算出した。これによると民俗事例のあるリュウキュウサルボオやシャコガイ科など主体を示す貝種は示数が1.1~1.5にほぼ収まる。また、後述のグスク時代以降の漁網錘であるハナマルユキも示数1.2とこの範囲に収まることからこの示数は網の錘に用いられる貝の目安になると思われる。さらに、1.6~2.5まで示数を示すも

第49表 二枚貝有孔製品 出土量

遺跡		層	遺構	貝種	Rサルボオ	メンガイ(類)	シャコガイ科	Rザルガイ	カワラガイ	Rシラトリ	Rマスオ	ヌノメガイ	ホソスジイナミ	スダレハマグリ	クロチヨウガイ	ハイガイ	シレナシジミ	マスオガイ	Rアサリ	ウチワガイ	エガイ	キクザルガイ科	クチベニツキガイ	ソメワケグリ	イソハマグリ	その他	合計			
																												遺跡	層	遺構
HC	遺跡	I			3	5										1											9			
					2	2				1																			5	
			IIc		2																									2
					2	5	1																							8
			III		5	2	6				1																			14
						1																						1		
	IV																													
			109	72	271		2	20	6	4	2	2			2	2	2	2	4	1	2	1	2	1	4		509			
	V	貝層I群									2																	2		
			b	1																									1	
			c	7	1	8				2							1	1											20	
			d			1																							1	
			f	2		4							1																7	
		貝層II群	g			1																							1	
			h	2		2																							4	
			i			5																							5	
			-	4		2				1																			7	
		貝層III群	1	5	1	14				1																			21	
			1a	1																									1	
			1b	7	1	6				2																			16	
			2	26	6	64				6		1		2	1														106	
			3	5	4	29																							40	
			4	8		18				1		1												1					30	
			5	43	6	182		1	5	1	6	1	1			5			1								1	253		
不明			5	2	18				3		1			1														30		
貝層IV群			3		2					1																		6		
貝層V群			6		2												1											9		
不明		22	5	39				2	1			1									1				1	1	73			
HC小計		270	105	683		3	46	10	14	4	6	1	9	4	5	5	1	3	1	2	1	2	1	5	1	2	1,181			
HB③		I	1	1	1																							3		
		IIb	2																									2		
		IIc	2		2																							4		
	III(V)	19	5	21					3	4		1															53			
	IIIb	6		6																							12			
	IIIc(V)	36	3	24																							63			
	IIId(V)	52	2	40					3																		97			
	不明	5	1	2						3																	11			
	HB③小計	123	11	96		0	3	6	5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	245			
	HC+HB③合計	393	116	779		3	49	16	19	4	7	1	9	4	5	5	1	3	1	2	1	2	1	5	1	2	1,426			

遺構: HC IIc P01-SK02 R:リュウキュウの略

第50表 二枚貝有孔製品(孔位置・重量別) 出土量

孔位置	貝種	孔位置・重量(%)																合計						
		Rサルポオ	メンガイ(類)	シヤコガイ科	Rザルガイ	カワラガイ	Rシラトリ	Rマスオ	ヌノメガイ	ホソスジイナミ	スダレハマグリ	クロチヨウガイ	ハイガイ	シレナシジミ	マスオガイ	Rアサリ	ウチワガイ		エガイ	キタザルガイ科	クチベニツキガイ	ソメワケグリ	イツハマグリ	その他
HC	上後	3	1	21				2	1															29
	上前	3	2	514				3																526
	上中	110	89	111	3	36	2	6	1	2		3		1				3	1	2	1	5	1	377
	中後			3										1										4
	中前			2			1																	3
	中中	2	12	30		4	6	3	2	4	1	1			3	2						1		71
	殻頂	151		2		6							4											163
	空白	1	1				1							5										8
	HC小計	270	105	683	3	46	10	14	4	6	1	9	4	5	5	1	3	1	2	1	5	1	2	1,181
	上後	1	1	1						1														3
上前	10		45			1																	56	
上中	29	8	46		1	4	4																92	
中中		2	3		1	1																	7	
殻頂	85				1																		86	
下前			1																				1	
空白		1					1																2	
HB③小計	125	11	96	0	3	6	5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	247	
HC・HB③合計	395	116	779	3	49	16	19	4	7	1	9	4	5	5	1	3	1	2	1	5	1	2	1,428	
HC	0~9	19	16	108	3	21	10	10		6	1				5		3	1	1		5	1	210	
	10~19	124	36	200		21		4	1			3	1	2		1						1	394	
	20~29	79	30	162		4							1	2						1			282	
	30~39	27	14	77						1		2	2	1									125	
	40~49	17	5	39															1					61
	50~59	1	2	24																				27
	60~69	2	2	25																				29
	70~79	1		15								2												18
	80~89			7																				7
	90~99			7																				7
	100~			19																				19
	HC小計	270	105	683	3	46	10	14	4	6	1	7	4	5	5	1	3	1	2	1	5	1	2	1,179
	0~9	8	3	8		1	6	2		1														29
10~19	42	4	29		1		3																79	
20~29	33	1	19		1																		54	
30~39	23	1	8																				32	
40~49	14	2	8																				24	
50~59	3		8																				11	
60~69			4																				4	
70~79	2		3																				5	
80~89			3																				3	
90~99																							0	
100~			4																				4	
空白			2																				2	
HB③小計	125	11	96	0	3	6	5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	247	
HC・HB③合計	395	116	779	3	49	16	19	4	7	1	7	4	5	5	1	3	1	2	1	5	1	2	1,428	

R:リュウキュウの略 孔位置:クロチヨウガイ(貝包T)2点含む

第51表 二枚貝有孔製品遺跡別 出土比較

遺跡	貝種	孔位置・重量(%)																合計	発行人						
		Rサルポオ	メンガイ(類)	シヤコガイ科	Rザルガイ	カワラガイ	Rシラトリ	Rマスオ	ヌノメガイ	ホソスジイナミ	スダレハマグリ	クロチヨウガイ	ハイガイ	シレナシジミ	マスオ	Rアサリ	ウチワガイ			エガイ	キタザルガイ科	クチベニツキガイ	ソメワケグリ	イツハマグリ	その他
小塚原遺跡	試験		3	1		2																		6	2009
小塚原遺跡		4	4	18	1	2		1																30	2012
伊礼原D遺跡	試験	15	22	28	1	1	3													1	1			72	2008
伊礼原D遺跡		32	38	147		6	1	6		1							1	1						237	2013
伊礼原遺跡	図説定外	74	17	219	2	16	8	11						3						1	1			351	2014
平安山原B遺跡		15	17	2		2	6	3					1	2										46	2015
平安山原A遺跡		11	20	46	2	10	16	17	2	2	1	2										6	135	2016	
HC		270	105	683	3	46	14	10	4	6	1	9	4	5	5	1	3	1	2	1	5	1	2	1,181	2016
HB③		123	11	96	3	5	6		1															245	2016

R:リュウキュウの略 その他:バカガイ・アラスノメ・ウツキツキガイ・オオナシロ・ナリホタン・ユカガハマグリ



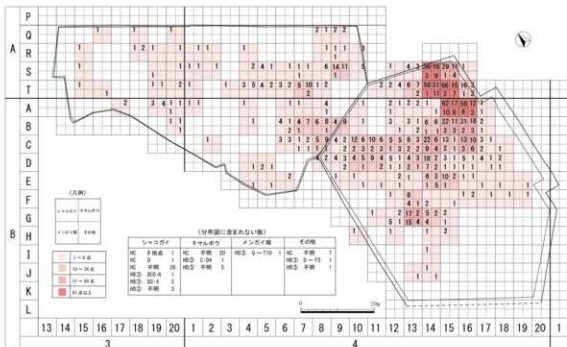
のは前出の貝と共伴したり、遺跡でよく出土する。また、クロチョウガイは貝包丁が出土しているが、備瀬貝塚 (1986) ではヤコウガイ有孔製品と一括で出土していることから、穿孔のみのものはここに含めた。カワラガイは示数 1.7 で、孔位置は「上中」が多いが、「中中」についてみると第 133 図 59 ように、自然に剥離する性質がある。平安山原 A 遺跡 (2016)、平安山原 B 遺跡 (2015) でも出土したリュウキュウザルガイ・リュウキュウシラトリ・リュウキュウマスオなどは貝殻が薄く、漁網鑑に適合しないと考えられ、別の用途かあるいは自然の穿孔の可能性が考えられる。小形のホソズ

第 52 表 二枚貝有孔製品 観察一覧

(法量単位:cm,g)

発掘 図版	調査 番号	製品 番号	貝種	完 形	部位 左右	殻 高	殻長 約	孔 径	孔 径 比	孔 位置	孔形	穿孔 方向	痕跡	状態・備考	遺跡・グリッド・層 遺構・台座(バ)・番号	
第 133 図・ 図版 94	45	881	リュウキュウガイ	完	R	4.6	5.7	0.5	0.6	16.8	楕圓	横内	×	孔縁磨削、風化△	HC A16 貝層群5 F1764	
	46	896	メンガイ類	完	L	4.8	6	1.6	1.4	21.2	上中	多角形	内→外	中央 色浅○	HC G12 V(後期層) F1599	
	47	924	メンガイ類	完	R	5.6	5.8	2.5	2.2	19.8	中中	不定形	内→外	磨削 磨耗△	HC A15 貝層群5 F3730	
	48	884	メンガイ類	完	R	6.2	5.7	3.8	3.3	17.3	中中	円→大	内→外	×	孔大きく、貝輪の可能性、内縁に 打痕多数、風化○	HC A16 貝層群5 F1416
	49	1269	ソラナメ	完	L	5.8	9	1.2	1.4	37.8	上中	円形	内→外	×	孔上縁のみ、磨削△、製品 色○	HC 不明 859
	50	1277	ヒシゴウ	完	L	6.5	9	1.6	1.8	54.1	上端	不定形	内→外	×	孔上縁、磨削痕のみ、磨削△、 風化△、ヒシゴウ付着	HC S16 貝層群5 S156
	51	1214	シラナメ	完	R	5.7	9.7	0.95	0.8	54.9	上中	方形	内→外	△全	HC T14 貝層群5 S135	
	52	1234	シラナメ	完	R	4.7	7.6	0.9	1.25	22.9	上端	横円	内→外	×	全体に磨削	HC A15 貝層群5 S203
	53	1196	シラナメ	完	R	3.8	6.7	0.8	0.9	14.9	中中	方形	内→外	×	孔以下磨	HC 貝層群5 S162
	54	1289	ヒシゴウ	完	L	4.5	4.8	1	1.15	12.2	上端	楕圓	内→外	×	中央→後大きくか 中央→後磨削	HC A16-11 貝層群5 S251
	55	1443	シラナメ	完	L	4.4	5.1	1.6	1.1	12.9	上端	不定形	内→外	×	円形化	HC D14 V(後期層) F2787
	56	1297	ヒシゴウ	完	L	3.7	5.4	0.55	0.55	11.4	上端	方形	内→外	×	孔上縁のみ、磨削△、製品色○	HC T16-52 貝層群5 S137
	57	1228	ヒシゴウ	完	L	3.5	5	0.75	0.8	7.8	上端	横円	内→外	×	孔は上へり、磨削△	HC A16 貝層群5 S285
58	956	リュウキュウガイ	完	L	4.7	4.3	1.4	1.2	8.6	上中	楕圓	内→外	×	孔は自然か	HC B14 V(後期層) F1114	
59	783	カワラガイ	完	L	3	4.4	1.2	1.1	14.0	中中	円形	内→外	×		HC T14-12 貝層群5 S346	
60	835	カワラガイ	完	L	4.7	4.5	1.3	1.1	14.9	中中	方形	内→外	△全	孔真鍮せず	HC F15 V(後期層) F1072	
61	952	リュウキュウガイ	完	R	3.3	4.3	0.9	0.8	3.3	上中	不定形	内→外	×		HC C16 V(後期層) S694	
62	982	マスオガイ	完	R	2.5	4.9	0.5	0.4	3.3	上端	方形	内→外	△全		HC G12 V(後期層) S2778	
63	966	リュウキュウガイ	完	R	4.2	4.6	1.1	1	13.6	中中	円形	内→外	×	外縁の剥離大きい、風化△	HC S14 貝層群5 F14373	
64	967	リュウキュウガイ	完	R	3.3	4.9	1.6	1.5	3.9	上中	横円	内→外	×	内磨削	HC T14 V(後期層) S2216	
65	970	ヌメガイ	完	S	5	5.2	1.5	1.4	18.1	上端	方形	内→外	×	色浅	HC T15 貝層群5 F14740	
66	995	ホソズイナメ	完	R	2.5	3.2	1.1	1.1	2.3	中中	横円	内→外	×	孔220度以上打削	HC F15 V(後期層) F1187	
67	1447	ハイガイ	完	L	4.1	5.4	0.9	1.6	31.3	側面	横円	内→外	磨削	孔縁および磨削痕△	HC B12 V 25615	
68	987	ハイガイ	完	R	4.2	4.8	0.6	1.2	25.2	側面	横円	内→外	×	孔縁数の打削	HC C8 V(後期層) S373	
69	992	シラナメ	完	R	5.6	6.4	1.7	1.3	22.0	上端	不定形	内→外	×	側面に数珠の跡あり	HC S15 貝層群5 F16673	
70	999	ソノカガ	完	R	3.8	4	0.8	1.3	7.6	上端	方形	内→外	×	色浅、孔縁磨削	HC T15 V(後期層) F1381	
71	997	ウツガイ	完	R	3.6	3.6	1	1.4	6.6	上中	円形	内→外	△全	色浅△、孔縁磨削	HC B2 32166	
72	888	キヤウザル	完	R	5.8	5.3	1.7	1.6	37.4	中中	円形	内→外	×	風化△、磨削、重い	HC D9 V(後期層) S3097	
73	968	リュウキュウガイ	完	R	4.9	8	2	1.9	12.6	上端	不定形	内→外	後△	自然の穿孔の可能性高い	HC C14 V(後期層) S736	
74	973	クロチョウガイ	完	—	—	—	—	—	36.9	上中	円形	内→外	磨削縁痕	孔の打削明瞭、風化△	HC S14 貝層群5 F15327	
75	1474	ヤコウガイ	1/3 残	—	—	—	—	—	3.9	中中	円形	内→外	カッパあり	孔は自然、製品の可能性低い	HC 貝層群5 S140	

貝種:リュウキュウガイ(丸) 風化:中央、中央→前縁部→後縁部 ○:強い、○/△:やや強い、△:少ない、△/○:確認できる △/△/△:なし (出土地、F:バ)取上番号、バ:貝番号



第 124 図 二枚貝有孔製品 平面分布

ジイナミ(図66)は孔径1.1cmで重さ2.29gと最も軽い貝であるが、鹿児島県奄美市マツノト遺跡(2006)でも報告されており、用途については今後の課題である。ハイガイは砂面に棲む貝で、絶滅種であるが多く出土する。リュウキウサルボオに似ていることから漁網錘の可能性もある。

### 5. ヤコウガイ有孔製品

1点のみの出土である。図75は真珠層を露呈するもので、周縁は特に加工が見られないが、打割により径1.5cmの孔がほぼ中央に見られる。殻の使用部位は殻口付近である。類例から前述の二枚貝有孔製品と同様、漁網錘と考えられる。奄美市マツノト遺跡(1992)、恩納村熱田貝塚(1979)に報告例がある。

### 6. ホラガイ有孔製品

ホラガイの腹面に1.5cm前後の粗孔を施すもので、1孔タイプと2孔タイプがある。前者が6点、後者が5点出土した。地区別にはHC V層で2点、不明1点、貝層II群F層で1点、貝層III群3層で1点、5層で5点の計10点、HB③では、III d (V)層の1点でほぼ貝塚時代後期に属する。そのうち保存の良い3点を図示し、出土した製品は観察一覧(第53表)に示した。

図76は小振りで、図77は外唇及び殻頂を丁寧に整え、細かいアバタが見られる。図78は外唇を大きく割取り、本来の貝殻を一回り小さくして大きさを調整している。製品番号1は2孔タイプで、殻頂を研磨している。背面を欠損するのが、1例ある。完形の容量をみると150cc(図76)から600cc(HB③ B529)まで見られ、約400cc前後が多い。貝殻の保存状態をみると総じてHC貝層III群出土のものが状態はよい。

### 7. ヤコウガイ製容器

貝殻の殻頂や殻口を若干加工し、容器としたものでHC V層で1点、貝層III群4層で1点出土した。

図79は小形で、外唇から体層中央まで大きく割取り、平らに整えている。腹面は表層を剥離し、部分的にアバタが見られる。ホラガイ(図78)のように大きさを調整していると思われる。全体的に摩耗するが、特に螺肋・上の摩耗が顕著である。図80は大形のヤコウガイで殻頂及び螺塔の一部を割りとる。外唇はほぼ平らなす。容量600ccと多い。背面に焼き後は見られない。臍部のアバタが顕著で死貝の可能性が高い。

第53表 ホラガイ有孔・ヤコウガイ製容器 観察一覧

(法量単位:cc, g)

地区 図版	図 番号	製品 番号	製品 名	貝種	完形	縦 径	横 径	孔 径	重さ	観察事項	アバタ	色沈	摩耗	へこ	酸化	遺跡・アバタ・螺 造像・台帳(口)の番号	
第 36 図 版	76	1478	有孔 ホラガイ	完形	20.3	9.2	1.4	1.4	285	1孔。殻頂除去。外唇調整なし。殻頂丸味。背面若干欠損。石灰付着。	×	○	×	×	×	HC A15 貝層III群5 F3449	
	77	1491	有孔 ホラガイ	完	19.2	11.7	3.5	4.1	222	1孔。殻頂除去。外唇は打割。調整が顕著。乳は不定形。	△	○	×	×	△	HC T15 貝層III群5 F4105	
	78	1477	有孔 ホラガイ	完	22.9	11.1	3.1	4.1	476	1孔。外唇を大きく割取り。調整する。殻頂除去。乳を調整して製品にする。	○	△	○	×	○	HC C10 V(後期層) F3460	
	79	1486	容器 ヤコウガイ	完形	8.3	8.7	-	-	155	殻口。摩耗。螺肋・上は研磨。殻全体が摩耗。	○	△	○	×	△	HC A16 貝層III群4 F3707	
	80	75	容器 ヤコウガイ	2/3	14.9	19.5	-	-	816	外唇摩耗。容器として利用。殻頂欠。乳:自然の摩耗	○	×	○	○	△	HC D11 V(後期層) F3206	
国・ 図版 なし	-	1	有孔 ホラガイ	1/2	-	-	-	6.4 6.3 1.1 1.1	350	2孔。殻頂丸味および研磨。	×	△	×	×	×	HC S14 貝層III群5 F4692	
	-	2	有孔 ホラガイ	2/3	20.8	9	2.8	2.6	191	2孔。研磨確認。	×	×	×	×	×	HC 貝層II群F 520	
	-	8	有孔 ホラガイ	2/3	-	-	-	3.3	3.4	55	1孔。殻頂丸味。	×	×	×	×	×	HC 不明
	-	14	有孔 ホラガイ	2/3	-	-	-	23	19	152	2孔。殻頂欠。	×	△	×	×	×	HC S14 貝層III群5 01059
	-	16	有孔 ホラガイ	完	24.5	10.5	-	-	324	2孔。殻頂欠。	×	△	×	×	×	HC H15 貝層III群 F3803	
	-	19	有孔 ホラガイ	1/2	-	-	-	27	29	173	2孔。	×	×	×	×	×	HC E18 V(後期層) 22688
	-	21	有孔 ホラガイ	2/3	24	10.5	-	-	181	1孔。殻頂欠。	×	×	×	×	○	HC T14 貝層III群5 F4027	
-	529	有孔 ホラガイ	完	26	12.5	3	3.4	245.2	1孔。殻頂丸味。	×	△	×	×	△	100③ 59 皿0134 F1673		

△:計測不可 黒:黒化 黒二:黒化 〇:普通 △:少 △:僅少 ×:なし △:計測取上番号 〇:製品番号

### 8. 貝匙

貝殻を匙状に加工するもので、ホシダカラとゴホウラ、ヤコウガイが得られた。

ホシダカラ・ゴホウラ製貝匙: 図81はホシダカラの背面を切り取り、周縁を打割調整し、整えたも

ので、HC貝層Ⅲ群5層で1点出土した。平安山原B遺跡(2015)で報告されている。図82はゴホウラの貝殻の体層を用いたもので、津堅島キガ浜貝塚(1976)形状から貝匙としたが、製品かどうかは不明瞭な部分も多い。一端の縁は摩耗、他端は貝輪をとるように一括で割りとった状態が残る。

**ヤコウガイ製貝匙**：ヤコウガイを匙状に加工したもので、完形はわずか5点でそのほとんどは破片である。HCで54点、HB③で3点の計57点出土した。これらは使用部位により背面を用いたもの(A)と腹面を用いたもの(B)、腹面グスクタイプ(C)に大きく分けられ、さらに有柄(a)と無柄(b)に細分され、殻の大きさに分けられる。その集計は第54表に示した。以下、各分類ごとに主なものを図示し、第55表に観察一覧を示した。

**Aa(背面型・有柄)**：本タイプは貝塚時代後期に一般的に見られるもので、貝殻の外唇側に柄、体層側に身を配する取り方で、柄の幅は5.7~6.0cmとほぼ一定している。柄21点、身18点の計39点出土した。そのうち、状態の良い柄の部分の5点を図示した。図83と図84は柄の先端の一部を「L」字状に削り取る意図で、前者は径0.5mの孔を打割りで両面から施す。図85は柄のほぼ中央を「V」字状に挟り、図86は柄が扇形をなす。これらはいずれも周縁は丁寧に研磨され、前2点は外殻も削られ、真珠層が部分的に露呈する。後2点は外唇部が0.5~0.8cmと厚く、ヘビガイが確認される。

図87は周縁を打割し、螺肋・上も打割調整のみで、製作途中と考えられる。

**Ab(背面型・無柄)**：外唇側に身の先端を配することから、柄の無いタイプと考えられる。さらに大きさにより、大と中がある。類例は清水貝塚(1989)にもある。

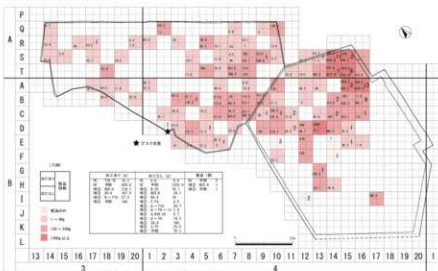
(Ab大) 図88と図89の2点が得られた。図88はほぼ完形で、螺肋を殻と同じ厚さまで削るもので、特に殻の厚い螺肋・上を削り込み、丸みを出す。匙の縁は打割後、研磨する。総じて研磨は顕著で外殻の表層をみると体層側は研磨により部分的に真珠層が露呈する。図89は使用された貝は若干小さい。螺肋・上は打割りのみの調整であるが、周縁や外殻の表層に研磨が認められる。

(Ab中) 図90~92の3点が得られた。図90はやや大きめで、身はやや浅く、外唇側が破

第54表 ヤコウガイ製品(貝匙)出土量

遺跡	層	分類	背面				腹面		グスク	C	合計	未製品	合計	
			Aa	Ab大	Ab中	Ac	Ba	Bb						
HC	Ⅲ	V									0	1	11	
				9		1						10	1	11
			1	1			1					2		2
			1a	1								1		1
			2	1								1		1
	Ⅳ	V	3						1		1		1	
			5	19	2	3		3			27		27	
			不明	4				1			5		5	
			不明	4							4	1	5	
			HC小計	39	2	3	1	5	1	0	51	3	54	
HB	③	Ⅲ							1	1		1		
		Ⅲd								2		2		
		HB③小計	0	0	0	0	2	0	1	3	0	3		
HC・HB③合計			39	2	3	1	7	1	1	54	3	57		

損する。そのため、有柄の可能性も考えられる。周縁を大きく割取り、研磨し、外殻の螺肋・上・中・下、滑層部は丁寧に研磨される。図91・92はほぼ同じ大きさのヤコウガイを用いる。図91は大タイプと同じような形状を示す。周縁は打割が残るが、外殻は螺肋・上・中・下とも研磨される。図92は、外唇~体層までを大きく取り込み、周縁は打割し、



第125図 ヤコウガイ重量・製品個数 平面分布

外唇はほとんど調整しない。前者の未製品とも考えられる。

**Ac (背面型・丸タイプ)** : 図93はヤコウガイの背面を丸型に割り取ったもので1点のみの出土である。殻口に身を配し、螺肋・上は加工されていないが、螺肋・中にわずかに研磨が認められる。第137図81のホンダカラと同じ形状を示し、大きさも近い。

**Ba (腹面型・有柄)** : ヤコウガイの腹面を用いる点は後述のCタイプと同じであるが、外殻の表層を残す点で異なる。5点得られ、そのうち図94～97を図示した。

図95は小形のヤコウガイを用いたもので、Aa大のミニチュアである。図94はほぼ完形で、外殻の螺肋①の研磨は顕著である。

**Bb (腹面型・無柄)** : 図98はAbと同じような形状をなすが、ヤコウガイの腹面を用いるためここに分類した。外殻の表層は研磨がなく、周縁は打割調整のみである。未製品の可能性も考えられるが、殻口方向に幅広くなることから、無柄と判断した。

**C (腹面型・グスク)** : ヤコウガイの腹面を匙状に割り取り、外殻の表層を除去し、柄の形状は魚の尾状をなし、身はBaに比べて浅い。図99と図100は出土地もHB③D2Ⅲ層と同じであることから同一個体と考えられる。外殻の表層を全て除去するため風化が著しい。平安山原A遺跡(2016)や伊礼原D遺跡(2003)で報告されているが、本品が若干大きいようである。

第55表 ヤコウガイ製品(貝匙) 観察一覧

(法量単位:cm, g)

第図 図番号	分類	貝匙 使用部	部位	残存	横	縦	高さ	観察事項	ア・バ	色	へ	風化	遺跡・ブリード・層 遺構・台(シ・カ)番号
第137 図 97	Aa	背面	柄	1/2	6.2	10.2	58.0	殻口は厚く大きい貝である。周縁研磨。両面穿孔。孔0.4cm。製1458	○	×	×	×	HC C14 V層(後期層) F3027
				1/4	-	-	29.0	殻口、薄手。周縁研磨。上縁に打割の痕跡残る。外殻縁に研磨あり。部分研磨。製1473	○	△	×	×	HC V層 方391
				1/4	5.5	-	27.0	殻口、薄い。周縁研磨。外殻、部分研磨。製1471	○	×	×	×	HC S15 貝層Ⅲ群5 カ149
				1/4	4.9	-	34.2	殻口、厚い(0.55cm)。周縁研磨。一端は湾曲強く、先端は扇状。上縁は若干の剥離。外殻部分研磨。製1472	○	△	×	×	HC C16 V層(後期層) カ718
				1/4	6.3	6.3	35.0	殻口。周縁は打割加工。上・上は打割。・中は摩耗。製1457	△	△	×	△	HC T15 貝層Ⅲ群5 F4610
	Ab大	背面	身	完	9.9	15.5	151.0	外唇～体層。殻大きい。螺肋・上は殻と同じ厚さまで割り。螺肋・下の密研磨。外殻表層の2/3を研磨。部分的に真珠層露見。周縁は打割後、研磨。部分的に打割痕が残る。厚みのある滑磨部は研磨は2面だけを残す。製1488	×	△	×	△	HC S14 貝層Ⅲ群5 F4450
				完	7.8	15.1	126.0	外唇～体層。螺肋①は打割。周縁は研磨。外唇は自然。製1477	△	△	×	×	HC S14 貝層Ⅲ群5 F4689
				2/3	7.4	10.4	86.0	外表残。周縁打割後、研磨。加工の方法が他と異なる。螺肋上・下の研磨が顕著。柄の部分、破損後研磨。製1482	△	△	△	△	HC T15 貝層Ⅲ群5 F4497
				完	6.1	10.2	63.1	外表残。周縁打割。柄は研磨。平ら。製1476	○	△	×	×	HC 貝層Ⅲ群5 カ1522
				完	7.5	10.6	111.0	外表残。周縁打割。殻軸の打割顕著。75cc。製1481	×	△	×	△	HC A16 貝層Ⅲ群5 F3602
第138 図 98	Ac	背面	身	3/4	6.1	7.3	31.0	殻口。周縁は打割後、調整。やや丸味か。螺肋・中におわずかに研磨。ホンダカラ(図81)と同じサイズ。製1455	△	×	×	△	HC C11 V層(後期層) #3386
				完	5.1	8.7	52.0	外表残。周縁打割。粗い。柄と身の境を「J」字状に挟む。縁・打割顕著。製1479	×	△	×	×	HC S14 貝層Ⅲ群5 F4283
				1/2	-	4.7	25.9	腹面。外表有。周縁研磨。柄の中央に径0.3cm。内殻→外殻に回転穿孔。片側の柄に穿孔あり。破損。柄は「V」字状に挟む。製948	×	△	×	×	HB③ S9 Ⅲd 台1759
	Ba	腹面	柄～身	1/5	1.5	-	3.8	腹面。周縁研磨。製1445	×	×	×	×	HC S14 貝層Ⅲ群1 カ336
				1/3	4.6	3.3	6.1	周縁打割。螺肋摩耗。ほかに加工無し。製91	×	△	×	×	HC B14 貝層Ⅲ群不明 カ443
				2/3	4.4	7.9	28.0	体層薄。小さい貝。周縁打割。粗削。他加工なし。周縁は内殻から外殻に加工か。製1456	△	×	×	△	HC T15 貝層Ⅲ群3 F4537
C	腹面	柄	1/2	3.1	-	12.5	周縁研磨。内殻は表層残。柄は「V」字状に割り、魚の尾状に類似。製629	×	×	×	○	HB③ D2 Ⅲ(12) 台1005	
			1/2	4.7	4.0	14.5	周縁研磨。内殻は表層残。身の中央に螺肋の痕跡あり。製628	×	×	×	○	HB③ D2 Ⅲ(12) 台1005	

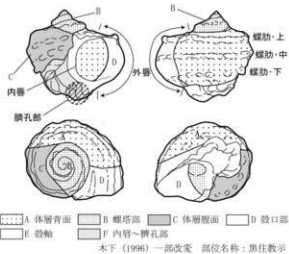
完:ほぼ完形 ○:普通 △:少 △:僅少 ×:なし 製:貝製品番号 「出土地」 F:Fの出土番号 カ:貝番号

**打割・未製品**：ヤコウガイの殻の殻頂および螺肋・上を打割したもので、3点出土した。上記製品のAaタイプの製作第一段階と想定されるもので図101を示した。臍部も打割が施されている。

**\*ヤコウガイの割れ方**

平安山原A遺跡と同じようにヤコウガイの自然貝をまとめた。第56表によると自然貝は343点、一部打割の確認されるもの88点でその総重量は37,015g、平均85.8gである。地区別にはHCで298点、重量37,339g、HB③は133点、重量9,676gである。貝層Ⅲ群のS16、T14・15、A15・16に集中する。ヤコウガイの貝匙や容器も同じように貝層Ⅲ群に集中する。HB③では製品や自然貝の出土量は少ないが、100g以上の出土は他の遺物と同じようにS9周辺に集中する。

完形は5点のみで、他は破片である。加工の痕跡



第126図 ヤコウガイの部位名称と割れ方

第56表 ヤコウガイ分類 (加工痕有り・自然貝) 出土量

遺跡	層	遺物	加工痕有り										自然貝										合計				
			A	B	C	D	E	F	B+D	E+F	完	合計	A	B	C	D	E	F	B+D	E+F	完	合計					
HC	I	I																				0	0				
		II																					1	1			
		IIc	遺構																				1	1			
		III																					0	0			
		IV																					0	0			
	V	V		1			2		1			1			3	8	4	14		4		1	18	52	57		
		貝層I群	a																						0	0	
			b																						1	1	
			c			1																			0	1	
			d																						1	1	
			f																						3	8	
			g																						5	8	
			h																						1	1	
		貝層II群	i																						1	1	
			—																						1	1	
			—																						1	1	
			—																						1	1	
			—																						1	1	
			—																						1	1	
			—																						1	1	
	—																							1	1		
	貝層III群	1			1		1																1	4	6		
		1a					1																1	7	8		
		1b																						4	12		
		2		1		1	2		1							5	1	2	1	7			2	13	18		
3			1		1					1													4	14	17		
4								4															1	16	20		
5			2		2					5		2			11	6	5	8	45			3	22	3	92	103	
—				1																			1	4	6		
貝層IV群	—																						1	1			
	—																						2	5	5		
不明	不明																						7	25	30		
	不明																						7	25	30		
HC	小計		1	1	1	1	1							5	2	2	1	11		2		7	25	30			
	不明																						7	25	30		
HB③	I	I																						1	2	3	
		IIa																							0	0	
		IIb																							0	0	
		IIc																							1	2	
		III (V)																							1	2	
	IIa	IIa																							8	29	46
		IIa																							3	7	12
		IIb																							2	5	8
		IIc (V)																							5	11	20
		IIId (V)																							5	23	34
	IV	IV																							1	1	
		IV																							1	1	
		IV																							1	1	
		IV																							1	1	
		不明																							1	1	
HB③	小計		1	8	4	11	2	19	4	0	0		49	3	8	9	27	3	6	2	0	25	1	84	133		
	不明																							1	1		
HC・HB③合計			8	11	8	23	3	26	5	4	0	88	18	30	26	128	3	27	2	6	98	5	343	431			

遺構 HC IIc:P01

の見えるものはHCよりHB③の方が多いようである。残存部位は加工痕有りも自然貝も「D」(殻口)が多く、「F」(臍孔部)と続く。これらの部位はヤコウガイの中でも肉厚で残りのいい部分である。

以上のことからHC・HB③とも加工痕があること、自然貝も割と多いことから在地でヤコウガイ匙に加工、食用でもあり、肉量のある有用具である。また、蓋の大きさから(第122図)ヤコウガイは大〜小まで採集していたようである。貝匙でも小ぶりのものを製作している。また、第126図に示したように製品を取るために螺肋・上を打割調整することは定型化していたようである。

### 9. タカラガイ製品

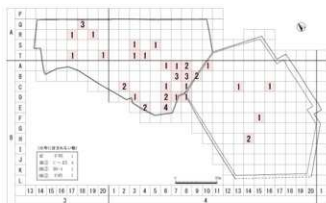
ハナマルユキヤハナピラダカラなどの小形タカラガイの背面を除去し、整えたもので民俗事例から網の錘とされるものである(岸上1971・上江洲1973)。貝種はハナマルユキが一般的であるが、稀にヤクシマダカラヤハナピラダカラヤキヨダカラなどが出土する(島袋2003)。

出土地をみるとHCではハナマルユキ5点、HB③ハナマルユキ44点、ハナピラダカラ3点の計47点である。層別にはHCではV層で1点、Ⅲ群Ib層で1点、不明3点、HB③ではIIa層1点、IIc層3点、Ⅲ層12点、Ⅲa層17点、Ⅲb層3点、Ⅲc層1点、不明5点の出土で大半はグスク期の出土である。平安山原A遺跡や平安山原B遺跡と同じような傾向を示すことから、V層出土のものは上層からの混ざり込みか取り上げ時のエラーと思われる。

ハナマルユキ・ハナピラダカラを合わせた加工をみると、殻軸有(A)23点、半欠(B①)12点、欠(B②)12点で、その割合も平安山原A遺跡(2016)・平安山原B遺跡(2015)と同様な傾向を示す。主なものを図と観察一覧を示す。

第57表 タカラガイ製品 出土量

遺跡	層	貝種	ハナマルユキ		ハナピラダカラ		合計	
			A B① B②	A B① B②				
HC	V		1				1	
	V	貝群Ⅲ群 1b		1			1	
		不明	1	2			3	
		HC小計	2	1	2	0	0	5
HB③	IIa			1			1	
	IIc		1	2			3	
	Ⅲ		8	2	2		12	
	Ⅲa		5	5	6	1	17	
	Ⅲb		1	1		1	3	
	Ⅲc						1	
	V		1				1	
		不明	4				4	
		HB③小計	20	10	9	1	1	42
		HC+HB③ 合計	22	11	11	1	1	47



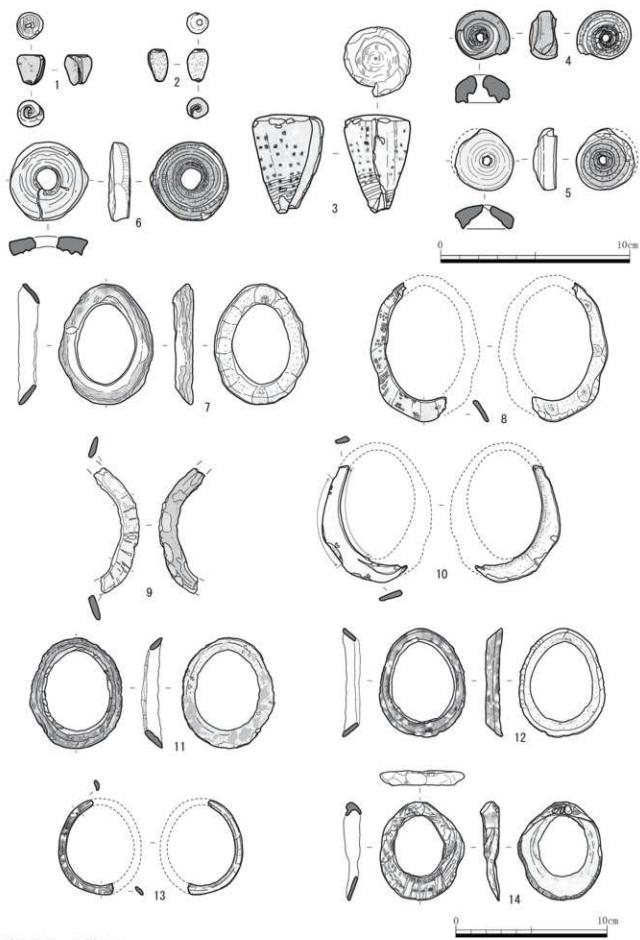
第127図 タカラガイ製品 平面分布

第58表 タカラガイ製品 (貝錘) 観察一覧

(計量単位:cm, g)

期回 図版	図 番号	貝種	完成	殻長 mm	殻高 mm	重さ	観察事項	色残	摩耗	風化	遺跡・テッド・層 遺構・台(ノカ)番号
第 138 図 版	102	ハナマルユキ	完	2.5	3.3	7.3	殻軸欠, B②, 製1450	×	×	○	HC Ⅱ層 8739
	103	ハナマルユキ	完	2.5	3.2	5.4	殻軸欠, B②, 製477	×	△	○	HB③ R17 Ⅲa 台297
	104	ハナマルユキ	完	2.5	3.3	7.3	殻軸半欠, B①, 製478	△	×	△	HB③ E6 Ⅲa 台263
	105	ハナマルユキ	完	2.5	3.3	6.8	殻軸有, A, 製463	×	△	○	HB③ B8 Ⅲ(12下) 台1506
	106	ハナマルユキ	完	2.3	3.2	5.6	殻軸有, 一部欠, B①, 製457	△	×	△	HB③ T17 Ⅲa 台276
	107	ハナピラダカラ	完	2.4	1.8	2.4	殻軸欠, B②, 製484	△	△	△	HB③ R19 Ⅲd(14) F1264

○:普通 △:欠 △:僅少 ×:なし 「出土地」 F:テッド取上番号 台:貝番号

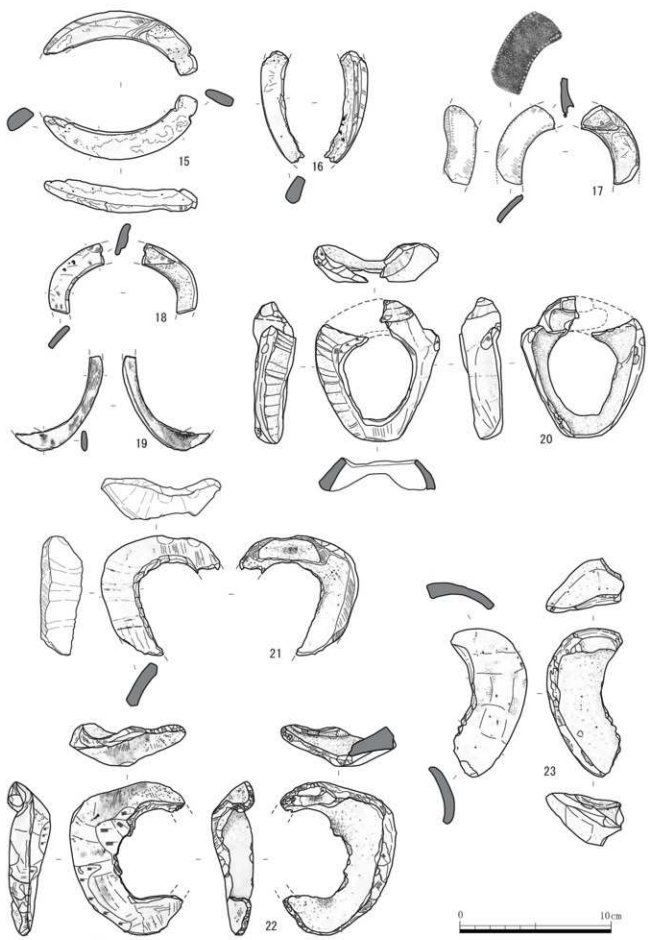


第 128 図 貝製品 1

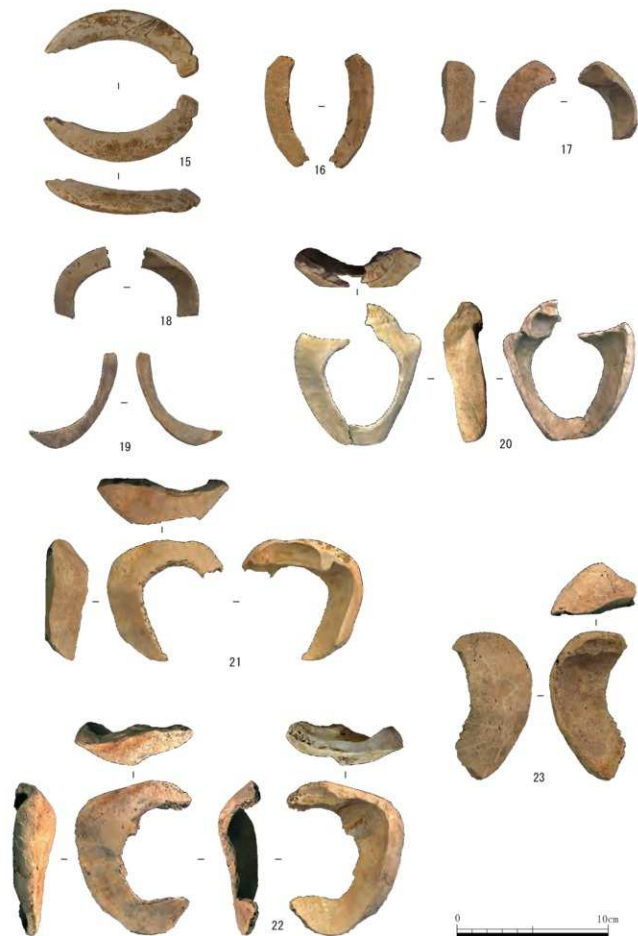


図版 89 貝製品 1

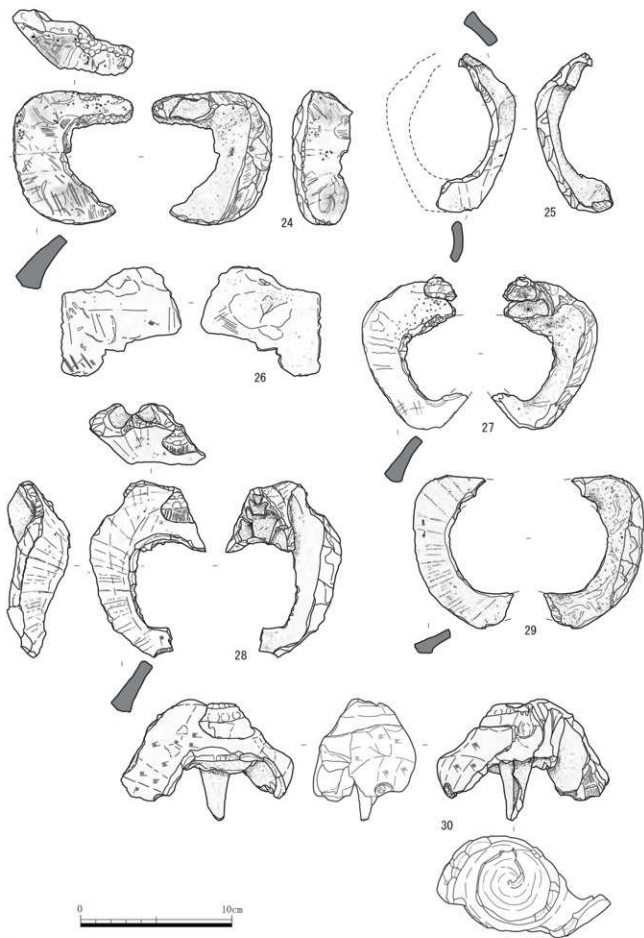




第 129 圖 貝製品 2



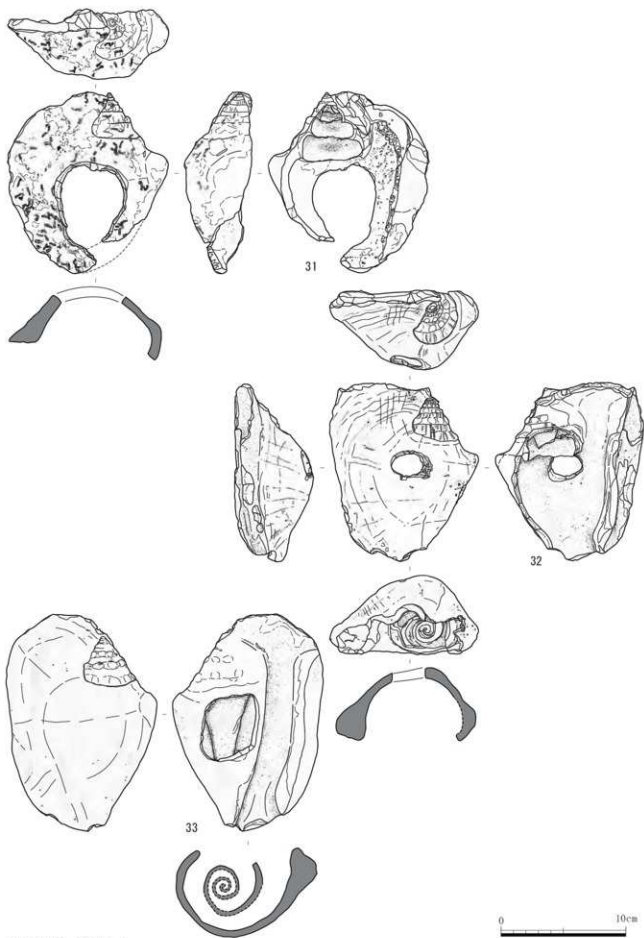
圖版 90 貝製品 2



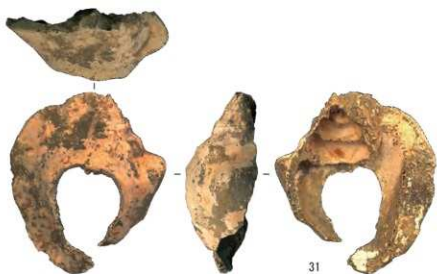
第 130 図 貝製品 3



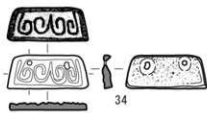
図版 91 貝製品 3



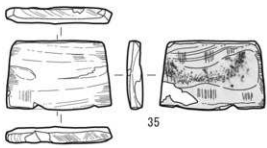
第 131 图 貝製品 4



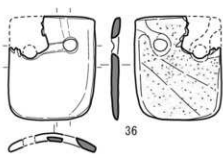
図版 92 貝製品 4



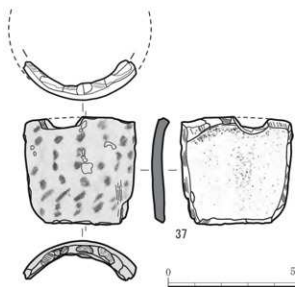
34



35

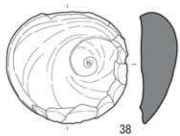


36

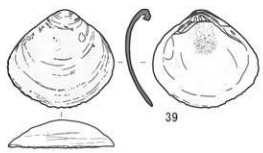


37

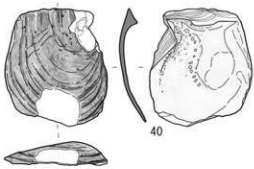
5cm



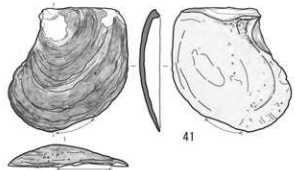
38



39



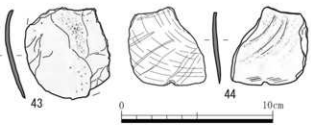
40



41



42



43

44

0

10cm

第132圖 貝製品5



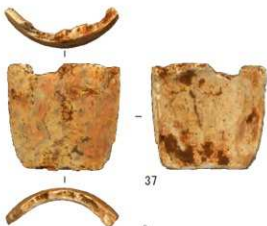
34



35



36



37



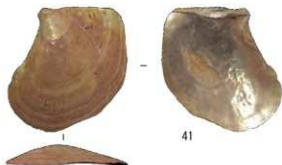
38



39



40



41



42

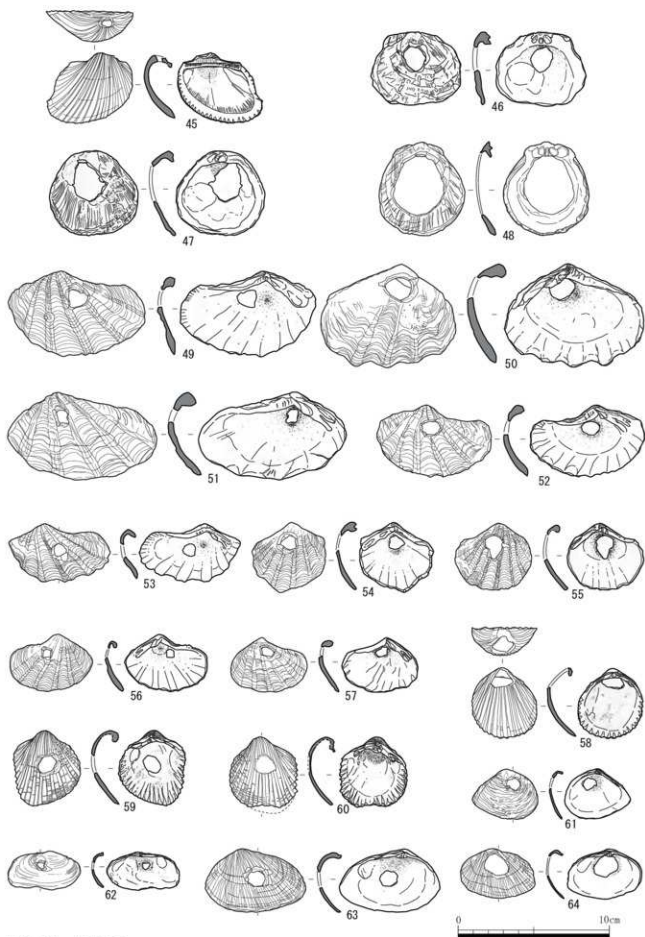


43



図版 93 貝製品 5

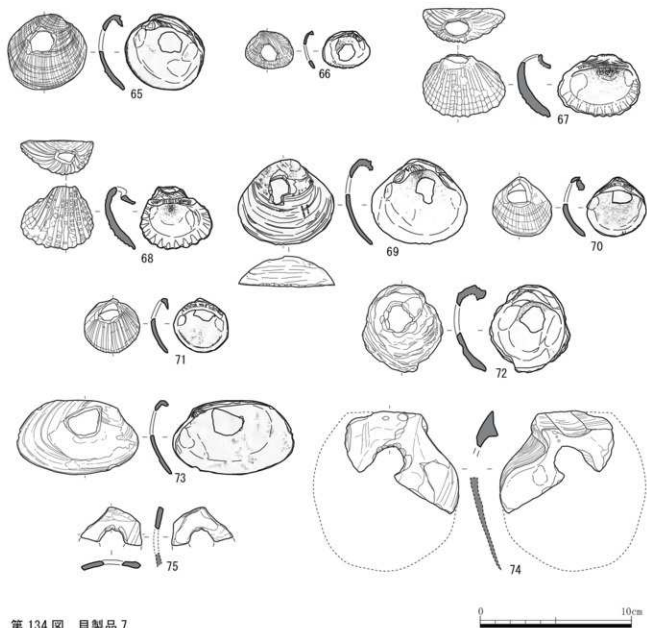




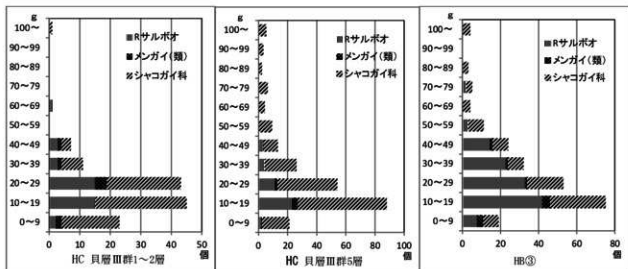
第 133 圖 貝製品 6



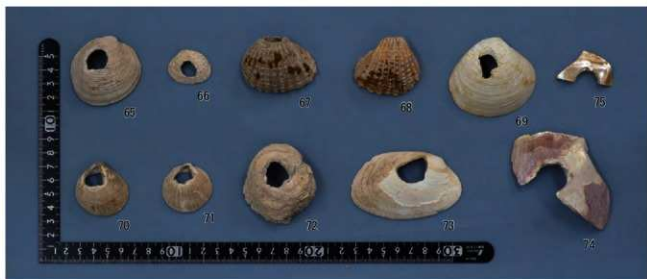
図版 94 貝製品 6



第134図 貝製品7



第135図 二枚具有孔製品 地区別重量比較

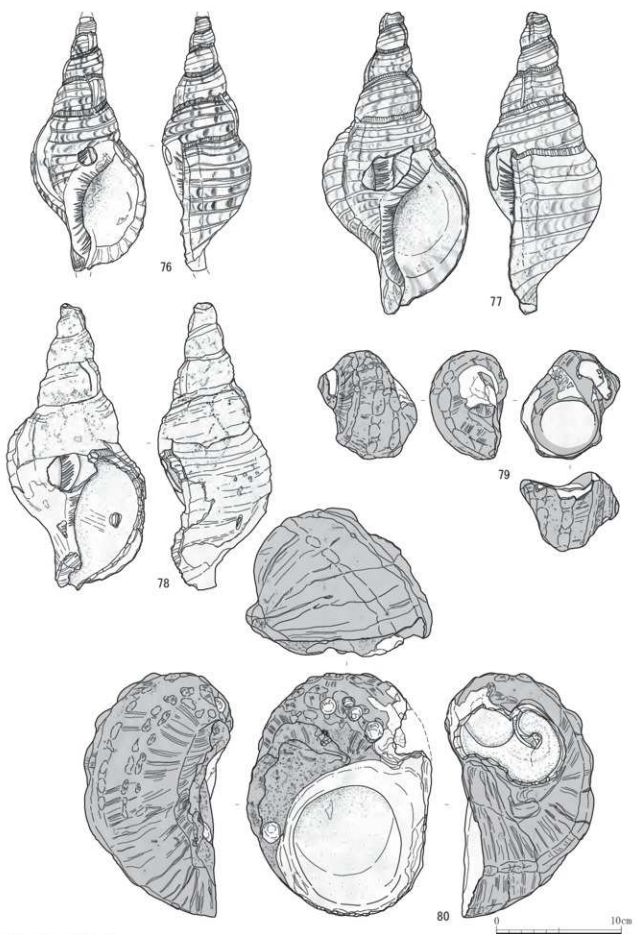


図版 95 貝製品 7

第59表 二枚貝有孔製品の属性

貝種	Rサルボオ	メンガイ(類)	シヤコガイ科	Rザルガイ	カワラガイ	Rシラトリ	Rマスオ	ヌノメガイ	ホソスジイナミ	スダレハマザリ	クロチヨウガイ	ハイガイ	シテナシジミ	マスオガイ	Rアサリ	ウチワガイ	エガイ	キクザルガイ科	クサベニツキガイ	ソメワケダリ	イツハマダリ	ハナマルユキ
平均重量(g)	21.6	22.4	30.6	6.1	11.8	2.7	8.6	23.6	2.4	4.05	18.44	25.1	22.7	2.5	12.6	4.8	6	23.5	23.5	5.7	0.8	6.4
示数	1.1	1.5	1.4	2.5	1.7	5.0	2.5	1.3	3.0	3.1	2.5	0.8	1.6	5.4	3.2	2.4	2.7	1.0	1.4	2.2	5.0	1.2
可能性	●	●	●	▲	▲		▲	▲			▲					▲		●	▲		▲	●
備考	民俗事例有	一奄美でヤコウガイ有孔と一括で出土	民俗事例有		出土				奄美で出土例あり			備瀬貝塚一括	絶滅種			一奄美でヤコウガイ有孔と一括で出土				一奄美でヤコウガイ有孔と一括で出土		民俗事例有

R:ジョウケツの略 ●:可能性高い ▲:可能性ややあり 示数:平均重量÷平均の大きさ



第 136 圖 貝製品 8



76



77



78



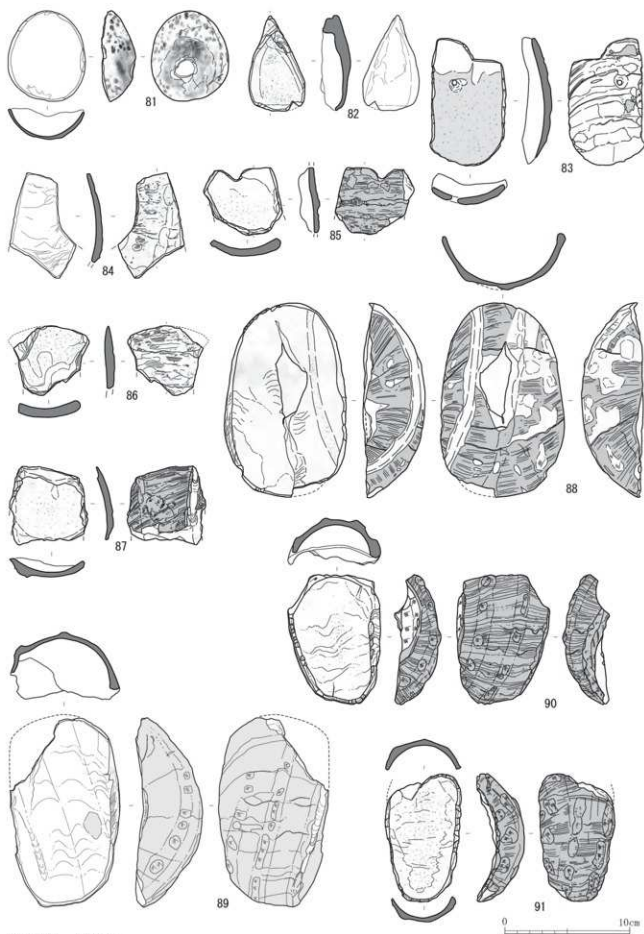
79



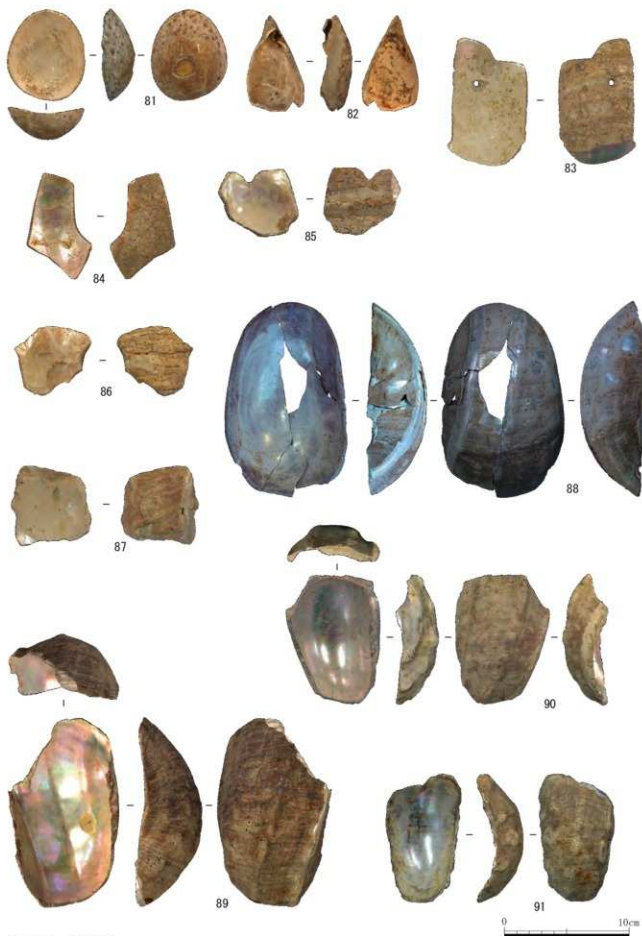
80



圖版 96 貝製品 8

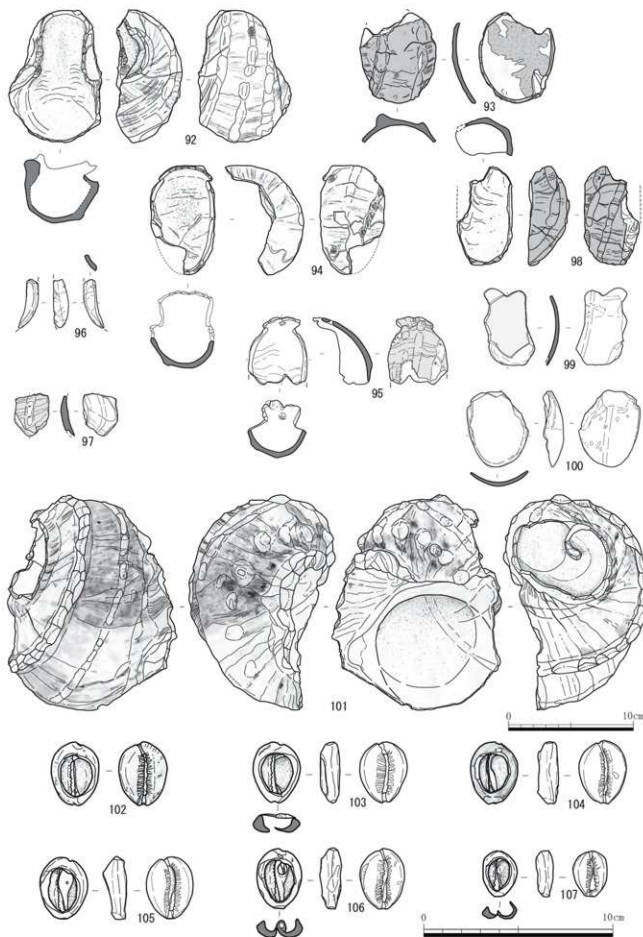


第 137 図 貝製品 9



图版 97 貝製品 9





第138图 貝製品10



圖版 98 貝製品 10

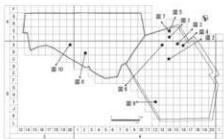
## (4) 骨製品

HCで8点、HB③で2点の計10点の出土である。出土地をみるとHCのV層で2点、貝層Ⅲ群4層で1点、5層3点、貝層V群で1点、不明1点の出土である。HB③はI層とⅢa層で各々1点出土した。装飾品が1点、実用品6点、用途不明3点である。以下、各々について略述する。

**装飾品**は図1のエイの脊椎の中央を穿孔し、周縁を整えたものである。本品の出土例は喜友名グスク(1999)がある。大きさを比較すると本品が大きい。HC貝層Ⅲ群4層の出土。

**実用品**は骨鏃1点、骨針3点、錐2点の計6点の出土である。<骨鏃>図2は化石サメ歯(ホホジロザメ)を加工したものである。二等辺三角形の両縁と基部をカットし、有茎にしたものである。化石で歯は堅く、鏃として用いたものと思われる。化石サメ歯は未加工品が伊礼原E遺跡(2010)で出土している。島尻層群の露頭部で入手できる(島袋1987)ようで、本町にも島尻層群は分布することから周辺で入手したと思われる。<骨針>イノシシの腓骨を用いたもので、3点とも頭部は欠損する。針先の加工は各々異なる。図3はほぼ完形で、近・遠位端を加工、頭部も研磨される。針先はへら状を呈する。研磨痕が縦位に見られる。図4・5は骨体的一端を加工したもので、図5は針の先端を6面に削られ、その境は明瞭である。図1のエイの孔に大きさが一致することから、穿孔具の可能性も考えられる。図3はHC貝層V群、図4・5は貝層Ⅲ群5層の出土で、貝塚時代後期ではうるま市アジャンガー貝塚(1980)がある。<骨錐>イノシシの四肢骨とクジラの肋骨を用いたものである。図6はイノシシの四肢骨を縦位に半裁し、その先端を削り、尖らしたものである。先端のみ得られた。HC V層の出土。図7はクジラの肋骨を用いたもので、横断面は饅頭型を呈し、先端は尖り、頭部は欠損し、全体の形状は不明であるが、断面の状況から半分欠損した可能性もある。一部に研磨が見られるが、骨組織が粗く、光沢は見られない。HC貝層Ⅲ群5層の出土。

**用途不明**が3点出土した。加工痕のあるものをここで扱った。図8はイヌの上腕骨を横位に切り取り管状にしたもので、両端を外面から削り、丸味を出す。装飾品の可能性が高い。HB③Ⅲa層の出土で、グスク時代の可能性がある。図9はイノシシの踵骨の近位部を切り取ったものであるが、製作途中か用途は不明、現段階で報告例はない。図10はウミガメの背甲板を板状に加工したもので周縁を摩耗、上端を幅0.5cmほど削り、段を付けたもので、類別はなく、用途は不明。HB③のI層の出土である。



第139図 骨製品出土平面分布

第60表 骨製品出土量

層別	品目	品別							合計
		エイ脊椎	サメ歯	イノシシ腓骨	イノシシ四肢骨	クジラ肋骨	イヌ上腕骨	イノシシ踵骨	
HC	V	1	1	1	1	1	1	1	7
	Ⅲ	1	1	1	1	1	1	1	7
	Ⅲa	1	1	1	1	1	1	1	7
	不明	1	1	1	1	1	1	1	7
HB	③	1	1	1	1	1	1	1	7
HC-Ⅲ群③合計		1	1	2	1	1	1	1	9

第61表 骨製品観察一覧

調査年度	図番号	製品	種類	部位	光・硝	縦	横	厚さ	重量	観察事項	(法量単位: cm, g)	
											地区・アジツク・層遺蹟・右表(①)番号	遺蹟・右表(②)番号
第140年度調査	1	玉	エイ	椎骨	完	2	2	1.0	2.0	両縁・両面穿孔(径0.3)、外縁も丁寧に研磨。図5骨針の先端と孔が一致。	HC	T14 貝層Ⅲ群4層 ①2203
	2	鏃	サメ	歯	完	3	3	1.3	0.55	2等辺三角形の両縁と基部を削取る。幅1.0mm厚。エナメル部は光沢あり。骨髄腔も完全。先端丸味。横縁に磨痕が残る。	HC	C14 V(後期層)台5096
	3	針	イノシシ	腓骨	完	8.6	0.6	0.5	2.5	先端にへら状。研磨痕は縦位にのみ。頭部がわずかに欠損。	HC	A15 貝層V群1' ②272
	4	針	イノシシ	腓骨(骨体)	1/3	3.4	0.6	0.4	0.9	断面は1.7cm。研磨あり。頭部に丸味あり。やや明瞭。	HC	A16 貝層Ⅲ群5層 ①1943
	5	針	イノシシ	腓骨(骨体)	1/4	2.3	0.6	0.5	0.6	先端部、研磨面0.5cm、6面有り。研磨痕一縦位に明瞭。表面は光沢あり。縦位に研磨痕確認。	HC	S14 貝層Ⅲ群5層 ①2723
	6	鏃	イノシシ	四肢骨(骨体)	1/4	2.6	1.1	0.3	1.4	先端、行ち削り、尖る。磨耗光沢あり。黒色、艶が光る。	HC	A13 V(後期層)台11418
	7	鏃	クジラ	肋骨	1/4	4.8	1.2	0.9	3.5	横断面は饅頭型。先端は尖る。頭部は欠損。全体の形状は不明。部分研磨。骨組織が粗く、光沢無し。	HC	S14 貝層Ⅲ群5層 ①2227
	8	加工品	イヌ	上腕骨(骨体→遠位)	2/3	2.5	1.3	0.2	1.6	上腕骨を縦位に切り取る。管状。両端を外面から削り、丸味。	HB	③ Ⅱ 台 270
	9	加工品	イノシシ	踵骨(骨体→遠位)	2/3	3.0	1.6	1.1	5.1	黒色。幅17mm。断面研磨。丸味。磨耗5-6。	HC	112 台 12124
	10	加工品	ウミガメ	背甲板	完	7.3	5.4	0.9	29.5	板状。両縁を磨耗。上端を幅0.5cmほど削り、有段。	HB	③ A30-1 台 445



第140图·图版99 骨製品

## (5) グスク土器

グスク土器はHCで180点、HB③で147点の計327点の出土(第62表)で、その量は平安山原A遺跡(2016)の4割程度である。平面分布をみるとHCではS・T15とC16～T13の間に多く、HB③ではA5・6に特に多く、A2・B6・C6・D7に分布する。出土層をみるとHCではV層からの出土が53.9%と多く、貝層Ⅲ群では上層(1・1a・2層)で出土し、特に1層に集中する。5層から胴部片が1点得られたが、上層からの混ざり込みと思われる。HB③ではⅢa層で29点、Ⅲb層で55点得られ、土器の集中するA5・A6では接合出来る土器(第141図)もあり、グスク土器からもHB③Ⅲa・Ⅲb層がグスク時代の生活面であることが証左される。また、近接する平安山原B遺跡(2015)ではグスク土器が147点得られ、同遺跡のⅣ層上は今回報告のHB③Ⅲa・Ⅲb層とほぼ同じ時期と考えられる。平面分布でみるとHB③のⅣ層(川跡)を取り囲むように分布するようである。

今回は滑石製石鍋の模倣とされる方形把手<sup>(註1)</sup>は得られていないが、滑石を混入した土器片と滑石の加工品が2点(第147図)得られている。

器種は鍋形、甕形、壺形が確認され、鍋形は口縁と把手の形態でA～Cに細分した。底部は基本的には口縁部の分類の範疇に含まれるものであるが、形状から器形の復元出来る資料が少ないため、別に分類した。胴部については、平安山原A遺跡(2016)のグスク土器の胎土分類(第63表)を踏襲し分類を試みた(第64表)。以下、主なものを図示し、第65表に観察一覧を示した。

### 1. 口縁部・頸部

HCで21点、HB③20点で計41点出土した。器種は鍋形・甕形・壺形・甕形か壺形がある。

#### <鍋形>

鍋形は11点で、口縁部のおよび把手の形状によりA～Cに細分した。

(A) フェンサ上層式<sup>(註2)</sup>: 基本的に口縁部が内湾し、その断面が角状、丸状、舌状が得られ、瘤状突起は出土していない。

第62表 グスク土器 出土量

HCで3点、HB③で2点の計5点の出土である。

図1・2は口縁部が角をなすもので、内唇の角は特に明瞭である。器厚は0.7cm前後で貝塚時代後期土器に比べてやや厚く、均一である。両者はT16とS15で出土、胎土も他に比べて石英が多く近似し、同一個体の可能性が高い。内面をハケで調整する。図3は口縁部が内湾するもので、断面は舌状で胴上部からレンズ状に膨らむ。図4・5は胴部と底部ではあるが、滑石を混入することから

遺跡	層	部位 分類	口縁部・頸部					胴部	底部					合計		
			鍋形		甕形	壺形	甕か壺		小計	a	b	c	d		不明	小計
			A	B												
HC	V	I					0	3					0	3		
		II					0	1					0	1		
		III					0	2					0	2		
		V	2	2	4	1	4	13	79	3	1	1	5	97		
		貝層Ⅲ群	1		1			1	4	1	2		3	8		
	V	1a					0	3					0	3		
		2	1				1	3	1			1	5			
		5					0	1					0	1		
		不明					0	2				3	3	5		
		貝層Ⅳ群					0	4					0	4		
		貝層Ⅴ群					2	2	5					0	7	
不明		1		1		2	4	37	1	1	1	3	44			
HC小計		3	1	3	5	1	8	21	144	6	2	4	3	15	180	
HB③	I					0	1						0	1		
	IIb					0	2						0	2		
	IIc				1		1	7		1			1	9		
	III	1		4		3	8	22		1			1	31		
	IIIa	1				1	2	25	1	1			2	29		
	IIIb		1	1	4		1	7	42	1			5	6	55	
	IIIc					1	1	10					0	11		
	III d						0	1					0	1		
	IV						0	1					0	1		
	不明						1	1	6					0	7	
HB③小計		2	1	1	9	1	6	20	117	1	2	2	0	5	10	147
HC+HB③合計		5	2	4	14	2	14	41	261	7	4	4	8	25	327	

ここで扱う。前者は胴部で器厚0.7cmで滑石の混入はわずかであるが器面調整は他より丁寧である。後者は後述する底部分類のbに属するもので、特に滑石の混入が多い。前者がHB③R19Ⅲa層、後者はHB③T10Ⅲ層の出土である。

(B) 鐏：把手を圍繞するいわゆる羽釜タイプである。HCとHB③で各々1点出土した。

図6は口縁部で鐏縁幅が2.0cmを測り、断面が三角形を呈する。口縁部から鐏までが3.8cmを測り、周辺遺跡と比較すると平安山原A遺跡では2cm、後兼久原遺跡(2004)では3cmを測ることから、本品は長めである。口縁の形状は角をなし、内唇に膨らむ。胎土は他と異なり、砂質で石英が主体であるが中に円礫も含む。器面は混和材を引きずることからヘラ削りで調整され、搬入品の可能性が高い。HB③T5Ⅲb層の出土。

図7は胴部で、鐏幅が1.8cmを測り、前者より若干小さい。鐏形の上部は緩やかに膨らみ、下部は指痕が残り、水平である。他のグスク系土器に比べて混和材の量が少ない。HCT11とHB③近い所で出土。

(C) 横耳：胴上部に把手を2個配するもので、HCで3点、HB③で1点の計4点出土した。そのうち、器形の判るものが2点得られた。その形状は鍋形を呈する。把手は平面形が①方形、②楕円、③隅丸方形、④半円形があり、横断面は舌状と丸状、その方向は上向、水平がある。

①方形：図8は把手のみで破損部から復元すると平面形が方形、上向きである。胎土は図7と同じく砂質で混和材の量も少ない。HCD16の出土。

②楕円：図9は唯一このタイプで器形が復元できるもので、口径21.8cmを測り、内湾するもので、その断面は鍋Aと同じく角をなす。口縁下4.8cmに把手を付ける。把手は平面形は楕円、上向きである。

③隅丸方形：図10は把手のみで、平面形が隅丸方形で、その向きは水平で、混和材に赤色粒を多く含む。横耳の大きさ4.5×4.2cmを測る。やや小降りである。HC貝層Ⅲ群1層の出土。

④半円形：図11・12は胎土から同一個体と考えられるものである。口縁は内湾し、口径は25.0cmを測る。把手は半円形で、やや上向きである。胎土は他と異なり、石英や板状の砂の粗粒を多量に混入する。破損面から本来の胴部は0.9cmと他に比べて厚く、把手は上下に粘土を貼付している。グスク土器の出土量の多いHB③A5のⅢbとⅢcの出土である。

#### <甕形>

口縁部が有頸をなすもので、口径の大きいものを甕形し、頸部でも甕形と判断できるもの(図19～21)もここに含めた。頸部の屈曲が「く」字状(図15～19)と「L」字状(図21・22)がある。HCで5点、HB③で9点の出土である。

「く」字状：頸長が2.5cm前後のもの(図15・16)、2.2cm(図17)、1.6cm(図18)があり、2.5cm前後のものは口唇断面が角を呈し、それ以外は丸舌状を呈する。いずれも内面の口縁から頸部に厚くなる傾向が見られる。図17は口径16.8cmで、口縁部の内面は粘土を貼り付け、厚くする。HB③06Ⅱc層の出土。図19は口縁を欠損するが、頸長21.2cmを測る。頸部は他に比べて厚く、胎土に鉱物を多量混入し、器面調整も丁寧で、他の土器とは異なり、精練されている。HB③E4Ⅲ層の出土。

「L」字状：頸長が2.5cm(図22)を測るもので、頸部の器厚は胴部とほぼ同じである。HCⅤ層の出土。図21は口縁部を欠損するが、形状からここに分類した。混和材に鉱物を混入する。HB③Ⅲb層の出土。

#### <壺形>

口径が10cm前後を壺形とした。HC・HB③で各々1点の出土である。図23は口径9.1cm、頸部は「く」字状に湾曲、図24は口径11.5cm、外反するものである。前者がHB③Ⅲc層、後者がHCⅤ層の出土。

## <甕か壺の頸部>

「く」状に屈曲するもので甕か壺の判断できない頸部をここにまとめた。HCで8点、HB③で6点の計14点の出土である。前述した甕と壺をみると頸部の厚さが厚いもの(頸>胴)とほぼ同じ厚さ(頸=胴)がある。頸=胴は図25で器厚も0.4cmと薄く、器色などから図36と酷似する。前者がHCF15、後者D12の出土で、他に数点出土。図27は器厚が前者に比べてやや厚く、頸部もさらに厚くなることから甕形の可能性がある。図26は頸部に調整の痕が明瞭に残る。石英や赤色粒を混入する。

## 2. 底部

HCで15点、HB③で10点の計25点の出土で、そのうち15点を図示した。底厚は平均0.7cmで胴部と同じかあるいは薄いのが大半で、底厚は貝塚時代後期土器に比べて薄い。器形は鍋形が主体となるため、底径は大きくなる傾向がある。底面からの立ち上がりの形状を主な分類基準とし、丸底(a)、丸味(b)、直底(c)、上げ底(d)に分けられる。

**丸底(a)：**HB③で1点出土した。図28は丸底で、残存胴径7.8cmを測る。内外面は明灰褐色を呈し、白色粒を多量混入する。胎土はグスク土器に酷似するが、形状は貝塚時代後期の壺に類似するものである。HB③QSⅢa層の出土。

**立ち上がり丸味(b)：**平底で底面からの立ち上がりは丸味を帯び、胴部が張るもので、鍋形Aの底部と考えられる。HCで6点、HB③で2点、計8点の出土で底部の中で多い。器厚は薄手と厚手に分けられ、**薄手**は図29と図30で底面のみであるが、前者は底径が12.4cmと推定され、後者は底径10.5cmを測る。いずれも白色粒が主体で、前者は内面にアバタが見られる。**厚手**は胴部より底面が薄くなる。図31・図32は胴部が底面より厚く、いずれも砂質を呈する。図33と図34は胴部と底面がほぼ同じ厚さで底径は図32が10.5cm、図34が13.0cmと大きく異なる。胎土はいずれも泥質であるが、図33が石英・赤色粒の混入が目立ち、図34は白色粒が主に含まれる。

**直底(c)：**底面からの立ち上がりが直状、角の部分が厚い。HC・HB③各々2点の出土である。薄手と厚手がある。**薄手**は図35と図36で前者は底径9.3cmを測る。外面はいずれも黒褐色を呈し、胎土も酷似する。HB③SK32からの出土。図25の頸部と胎土が酷似する。**厚手**は図38で胴部より底面が厚く、底径は11.0cmを測る。外面はヘラケズリが明瞭である。仕上がりは雑で、甕の底部の可能性が想定される。

**上げ底(d)：**HCで4点出土した。上げ底気味で、底の立ち上がりが角を呈するものと丸味をなすものがある。胴部より底厚が薄くなる傾向が見られる。図39は底径10.8cmを測り、底面はやや上がり、白色粒が多いが、他に石英や黒粒などを含む。積み痕が確認される。HCA16の出土。図40は底径7.4cmを測る。立ち上がりの角が明瞭である。図41は底径15.3cmを測り、底面からの立ち上がりは不安定で、ヘラでケズリ段をなす。HC貝層Ⅲ群(T15)の出土である。混和材に巻き貝(カワニナ)が含まれている。

## 2. 胴部および胎土分類

平安山原A遺跡(2016)分類に従い、口縁部・底部・胴部の分類を行い、第b表にまとめた。

胴部はHC144点、HB③117点の計261点の出土であるが小破片が多い。

胴部の復元できる図13・14は胴径が26.0cmと27.0cmで図9や図11はとほぼ同じ大きさであるこ

第63表 グスク土器胎土分類 (平A2016一部改変)

胎土	A:砂質 B:砂泥質 C:泥質
混和材	イ:滑石混入 ロ:黒粒主体 ハ:白色粒主体、石英・赤粒 ニ:赤粒主体、白・砂粒 ホ:砂粒 ヘ:石英主体に赤・黒・砂粒 ト:灰色粒を主体

混和材:白色粒(貝・石灰質)のこ

とから鍋形の胴部が想定される。いずれも砂質で、前者はグスク土器の最も出土量の多いHB③A5 III b+III c層でここからは図41も得られている。後者は厚手でHCT15 V層の出土である。そのうち、第64表に部位・胎土別の集計を示した。口縁部・胴部・底部を含めてみると泥質(C)が236点(72.2%)、砂質(A)・砂泥質(B)が各々36点(11.0%)を占め、泥質が主体である。また、混和材を見るといずれのタイプも白色粒(ハ)が主体を示すが砂泥質(B)・泥質(C)が75%以上を示すのに対し、砂質(A)ではその割合は47.2%と低い。砂質(A)の混和材をみると石英主体(ヘ)、赤色粒主体(ニ)の割合が他に比べて高く、その器形をみると図6の罫縁や図10の把手などがあげられる。平安山原A遺跡の胎土分類と比較すると、同じように白色粒主体であるが、平安山原A遺跡が84.4%、本遺跡が69.7%と割合が低い。白色粒主体を地区別にみるとHB③で68.7%、HCで70.6%と若干の差が認められる。他に混和材についてみるとHB③では他に滑石混入(イ)が得られ、HCでは赤色粒主体(ニ)12.8%、石英主体(ヘ)6.7%となる。白色粒の組成は石灰岩粒や貝殻粒などサンゴ礁や琉球石灰岩に由来の混和材であるのに対し、滑石は滑石製石鍋を砕いて入れたもの、石英や赤色粒なども在地の可能性が考えられる。HB③では図6・11・16は白色粒を含まないもの、滑石混入するもの(図4・5)が見られる。俯瞰してみるとHB③のA5・6とHCのT15・16では出土量が多く、接合率も高いことと胎土に違いを考慮すると、HB③とHC間に若干の時期差の可能性が想定される。

第64表 グスク土器胎土別 出土量

部位	分類	A=砂質					B=砂泥質					C=泥質					不明				合計		
		ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	ハ	ニ	ホ	ヘ	不明	イ	ハ	ニ	ホ	ヘ	不明	ニ	ハ		ホ	不明
口縁部	HC			1				1					8	2	6	1						1	21
	HB③	1	1		1	4							2	8	1		2						20
	小計	1	1	1	1	4	1	0	0	1	0	0	2	16	1	2	8	1	0	0	0	1	41
底部	HC	1	1										10			2						1	15
	HB③		4	1									5										10
	小計	1	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	15	0	0	2	0	0	0	0	0	1	25
胴部	HC			3	1	1		14	1	3	1		94	18	3	2						3	144
	HB③		11	1		3		14				2	4	54				14	1	4	1	8	117
	小計	0	11	4	1	4	0	28	1	3	1	2	4	148	18	3	2	14	1	4	1	11	261
HC合計		1	1	4	1	1	1	14	1	4	1	0	0	112	18	5	10	1	0	0	0	5	180
HB③合計		1	16	2	1	7	0	14	0	0	0	2	6	67	1	0	2	14	1	4	1	8	147
総合計		2	17	6	2	8	1	28	1	4	1	2	6	179	19	5	12	15	1	4	1	13	327
分類別計		36					36					236					19				327		

註1: 平安山原A遺跡(2016)、グスク土器、鍋aタイプ

註2: 糸満市フェンスカ城貝塚(1968)の上層で出土した土器で内湾口縁で外縁に4個の瘤状突起を配するもので、1978年恩納村熱田貝塚で方形の瘤を有する滑石製石鍋(1979)が発見され、滑石製石鍋横敷土器とも呼ばれている。



第65表-1 グラス土器観察一覧

器種	器種	部位	形状・特徴	径 (cm)	新土分類記号	灰成含量	白色系	赤石系	黒色系	内面着色	その他	焼成	器色 外面・内面	器調 外面・内面	遺跡・プラン・層 遺跡・層(7分)・番号
第112図・ 図版100	1	A	口 内流, 角, 器厚(0.75cm).	-	C<sup>ハ</sup>	中粒 △	△	△					外-暗茶褐色 内-暗茶褐色	内外-ヘラナデ	HC T16 V(後期層) 3132
	2	A	口 内流, 角, 器厚(0.7cm).	口径 29.2	C<sup>ハ</sup>	中粒 △	△	△					外-暗赤褐色 内-暗赤褐色	内-ハケ(横)	HC S15 貝層群I2 台10560
	3	A	口 内流, 舌状, レンズ状に膨らむ, 器厚(0.9cm).	-	C<sup>ハ</sup>	細粒 ◎	○	△			灰<sup>ハ</sup>		外-灰~暗褐色 内-暗褐色	内外-コビナデ	HC C16 V(後期層) 32259
	4	A	胴 均一, 滑石混入, 器厚(0.7~0.8cm).	-	C<sup>イ</sup>	細粒 ◎					滑石 △		外-黄~暗褐色 内-黄~暗褐色	内外-ナデ	HC<sup>D</sup> R19 IIIa 台187
	5	A	底 直, 滑石混入, 器厚(0.8cm), 底厚(0.9cm).	-	C<sup>イ</sup>	中粒 ◎							外-暗灰色 内-暗灰色	内外-ナデ	HC<sup>D</sup> T10 III(12) 台1036
	6	B	口 内流, 角, 唇縁幅(2.0cm), 三角 形, 水平, 脚入込み。	-	A<sup>ハ</sup>	粗・細粒 ◎	△				円縁 △		外-内-暗褐色 内-暗灰色	内外-ヘラナデ	HC<sup>D</sup> T5 III(5) 32044
	7	B	胴 腰(1.8cm), 三角形, 水平, 器厚(0.85cm).	-	A3<sup>ハ</sup>	細粒 △	△	△					外-赤褐色 内-灰褐色	外-スビナデ	HC T11 台 10622, 10623
	8	C	胴 平面・方形(幅8.5×横5.5×厚 1.5cm), 上向, 器厚(0.9~1.1cm).	-	A3<sup>ハ</sup>	細粒 △	△	△					外-内-赤褐色 中-灰褐色	把手・指指調	HC D16 V(後期層) 3961
	9	C	口 内流, 角, 平面・楕円, 幅4.7cm, 上 向, 器厚(0.7cm).	口径 21.8	C<sup>ハ</sup>	中粒 ◎	△	△					外-暗褐色 内-暗褐色	内-ヘラナデ	HC T16 V(後期層) 31408
	10	C	胴 平面・圓丸, 幅5.0cm, 水平, 器厚(1.1cm).	-	A<sup>ハ</sup>	中粒 △	△	○	△				外-褐色 内-褐色	内-ヘラナデ	HC T15 貝層群I 32387
	11	C	口 内流, 丸, 器厚(0.82cm).	口径 25.0	A<sup>ハ</sup>	細粒 ◎	○				横状 ○		外-明褐色 内-明褐色	外-口<sup>ヘラ</sup>ナデ 胴<sup>ヘラ</sup>クスツ 内-ヘラナデ	HC<sup>D</sup> A5 III(7) 台836
第113図・ 図版101	12	C	胴 1412と同一形状, 平面・円, 幅 5.8cm, 水平, 脚上縁和材内湾り少, 器厚(0.82cm).	-	A<sup>ハ</sup>	細粒 ◎	△	○			横状 ○		外-黄~暗褐色 内-黄~暗褐色 中-暗灰色	内外-コビナデ	HC<sup>D</sup> A5 III(5) 32083
	13	-	胴 均一, 器面はけいりとの白転露出, 器厚(0.62cm).	胴径 26.0	A<sup>ハ</sup>	細粒 ◎	○	△			A<sup>イ</sup>△		外-褐色 内-褐色	外-ヘラ<sup>クスツ</sup>	HC<sup>D</sup> A6 III(5) A5 III(6) 台450, 836
	14	-	胴 胴のみ, 器面はけいり, 器厚(0.84cm).	胴径 27.0	A<sup>ハ</sup>	中粒 ◎	△	△					外-内-褐色 中-明灰褐色	外-ヘラ 内-コビ	HC T15 V(後期層) 31377
	15	口	外反, 角, 「C」字状, 脚長2.7cm, 厚手, 頂部で0.75cm厚い, 湾曲 による, 器厚(0.55cm).	口径 20.4	C<sup>ハ</sup>	細粒 (不揃)	△	△	△	○			外-暗褐色 内-暗褐色	内外-ヘラナデ	HC<sup>D</sup> E5 III(9) 3227
	16	口	外反, 角, 「C」字状, 脚長2.5cm, 器厚(0.7cm).	-	C<sup>ハ</sup>	中粒 ◎	△					△	外-褐色 内-褐色	内外-ヘラナデ (横)	HC<sup>D</sup> D3 III(8~11) 台1023
	17	口	外反, 丸, 「C」字状, 脚長2.2cm, 厚手, 器厚(0.5~0.7cm).	口径 16.8	C<sup>ハ</sup>	中粒 △	△	○					外-暗赤褐色 内-明褐色	外-ヘラナデ(丁) 内-ヘラ(横)	HC<sup>D</sup> C6 III(8) 石列 群 台485
	18	口	外反, 舌状, 「C」字状, 長1.6cm, 脚厚0.8cm, 器厚(0.55cm).	-	C<sup>ハ</sup>	細粒 ◎		△			A<sup>イ</sup>△		外-明灰褐色	外-ヘラナデ 内-ヘラ<sup>クスツ</sup>	HC<sup>D</sup> A7 III(5) 台366
	19	口	外反, 「C」字状, 器厚(0.6cm).	胴径 21.2	A<sup>ハ</sup>	細粒 ◎	△	○			脚石 ◎		外-赤褐色 内-褐色	内外-ナデ	HC<sup>D</sup> F4 III(8~11) 台571
	20	胴	直状, 「L」字状, 胴>脚, 器厚(0.7cm).	-	C<sup>ハ</sup>	細粒 ◎	○	△					外-暗茶褐色 内-明褐色	外-ナデ 内-コビ	HC A15 V(後期層) 台9345
	21	胴	直状, 「L」字状, 胴=脚, 器厚(0.8cm).	-	A<sup>ハ</sup>	中粒 ◎	○	○	○	○			外-明褐色 内-明褐色	外-ハケ 内-コビ	HC<sup>D</sup> A6 III(5) 3149
	22	口	直状, 丸, 「L」字状, 脚長2.5cm, 胴=脚, 器厚(0.5cm).	口径 19.0	C<sup>ハ</sup>	中粒 ◎	○						外-暗赤褐色 内-暗赤褐色	外-スビナデ 内-ハケ	HC S21 V(後期層) 32092
23	口	やや外反, 丸, 脚長1.6cm, 器厚 0.75cm, 裏和材は不揃, 器厚 (0.65cm).	口径 9.1	C<sup>ハ</sup>	細粒 ◎	○				A<sup>イ</sup>△		外-赤褐色 内-褐色	外-スビ 内-ハケ	HC<sup>D</sup> T9 III(7) 台832	
24	口	やや外反, 舌状, 脚長2.2cm, 器厚 (0.6cm).	口径 11.5	C<sup>ハ</sup>	細粒 ◎	○	○					外-淡褐色 内-淡褐色	外-ナデ 内-ハケ(横)	HC C16 V(後期層) 32740	
25	胴	厚手, 彎手, 胴=脚, 器厚 (0.4cm).	-	C<sup>ハ</sup>	細粒 ◎	△	△				△	外-暗灰~赤褐色 内-褐色	外-コビ 内-ハケ(横)	HC F15 V(後期層) 台9945	
26	胴	胴<sup>ハ</sup>, 器厚(0.6cm).	-	C<sup>ハ</sup>	中粒 ◎	○	△					外-暗赤褐色 内-暗赤褐色	外-ハケ(横) 内-ナデ(横)	HC S32 貝層V群 台11278	
27	胴	胴<sup>ハ</sup>, 器厚(0.5cm).	-	C<sup>ハ</sup>	細粒 ◎	○						外-明灰色 内-明灰色	外-ハケ 内-コビ	HC E17 F710	
28	a	底 底小端が丸底, 胴部にやや膨らむ, 底厚(0.4cm).	胴径 7.8	C<sup>ハ</sup>	細粒 ◎	◎						外-明灰褐色 内-明灰褐色	内外-コビ	HC<sup>D</sup> Q8 IIIa 台100	
29	b	厚手, 胴一底, 立ち上がり緩やか, 若干, 底は立ち上がり, 底厚(0.7cm), A<sup>イ</sup>△内面に多。	底径 12.4	C<sup>ハ</sup>	細粒 ◎	○	△			A<sup>イ</sup>△		外-暗赤褐色 内-暗赤褐色	内外-コビ	HC D15 V(後期層) 台9824	
30	b	厚手, 平ら, 丸底に立ち, 胴一底, A<sup>イ</sup>△, 底厚(0.8cm).	底径 10.5	C<sup>ハ</sup>	粗・細粒 ◎	△	△					外-暗~茶褐色 内-灰褐色	内外-コビ	HC D16 台10455	
31	b	立ち上がり丸, 胴>底, 底厚(0.8cm), 器厚(1.0cm).	底径 13.8	A<sup>ハ</sup>	細粒 ◎	○	○					外-明褐色 内-明褐色	内外-コビ(丁)	HC<sup>D</sup> A6 III(5) 台448	

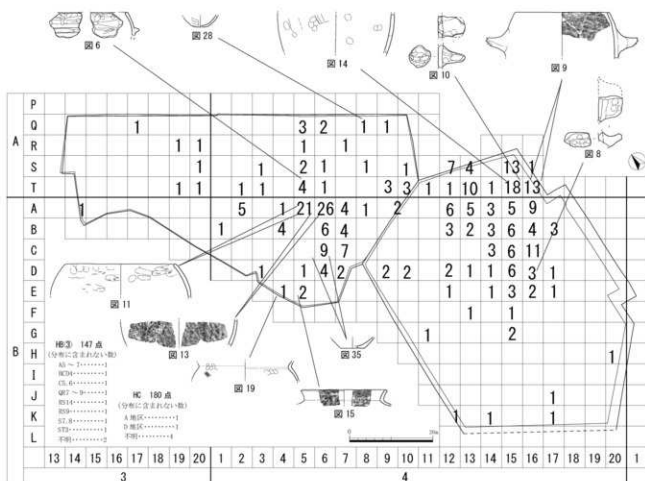
◎:多い ○:普通 △:少ない △:僅少

第IV章  
3

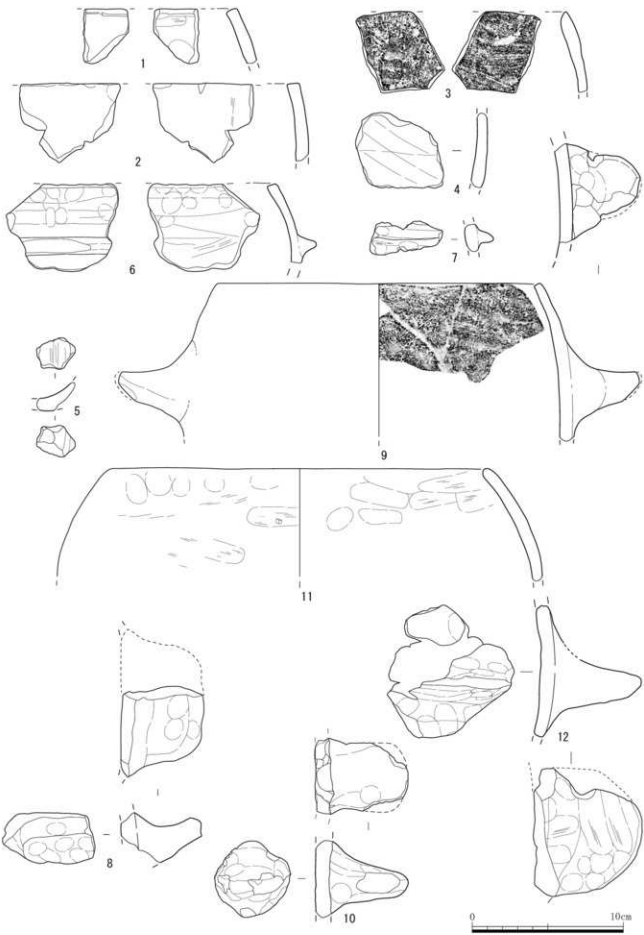
第65表-2 グスク土器観察一覽

原図 図版	図 番 号	器 種	部 位	形状・特徴	径 (cm)	新土 分類 記号	灰成 含量	白色 石灰	赤色 土	黒色 土	赤・黒 混在 土	砂 粒	その他	施 成	器色 外面・内面	器調 外面・内面	遺跡・プラン・層 遺跡・台帳(7/1)番号	
第 141 図 ・ 図 版 別	32	b	底	立ち上がり丸。胴<底。 底厚(0.7cm), 器厚(0.9cm)。	直径 10.5	A <sup>+</sup>	中・細粒 ◎	○	△	○				良	外内 暗茶褐色 赤褐色	内外ハク(横)	HC 115 貝層群 台10734	
	33	b	底	底一箇状。胴<底。 底厚(0.7cm), 器厚(0.8cm)。	直径 7.2	C <sup>+</sup>	中粒 ◎	△	○	△					良	外 赤褐色 内 褐色	内外ニビ	HC 115 V(後期層) 3425
	34	b	底	上り底。胴<底。 底厚(0.7cm), 器厚(0.9cm)。	直径 13.0	C <sup>+</sup>	細・中粒 ◎	○	△				ア・イ	良	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	外 胴(横)	HC 115 V(後期層) 3855	
	35	c	底	薄手。底一箇。胴<底。 底厚(0.6cm), 器厚(0.5cm)。	直径 9.3	C <sup>+</sup>	粗粒 ○	△		○			ア・イ	良	外 黒褐色 内 灰~暗褐色	内外ニビ	HC115 C5.6 Bc SR32 台579	
	36	c	底	薄手。底一箇。胴<底。 底厚(0.6cm), 器厚(0.5cm)。	-	C <sup>+</sup>	粗粒 ○	○	○				ア・イ △	良	外 暗灰褐色 内 茶~暗褐色	不明	HC D12 台10434	
	37	c	底	立ち上がり丸。胴<底。 底厚(0.6cm), 器厚(0.7cm)。	直径 9.1	C <sup>+</sup>	粗・中粒 ◎	○	△				ア・イ △	良	外 暗灰褐色 内 明褐色	外へラナダ(折) 内へラナダ	HC115 C7 群(10-11) 台697	
	38	c	底	胴<底。 底厚(1.1cm), 器厚(0.8cm)。	直径 11.0	C <sup>+</sup>	粗粒 ○	○	△				ア・イ	良	外 黒~褐色 内 淡褐色	内外へラケツク	HC C16 V(後期層) 32761	
	39	d	底	立ち上がり丸。胴<底。 底厚(0.7cm), 器厚(0.7cm)。	直径 10.8	C <sup>+</sup>	粗粒 ○	○	△	△			黒 △	良	外 暗褐色 内 暗褐色	外 胴(横) 内 ニビ	HC A16 F198	
	40	d	底	やや上り底。胴<底。底面不安 定。外面白色、内面中は白粒見ら れなし。底厚<底厚(0.6cm)。	直径 7.4	A <sup>+</sup>	中~粗 粒 ◎	○	○					ア・イ 良	外 黄~茶褐色	外 胴(横) 内 ニビ(丁)	HC 113 V(後期層) 32389	
	41	d	底	上り底。厚手。胴<底。底面不安 定。角はへラケツクで有段。底厚 (0.8cm), 器厚(0.6cm)。	直径 15.3	C <sup>+</sup>	粗粒 ○	○	△					ア・イ 良	外 淡灰色 内 暗褐色	外 胴(横)明瞭	HC T15.515 貝層群 群13150.台11097	

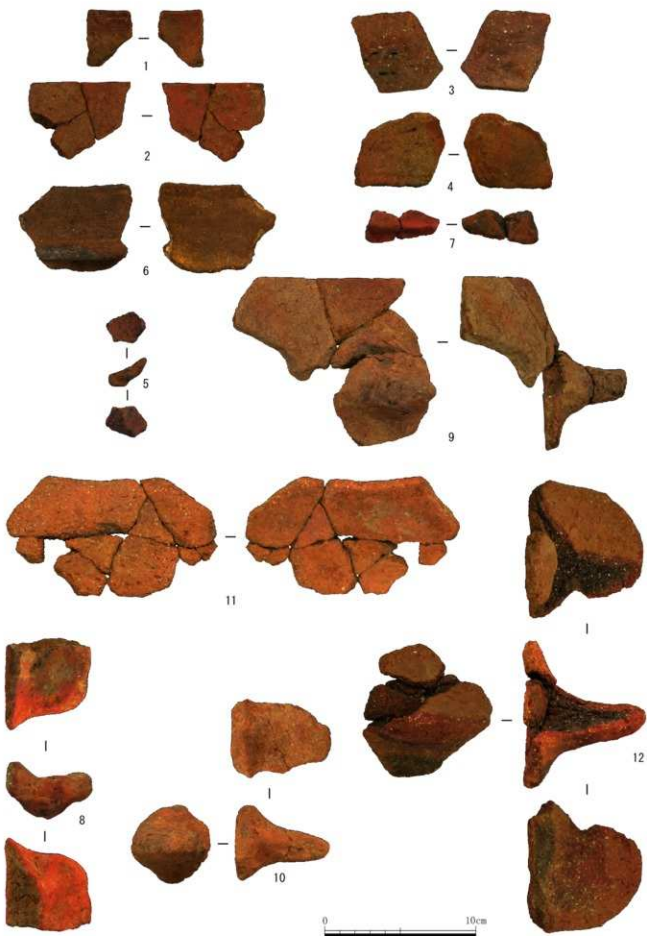
◎:多い ○:普通 △:少ない △:最少



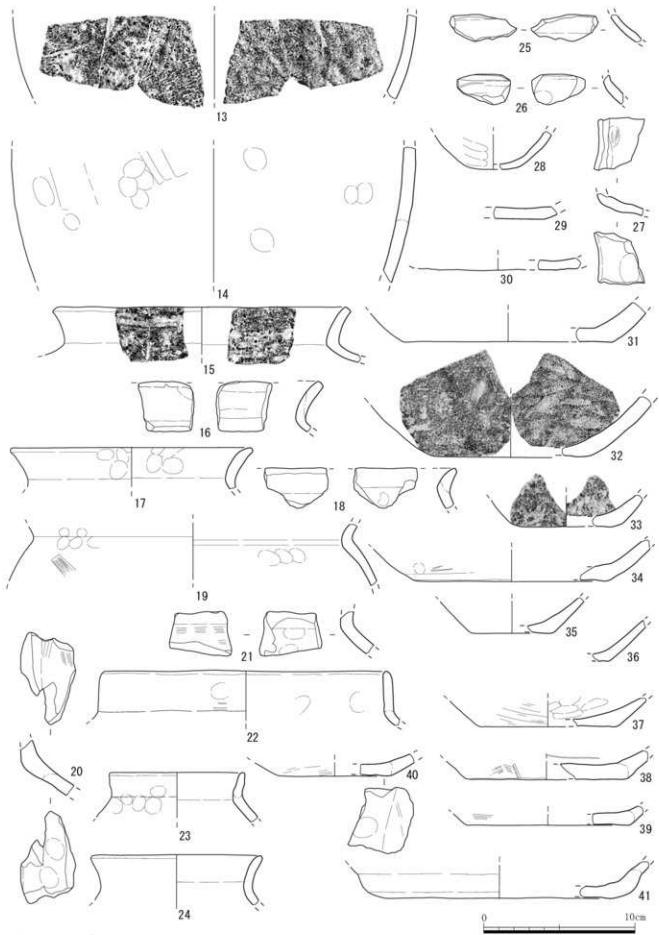
第141図 グスク土器 平面分布



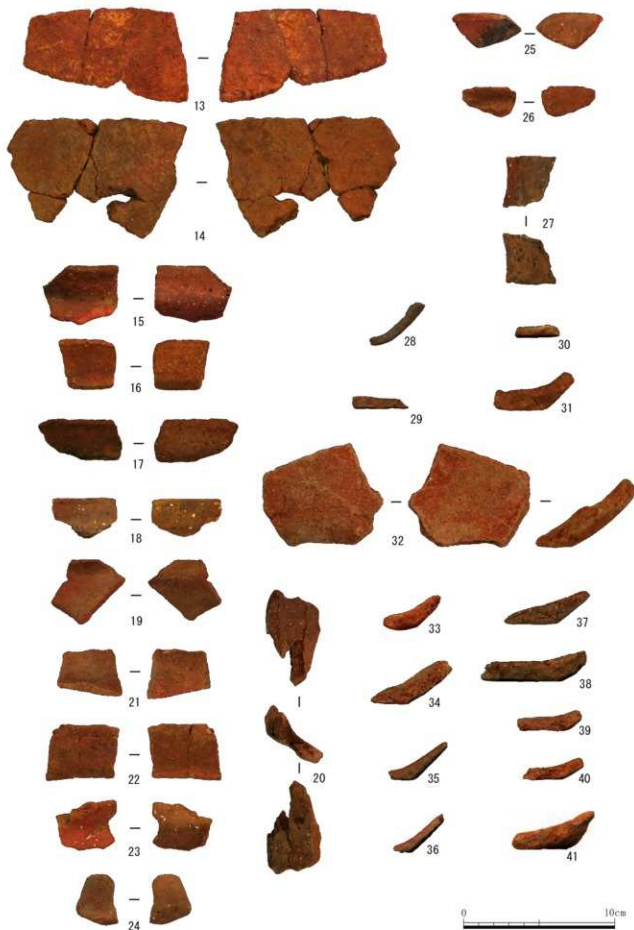
第142図 グスク土器1



図版 100 グセク土器 1



第 143 図 ガスク土器 2



図版 101 ガスク土器 2

## (6) カムイヤキ

カムイヤキは総数23点が得られ、口縁部3点、胴部20点で底部は出土していない。層位別の出土量はHCがV層に多く、HB③はⅢc・Ⅲd・Ⅲa層に多い(第66表)。確認できる器種は総て壺で、いずれも小型で薄手なものである。素地は細かい白色細粒を混入し、焼成は良好である。口縁形態から判断すると新里分類のⅣ式aに属するものと考えられ、生産年代は概ね13cに位置づけられる。外面に平行状叩き痕、綾杉状叩き痕があり内面に平行圧痕、格子圧痕、放射状圧痕などがみられる。口縁部と頸部、肩部の外面と内面の一部はナデ仕上げにより叩き痕が消されている。文様は肩部に二条ないし三条の波状文を巡らすもと無文のものがある。器面調整(叩き、圧痕、ナデ、ロクロ、ヘラ削り)は外面と内面の組み合わせで以下の6種に分類できた。

A類：外面に平行状叩き痕や綾杉状叩き痕、内面に平行状圧痕や溝状のロクロ痕がある。

B類：外面に平行状叩き痕や綾杉状叩き痕、内面に格子状圧痕や溝状のロクロ痕がある。

C類：外面に平行状叩き痕や綾杉状叩き痕、内面に放射状圧痕と溝状のロクロ痕がある。

D類：外面は叩きの痕跡を僅かに残すがナデ調整が勝り、内面に溝状のロクロ痕がある。

E類：外面と内面をナデ調整するが一部に内面の圧痕が残る。

F類：外面と内面をナデ調整するが一部に内面の圧痕が残る。外面に波状文などの文様が描かれる。

外体面に見られる綾杉状の叩き痕は、平行状叩き痕が重なることにより生じるとも考えられるがここでは平行状叩き痕と綾杉状叩き痕は別に扱った。以下に主なものを第145・146図、第102・103図版に観察を第67表に示した。

### 1. 口縁部

口縁部の形態は三つに分かれる。図1は口縁が頸部から「く」字状に屈曲させ外側に開きながら引き上げる。口唇は丸く整えている。頸部の内面に直交する平行圧痕が認められる。外面は叩き痕を残さず、肩部外面に三条の波文を巡らしている。図3は口縁が頸部から外に開き、口唇の先端を内側上方に擠まみ上げ尖がらせている。無文である。図1と3は新里分類Ⅳ式aのバリエーションに含まれると考えられる。生産年代は概ね13cに位置づけられる。図4は頸部から外側に開き、先端で外に折り返す。口縁は断面形態がややアーモンド形状の玉縁を示す。頸部内面にナデ擦痕が認められる。口縁部の器面調整はF類とE類がみられF類が1点、E類は2点であった。

### 2. 胴部

胴部の器面調整はA類、B類、C類、D類、E類、F類の6種があり、D類が6点、C類が5点、A類が4点、B類・F類が各2点、E類が1点の順であった。

図2は横位の波状文を肩部から胴部にかけて巡らす胴部資料である。図1と直接の接合はできないが同一個体の可能性が高い。

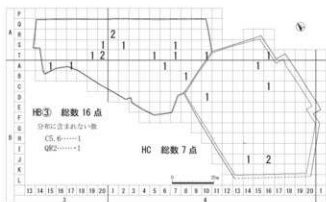
#### <註文献>

新里亮人 2003 「琉球列島における窯業生産の成立と発展」『考古学研究』49-1 考古学研究会

新里亮人 2007 「カムイヤキとカムイヤキ古窯跡群」特集古代・中世の日本と奄美・沖縄諸島『東アジアの古代130号』

第66表 カムイヤキ 出土量

遺跡	層	遺構	部類 部位 分類	意						合計		
				口縁部		胴部						
				E	F	A	B	C	D		E	F
HC	V	後期層	一			1	2	2			5	
			HC小計	0	0	1	0	3	3	0	0	7
HB ③	IIc	SK032	III					1			1	
			IIIa	1				1	1		3	
			IIIb					1			1	
			IIIc	1	1	2	1				1	6
			IIId			1	1	1			1	4
			HB③小計	2	1	3	2	2	3	1	2	16
			HC+HB③合計	2	1	4	2	5	6	1	2	23
部位別計				3				20				

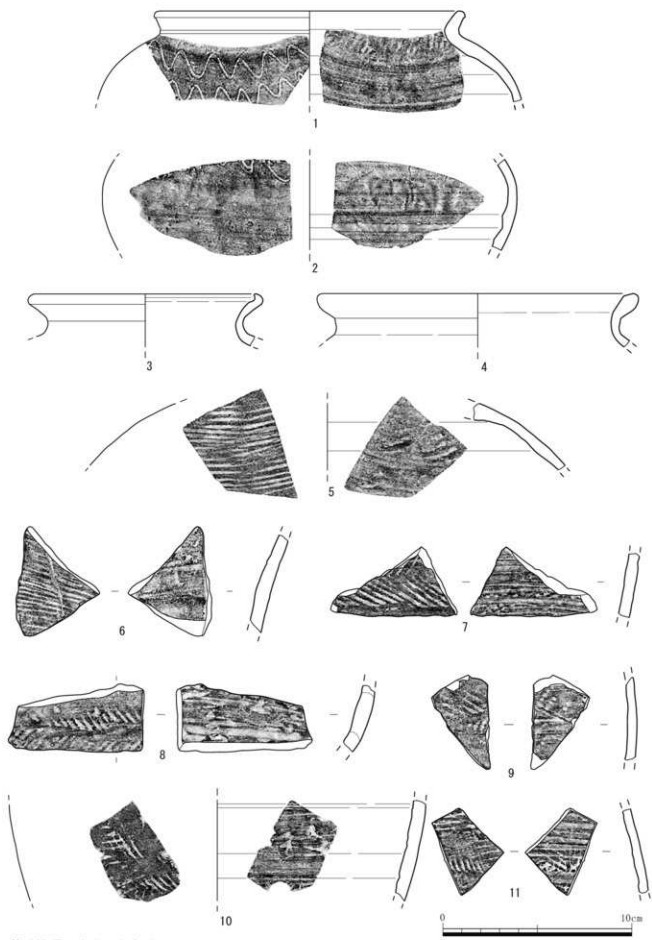


第144図 カムイヤキ 平面分布

第67表 カムイヤキ 観察一覧

第何 図版	図 番号	可 分類	部位	口径 (cm)	厚 (mm)	器形・文様	素地 質・焼成・混和材	顔色	遺跡・グロット・層 遺構・台帳(ドット)番号
第145 図・ 図版 102	1	F類	口縁部	15.8	5~6	胴部に丸味を持ち胴部の最大径は胴上部に来ることが予想される。口縁は胴部から「く」字状に屈曲させ外側に開きながら上に引き上げる。胴部外面に三条の波状文を添らしている。新里分類IV式A	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗灰 裏:暗灰	HB③ S2 IIIc 台665 HB③ R1 III(12) 台1445
			胴部	-	6	胴部に丸味を持つ。外面に波状文、図1と同一個体の可能性が高い。	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗茶 裏:暗灰	HB③ T19 IIIc 台602
	3	E類	口縁部	12.6	5	口縁は胴部から「く」字状に屈曲させ外側に一旦開き先端を上面や内側に引き上げる先端が平。口縁は無文。新里分類IV式A	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗灰 裏:暗灰	HB③ T7 IIIa 台290
			口縁部	16.8	5	口縁は胴部から「く」字状に屈曲させ外側にやや開きながら外に折り返す。口縁は断面形態がアーモンド形状の玉縁で無文である。	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗灰 裏:暗灰	HB③ A17 IIIc 台475
	5	A類	胴部	-	4~8	胴部にやや丸味を持つ。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:灰 裏:灰	HB③ S7 III d(14) 台1782
			胴部	-	7	やや開く。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:灰 裏:灰	HC J16 V(後期層) F1635
	7	B類	胴部	-	6	やや開く。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗茶 裏:暗茶	HB③ T5 III d(14) 台1456
	8	C類	胴部	-	9	丸味のある胴部。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗灰 裏:暗灰	HB③ A6 III b(5) 台365
	胴部		-	5	胴部は直に立つ。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:淡灰 裏:淡灰	HC D10 V(後期層) F706	
	胴部		-	6~7	胴部はやや開き直に立つ。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:明灰 裏:暗灰	HB③ BHC III a(上) 台29	
	11	D類	胴部	-	3	胴部はなで肩。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:淡灰 裏:暗灰	HC J16 V(後期層) 台9994
12	胴部		-	3	逆「八」の字状に外に開き胴上部で丸味を持ち内による。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗灰 裏:暗灰	HB③ S20 III d(14) F1259 HB③ T18 III d(14) 台1649	
13			胴部	-	5	胴部はなで肩。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗灰 裏:暗灰	HC T16 F201
14	胴部		-	5	逆「八」の字状に外に開く胴部。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗茶 裏:暗灰	HB③ A15 III(12) 台473	
15	胴部		-	5	胴部は直に立つ。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗灰 裏:暗灰	HC A15 V(後期層) F1751	
16	胴部	-	5~6	胴部は直に立つ。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗灰 裏:暗灰	HC C16 V(後期層) F1178		

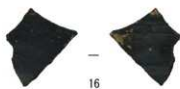
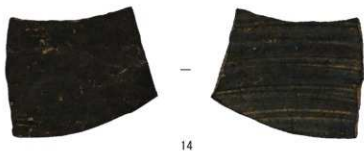
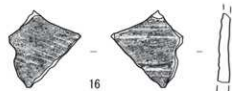
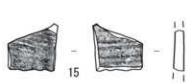
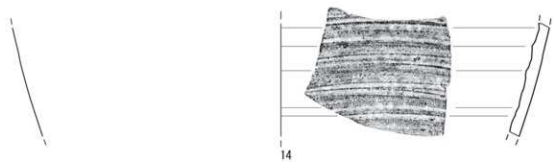
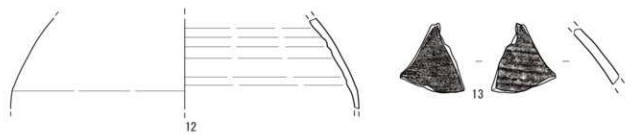




第 145 図 カムイヤキ 1



図版 102 カムイヤキ 1



第146図・図版103 カムイヤキ2

## (7) 滑石製品

2点の資料が得られた。図1は有孔製品で、孔径は3mmほどである。非常に小型で薄い。孔がほぼ中央に穿たれていることから、直角台形を呈するこの平面形状には何らかの意味があるのであろう。片面に煤状炭化物が付着しており、これが側面に及んでいないことから、使用に際して煤が付着する石鍋のような器種を再加工したものと考えられる。第二浜堤砂層（第四章第1節「層序」参照）から出土しており、第二浜堤が石鍋流通期までに形成されていたことの傍証となる。図2は僅かに青緑がかっており、厳密には結晶片岩に分類されるものと思われる。石鍋の素材となる滑石は、長崎県西彼杵半島の「西彼杵型滑石鉱床」を産地とする。これは結晶片岩を主とする広域変成岩類に貫入するようにして蛇紋岩が半島諸所に分布し、その周縁に滑石鉱床が発達したものである。つまり、滑石を産する地域では蛇紋岩や結晶片岩も同様に産するのであり、各々の中間タイプのような岩石も存在する。本資料は「質の悪い滑石」として当地にもたらされたものかもしれない。



第147図・図版104 滑石製品 (S=1/2)

第68表 滑石製品 観察一覧

第回 図版	図番号	種別	寸法 (cm)	重量 (g)	観察事項	地K・ブリック・層序 遺構・台帳番号
第147図	1	有孔製品	縦1.9×横1.8×厚0.6	3.2	片面に煤状炭化物付着。	HC J19 V層 D1211
図版104	2	破片	長3.0×高1.4×厚0.7	3.8	変成鉱物の顕著。結晶片岩小。	HC F18 D78

琉球列島における滑石製品は、玉緑白磁・カムイヤキ及びグスク土器と共伴することが知られるが、その出土比率については遺跡ごとの異同が大きいことが指摘されており、宮城大樹氏はそれを集落・集団が持つ属性・性格が反映されているとした（宮城 2016）。既に報告されている本町所在遺跡における滑石その他の遺物の出土状況について、第69表に示した。紙数の制限もあり、現行行政区分上の小字ごとにまとめ、概ね北→南に並べて表記した。滑石多出遺跡として知られる小堀原遺跡・後兼久原遺跡以外は、宮城氏の言う「移行期集落」に含まれることになるが、4器種の出土比率はそれぞれで異なっていることが分かる。隣接した平安山原と伊礼原を比較すると、その比率の違いは顕著である。平安山原は調査実施面積が最も広いものの、滑石製品の出土数が極めて少ない。この「少なさ」も、当該期の集団の生活様式を解明する上で重要な視点になるものと考えられる。

第69表 北谷町各小字におけるグスク時代初期遺物出土状況

大字	小字	調査面積	滑石	玉緑白磁	カムイヤキ	グスク土器	所収報告書
砂辺	差久(サーク)原	106 m <sup>2</sup>	16	5	9	555	沖縄県81集
高川	千原	試験	0	1	2	3	北谷町23集
	大作原	15 m <sup>2</sup>	0	0	5	71	北谷町22集
伊平	平安山原	約20,800 m <sup>2</sup>	3	4	158	1,538	北谷町23・33・37・38・40集
	伊礼原	約17,800 m <sup>2</sup>	16	5	17	107	北谷町8・23・26～28・31・35・36集
上勢頭	伊礼伊森原	1,600 m <sup>2</sup>	0	0	0	144	北谷町18集
桑江	小堀原	約8,500 m <sup>2</sup>	529	98	227	55	北谷町23・30・34・36集
桑江	後兼久原	約7,300 m <sup>2</sup>	115	98	939	20,023	沖縄埋文センター22集、北谷町21・23集
大村	城原(北谷城)	-	1	3	26	1,391	北谷町1・2・11・32集
	玉代勢原	525 m <sup>2</sup>	0	0	52	89	北谷町13集

## (8) 白磁

白磁は総数 30 点得られ、器種に碗、皿、杯、瓶がある(第 70 表)。生産地は総て中国産で景德窯系、徳化窯、福建・広東系があり、生産年代に宋~明初(12c~14c)から清(19c)までの幅を持つ。

層別別の出土をみると、HB ③ III・III a 層において宋~明初である玉縁の碗や口禿の碗、皿が出土し、HB ③ II a 層は 14c 代の福建系の碗や 15c~16c の福建・広東系の碗があり、HB ③ I 層からは徳化窯系の 18c~19c に位置づけられる型成形の杯などが出土している。平面分布は HB ③ が北側と南側にやや集中し、HC は特に集中部と言える地点は認められなかった。

分類は形態、成形方法、施文範囲、釉調、素地により行い、基軸となる分類や年代観は森田勉・横田健次郎 1978・森田 1982 に準拠するものである。主なものを第 149 図、図版 105 に、観察一覧を第 71 表に示した。

### 1. 碗

20 点が得られ、生産地は福建・広東系のものが多いを占め、僅かに景德鎮窯系がある。生産年代は 12c~18c にまたがり、多くは 14c 後半~17c 中葉のもので構成される。形態別には玉縁状口縁碗(12c~14c)、櫛目文碗(13c)、外反の口禿口縁碗(13c~14c)、ピロースタイル碗(14c)の外反口縁碗や福建・広東系の直口の撥形碗(15c~16c)などが主なものである。

図 1、2 は口縁の断面形態が三角状の玉縁状口縁である。胴部は逆「八」の字状に外に開き、外面は轆轤痕が顕著である。2 は特に胴下部に丸味を持つ。

図 3、4 は口縁部が外反口唇の上面と内側を露胎させた口禿口縁である。いずれも外体面に轆轤痕が認められ、3 は胴下部に丸味を持つ。図 5 は内面に櫛目文を施す、腰部が逆「八」の字状に開き、内面は段状の積痕が顕著で、胴下部に斜位に櫛目文が施文されている。図 6、7 はピロースタイルに属する胴部資料で、いずれも胴部に丸味を持ち外体面に轆轤痕を多く認める。6 は口縁で内側に窪み先端で外反させている。図 8、9 は福建・広東系の口縁が逆「八」の字状に開く撥形碗である。8 は直口で口唇は撥状に先端がやや肥厚し、器面は轆轤痕が顕著である。9 は低めの幅広の高台で外削りの断面形態は台形状を成す。畳付を含め外底は露胎している。図 10 は胴下部にやや丸味があり、高台は小さめで外側から三角状に削り出している。図 11 は腰部に丸味を持ち器壁は薄い。高台は三角状、高台内に砂目が付着している。皿の可能性もある。図 12 は高めの高台を持ち断面形態は先端を両側から削り出し

た方形状を成し、畳付は露胎し、染付や色絵になる可能性がある。

### 2. 皿

5 点が得られている。生産地は景德鎮窯系、福建・広東系があり、生産年代は 13c~16c 位置づけられる。図 13 は口縁部が口禿になる皿の底部と考えられ、内底の中心が窪み、幅広の圏縁を巡らしている。高台は外

第70表 白磁 出土量

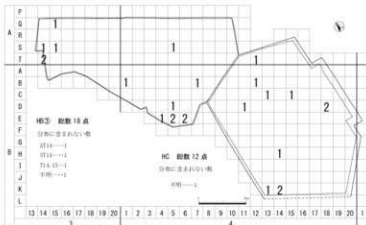
器種	年代	産地											合計					
		宋	元	明初	明代				清代	不明	元	明		清代				
碗	口	福建	福建・広東系	福建	福建・広東系	福建・広東系	景德鎮窯系	徳化窯	不明	不明	福建・広東系	福建・広東系	景德鎮窯系	中国	福建	徳化窯	福建・広東系	2
HC	不明	1	2		1	1	1				1	1						10
	HC小計	1	0	3	0	0	1	1	1	0	0	0	1	1	0	0	1	12
皿	I										1							1
	II a					2			1	1								6
	II c												1					1
	III				2													2
	III a			1				1							1	1		5
	不明					1												1
	皿小計	0	1	0	2	1	3	0	0	1	1	1	1	0	1	1	2	18
HC+皿小計		1	1	3	2	1	3	1	1	2	1	1	1	1	1	1	3	1
器種別計																		30
		20																
		5																
		4																
		1																

HB③: II a 碗小計、碗小計、碗小計 0.5 HB③: II a 右列群 宋:元:12c~13c 元:明初:13c~14c 明代:14c~17c 清代:17c~

側から斜めに削り出し断面は三角状を成す。図 14 は外底の外側に高台を作る。径は自ずと大きくなり、高台の高は低く小さい。断面形態は三角。畳付の内側は平坦な凸状で露胎させ、内底面に陰刻文を施している。図 15 は口縁が大きく外反し口唇は方形に近い丸で、全体的に薄手である。

### 3. 杯

総数 4 点が得られた。生産地に徳化窯系と福建・広東系がある。生産年代は 14c ~ 15c と 18c ~ 19c に位置づけられる型成形の杯がある。図 16 は腰に丸味を持ち胴部は直線的に外に開き口縁は外反する。外面は轆轤痕が顕著である図 17 ~ 19 は生産地が徳化窯で型成形の杯である。

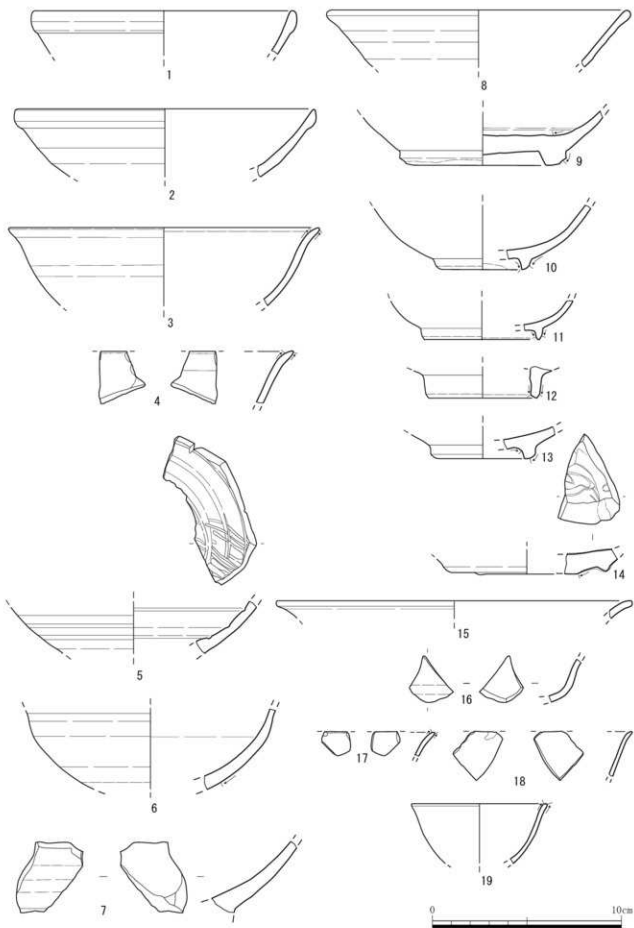


第 148 図 白磁 平面分布

第 71 表 白磁 観察一覧

(注: 単位は cm)

観測 図番	図 番号	部位	口径 底径	器形・文様構成	釉色・装束	産地 質	生産年代 生産地・その他	遺跡・グリッド・層 遺構・台(フツ)番号
第 19 図 ・ 図 版 105	1	口縁部	13.6 -	口縁は外に開き断面形態は三角状の玉縁口縁をなす。外面は轆轤痕が認められる。	灰白色の釉が全面に施される。	黒色微粒子 灰白色、細か。	13c~14c 福建	HB③ S5 III(12) 台1018
	2	口縁部	15.9 -	玉縁状、胴下部に丸味を持ち逆「八」の字状に外に開く。口縁の断面形態は三角状、外面は轆轤痕が顕著である。	乳白色の釉が全面に施される。	黒色微粒子 灰白色、細か。	12c~14c 福建	HC D18 台5015
	3	口縁部	16.4 -	胴下部に丸味を持ち外に開く。口縁は外反し、口唇の断面形態は舌状で、口唇の上面と内面を露胎させた所謂口充である。外面に轆轤痕。	緑白色、口唇の先端と内面は口充。	黒色微粒子 灰白色、緻密。	13c~14c 福建	HB③ S5 III(10・11) 台705
	4	口縁部	-	口縁は直線的に開き上部で外反する。口唇の内側と先端は露胎し口充になる。	青白色、口唇部から内面が口充。	黒色微粒子 灰白色、緻密。	13c~14c中 福建・広東系	HB③ E6 IIIa 台233
	5	胴部	-	胴部は逆「八」の字状に開き、内面に横線状の轆轤痕が顕著で、斜位の轆轤痕の状の沈着を描く。	緑灰色の釉が内面に施される。外面露胎。	黒色微粒子 灰白色、緻密。	13c 福建・広東系	HC T12 F140
	6	胴部	-	胴部は丸味を持ち口縁は内反し、ピロースタイル。	灰白色の釉が外面の胴部までと内面に施される。	黒色微粒子 灰白色、緻密。	14c 福建・広東系	HC C15 V(後期層) F1809 F1790
	7	胴部	-	胴部は丸味を持ち、ピロースタイル。	灰白色の釉が外面の胴部までと内面に施される。	黒色微粒子 灰白色、緻密。	14c 福建・広東系	HC D10 台5014
	8	口縁部	16.2 -	口縁は逆「八」の字状に外に開く。先端の断面形態は舌状に肥厚。外面は轆轤痕顕著。	灰白色の釉が全面に施される。	黒色微粒子 灰白色、細か。	15c~16c 福建・広東系	HB③ 不明
	9	底部	-	胴部は逆「八」の字状に開き、幅広い高台断面形態は台形状。	緑灰色の釉が高台外面まで施される。内底は露胎。	黒色微粒子 灰白色、細か。	15c~16c 福建・広東系	HC K14 台193
	10	底部	8.8 5.0	胴部は逆「八」の字状に開き、幅広い高台断面形態は台形状。	灰白色、畳付露胎。	灰白色 細か。	17c前 景徳鎮窯	HB③ E5 IIIa 台169,台202
	11	底部	6.0	高台の断面形態は、三角状。高台内砂目が付着。重の可能性が有る。	灰白色の釉が高台外面まで施される。畳付を含む高台先端は露胎。	黒色微粒子 灰白色、やや細か。	16c 景徳鎮窯系	HC K14 F287
	12	底部	6.0	方形。先端は両側から削り出し実る。畳付の可能性が有る。	青白色、畳付露胎。	黒色微粒子 灰白色、緻密。	18c 福建・広東系	HB③ AT14 IIa 投股小-SL 台55
	13	底部	4.6	内底面に一葉模様の高台は外側で外側から削り出し断面形態は三角状。	緑白色、畳付から内側は露胎。	黒色微粒子 灰白色、緻密。	13c~14c 福建	HB③ E5 IIIa 台165
	14	底部	8.0	高台は比較的小きく断面形態は三角状。高台内面は凸状で露胎している。	淡緑色の釉が全面に施されるが外底は露胎。	黒色微粒子 灰白色、密。	14c後~15c前 中国	HB③ B1 IIIa 台245
	15	口縁部	18.8	口縁は外反。口唇は方形に近い丸。被熱している。	白色の釉が全面に施される。	黒色微粒子 灰白色、緻密。	16c 景徳鎮窯系	HC B12 V(後期層) F471
	16	胴部	-	腰に丸味を持ち胴部は直線的。口縁は外反。外面に轆轤痕が顕著。	灰白色が全面に施される。	黒色微粒子 灰白色、細か。	15c 福建	HB③ B7 IIIa 台14
	17	口縁部	-	口縁は外反し型成形の口充。	白の釉が全面に施されるが口唇先端は拭き取っている。	黒色微粒子 灰白色、緻密。	18c~19c 徳化窯系	HC C13 台5010
	18	口縁部	-	口縁は外反し型成形の口充。	乳白の釉が全面に施されるが口唇先端は拭き取っている。	白色 緻密。	18c~19c 徳化窯系	HB③ T14.15 IIa 投股小-SL 台285
	19	口縁部	7.2	口縁は外反。胴部は逆「八」の字状に開く。型成形の口充。	白の釉が全面に施されるが口唇先端は拭き取っている。	黒色微粒子 白色、緻密。	18c~19c 徳化窯系	HB③ S15 I(覆土) 台299



第 149 图 白磁



图版 105 白磁



## (9) 青磁

総数 160 点が得られた。生産地は中国産で占められるが、1 点のみ中国か東南アジア産の産地不明がある。生産窯は龍泉窯と福建・広東系があり、龍泉窯産が多数である。生産年代は 13c～14c の元代から明代の 17c 中葉であるが、特に 14c～15c が多く出土している。器種は碗、鉢、皿、大皿、盤が得られ、出土量は碗、皿、盤、鉢の順で多い。層別では HC V 層に明代の碗、皿が集中し出土する傾向にあるが貝塚時代後期を母体とする層であることから後世の攪乱によると考えられる。HB ③はⅡc～Ⅲc 層に元～明代の碗、皿、盤、鉢の順で出土する。(第 72 表)。平面的な分布は特に圧倒的な集中はみられないが、A7、B7、C6、D5、E5 を結ぶ直線ラインを中心に外側に広がりをみせる(第 150 図)。

分類は器種別に行い、完形品や口縁部から底部まで揃う資料が少ないことから、主に部位別の形態分類と文様の構成、施文方法で行い更に軸調、胎土、により行なった。14c～16c の碗、皿の分類と年代観は基本的に上田(1982)に準拠するものである。以下に主なものを第 151～153 図、図版 106～108 に、観察一覧を第 73 表に示した。

### 1. 碗

総数 122 点の出土である。文様構成と施文法により 9 種に分類した。底部は高台の形態により 3 種に分類した。

#### I 類 鑄蓮弁文

図 2・3 は外面に鑄蓮弁文を施文。図 2 は口縁部の先端を欠く資料であるが口縁部でやや窄み端反る口縁部が予想される。胴部は下部にやや丸味があり逆「八」の字状外に開く。外面の鑄蓮弁文は明瞭な稜線を持つ。図 3 は直口口縁部で施される鑄は肉厚である。内面は無文。

#### Ⅱ類 ヘラ描蓮弁文

図 4 は口縁部が直口で外面にヘラ描の蓮弁文を施文するものである。図 5・6 は高台が三角状の断面形態で外面にヘラ描きの蓮弁文を施し、内底に一条の圏線と草花の印花文を施文している。

#### Ⅲ類 ヘラ描ラマ式蓮弁文+唐草文

図 7 は腰部に丸味を持ち口縁部までやや開きながら立ち上がる口縁部は外反し口唇部は僅かに肥厚している。高台は壘付の外側を削り出し、断面形態は三角状になる。外面にヘラ描きのラマ式蓮弁文を描き、内面はヘラ描きの唐草文を描いている。内底に一条の圏線と草花の印花文を施している。

第 72 表 青磁 出土量

器種	部位 産地	碗										皿				盤		鉢		盤or皿		合計							
		元・明初					明代					龍泉窯系		福建・広東系		龍泉窯系		龍泉窯系											
		龍泉窯系	龍泉窯系	福建・広東系	中国or東南アジア	不明	龍泉窯系	龍泉窯系	福建・広東系	龍泉窯系	福建・広東系	龍泉窯系	龍泉窯系	龍泉窯系	龍泉窯系	龍泉窯系	龍泉窯系	龍泉窯系	龍泉窯系										
HC	Ⅰ																						3						
	Ⅱ				3	1		1																9					
	Ⅲ				1	1																		2					
	V				1	11	6	5	1						4	1							30						
	一				1	2	9	4	1	1					2	1	2						24						
	HC小計	0	0	1	1	17	18	9	3	1	1	1	1	0	0	0	8	2	3	1	1	1	0	0	0	0	0	68	
HB ③	Ⅰ					3	3									2													8
	Ⅱa					1										1													3
	Ⅱb						2										1												3
	Ⅱb						1																						1
	Ⅱc						2	2	1																		1	1	12
	Ⅱd						4	2	2	1							2								1	1	1	1	16
	Ⅱe						1	1																					37
	Ⅱf							10	20								1		3										7
	Ⅱg							3	1	1								1											2
	Ⅱc							1	1																				2
		不明						1																					3
	HB③小計	2	3	0	0	24	32	5	1	0	0	0	2	1	1	3	6	1	5	0	0	0	1	2	1	1	1	92	
HC+HB③合計	2	3	1	1	41	50	14	4	1	1	1	2	1	1	3	14	3	8	1	1	1	1	2	1	1	1	1	160	
器種別計																	30												

HB③・Ⅱc遺構 (6内1群、6外4群・S7、SK32)

元・明初:13c~14c、明代:14c~17c

**IV類** 片切彫草花文

図8は外面に片切彫の草花文を施文する胴部資料で内面は無文である。両面に施文の資料も得られているが小片のため作図していない。

**V類** 外面や内面に雷文や草花文を型押ししている（人形手）

図9・10は内面に印花の草花文を施す。外面は無文である。図9は口縁部が玉縁状で外にやや開く。内面の印花文は口縁部上位から施されている。

図11・12は口縁部が内湾気味の直口を示し、器面の内外面に印花の雷文や草花文などを施文する。11は外面の雷文下に鋸歯文、内面の雷文下に草花文を描いている。

**VI類** 剣先蓮弁文（線刻蓮弁文）

図13～19は外面に剣先蓮弁文を施す直口碗である。図13・14は弁先の丸い剣先蓮弁文を描く。図15～17は、蓮弁を弁先と別々に描き一対の花弁にならないものや弁先を省略するものである。図15は双状の縦線と単線の鋸歯状の弁先で省略蓮弁文を描いている。図16の蓮弁文は、弁先を波状に別に描き一対の花弁にならないものである。図17は弁先を省略した線影蓮弁文で、胴部中に連続する斜めの斜線を伴う。図18は外面に剣先蓮弁文を施す胴部である。図19は内底に草花の印花文を施した底部資料である。

**VII類** 線影雷文くずれ

図20はやや内湾する直口の浅い碗である。外面に線影の雷文くずれと唐草文を描く。内面は無文で見込に一条の圈線が認められる。

**VIII類** 無文外反

図21～27は外反無文碗である。図22は胴下部に張りを持ちやや直線的に立つが口縁部の外反は弱く端反りである。図24は胴部が口縁部に向かい直線的に開き立ち口縁部の外反が比較的強い。図21・27は比較的外反が緩やかで図23～26は外反が強い。

**IX類** 無文直口 a：口唇部：丸・舌状 b：口唇部：肥厚・撥状

図28はやや内湾気味に開く直口口縁で、外面の口縁部と胴部に圈線を巡らしている。図29は逆「八」の字状に直線的に開く直口口縁。bは口縁部が直口する無文で、口唇部の断面形態は撥状を成す。生産地は福建・広東系で生産年代は15c～16cに位置づけられる。小片のため図化していないが底部3類の口縁部資料と考えられる。

**底部**

**1類** 高台の断面形態は四角状高台断面形態は四角状。内底に圈線が認められる。劃花文の底部の可能性ある。図1は内底面が平坦で幅広な圈線を有する。高台断面形態は四角状で低めである。劃花文の底部の可能性ある。図5は高台断面形態は高めの四角状。

**2類** 高台の断面形態は三角状。図6・19・30～36は高台の外面を斜めに削り出し、断面形態が三角状を示すものである。図34は疊付の外面を削り出し高台の断面形態が三角状を成すもので、内底に印花文を施している。

**3類** 高台の断面形態は幅広の台形状。図37は高台の低い、断面形態が幅広の台形状を示すものである。

**2. 鉢**

1点の出土である。図37は口縁が外反し、口唇の尖る形態で内外の器面に片切彫草花文を描いている。

### 3. 皿

総数 30 点得られた。分類は口縁部形態、腰部形態、底部の高台形態により部分的に分類し、文様構成と施文方法を加え分類した。口縁部が 4 種、底部で各 4 種に分類できた。

#### I 類 口折内縁、片切彫蓮弁文

図 39～42 は腰折れに近い屈曲を持ち、胴部は直線的に開く。口縁部は口折れである。図 39 は腰胴部が丸く屈曲、口縁部は口折れ。高台の断面形態は四角状。外面に片切彫の蓮弁文を巡らし、内底に圏線と草花の印花文を施している。図 42 は高台の断面形態は四角状で、外面に片切彫の蓮弁文を巡らしている。図 40 は腰部が僅かに丸く立ち、口縁部は口折れで鏝状に外に張り出す。外面に片切彫の蓮弁文を施文。図 41 は口折れで外面に片切彫の蓮弁文を描いている。

#### II 類 稜花状縁、腰折

腰が折れ、口縁部は大きく外に開き口唇部に稜花状の袈りを入れる。内面に篋描きの草花文、唐草文や櫛描きの流水文を描くものがある。図 45・46 は口縁部が外反し口唇部に袈りをいれ稜花状を成す。図 45 は内面に櫛描きの流水文を描いている。図 46 は内面に篋描きの唐草文を描いている。図 47 は腰が折れ口縁部は外に大きく開く、口唇部に平坦面を持つことから稜花状になることが推察できる。口唇部と内面に草花文を描く。

#### III 類 外反、無文

図 43 は腰部に丸味を持ち、口縁部に向かいやや開き立ち、外反する。図 44 は口縁部が玉縁状にやや肥厚する。

#### IV 類 直口、無文

図 52・53 は口縁部が外にやや開く直口で、腰部に丸味を持つ。図 52 は高台の断面形態は四角。内底と高台内は露胎している。

### 底部

#### 1 類 片切彫蓮弁文、高台断面四角

図 42 は高台の畳付の両側を斜めに削り出した外削りの断面形態は四角状である。外面に片切彫の蓮弁文を施文している。内底面に陽圏線が認められる。

#### 2 類 腰折、高台断面形態は台形状及び三角状

図 48 は腰折で胴部は反るようにやや開きながら立つ。高台は畳付の両側を斜めに削り出し、断面形態は台形状。内面に片切彫の唐草文を施文。内底に圏線と印花の草花文を施文している。

図 49 は高台の断面形態は三角状。高台内と内底が露胎し内底見込に印花文を施文している。図 50・51 は腰折れの皿の可能性が高い。

#### 3 類 無文、高台断面三角状

図 54・55 は腰部に丸味を持ち、高台の断面形態が三角状をなすものである。

### 4. 大皿

総数 3 点得られ、図 56 は内面に篋描きの蓮弁文を描く底部資料である。高台形態は台形状を成す。図 57 は高台の断面形態が台形状を成すものである。

### 5. 盤

総数 2 点得られた。図 58 は鏝縁口縁で口唇部は、「L」字状に折れ、上面に引き上げるものである。内面に櫛描きの蓮弁文を施文している。

第73表-1 青磁 観察一覧

(法量単位:cm)

第四 図版	図 番 号	分 類	部 位	口徑 高 底 径	器形・文様構成	釉 色・範囲・貫入	素地 色・混和材・質	生産年代 生産地	遺跡・グリップ層 遺構・台(ドット)番号
第 151 図 ・ 図 版 106	1	I	底部	— 3.2	高台断面形態は四角状。内底に墨線が認められる。刺花文の底部の可能性がある。	オリーブ色 高台輪	紫灰色 黒微粒子 密	12c~14c 龍泉窯系	HC J14 D518
	2	I	胴部	—	外反し外面に緑蓮弁文を施す。内面無文。	緑灰色 全	褐色 黒・白色微粒子・細かい	13c~14c前 龍泉窯系	HB② BC5.6 SK032 台1030
	3	I	口縁部	—	内湾気味の直口外面に緑蓮弁文、内面無文。	褐色 全 貫入	褐色 黒白微粒子・細かい	14c頃 龍泉窯系	HB② S10 Ⅱb(5) 台307.308
	4	II	口縁部	15.0 —	口縁は直口を成す。口唇は内側がやや突る舌状。外面にへろ縞の蓮弁文を施文。	オリーブ色 全	灰色 黒白微粒子・細かい	14c後~15c前 [中国]東南 アツア	HC B16 V(後期) D795
	5	II	底部	5.6 —	高台内に砂目。高台は内側の台形に近い三角。外面にへろ縞の蓮弁文を施文。内底は墨線と印花文。	緑灰色 高台内	灰色 黒微粒子 密	14c後~15c前 龍泉窯系	HC C15 V(後期) D346
	6	II	底部	5.8 —	高台の断面形態は高台の外側から削り出した断面形態が三角状。外面にへろ縞の蓮弁文を施す。内底に一条墨線と印花文を施文。	淡緑色 高台内底の目 輪跡	灰色 黒白微粒子 密	14c後~15c前 龍泉窯系	HC 不明 台5050
	7	III	口へ 底部	16.4 6.2 8.9	腰部に丸縁を持ち口縁は外反。口唇はやや玉縁状をなす。高台は髷付の外側から削り出した断面形態が三角状。外面にへろ縞の蓮弁文を施す。内面は片切彫の唐草文を描いている。内底は一条の墨線と印花文を描いている。	オリーブ色 高台内底の目 貫入	灰色 黒微粒子 ガラス質石灰 密	14c後~15c前 龍泉窯系	HC C14 V(後期) D2942
	8	IV	胴部	—	外面にへろ縞の草花文を施文。内面は無文。	オリーブ色 全	灰色 黒白微粒子 細かい	14c後~15c前 龍泉窯系	HC A12 V(後期) D626
	9	V	口縁部	17.6 —	口縁は玉縁をなし内面に型押の文様を施す所謂人形である。文様は草花文。	淡灰緑 全	灰色 白黒微粒子 密	14c後~15c前 龍泉窯系	HB③ B6 Ⅲb(5) 台573
	10	V	胴部	—	内面は型押の草花文。外面は無文。人形手である。	オリーブ 全	灰色 白黒微粒子 密	14c後~15c前 龍泉窯系	HB② D3.4 Ⅲ(8~11) 台578
	11	V	口縁部	18.2 —	やや傾く直口口縁を成す。口唇は先端が凹い丸。外面に印花の雷文帯と波文帯を施している。内面は型押の雷文と草花文(人形手)を施文している。	淡灰緑色 全	灰色 白黒微粒子 密	15c 龍泉窯系	HC C15 V(後期) D370
	12	V	口縁部	18.0 —	やや内湾気味に立ち上がる直口口縁である。口唇は丸い。外面と内面に印花の雷文帯を施している。	淡灰緑色 全	灰白色 白黒微粒子 細かい	15c 龍泉窯系	HC B12 V(後期) D1170
	13	VI	口縁部	14.6 —	胴部から内湾気味に立ち上がる。口縁は直口を成し、口唇は丸い。外面に丸彫の蓮弁文を施している。	淡灰青色 全 貫入少	灰色 黒白微粒子 密	15c前~15c末 龍泉窯系	HC C17 D165
	14	VI	口縁部	15.4 —	内湾気味の直口輪。外面に丸彫の蓮弁文を施す。内面、口縁に幅広二条の墨線。	淡灰緑 全 貫入	灰色 黒白微粒子 密	15c前~15c末 龍泉窯系	HB③ ST17~20 I 台69 HB③ T19 Ⅲa(3) 台1650
	15	VI	口縁部	15.0 —	内湾気味の直口輪。外面に双状の髷により略蓮弁文を施す蓮弁の刺先は別々に描かれている。内面無文。	オリーブ色 全	灰色 白黒微粒子 密	15c前~15c末 龍泉窯系	HB② D5 Ⅲ(9) D204
	16	VI	口縁部	11.6 —	口縁は内湾気味に立ち、口唇は丸い。外面に線彫の蓮弁文を描くが胴頭と唇弁は別々に描き一対の弁にのみ描く。	淡オリーブ色 全 貫入	生成色 黒白微粒子 細かい	15c後~16c前 福隆・広東系	HC E9 Ⅱ F619 HC D9 Ⅱ F620
17	VI	口縁部	13.0 —	口縁はやや傾き直に立ち、口唇は丸い。外面に細線を省略した線彫の蓮弁文を描き、中位に斜行の彫込みを施す。	オリーブ色 全 貫入	灰色 黒白微粒子 細かい	15c後~16c前 福隆・広東系	HC D18 D99	
18	VI	胴部	—	外面に線彫の蓮弁文を描く。	灰緑色 全 貫入	灰色 黒白微粒子 密	15c前~15c末 龍泉窯系	HC K14 D460	
19	VI	底部	4.6 —	高台の断面形態は髷付の外側から削り出した台形状。外面に線彫の蓮弁文を描く。内底面に印花文を施している。	灰緑色 高台内底輪 貫入	灰色 黒白微粒子 細かい	15c 龍泉窯系	HC J12 D141	
20	VII	口縁部	12.8 —	内湾気味の直口で浅い碗である。口唇はやや内湾く外面に線彫の雷文くずれと横文を描く。内底墨線。	淡黄緑色 全 貫入少々	灰白色 白黒微粒子 密	16c前 福隆・広東系	HC F16 D171	
21	VII	口縁部	18.0 —	外反口縁。口唇は丸い。無文。	灰緑色 全	灰色 黒白微粒子 密	14c後~15c中 龍泉窯系	HC A13 Ⅱ D1994	
22	VII	口縁部	16.6 —	口縁は外反。口唇はやや舌状の丸。胴下部に彫りを持つ。無文。	灰緑 全	灰色 黒白微粒子 密	14c後~15c中 龍泉窯系	HB② A18 Ⅲa 台268	
23	VII	口縁部	14.0 —	胴部は口縁に面がく、縁や口に開き立ち上がる。口縁は外反。口唇は丸い。無文。	灰緑色 全	灰色 黒白微粒子 密	14c後~15c中 龍泉窯系	HC B16 Ⅲ(アス) D3657	

第73表-2 青磁 観察一覧

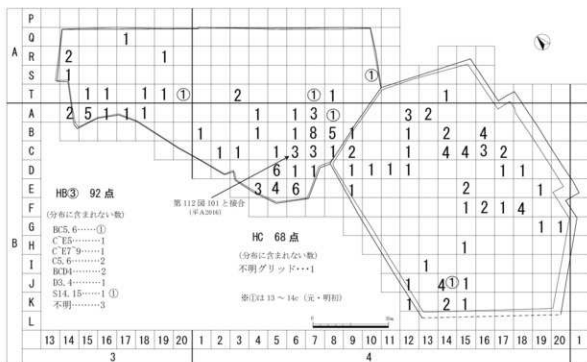
(法量単位:cm)

第73表-2	図号	図種	分類	部位	口径 底径 器高	器形・文様構成	軸 色・範囲・貫入	素地 色・混和材・質	生産年代 生産地	遺跡・グリッド/層 遺構・台(ドット)番号
第152図・ 図版107	24	Ⅴ	口縁部	15.6 — —	口縁は一旦内へ寄り外反する。口唇は舌状。胴下部に張りを持つ。無文。	灰緑 全	灰色 黒白微粒子 密	14c後~15c中 龍泉窯系	HB③ C~E5 (試掘レ0~20) 台93	
	25	Ⅴ	口縁部	18.4 — —	胴部は口縁に向から、腰やぐみに開き立ち上がる。口縁は外反し口唇は丸い。無文。	灰緑色 全 貫入	灰色 黒白微粒子 密	14c後~15c中 龍泉窯系	HC F16 II 下1229	
	26	Ⅴ	口縁部	15.4 — —	口縁は外反し口唇は丸い。胴下部に張りを持つ。無文。	オリーブ 全	灰色 黒微粒子 密	14c後~15c中 龍泉窯系	HB③ C~E7~9 I 台65 HB③ E5 IIIa 台203 HB③ D6 IIIa(8~11) 台528	
	27	Ⅴ	口縁部	14.4 — —	胴部は口縁に向から、腰やぐみに開き立ち上がる。口縁は外反し口唇はやや玉縁。無文。	オリーブ色 全	灰色 黒白微粒子 密	14c後~15c中 龍泉窯系	HC E15 V(後期層) 下1111	
	28	Ⅸ	口縁部	14.3 — —	やや内湾気味の直口。口唇はやや丸い。	オリーブ色 全 貫入少	灰色 黒白微粒子 密	15c 龍泉窯系	HC C15 V(後期層) 下5004	
	29	Ⅸ	口縁部	12.4 — —	口縁はやや開きながら立つ。直口無文。	オリーブ 全	灰色 白黒微粒子 密	15c 龍泉窯系	HB③ B7 IIIa上: 台14	
	30	2	底部	— 5.6	— 高台の断面形態は三角状。内底に團縁と印花文を施文。	灰緑色 全 高台内底の目 軸割ぎ	灰色 黒微粒子 密	14c後~15c中 龍泉窯系	HC E15 下315	
	31	2	底部	— 7.0	— 腰部は逆「八」の字状に開く。高台の断面形態は疊付の外側から削り出した台形状。内底面に團縁と印花文を施している。	灰緑色 全 高台内底の目 軸割ぎ・貫入	灰色 黒白微粒子 密	14c後~15c中 龍泉窯系	HC B14 V(後期層) 下455	
	32	2	底部	— 5.6	— 高台の断面形態は疊付の外側から削り出した台形状。内底面に團縁と印花文を施している。	淡オリーブ色 全 貫入	灰色 黒白微粒子 細めい	14c後~15c中 龍泉窯系	HC D11 V(後期層) 下650	
	33	2	底部	— 6.8	— 高台の断面形態は三角。高台内と内底は磨削している。内底形に印花文を施している。	オリーブ 全 高台輪	褐色 白黒微粒子 細	14c後~15c中 龍泉窯系	HB③ A2 IIIa 台239 HB③ E4 IIIa(8~10) 台571	
	34	2	底部	— 6.2	— 腰部は逆「八」の字状に開く。内底に團縁と印花文。高台内の輪を蛇の目状に軸割ぎする。	オリーブ 全 高台内底の目 軸割ぎ・貫入	灰白色 黒微粒子 密	14c後~15c中 龍泉窯系	HB③ B7 IIIc(7) 下667	
	35	2	底部	— 5.0	— 腰部はやや丸味を持ち高台の断面形態は三角状に削り出す。無文。	紫オリーブ色 全 貫入	紫灰色 黒微粒子 密	15c 龍泉窯系	HC K15 下250	
	36	2	底部	— 7.6	— 高台の断面形態は三角状。体面無文。内底に印花文を施文。輪が厚い。鉢の可能性あり。	青緑色 全 高台内底の目 軸割ぎ	灰色 黒微粒子 密	14c後~15c中 龍泉窯系	HC C14 V(後期層) 下738	
	37	3	底部	— 21.4	— 高台は低く外側から削りに削り出し。断面形態は幅広い台形状。外底に輪縁が顕著である。	青緑色 全 内底底の目軸 割ぎ、外底無輪	褐色 白黒微粒子 密	15c~16c 福隆・広東系	HC I(表探) 台12818	
	38	Ⅰ	口縁部	21.4 — —	口縁は外反し口唇は丸い。胴下部に張りを持つ。内外面に片切彫の草花文を施す。	灰緑 全	灰色 黒色微粒子 密	14c後~15c中 龍泉窯系	HB③ B8 III(8~11) 台571	
	39	Ⅰ	口縁部	13.0 4.0 5.2	腰部が丸く口縁は口折れ。高台の断面形態は四角状。外面に片切彫の蓮弁文を添らしている。内底に草花文印花文を施す。	淡灰緑 全 高台輪 貫入	褐色 黒色微粒子 細	14c末~15c中 龍泉窯系	HB③ C6 IIc 石列群 SL002 台507 HA③ B18 C19 II F18 III 台1971.1984.2177(接合)	
	40	Ⅰ	口縁部	11.8 3.0 6.1	腰部は僅かに丸く立ち上がる。口縁は口折れ。口縁は蹄状に外へ張り出す外面に片切彫の蓮弁文を施している。	オリーブ 全 貫入 不明	灰色 黒白微粒子 密	14c後~15c前 龍泉窯系	HB③ A7 IIIa 台221	
	41	Ⅰ	口縁部	12.0 — —	口縁は口折れを成し、外面に片切彫の蓮弁文を添らしている。	淡灰緑色 全	灰色 白黒微粒子 密	14c後~15c前 龍泉窯系	HC T14 V(後期層) 下1766 HC A14 II 下2000	
	42	Ⅰ	底部	— 6.8	— 高台の断面形態は四角状。高台内の輪を蛇の目軸割ぎしている。外面に蓮弁文を施している。内底見込に團縁。	淡灰緑 全 高台内底の目 軸割ぎ	灰白色 黒微粒子 密	14c後~15c前 龍泉窯系	HB③ A7 IIc 石列群 SL07 下442	
	43	Ⅲ	口縁部	10.4 — —	腰部に丸味を持ち胴部は直線的に外へ開く。口縁は外反する。	緑灰色 全	灰色 白黒微粒子 密	14c末~15c 龍泉窯系	HC F15 V(後期層) 下1185	
	44	Ⅲ	口縁部	13.0 — —	口縁は玉縁をなす。無文。	淡灰緑 全	灰白色 黒白微粒子 密	14c末~15c 龍泉窯系	HB③ D5 IIc 石列群 SL (SL01.02) 台52	
	45	Ⅱ	口縁部	— — —	— — — 椀花皿である。口縁部は外反し口唇部に缺りをいれ椀花を成す。口唇は舌状を成す。内面に菊目描きの流水文を描く。	青緑色 全	灰色 黒白微粒子 密	15c 龍泉窯系	HC F18 下67	
	46	Ⅱ	口縁部	— — —	— — — 口縁部は椀花を成し、口唇はへつりする。内面に菊目描きの草花文を施している。	オリーブ 全 貫入	灰色 黒白微粒子 細	15c 龍泉窯系	HB③ C8 I(覆瓦) 台739	
	47	Ⅱ	口縁部	— — —	— — — 口縁部は椀花の覆瓦状の皿。口唇と内面に沈線文(草花文)。	灰緑 全 貫入	灰色 黒白微粒子 細	15c前~15c末 龍泉窯系	HB③ E6 I(覆瓦) 台205	

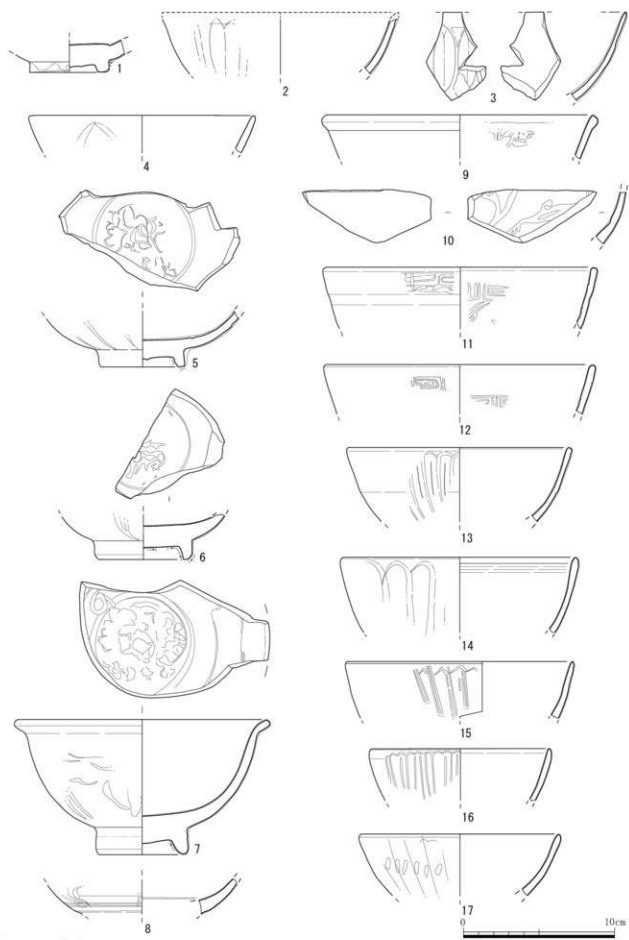
第73表-3 青磁 観察一覧

(法量単位:cm)

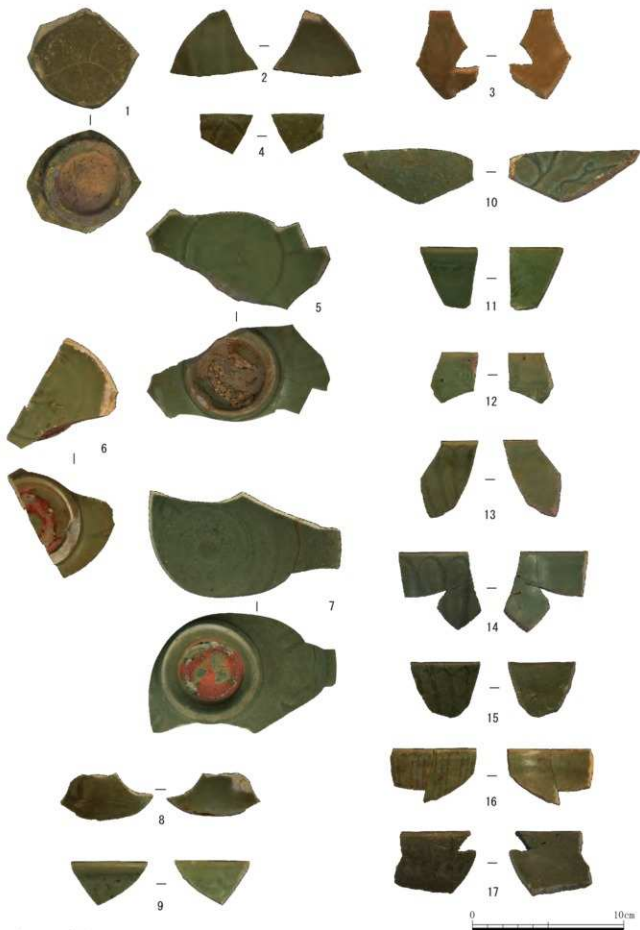
国 庫 番 号	脚 種	分 類	部 位	口 径 底 径 器 高	器 形・文 様 構 成	軸 色・範 囲・貫 入	裏 地 色・色 和・材・質	生 産 年 代 生 産 地	遺 跡・グリ ッド・層 遺 構 ・台(ドット)番 号	
第153 国・ 図 版 108	48	2	底部	—	腰折れで脚は外に開きながら立つ。高台は登付の高筒を斜めに作り出し、断面形態は台形状。内面に片切彫の唐草文を施文、内底に團縁と印花の草花文を施文している。	灰緑色 高台内底の目 軸刺ぎ 貫入	灰色 黒微粒子 密	15c 龍泉窯系	HC G19 F42	
				5.8	—	—	—	—	—	—
	49	2	底部	—	腰折れ気味。高台の断面形態は三角状。高台内と内底は露胎している。内底見込に印花文を施す。	淡灰緑 内底、外底露胎	灰白 黒微粒子 密	15c 龍泉窯系	HB③ T15 IIIa 台275	
				6.0	—	—	—	—	—	
	50	2	底部	—	腰折れはやや屈曲する。高台の断面形態は台形状。無文。	灰緑色 盤 貫入	灰色 黒白微粒子 密	15c 龍泉窯系	HC B9 F153	
				5.2	—	—	—	—	—	
	51	2	底部	—	底面は広目で平坦。腰折れになり外に開き立ち上がる。内底に1条の團縁。高台の断面形態は台形状。高台内は蛇の目軸刺ぎ。	淡青緑 高台内蛇の目 軸刺ぎ・貫入	灰色 黒微粒子 密	14c後～15c中 龍泉窯系	HB③ T8 IIIa上 台13 HB③① I (擾乱) 台71	
				6.6	—	—	—	—	—	
	52	IV	口～ 底部	9.8	2.7	内筒気味の直口。高台の断面形は四角状。高台内と内底は露胎している。焼成不良。	不明(白化) 内底露胎、外底 蛇の目軸刺ぎ	淡褐色 黒微粒子 細	15c 龍泉窯系	HB③ B8 IIb 台24
				5.4	5.4	—	—	—	—	—
	53	IV	口縁部	9.0	—	胴の丸く口縁は直口を成す。口唇は丸い。	オリーブ色 全 貫入	灰色 黒微粒子 密	15c 龍泉窯系	HC C15 F363
—				—	—	—	—	—		
54	3	底部	5.3	—	高台の断面形態は四角状。円盤状製品。	淡緑灰 内底露胎、高台 盤・貫入	生成り色 黒微粒子 気泡粗い	15c～16c前 福徳・広東系	HC II3 I (擾乱) F9	
			—	—	—	—	—	—		
55	3	底部	—	—	腰折れはやや屈曲する。高台の断面形態は台形状。無文。碗の可能性あり。	オリーブ色 高台内軸刺ぎ 貫入	灰色 黒微粒子 密	14c後～15c前 龍泉窯系	HC J14 II F1206	
			6.0	—	—	—	—	—		
56	大 皿	—	—	—	高台の断面形態は台形状。内面に鹿彫り蓮華文。見込に團縁線。鉢の可能性あり。	オリーブ色 高台内(蛇) 貫入	灰色 黒白微粒子 密	14c後～15c中 龍泉窯系	HC A12 II F2010	
			7.0	—	—	—	—	—		
57	—	底部	—	—	高台は見込に比べ小さく断面形態は台形状に削られる。内底見込に團縁線。鉢の可能性あり。	淡黄緑 高台盤 貫入	灰 白黒細粒 貫入	15c後～16c 福徳・広東系	HB③ C2 IIc 石列1群(SL02) 台477	
			10.4	—	—	—	—	—		
58	盤	—	—	—	口縁は隠線状をなし断面形態は「L」字状。口唇の先端は上面に盛り上げる。内面に團縁線の蓮華が認められる。	オリーブ 全 貫入	灰色 黒白微粒子 密	14c後～15c前 龍泉窯系	HB③ C7 III (8～11) 台523	
			—	—	—	—	—	—		



第150図 青磁 平面分布

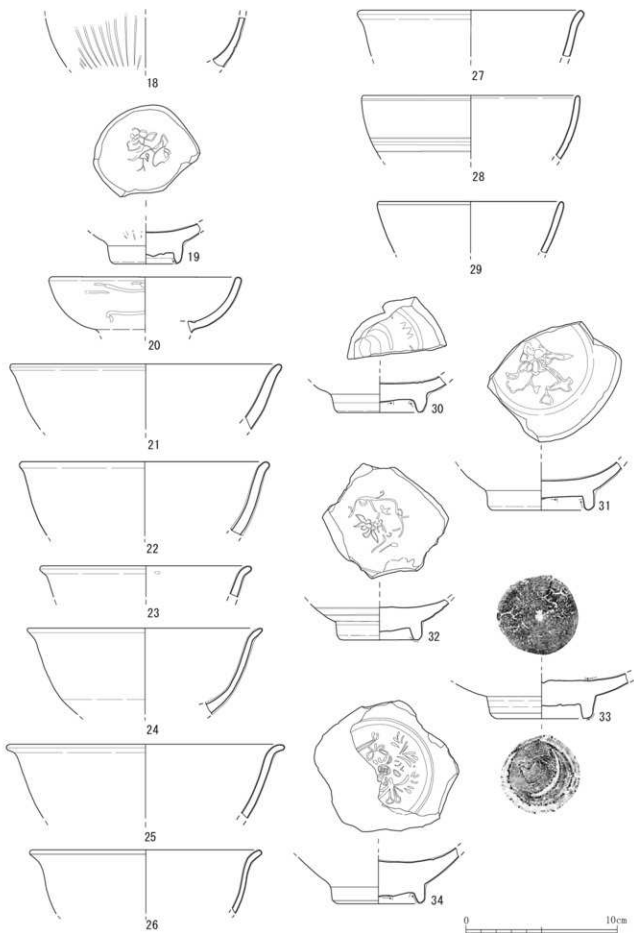


第 151 图 青磁 1

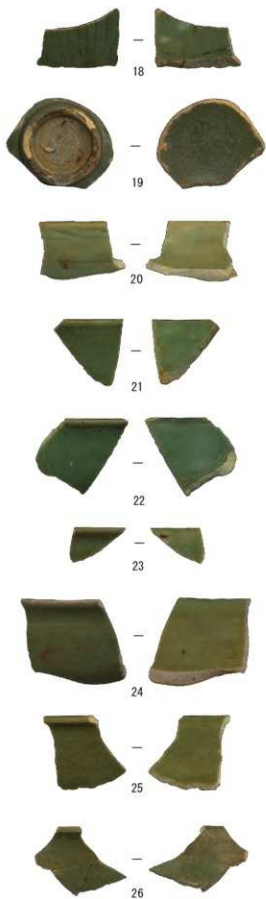


图版 106 青磁 1

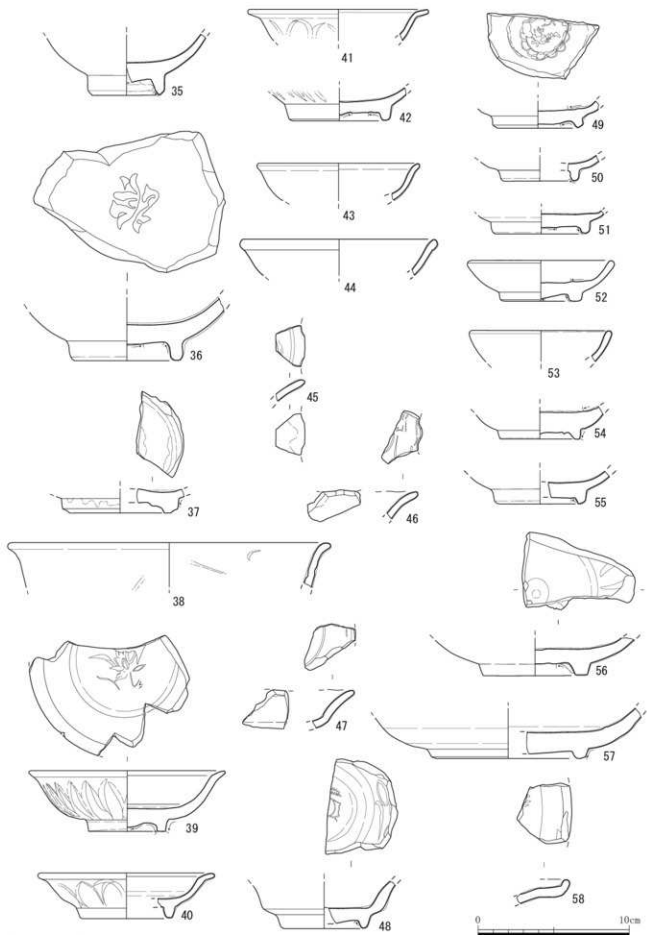




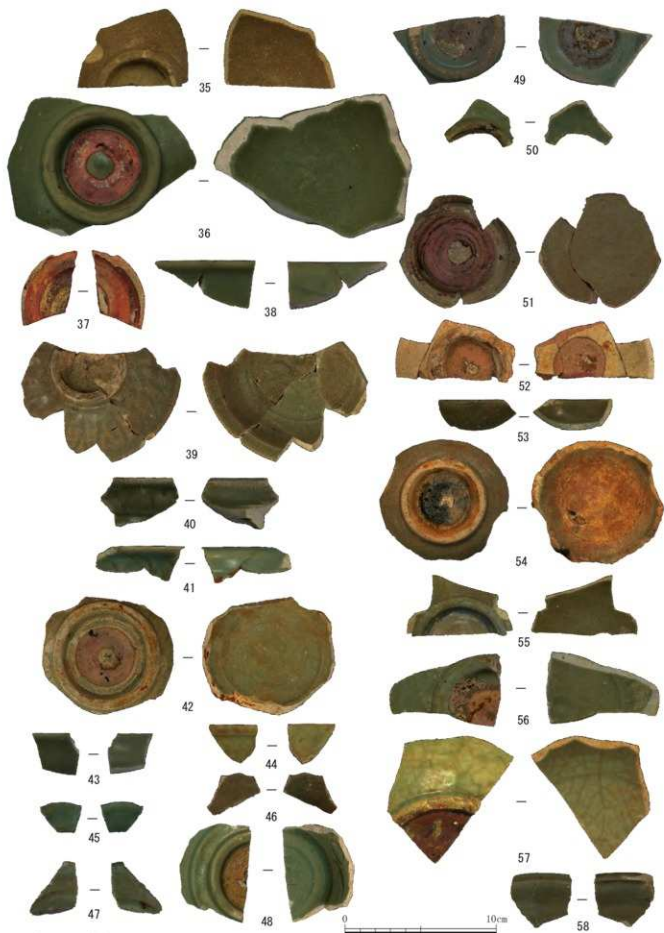
第 152 图 青磁 2



图版 107 青磁 2



第 153 图 青磁 3



图版 108 青磁 3

## (10) 染付・色絵

総数60点が得られ器種は碗48点、皿8点、杯1点、瓶2点、鉢1点が得られている(第74表)。生産地は景德鎮窯系、漳州窯系、福建・広東系があり、生産年代は15c後半～17cの明代から17c後半～18cの清代に位置づけられるが、碗は清代のものがやや多い。層別別にはHB③ではI、IIa層に清代の福建・広東系の碗が多く出土している。平面分布においてもHB③は清代の遺物が多く、北側の祝女殿小周辺に集中する。HCは主に東側に出土し明代のものが多い傾向がある。分類は基本的に形態、成形方法、文様構成、施文範囲、釉調、素地により行い、明代は小野1982編年を基軸とする。以下に主なものを第155・156図、図版109・110に観察を第75表に示した。

### 1. 碗

**I類**：やや小振りで口縁は外反する。胴部は直線的に開き立ち、底部は高台が華奢な作りで内割りである。小野分類B群に属する。

図1は胴部が直線的に立ち口縁は外反する。外面に二条の圏線と唐草文を施文、内面は二条の圏線を巡らす。図2は逆「八」の字状に開き口縁は外反する。口唇は舌状を成し外面に圏線と唐草文を施文する。内面は二条の圏線に雷文帯を巡らしている。図3は逆「八」の字状に開き口縁は外反する。口唇は丸状。外面に圏線と唐草文を施文し内面は四方禪文を巡らしている。図4は逆「八」の字状に外に開き、口縁は外反する。口唇は丸状。外面に一条の圏線と唐草文を施文している。内面に圏線を配する。図5の高台は内割りの断面形態は三角状を成す。外面腰部に簡略化した蓮弁文を配し高台に圏線を巡らし、内底に二条の圏線と梅月文を施文している。いずれも生産地は景德鎮窯系、生産年代15c後半～16c前半に位置づけられる。

**II類**：口縁が直口し胴部は直線的に逆「八」の字状に外に開く。底部は内底面が窪む蓮子心になり高台は細作りになると考えられる。小野分類C群に属する。

図6は口縁が直口で口唇は角状、外面に圏線と波濤文を巡らしている。内面は圏線を巡らしている。図7は直口口縁で口唇は角状、外面に圏線と波濤文を巡らし下位に笹文を配している。内面は圏線を巡らしている。いずれも生産地は景德鎮窯系、生産年代は16c前半～16c中葉。

**III類**：口縁は直口でII類と同様な口縁と考えられる。腰部が「く」の字に屈曲、胴部は直線的に外に広がる。内底面は広く平坦である。小野分類D群に属する。

図8は腰部に張りを持ち、胴部は直線的に外に広がる。高台は華奢で断面形態は三角状を成す。外面にアラベスク文を配し腰下部と高台に圏線を巡らしている。内底に二条の圏線に字花文を施文している。生産地は景德鎮窯系、生産年代は15c後半～16c前半に位置づけられる。

**IV類**：口縁が直口し腰部に丸味を持ち、胴部は直線的に立ち上がることが考えられる。内底は饅頭心である。小野分類E群に属する。

図9は内底が盛り上がる饅頭心を示し、高台は内割りの断面形態は三角状を成す。高台内側に砂目が確認できる。外面腰下部と高台に圏線を配し内底は二条の圏線と芙蓉文を施文している。高台内に角福の銘款を付す。生産地は景德鎮窯系、生産年代は16c後半に位置づけられる。

**V類**：見込みは中心がやや窪み、小野分類C群に近い底部形態を示す。

図10は腰部に張りがあり、高台形態は三角状の断面を持つ、見込みは中心がやや窪む。畳付に破損部を研磨した部分があり、焼成時の溶着のための剥離面を修復し座りを整えたことが窺える。生産地は景德鎮窯系、生産年代は16c～17cに位置づけられる。

**VI類**：口縁が直口し、胴部は直線的に逆「八」の字状に大きく外に開く。口縁部と内底に圏線を巡らす。無文である。

図11は胴部に丸み持ち逆「八」の字状に大きく外に開く、口縁は直口し口唇の断面形態は丸状。口縁の外内面に一条の圏線を配している。生産地は漳州窯系、生産年代16c後半～17c初めに位置づけられる。図12の高台は外側と内側から削り出し畳付は四角い。外面の腰部と内面の見込に圏線を巡らし。外底と内底は露胎している。生産地は福建・広東系、生産年代17cに位置づけられる。

**VII類**：外面に印文を施す印青花である。口縁部は直口と外反とある。胴部は直線的に逆「八」の字状に外に開くが、胴部は高台から屈曲するように直に立ちあがる。胴径に比較して高台径の広いものが多い(図15)。図13は口縁が直口し口唇は先端のやや細い丸。外面に印花文を施文している。図14は胴部に丸味を持ち、口縁は直口し口唇は丸くなる。外面に唐草文と印花菊花文を施文。内面は口縁と見込に圏線を配している。15の高台は外削りで、断面形態は三角状。外面に丸文を施文。内底と外底は露胎している。図16は高台が外削りの断面形態は四角状。内底は中心が盛り上がる。饅頭心で外面の腰部に一条の圏線を、内面は見込に一条の圏線を配している。内底は軸を蛇の目軸剥ぎし、外底は露胎している。生産地はいずれも福建・広東系、生産年代は17c後半～18c前半に位置づけられる。

**VIII類**：口縁は直口で、胴部は直に立ち上がる。高台の断面形態は細い。

図17は口縁が直口で口唇は丸い。外面に圏線と梵字文を描き、内口縁は圏線を配する。図18は腰部にやや丸みを持つ。高台は高めで、断面形態は三角状。外面は梵字文と下位に蓮弁文を描き高台脇と高台に圏線を巡らしている。見込に圏線を配する。図19は高台の断面形態が先端のやや丸い細目の方で外面に簡略した蓮弁文を巡らしている。いずれも生産地は福建・広東系、生産年代は18cである。

## 2. 皿

生産地は景德鎮窯系、漳州窯系、福建・広東系が得られている。生産年代は16c末～17c前半の明代から清代の17c後半～18c代のものである。図20は鏝状の稜花皿である。鏝の外面に圏線と草花文を施文し内面に圏線と四方禪文を巡らす。生産地は景德鎮窯系、生産年代は16c。図21は逆「八」の字状に開き口縁は端反、口唇は舌状を成し外面に圏線と蓮華唐草文を施文している。内面は圏線を巡らしている。生産地は景德鎮窯系、生産年代は16c前半～中葉。図22は逆「八」の字状に開き口縁は内湾。口唇は舌状を成す。外面に圏線と略化した字文を施し、内面に圏線を巡らしている。底部が基筒底になる小野分類C群に属することが考えられる。生産地は景德鎮窯系、生産年代は16c。

図23は胴部が逆「八」の字状に開く内面に花菱繋ぎ文を巡らしている。生産地は漳州窯系で生産年代は16c末～17c前半。図24は高台の断面形態は三角状を成す。外面の高台に圏線を巡らしている。内底面に草花文を施文している。生産地は景德鎮窯系、生産年代は16c前半～中葉。

## 3. 杯

図25に示す1点のみの出土である。口縁部を欠く資料で詳細は不明であるが外反の杯(小碗)と考えられる。外面に草花文を施している。生産地は景德鎮窯系、生産年代は16c～17cである。

## 4. 瓶

2点のみの出土である。生産地は景德鎮窯系、生産年代は15c末～16cに位置づけられる。図26は口縁がラッパ状に外に開き口唇は舌状を成す。外面に二条の圏線と縦の蕉葉文を描く。図27は高台の断面形態は台形状で畳付は丸い。外面腰下部に如意頭繋ぎ文を配し高台に二条の圏線を施す。

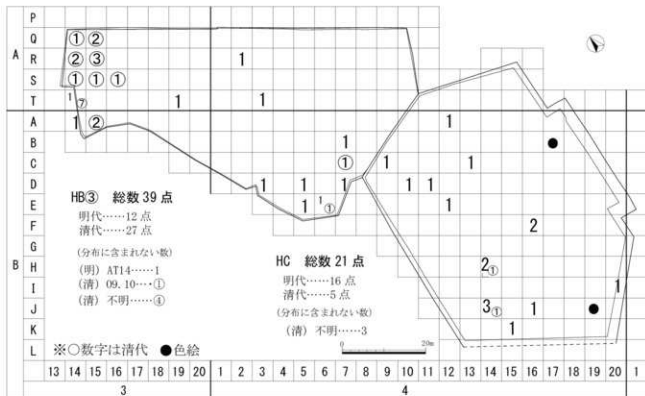
・色絵

碗の口縁部1点、胴部1点の計2点が得られている。図28は端反りの口縁で口唇は舌状を示す。外面に草花文を描いている。上絵のみの絵付けで、圏線と草花文の縁取りを赤で描き、文様の周りを緑色に塗っている。草花文の地色は剥落し不明である。B17 V層(後期層)出土。生産地は福建・広東系の生産年代は18cに位置づけられる。

第74表 染付・色絵 出土量

器種	器名	碗										盞			杯		瓶		鉢		合計	色絵地		
		明代					清代					明代	清代	明代	清代	明代	清代	明代	清代					
		景徳鎮窯系	漳州窯系	福建・広東系	不明	景徳鎮窯系	福建・広東系	漳州窯	景徳鎮窯系	景徳鎮窯系	漳州窯	景徳鎮窯系	景徳鎮窯系	漳州窯	景徳鎮窯系	景徳鎮窯系	福建・広東系	景徳鎮窯系	景徳鎮窯系					
口	胴	底	口	口	口~底	底	口	胴	底	胴	口	胴	底	底	底	胴	口	底	底	口・胴				
HC	I								1										1	2				
	II																				1			
	V	1												2	1						4			
	—	4	1	1	1	1			2					1		1		1			14			
HC小計		6	1	1	1	1	0	0	3	0	0	1	2	0	1	0	1	1	1	1	21			
HB③	I	1	1	1					1	6	3				1						13			
	IIa 遺構		1							2	5	1			1						10			
	IIc 遺構									1											1			
	III	1	1	1			1		1	2	1		1	1							9			
	IIIa	1	1	2				1			1						1				6			
HB③小計		3	2	3	0	0	1	1	5	13	6	0	1	1	0	2	0	0	1	0	39			
HC+HB③合計		9	3	4	1	1	1	1	8	13	6	1	3	1	1	2	1	1	1	1	60			
年代別計		19					29					5			3		1		2		1		60	
器種別計		48										8			1		2		1		1		60	

〈凡例〉HB③: IIa: 祝女殿内小皿、祝女殿内小皿03、04両器、0.5 IIc: 6列1脚口 明代: 14c~17c中 清代: 17c中~

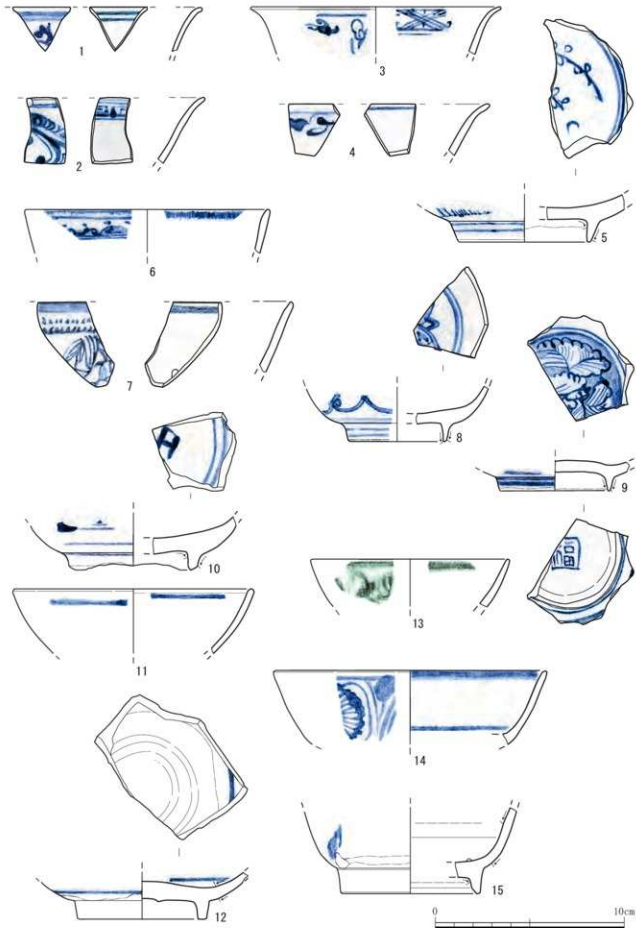


第154図 染付・色絵 平面分布

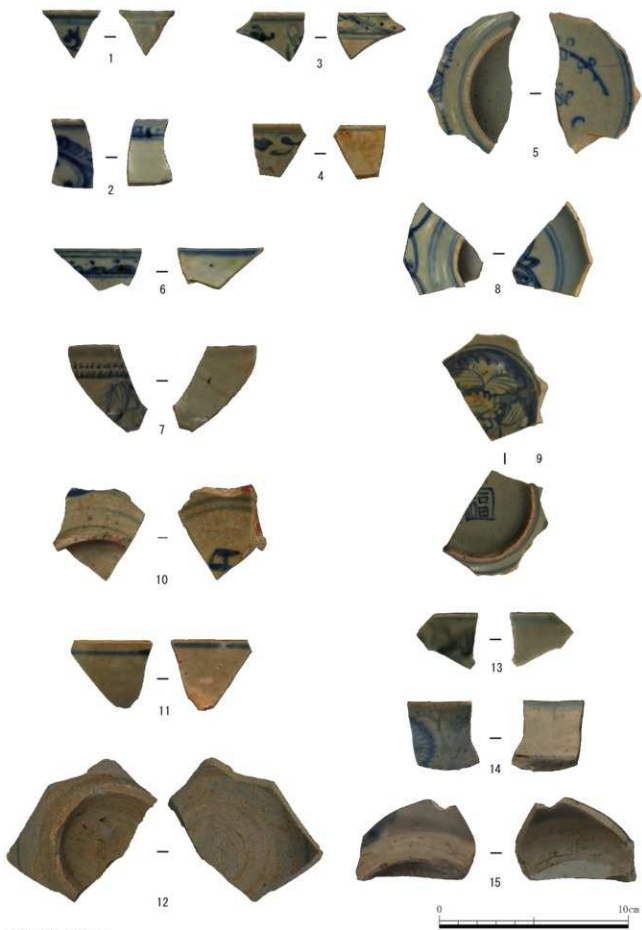
第75表 染付 観察一覽

図式番号	器種	分類	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (mm)	器形・文様構成	釉・色・質	表地色・質	生産年代・生産地	遺跡・グリップ・層遺構(台(ポット)番号)		
第155図・ 図式 109	瓶		1	口縁部	—	—	3.0	口縁は直線的に文と外反する。外面に二条の襷縁と唐草文を施す。内面は二条の襷縁を施す。	淡青白色 紫色は普通	灰白色 紫色は普通	15c末～16c前 景徳鎮窯系	HC D10 V (後期層) F1505	
			2	口縁部	—	—	3.0	口縁は逆「八」の字状に開き外反する。口唇は舌状を成し外面に襷縁と唐草文を施す。内面は二条の襷縁に唐草文を施す。	淡青白色 紫色は普通	灰白色 紫色	15c後～16c前 景徳鎮窯系	HB③ F6 III(10-11) 台707	
			3	I	口縁部	13.2	—	4.0	口縁は逆「八」の字状に開き外反する。口唇は丸状。外面に襷縁と唐草文を施す。内面は四方唐文を施す。	淡青白色 紫色は強い	灰白色 紫色	15c末～16c初 景徳鎮窯系	HB③ A3 T19 IIIa(2) 台1450
			4	口縁部	—	—	4.0	口縁は逆「八」の字状に開き外反する。口唇は丸状。外面に二条の襷縁と唐草文を施す。内面に襷縁を施す。	灰白色 紫色は普通	灰白色 紫色	15c後～16c前 景徳鎮窯系	HB③ B7 I 台314	
			5	底部	—	7.4	8.0	高台は内側の前面形態は三角状を成す。外面部に単純化した唐草文を施し、高台に襷縁を施している。内底に二条の襷縁と半月文を施している。	淡青白色 紫色は普通	灰白色 紫色	15c後～16c前 景徳鎮窯系	HB③ T3 IIIa 台1131	
			6	口縁部	13.0	—	4.0	口縁は直口で口唇は角形。外面に襷縁と波瀾文を施している。内面は襷縁を施している。	淡青白色 紫色は普通	灰白色 紫色	16c前～中 景徳鎮窯系	HC A12 II ② F2718	
			7	口縁部	—	—	4.0	口縁は直口で口唇は角形。外面に襷縁と波瀾文を施している。内面は襷縁を施している。	淡青白色 紫色はやや薄い	灰白色 紫色	16c前～中 景徳鎮窯系	HC J14 ② F283	
			8	III	底部	—	5.2	3.0	腰部が張り、胴部は直線的に立つ。高台は華奢な前面形態は三角状を成す。外面にアタラシク文を施し、高台に襷縁を施す。内底に二条の襷縁に唐草文を施している。	淡青白色 紫色は普通	白色 紫色	15c後～16c前 景徳鎮窯系	HC F16 ② F5017
			9	IV	底部	—	6.0	5.0	高台は内側の前面形態は三角状。内底は襷縁を成す。高台の内面は角形。外面、高台と高台に襷縁。内底に二条の襷縁と唐草文を施す。高台内に角筋を付す。	淡青白色 紫色は普通	白色 紫色	16c後 景徳鎮窯系	HB③ A14 I ① F83
			10	V	底部	—	6.8	5.0	外面に唐草文。高台と高台に襷縁を施す。内面は二条の襷縁に唐草文を施す。	淡青白色 紫色は普通	灰白色 紫色	16c～17c 景徳鎮窯系	HB③ B2 IIIa 台1219
第156図・ 図式 110	瓶		11	口縁部	12.6	—	3.0	胴部に丸みを持ち、口縁は逆「八」の字状に開く。口縁は直口。口唇の前面形態は丸状。口縁の外内面に二条の襷縁を施す。	淡青白色 紫色はやや薄い	灰白色 紫色	16c後～17c初 漳州窯系	HC K15 ① F191	
			12	底部	—	6.8	5.0	高台は外側に内側に角形。裏付は四角い。腰部外面と内面の見込に襷縁を施し、高台と内底は襷縁を施している。	淡青白色 紫色はやや薄い	灰白色 紫色	17c 福建・広東系	HB③ C7 III(9) ① F269	
			13	口縁部	10.4	—	4.0	口縁は直口。口唇は丸い。外面に唐草文を施している。	灰白色 紫色はやや薄い	灰白色 紫色	17c末～18c 福建・広東系	HC H14 ① F4	
			14	口縁部	14.4	—	4.0	胴部に丸みを持ち、口縁は直口。口唇は丸い。外面に唐草文と印花文を施し。内面は口縁と見込に襷縁を施す。	灰白色 紫色はやや薄い	灰白色 紫色	17c末～18c前 福建・広東系	HC I (表段) 台5073	
			15	VI	底部	—	7.4	5.0	腰部が丸く膨らみ、胴部は直線的に立つ。高台は外側の前面形態は三角状。外面に丸文を施す。内底と外底は襷縁。	灰白色 紫色はやや薄い	灰白色 紫色	17c末～18c前 福建・広東系	HB③ R15 I 台102
			16	底部	—	9.2	4.0	外側の高台で前面形態は三角状。外面に唐草文と内底は唐草文を施す。内底の縁を絞る目状に輪郭を施している。裏付は襷縁。縁の可能性が低い。	灰白色 紫色はやや薄い	灰白色 紫色	17c後～18c前 福建・広東系	HC I (表段) 台12811	
			17	口縁部	13.4	—	3.0～4.0	口縁は直口で口唇は丸い。外面に襷縁と雙字文を施す。内口縁は襷縁を施す。	緑がかる青白色 紫色は普通	灰白色 紫色	18c 福建・広東系	HB③ I ① F19	
			18	VII	底部	—	7.0	3.0	腰部にやや丸みを持ち、胴部は直に立ち上がる。高台の前面形態は細く先端が三角状。外面に雙字文を施す。下位に唐草文を施す。高台縁と高台に襷縁。内面は口縁と見込に襷縁を施す。	緑がかる青白色 紫色は普通	灰白色 紫色	18c 福建・広東系	HB③ S15 I 台299
			19	底部	—	7.2	3.0	高台の前面形態は細く先端が丸い。外面の腰下位に唐草文を施す。高台縁と高台に襷縁。	淡青白色 紫色はやや薄い	灰白色 紫色	18c 福建・広東系	HB③ Q15 I ① F95	
			20	口縁部	—	—	4.0	口縁は鐘状の種花文を成す。胴の外面に襷縁と唐草文を施し、内面は襷縁と四方唐文を施す。	淡青白色 紫色は強い	灰白色 紫色	16c 景徳鎮窯系	HC C9 V (後期層) F734	
第157図・ 図式 111	瓶		21	口縁部	12.4	—	4.0	逆「八」の字状に開き口縁は直反。口唇は舌状。外面に襷縁と唐草文を施す。内面は襷縁を施す。	淡青白色 紫色は強い	灰白色 紫色	16c前～中 景徳鎮窯系	HC C13 V (後期層) F411	
			22	口縁部	—	—	4.0	逆「八」の字状に開き口唇は内湾。口唇は舌状。外面に襷縁と略化した字文を施す。内面に襷縁。底部が帯形底になる。	淡青白色 紫色は普通	灰白色 紫色	16c 景徳鎮窯系	HB③ D3 III(8-11) 台582	
			23	底部	—	—	5.0	胴部は逆「八」の字状に開く内面に唐草文を施している。	淡青白色 紫色はやや薄い	灰白色 紫色	16c末～17c前 漳州窯系	HC T20 台5035	
			24	底部	—	10.2	3.5	高台の前面形態は三角状を成す。外面高台に襷縁。内底に唐草文を施す。	淡青白色 紫色は普通	灰白色 紫色	16c前～中 景徳鎮窯系	HC D11 V (後期層) F649	
25	瓶	胴部	—	—	2.5	外に開く外面に唐草文を施している。小瓶。	淡青白色 紫色は普通	灰白色 紫色	16c～17c 景徳鎮窯系	HC H14 ① F4			
第158図・ 図式 112	瓶		26	口縁部	7.2	—	3.0～4.0	口縁はフランクに外に開き外反する。口唇は舌状。外面に二条の襷縁と唐草文を施す。	淡青白色 紫色は普通	灰白色 紫色	15c末～16c 景徳鎮窯系	HB③ D5 IIIa ① F201	
			27	底部	—	—	8.2	高台の前面形態は台形状。裏付は丸い。内底面に輪郭の調整を施し考えられるフープの痕が確認できる。	淡青白色 紫色は普通	灰白色 紫色	16c 景徳鎮窯系	HC F16 ② F295	

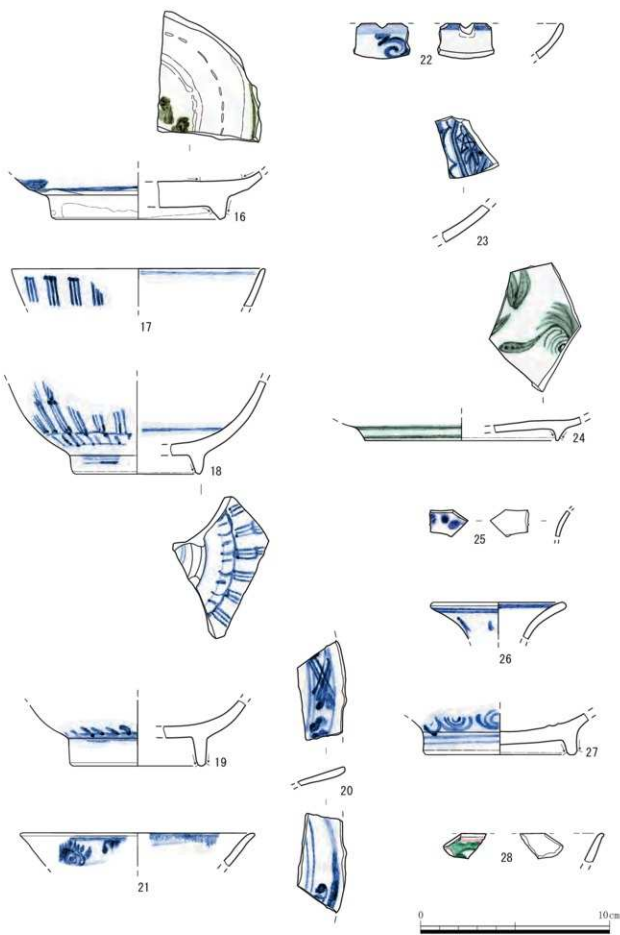




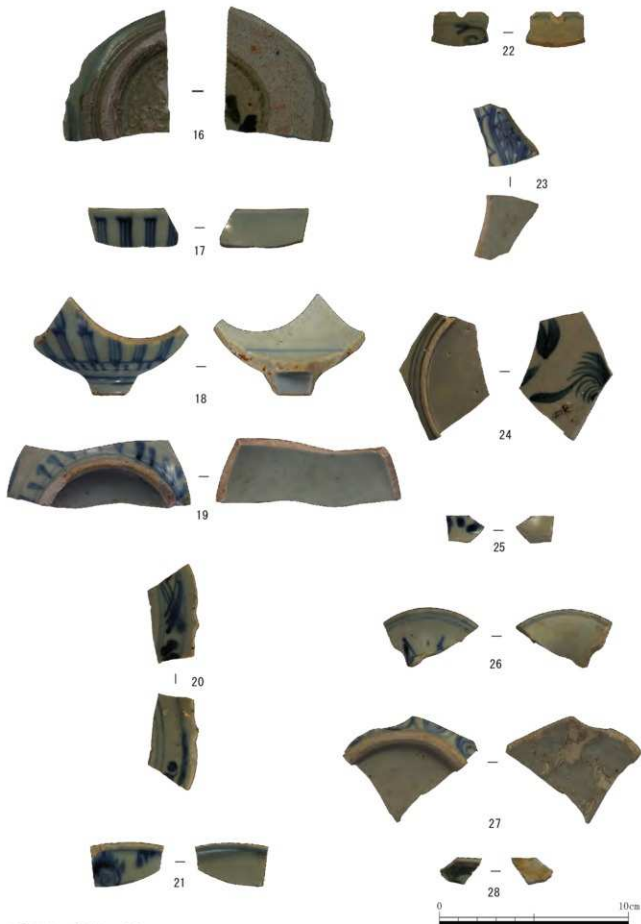
第 155 图 染付 1



图版 109 染付 1



第156圖 染付2・色絵



図版 110 染付 2・色絵

## (11) 褐釉陶器・半練土器

褐釉陶器は総数 86 点の内、中国産 60 点、タイ産 24 点、東南アジア産 2 点が得られている。器種は壺が殆どで 84 点、袋物が 1 点、壺甕不明が 1 点であった（第 76 表）。中国産・東南アジア産の生産年代はいずれも明代、タイ産の生産年代は 15c～16c に位置づけられるものである。東南アジア産は大型の壺甕鉢の器種不明の胴部が 2 点えられているが小破片であることから今回図化していない。

層別出土量は HC で V 層に多く出土しているが V 層が後期層であることを踏まえると後世の擾乱を受けた結果と考えられる。HB ③では III a に集中する。平面分布においては HB ③の南側にやや分布が集中する傾向にある。以下に主なものを第 158 図、図版 111 に観察一覧を第 77 表に示した。

### 中国産

当該の陶器は壺が殆どであったが、瓶か小壺などの全形を確認できないものを袋物で報告し、壺は法量別に大型、中型、小型に分類し集計した。

大型の壺が 12 点得られている。図 4、5 は大型の壺破片である。4 は肩が張り頸部は内向、器表面に楕円形の叩き締め痕が認められる。5 は器面に轆轤痕が顕著な胴部資料である。

中型の壺は 20 点得られた。図 1 は頸部が内向し口縁は外側に折り丸め、玉縁状を成す。図 2 は口縁が外に開き口唇の断面形態は三角状、いずれも口縁の上端部を外側に折返し成形している。外面は器面調整され轆轤痕はあまり認められない。図 6 は縦付きの外耳で壺の肩から頸部に貼付されるものであるが、胴部の器厚から中型壺に貼付されたものと考えられる。

小型の壺は 4 点得られているが、小片胴部のため図化はできなかった。図 7 は瓶か小壺と考えられる袋物である。なで肩で胴部は丸くなることが推察できる。外面は轆轤痕が顕著であり、薩摩産の可能性もある。

### タイ産

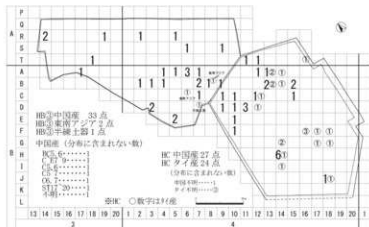
器種は壺の中型 5 点、小型 1 点、法量不明 17 点と壺甕不明が 1 点得られている。図 8 は頸部が肩部から大きくラッパ状に大きく外反、口縁部は鐮縁状をなし、鐮の上端を僅かに摘み上げている。口唇の断面形態は三角状をなす。図 10 は肩が鐮形に張り肩部に横耳を貼付している。図 9 は立ち上りの開きが緩やかな底部で、底面に砂目痕が認められる。図 11 は胴部が砲弾状の形態を示す資料で内面は轆轤痕が顕著である。

### タイ産半練土器

壺の口縁が 1 点得られた。図 12 はラッパ状に大きく外反する壺の口縁で口縁部上端を外側から内側に折り返している。口唇は丸く、口縁内面の折り返し部分に一条の圈線を入れている。口縁部の先端を外側から内側に折り返す手法や形はタイのメナム産の褐釉陶器の壺によく似ている。生産年代は明代に位置づけられる。

### <註・参考文献>

沖縄県立蔵文化財センター 2010『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書（I）』『沖縄県立蔵文化財センター調査報告書第 54 集』



第 157 図 褐釉陶器・半練土器 平面分布

第76表 褐釉陶器・半練土器 出土量

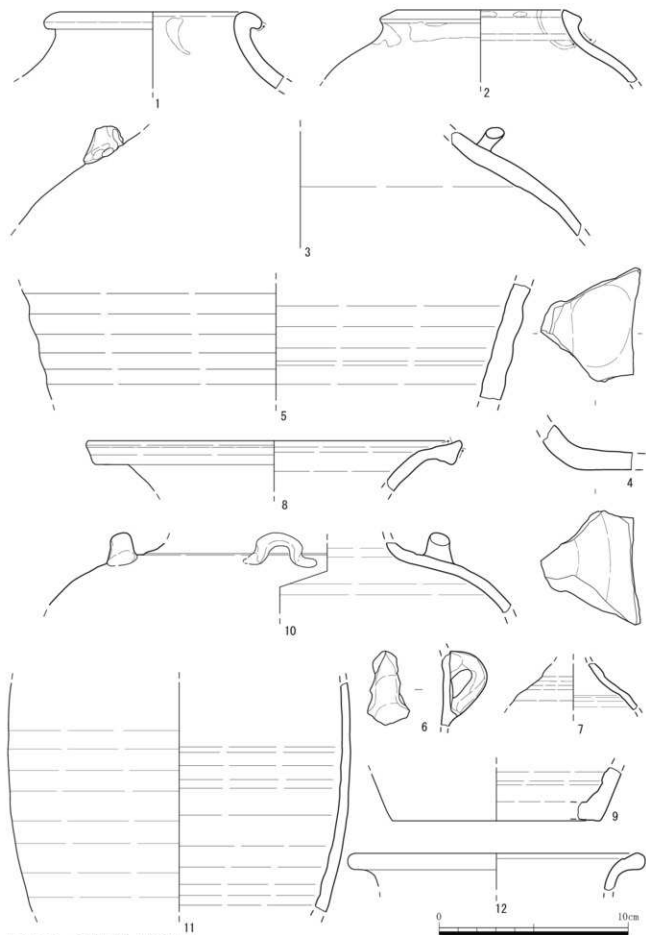
遺跡	層	産地	器種	遺構	中国産										タイ産					東南アジア産	合計	タイ産半練土器	
					蓋					袋物					蓋					蓋or壺			
					大	中	小	不明	—	大	中	小	不明	—	大	中	小	不明	—				
HC	I	表探			1													1			3		
	II	近世							4						1				2		7		
	IIc	SK02							1												1		
	V				5	1			5										5		16		
	—					2			6	1	1	1	2	1	1	9	1				24		
	HC 小計				6	3	0	0	0	16	1	1	1	3	1	1	16	1	1	0	51	0	
HB③	I				1		2		1												4		
	IIb																				1	1	
	IIc	遺構					2	1	1												4		
	III				2		2														1	5	
	IIIa				1	1	6		1	5												14	
	IIIb								1	1												2	
	IIIc				2				1													3	
不明									1												2		
	HB③ 小計				6	1	14	1	4	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	35		
HC+HB③ 合計					12	4	14	1	4	23	1	1	1	3	1	1	16	1	1	2		86	1
産地別計					60										24					2		1	

HB③: IIc SK32, 石列1群, 石列4群-SL06

第77表 褐釉陶器・半練土器 観察一覽

(法量単位:cm)

第四 図版	図 番 号	産 地	器 種	部 位	分 類	口径 器厚 底径	器形・特徴	釉 色・範 疇・様 式取り	素地 色・質・混 和材	遺跡・グ リッド・層 遺構・台 (フット)番 号
第 158 図 版 111	中国 産	蓋	口縁部	中型	11.4 0.8	頸部は内向し口縁を外側に丸め、玉縁を成す。	黄褐色 外面口縁下部～内 面無釉	淡橙、細かい、茶 黒白細粒子	HB 115 V(後期層) HB③ B4 IIIa 台253	
					10.4 0.5	口縁は内向し外に折る口唇の断面形 態は三角状。	暗褐色 外面頸部と内面無 釉	淡褐色、細かい、 茶黒白細粒子	HB③ R19 IIIa 台187 HB③ R19 IIb F21 HB③ S18 IIIa 台188	
					— 0.8	丸味のある胴部に横耳を貼付してい る。	緑褐色 外面	桃茶色、細かい、 茶黒白細粒子	HB③ R5 IIc 石列4群-SL06 台131 HB③ S6 IIIa 台336	
					— 0.9～1.0	肩の張る頸部資料、器面に叩き痕を 認める。	緑褐色 外面内面無釉	淡褐色、細かい、 黒白細粒子	HC T12 V(後期層) F629	
					— 0.9～1.0	外面に轆轤痕が顕著である。	緑褐色 外面内面無釉	淡褐色、細かい、 黒白細粒子	HC A12 V(後期層) F722	
					— 0.8	縦耳断面形態は「D」字状。	褐色 内面露胎	灰色、細かい、黒 白細粒子	HB③ B9 IIIa 台21	
					— 0.2～0.3	なで肩の小瓶か小壺か、外面に轆 轤痕が顕著、腐摩痕の可能性ある。	黒褐色 外面	橙色、細かい、白 細粒子	HC H14 F5	
	タイ 産	蓋	口縁部	中型	20.0 0.9	口縁部はフック状に外に開く、口唇 の断面形態は三角状。	黒褐色 外面内面	紫灰色、細かい、 黒白細粒子	HC G14 F22 HC D15 V(後期層) F932	
					— 11.0	外面にやぐり立上がり、 外底は砂目痕がみられる。	外面内面無釉	紫灰色、細かい、 黒白細粒子	HC 表探 台12825	
					— 0.6～0.7	肩の張る胴部に横耳を貼付してい る。	黒褐色 内面無釉	紫灰色、細かい、 黒白細粒子	HC F16 II(近世層) F1230	
					— 0.6～0.7	胴部は胎形状、内面に轆轤痕が顕 著である。	黒褐色 内面無釉	橙色、細かい、白 細粒子	HC F17 F134 HC F17 F135	
					— 15.8 0.5～0.8	口縁部はフック状に外反、口縁部上 端部を外から内に折り返す。口唇は 丸い。	無釉	淡い褐色、細かい、 白・黒細粒子	HB③ D7 III(10-11) 台704	



第158图 褐釉陶器・半練土器



图版 111 褐釉陶器·半練土器

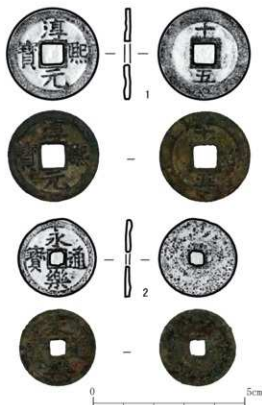


## (12) 銭貨

HCから2点の完品資料が得られ、いずれも中国銭であった。

**南宋銭：淳熙元寶**（図1）は、径3.0cmを測る折二銭である。背に「十五」の文字が残り、淳熙15（西暦1188年）の鑄造ということになる。淳熙元寶には小平銭と折二銭があり、日本で検出される淳熙元寶折二銭は非常に少なく、たまに検出されても磨輪されていることが多い（永井1996）。北谷町内の遺跡では『北谷城』（1984）から完品1点の出土例があり、この時点での県内出土初例とされた。

**明銭：永楽通寶**（図2）は、1408年初鑄造である。日本の出土銭貨の中ではその出土量が上位を誇るが、中国では殆ど出土しない。国内で作られた鑄写銭は、中国で作られたものに比べて銅の割合が高いとされる（永井1996）。本資料は、特に裏面への緑青付着が顕著である。



第159図・図版112 銭貨 (S=4/5)

第78表 銭貨観察一覧

所属 図版	図番号	銭貨名	背文字	初鑄地	現存	外径 (mm)	内径 (mm)	縁幅 (mm)	縁厚 (mm)	重量 (g)	内縁・観察	地区・ブロッコ・層序 遺構・台帳番号
第159図	1	淳熙元寶	十五	1174 (1188) 南宋	完	3.0	0.7	2.5	2.0	7.4	折二銭。縁・字明瞭。	HC B16 遺構 03135
図版112	2	永楽通寶		1408 明	完	2.5	0.5	1.5	1.5	3.3	縁・字明瞭。緑青。	HC C14 V層 03721

## (13) 木製品

人工的な加工が認められるものを選抜し、3点の写真を掲載した。図1は柾目の板材である。板面には凹凸があるため、手斧等で成形されたものと考えられる。完全に乾燥しており、非常に軽い。図2は棒状製品で、上方先端は丸みを帯び、加工・使用の痕跡と考えられる。こちらも完全に乾燥しているが、比較的重量感を残しており、堅木の質感を受ける。図3はHCクムイ状遺構からの出土であり、近世に帰属すると考えられる。柾目取りした小角材の3/5程度を削り出し、円柱状に仕立てている。用途は全く不明であるが、完品と思われる。



図版113 木製品 (S=3/5)

第79表 木製品観察一覧

図版	図番号	種別	寸法 (cm)	乾燥重量 (g)	観察事項	地区・ブロッコ・層序 遺構・台帳番号
図版113	1	板材?	残存長11.0、幅4.3、厚0.4	7.9	柾目取り、上下欠損。断面中心に凹み、乾燥状態で遺存。	HC ③ 36 遺 603層 台 832
	2	棒状製品	長11.5、径1.6×1.2	16.7	上方先端に使用・加工痕。乾燥状態で遺存。堅木。	HC ③ 75 遺 603層 台 338
	3	不明	長10.8、幅2.0、厚1.4、円柱部径1.0×0.8	9.4	柾目取り、断面に円柱部を伴出。	HC G13 3-6イ D1206

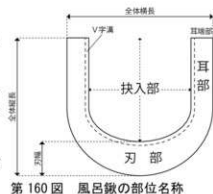
## (14) 鉄製品

U字に挟入部のV字溝に木製柄をはめ込む「風呂鉾」が、HB

③・HCから1点ずつ得られた。

風呂鉾についての部位名称については林（2010）を参考にしたが、本項の内容に合わせて各所改変している（第160図）。本書中での便宜的呼称として取り扱うこととする。

図1は、HB③耕作域の溝SD06の検出プラン内（IV層上面）で出土した。



第160図 風呂鉾の部位名称

- ・ 全体形の縦横比は、7：10の横長となる。耳部外縁が内傾するため、扇形ともいえるべき特徴的な恰好を呈している。
- ・ 挟入部の縦横比は、ほぼ1：1。僅かに外傾するU字形を呈する。

図2はHCの表採資料であり、帰属時期は不明と言わざるを得ない。

- ・ 全体形の縦横比は、9：10と僅かに横長となるが、見た目の印象ではさほどそれを感じない。刃幅・耳幅ともに約1.5cmと一定で、U字形を呈する。
- ・ 挟入部の縦横比は15：13～14と、全体形比を僅かに逆転するが、やはり印象的には1：1に近い。

損耗による形状の変化は当然考慮しなければならぬものの、それでもやはりこの2点の資料には、以下の点においてタイプとしての明瞭な差異が感じられる。

- ① 挟入部の大きさ、即ちはめ込む「風呂」の大きさが全く異なること。
- ② 刃部の損耗を加味しなくてはならないが、両者の刃幅に1cmほどの大きな開きがあること。
- ③ 刃部ほど損耗しないうえに耳部には、そもそもの形態的差異があったと考えられること。
- ④ 実測図ではうまく示せないが、素材板の厚さが異なること（図2は非常に薄い）。
- ⑤ 素材の質感や錆化の様子にも異なりが認められ、鉄素材の違いが窺われること。

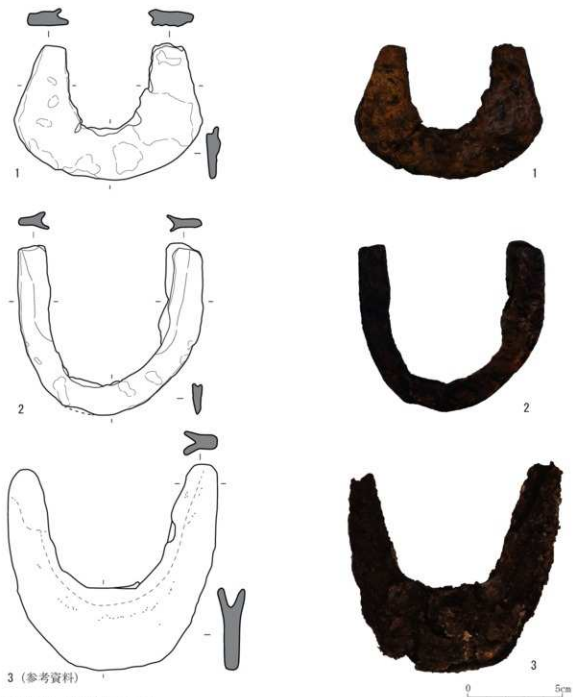
沖縄県内における風呂鉾は、これまで久米島地下原洞穴で1点の採集事例があるのみであった（1987上江洲）。比較参考するため、この地下原洞での採集資料実測図を図3として掲載した。

- ・ 全体形の縦横比は、11：12と僅かに横長となる。耳部は外傾する。
- ・ 挟入部も外傾しているため、その縦横比は正確ではないが、ほぼ1：1か。

この実測図は上江洲（1980）によるものであるが<sup>211</sup>、そこには同資料の写真も掲載されている。この写真を見る限り、鉄銹の付着が顕著である印象を受ける。その後作成された県内出土鉄器集成資料（1997沖縄県立博物館）にも同資料の写真が掲載されているのだが<sup>212</sup>、銹取り他の保存処理がなされたと見えて鉄器輪郭がよりはっきりしている。特に耳端部の形状は、実測図では丸みを帯びているが、後年の写真では、今回出土資料と同様に角張っている。全体形・挟入部についても、写真では台形気味な印象を受ける。上記縦横比や観察数値については、銹取り前の実測図を基にしていることを付記しておく。

今回得られた2点の風呂鉾は、沖縄県内では地下原洞穴に次ぐ発見であり、層位的発掘調査において得られたものとしては初例となる。地下原洞穴資料の報告者は上江洲均氏で、民俗学的視点からの考察・予察をしている。洞穴内の岩壁底に置かれていたとのことで、帰属年代が判然としない資料ではありながらも、「まず明治以降ということはあるえないはずで、古いタイプの鉾と見たい。」<sup>213</sup>とした。『平安山原A遺跡』（2016）において戦前遺物として報告した鉄鉾は、全て木柄に直接長

方形板状の鉄製刃を取り付けた「刃鉄」であり、これが近代沖縄におけるティピカルなものであることは、同氏の民俗事例調査<sup>23)</sup>によって報告されている。また、考古的見地から下地原洞穴が同じ久米島のヤジャーガマ遺跡と同系列であるという意見から、この採集資料がグスク時代の産物であると仮定し、「鉄を産しない沖縄では、鉄は輸入にたよる外なかったので、刃鉄のような鉄を作ることも出来ようはずがない」<sup>23)</sup>と、その蓋然性が充分にあることを指摘している。



第161図・図版114 鉄製品 (S=1/2)

第80表 鉄製品 観察一覧

所収 図版	図番号	種別	全体 (cm)		挿入部 (cm)		刃部 (cm)		重量 (g)	地区・ブリアド・層 遺構・台 (取) 番号
			縦長	横長	縦長	横長	幅	最大厚		
第161図 図版114	1	風刃鉄	7.2	10.0	4.5	4.6	2.7	0.8	87.7	HR③ Q9 S306 直上・台 D2128
	2	風刃鉄	9.0	9.8	7.4	6.3	0.6	0.5	67.6	HC 1 (表採) 台 5089
	3 (参考)	風刃鉄	10.9	11.7	6.4	7前後	4.3	0.7	-	久米島下地原洞穴採集資料

実際に3点を並置してみると、共通点と相違点が3者3様に混在している。風呂鉢としての形態分類をする以前に、鉢・鉢の混同も留意しなければならないが、端的な特徴を第81表に示した。これによると、図2が他2者と共通あるいは近似する要素が最も少ないため、形式年代を考える上では図2が最も古相或いは新相を示している可能性がある。これ以上の形態分類や時期変遷を検討するには事例に乏しいと言わざるを得ないが、今回の層位的発掘事例を1つの定点として、今後の研究深化が進んでいくことが期待される。

第81表 各鉄製風呂鉢特徴一覧

図番号	出土地	所属時期	全体形	鉄入部	刀輪	厚さ	鉄鍔
1	田中③	貝塚時代後期後半～古斯塔時代	横長の楕形。	小	中	厚	顕著。
2	HC	不明(表録資料)	縦横1:1の丸字形。	大	狭	薄	比較的少ない。
3	下地原副穴	古斯塔時代前半か?	縦横1:1の丸字形(やや外に開く)。	中	広	厚	顕著。

### 図1資料の出土状況と年代観の検討

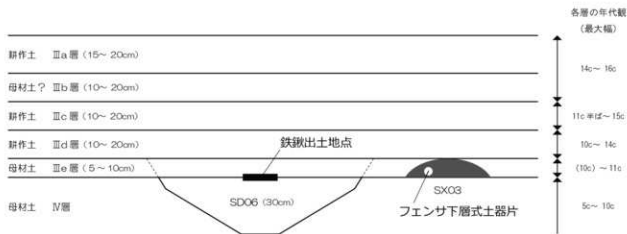
再述になるが、図1資料の出土状況を確認する。Ⅲe層除去後のⅣ層上面で溝(SD06)が検出された。この溝の検出プラン(溝埋土)上面において、本資料は見つかっている(図版115)。遺構検出にあたって本来の掘り込み面より少し掘り下げるといことは間々ある上、本溝構築面がⅢe層上面であった可能性がある<sup>28</sup>ことも考えると、この遺物はSD06埋土中にあったという可能性もある。

層位発掘の通常の見方からすれば、本資料はⅢe層より古く、溝(SD06)構築(或いは埋没)より新しいことになる。しかし、この鉄鉢が実際に耕起作業に用いられたものだとすると、木杭やウシ蹄のような痕跡の生じ方と同様に、上層から突き抜けた形でそのまま遺存した(農耕具の先は土中で外れると、そのまま埋まってしまう)という可能性も充分に考えられる。従って、先述した層位的年代観だけをもって断ずることは危険である。本品を覆っていたⅢe層或いはⅢd層を耕作対象としたと解釈した方が農耕の在り方としては自然であるため、本資料がⅢd層期に帰属する蓋然性は高いと考えられる。

第1節層序でも述べた通り、Ⅲd層の年代観は、少ないながらも層中から出土したカムイヤキ片をもって11c後半以降を当てている。しかし、上層からの遺物混入やⅢd耕作活動の長期継続の可能性をおお考慮するならば、Ⅲd層の年代観は古くなり得るし、そもそも鉄鉢の層位突き抜けがなかった(耕起作業とは無関係に遺棄された)とするならば、鉄鉢はⅢd層の年代に関わらずに10c中まで遡る可能性も生じる訳である。くどいことを自覚しつつ、再度模式図(第162図)<sup>29</sup>を示した上で、鉄鉢の年代観については以下のような複数の解釈が成立し得ることを提起したい。

- ① 1) 本資料はⅢe層の下から出土した。→2) 耕起に伴う層位突き抜けの可能性が高い。→3) 本資料は新しく見てⅢd層に帰属する。→4) Ⅲd層からはカムイヤキ片が出土している。→5) 本資料は11c後半以降のものである。
- ② 上記①3)まで同じ→4) Ⅲd層出土のカムイヤキ片は上位からの混入或いは耕作の長期継続に関わるもの。→5) Ⅲd層はくびれ平底期に帰属する。→6) 本資料はくびれ平底期のものである。
- ③ 上記①2)まで同じ→3) 本資料は古く見てⅢe層に帰属する。→4) Ⅲe層は10～11c頃の堆積である。→5) 本資料は10～11cのものである。
- ④ 上記①1)に同じ。→2) 本資料は耕起作業とは無関係に遺存した。→3) 本資料を覆っていたⅢe層は10～11c頃の堆積である。→4) 本資料は10～11c以前のものである。

いずれにしても、本資料はⅢa～e層にバックされており、遺物の層位突き抜けを考慮したとしても、グスク時代を下限とするものであることは確実に言える。



第162図 鉄製風呂鍬出土状況 層位模式



図版115 SD06検出プラン上での鉄鍬検出状況 (西より)



図版116 鉄製風呂鍬出土状況 近景 (西より)

註1: 上江洲 (1980) に記載された「図1下地原洞収集の銀先実測図」をスキャンの上、デジタルトレースを行った。本書掲載にあたっては、実測図の向き回転、断面図位置の移動等の改変を加えている。

註2: 沖縄県立博物館 (1997) にカラー写真図版として掲載された「下地原洞穴遺跡 (具志川村) 発見の鉄鍬」をスキャンの上、画像処理ソフトにより切り抜いたものを使用した。

註3: 上江洲 (1982) 123頁からの引用。

註4: 上江洲他 (1983) に詳しい。

註5: 上江洲 (1982) 121頁からの引用。

註6: 第IV章第1節参照。

註7: 第162図最右方の各層位の年代観について。上下の層位に与えた年代の重なりが大きいの、各層位個別に考えられる年代を提示しているのみで、整合・調整を行っていないからである。各層の年代想定根拠は以下の通りである。

Ⅲa・b層: 出土した青磁等の年代

Ⅲc層: カムイヤキ・青磁等の年代

Ⅲd層: カムイヤキの年代及びⅢe層の様相

Ⅲe層: 層中炭化物の年代測定結果

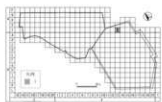
Ⅳ層: SX03出土のフェンサ下層式土器及び層下堆積物の年代測定結果 (『平安山原B遺跡』(2015))

### (15) 瓦質土器

湧田産と考えられる瓦質土器が1点確認できた。播鉢の胴部で僅かに櫛目が残り、単位ごとの間隔は2.5cmである。器色は灰色で胎土にはやや大粒の黒色粒が混じるが精良で、器厚は1.7cmを測る。HC T13 V (後期層) より出土した。



第163図・図版117 瓦質土器



第164図 瓦質土器 平面分布

### (16) 本土産陶器

近世期では肥前産の碗・皿、備前や薩摩産の播鉢、薩摩・信楽及び中国地方産の壺・甕類、瀬戸美濃産の香炉等19点、近代期では関西系の碗、硬質陶器の洋皿の2点が得られた(第82表)。ほとんどの遺物がHB③の「祝女殿内小」の屋敷外縁部と石列1群周辺より出土し、近代陶器はHCからのみ出土した(第165図)。特徴的なものを第166図及び図版118に示し、第83表で観察一覧を示す。

図1は筒状の鉄釉碗であるが焼成不良のため鉄釉の発色が呉須に似る。図2は備前産の播鉢で櫛目は10本を数え、外面縁帯肥厚部に混和材の石灰岩粒(大)がのぞく。図3・4は同一個体の可能

第82表 本土産陶器 出土量

遺物	器種	器形	口径	口径	器厚	器形	文様/発色/器色	混和材/混染物/他	成形	生産年代	出土位置	出土層	合計												
1	表座	唐津	内野山	九州	備前	薩摩	薩摩沖調	肥前	薩摩	薩摩沖調	薩摩	伊予	丹波	中国地方	備前	不明	徳島	2	3	1	1	4			
不明	(V)後期																								
小	小	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	6	
1	B=祝殿小(SL)	1	1	2																					6
B=石列群																									2
B=																									3
B=																									1
B=																									1
不明																									1
小	小	1	1	2	0	2	1	0	1	1	0	1	1	1	1	0	1	0	1	0	1	0	1	15	
器種別合計																									21

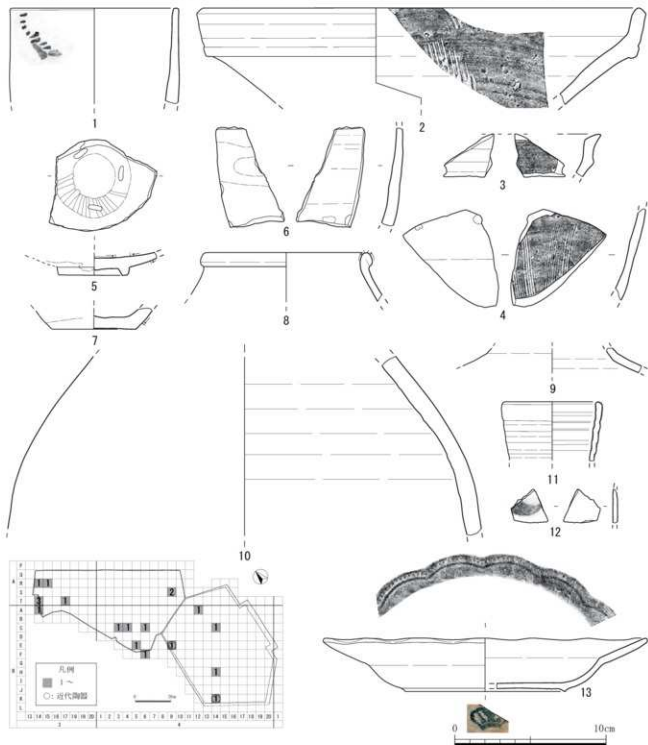
第83表 本土産陶器 観察一覧

(法量単位:cm)

図版	年代	産地	器種	部位	口径	口径	器厚	器形	文様/発色/器色	混和材/混染物/他	成形	生産年代	出土位置	出土層
1	近代	九州	碗	口縁	11.1	0.2~0.4	0.4	直口・筒状	鉄釉/透明釉/黄白/発成不良で発色せず	-	口	江戸	HB②59 1台374	
2	近代	備前	播鉢	口縁	29.8	0.8~1.0	1.0	外面口縁部下方に垂り出した縁	櫛目10本/茶系少灰系	白色粒・赤色粒・石粒/同粒類	結	16c前半	HC A12台2719-726	
3	近代	薩摩沖調	播鉢	口縁	-	0.5	-	「く」字状に屈曲	櫛目/棕色土?で模刻	白土が底状に入る	粘	17c前半	HB②	
4	近代	肥前	皿	底	4.5	0.5	0.5	口縁部に向かって延びる	櫛目10本/茶	白土が底状に入る/同粒類	粘	17c前半	HB②E3皿a/c203	
5	近代	薩摩沖調	袋物	胴	-	0.7	0.7	大型	不明/鉄釉(花の目録刺ぎ(土目録)) / 白灰	不明	口	近世	HC表長台12811	
6	近代	薩摩沖調	袋物	底	-	0.8	0.8	小型	白土を流す/茶系	白土を流す/茶系	粘	江戸	HB②C5-7皿c石列群608	
7	近代	薩摩	袋物	底	5.6	0.8	0.8	小型	不明/鉄釉/赤系	砂粒/同系/ヒナダ	口	18c	HB②H15 1台79	
8	近代	薩摩	皿	口縁	11.4	0.4	0.4	胴部は内向し、口縁を外側に折り返し、今や縁状	黒土/灰/褐色(口唇露部)	茶黒白磁粒子	結	17c	HC C14 V(後期層)1718	
9	近代	伊予	皿	胴	-	0.5	0.5	十字形	不明/無釉/淡い褐色	白・黒磁粒子/外面は良く調整され内面にロウ粉	口	江戸	HB②T17皿b/c825	
10	近代	丹波	中国地方(日本高橋)	壺	頸	-	1.0	大型・胴部は縁や少く丸紐	不明/鉄釉/茶系	不明	粘	17後~18c	HB②A14 1台62 T14皿a祝殿小(SL)台190	
11	近代	瀬戸美濃	香炉	口縁	6.8	0.4~0.5	0.5	小型・筒状	白土で陶製/灰(模刻)/洗練	白土で陶製/灰(模刻)/洗練	口	16~17c	HC H14台3030	
12	近代	関西	碗	胴	-	0.3	0.3	小片のため不明	鉄粒丸文(手掻き)/透明釉/黄白	-	口	20c	HC K14台3045	
13	近代	三重	洋皿	口縁	21.5	0.3	0.3	硬質陶器	口縁部:梅花,底面:王冠(クローン)は山形製陶所?ウ	-	口	20c	HC 伊台3069	

(成形凡例) 結:粘土上/口:口口 型:型押し

性のある播鉢で櫛目の幅は狭くて浅い。口縁部の形状から沖繩産の可能性がある。図5は皿の底部で蛇の目状の釉剥ぎの上に胎土目が残る。見込の釉剥ぎを行う際に素地が硬かったせいか、右回りで飛びガンナ状を呈する。図6・7は袋物で6は胴部で装飾と思われる白土が見える。サイズから大型になると思われる。7は小型の底部で瓶の可能性あり。図8は薩摩産の小壺の口縁部で口唇部は折り返して玉縁状にし、縁のみ釉を剥ぎ取る。図9は信楽産と思われる壺の胴部で外面はザラザラしている。図10は大型の壺か甕と考えられる胴部で、ナデ肩で緩やかに膨らむようである。図11は瀬戸美濃産の小香炉で被熱により変色している。図12は鉄絵の胴部であるが小片のため詳細不明。図13は硬質陶器の洋食器(スープ皿)で、輪花の周縁には微小な粒が並ぶ。底面には王冠(クロム押印)が見られる。



第165図 本土産陶器 平面分布 第166図 本土産陶器

### (17) 本土産磁器

近世期中碗1点、小杯1点、瓶2点、近代期中碗11点、小碗15点、碗（サイズ不明）10点、大皿2点、皿11点、小皿1点、鉢1点、急須8点、蓋物（文房具）1点、現代期の香炉1点を確認した（第84表）。産地としては近世では肥前系のみ、近代では関西系1点、瀬戸美濃系21点、砥部もしくは伊豆産11点、肥前系10点、現代では瀬戸美濃産が1点確認できた。出土状況としてはHB③の「祝女殿内小」の屋敷外縁部やHB③とHCの境界上に位置する攪乱からの出土が多数を占めた（第167図）。以下特徴的なものを第168図及び図版119に示し、個々の観察は第85表に記す。

図1は肥前系の中碗で外面に山水文が描かれる。図2は有田産の小杯で花卉文を描くが呉須の発色はやや鈍い。高級品である。図3は肥前系の発色の悪い鉄絵瓶で、胎土に鉄分が入り込み茶色に



図版 118 本土産陶器







第168圖・圖版119 本土産磁器

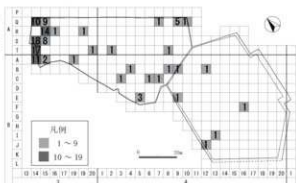
## (18) 沖繩産施釉陶器

HCで20点、HB③で132点(うち「祝女殿内小」から53点)が出土した。器種別には碗57点、小碗3点、碗(サイズ不明含)28点、大鉢1点、鉢1点、急須17点、酒器2点、鍋1点、蓋3点、火取1点、瓶8点、小壺11点、壺2点、袋物2点、不明15点(急須か酒器を含む)である(第87表)。分類は平安山原A遺跡(2016)に準じて行った。全面が灰釉(I類)もしくは白化粧+透明釉(以下白化粧と表記)(IV類)の碗が最も多く、鉄・飴釉(II類)は急須や瓶・壺などの袋物に多く見られた。掛分(III類)は8点のみであった。「祝女殿内小」でも同様の傾向が見られた。

図1~7はいわゆる灰釉碗で口縁部と底部が確認できた。口縁部(1~3)は直口で文様は見られない。底部(4~7)は高台から腰部にかけて露胎。図8・9は掛分碗の底部で、内面に白化粧、外面に鉄釉(8)や銅緑釉(9)が施され、腰部は丸味を帯び、見込には蛇の目状の釉刺ぎが施される。図10~15は白化粧碗で見込に蛇の目状の釉刺ぎ、畳付に釉刺ぎが施される。無文と有文があり外面にコバルト印花(図13)、口錆(図14)等が確認できた。図16~18は小碗で16は白化粧と鉄釉の掛分、17・18は白化粧が施される。また、18には10面の面取がなされる。図19は大鉢で鉄釉と灰釉を掛分、内面には白土で草花?が描かれる。図20~25は急須で、口縁部では蓋受けの高さ・厚み・形状に違いが見られ、胴部の文様の有無がある。25は型作りの急須で鉄泥を掛ける。素地や形状から本土産陶器の可能性も否定できない。図26は酒器で器形の判る資料。内外面共に白化粧を施すが文様は見られない。注口の直下に脚が配置されている。図27は鍋の底で内面は鉄泥、外面には煤が付着する。図28~30は蓋でいずれもかかりと撮みを持つ。30の上面には鉄釉碗(器厚4mm・直径約9cm)を伏せ焼きにした結果、熔着し引き剥がした痕が残る。図31は直口タイプの火取で内面は無釉であるが、煤等の付着は見られない。図32は小壺で胎土は精良である。図33・34は瓶でいずれも胴に最大径を持つ。34は接合不可であるが同一個体と考えられ、図上での復元を試みた。図35・36は小片のため詳細不明だが、35は古典焼きで内面にも施釉され厚手であることから、急須の可能性もある。36は肩部付近のみの出土であるが、酒器が想定された。

第86表 釉色別使用比較

器種	碗	小碗	碗(XX不明)	大鉢	鉢	急須	急須	酒器	鍋	蓋	火取	瓶	小壺	壺	袋物	不明	合計
I(灰)	35		11										2				140
II(鉄・銅)	1	8	2		7	1	1	1	3	1	5	1	2	2	8	4	43
III(掛分)	1	4	3	1													12
IV(白化粧)	30	3	5	9		7		1				1					57



第87表 沖繩産施釉陶器 出土量

遺跡	層	遺構	器種																	合計						
			口	口~底	底	口~底	底	口	底	底	口~底	口	底	底	注口	脚	蓋	火取	瓶		小壺	壺	袋物	不明		
HC	I	表探		3																				8		
		不明	1		1		2														1	6			12	
		小計	1	0	3	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	
HB③	I	攪乱	1		1		1																		5	
		IIa	祝女小(SD01)	8		8	6	1	2	4	3				1	3	4	1		1	1	2			1	53
		祝女小(SL)	1		2																					4
		IIb	SK13	8		3	6	2	1	3	3	5	1			3	1	2		1	1	2			2	49
		IIc		1								1														1
HB④	IIc	IIc			1						1														2	
		IIc	2		2						1														11	
		IIc																							1	
		小計	21	3	17	11	2	0	7	9	10	1	1	1	7	1	8	1	1	2	1	3	1	5	0	111
		器種別合計		32		3		28	1	1				18	1	2	1	3	1	8	11	2	3	13	152	

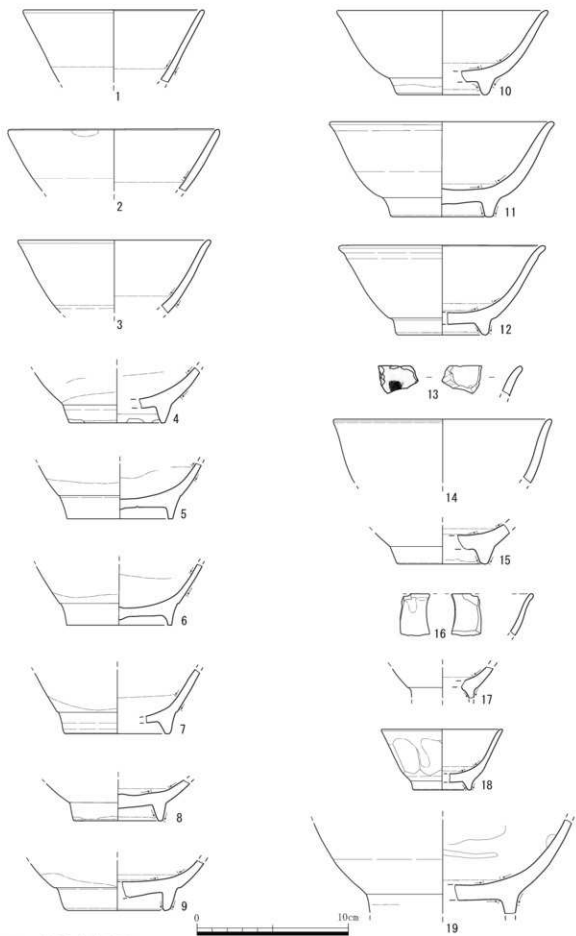
第169図 沖繩産施釉陶器 平面分布

第88表 沖縄産施釉陶器 観察一覧

(法量単位:cm)

第10 図取	図 番 号	器 種	分 類	施 軸	部 形	口 形	口 徑	口 縁	口 縁 高・底 径	器 厚 (底厚)	文 様(外・内)/ 器 面 調 整	露 胎 部	着 色 入 貫 入	着 色 入 貫 入 遺 跡・グ ラ フ ・層 位 遺 跡・台 座(ド ツ ク)番 号							
第170 図・ 図取 120	1	I	灰		直口	丸	-	-	12.0/-/-	0.5	無/ロコ痕顕著	内外面; 胴下半分	有	淡灰 HB③S14 IIa 祝殿小SL.05 台271							
	2								14.0/-/-	0.5	無/ロコ痕顕著 (一部に軸跡?)	内外面; 胴下半分	無	淡灰 HB③T14 IIa 祝殿小SL.04 台211							
	3								12.7/-/-	0.6	外面口縁より下1.3cm 白く焼け飛び	内外面; 胴下半分	有	灰 HB③S IIa 祝殿小SL.05 台186							
	4								-/-/6.4	0.6	外面: 鉄絵?	内面: 見込(帯着痕) 外面: 腰部下部(畳付に砂)	無	淡灰 HB③S14 IIa 祝殿小SL.05 台271							
	5								-/-/7.0	0.6	-	内面: 見込 外面: 胴下半部(焼成により赤い)	無	灰 HB③ I 台10							
	6								-/-/7.0	0.6	無/ロコ痕顕著	内面: 見込 外面: 腰部下部(畳付に砂)	無	淡灰 HB③Q7 I 台48							
	7								-/-/7.1	0.4	無/-	内面: 見込(帯着痕) 外面: 腰部下部(焼成により橙色)	無	白 HB③S14 IIa 祝殿小SL.05 台271							
	8								III	外: 鉄内: 白 外: 鉄内: 白	底	-	丸	-	-	-/-/5.8	0.8	無/ロコ痕顕著 見込裏に帯着痕	蛇の目輪割ぎ(帯着痕あり) 畳付	無	淡焼 HB③A14 I 台63
	9															-/-/7.0	1.0	-	蛇の目輪割ぎ(帯着痕あり) 畳付(帯着痕あり)	有	淡焼 HB③Q9-10 I 台70
	10															14.0/5.5/6.2	0.7	無/-	蛇の目輪割ぎ(帯着痕あり) 畳付(帯着痕あり)	有	淡焼 HB③AT14 IIa 祝殿小SL. 台55
	11								IV	白化粧+ 透明釉	口縁底	舌 反	丸	-	-	14.4/6.3/6.8	0.5 (0.9)	無/ロコ痕顕著	蛇の目輪割ぎ(帯着痕あり) 畳付(帯着痕あり)	有	淡焼 HB③S14 IIa 祝殿小SL. 台59
	12															13.7/5.9/6.2	0.4 (0.8)	無/-	蛇の目輪割ぎ(帯着痕あり) 畳付(帯着痕あり)	有	淡焼 HB③S14 IIa 祝殿小SL. 台59
	13															-	-	0.5	コバルトで印花/-	-	無
	14								III	外: 鉄内: 白	口縁	舌 反	丸	-	-	-/-/4.4	0.6	口縁/ロコ痕顕著	-	無	淡焼 HB③R15 I 台79
	15															丸	-/-/6.0	0.8	-	蛇の目輪割ぎ(帯着痕あり) 畳付	無
16	丸	-/-/4.1	0.5	0.4	外面口縁より輪垂れ	-	内	淡焼 HB③T14 IIa 祝殿小SL.04 台211													
17	小 碗	IV	白	底	舌 折	丸	-	-/-/4.0	0.5	-	-	有	淡焼 HC I13 台5033								
18								丸	8.0/4.0/3.8	0.3 (0.5)	外面: 面取(10面) 内面: 白土で文様/ ロコ痕顕著	蛇の目輪割ぎ(帯着痕あり) 畳付(帯着痕あり)	無	淡焼 HB③AT14 IIa 祝殿小SL. 台55							
第171 図・ 図取 121	19	大 鉢	III	外: 鉄内: 灰	底	丸	-	欠 損	-/-/(9.6)	1.0	内面: 白土で文様/ ロコ痕顕著	蛇の目輪割ぎ(帯着痕あり)	無	淡焼 HB③AT14 IIa 祝殿小SL. 台55							
	20								丸	5.0/-/-	0.5	-	口唇部~内面	無	灰 HB③ I 台10						
	21	急 須	II	鉄	口 ・ 胴	角 丸	-	-	9.4/-/- 最大径19.4	0.5	-	口唇~内面(輪垂れあり)	有	淡灰 HB③S15 IIIa 台292							
	22								3.9/-/- 最大径16.0	0.8	無/内面: ロコ痕顕著	口唇	無	淡焼 HB③AT14 IIa 祝殿小SL. 台55							
	23								-	-	0.4	彫り込み/ロコ	内面	無	灰 HB③ IIa 祝殿小SL.05 台349						
	24								丸	6.0/-/-	0.6	外面: コバルト掛け 後、沈澱文	口唇部(帯着痕あり)	有	淡焼 HB③Q15 I 台95						
	25	II	鉄泥 か?	胴 ・ 底	-	-	-	-	-/-/	無/型	内面(輪垂れあり)	無	暗 硝 茶 HB③Q14 IIa 祝殿小SL.04 台176								
	26								丸	最大径11.4	0.6	無/内面: ロコ痕顕著	底面(輪垂れあり)	有	淡白 HB③A14 I 台63						
	27	碗	II	鉄	底	丸	-	-	0.6	-	外面(煤付着)	無	淡焼 HB③表長台431								
	28	蓋	II	鉄	底	丸	-	-	-	11.6/-/-	1.0	無/ロコ痕顕著	内面~小り	無	淡焼 HB③ASD01 台278						
29	-								12.4/-/-	0.7	縁に三条の沈澱を 認めさせる	上面: 蛇の目状の輪割ぎ	無	淡焼 HB③Q9-10 I 台70							
30	-								11.8/-/-	0.7	蛇の目部に鉄泥塗布	上面: 蛇の目状の輪割ぎ (帯着痕あり)	無	白 硝 茶 HB③Q9-10 I 台70							
31	火 取 小 壺	II	鉄	口 縁	丸 (口 縁)	-	-	10.0/-/-	0.5	外面: 1cm間隔で段 を付ける	内面	無	暗 硝 茶 HB③S15 IIa 祝殿小SL.05 台212								
32	小 壺	II	鉄	底	-	-	-	-/6.6	0.8	見込に同形痕を残す	外面: 腰部下部(畳付・砂付着) 硬質	無	白 硝 茶 HB③A15 IIIa 台281								
33	瓶	I	灰	胴 ・ 底	丸	-	-	-	最大径8.0	0.5	外面: 軸に発色の違 いが見られる	内面(ロコ痕顕著)	無	淡焼 HB③AT14 IIa 祝殿小SL. 台55							
34								II	鉄	胴 ・ 底	-	-	-	-	0.6	外面: 軸に発色の違 いが見られる	無	淡灰 HB③R15 I 台102 HB③R15 IIa 祝殿小SL.05 台237			
35	不 明	II	鉄	不 明	-	-	-	-	1.3	銅彫り (古典様)	無	無	淡硝 茶 HB③A14 I 台62								
36	不 明 (器取)	II	鉄	肩 間	-	-	-	-	肩径: 10.2	0.5	外面: 軸に発色の違 いが見られる	内面(ロコ痕顕著)	無	白 硝 茶 HB③AT14 IIa 祝殿小SL. 台55							

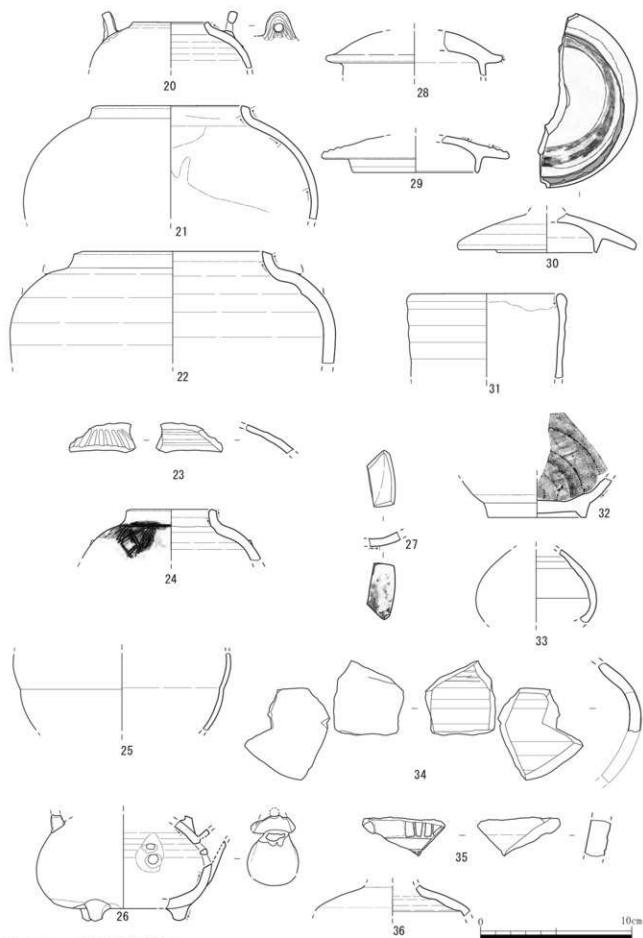
施釉丸筒 灰: 灰輪 鉄: 鉄輪 白: 白化粧+透明釉



第170図 沖縄産施釉陶器1



図版 120 沖縄産施釉陶器 1



第 171 圖 沖繩産施釉陶器 2



図版 121 沖縄産施釉陶器 2

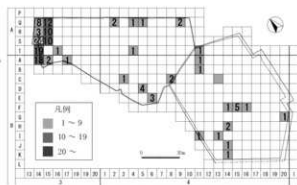


## (19) 沖繩産無釉陶器

HCで40点、HB③で154点(うち「祝女殿内小」から74点)が出土した。器種別には壺30点、播24点、甕19点、水甕13点、瓶12点、鉢5点、火炉2点、香炉1点、鍋1点、煙管1点、不明86点(鉢?蓋?瓶or壺or甕or甕を含む)である(第89表)。碗や皿などの食膳容器や灯明皿の出土は無く、調理容器の播鉢、貯蔵容器である壺・甕・瓶等が多く出土し、HB③の「祝女殿内小」周辺からは今回出土の全器種が確認できた。なお、HC V(後期層)より出土の壺の胴部は調査時の混ざり込みと考えられる。以下、特徴的なものを第173～175図・図版122～124に示し、個々の観察は第90表に記す。

図1～9は播鉢で図1～3は口縁部資料、古手にあたるⅡ類AとⅣ類が確認できた。図1の口唇上面には粘土目痕が見られる。平安山原B遺跡(2015)(第152図8)に次いで2例目の出土で、初期無釉陶器<sup>2)</sup>の可能性が高い。胴部は18点の出土のうち15点に隙間無く櫛目が見られたが、残存部位が底部に近い場合、単位ごとに間隔があっても隙間無く櫛目が描かれたように見えるため類別はしなかった。図6～9は底部で隙間無く櫛描きが施されるが単位の本数に違いが見られた。特に図9は中心部の様子がわかる資料である。図10・11は鉢でⅠ類とⅡ類が見られた。図12・13は今回2点のみ出土した火炉で、いずれも「く」字状に屈曲する。図14は小型の香炉で内面が白く煤ける。図15～18は瓶で今回は胴部のみ出土しⅡ・Ⅲ・Ⅳ類が得られた。壺は玉縁の口縁部(図19)が1点出土し、他は肩部(図20・21)胴部(図22)と底部(23～27)でサイズと器形から壺と判断した。図28は壺もしくは甕の可能性のある底部で、胴部に向けて大きく開く。図29は底部細片だが厚みと重量(55g)から甕とした。水甕と甕合わせて31点が出土している。図30は羅字煙管の雁首である。調査区全体で1点のみの出土であるため、項を分けずに報告する。首部が破損しており詳(分類凡例)

- (播鉢) Ⅰ類:口縁部の横は二条でその直下は直線的な形状・内面に横有り・櫛目の方向は直線的で間隔有り  
Ⅱ類A:口縁部の横は一帯でその直下は直線的な形状・内面に横の有無・櫛目の方向は直線的orやや弧状で間隔有り  
Ⅳ類:逆「L」字状の外反(幅広で2.1cm以上)・口へ胴部は丸みを呈する・櫛目の方向は直線的or弧状で間隔無し
- (鉢) Ⅰ類:口縁部は逆「L」字状に外反・胴部はやや丸  
Ⅱ類:口縁部は逆「L」字状に外反・胴部は直線的
- (火炉) B類:「く」字状に屈曲し口縁部が平坦
- (瓶) Ⅱ類:最大径は胴部にあり、胴長はやや短  
Ⅲ類:最大径は胴部にあり、ほぼ砲弾形を呈する  
Ⅳ類:最大径は胴部にあり、胴部が丸形を呈する
- (壺) Ⅱ類:口縁部は外反し肩部から胴部にかけて張り出す。口唇部の断面形が鐘鉢状(A)、三角や舌状(C)に分かれる



第172図 沖繩産無釉陶器 平面分布

第89表 沖繩産無釉陶器 出土量

遺跡	層	遺構	器種													不明	合計							
			播鉢	鉢	鉢(現代)	鉢?	火炉	香炉	瓶	瓶or壺	壺	壺or甕	水甕	甕	煙管			蓋						
HC	V	表後(後期)									1			1						15	15			
		不明	1	1										5	1					11	21			
小計			1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	6	2	0	0	0	26	40		
HB	③	I	覆瓦																2	3	8			
		Ⅱa	祝殿小(SL)	3	1	6	1			1	1			2	3	1		1	6	2	1	19	49	
		Ⅱa	祝殿小(SD01)				3										5	4	2	1	1	2	19	67
		Ⅱb	SK13																			2	4	
		Ⅱb	SK16								1										1	1	1	
		Ⅱc	石列1群											1						2		2	3	3
HB	③	Ⅲ			1						1										4	12		
		Ⅲa																			2	1	6	
		小計	3	1	14	4	5	2	1	1	1	1	1	0	1	1	6	12	2	13	15	2	154	
器種別合計			24	5	2	1	1	2	1	12	1	0	1	1	6	12	2	13	19	1	79	194		

細は不明だが、小ぶりの火皿で首からの立ち上がりが非常に浅く器壁も非常に薄い。金属製煙管の代用品と考えられる。図31は器種不明の胴部である。締まった頸を持ち、胴部へ向かって湾曲するようであるが、細片のため詳細不明。今後の類似資料収集を待ちたい。

註：『首里城跡-御内原北地区-』沖縄県立埋蔵文化財センター 2010

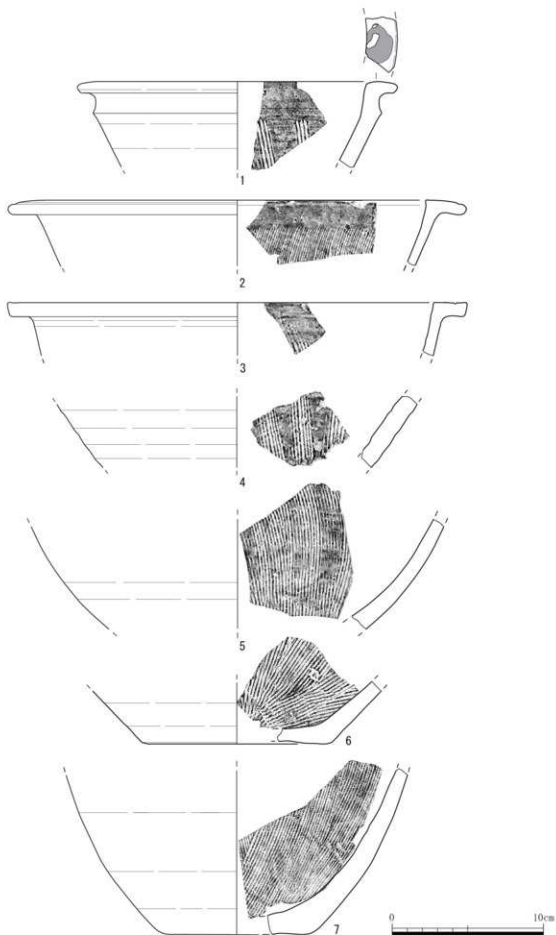
第90表 沖縄産無釉陶器 観察一覧

(法量単位: cm)

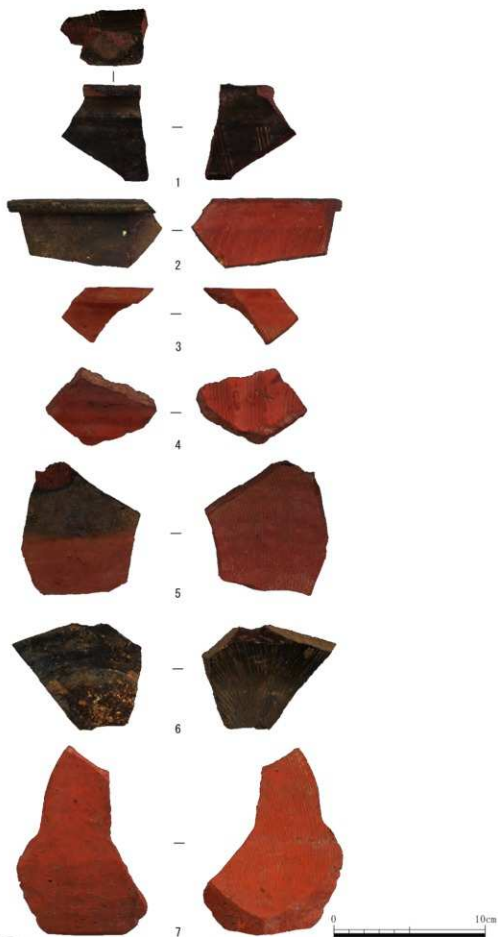
図版 図号	器種	部位	分類	口径 残存胴径	底径 器厚	形状・特徴 (口・胴・底・高台・器厚・文様)	器色	器面調整	器和材	焼成	地区・アフリカ・備位 遺構・台帳(図)番号			
第173図・ 図版122	口 縁	II A	I	21.2	-	1.0	逆「J」字状(幅:1.8)、先端:やや舌状、口唇上面に粘上目、胴径:3~4条一組、間隔:2.0	外-暗茶、内-茶、サンド-暗赤	内外-ロクロ	赤色粒(大)△ 黒色粒(細)△	良	HB③S14 II a 既設小SL台59		
				24.8	-	0.5	逆「J」字状(幅:2.6)、先端:丸、口唇上面に一条の圈線、隙間のない唇目	外-暗茶、内-赤、サンド-暗赤	内外-ロクロ	石灰粒(大)△ 砂粒△	良	HC113 78		
				30.2	-	0.7	逆「J」字状(幅:2.2)、先端:角、口唇上面に一条の圈線、唇目間は空く	外-淡赤、内-淡赤、サンド-淡赤	内外-ロクロ	石灰粒(中)△ 黒色粒(中)△	良	HB③S14 II a 既設小SL05台237		
				-	-	1.2	口縁部に向かって直状、胴径:7条一単位、間隔:0.7以上	外-内-赤、サンド-赤茶	内外-ロクロ	砂粒(細)△	良	HB③Q15 I 台95		
				27.2	-	0.8	口縁部に向かって丸味を帯びる、隙間無く唇目が入る	外-赤、内-赤、サンド-赤	外-ナデ	黒色粒(大へ小)○	良	HB③S14 II a 既設小SL05台280		
				-	-	12.4 0.9	口縁部に向かって直状、胴径:7条一単位、間隔無し	外-灰、内-暗灰、サンド-暗紫	外-へう割り	白土(筋状)○ 黒色粒(大)△	良	HB③C8 III 台577		
				-	-	10.0 0.9	口縁部に向かって丸味を帯びる、胴径:10条一単位が、間隔無し	外-淡赤、内-淡赤、サンド-淡赤	外-ナデ	赤色粒(大)△ 黒色粒(小)○	良	HB③Q15 I 台95		
				-	-	13.4 1.1	口縁部に向かって直状、胴径:間隔無し	外-茶、内-赤、サンド-赤	外-へう割り	赤色粒(大)△ 黒色粒(小)○	良	HB③ I 台9		
				-	-	14.0 1.1	口縁部に向かって直状、胴径:間隔無し	外-暗黄、内-赤、サンド-赤	外-へう割り	黒色粒(大)△	良	HB③ II a S001 台278		
				-	-	33.0 0.7	逆「J」字状(幅:2.2)、先端:角、口唇上面に一条の圈線	外-赤、内-赤、サンド-赤	外-へう割り 内-ロクロ	黒色粒(小)△	良	HB③T14 II a 既設小SL台190		
第174図・ 図版123	口 縁	II	I	33.0	-	0.7	逆「J」字状(幅:2.7)、先端:角、口唇上面に一条の圈線	外-赤、内-赤、サンド-赤	内外-ロクロ	黒色粒(細)△	良	HB③Q15 I 台110		
				12	B	12	-	0.8	肩部でく字状に屈曲、先端:ほぼ角、口縁外面に圈線と穿孔	外-赤茶、内-赤茶、サンド-赤	内外-ロクロ	赤色粒(大)△ 砂粒(細)△	良	HB③T14 II a 既設小SL台190
				13	B	19.8	-	0.9	肩部でく字状に屈曲、把手中央に穿孔、把手の唇目付けはゆがむ	外-赤茶、内-赤茶、サンド-赤	外-ロクロ 内-指き	赤色粒(大)△	良	HB③A15 III a 台267
				14	香 炉	-	7.7	0.6	小型の香炉、内面が白く輝けるのは灰が入っていたからか	外-暗茶、内-濁白、サンド-暗赤	外-ロクロ 内-不明	砂粒(微小)△	良	HB③A14 II b 台343
				15	II	10.0	-	0.6	胴部:ほぼ直状、肩部:圈線	外-暗茶、内-青灰、サンド-赤茶	内外-ロクロ	赤色粒(大)△	良	HB③S15 II a 既設小SL05台376
				16	III	7.1	-	0.6	肩部:圈線、器面:焼き割れ	外-暗茶、内-灰、サンド-赤茶	内外-ロクロ	砂粒(細)○	中	HB③C 石列 I 群台376
				17	IV	15.8	-	0.8	外灰、胴部に五重圈線、外面に焼き飛び	外-暗茶、内-赤茶、サンド-赤	外-ナデ 内-ロクロ	陶粒△ 砂粒△	良	HB③S14 II b 台146
				18	-	14.6	-	0.9	胴部は鉄やかに曲線を描く、器面に光沢がある口縁部に似る	外-茶、内-灰、サンド-赤	内外-ロクロ	砂粒(細)○	良	HB③A14 I 台62
				19	II A	14.8	-	0.5	口唇:玉縁(長)、口唇内面に空印?かと思われる印と石灰分の付着	外-茶、内-暗赤茶、サンド-赤	外-ナデ 内-ロクロ	無	良	HB③AT14 II a 既設小SL台54
				20	不明	26.4	-	0.9	胴部:圈線、最大径は胴部を持つ	外-暗茶、内-赤、サンド-暗赤	外-ナデ 内-ロクロ	赤色粒(大)△	良	HB③T16 III a 台189
第175図・ 図版124	胴	II C	I	15.1	-	0.8	胴部に圈線、内面に叩きの痕跡著	外-暗茶、内-灰、サンド-暗赤茶	外-ナデ 内-叩き	白土(筋状)△	良	HC 台5048		
				18.0	-	0.9	胴部は直状に近い、器面に焼き割れ	外-暗茶、内-灰、サンド-灰	外-ナデ 内-へう割り	赤茶(中)△ 黒色粒(中)○	中	HB③C 石列 I 群台504		
				-	-	11.0 0.6	平底、立ち上がり直、胴部へ直線的に開く、底面は焼成により茶色を呈する	外-暗灰、内-暗赤茶、サンド-暗赤茶	内外-ロクロ	白土(筋状)△ 赤色粒(細)△	良	HB③O5 I 台51		
				-	-	15.4 1.0	平底、立ち上がり直、胴部へ直線的に開く内面に指す痕跡著	外-暗灰、内-灰、サンド-暗赤茶	内外-叩き	白土(筋状)△ 黒色粒(中)△	良	HC H14 台210		
				25	不明	-	10.0 0.6	平底、立ち上がり直、胴部へ直線的に開く	外-灰、内-灰、サンド-暗赤茶	外-ナデ 内-ロクロ	砂粒(細)△	良	表採 台12811	
				26	-	-	11.0 0.8	平底、立ち上がり直、胴部へ直線的に開く、焼き飛びが多く底面付近はあばた状	外-暗赤茶、内-暗赤茶、サンド-暗赤茶	内外-ロクロ	赤色粒(大)△ 砂粒(細)△	良	HB③ II a S001 台278	
				27	-	-	10.4 0.8	平底、立ち上がり直、胴部へ直線的に開く	外-赤、内-赤、サンド-赤	外-へう割り 内-ロクロ	赤色粒(大)○	良	HB③Q14 I 台176	
				28	底 or 縁	不明	-	12.4 11.0	平底、立ち上がり直、胴部へ直線的に開く、底面-器面共に粗粒顕著	外-赤、内-赤、サンド-赤	外-へう割り 内-ロクロ	赤色粒(大)△ 黒色粒(小)○	良	HB③AT14 II a 既設小SL台60
				29	底 or 縁	不明	-	8.8 1.0	平底、立ち上がり直、胴部へ直線的に開く、内面:白く曇る	外-暗灰、内-灰、サンド-赤	外-ナデ 内-ロクロ	赤色粒(中)△ 砂粒(細)△	良	HC T11 台5046
				30	摩 擦 面	-	外径:1.4 内径:1.1	-	火皿のみ、全体に薄い首部分からの立ち上がりは非常に浅い	内外-暗赤	外-ナデ	黒色粒(細)△	良	HB③ I 台79
31	不明	胴	-	7.4	0.4~0.9	丸く湾曲するが詳細不明	外-暗灰茶、内-暗灰、サンド-暗灰	外-へう割り 内-ロクロ	無	良	HB③R15 I 台102			

器和材凡例 ○:非常に多い △:多い △:少ない △:僅少

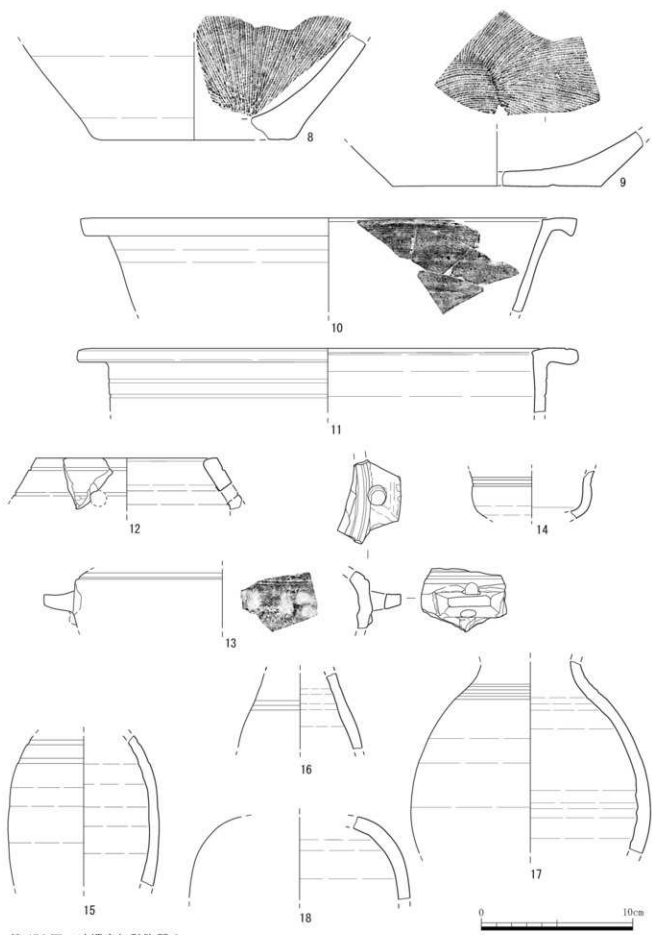
焼成凡例 良・中・赤 焼成度凡例 良・中・赤



第173圖 沖繩産無釉陶器1



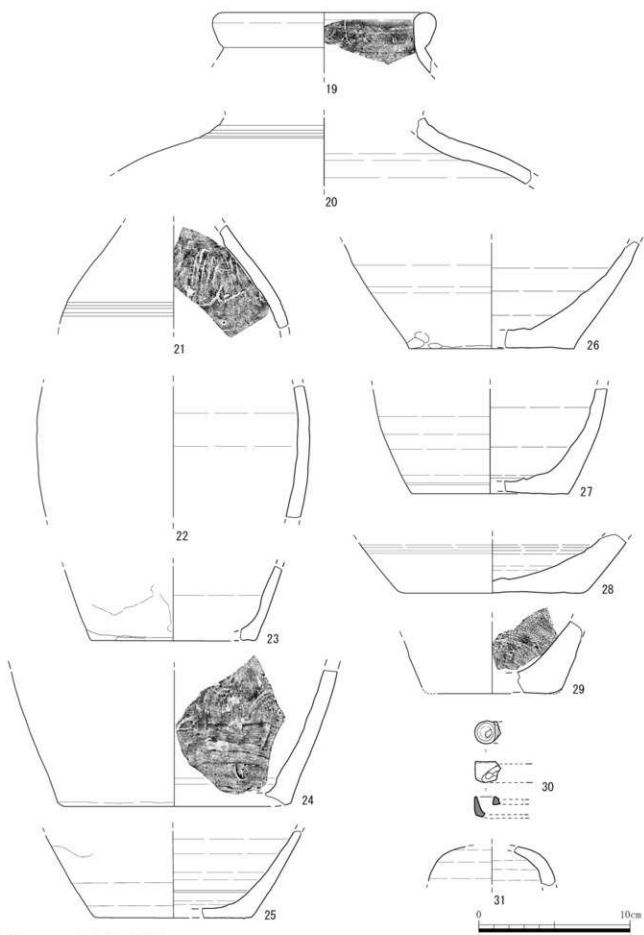
図版 122 沖縄産無釉陶器 1



第 174 图 冲縄産無釉陶器 2



図版 123 沖縄産無釉陶器 2



第 175 圖 沖繩産無釉陶器 3



図版 124 沖縄産無釉陶器 3



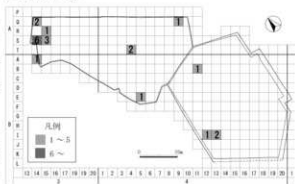
## (20) 陶質土器

HCで8点、HB③で31点(うち「祝女殿内小」から10点)が出土した。器種別には火炉9点、鍋3点、土瓶3点、蓋・皿・鉢が1点ずつと不明21点(把手?鍋or土瓶を含む)である(第91表)。「祝女殿内小」周辺にやや纏まって出土している以外は出土数も箇所数も少なく特徴は見られなかった。また、出土器種の割合等にも目立った特徴は見られなかった。以下、特徴的なものを第177図及び図版125に示し、第92表に観察一覧、第176図で分布状況を示す。

図1は鍋の底部で外面には煤、内面は石灰分が付着した後、焦げて茶色を呈する。図2は蓋の握み部であるが、高さ7mmで掘むにはやや浅めである。図3は腰部で「く」字状に屈曲する土瓶の胴部で鍋と同様に外面には煤、内面には石灰分が付着していた。屈曲部の最大径は18cmを測る。図4は土瓶の耳で外面に粒状の貼り付けが並び3粒と想定される。図5~9は火炉である。平安山原A遺跡(2016)に準じて分類したところ、今回は2タイプが確認できた。図5は口唇内面に器物を載せる突起を3ヶ所に設けるタイプでI類に該当する。図6はII類に該当する「く」字状に折れる口縁部で内面に煤が付着する。図7は筒状の口縁部でIII類と考えられる。外面には4組の圏線、内唇から内面へは煤が付着する。図8・9は底部で外面に白土で圏線を描き、いずれもA1類であるが9は高台が非常に低い。今回出土の火炉の口縁部はI類2点、II類1点、III類1点で、底部はA1類が3点であった。図10は逆「L」字状の口縁部を持つ鉢で沖繩産無軸陶器によく見られる器形であるが、砂質で擦ると素地の粉末が手に付着する。図11は皿で直状の底面を持つ。灯明皿の可能性もあるが細片のため詳細は不明。

第91表 陶質土器 出土量

遺跡層	器種	鍋		土瓶		把手?		蓋		鉢		火炉		不明		合計
		底受け	胴底	耳	胴	蓋	口	口	底	底	底	底	底	底		
H	I 炊鉢	1	1									1	1	1	1	4
	C 不明			1								1	3	2	2	4
小計		0	1	1	0	0	0	0	1	1	0	3	0	0	0	6
H	I 覆丸			1									1			1
	B IIa 祝殿小-SL		3		1	1	1	1	1	1	1	2	1	2	1	11
B	IIb	2		1								1	2	3	1	10
	IIIc												1	1	2	5
B	d 試掘			4								1			1	6
	小計	2	0	3	4	1	1	1	1	1	3	0	4	7	2	31
器種別合計		3	8	3	1	1	1	1	1	1	9	12	9	12	9	74



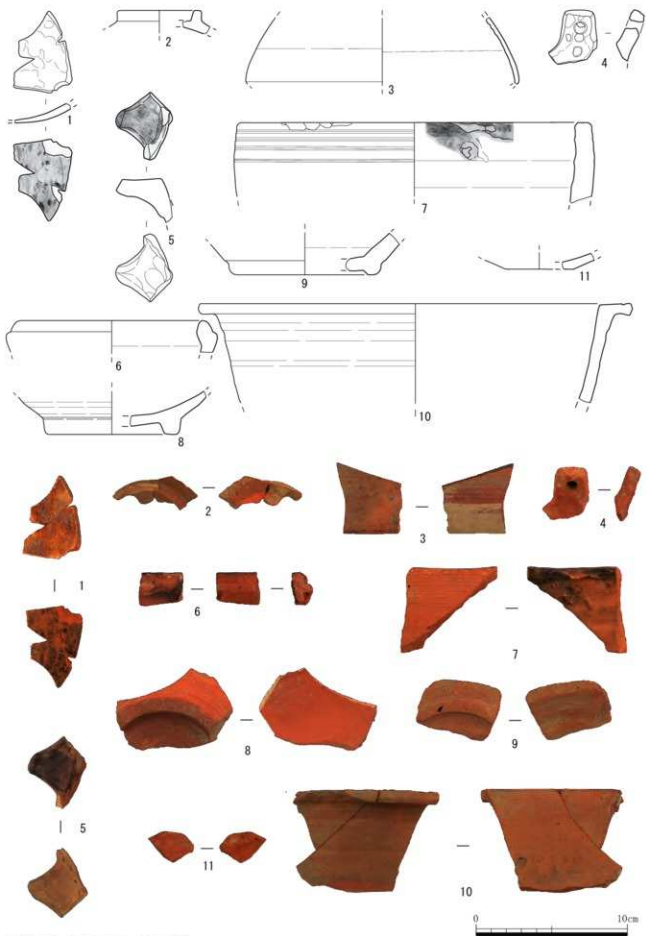
第176図 陶質土器 平面分布

(法量単位:cm)

第92表 陶質土器 観察一覧

第177図・図版125	図号	器種	部位	口径・胴径・底径	底厚	底厚	観察事項(器形・器色・分類等)	器色					混和材(粒状)		器面調整(外/内)		質	地区	クワット	層遺構(取上台帳番号)
								赤色	白色	黒色	砂	雲母	赤	白	黒	砂				
第177図・図版125	1	鍋	底	破損のため不明	0.2	0.4	外面:煤付着,内面:石灰分付着	淡茶	-	-	-	-	-	-	-	-	概ね/概ね	普通	HB③S15IIa祝殿小SL台60	212
	2	蓋	握	5.6	0.6	-	高台状の握み	淡茶	-	-	○	○	○	○	○	○	概ね/ナダ	砂	HB③Q141	台176
	3	土瓶	胴	最大径18.0	0.3	-	腰部で「く」字状に折れる 外面:煤付着,内面:石灰分付着・ 口唇縦着	淡橙	△	-	-	-	△	△	△	ナダ/ロクロ	普通	HB③S15I 覆丸台299		
	4	土瓶	耳	長3.3×幅2.3	1.0	-	外面に粒状の貼り付けが並ぶ	橙	○	-	△	-	△	△	△	ナダ/ナダ	軟	HB③ST14IIa祝殿小SL台60		
	5	土瓶	口唇	長3.4	0.6	-	口唇内面に器物を載せる突起を貼り付ける(I類)	茶	○	△	○	-	△	△	△	ナダ/ナダ	硬	HB③ST14IIa祝殿小SL台157		
	6	土瓶	口縁	12.0	0.8	-	口縁部「く」字状(II類)	橙	-	-	-	○	△	△	△	ナダ/ナダ	砂	HB③Q141	台176	
	7	火炉	口縁	23.5	12	-	内筒状を呈し、口唇内面に器物を載せる突起を貼り付ける(III類)	淡茶	△	-	△	○	△	△	△	ナダ/概ね	砂	HB③T17IIIb台825		
	8	火炉	底	9.0	0.5	0.6	高台状・白土で圏線(A1類)	橙	-	-	-	○	△	△	△	ロクロ/ロクロ	普通	HB③S15IIa祝殿小SL台60	212	
	9	火炉	底	10.0	0.9	0.9	高台状(低い)・白土で圏線(A1類)	淡橙	○	-	○	-	○	△	△	ナダ/ロクロ	普通	HB③S14IIa祝殿小SL台237		
	10	鉢	口縁	28.6	0.8	-	口縁部を逆「L」字状に折り曲げ口唇は角状	淡橙	○	△	-	△	△	△	△	ロクロ/ロクロ	砂	HB③Q9-10	1台70	
	11	皿	底	4.6	0.6	0.5	底部は直状を呈する	橙	△	-	△	-	△	△	△	概ね/ナダ	普通	HB③I	1台5	

混和材凡例 ○:非常に多い △:多い △:少ない △:僅少



第 177 図・図版 125 陶質土器

## (21) 鍛冶関連遺物

鍛冶関連遺物は、羽口、鉄滓、炉壁破片、焼土が出土した。羽口に類似する焼土も関連資料として、ここに含めた。出土層位は、羽口は層不明、鉄滓はⅢa層と、石列1群(SL02)がほぼ同数の出土である。炉壁はⅢ層出土、鍛冶関連遺物の平面分布からI層、層不明を除外して見ると、ほぼA～Eグリッドに分布し、B流路より南西側の出土である。主なものを第179図・図版126、第93表に出土状況、第178図に平面分布を示す。以下、略述する。

### 1. 羽口

羽口はHCから2点出土、101g、層不明。いずれも円管状である。

第179図1は、溶融物が付着する円管状の先端部破片。溶融物の範囲は、側面から見ると約45°程度の角度で有無があり、炉内に突き出した部分と炉壁内の差異と見られる。色調は外面の暗灰色の溶融物が付着しない部分は灰色を呈する。内面の先端部は暗褐色、他の部位は赤褐色を呈する。推定外径7cm、内径3cm、47.8g、HC C11出土。図2は、溶融物の付着は見られない円管状の破片、全体が摩滅する。色調は茶褐色と赤褐色が混じる。推定外径9.4cm、内径3.7cm、52.5g、HC H14出土。

本町内の遺跡で出土した羽口の殆どが円管状を呈するもので、その外・内径の平均値は、外径7.8cm、内径3.1cmである。外径の最大値は平安山原A遺跡(2016)出土の9.4cm、最小値は伊礼原遺跡(国指定外)(2014)の3.6cm、内径の最大値は北谷城(2010)の6cm、最小値は小堀原遺跡(2009)の1.8cmである。本遺跡出土のものは、概ね平均値に近い。

### 2. 鉄滓

鉄滓は総数47点、総重量2,245g、HB③で31点、985g、HCで16点、1,260g、殆どの資料は磁石に反応する。出土層位は、HB③ではⅢa層が主体をなし、ほぼ同じ量が石列1群(SL02)で出土。HCでは層不明、平面分布は主に石列2・3群周辺の出土である。

鉄滓は、形状からI～IV類に大別した。I類は楕形滓(図3～5)、II類は厚さのある不定形な塊(図6)、最も大きなものは約10×5cmで、5～2cm程度のももある。これらには、砂粒混じりの土の付着や、土と貝殻片、粗砂や小礫、枝サンゴなどが付着するものも見られる。III類は粒々した塊で瘤状部分を有するもの、IV類は薄く扁平なもの(図7)、薄い剥離片状を呈するものや微小な鉄滓が含まれる薄い土塊状の磁石に反応するものもある。

図3は、表面の外縁よりやや内側に凸凹があり、周辺に僅かに気泡痕が見られる。裏面は破損面側の中央部が窪み、凸凹の無い面はザラザラである。色調は暗灰色を呈し、赤褐色を呈する部分も見られる。最大長は10.1cm、最大厚3.4cm、309g、HB③R14 I層出土。図4は、破損の無い楕形滓と見られる。表面はうねりのある面に気泡痕が見られ、瘤状を呈する部分もある。裏面は全体的に浅い凸凹が見られる。外縁の一部に貝殻片が付着する。色調は灰色を呈する。最大長は6.4cm、最大厚1.9cm、116g、HC G15出土。

図5は破片、表裏面に緩やかにうねる面を呈し、凸凹が目立たない。破損面に土と貝殻片が付着する。色調は暗灰色を呈する。最大長は7cm、最大厚1.8cm、135g、HC D10 V層出土。

図6は破片と見られ、表裏面に気泡痕が見られる。色調は暗灰色を呈する。長さ2.5cm、厚さ2.3cm、34.9g、HB③C5 II b層出土。

図7は表裏面に凸凹や気泡痕が見られる。裏面に砂粒や微小な貝殻を含んだ土が付着する。色調は灰色を呈する。最大長は5.6cm、最大厚1.4cm、74.6g、HB③C3石列1群(SL02)出土。

### 3. 炉壁破片

炉壁破片としたものは、溶融物の表面に凸凹やうねりがあるが平坦的な形状を成すもので、裏面に羽口に類似する焼土が付着するものである。HB ③のみで16点、221g。黒褐色や灰色を呈する溶融物の表面には気泡痕が見られ、これら資料は磁石に反応する。平安山原A遺跡(2015: 第160図8)に類似するものである。

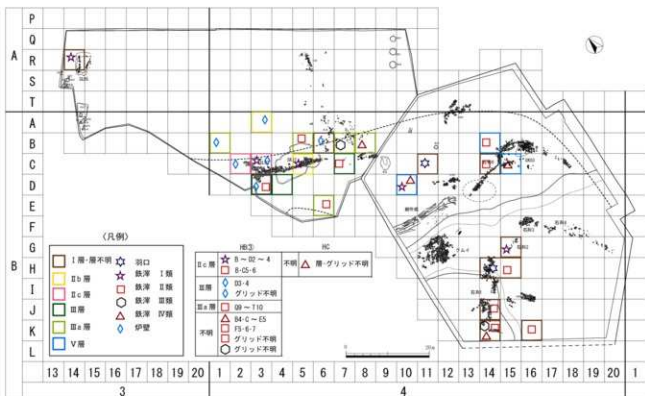
図8は、外縁と見られる片側が反る。上面は気泡痕が見られ、部分的に砂が付着する。色調は灰色を呈するが暗灰色の部分も見られる。重さは30g、HB ③ D3 III層出土。図9は、破片端が反るもので溶融物表面の中央に光沢がある。色調は、ほぼ暗灰色を呈するが、一部灰色の部分がある。HB ③ B1 III層出土。

### 4. 焼土

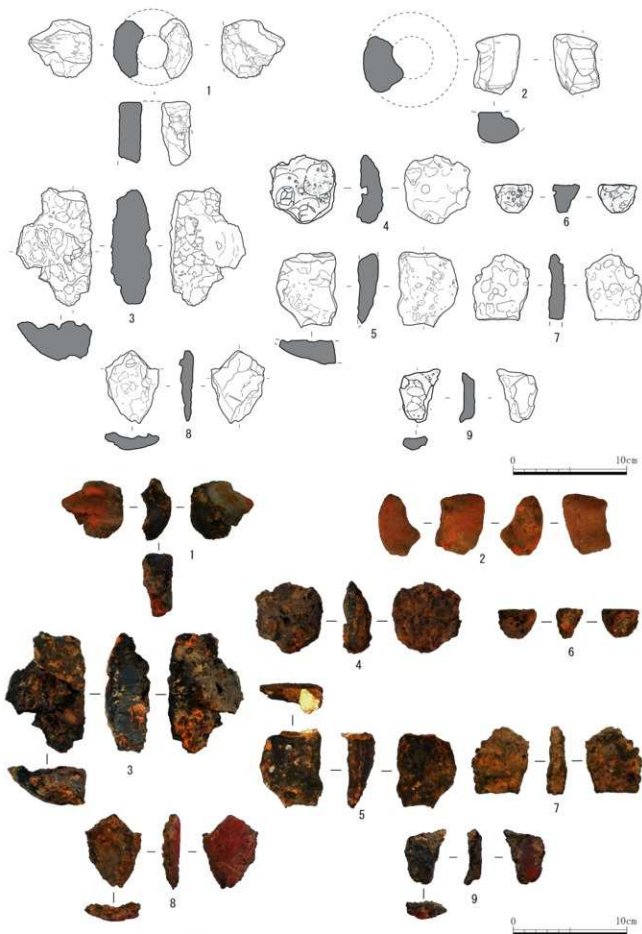
焼土は、砂質と泥質があり、前者には細かい石を含むものがある。総数10点、211g、HB ③では9点、200g、III層出土、HCは1点、11g、層位不明である。焼土には磁石に反応するものもある。

第93表 鍛冶関連遺物 出土量

遺物種別・遺物名	分類	羽口	鉄滓				炉壁破片				焼土				
			羽口	1層	2層	3層	4層	5層	6層	7層	8層	9層	10層		
遺物種別・遺物名	分類	羽口	羽口	1層	2層	3層	4層	5層	6層	7層	8層	9層	10層		
数量	重量	数量	重量	数量	重量	数量	重量	数量	重量	数量	重量	数量	重量		
V				1	222				1	8					
C15				1	135				1	5					
D10															
C11		1	48												
C14									1	97					
E18													1	31	
G15															
J14															
H14															
H15															
K14															
K16															
不明															
HC小計		2	101	3	368	7	844	1	5	43	0	0	0	1	11
I															
R14															
A3															
C5															
C2															
C3															
石列1群															
(S1.02)															
B-D2-4															
D3															
B-C5-6															
D3															
C7															
D3															
D3-4															
S9															
不明															
HC小計															
Q99-T10															
B1															
B5															
B7															
B8															
F6															
B+C-5															
B6															
F5+6+7															
不明															
不明															
HC小計															
HC+HC小計															



第178図 羽口・鉄滓・炉壁 平面分布



第179図・図版126 鍛冶関連遺物(1・2: 羽口, 3~7: 鉄滓, 8・9: 炉壁)

## (22) 円盤状製品

円盤状製品が16点出土している(第94表)。これらは中国産青磁、中国産染付、本土産近代磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器の碗、皿、大鉢、播鉢、壺などの器物を素材に縁部を打削りや剥離により二次的加工を加え円盤状に成形したものである。平面形は円状や楕円状で、法量は最大で平面径12.7cm、厚さ4.8cm。最小は平面径3.5cm、厚さ1.2cmを測るが、大半は平面径が4~5cm、厚さ1cm前後である。当該製品については様々な研究が成され用途も銘銭説、玩具説、遊具説、めんこ説、呪術・信仰関係遺物説、飛礮説、蓋説、漁具説、計量具説など色々である(上原静2004)。

層位別出土量はHB③のI層とII a 祝女御内小-SLに集中している。平面分布においてもHB③の北側に集中している。以下に主なものを第181図、図版127に観察を第95表に示した。

図1~3は中国産の染付と青磁の碗、皿の底部を素材に高台から外側を打削り円盤状に粗成形し、更に打削面を細かく剥離、円形に整えている。平面径7.6~5.4cm、厚さ1.7~1.6cmを測る。図4~8は沖縄産無釉陶器の壺、播鉢の胴部を素材に縁部を打削り剥離により円形に加工したものである。胴部の独特の窪みがあり伏せて座りがいい。平面径7.7~3.5cm、厚さ1.2~1.0cmを測る。

第180図1・2は首里城正殿(上原静2004)と首里城右掖門(県庁センター2003)から出土した青磁製、中国象棋駒で表面に印刻文字を施され、1が「砲」、2が「兵」と読める。特に1は首里城正殿II期基壇に伴ったことから15世紀中葉の頃に位置づけられ中国象棋の文化がこの頃にすでに伝来していたことがわかる資料と言える(上原2004)。これらの法量は平面径4cm、厚さ1.4cmと図2~4に示した青磁、染付の碗や皿の底部を利用した、円盤状製品と比較しやや近と言える。形態的には円状であること、表面の窪みなどよく似ている事がわかる。このことは素材が同じである、中国産の青磁、染付の碗や皿の底部を利用しこれらを模倣し円盤状製品の一部は作られたとも推察できる。図9は沖縄産施釉陶器製大鉢の底部部分を打削り円盤状に成形している。平面径が12.7cm、厚さ4.8cmあり、遊具には不向きとも考えられ、蓋など他の用途も考慮する必要を感じる。



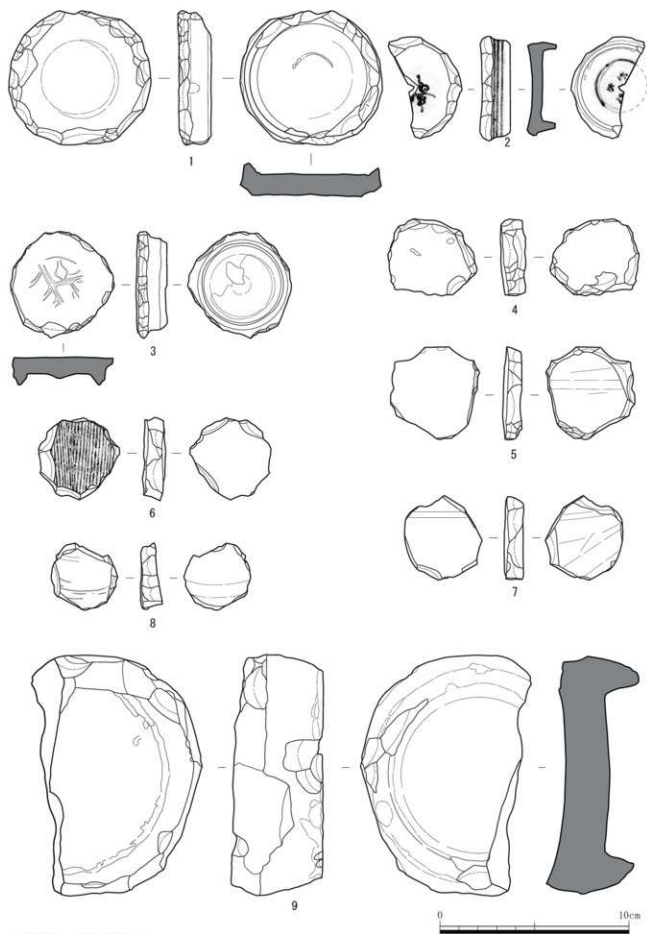
第180図 中国象棋駒参考資料

第94表 円盤状製品 出土量

産地	層位	遺構	素材		染付		本磁		青磁		合計
			底面	側面	底面	側面	底面	側面	底面	側面	
HB	I		1	1	1	1	1	1	1	1	1
HB	II		1	1	1	1	1	1	1	1	1
HB	III		1	1	1	1	1	1	1	1	1
HB	IV		1	1	1	1	1	1	1	1	1
HB	V		1	1	1	1	1	1	1	1	1
HB	VI		1	1	1	1	1	1	1	1	1
HB	VII		1	1	1	1	1	1	1	1	1
HB	VIII		1	1	1	1	1	1	1	1	1
HB	IX		1	1	1	1	1	1	1	1	1
HB	X		1	1	1	1	1	1	1	1	1
HB	XI		1	1	1	1	1	1	1	1	1
HB	XII		1	1	1	1	1	1	1	1	1
HB	XIII		1	1	1	1	1	1	1	1	1
HB	XIV		1	1	1	1	1	1	1	1	1
HB	XV		1	1	1	1	1	1	1	1	1
HB	XVI		1	1	1	1	1	1	1	1	1
合計			1	1	1	1	1	1	1	1	16

第95表 円盤状製品 観察一覧

第181図 図版 127	図 番号	素材	器形	部材	完備	計測値				観察事項	(法量単位:cm,g) 遺構・アリアグ・層位 遺構・台(台)の番号		
						最大径	最大幅	高さ	重量				
	1	中国産染付	円形	碗	底部	完形	7.6	7.1	1.7	-	96.6	碗の底面から胴部分を打削り、取り除いたのち高台の一部と縁部を細かく剥離し円形に整えている。	HB③ C3-7 II e 祝女御内小-S17
	2	中国産染付	円形	小碗	底部	半欠品	5.4	3.8	1.6	4.4	21.9	小碗の底部を利用、底面から胴部分を打削り、取り除いた後高台のみ残す。内底部の縁部は細かく剥離により円形に整えられている。	HB③ S14 I 台82 HB③ A15 IIIa 台281
	3	中国産青磁	円形	皿	底部	完形	5.6	5.5	1.7	4.0	49.8	皿の底部を利用、底面から胴部分を取り除き円盤状に二次的加工を加え、高台から胴部分を取り除き縁部を細かく剥離し円形により整えている。	HB③ A15 II 2011
	4	沖縄産無釉陶器	楕円形	壺	胴部	完形	7.7	7.3	1.2	-	95	胴部を利用、円盤状に打削り、さらに円に近づけた縁部の外側に細かく剥離し整えている。	HB③ S14 II b 台146
	5	沖縄産無釉陶器	楕円形	壺	胴部	完形	4.9	4.7	1.0	-	25.9	胴部を利用し円盤状に打削り、さらに縁部の外側に細かく剥離し整えている。	HB③ R15 I 台102
	6	沖縄産無釉陶器	円形	播鉢	胴部	完形	4.4	4.2	1.2	-	22.2	胴部を利用し円盤状に打削り、さらに縁部を細かく剥離し円形に整えている。	HB③ 14-15 I 台431
	7	沖縄産無釉陶器	円形	壺	胴部	完形	4.4	4.1	1.0	-	22.9	胴部を利用し円盤状に打削り、さらに縁部の外側に細かく剥離し整えている。	HB③ S14 II b 祝女御内小-S18.05 台271
	8	沖縄産無釉陶器	楕円形	壺	胴部	完形	3.5	3.5	1.2	-	15.1	胴部を利用し円盤状に打削り、さらに縁部の外側に細かく剥離し整えている。	HB③ S14 II b 祝女御内小-S18.05 台280
	9	沖縄産施釉陶器	円形	大鉢	底部	半欠品	12.7	9.0	4.8	9.0	418	大鉢の底部を利用、底面と高台のみ残り底面から胴部分を取り除き円盤状に二次加工しているものである。打削り縁部は剥離により整えている。円盤状製品の従来考えられている用途とは異なるがサイズが大きく不向きである。	HB③ 14-15 I 台431



第181圖 円盤状製品



图版 127 円盤状製品



## (23) 瓦

瓦は総数112点、約34kgの出土である(第96表)。個数では丸瓦が31.3%平瓦は46.4%、不明22.3%、重量では丸瓦54%、平瓦32.5%、不明13.5%で丸・平瓦の割合が逆転する。軒丸・軒平瓦は出土していない。いわゆる赤瓦であるが、明赤褐色の色調のものが多いが、やや暗い赤褐色を呈するものも見られ、橙褐色は1点のみである。層別の出土割合は、I層出土が51.8% II層出土は25.9%である。その他のグリッドは、集落南・東側の耕作地にあたり、耕作土や耕作土母材層と考えられているIII a・b・c層の合計が8%である。近代の耕作に伴う攪拌の際に混入した可能性が考えられる。

HB③では、旧宇平安山集落の祝女殿内小の屋敷外縁部に相当する石列3群(SL03・04)(第46図参照)上面と周辺一帯(S14・T14・15)からまとまって出土した(第182図)。隣接する平安山原A遺跡(2016年)で報告された屋敷跡全般からまとまって出土した分布域の東側端にあたる。平安山集落の家屋に用いられていたものと思われ、出土状況から、戦時中の破壊、または、米軍上陸後から戦後にかけて行われた米軍基地整備の造成工事によって生じたものと推測される。

HC出土のものは戦後の造成によって散在したものと考えられ、砂丘の頂部に当たる一帯に見られる。出土した瓦の特徴的なものを示した。

第183図1、丸瓦の長さは約30cm、模骨の大きさが想定される凹面の広端面内径は約11cmを測る。HB③T14 SL03・04出土。

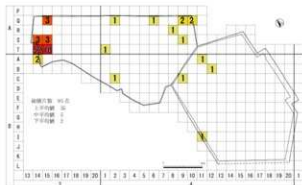
図2、片側に径8cmの半円形の袢りが施されており、焼成後に打ち欠いている。この打ち欠きの外面縁を漆喰が覆っていることから瓦葺の際に組み合わせ用に施されたものと見られ、棟から横方向に向きを変えらるためのものと考えられる。他の丸瓦片では漆喰の塗り幅は概ね3~5cmであるが、本品は最大幅6cm、最小幅2.5cmの箇所も見られる。HB③SL03・04出土。

図3、平瓦上端の整形は丁寧であるが、下端は雑、平瓦の模骨の大きさが想定される内径は狭端部26cm、広端部31.6cmである。平瓦に漆喰の付着は、殆ど見られず凹面に縦方向の付着が散見される程度である。側面には割りそこなったものもみられる。HB③SL03・04出土。

琉球近世の丸瓦の直径は15cm前後、平瓦の幅広い側の径は25cm前後(石井2010)、現代の瓦製作

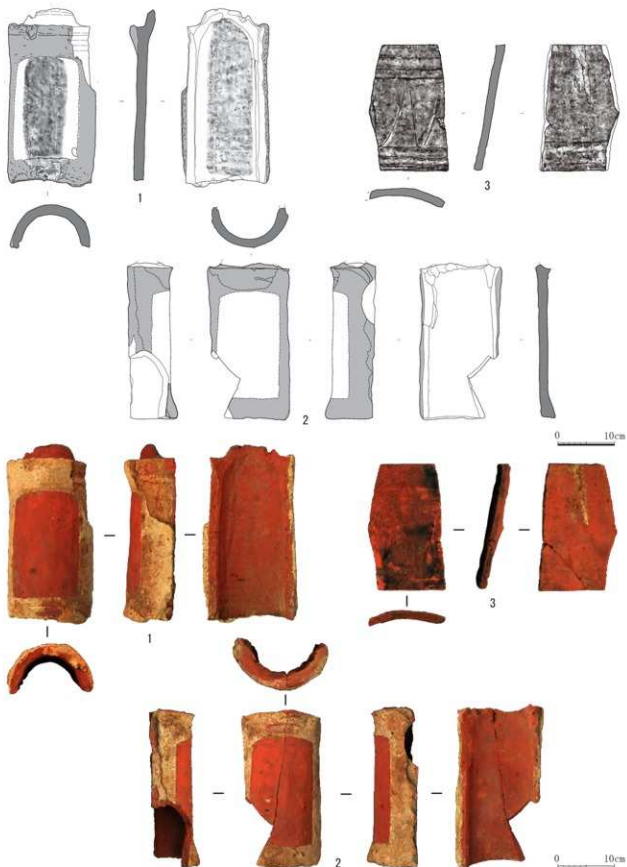
第96表 瓦 出土量

遺跡	層	グリッド	遺構	丸		平		不明		合計		
				個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	
I		S-T14	祝女殿内小 (瓦葺り)					1	7	38	19,547	
		T14・T15		23	13,561	32	4,745	2	1,240	57	19,547	
		T14		2	1,875	1	638	2	2,516	5	5,029	
		A18・T14						1	13	1	13	
		A14				2	295				2	295
		S14		1	1,432	1	76			2	1,508	
		Q9・10		2	125	1	149	1	34	4	308	
		Q15						1	24	1	24	
		S9						1	25		1	25
		不明				2	95	2	252	2	73	6
		小計	30	17,688	39	6,180	8	3,901	76	27,169		
II		T14	石列遺構(SL04)								28	6,051
		A14・T14		1	123						1	123
		T14				1	46				1	46
		小計		5	1,467	34	4,636	0	0	29	6,697	
III	③	Ⅲa	不明				1	14	1	14		
		Ⅲb	不明				2	16	2	16		
		Q15					2	57	2	57		
		Ⅲc	Ⅲc-T14,16				1	459	1	459		
		Q2	Q2-R5~7	1	12				1	12		
		C2		1	43				1	43		
		小計			2	55	3	516	5	571		
		表板	不明				1	8	1	8		
		Q2					1	5	1	5		
		R9					1	22	1	22		
S15					2	11	2	11				
T1			1	61				1	61			
不明			1	166	1	40	2	206				
小計			2	227	5	78	7	303				
		HB③小計	35	16,555	48	11,692	20	4,532	103	34,180		
HC		表板	不明		4	89	1	3	5	92		
		A11				1	6	1	6			
		B11				1	59	1	59			
		C9				1	18	1	18			
		B12				1	11	1	11			
		HC小計	0	0	4	89	5	99	9	188		
		HC③+HC合計	35	16,555	52	11,811	25	4,632	112	34,368		



第182図 瓦 平面分布

具の丸瓦の底部の径は12cm、平瓦の下部径は34cm（上原 2013）と示されており、広端部の大きさを比較すると本遺跡出土の瓦は現代の製作具のサイズとほぼ同様である。



第 183 図・図版 128 瓦

## (24) 軽石製品・軽石・琥珀

### 1) 軽石製品

軽石製品は、平坦な磨滅痕を有するものでHCのみで5点、275.8 gの出土である。製品は、それ以外のものに比して、表面の手触りのガサつきが弱い感がある。

軽石製品の主なものを第185図に示し、第97表に製品を含めた自然の軽石出土量、第184図に平面分布を示し、以下、製品について略述する。

第185図1は、平面・断面形は長楕円形を呈する。主な使用痕が先端部と右側面の2ヶ所に平坦面が見られる。平坦面が斜めとなる先端部の使用痕は幅約5.4cm。右側面の使用痕は幅約3cmである。その他の表面にも使用による磨滅があり、前述2ヶ所の使用痕に合わせた持ち方になると、手の中で収まりの良い形である。長さ約10.1cm、幅約6.4cm、厚さ5.6cm、重さ117.8 g。HC C12 V層出土。

図2は、平面・断面形ともに不定形を呈する。各面に見られる凹面以外の面が磨滅し、裏面の中央部から下端にかけての使用痕は傾斜した平坦面が見られる。最大幅約7.7cm。長さ11.5cm、厚さ6.8cm、重さ2.1 g。HC B12層不明。

図3は、平面形は隅丸二等辺三角形、断面形は不定形を呈する。表面の使用痕は、中央部から左側面、上部の縁辺部、右下側縁辺部に平坦面が見られる。右側面は磨滅する。裏面から左・下側面にかけては石灰が付着する。右側面の上部には傷状のスジが複数見られる。長さ9cm、幅6.4cm、厚さ4.9cm、重さ49.1 g、HC H14層不明。

図4は、平面形は隅丸二等辺三角形、断面形は不定形。表面は中央部、左右側面の上部端から3分の2程度の範囲に平坦面が見られる。裏面は中央から左側には磨滅した欠損部がある。右側面の上部は磨滅する。長さ7cm、最大幅5.2cm、厚さ2.9cm重さ16.3 g、HC A16層不明。

図5は、平面形は隅丸三角形、断面形は不定形。表面中央部から右側にかけて肌理の粗いアバタ状の気泡痕が目立ち、裏面が磨滅する。長さ4cm、最大幅4.5cm、厚さ3.5cm、重さ10.5 g、HC A15 攪乱10.5 g。

### 2) 軽石

軽石は総重量1,840.4 g (製品を含む)である。

HB③・HC全体で見るとHB③は46.6%、HCでは53.4%、

第97表 軽石 出土量(重量)

遺跡	層	グリッド	重量	小計	出土割合(%)				
					遺跡	全体			
HC	I	表採	1.8	1.8	7.2	3.9			
		A11	57.8	68.3					
		A15	10.5						
	II	D11	2.2	16.8	1.7	0.9			
		H4	14.6						
	V	A15	0.5	234.6	24.1	12.9			
		A16	16.3						
		B13	2.7						
		B14	9.7						
		B16	0.6						
		B17	0.8						
		C10	0.8						
		C12	117.8						
		C14	21.4						
		C15	7.9						
		C16	0.6						
		D9	11.3						
		D10	8.3						
		D13	0.5						
	D15	1.0							
	E15	1.2							
	V	F16	0.2	17.1	1.8	0.9			
		F13	1.5						
		F14	20.1						
		G12	7.5						
		G13	2.8						
		H13	1.1						
員層II群		e	9.3				40.4	4.2	2.2
員層II群		h	7.8						
員層II群		2	1.3						
不明		員層II群	5				39.1	593.0	61.0
	B12	2.1							
	B14一括	322.8							
	B15一括	28.1							
	E14一括	5.5							
	E15一括	5.8							
	F13一括	11.1							
	F14一括	2.3							
	G10一括	1.7							
	G11	2.6							
	C20一括	145.7							
	H13	16.2							
	H14	49.1							
	HC小計			972.0	100.0	53.4			
HB③	IIc	C6	515.0	563.0	66.4	30.9			
		BC5,6	48.0						
	III	B3	5.5	176.1	20.8	9.7			
		C2	61.8						
		C7	32.4						
		C8	76.4						
	IIIc	56	10.3	1.2	0.6				
	III d	S16	21.0	21.0	2.5	1.2			
不明	B3	78.0	78.0	9.2	4.3				
HB③小計			848.4	100.0	46.6				
HC+HB③合計			1820.4	—	100.0				

(製品含む)

前者のⅡc層は30.9%、Ⅲ層は9.7%、Ⅲc層は0.6%、Ⅲd層は1.2%、後者のⅡ層は0.9%、V層は12.9%、V層の貝層2群は0.9%、V層の貝層Ⅲ群は2.2%である。層別の出土量は、HB③ではⅡc層、HCではV層に多く出土する。

HB③のみで見るとⅡc層約66.4%、Ⅲ層20.8%、Ⅲc層1.2%、Ⅲd層2.5%、不明9.3%でⅡc層に多く、石列1群(SL02)周辺の出土である。HCのみではⅡ層1.7%、V層24.1%、V層の貝層Ⅱ群1.8%、V層の貝層Ⅲ群4.2%、不明61%が出土、但し、その多くが層不明となっている(第97表)。

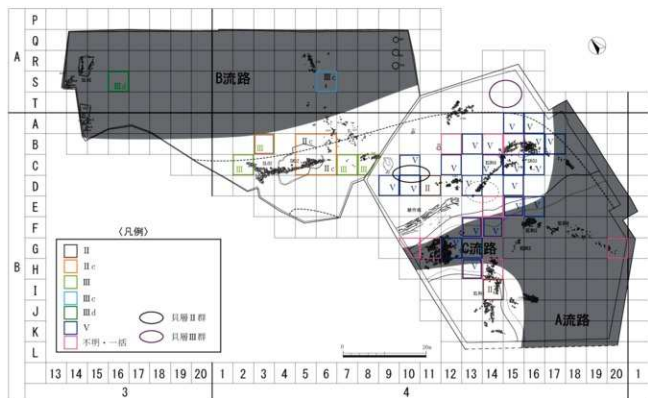
軽石の中で大きいものは軽石製品(図2)の約11×7cm程度で、殆どのものがこれより小さい。色調で見ると黒色は62%、黄色は38%である。色調と肌理では、黒褐色は粗く、黄褐色は細かい、中間としたものには両方見られる。

平面分布では、主にHB③、HCにまたがる砂丘とC流路に見られる。HB③のⅡc層出土のものは、石列1群(SL02)周辺にまとまりがあり、Ⅲ層出土のものは浜堤のB流路に向く傾斜部と頂部に見られ、HCのV層出土のものは、浜堤頂部とA・C流路に向く傾斜部や流路底(第184図参照)にまとまりが見られる。A・C流路の合流部では、G14・15、H13～15で火山の噴出物であるスコリアが堆積する範囲(第28図・巻首図版9)が検出されており、その上位では貝層Ⅰ群が検出されている。この火山噴出物は、浜堤が形成される中で漂着したものと考えられ、平面分布で出土が見られない範囲は流路の形成による可能性が高いと考えられる。

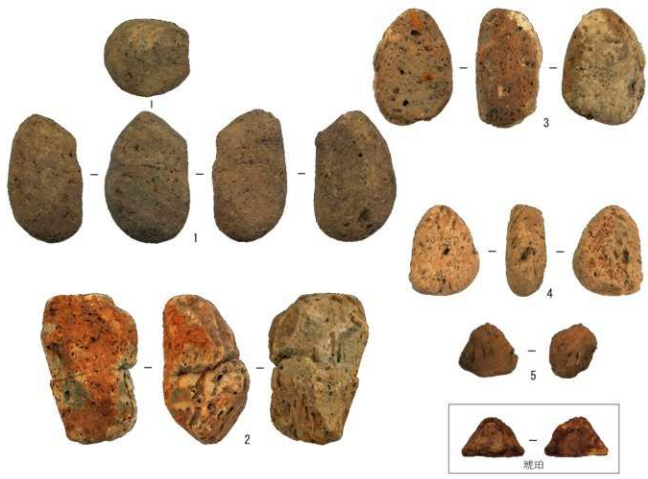
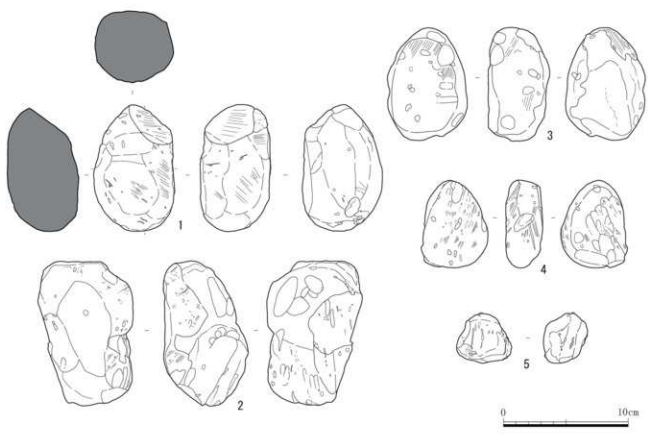
### 3) 琥珀

琥珀<sup>(註1)</sup>は樹脂の化石で、HB③S-16Ⅲc層で1点出土、図版129に示した。縁辺部分の一部に光沢面が見られるが大半は風化面とみられ、細かい白色粒が付着する。一部にみられる小さな欠損部は黄白色を呈する。長さ約5cm、幅3cm、厚さ2.6cm、重さ17.0g。喜界島の川寺遺跡に出土例がある(2013奄美新聞)。

註1: 大城逸朗氏の鑑定による。



第184図 軽石 平面分布(製品含む)



第 185 図・図版 129 軽石製品・琥珀

## 第V章 科学的分析

### 第1節 平安山原B遺跡・C遺跡で採集された脊椎動物遺体

樋泉岳二（早稲田大学）

#### はじめに

沖縄県北谷町の海岸平野に立地する平安山原B遺跡・同C遺跡では、2008・2009年度に実施された発掘調査において、沖縄貝塚時代後期から近現代にいたる各時代の層準から多数の脊椎動物遺体（魚骨・獣骨など）が出土した。ここではその同定結果を記載し、その特徴について考察する。

#### 1. 資料と分析方法

調査区は平安山原B遺跡（HB③地区）、同C遺跡（HC地区）に分かれる（以下、それぞれ単にB遺跡、C遺跡と記述する）。骨類を出土した層準と主要な年代は、下位からV層・IV層（貝塚時代後期）、III層（IIIa層～IIIe層を含む、グスク時代）、II層（近世～近代）、I層（戦後）である。

III層については、B遺跡で検出された「耕作域」において、IIIa層～IIIe層に細分が行われている。各層の年代は、IIIa層・IIIb層が14～16世紀主体、IIIc層以下は13世紀以前と推定されている。ただしIIIc層・IIId層からは耕作土作出の際にV層から混入したと推定される大量の貝塚時代後期前半土器が出土しており、脊椎動物遺体についても当該時期の資料が多く含まれている可能性が高い。

V層出土資料については、貝層II群・貝層III群・貝層V群に分かれるほか、「後期層」として取り上げられた資料が多数ある。これらの年代については、今回は貝塚時代後期として一括して扱ったが、「後期層」に関しては、後述する通りウシ・ウマの遺体が相当数出土していることから、脊椎動物遺体に関する限り、グスク時代以降の資料が多数混在している可能性が高い。

なお、層序と年代の詳細については本書の当該項目を参照されたい。

分析資料はすべて発掘現場において手で拾い上げられたもの（ピックアップ資料）である。分析方法は、基本的に樋泉(2007)の方法を踏襲した。なお哺乳類の四肢骨については、骨幹の全周を残さない破片は原則として同定対象から除外した。遺体の予備的な同定は島袋春美氏の指導のもとに整理作業員諸氏がを行い、筆者（樋泉）が同定結果の確認と集計・図表作成を行った。

#### 2. 分析結果

同定結果を第99表～第100表に示した。ただし、ウミガメ類をはじめとする一部資料については種類・部位の詳細な同定が未了である（これらについては表中に「未同定」・「未確認」と表示した）。また組成の集計についても、資料数が膨大であり、詳細な同定未了の資料も残っているため、ここでは同定標本数（NISP）による組成のみを第101表～第102表に示し、最小個体数（MNI）の集計は見送った。

##### (1) 脊椎動物遺体の出土数と層位的・空間的分布傾向

同定対象となった資料の総数（NISP）はB遺跡452点、C遺跡1603点、合計2055点である（第101表～第102表）。このうちB遺跡III層（IIIa～IIIe層を含む）が390点、C遺跡V層（貝層II～V群）が834点、C遺跡V層（「後期層」）が548点と大多数を占めており、また平面分布としては、III層（グスク時代）はB遺跡、V層（貝塚時代後期）はC遺跡に集中している。これら以外の層準

では、いずれも 25 点以下とごく少ない。

地区・層位別の詳細な出土傾向をみると（第 101 表～第 102 表、第 186 図）、B 遺跡Ⅲ層では、A4 区が 225 点と突出して多く、B4 区が 85 点でこれに次ぐ。とくに A4 区では S8～S10 グリッド、B4 区では B8 グリッドを中心とした集中が認められる。C 遺跡Ⅴ層では、貝層Ⅲ群が 750 点と圧倒的に多く、とくに 5 層が 387 点と突出しており、2 層が 192 点でこれに次ぐ。C 遺跡「後期層」では、A～C/12～16 グリッドが 293 点と突出して多く、D～F/12～16 グリッドが 122 点でこれに次ぐ。このように、今回の調査で得られた遺体群は、層位的・平面的な分布の偏在性が著しい点が特徴である。

## (2) 脊椎動物遺体の内容

遺体群の内容は、主要な遺体産出層準である B 遺跡Ⅲ層（グスク時代）、C 遺跡Ⅴ層（貝塚時代後期）の貝層Ⅱ～Ⅲ群と「後期層」でそれぞれ大きく異なるため、以下ではこれらに分けて、年代順に遺体群の詳細を記載する。

### 平安山原 C 遺跡Ⅴ層貝層Ⅱ・Ⅲ群

**脊椎動物遺体の概要：**脊椎動物遺体全体の組成（第 102 表、第 187 図）をみると、資料の大多数を占める貝層Ⅱ群と貝層Ⅲ群では魚類とイノシシ/ブタが大半を占めており、NISP 比では魚類が主体で、イノシシ/ブタがこれに次ぎ、他にウミガメ類（剣状腹板でアオウミガメが同定された）、ジュゴン、リクガメ類（リュウキュウヤマガメと思われる）も普通である。貝層Ⅱ群と貝層Ⅲ群を比較すると、貝層Ⅱ群では魚類の比率が特に高く、貝層Ⅲ群ではウミガメ類とジュゴンがやや多い点で特徴的である。また貝層Ⅲ群では、少数ではあるがイルカがみられる点も特徴である。その他に、オオコウモリ科、イヌ、ウシ、ウマも確認されているが、いずれも少数であり、ウシ・ウマは上層からの混入である可能性が高い。鳥類は確認されなかった。

**魚類：**ハリセンボン科、フエフキダイ科、ブダイ科を主体として、クロダイ属、ベラ科も普通にみられる（第 102 表、第 188 図）。ハタ科がやや多い点も特徴である。その他にアジ科、フグ科など多くの種類が確認されているが、いずれも少数である。フエフキダイ科の前上顎骨の大半はハマフエフキに類するタイプ（ハマフエフキ型）であった。ブダイ科の咽頭骨・前上顎骨・歯骨にはアオブダイ属とイロブダイ属がみられ、前者が圧倒的に多い。ベラ科の咽頭骨はベラ科 A とシロクラベラ型が大半を占める。

**イノシシ/ブタ：**現生リュウキュウイノシシに類する小型のイノシシである。詳細な形質学的検討を行っていないため「イノシシ/ブタ」としたが、おそらく野生のイノシシとみて問題ないかと思われる。

特筆されるのは出土部位が頭部骨格にほぼ限られている点で（第 102 表、第 187 図）、NISP 総数 256 点のうち 253 点を頭骨・顎骨・遊離歯が占める。また貝層Ⅲ群 5 層 S14 グリッドでは保存のよい頭蓋骨（鼻骨・上顎骨～後頭骨、骨番号 1502）、T15・A16 グリッドでも頭蓋骨前半部（鼻骨・上顎骨・前頭骨、それぞれ骨番号 3691、4364）が出土している（第 100 表）。S14 グリッドでは他にも同一個体の左右切歯骨や左右下顎骨（ただし骨番号 1502 の頭蓋骨と同一個体かは未確認）が得られており、また複数個体の頭蓋骨がまとまって採集されている例（台帳番号 12723）もみられる。

年齢構成については詳細な検討が未了だが、顎骨に基づく概要では、乳歯を伴う個体（約 1.5 歳以下）と永久歯への交換を完了した個体の MN1 比は 11:17 で幼獣が少なくないが、M3 萌出中（約 2.5～3.5 歳）が 6 個体、M3 が萌出完了した個体（約 3.5 歳以上）も 11 個体と多く、幼獣から成獣まで幅広い年齢の個体が混在している。性比を下顎犬歯数（顎骨に植立しているもの+遊離歯）に

もとづく最小個体数でみると、雄12：雌4で、雄が優勢である。解体痕については、明確なもの  
は確認されていない。

**ジュゴン**：貝層Ⅲ群5層A16グリッドから下顎骨を除く頭蓋骨各部位（前頭骨～後頭骨・頬骨・  
頭蓋底・切歯骨～上顎骨）がまとまって採集されており（第100表）、同一個体と考えられる。こ  
のグリッドからは他にジュゴンは採集されていないことから、頭蓋骨のみが単独で存在していたと  
考えられ、意図的に安置または埋納された可能性も考えられる。なお貝層Ⅱ～Ⅲ群全体では、他に  
肩甲骨と上腕骨各1点、四肢骨破片2点および多数の肋骨破片が得られている。

#### 平安山原C遺跡V層「後期層」

V層として位置づけられている資料群だが、貝層Ⅱ～Ⅲ群とは組成が大きく異なる。すなわち、  
魚類とイノシシ/ブタに加え、ウシ・ウマ・ジュゴンが多く、イヌもやや多い（第102表、第187  
図）。貝層Ⅱ～Ⅲ群および後述するB遺跡Ⅲ層と比較すると、イノシシ/ブタが頭部骨格に限られ  
る点や、魚類の比率がやや高く、リクガメが混じる点では貝層Ⅱ～Ⅲ群、ウシ・ウマが多数含まれ、  
イヌもやや多い点ではB遺跡Ⅲ層と共通しており、両者の中間的様相ととらえられる。また、B16  
グリッドから明らかにブタと判断される資料（下顎骨の下顎角～関節突起破片）が1点確認されて  
おり、同グリッドの上層（「グスク層」）からもブタの頭蓋骨（頭頂骨～後頭骨）1点が確認されて  
いる。これらのことから、「後期層」の遺体群には、おそらく上層（グスク時代以降）の資料が多数  
混在しているのではないかと推測される。ただし魚類については、ハタ科がみられない点を除け  
ば、V層貝層Ⅱ～Ⅲ群と大差は認められない（第102表、第188図）。

なお、B～C列の14～16グリッドではウシ・ウマの顎骨や歯が多産する傾向にあり、またしばし  
ば保存のよい下顎骨も出土していることから、以下に述べる「グスク層」のウシ・ウマの産状と何  
らかの関連がある可能性も考慮する必要がある。そのほか、E11グリッドではジュゴン若獣の右肩  
甲骨3点がまとまって採集されており、特殊な取り扱いをなされたものの可能性がある。

#### 平安山原C遺跡「グスク層」におけるウシ・ウマの特殊な産状

C遺跡「グスク層」からの出土遺体はNISP総数で20点と少ないが、B16グリッドにおいてウシ・  
ウマ遺体の特殊な産状が確認されたので以下に記載する（第100表）。

B16グリッドではウマ10点、ウシ3点が採集されており、ウマは完存の下顎骨3点（同一個体と  
考えられる左右下顎骨および別個体の右下顎骨）、ウシは別個体と考えられる左右下顎骨各1点（左  
は完存、右は下顎枝を欠損）が含まれる。これらの下顎骨はすべて幼獣で、ウマはM1未萌出とM1  
萌出中が各1個体、ウシはM1萌出中（M2未萌出）とM2萌出中（M3未萌出）が各1個体である。こ  
のほかにはウマは右距骨・踵骨と手/足根骨各1点、基節骨3点、ウシは左寛骨1点が得られている。  
またウマのすべての下顎骨と基節骨にはカットマークが確認されている。詳細な出土状況の確認が  
未了ではあるが、上記のようなきわめて特殊な内容からみて、これらの遺体群は通常の廃棄行為で  
はなく、何らかの特殊な取り扱いを受けたものである可能性が高い。

なお、B16グリッドでは「後期層」からもウマの遊離歯9点（乳臼歯4点を含む）と中手/中足  
骨1点、ウシ幼獣の左上顎骨（M1萌出中）が採集されており、上記のウシ・ウマと同一個体の資料  
が含まれている可能性がある。またB16グリッドでは、先述の通り「グスク層」から明らかなブタ  
頭骨（頭頂骨～後頭骨）、「後期層」からもブタ下顎骨（下顎角～筋突起）が採集されている。明ら  
かにブタと判断できる遺体は他に確認されていないことから、これらも上記のウシ・ウマ遺体群と  
関連する可能性がある。



### 平安山原B遺跡Ⅲ層

**脊椎動物遺体の概要**：脊椎動物遺体全体の組成（第101表、第187図）をみると、NISP比ではイノシシ／ブタが主体をなし、魚類、ウシ、ウマ、ジュゴン、イヌがこれに次ぐ。ウミガメ類も普通である。リクガメ類・鳥類は確認されなかった。B遺跡「耕作域」における層位変化（第187図）をみると、ウシ・ウマはⅢc～Ⅲe層ではごく少ないが、Ⅲa～Ⅲb層で増加する。

C遺跡V層貝層Ⅱ～Ⅲ群と比較すると、魚類が大幅に減少し、イノシシ／ブタ、ウシ、ウマ、イヌが増加する。リクガメ類が消滅するのも特徴である。なお、B遺跡Ⅱ層（近世～近代）では魚類の減少とウシの増加がいつそう明確となる。

**魚類**：ハリセンボン科が最も多く、フエフキダイ科、ブダイ科がこれに次ぎ、ベラ科、クロダイ属も普通である（第101表、第188図）。他にフグ科とウツボ科がわずかにみられた。C遺跡と比較しても、ハタ科がみられない点を除けば大きな変化は認められない。フエフキダイ科の前上顎骨2点はいずれもハマフエフキ型、ブダイ科の咽頭骨・前上顎骨・歯骨11点はすべてアオブダイ属、ベラ科の咽頭骨はシロクラベラ型2点、ベラ科Aが1点であった。

**イヌ**：散乱状態で検出されており、埋葬など特殊な産状を示唆する例は確認されていない。下顎骨と遊離歯が多いが、四肢骨もみられる（第99表）。

**イノシシ／ブタ**：Ⅲ層のイノシシ／ブタには、年代的にみてブタが含まれる可能性は十分に考えられるが、形態的にはいずれも野生種との判別は難しく、明確な家畜化（ブタ化）の特徴を示すものは確認されていない。年齢構成をみても、顎骨に基づく概要では、乳歯を伴う個体（約1.5歳以下）と永久歯への交換を完了した個体のMNI比は4:10で、後者のうちM3が萌出完了した個体（約3.5歳以上）が9個体を占めており、グスク時代以降の遺跡（たとえば今回の調査区の北西側に連なる平安山原A遺跡Ⅱ層・桶泉2016）において飼育の証拠としてしばしば指摘される若齢個体（約1.5歳前後）への偏りは認められない（第99表）。部位組成については詳細な検討を行っていないが、NISPでみると、頭蓋骨と上顎骨・遊離歯が25点、下顎骨・遊離歯が54点、前肢骨が80点、後肢骨が57点で、全身の骨格が出土しており、著しい偏りは認められない（第101表、第187図）。性比を下顎犬歯数（顎骨に植立しているもの+遊離歯）にもとづく最小個体数でみると、雄6：雌3で、雄が優勢である。解体痕については、上腕骨と脛骨各4点および橈骨1点にスパイラル・フラクチャーが確認された。

**ウシ**：下顎骨・遊離歯と四肢骨が出土している（第99表）。部位の偏りはとくに認められない。いずれも散乱状態で検出されており、特殊な産状を示唆する例は確認されていない。上腕骨・脛骨・中手骨・中足骨各1点にスパイラル・フラクチャーが確認された。

**ウマ**：出土資料15点中13点を遊離歯が占める（第99表）。とくにB8グリッドでは切歯・臼歯7点が出土しているが、同一個体のものかは不明である。

**ジュゴン**：頭骨破片4点、椎骨破片5点、肋骨破片19点が採集されている（第99表）。いずれも散乱状態で検出されており、特殊な産状を示唆する例は認められない。解体痕・加工痕は確認されなかった。

### 3. 考察—平安山原B遺跡（HB①・②・④地区）との比較

今回報告した調査区の北東側に隣接する平安山原B遺跡HB①・②・④地区でも貝塚時代後期前半のまとまった資料が得られている（桶泉2015）。最後に、両調査区の貝塚時代後期の遺体群について予想的に比較検討する。両調査区の層序・年代の厳密な対比は難しいが、ここでは暫定的に、

B遺跡 HB①・②・④地区のV層が今回のC遺跡V層におおむね並行するものととらえておく。

今回はMNIが未算出なのでNISP比で比較すると、両調査区とも魚類とイノシシ/ブタを主体とする基本的パターンは共通しているが、今回の調査区では魚類の比率はるかに高い。また今回の調査区ではリクガメ類・ウミガメ類・ジュゴンが多いのも特徴である。イノシシ/ブタの部位組成については、B遺跡 HB①・②・④地区では頭骨・歯と四肢骨がいずれも多産しているのに対して、今回の調査区ではほぼ頭骨・歯に限られる点できわめて特異的である。魚類の組成も、HB①・②・④地区に比べて今回の調査区ではフエフキダイ科が少なく、ハリセンボン科が多い点など、相違が大きい。このように、隣接した地区であるにも関わらず、遺体群の内容には顕著な差が認められた。

いっぽうジュゴンに関しては、B遺跡 HB①・②・④地区では頭骨1点が出土したのみであり、特殊な性格を持つものである可能性が想定される。このことからみて、今回調査区の貝層Ⅲ群5層A16グリッドで単独出土した頭骨についても類似の性格のものである可能性が考えられる。

謝辞：分析作業に際しては、島袋春美氏・山城安生氏・東門研治氏・松原哲志氏ほか北谷町教育委員会の皆様より多大なるご教示・ご協力を賜った。黒住耐二氏（千葉中央博物館）には多くのご教示を賜った。記して厚く御礼申し上げる。

#### ＜参考文献＞

- ・桶泉岳二 (2007) 『伊礼原遺跡から出土した脊椎動物遺体群』、『伊礼原遺跡-伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業-』（北谷町教育委員会編）、沖縄県北谷町教育委員会、pp180-534.
- ・桶泉岳二 (2015) 『平安山原B遺跡から採集された脊椎動物遺体』『平安山原B遺跡-桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成20・21・23年度）』（島袋春美編）、沖縄県北谷町教育委員会、pp.361-387.
- ・桶泉岳二 (2016) 『平安山原A遺跡から採集された脊椎動物遺体の概要』『平安山原A遺跡-桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成19・21・22・23年度）』（島袋春美編）、沖縄県北谷町教育委員会、pp.396-407.

第98表 平安山原B遺跡(HB③地区)・C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の種名一覧

軟骨魚綱	CHONDRICHTHYES	爬虫綱	REPTILIA
サメ類	Lamniformes?	アオウミガメ	<i>Chelonia mydas</i>
エイ目	Rajiformes	リュウキュウウミガメ?	<i>Geocomya spengleri japonica</i> ?
硬骨魚綱	OSTEICHTHYES	哺乳綱	MAMMALIA
ウツボ科	Muraenidae	オオコウモリ科	Pteropodidae
ハタ科(マハタ型)	Serranidae cf. <i>Epinephelus</i>	ネズミ科	Muridae
ハタ科(スジアラ型)	Serranidae cf. <i>Plectropomus</i>	イヌ	<i>Canis familiaris</i>
アジ科	Carangidae	シカ科	Cervidae
フエダイ科	Lutjanidae	イノシシまたはブタ	<i>Sus scrofa</i>
クロダイ属	<i>Acanthopagrus</i> sp.	ウシ	<i>Bos taurus</i>
ヨコシマクロダイ	<i>Monotaxis grandoculis</i>	ウマ	<i>Equus ferus</i>
フエフキダイ属(ハマフエフキ型)	<i>Lethrinus</i> cf. <i>L. nebulosus</i>	ジュゴン	<i>Dugong dugon</i>
キツネフエフキ	<i>Lethrinus miniatus</i>	イルカ類	Cetacea (small)
ベラ科(シロクラベラ型)	Labridae cf. <i>Cherodon shoemleini</i>	クジラ類	Cetacea (large)
ベラ科(タキベラ型)	Labridae cf. " <i>Bodianus perditio</i> "		
ベラ科A	Labridae A		
ベラ科B	Labridae B		
イロブダイ属	<i>Balibometopon</i> sp.		
アオブダイ属	<i>Scarus</i> sp.		
コチ科	Platycephalidae		
モンガラカワハギ科	Balistidae		
フグ科	Tetraodontidae		
ハリセンボン科	Diodontidae		

第99表-1 平安山原B遺跡(HB③地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

※1 採集位置凡例: a=成骨, b=近位端, c=骨幹, d=遠位端, k=種別, (a)~(d)は未定種の骨種のみ, (a)~(d)は骨種未定種, (a)~(d)は骨種のみ未定

骨種については, [ ] : 資料保存範囲 ( ) : 採出中の骨, ( ) : 未同定種, X : 脱落

※2 <>を付けて示した資料(カメドール・ジュゴン)の標識部(不明の骨片)はMSD非対象種

遺跡	種名	種名(種別)	群	グリッド	遺構	骨種番号	骨種種類	部位	保存位置+1	足長	骨長	備考
100①	I	I	A3	B13		79	365	未同定	未確認			
100①	I	I	A3	B13		79	365	未同定	未確認			
100①	I	I	A4	08		1520	421	ウシガメ	甲殻	0		(1)
100①	I	I	A4	08		1520	228	インシシブタ	肋骨	0		
100①	I	I	B3	A14		67	314	インシシブタ?	肋骨	0		
100①	I	I	B3-4	A20-1		445	354	ウシガメ	肋骨板	0		
100①	I	I	B3-1	A20-1		445	348	ウシガメ	肋骨板	0		(1) 加工品?
100①	I	I	D4	02		20	54	ハナシシブタ科	前上顎・歯骨			
100①	I	I	D4	02		30	55	ハナシシブタ科	前上顎・歯骨			
100①	I	I	D4	06		306	342	ウシ	踵骨	0		
100①	I	I	D4	072-4		72	327	ウシ	高肋骨			
100①	I	I	D4	08		47	474	ウシ	上顎歯骨	0		
100①	I	I	D4	07		20	298	ウシ	上顎歯骨	1		
100①	IIa	IIa	A3	S14	新築一辺高	227	312	インシシブタ	肋骨	0		
100①	IIb	IIb	B3	A14		3A18	345	455	ウシ	上顎歯骨	P2	
100①	IIb	IIb	B3	02	06		12	370	ウシ	高肋骨		
100①	IIb	IIb	D4	07		5	64	インシシブタ	下顎骨			(C)P×P3×P4×MEME
100①	IIb	IIb	D4	07		6	147	インシシブタ	上顎骨	d		
100①	IIb	IIb	D4	07		262	320	ウシ	中手骨	ac<d>		(1) 足腕
100①	IIb	IIb	D4	09		3	392	ウシ	上顎骨	d		
100①	IIb	IIb	D4	0A		2	362	ウシ/ウマ	肋骨	p		
100①	IIb	IIb	D4	C5		15	354	未同定	未確認			
100①	IIc	IIc	D4	BC3-6		3K22	804	28	アオダマ属	前上顎骨		
100①	IIc	IIc	D4	C5-6		3K32	1031	15	アオダマ属	歯骨		
100①	IIc	IIc	D4	C5-6		3K32	1031	101	インシシブタ	下顎歯骨	C	
100①	IIc	IIc	D4	BC3-4		3K32	1030	149	インシシブタ	上顎骨	0<0>	
100①	IIc	IIc	D4	C5		3K32	1402	278	インシシブタ	寛骨(肋骨)	F1	
100①	IIc	IIc	D4	C5-6		3K32	1031	272	インシシブタ?	上顎骨	0<0>	
100①	IIc	IIc	D4	C5-6		3K32	579	360	ウシ	肋骨		
100①	IIc	IIc	D4	BC3-6		3K32	1030	328	ウシ	高肋骨		
100①	IIc	IIc	D4	C5-6		3K32	1031	378	ウシ	高肋骨		
100①	IIc	IIc	D4	C5-6		3K32	579	447	ジュゴン	肋骨	0	
100①	IIc	IIc	D4	D5	右列列	1032	236	ウシガメ	甲殻	0		(1)
100①	IIc	IIc	D4	C2	右列列	471	301	ウシガメ	下顎骨			(M)×MEME×
100①	IIc	IIc	D4	C5-7	右列列	7	155	インシシブタ	上顎骨	d		
100①	IIc	IIc	D4	D5	右列列	491	197	インシシブタ	大顎骨	0<0>		
100①	IIc	IIc	D4	C5-7	右列列	7	470	ウシ	下顎歯骨	M1		
100①	IIc	IIc	D4	C5-7	右列列	7	471	ウシ	下顎歯骨	M2		
100①	IIc	IIc	D4	C5-7	右列列	7	388	ウシ	下顎歯骨	行歯		
100①	IIa	IIa	A3	S18		1271	87	インシシブタ	上顎歯骨	M3		
100①	IIa	IIa	A3	Q28		1363	254	インシシブタ	胸骨	0		
100①	IIa	IIa	A3	Q29		542	225	インシシブタ	肋骨	0		
100①	IIa	IIa	A3	Q27-7		20	345	ウシ	中手骨	0		(1) スパイトルフラクチャー
100①	IIa	IIa	A4	S9		979	16	フユウキヤイ科	歯骨	0		
100①	IIa	IIa	A4	08		922	256	インシシブタ	肋骨	0		
100①	IIa	IIa	A4	Q3		30	400	ウシ	下顎歯骨	M1		
100①	IIa	IIa	A4	T2		12	409	ウシ/ウマ	踵骨			
100①	IIa	IIa	A4	T2		12	380	ウシ/ウマ	踵骨			
100①	IIa	IIa	A4	S6		236	366	哺乳類	踵骨	0		
100①	IIa	IIa	D4	-		200	18	フユウキヤイ科	歯骨	0		
100①	IIa	IIa	D4	08		35	27	アオダマ属	歯骨	0		
100①	IIa	IIa	D4	08		20	280	イヌ	下顎歯骨	M1		
100①	IIa	IIa	D4	B2-1		270	274	イヌ	上顎骨	0		(1) 加工品
100①	IIa	IIa	D4	05		169	68	インシシブタ	上顎骨	[MEME]		
100①	IIa	IIa	D4	08		20	111	インシシブタ	下顎歯骨	M3		
100①	IIa	IIa	D4	07		14	200	インシシブタ	第4中手骨	p		
100①	IIa	IIa	D4	A3		214	313	インシシブタ	肋骨	0		
100①	IIa	IIa	D4	06		235	400	ウシ	下顎歯骨	切歯		
100①	IIa	IIa	D4	08		20	405	ウシ	上顎歯骨	行歯		
100①	IIa	IIa	D4	08		24	404	ウシ	上顎歯骨	行歯		
100①	IIa	IIa	D4	BC2-9		25	380	ウシ	下顎歯骨	行歯		
100①	IIa	IIa	D4	08		20	395	ウシ	下顎歯骨	M3		
100①	IIa	IIa	D4	08		20	396	ウシ	上顎歯骨	切歯		
100①	IIa	IIa	D4	08		21	410	ウシ/ウマ	踵骨			
100①	IIb	IIb	(S1)	A3	B19		1079	33	フユウキヤイ科	歯骨		
100①	IIb	IIb	(S1)	A3	B18		968	109	インシシブタ	上顎骨	0<0>	
100①	IIb	IIb	(S1)	A4	T10		133	37	ハナシシブタ科	前上顎・歯骨		
100①	IIb	IIb	(S1)	A4	T8		1421	36	ハナシシブタ科	前上顎・歯骨		
100①	IIb	IIb	地下	A4	T8	SD04	753	394	インシシブタ	切歯		(H)XXX
100①	IIb	IIb	(S1)	A4	T9		1433	95	インシシブタ	下顎歯骨	C	
100①	IIb	IIb	(S1)	A4	S7-8		304	123	インシシブタ	下顎歯骨	M3	
100①	IIb	IIb	(S1)	A4	S9		139	462	インシシブタ	寛骨(肋骨)	F1	
100①	IIb	IIb	(S1)	A4	T8		1422	402	ウシ	下顎歯骨	0<0>	
100①	IIb	IIb	(S1)	A4	T8		196	464	ジュゴン	踵骨	0	
100①	IIb	IIb	(S1)	A4	T9		352	477	ジュゴン	踵骨	0	
100①	IIb	IIb	(S1)	D4	06		573	58	ハナシシブタ科	前上顎・歯骨		
100①	IIb	IIb	(S1)	D4	06		573	42	ハナシシブタ科	前上顎・歯骨		
100①	IIb	IIb	(S1)	D4	A7		306	427	ウシガメ	甲殻	0	(1)
100①	IIb	IIb	(S1)	D4	A8		1303	105	インシシブタ	下顎歯骨	M3	
100①	IIb	IIb	(S1)	D4	07		35	230	インシシブタ	尺骨	0	

第99表-2 平安山原B遺跡(HB3地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

\*1 採集位置凡例：a=実存, b=近視鏡, c=資料, d=破片, (a)-(d)=未定種の骨体のみ, (a)-(c)=骨体未定種, (a)-(d)=骨体のみ欠損  
 骨質については, [ ] 資料保存状態 ( ) 採出中の骨, ( ) 未測定骨, X 別属  
 \*2 <>を付けた資料(カブト・ジュゴン)の採集部位(不明)はMSA決定対象外

遺跡	種名	標準(種別)	試	グリッド	遺構	台帳番号	骨番号	種類	部位	保存位置*1	左右	数	備考
HB3	鹿	鹿(10)	B4	06		573	091	インソニアブタ	大腿骨	m		1	
HB3	鹿	鹿(10)	B4	C7		147	318	インソニアブタ	肋骨	f		1	遺
HB3	鹿	鹿(10)	B4	06		573	338	ウシ	中手骨	a+<f>	R	1	
HB3	鹿	鹿(10)	B4	07		41	307	ウマ	下顎歯槽部	口蓋	L	1	内→MSのa+P1&L
HB3	鹿	鹿(10)	B4	07		55	463	ウシウマ	腕骨	f		1	
HB3	鹿	鹿(7)	A3	S18		596	13	フェウキダイ	肋骨	f	L	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A3	S14		1448	41	ハリスゼン科	前上顎・歯骨	f		1	
HB3	鹿	鹿(7)	A3	Q15		551	236	インソニアブタ	尺骨	m		1	
HB3	鹿	鹿(7)	A3	Q18		1264	453	ジュゴン	不明	f		(1)	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	09		1042	19	ハマムシクシ	前上顎骨	f	L	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	09		423	4	ゴウケウシ	下顎歯槽部	C		1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	09		1042	32	アブ	前上顎・歯骨	f		1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	06		1049	51	ハリスゼン科	前上顎・歯骨	f		1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	09		1042	47	ハリスゼン科	前上顎・歯骨	f		1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	09		1051	57	ハリスゼン科	前上顎・歯骨	f		1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	T6		1025	49	ハリスゼン科	前上顎・歯骨	f		1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	T7		1026	45	ハリスゼン科	前上顎・歯骨	f		1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S18		796	407	ウシウマ	上腕骨	f	R	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	07		725	391	ウシウマ	掌骨	f		(1)	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	09		1043	353	ウシウマ	掌骨	f		(1)	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S18		1043	425	ウシウマ	掌骨	f		(1)	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S8		636	124	インソニアブタ	上顎骨	[P4XMMI]	L	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S8		675	92	インソニアブタ	下顎骨	[P4XMI]	L	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	T6		1029	99	インソニアブタ	下顎歯槽部	C	L	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S6		1032	296	インソニアブタ	下顎歯槽部	C	L	1	遺
HB3	鹿	鹿(7)	A4	Q-T10		467	96	インソニアブタ	下顎歯槽部	C	R	1	遺
HB3	鹿	鹿(7)	A4	T6		1029	108	インソニアブタ	下顎歯槽部	M3	R	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	Q2		1048	291	インソニアブタ	踵骨	f<f>	L	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S6		1037	176	インソニアブタ	上腕骨	f<f>	R	1	3&10&11&12&13&14&15&16&17&18&19&20&21&22&23&24&25&26&27&28&29&30&31&32&33&34&35&36&37&38&39&40&41&42&43&44&45&46&47&48&49&50&51&52&53&54&55&56&57&58&59&60&61&62&63&64&65&66&67&68&69&70&71&72&73&74&75&76&77&78&79&80&81&82&83&84&85&86&87&88&89&90&91&92&93&94&95&96&97&98&99&100
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S8		675	152	インソニアブタ	上腕骨	f	L	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S6		675	185	インソニアブタ	脛骨	f	L	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S8		742	173	インソニアブタ	脛骨	f<f>	L	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	Q-T10		464	159	インソニアブタ	脛骨	m	R	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S18		657	238	インソニアブタ	尺骨	f	L	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	09		394	246	インソニアブタ	尺骨	f	R	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S6		747	192	インソニアブタ	尺骨	f<f>	L	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	Q-T10		464	254	インソニアブタ	尺骨	m	R	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S6		668	388	インソニアブタ	腕骨(指骨)	f	L	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	T6		739	281	インソニアブタ	腕骨(指骨)	f	R	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	T6		1029	279	インソニアブタ	腕骨(指骨)	f	R	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S8		634	188	インソニアブタ	脛骨	f	R	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	Q-T10		464	247	インソニアブタ	脛骨	f<f>	R	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S7		729	221	インソニアブタ	脛骨	m	R	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	T6		472	219	インソニアブタ	脛骨	m	R	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S5		1543	309	インソニアブタ	脛骨	m<f>	R	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S6		1049	259	インソニアブタ	脛骨	m<f>	R	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S6		1037	396	インソニアブタ	脛骨	f	L	1	遺
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S5		722	261	インソニアブタ	脛骨	f	R	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S6		634	403	ウシ	下顎歯槽部	歯4	L	1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S5		469	349	ウシ	中手骨	f	L	1	3&10&11&12&13&14&15&16&17&18&19&20&21&22&23&24&25&26&27&28&29&30&31&32&33&34&35&36&37&38&39&40&41&42&43&44&45&46&47&48&49&50&51&52&53&54&55&56&57&58&59&60&61&62&63&64&65&66&67&68&69&70&71&72&73&74&75&76&77&78&79&80&81&82&83&84&85&86&87&88&89&90&91&92&93&94&95&96&97&98&99&100
HB3	鹿	鹿(7)	A4			1124	344	ウシ	中手・中足骨	f		1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	T4		665	465	ジュゴン	歯骨	f		1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	S6		436	443	ジュゴン	肋骨	f		1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	T6		1025	418	ジュゴン	肋骨?	f		1	遺
HB3	鹿	鹿(7)	A4	T6		631	412	ジュゴン	肋骨?	f		1	
HB3	鹿	鹿(7)	A4	T6		1029	452	ジュゴン	掌骨	f		1	(1)
HB3	鹿	鹿(7)	B4	不明		492	7	アオダマ属	不明	f		(1)	
HB3	鹿	鹿(7)	B4	08		636	424	ウシウマ	掌骨	f		(1)	
HB3	鹿	鹿(7)	B4	08		636	366	ウシウマ	掌骨	f		(1)	
HB3	鹿	鹿(7)	B4	07		799	131	インソニアブタ	頰骨	f		1	
HB3	鹿	鹿(7)	B4	C7		765	72	インソニアブタ	下顎骨	[M3M]	R	1	
HB3	鹿	鹿(7)	B4	C7		764	78	インソニアブタ	下顎骨	[P2XPP3XMI&M2]	R	1	
HB3	鹿	鹿(7)	B4	A7		635	109	インソニアブタ	下顎歯槽部	M3	R	1	
HB3	鹿	鹿(7)	B4	07		729	255	インソニアブタ	踵骨	f		1	
HB3	鹿	鹿(7)	B4	07		723	143	インソニアブタ	上腕骨	f<f>	L	1	
HB3	鹿	鹿(7)	B4	C7		829	406	ウマ	上顎歯槽部	口蓋	R	1	内→MSのa+P1&L
HB3	鹿	鹿(7)	B4	C8		967	327	ウシウマ	肋骨	f		1	
HB3	鹿	鹿(7)	B4	C7		816	454	ジュゴン	不明	f		(1)	
HB3	鹿	鹿(7)	B4	07		407	373	和笠	未確認	f		1	
HB3	鹿	鹿(7)	-	-		966	11	フェウキダイ	前上顎骨	f	L	1	
HB3	鹿	鹿(7)	-	-		543	100	インソニアブタ	上顎歯槽部	C	L	1	遺
HB3	鹿	鹿(7)	-	-		536	125	インソニアブタ	上顎歯槽部	P4	L	1	
HB3	鹿	鹿(7)	-	-		568	92	インソニアブタ	下顎歯槽部	C	R	1	遺
HB3	鹿	鹿(7)	-	-		536	122	インソニアブタ	上腕骨	f	L	1	
HB3	鹿	鹿(7)	-	-		566	207	インソニアブタ	脛骨	f	R	1	
HB3	鹿	鹿(7)	-	-		536	206	インソニアブタ	大腿骨	m<f>	R	1	
HB3	鹿	鹿(7)	-	-		536	401	ウシ	下顎歯槽部	M3	L	1	
HB3	鹿	鹿(11A)	A3	T15		1666	34	ハリスゼン科	前上顎・歯骨	f		1	
HB3	鹿	鹿(11A)	A3	Q20		1361	352	ウシウマ	掌骨	f		(1)	
HB3	鹿	鹿(11A)	A3	T15		1666	322	ウシ	中手・中足骨	m		1	

第V章  
1

第99表-3 平安山原B遺跡(HB3地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

\*1 残存位置凡例：a(成骨), b(近頭頂), c(骨幹), d(遠頭頂), e(破片), f(a)は未定種の骨質のみ, f(1)-f(4)は骨端未定種, f(5)-f(9)は骨質のみ未定種  
 骨質については, [ ] 種名推定範囲, ( ) 属出中の種, < > 未定種, × 別属

\*2 < > 本行けて表した資料(カメ類・ジュゴン)の詳細種別不明項目は[HB3]P定対象種

遺跡	遺体	種名 (種別)	区	グリッド	遺構	台帳 番号	骨 番号	種類	部位	残存位置*1	表紙 数	備考
H02②	遺体	種名(HB3)	A3	T15		1509	275	イヌ	犬頭骨	m	1	
H02②	遺体	種名(HB3)	A3	T15		1509	71	イノシシ	歯		1	L-R
H02②	遺体	種名(HB3)	A3	T15		1509	127	イノシシ	上顎骨	[Sho3a-RM]	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A3	T15		1509	74	イノシシ	上顎骨	[MIM]	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A3	T16		1505	123	イノシシ	上顎骨	[CPSPSP4]	1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A3	T15		1509	183	イノシシ	歯	p-m	1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A3	T15		1509	232	イノシシ	尺骨	m	1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A3	Q27		1506	408	ジュゴン	椎骨		1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	R7		1625	3	アオゾマイ	前上顎骨		1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S9		1674	31	アオゾマイ	口蓋骨		1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S9		1230	2	シロクワカウ	上咽頭骨		1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	R4		2476	5	ベソウ	下咽頭骨		1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	R4		2476	1	アオゾマイ	上咽頭骨		1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S9		1241	4	アオゾマイ	上咽頭骨		1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S9		1281	12	アオゾマイ	下咽頭骨		1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S8		1520	26	アオゾマイ	前上顎骨		1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S8		2112	25	アオゾマイ	前上顎骨		1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S8		1217	30	アオゾマイ	前上顎骨		1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S10		1528	29	アオゾマイ	歯		1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S8		1632	46	ウシ	前上顎・歯骨		1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	Q2		1564	40	ハリセンボン	前上顎・歯骨		1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S10		1192	48	ハリセンボン	前上顎・歯骨		1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S7		1316	44	ハリセンボン	前上顎・歯骨		1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S8		1632	39	ハリセンボン	前上顎・歯骨		1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S9		1617	59	ハリセンボン	前上顎・歯骨		1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S9		1685	52	ハリセンボン	前上顎・歯骨		1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	T7		1629	61	ハリセンボン	前上顎・歯骨		1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	T7		1682	53	ハリセンボン	前上顎・歯骨		1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S10		1153	62	ウシ(胎前)	椎骨		1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S10		2104	252	ウシ	椎骨		1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S10		2104	249	ウシ	椎骨		1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S9		1680	350	ウシ	椎骨		1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	T10		1706	248	ウシ	椎骨	b	1	(C)
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	R10		1633	432	ウシ	椎骨	b	1	(C)
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	R7		1521	259	ウシ	椎骨	b	1	(C)
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S7		1605	433	ウシ	椎骨	b	1	(C)
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S8		1328	422	ウシ	椎骨	b	1	(C)
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S8		2080	422	ウシ	椎骨	b	1	(C)
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S9		1230	426	ウシ	椎骨	b	1	(C)
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S9		1686	421	ウシ	椎骨	b	1	(C)
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S7		1318	293	イヌ	下顎骨	b	1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	T4		1611	323	イヌ	第4中手骨	b	1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	R10		1327	270	イヌ	下顎骨	[P×M]×	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	Q6		1366	328	イノシシ	歯	歯根部		f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S10		1325	81	イノシシ	上顎骨	[M]	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	T6		1249	136	イノシシ	上顎骨	[P×P]×	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	T6		1915	79	イノシシ	上顎骨	[P]×[P]×[P]×[RM]×[M]	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S8		2112	383	イノシシ	上顎歯槽	[Sho3a]×	1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	T7		1559	86	イノシシ	上顎歯槽	C	1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S8		1217	126	イノシシ	上顎歯槽	M1	1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	T6		1138	118	イノシシ	上顎歯槽	ME	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S8		1319	115	イノシシ	上顎歯槽	ME	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S9		2112	67	イノシシ	上顎歯槽	M3	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	R10		1646	439	イノシシ	下顎骨	側頭骨	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S10		2103	75	イノシシ	下顎骨	[M]×[ME]×	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S9		2113	91	イノシシ	下顎骨	[Sho3a]×[ME]×	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S9		1784	140	イノシシ	下顎骨	[Sho3a]×[M]×	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S9		2113	66	イノシシ	下顎骨	[M]×[ME]×	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	Q2		1621	69	イノシシ	下顎骨	[M]	1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S10		1192	76	イノシシ	下顎骨	[C]×[P]×[P]×[P]×[M]×[M]	1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S7		1318	139	イノシシ	下顎骨	[M]×	1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S8		2167	65	イノシシ	下顎骨	[ME]×[ME]	1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S7		1843	196	イノシシ	下顎歯槽	12	1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S8		1217	102	イノシシ	下顎歯槽	13	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S8		1383	21	イノシシ	下顎歯槽	C	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	R4		2476	119	イノシシ	下顎歯槽	ME	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S9		1674	90	イノシシ	下顎歯槽	ME	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S10		1529	114	イノシシ	下顎歯槽	ME	1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	T3		783	112	イノシシ	下顎歯槽	ME	1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	T7		1221	113	イノシシ	下顎歯槽	ME	1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	R9		1637	105	イノシシ	上顎歯槽	14	1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S10		1194	104	イノシシ	上顎歯槽	15	1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S9		1689	102	イノシシ	上顎歯槽	16	1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	T7		1559	231	イノシシ	歯		1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	T7		1559	306	イノシシ	歯		1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S8		1319	467	イノシシ	歯		1	f
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S8		1802	218	イノシシ	蹄甲骨	<f>	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	T6		1238	263	イノシシ	蹄甲骨	<f>	1	R
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	Q6		1366	252	イノシシ	蹄甲骨	d	1	L
H02②	遺体	種名(HB3)	A4	S10		1688	230	イノシシ	蹄甲骨	d	1	L



第99表-5 平安山原B遺跡(HB3)地区から採集された脊椎動物遺体の同定結果

※1 採集位置(例) a成層, a近辺境, a資料, a遺位境, b種片, (a)・(b)は未定名の骨塊のみ, (a)・(b)は骨塊未定名脱落, (a)・(b)は骨塊のみ未定名  
 ※2 骨について: [ ] 骨質保存状態 ( ) 最出中の歯, C 未測定, X 脱落

※3 <>を付けて示した資料(カメ類・ジュゴン)の詳細情報は別添ページはMSB非対象資料

遺跡	種名	種名(学名)	区	グリッド	遺構	骨塊番号	骨種	部位	保存位置※1	左右	数	備考	
191①	鹿	鹿(14)	-	R12		1302	94	インシニアタ	下顎歯槽		1	①	
191①	鹿	鹿(15)	AA	05		2327	429	ウシガタ	椎骨		1	(1)	
191①	鹿	鹿(15)	AA	74		2342	275	ウシガタ	未測定		1		
191①	鹿	鹿(15)	AA	53		1345	157	インシニアタ	上顎歯槽	MS	1	1	
191①	鹿	鹿(15)	AA	59		2510	73	インシニアタ	下顎骨	[MS・MS1]	1	1	
191①	鹿	鹿(15)	AA	74		2330	466	インシニアタ	下顎骨	顔面突起	1	1	
191①	鹿	鹿(15)	AA	89		2374	71	インシニアタ	下顎骨	[P3・M1M2]	1	1	
191①	鹿	鹿(15)	AA	73		2149	98	インシニアタ	下顎歯槽	C	1	①	
191①	鹿	鹿(15)	AA	59		2240	265	インシニアタ	椎骨	①a	1	1	
191①	鹿	鹿(15)	AA	59		2184	133	インシニアタ	上腕骨	ms①a	1	1	
191①	鹿	鹿(15)	AA	72		2153	143	インシニアタ	上腕骨		1	1	
191①	鹿	鹿(15)	AA	53A		2304	145	インシニアタ	上腕骨	d	1	1	
191①	鹿	鹿(15)	AA	86		2413	174	インシニアタ	椎骨	jp・ms	1	1	
191①	鹿	鹿(15)	AA	86		2413	236	インシニアタ	尺骨	jp・ms	1	1	
191①	鹿	鹿(15)	AA	37		2241	227	インシニアタ	尺骨	ms	1	1	
191①	鹿	鹿(15)	AA	74		2330	269	インシニアタ	掌骨	f1	1	1	
191①	鹿	鹿(15)	AA	59		2510	91	インシニアタ	寛骨(椎骨)	f1	1	1	
191①	鹿	鹿(15)	AA	71		2547	198	インシニアタ	大脚骨	ms①a	1	1	
191①	鹿	鹿(15)	AA	87		2292	196	インシニアタ	大脚骨	①a	1	1	
191①	鹿	鹿(15)	02	A18		2136	267	イヌ	椎骨	ms	1	1	
191①	鹿	鹿(15)	02	A18		2534	166	インシニアタ	上腕骨	①a	1	1	
191①	鹿	鹿(15)	04	A2		2182	60	ハリセンボノ科	前上顎・歯骨		1	1	
191①	鹿	鹿(12)	AS	T15		2485	118	インシニアタ	上顎歯槽	MS	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	AA	76		823	10	フユホシノ科	前上顎骨		1	1	
191①	鹿	鹿(12)	AA	510		881	56	ハリセンボノ科	前上顎・歯骨		1	1	
191①	鹿	鹿(12)	AA	78		854	38	ハリセンボノ科	前上顎・歯骨		1	1	
191①	鹿	鹿(12)	AA	59		849	438	ウシガタ	椎骨		1	(1)	
191①	鹿	鹿(12)	AA	572		1388	265	インシニアタ	椎骨	①a	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	AA	79		3002	143	インシニアタ	上腕骨	①a①d	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	AA	59		880	171	インシニアタ	上腕骨	①a	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	AA	58		1063	177	インシニアタ	椎骨	jp	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	AA	89		1041	160	インシニアタ	椎骨	jp	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	AA	89		1041	227	インシニアタ	尺骨	jp	1	1	
191①	鹿	鹿(12.2)	AA	510		786	238	インシニアタ	尺骨	jp	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	AA	77		1443	293	インシニアタ	寛骨(椎骨)	f1	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	AA	510		881	218	インシニアタ	椎骨	jp	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	AA	510		1314	303	インシニアタ	椎骨	jp	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	AA	79		1063	264	インシニアタ	椎骨	d	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	AA	59		849	273	インシニアタ	上腕骨	ms①a	1	1	
191①	鹿	鹿(12.2)	AA	51		777	343	ウシ	中足骨	ms①a	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	AA	89		1041	412	ジュゴン	椎骨	jp	1	1	
191①	鹿	鹿(12.2)	AA	79		793	411	ジュゴン	椎骨	jp	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	AA	75		883	436	ジュゴン	趾骨	jp	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	AA	79		689	419	ジュゴン	趾骨	jp	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	AA	510		881	416	ジュゴン	趾骨	jp	1	①	
191①	鹿	鹿(12)	BA	C8		908	8	ウシガタ	前上顎骨		1	①	
191①	鹿	鹿(9~11)	BA	C8		877	460	フユホシノ科	白歯骨		1	1	
191①	鹿	鹿(12)	DA	09		1059	14	フユホシノ科	白歯骨		1	1	
191①	鹿	鹿(12)	04	09		940	43	ハリセンボノ科	前上顎・歯骨		1	1	
191①	鹿	鹿(9~11)	DA	05		827	50	ハリセンボノ科	前上顎・歯骨		1	1	
191①	鹿	鹿(12)	DA	08		1295	63	真骨魚(同定不可)	椎骨		1	1	
191①	鹿	鹿(12)	DA	09		1295	24	真骨魚(同定不可)	椎骨		1	1	
191①	鹿	鹿(9~11)	DA	C9		458	330	ウシガタ	上腕骨		1	1	
191①	鹿	鹿(12)	DA	A7		881	353	ウシガタ	趾骨	jp	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	DA	A7		861	428	ウシガタ	椎骨	jp	1	(1)	
191①	鹿	鹿(12)	DA	08		943	336	ウシガタ	椎骨	jp	1	(1)	
191①	鹿	鹿(10~11)	DA	04		700	420	ウシガタ	椎骨	jp	1	(1)	
191①	鹿	鹿(12)	DA	C7		998	370	ウシガタ	未測定		1	1	
191①	鹿	鹿(9~11)	DA	C8		857	294	イヌ	下顎骨	[I1×I2×I3×CP1×P2×P3×P4×M1×M2×M3]	1	1	①
191①	鹿	鹿(10~11)	DA	E4		265	285	イヌ	下顎骨	[P4M1M2]	1	1	①
191①	鹿	鹿(10~11)	DA	D4		700	436	イヌ	下顎骨	顔面突起	1	1	①
191①	鹿	鹿(10)	DA	05		2961	295	イヌ	下顎歯槽	C	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	DA	C5		931	328	イヌ	下顎歯槽	MS	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	DA	04		1937	461	イヌ	椎骨		1	1	
191①	鹿	鹿(12)	DA	08		963	271	イヌ	椎骨	ms	1	1	
191①	鹿	鹿(13)	DA	04		1969	85	インシニアタ	上顎歯槽	C	1	①	
191①	鹿	鹿(12)	DA	09		1295	88	インシニアタ	上顎歯槽	MS	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	DA	06		1067	80	インシニアタ	下顎骨	[P3P3]	1	1	
191①	鹿	鹿(12)	DA	08		939	129	インシニアタ	下顎骨	[I1×I2×I3×CP2P3P4M1M2M3]	1	1	①
191①	鹿	鹿(12.2)	DA	08		1588	137	インシニアタ	下顎骨	[M3×]	1	1	
191①	鹿	鹿(13)	DA	C4		2095	128	インシニアタ	下顎骨	[C×P1×P2P3P4M1M2M3]	1	1	①
191①	鹿	鹿(9~11)	DA	C8		827	130	インシニアタ	下顎骨	[CP2×P3×]	1	1	①
191①	鹿	鹿(13)	DA	02		1865	138	インシニアタ	下顎骨	[ad3×ad4×]	1	1	1
191①	鹿	鹿(9~11)	DA	05		642	130	インシニアタ	下顎骨	[I1×I2×OC×ad3×ad4×ad5×M1×M2]	1	1	①
191①	鹿	鹿	DA	02	SK20	1888	70	インシニアタ	下顎骨	[M1]	1	1	①
191①	鹿	鹿(12)	DA	A7		861	133	インシニアタ	下顎骨	顔面突起	1	1	①
191①	鹿	鹿(12)	DA	08		939	129	インシニアタ	下顎骨	[I1I2×CP2×P3P4M1M2M3]	1	1	①
191①	鹿	鹿(13)	DA	C4		3095	128	インシニアタ	下顎骨	[CP1×P2P3P4M1M2M3×]	1	1	①
191①	鹿	鹿(12)	DA	C8		908	82	インシニアタ	下顎骨	[M2M3]	1	1	①
191①	鹿	鹿(12)	DA	A3		857	84	インシニアタ	下顎歯槽	C	1	1	①

第99表-6 平安山原B遺跡(HB③)地区から採集された脊椎動物遺体の同定結果

※1. 採集位置凡例：○成層、△近辺境、●資料、◇遠辺境、■種片、(a)～(h)は未調査の骨種のみ、(a)～(d)は骨種未調査脱落、(a)～(d)は資料のみ調査

骨種については、【】: 骨種推定( ) : 採出中の種、( ) : 未調査種、×: 脱落

※2. <>を付けた資料(カメシロ・ジュゴン)の詳細種別不明の種片はNISP算定対象外

遺跡	層位	標準層位(層別)	採	グリッド	遺構	骨種番号	骨種	種別	採集位置	分布	数	備考
100①	遺	遺 8~11	04	C8		488	23	インシゾプタ	下顎歯槽	C	L	①
100①	遺	遺 8~11	04	C4		1809	21	インシゾプタ	下顎歯槽	C	L	①
100①	遺	遺 8~11	04	C6		577	89	インシゾプタ	下顎歯槽	M3	L	①
100①	遺	遺 8~11	04	C8		577	125	インシゾプタ	下顎歯槽	M3	L	①
100①	遺	遺 113	04	E4		1405	118	インシゾプタ	下顎歯槽	M3	H	①
100①	遺	遺 113	04	C5		1434	286	インシゾプタ	頭骨	△>	L	①
100①	遺	遺 113	04	D4		2043	264	インシゾプタ	頭骨	△>	H	①
100①	遺	遺 112	04	C8		906	194	インシゾプタ	上胸骨	△	L	①
100①	遺	遺 111	04	05		121	130	インシゾプタ	上胸骨	△>	H	①
100①	遺	遺 112	04	C7		1090	136	インシゾプタ	上胸骨	△	L	①
100①	遺	遺 113	04	C7		1438	136	インシゾプタ	上胸骨	△	L	①
100①	遺	遺 112	04	C8		908	180	インシゾプタ	肋骨	△	L	①
100①	遺	遺 112	04	05		865	175	インシゾプタ	肋骨	△-△	L	①
100①	遺	遺 112	04	A8		1049	165	インシゾプタ	肋骨	△	L	①
100①	遺	遺 8~11	04	C7		523	240	インシゾプタ	肋骨	△	L	①
100①	遺	遺 112	04	B8		939	235	インシゾプタ	肋骨	△	L	①
100①	遺	遺 09	04	C6		218	202	インシゾプタ	肋骨	△-△	H	①
100①	遺	遺 112	04	A8		891	257	インシゾプタ	肋骨	△	L	①
100①	遺	遺 112	04	B8		939	236	インシゾプタ	肋骨	△	L	①
100①	遺	遺 112	04	B6		939	238	インシゾプタ	肋骨	△	H	①
100①	遺	遺 113	04	D4		1991	225	インシゾプタ	肋骨	△	L	①
100①	遺	遺 113	04	E4		1405	205	インシゾプタ	肋骨	△-△	L	① ス/イタラフクナチー
100①	遺	遺 10~11	04	E4		705	303	インシゾプタ	肋骨	△	L	①
100①	遺	遺 113	04	E4		1442	306	インシゾプタ	第2中肋骨	△	H	①
100①	遺	遺 112	04	C5		951	323	インシゾプタ	肋骨	△	H	①
100①	遺	遺 09	04	C8		260	473	ウシ	下顎骨	【M1-M2 下顎枝】	L	①
100①	遺	遺 112	04	C8		1001	456	ウシ	下顎骨	【P2×P3×M1×M2】	L	①
100①	遺	遺 8~11	04	D5		527	398	ウシ	下顎歯槽	切痕	L	①
100①	遺	遺 112	04	B6		903	384	ウシ	種骨	△>	L	①
100①	遺	遺 09	04	D5		293	328	ウシ	種骨	△	H	① ス/イタラフクナチー
100①	遺	遺 10~11	04	E4		785	381	ウシ	牛肋骨	△	L	①
100①	遺	遺 09	04	05		1487	325	ウシ	長肋骨	△	L	①
100①	遺	遺 113	04	D5		2039	361	ウシ	中肋骨	△	L	①
100①	遺	遺 8~11	04	D3-4		578	337	ウシ	上胸骨	△>	L	① ス/イタラフクナチー
100①	遺	遺 112	04	B7		897	390	ウマ	上顎歯槽	行痕	H	① P2-M2の△イタラ
100①	遺	遺 112	04	B8		939	364	ウマ	上顎歯槽	行痕	H	①
100①	遺	遺 8~11	04	C7		523	383	ウマ	下顎歯槽	△△	L	①
100①	遺	遺 8~11	04	C7		523	396	ウマ	下顎歯槽	行痕	L	① P2-M2の△イタラ
100①	遺	遺 112	04	B8		903	501	ウマ	下顎歯槽	行痕	H	① P2-M2の△イタラ
100①	遺	遺	04	06	SK34	1049	387	ウマ	上/下顎歯槽	切痕	L	①
100①	遺	遺	04	06	SK34	1049	385	ウマ	上/下顎歯槽	切痕	L	①
100①	遺	遺 8~11	04	D5		640	371	ウマ	中肋骨	△	L	①
100①	遺	遺 8~11	04	E5		642	363	ウシ/ウマ	種骨	△	L	①
100①	遺	遺 8~11	04	D5		640	372	ウシ/ウマ	肋骨	△	L	① キノマター
100①	遺	遺 8~11	04	D5		640	376	ウシ/ウマ	肋骨	△	L	①
100①	遺	遺 10~11	04	D5		701	329	ウシ/ウマ	肋骨	△	L	①
100①	遺	遺 112	04	B9		904	413	ジュゴン	種骨	△	L	①
100①	遺	遺 09	04	C9		230	482	ジュゴン	肋骨	△	L	①
100①	遺	遺 8~11	04	C8		488	428	ジュゴン	肋骨	△	L	①
100①	遺	遺 8~11	04	C8		577	437	ジュゴン	肋骨	△	L	①
100①	遺	遺 113	04	D5		1905	483	ジュゴン	肋骨	△	L	①
100①	遺	遺 09	04	D5		203	365	未同定	未確認	△	L	①
100①	IV	IV (10)上	A4	S8-9		1711	9	ウツクシ	種骨	△	L	①
100①	IV	IV (10)上	A4	S10		1719	29	タビラビ	種骨	△	L	①
100①	IV	IV (10)上	A4	S10		1719	435	ウミガメ	甲殻	△	L	①(1)
100①	IV	IV (10)上	A4	S8-9		1718	132	インシゾプタ	種骨	△	L	① 顔面
100①	IV	IV (10)上	A4	S8-9		1718	134	インシゾプタ	下顎骨	顔面突起	L	①
100①	IV	IV (17)	A4	S9		1547	299	インシゾプタ	種骨	△	L	①
100①	IV	IV (10)上	A4	S8-9		1718	233	インシゾプタ	肋骨	△	L	①
100①	IV	IV (10)上	A4	01		1309	189	インシゾプタ	大胸骨	△	L	①
100①	IV	IV (17)	A4	R10		1526	196	インシゾプタ	大胸骨	△-△>	L	①
100①	IV	IV (10)上	A4	S7		1724	262	インシゾプタ	肋骨	△	H	①
100①	IV	IV (17)	A4	S9		1547	260	インシゾプタ	肋骨	△	H	①
100①	IV	IV (17)	A4	S9		1547	318	インシゾプタ	肋骨	△	L	①
100①	IV	IV (17)	A4	R10		1526	315	インシゾプタ	肋骨	△	L	①
100①	IV	IV (10)上	A4	S8-9		1718	218	インシゾプタ	肋骨	△	L	①
100①	IV	IV (10)上	A4	S8-9		1718	211	インシゾプタ	肋骨	△	L	①
100①	IV	IV (17)	A4	S9		1547	453	ジュゴン	不明	△	L	①(1)
100①	V	V (10)	A3	E5		180	341	ウシ	種骨	△	L	①
100①	-	-	A4	Q10		1742	17	ハマヅクシキ	前上顎骨	△	L	①
100①	-	-	A4	Q-T10		903	35	ハシロビ	前上顎骨	△	L	①
100①	-	-	A4	Q-T10		903	216	インシゾプタ	種骨	△	H	①
100①	-	-	A4	Q-T10		903	244	インシゾプタ	肋骨	△	H	①
100①	-	-	A4	T10		1053	229	インシゾプタ	肋骨	△	L	①



第100表-1 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

●種名位置と数に關する凡例は表の表を参照

遺跡	層	群・地区	測り方	台帳 番号	種名	部位	保存位置*	左右	数	備考	
HC	基本層	-	-	H16-9300	3688	ハマヅメフキ型	前上肢骨		1		
HC	基本層	-	-	F16-12601	21	アオブダイ属	前上肢骨		1		
HC	基本層	-	-	K13-12607	1935	ハジセソコ科	前上肢骨		1		
HC	基本層	-	-	T13-4169	2130	ウシガタ	肋骨		1		
HC	基本層	-	-	J14-12609	4014	イシノヅナ	下顎骨	図	1		
HC	基本層	-	-	D11-12638	2501	ウシ	下顎骨	歯	1		
HC	基本層	-	-	H14-1193	1435	ウシ	中足骨	m	1	100%	
HC	基本層	-	-	J14-12609	980	ウシノヅナ	肋骨		1		
HC	基本層	-	-	H14-12602	2177	ジュズン	肋骨	m	1		
HC	基本層	-	-	H14-12602	2192	ジュズン	肋骨	m	1		
HC	基本層	-	-	H14-12609	1276	ジュズン	肋骨	m	1		
HC	ボス層	-	-	H13-2980	1983	ハジセソコ科	前上肢骨		1		
HC	ボス層	-	-	H16-2988	1882	ハジセソコ科	前上肢骨		1		
HC	ボス層	-	-	H16-2347	165	ハジセソコ科	歯		1		
HC	ボス層	-	-	H16-2908	1263	イシノヅナ	側頭骨		1		
HC	ボス層	-	-	H15-12672	1612	イシノヅナ	下顎骨	図	1		
HC	ボス層	-	-	H16-2064	2525	ウシ	前歯骨・後歯骨		1		
HC	ボス層	-	-	H16-2080	2272	ウシ	上肢骨	[1]→[3]×C×4m3ch(EM)×M1; 下顎枝]	1	100%	
HC	ボス層	-	-	H16-2903	2275	ウシ	下肢骨	[1]→[2]×D×C×N×ch(2ch)×M1×M2]	1	100%	
HC	ボス層	-	-	H16-2066	2558	ウシ	寛骨(膝骨)	J3	1		
HC	ボス層	-	-	H16-2078	2416	ウマ	下肢骨	[H12]Dms(2ch)×M1; 下顎枝]	L, L	1	100% 寛骨, カソマード
HC	ボス層	-	-	H16-2091	2417	ウマ	下肢骨	[H12]×D(2ch)×M1; 下顎枝]	R	1	100% 寛骨, カソマード
HC	ボス層	-	-	H16-2079	2418	ウマ	下肢骨	[H12]Dms(2ch)×M1; 下顎枝]	R	1	100% 寛骨, カソマード
HC	ボス層	-	-	H13-2322	2596	ウマ	下顎骨	dent	L, L	1	
HC	ボス層	-	-	H16-2907	2558	ウマ	肋骨		R	1	
HC	ボス層	-	-	H16-2966	2538	ウマ	踵骨		R	1	100%
HC	ボス層	-	-	H16-2088	2490	ウマ	手・足指骨				
HC	ボス層	-	-	H16-2083	2540	ウマ	尾節骨		1	カソマード	
HC	ボス層	-	-	H16-2082	2562	ウマ	尾節骨		1	カソマード	
HC	ボス層	-	-	H16-2081	2563	ウマ	尾節骨		1	カソマード	
HC	ボス層	-	-	H16-2085	2492	未同定	未確認		1		
HC	V層	貝塚群	b	323	1132	フェウキダイト科	肋骨		R	1	
HC	V層	貝塚群	b	322	1134	フェウキダイト科	肋骨		R	1	
HC	V層	貝塚群	b	13825	94	バク科	下顎骨				
HC	V層	貝塚群	b	141	1099	アオブダイ属	下顎骨		R	1	
HC	V層	貝塚群	b	322	1133	アオブダイ属	下顎骨				
HC	V層	貝塚群	b	13825	80	アザ科	前上肢骨		L	1	
HC	V層	貝塚群	b	323	1136	ハジセソコ科	前上肢骨		1		
HC	V層	貝塚群	b	323	1137	ハジセソコ科	前上肢骨		1		
HC	V層	貝塚群	b	142	1408	ハジセソコ科	歯		1		
HC	V層	貝塚群	b	323	1135	ハジセソコ科	前上肢骨		1		
HC	V層	貝塚群	b	142	1409	ハジセソコ科	前上肢骨		1		
HC	V層	貝塚群	c	162	2674	ハヤギ	椎骨		1		
HC	V層	貝塚群	c	162	317	ウシガタ	前上肢骨		L	1	
HC	V層	貝塚群	c	12634	544	ハマヅメフキ型	前上肢骨		R	1	
HC	V層	貝塚群	c	12634	187	フェウキダイト科	肋骨		R	1	
HC	V層	貝塚群	c	12639	1465	フェウキダイト科	前上肢骨		L	1	
HC	V層	貝塚群	c	12634	106	フェウキダイト科	肋骨		1		
HC	V層	貝塚群	c	162	276	フェウキダイト科	椎骨		1		
HC	V層	貝塚群	c	12622	242	オオヤギ	椎骨		1		
HC	V層	貝塚群	c	172	1426	バク科	前上肢骨		L	1	
HC	V層	貝塚群	a	162	120	アオブダイ属	上顎骨		R	1	
HC	V層	貝塚群	c	12626	340	アオブダイ属	歯		R	1	
HC	V層	貝塚群	c	162	258	アザ科	椎骨		1		
HC	V層	貝塚群	c	12632	1965	ハジセソコ科	前上肢骨		1		
HC	V層	貝塚群	c	12646	1931	ハジセソコ科	前上肢骨		1		
HC	V層	貝塚群	c	12622	1987	ハジセソコ科	前上肢骨		1		
HC	V層	貝塚群	c	12634	2010	ハジセソコ科	前上肢骨		1		
HC	V層	貝塚群	c	80	2690	ハジセソコ科	前上肢骨		1		
HC	V層	貝塚群	c	172	1427	ハジセソコ科	前上肢骨		1		
HC	V層	貝塚群	c	40	1507	ウシガタ	踵骨		1		
HC	V層	貝塚群	c	12634	1508	ウシガタ	踵骨		1		
HC	V層	貝塚群	c	12634	1702	ウシガタ	踵骨		1		
HC	V層	貝塚群	c	166	1648	ウシガタ	踵骨		1		
HC	V層	貝塚群	c	172	1428	ウシガタ	踵骨		1		
HC	V層	貝塚群	c	12634	1503	ウシガタ	踵骨		1		100%
HC	V層	貝塚群	c	12639	1537	イシノヅナ	上肢骨	[M2]×3	L	1	
HC	V層	貝塚群	c	12	2682	イシノヅナ	上顎骨	P2, P3	1		
HC	V層	貝塚群	c	71	2684	イシノヅナ	下顎骨	[M1]	L	1	
HC	V層	貝塚群	c	12622	1538	イシノヅナ	下顎骨	[P2]×P[M1]	L	1	
HC	V層	貝塚群	c	12639	1653	イシノヅナ	下顎骨	[P2]×P[M1]×M1	L	1	
HC	V層	貝塚群	c	12639	1617	イシノヅナ	下顎骨	図	L	1	
HC	V層	貝塚群	c	172	1429	イシノヅナ	下顎骨	K	L	1	100%
HC	V層	貝塚群	c	12639	1581	イシノヅナ	下顎骨	K	L	1	100%
HC	V層	貝塚群	c	12	1515	イシノヅナ	下顎骨	K	R	1	
HC	V層	貝塚群	c	40	1508	イシノヅナ	上顎骨	上顎骨	1		
HC	V層	貝塚群	c	12622	2610	ウマ	下顎骨	dent	R	1	
HC	V層	貝塚群	c	172	1419	ジュズン	肋骨	m	1		
HC	V層	貝塚群	b	12	1515	鳥・哺乳動物不可	未確認		1		
HC	V層	貝塚群	c	71	172	同定不可	椎骨		1		
HC	V層	貝塚群	c	12639	2020	同定不可	椎骨		1		
HC	V層	貝塚群	d	12626	196	フェウキダイト科	肋骨		1		
HC	V層	貝塚群	d	12626	1945	ハジセソコ科	前上肢骨		1		
HC	V層	貝塚群	d	12626	2029	ハジセソコ科	前上肢骨		1		
HC	V層	貝塚群	e	147	212	ウシガタ	前上肢骨		R	1	
HC	V層	貝塚群	f	12623	1927	ハジセソコ科	前上肢骨		1		

第100表-2 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

\*種名位置と関する凡例は別表を参照

遺跡	層位	群・地区	調査期	プロット	目録 番号	種名	部位	保存状況*	左右	数	備考
HC	V層	貝塚群	r		147	163	ハリセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	r		163	319	アオブダイ属	下顎歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	r		12636	60	アオブダイ属	下顎歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	r		12639	1911	ハリセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	r		12638	1841	ハリセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	r		17	1398	ワダ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	r		12631	328	真骨鱗(魚類)	方骨		1	
HC	V層	貝塚群	r		12633	1743	イシノヅク	上顎歯槽歯	M	1	
HC	V層	貝塚群	r		12640	180	ワカダイ属	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	r		12644	303	ワカダイ属	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	r		12648	192	ワカダイ科	側骨		1	
HC	V層	貝塚群	r		12647	241	ワカダイ	側骨		1	
HC	V層	貝塚群	r		12646	67	ワカダイ	下顎歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	r		46	1883	ハリセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	r		12648	1943	ハリセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	r		12646	1894	ハリセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	r		317	132	ハリセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	r		317	131	ハリセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	r		12647	882	魚類(魚類)	内骨	m	1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12336	1164	ワカダイ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12339	37	ワカダイ科	内骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12329	342	アオブダイ属	歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12327	1088	ハリセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12374	1546	イシノヅク	下顎骨	[C×P1×P2P4M2M3M]	1	※
HC	V層	貝塚群	1層	T15	11402	3685	イシノヅク	膝骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12336	358	不定小	椎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12367	1182	ハマユビ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12375	294	ハマユビ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12376	185	ワカダイ科	口蓋骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12378	84	ワカダイ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12368	125	ワカダイ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12363	1167	ワカダイ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12356	1496	ワカダイ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12375	1209	ワカダイ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12366	360	ワカダイ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12362	101	シノカサハコ	下顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	S14	12342	72	ワカダイ	上顎歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	S14	12342	65	ワカダイ	下顎歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	S14	12342	95	ワカダイ	下顎歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12366	59	アオブダイ属	下顎歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12369	261	アオブダイ属	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12362	376	アオブダイ属	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	S14	12342	130	アオブダイ属	歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12363	122	ワダ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	S14	12341	1933	ハリセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	S14	12353	2006	ハリセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12365	1929	ハリセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12371	1946	ハリセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12363	1174	真骨鱗(魚類)	椎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12364	2548	ウミガメ	上頰骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12357	2319	ウミガメ	甲板		1	(15)
HC	V層	貝塚群	1層	S14	12352	1685	イシノヅク	上顎歯槽歯	P3	1	
HC	V層	貝塚群	1層	S15	12354	1631	イシノヅク	下顎骨	[M]	1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12362	1652	イシノヅク	下顎骨	[M]	1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12366	1582	イシノヅク	下顎歯槽歯	11	1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14		2689	イシノヅク	下顎歯槽歯	11	1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12369	1584	イシノヅク	下顎歯槽歯	12	1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12363	1620	イシノヅク	下顎歯槽歯	12	1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12366	1583	イシノヅク	下顎歯槽歯	12	1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12373	1602	イシノヅク	下顎歯槽歯	P4	1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15-42	11271	2674	イシノヅク	不定骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	S14	12356	2074	ジュゴン	不明		1	(15)
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12366	1154	未同定	未確認		1	
HC	V層	貝塚群	1層	S14	12386	179	ワカダイ	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	824	171	ワカダイ	椎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12353	182	ワカダイ属	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12355	185	ワカダイ属	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12353	182	ワカダイ科	口蓋骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12336	1212	ワカダイ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12331	13	ワカダイ科	椎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12353	20	ワカダイ科	椎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12353	267	ワカダイ科	椎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	S15	12349	71	ワカダイ	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	S15	12366	114	アオブダイ属	歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12353	332	アオブダイ属	歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12319	29	アオブダイ属	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12313	1985	ハリセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12355	1896	ハリセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12315	1204	ハリセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	828	1374	ウミガメ	側骨		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12327	2282	ウミガメ	未確認		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T15	12353	2300	ウミガメ	未確認		1	
HC	V層	貝塚群	1層	S15	12350	1567	ウミガメ	新化歯板		1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	11672	1778	イシノヅク	側骨	[B×B×B×B]	1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12327	1687	イシノヅク	上顎歯槽歯	P3	1	
HC	V層	貝塚群	1層	T14	12327	1660	イシノヅク	上顎歯槽歯	M1	1	

第100表-3 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

\* 種名位置と数字に関する凡例は表9の表を参照

種別	層位	群・地区	遺跡名	プロット	台帳 番号	骨 種別	部位	保存位置*	左右	数	備考	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12372	1566	イノシシノブク	下顎骨	[長1×寬2×厚2]	右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12373	1555	イノシシノブク	下顎骨	[長2×寬3]	右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	11477	1423	兼形歯	兼形歯			1	
HC	V層	具原郡	2層	S15	2718	127	サメ類	椎骨			1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12369	2012	ヒヨドリ	尾椎			1	
HC	V層	具原郡	2層	T15	12426	113	ウツガイ科	前歯骨			1	
HC	V層	具原郡	2層	T15	12396	91	マハダ科	歯骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12411	34	スジノコ型	歯骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12431	128	ハダ科	上土顎骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12406	195	ハダ科	第1歯骨			1	
HC	V層	具原郡	2層	S14	12368	196	ハダ科	椎骨			1	
HC	V層	具原郡	2層	A15	11676	126	アズキダ属	前土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	S14	12523	305	クロダ属	前土顎骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	S14	12519	304	クロダ属	前土顎骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12440	202	クロダ属	前土顎骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12416	125	クロダ属	前土顎骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	11662	2609	クロダ属	前土顎骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T15	264	320	クロダ属	前土顎骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12435	306	クロダ属	前土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12429	136	クロダ属	前土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12410	134	クロダ属	前土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12425	310	クロダ属	歯骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12442	209	クロダ属	歯骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12424	27	ツツノツツノクダ属	前土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12431	1127	ハヤブサノコ型	前土顎骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12431	1181	ハヤブサノコ型	前土顎骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	S15	12481	497	ハヤブサノコ型	前土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	S14	12390	293	ハヤブサノコ型	前土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12423	295	ハヤブサノコ型	前土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12423	296	ハヤブサノコ型	前土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12429	340	アズキダ属	口蓋骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12431	349	アズキダ属	口蓋骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12431	351	アズキダ属	口蓋骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12431	186	アズキダ属	口蓋骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12440	184	アズキダ属	口蓋骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	S14	12523	88	アズキダ属	上土顎骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12443	86	アズキダ属	上土顎骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12426	224	アズキダ属	上土顎骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T15	12475	85	アズキダ属	上土顎骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T15	12470	101	アズキダ属	上土顎骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12421	92	アズキダ属	上土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12416	123	アズキダ属	上土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12428	120	アズキダ属	上土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12431	1139	アズキダ属	前土顎骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12416	1148	アズキダ属	前土顎骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	A15	292	1822	アズキダ属	前土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	A15	292	1823	アズキダ属	前土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	S14	12520	1206	アズキダ属	前土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12442	1205	アズキダ属	前土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12431	1201	アズキダ属	前土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12416	1202	アズキダ属	前土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12431	1200	アズキダ属	前土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12433	1199	アズキダ属	前土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T15	12483	1197	アズキダ属	前土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T15	12724	1204	アズキダ属	前土顎骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12431	8	アズキダ属	歯骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12431	6	アズキダ属	歯骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12445	11	アズキダ属	歯骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12431	12	アズキダ属	歯骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	S14	12723	16	アズキダ属	歯骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12435	36	アズキダ属	角骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12413	29	アズキダ属	角骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12400	247	アズキダ属	角骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	S14	12502	300	アズキダ属	角骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12416	45	アズキダ属	角骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12423	42	アズキダ属	角骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12431	357	アズキダ属	第1歯骨			1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12429	368	アズキダ属	椎骨			1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12431	361	アズキダ属	椎骨			1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12429	234	タイ型	椎骨			1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12416	239	タイ型	椎骨			1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12431	240	タイ型	椎骨			1	
HC	V層	具原郡	2層	S14	12482	103	シロクマノコ型	下顎歯骨			1	
HC	V層	具原郡	2層	T15	12724	104	シロクマノコ型	下顎歯骨			1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	248	21	ベウ科A	下顎歯骨			1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12407	61	ベウ科A	下顎歯骨			1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12402	68	ベウ科A	下顎歯骨			1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12416	66	ベウ科A	下顎歯骨			1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12423	64	ベウ科A	下顎歯骨			1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12431	74	イロダ属	上顎歯骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12431	3	イロダ属	下顎歯骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	S14	11877	33	アオバダ属	上顎歯骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	S15	12544	107	アオバダ属	上顎歯骨		L	1	
HC	V層	具原郡	2層	S14	12490	50	アオバダ属	下顎歯骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	S14	12518	46	アオバダ属	下顎歯骨		右	1	
HC	V層	具原郡	2層	T14	12431	53	アオバダ属	下顎歯骨		L	1	

第100表-4 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

※種名位置と題する凡例は第99表を参照

種別	層位	群・地区	調査区	試料ID	目録番号	種類	部位	保存位置*	左右	数*	備考	
HC	V層	具塚群	2層	T14 12429	58	アオブダイ属	下顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T15 12430	51	アオブダイ属	下顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T15 12474	65	アオブダイ属	下顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12442	372	アオブダイ属	前上顎骨		L	1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12423	145	アオブダイ属	前上顎骨		R	1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12423	142	アオブダイ属	前上顎骨		R	1		
HC	V層	具塚群	2層	S4 3760	314	アオブダイ属	歯骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	S4 10533	115	アオブダイ属	歯骨		L	1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12431	136	アオブダイ属	歯骨		L	1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12429	128	アオブダイ属	歯骨		L	1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12429	117	アオブダイ属	歯骨		L	1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12423	137	アオブダイ属	歯骨		L	1		
HC	V層	具塚群	2層	S4 12060	341	アオブダイ属	歯骨		R	1		
HC	V層	具塚群	2層	S4 12067	337	アオブダイ属	歯骨		R	1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12433	339	アオブダイ属	歯骨		R	1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12429	332	アオブダイ属	歯骨		R	1		
HC	V層	具塚群	2層	T15 11861	325	アオブダイ属	歯骨		R	1		
HC	V層	具塚群	2層	T15 11863	318	アオブダイ属	歯骨		L	1		
HC	V層	具塚群	2層	T15 12476	79	アザギ	前上顎骨		L	1		
HC	V層	具塚群	2層	S4 10526	3006	ハリセンボン科	前上顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	S4 10542	1918	ハリセンボン科	前上顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	S4 12069	1980	ハリセンボン科	前上顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12413	1962	ハリセンボン科	前上顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12426	1872	ハリセンボン科	前上顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12444	1932	ハリセンボン科	前上顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12423	3003	ハリセンボン科	前上顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12416	3009	ハリセンボン科	前上顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12412	1926	ハリセンボン科	前上顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12412	1878	ハリセンボン科	前上顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12466	1883	ハリセンボン科	前上顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12443	1890	ハリセンボン科	前上顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12436	1848	ハリセンボン科	前上顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12443	2003	ハリセンボン科	前上顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12426	1915	ハリセンボン科	前上顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T15 12472	1908	ハリセンボン科	前上顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T15 12367	1898	ハリセンボン科	前上顎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	S4 12067	1440	ハリセンボン科	歯骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	S4 10526	1261	ハリセンボン科	歯骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T15 12456	1194	ハリセンボン科	歯骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T15 12456	2014	ハリセンボン科	前上顎・歯骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	S3 12406	1229	真骨鱗(魚骨)	かた		L	1		
HC	V層	具塚群	2層	T15 12426	1849	真骨鱗(魚骨)	牙		R	1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12427	1172	真骨鱗(魚骨)	椎骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T15 12466	746	ウツガ	棘			1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12423	2025	ウツガ	棘半枚			1		
HC	V層	具塚群	2層	S4 12060	2302	ウツガ	肋骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12426	2123	ウツガ	肋骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	S3 11462	2636	ウツガ	肋骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12426	2321	ウツガ	棘半枚			1		
HC	V層	具塚群	2層	S4 12062	2204	ウツガ	甲殻	♀		(3)		
HC	V層	具塚群	2層	S4 12066	2006	ウツガ	甲殻	♀		(3)		
HC	V層	具塚群	2層	S4 11877	2203	ウツガ	甲殻	♀		(3)		
HC	V層	具塚群	2層	S4 12543	2511	ウツガ	甲殻	♀		(3)		
HC	V層	具塚群	2層	S4 12521	2028	ウツガ	甲殻	♀		(3)		
HC	V層	具塚群	2層	S4 12521	2136	ウツガ	甲殻	♀		(3)		
HC	V層	具塚群	2層	S4 12543	2270	ウツガ	甲殻	♀		(3)		
HC	V層	具塚群	2層	S3 3783	2201	ウツガ	甲殻	♀		(3)		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12426	2173	ウツガ	甲殻	♀		(3)		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12462	2327	ウツガ	甲殻	♀		(3)		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12462	2122	ウツガ	甲殻	♀		(3)		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12429	2137	ウツガ	甲殻	♀		(3)		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12426	2267	ウツガ	甲殻	♀		(3)		
HC	V層	具塚群	2層	T15 11862	2290	ウツガ	甲殻	♀		(3)		
HC	V層	具塚群	2層	S14-21	12486	ウツガ	不明			(3)		
HC	V層	具塚群	2層	S14-22	12495	ウツガ	不明			(3)		
HC	V層	具塚群	2層	S14-61	12482	ウツガ	不明			(3)		
HC	V層	具塚群	2層	T14-17	12482	ウツガ	不明			(3)		
HC	V層	具塚群	2層	T14-13	12486	ウツガ	不明			(3)		
HC	V層	具塚群	2層	T14-13	12495	ウツガ	不明			(3)		
HC	V層	具塚群	2層	S4 12564	1844	ウツガ	未確認			1		
HC	V層	具塚群	2層	S4 12516	1830	ウツガ	未確認			1		
HC	V層	具塚群	2層	S3 12506	1832	ウツガ	未確認			1		
HC	V層	具塚群	2層	T15 12466	1345	ウツガ	未確認			1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12421	1672	ウツガ	肋骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12440	1671	ウツガ	肋骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12445	1705	ウツガ	肋骨			1		
HC	V層	具塚群	2層	S4 12497	1636	ウツガ	上顎		R	1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12415	1630	ウツガ	上顎		R	1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12469	1637	ウツガ	小腸		L	1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 12426	1600	ウツガ	新骨		L	1		
HC	V層	具塚群	2層	S4 12493	1677	ウツガ	下顎		R	1		
HC	V層	具塚群	2層	T14 2045	1738	イシノブタ	上顎	[M]		R	1	
HC	V層	具塚群	2層	T15 12454	1668	イシノブタ	上顎	歯		L	1	
HC	V層	具塚群	2層	S3 2657	1761	イシノブタ	上顎	歯		R	1	
HC	V層	具塚群	2層	T14 12421	1730	イシノブタ	下顎	[CP+P]+[M]		L	1	
HC	V層	具塚群	2層	T15 1545	1746	イシノブタ	下顎	[M]+[M]		L	1	

第100表-5 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

\* 種名位置と異なる凡例は裏の頁を参照

遺跡	層	群・地区	測り方	プロット	自前 番号	種名	種目	保存位置*	左右	数	備考
HC	V層	貝塚群	2層	T10	12471	1812	イナズナツク	下顎骨	[約×約×]	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	T15-05	10602	2083	イナズナツク	下顎骨	股関節	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12431	1818	イナズナツク	下顎骨	[C×約×約×]	R	1
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12430	1353	イナズナツク	下顎骨	[約×約×約×]	R	1
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12431	1817	イナズナツク	下顎骨	[約×]	R	1
HC	V層	貝塚群	2層	T10	12734	1796	イナズナツク	下顎骨	[約×約×約×]	R	1
HC	V層	貝塚群	2層	S14	12543	1589	イナズナツク	下顎骨	骨	R	1
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12431	1839	イナズナツク	下顎骨	骨	R	1
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12433	1664	イナズナツク	下顎骨	骨	R	1
HC	V層	貝塚群	2層	A10	2623	1346	イナズナツク	下顎骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	S14	12507	1616	イナズナツク	下顎骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	S14	12503	1276	イナズナツク	下顎骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12430	1343	イナズナツク	下顎骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12419	1287	イナズナツク	下顎骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	S14	892	1341	イナズナツク	下顎骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	S14	2396	1257	イナズナツク	下顎骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12401	1239	イナズナツク	下顎骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	T10	12701	1230	イナズナツク	下顎骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12431	1628	イナズナツク	下顎骨	骨	R	1
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12430	1691	イナズナツク	下顎骨	骨	R	1
HC	V層	貝塚群	2層	S14	12522	1712	イナズナツク	下顎骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12430	1714	イナズナツク	下顎骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	S13	12486	1619	イナズナツク	肋骨	R	1	
HC	V層	貝塚群	2層	A10	12290	2496	ウシ	下顎骨	骨	R	1
HC	V層	貝塚群	2層	A10	3683	2528	ウシ	中肋骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	A10	3617	2564	ウシ	末肋骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	S14	12506	2083	ジュゴン	肋骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	S14	12486	1324	ジュゴン	肋骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	A10	2670	2126	ジュゴン	肋骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	A10	3689	2093	ジュゴン	肋骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	S14	12486	2032	ジュゴン	不明	骨	(欠)	
HC	V層	貝塚群	2層	A10	3687	2670	ジュゴン	肋骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T10	12463	1557	馬/哺乳類同定不可	上腕骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	A10	11876	676	馬/哺乳類同定不可	四肢骨	骨	m	1
HC	V層	貝塚群	2層	S14	12486	1907	馬/哺乳類同定不可	四肢骨	骨	m	1
HC	V層	貝塚群	2層	S14	12502	884	馬/哺乳類同定不可	四肢骨	骨	m	1
HC	V層	貝塚群	2層	S10	12502	675	馬/哺乳類同定不可	四肢骨	骨	m	1
HC	V層	貝塚群	2層	S10	12503	677	馬/哺乳類同定不可	四肢骨	骨	m	1
HC	V層	貝塚群	2層	A10	11876	276	馬/哺乳類同定不可	四肢骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12402	260	馬/哺乳類同定不可	四肢骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T10	12476	257	馬/哺乳類同定不可	四肢骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	S14	222	1136	同定不可	椎骨	椎体	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12433	174	同定不可	椎骨	椎体	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T14	252	322	同定不可	椎骨	椎体	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T10	12509	092	アノコ	椎骨	椎骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	A10	2673	161	フェネダイ科	前上顎骨	骨	R	1
HC	V層	貝塚群	2層	T10	12898	498	ハツムツク	前上顎骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T10	12186	499	ハツムツク	前上顎骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	S10	12186	352	フェネダイ科	口蓋骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	T06	12560	99	フェネダイ科	上上顎骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	T10	12183	181	フェネダイ科	前上顎骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	T06	12563	1195	フェネダイ科	前上顎骨	骨	R	1
HC	V層	貝塚群	2層	T06	12560	21	フェネダイ科	歯骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12482	38	フェネダイ科	内骨	骨	R	1
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12482	44	フェネダイ科	内骨	骨	R	1
HC	V層	貝塚群	2層	T10	12561	370	アノコ	椎骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	S14	12177	355	アノコ	前上顎骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	S10	12186	119	アノコ	歯骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	T10	12186	118	アノコ	歯骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	T06	12560	116	アノコ	歯骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	A10	272	163	ハリセンボ科	前上顎骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T06	12560	2007	ハリセンボ科	前上顎骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	S10	12186	1291	ハリセンボ科	歯骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T06	12560	327	真骨鱗(後頭)	方骨	骨	R	1
HC	V層	貝塚群	2層	T06	12567	189	真骨鱗(後頭)	末肋骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T10	12182	2322	ウツガ	椎骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	A10	3728	2176	ウツガ	椎骨	骨	(欠)	
HC	V層	貝塚群	2層	S14	12177	1084	ウツガ	椎骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	S14	12177	2124	ウツガ	椎骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T10	12561	2275	ウツガ	椎骨	骨	(欠)	
HC	V層	貝塚群	2層	A10	688	2673	ウツガ	中上顎骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T10	12561	1285	イナズナツク	下顎骨	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12182	1252	イナズナツク	下顎骨	骨	R	1
HC	V層	貝塚群	2層	S14	12177	1084	相見	不明	骨	L	1
HC	V層	貝塚群	2層	S10	12186	882	馬/哺乳類同定不可	四肢骨	骨	m	1
HC	V層	貝塚群	2層	T10	12561	900	馬/哺乳類同定不可	四肢骨	骨	m	1
HC	V層	貝塚群	2層	T10	12560	642	馬/哺乳類同定不可	四肢骨	骨	m	1
HC	V層	貝塚群	2層	T06	12560	1171	同定不可	椎骨	椎体	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12179	236	アノコ	椎骨	椎骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12186	27	アノコ	下顎骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12186	47	アノコ	下顎骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T10	12571	54	アノコ	下顎骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12203	1064	ハリセンボ科	前上顎骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12203	1910	ハリセンボ科	前上顎骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12204	1302	ハリセンボ科	歯骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T10	12571	1173	真骨鱗(後頭)	椎骨	骨	1	
HC	V層	貝塚群	2層	T14	12186	749	ウツガ	椎骨	骨	1	

第100表-6 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

●種別位置と類に関する凡例は裏表の表を参照

遺跡	層	群・地区	調査期	探検	目録	種別	部位	保存位置*	左右	数	備考	
HC	V層	貝塚群	4層	T14	1273	2300	ウシガメ	肋骨		1		
HC	V層	貝塚群	4層	S4	12192	2320	ウシガメ	肋骨		1		
HC	V層	貝塚群	4層	T15	8001	2167	ウシガメ	骨	b	1	(1)	
HC	V層	貝塚群	4層	H16	11901	2323	ウシガメ	甲殻		1	(1)	
HC	V層	貝塚群	4層	S4	12742	2326	ウシガメ	骨	b	1	(1)	
HC	V層	貝塚群	4層	T14	4190	2242	ウシガメ	甲殻		1	(1)	
HC	V層	貝塚群	4層	H16	11907	665	ウシガメ	未確認		1	(1)	
HC	V層	貝塚群	4層	S4	12194	2298	ウシガメ	未確認		1		
HC	V層	貝塚群	4層	T14	12206	2217	ウシガメ	未確認		1		
HC	V層	貝塚群	4層	T14	12202	2239	ウシガメ	未確認		1		
HC	V層	貝塚群	4層	T14	12206	1565	ウシガメ	骨	b	1	(1)	
HC	V層	貝塚群	4層	T14	112	1326	イルシノブタ	上顎歯槽	C	L	1	2)
HC	V層	貝塚群	4層	T14	4198	1372	イルシノブタ	下顎骨	[PMI]	R	1	
HC	V層	貝塚群	4層	S45	12197	1533	イルシノブタ	下顎骨	[m1 X m2 X m3 X M1]	R	1	
HC	V層	貝塚群	4層	T15	12744	2046	イルシノブタ	下顎骨	[m1 X m2 X m3 X M1 X]	R	1	
HC	V層	貝塚群	4層	A16	634	1637	イルシノブタ	下顎歯槽	H2	L	1	
HC	V層	貝塚群	4層	A16	11603	1240	イルシノブタ	下顎歯槽	H2	R	1	
HC	V層	貝塚群	4層	T15	12744	2041	ジュゴン	歯骨	b	1	2)	
HC	V層	貝塚群	4層	A16	15370	1905	海狸	未確認		1		
HC	V層	貝塚群	4層	T14	12201	893	海狸	尾椎	m	1		
HC	V層	貝塚群	4層	T14	12203	611	海狸	尾椎	m	1		
HC	V層	貝塚群	5層	S4	4571	1740	ハクサイ	骨	L	1		
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12226	1646	アシカ	上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12723	1673	アシカ	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	4303	290	アシカ	椎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	903	191	アシカ	椎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12382	193	アシカ	椎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	S14	4347	1231	クロダク	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12392	201	クロダク	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T14	12278	108	クロダク	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T14	12279	308	クロダク	歯骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12380	312	クロダク	歯骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12221	1185	ハマフネキ型	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12383	1178	ハマフネキ型	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12282	1180	ハマフネキ型	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12383	1184	ハマフネキ型	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12287	545	ハマフネキ型	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12236	268	キツネフネキ	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12380	330	フェウキダク	口蓋骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T14	12286	3096	フェウキダク	上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	A15	11817	1213	フェウキダク	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12282	1182	フェウキダク	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12383	1161	フェウキダク	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12290	1163	フェウキダク	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12380	735	フェウキダク	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12290	1196	フェウキダク	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	A15	11811	10	フェウキダク	歯骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	A15	11824	93	フェウキダク	歯骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12230	18	フェウキダク	歯骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12297	22	フェウキダク	歯骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T16	12382	17	フェウキダク	歯骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	A16	11927	235	クイ	椎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12228	237	クイ	椎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12212	229	クイ	椎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T14	12274	105	シロクマ	下顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T14	4339	110	シロクマ	下顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12382	109	シロクマ	下顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T14	4476	96	クマ	下顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T14	12274	63	クマ	下顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12290	62	クマ	下顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12290	75	クマ	歯骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12282	76	クマ	前上顎/歯骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12282	78	クマ	前上顎/歯骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	A16	11930	286	クマ	内骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12274	104	クマ	歯骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12280	70	アオゾク	下顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12383	66	アオゾク	下顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12282	111	アオゾク	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T14	12282	380	アオゾク	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12289	383	アオゾク	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12779	140	アオゾク	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12779	147	アオゾク	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12280	112	アオゾク	歯骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12282	129	アオゾク	歯骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12236	334	アオゾク	歯骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T14	12279	149	アオゾク	歯骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T14	12277	338	アオゾク	歯骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12281	148	アオゾク	歯骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	A16	11838	201	ゾク	椎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	A15	12336	35	キンガウカ	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	A15	11824	1271	キンガウカ	歯骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	A16	2861	367	ゾク	歯骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	A16	12741	1678	ハシケン	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	A16	11860	1938	ハシケン	前上顎骨		1		
HC	V層	貝塚群	5層	A16	11840	1882	ハシケン	前上顎骨		1		

第100表-7 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

●種名位置と数字に関する凡例は第99表を参照

種別	層位	群・地区	調査区	探検	目録 番号	種類	部位	保存状況*	左右	数	備考
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12212	1874	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12216	1866	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12218	1961	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12219	1870	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12211	1872	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12210	1871	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12719	1919	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12213	1878	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12215	1881	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12216	1849	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S15	12261	1864	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S15	4366	1863	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S15	12262	1863	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S15	12266	1976	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S15	12263	1869	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S15	12264	1940	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T15	4843	1979	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T15	922	1973	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T15	12730	1963	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T15	12730	1912	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T15	12573	1943	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T15	12291	1936	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T15	12290	1879	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T15	12289	1887	ハクセンボ科	前上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	A15	11913	1298	ハクセンボ科	歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	A16	12741	1298	ハクセンボ科	歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	A16	11832	1297	ハクセンボ科	歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12212	1208	ハクセンボ科	歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12214	1296	ハクセンボ科	歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12723	1267	ハクセンボ科	歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12212	1292	ハクセンボ科	歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S15	12252	1208	ハクセンボ科	歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T14	4454	1205	ハクセンボ科	歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	A15	11916	175	真骨鱗(歯部)	縁歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	A16	11940	175	真骨鱗(歯部)	縁歯骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	A15	3601	1583	ウツギ目	前歯板		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12216	1561	ウツギ目	上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S15	12252	666	ウツギ目	上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T15	11249	1436	ウツギ目	上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S15	12261	2347	ウツギ目	肩骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	A16	11940	2337	ウツギ目	大顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	A15	11913	2036	ウツギ目	肋骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	A16	4369	2113	ウツギ目	肋骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	B15	11940	2307	ウツギ目	肋骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	4641	2301	ウツギ目	肋骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12210	2303	ウツギ目	肋骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12219	2305	ウツギ目	肋骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	4252	2174	ウツギ目	肋骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S15	12260	2308	ウツギ目	肋骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T14	12262	2172	ウツギ目	肋骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T15	12260	2174	ウツギ目	肋骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T15	12262	2304	ウツギ目	肋骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T15	12574	2306	ウツギ目	肋骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T15	4823	3131	ウツギ目	縁歯板		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T15	12573	2168	ウツギ目	縁歯板		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12261	2235	ウツギ目	縁歯板		1	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12213	2236	ウツギ目	縁歯板		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T14	12273	2233	ウツギ目	縁歯板		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T15	12296	2238	ウツギ目	縁歯板		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T15	4468	2156	ウツギ目	縁歯板		1	
HC	V層	貝塚群	岡	T15	4631	2236	ウツギ目	上顎骨		1	
HC	V層	貝塚群	岡	A15	5457	2318	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	A15	11940	2276	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	A15	11938	2281	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	A15	11940	2294	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	A15	11925	2286	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	A15	11927	2289	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	A15	3458	2264	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	A16	12740	2199	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	A16	11930	2237	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	A16	12741	2253	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	A16	12740	2289	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	B15	11940	2283	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	B15	11943	2161	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12212	2214	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12241	2278	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12210	2293	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12219	2291	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	S14	12242	2172	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	S15	12210	2221	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	S15	3769	2326	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	S15	12260	2246	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	T14	12273	2316	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	T14	12266	2277	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	T14	12273	2318	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	
HC	V層	貝塚群	岡	T15	12296	2328	ウツギ目	甲殻	♀	(1)	

●裏成獣体

第100表-8 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

(種名位置と数に關する凡例は表の巻末を参照)

種別	層位	群・地区	調査期	調査点	層位	種名	部位	検出状況*	左右	数	備考
HC	V層	具塚群	5層	T15 1239	231	ウシガシ	甲板	0		0	(1)
HC	V層	具塚群	5層	T15 4756	2247	ウシガシ	甲板	0		0	(1)
HC	V層	具塚群	5層	T16 1236	2233	ウシガシ	甲板	0		0	(1)
HC	V層	具塚群	5層	A16 1271	1880	ウシガシ	未確認			1	
HC	V層	具塚群	5層	A16 1167	1221	ウシガシ	未確認			1	
HC	V層	具塚群	5層	S14 1233	176	ウシガシ	未確認			1	
HC	V層	具塚群	5層	T15 1278	1814	ウシガシ	未確認			1	
HC	V層	具塚群	5層	T15 10729	1847	ウシガシ	未確認			1	
HC	V層	具塚群	5層	A16 11927	2283	ウシガシ	未確認			1	
HC	V層	具塚群	5層	A16 4152	2149	ウシガシ	未確認			1	
HC	V層	具塚群	5層	S14 1229	2262	ウシガシ	未確認			1	
HC	V層	具塚群	5層	T14 12279	2216	ウシガシ	未確認			1	
HC	V層	具塚群	5層	T14 12277	2284	ウシガシ	未確認			1	
HC	V層	具塚群	5層	T15 12290	1870	ウシガシ	肋骨			1	
HC	V層	具塚群	5層	T15 12290	1690	ウシガシ	膝甲板			1	
HC	V層	具塚群	5層	A15 2401	1569	ウシガシ	内股骨			1	
HC	V層	具塚群	5層	S15 10662	2827	ウシガシ	前肢骨			1	
HC	V層	具塚群	5層	S14 4272	2228	ウシガシ	腕骨			1	
HC	V層	具塚群	5層	T14 12277	1899	ウシガシ	腕甲板			1	
HC	V層	具塚群	5層	T14 12274	1598	ウシガシ	腕甲板			1	
HC	V層	具塚群	5層	T15 12290	1690	ウシガシ	腕甲板			1	
HC	V層	具塚群	5層	T15 12729	1896	ウシガシ	腕甲板			1	
HC	V層	具塚群	5層	S14 12779	1902	ウシガシ	骨			1	(1)
HC	V層	具塚群	5層	T15 12281	1591	ウシガシ	骨			1	(1)
HC	V層	具塚群	5層	S14 12246	1860	オオコウキ	未確認			1	
HC	V層	具塚群	5層	T15 4264	1470	インゲンゾウ	鼻骨			1	I-R
HC	V層	具塚群	5層	T15 4264	1470	インゲンゾウ	前歯			1	I-R
HC	V層	具塚群	5層	T15 4264	1470	インゲンゾウ	歯骨			1	I-R
HC	V層	具塚群	5層	T15 4264	1470	インゲンゾウ	上顎骨	[CP]×P×P×M[M]×M[M]		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 4440	1502	インゲンゾウ	鼻骨	[I]×E×D×C×P×P×M[M]×M[M]		1	I-R
HC	V層	具塚群	5層	S14 4440	1502	インゲンゾウ	前歯			1	I-R
HC	V層	具塚群	5層	S14 4440	1502	インゲンゾウ	歯骨			1	I-R
HC	V層	具塚群	5層	S14 4440	1502	インゲンゾウ	前歯			1	I-R
HC	V層	具塚群	5層	S14 4440	1502	インゲンゾウ	上顎骨	[C]×P×P×P×M[M]×M[M]×*		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 4440	1502	インゲンゾウ	上顎骨	[C]×P×P×P×M[M]		1	I
HC	V層	具塚群	5層	A16 3091	1820	インゲンゾウ	鼻骨			1	I-R
HC	V層	具塚群	5層	A16 3091	1820	インゲンゾウ	前歯			1	I-R
HC	V層	具塚群	5層	A16 3091	1820	インゲンゾウ	上顎骨	P×P×P×M[M]×M[M]		1	I
HC	V層	具塚群	5層	A16 3091	1820	インゲンゾウ	上顎骨	[C]×P×P×P×M[M]×M[M]		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 12296	1580	インゲンゾウ	切歯	[I]E×D×*		1	I-R
HC	V層	具塚群	5層	S14 12296	1580	インゲンゾウ	切歯	[I]E×D×*		1	I-R
HC	V層	具塚群	5層	S14 12723	1996	インゲンゾウ	前歯			1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 12723	1560	インゲンゾウ	前歯			1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 4267	2493	インゲンゾウ	前歯			1	I-R
HC	V層	具塚群	5層	S14 12723	1829	インゲンゾウ	前歯			1	I-R
HC	V層	具塚群	5層	S14 12723	1825	インゲンゾウ	前歯			1	R
HC	V層	具塚群	5層	S14 12723	1828	インゲンゾウ	前歯			1	R
HC	V層	具塚群	5層	S14 12723	1827	インゲンゾウ	後歯			1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 12723	1824	インゲンゾウ	後歯			1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 12723	1826	インゲンゾウ	骨			1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 12723	1830	インゲンゾウ	側頭			1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 12295	1492	インゲンゾウ	歯骨	未確認		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 12281	1879	インゲンゾウ	切歯	[I]E×D×*		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 12282	1886	インゲンゾウ	切歯	[I]E×D×*		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 12242	1585	インゲンゾウ	切歯	[I]E×D×*		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 4700	1865	インゲンゾウ	切歯-上顎骨	[I]E×D×C×P×P×M[M]×M[M]		1	R
HC	V層	具塚群	5層	S14 12723	1817	インゲンゾウ	上顎骨	[C]×P×P×*		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 4272	1810	インゲンゾウ	上顎骨	[C]×P×P×P×M[M]×M[M]		1	I
HC	V層	具塚群	5層	A15 2368	1736	インゲンゾウ	上顎骨	[C]×P×P×*		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 12294	1836	インゲンゾウ	上顎骨	[C]×P×P×P×M[M]×*		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 4576	1441	インゲンゾウ	上顎骨	[C]×P×P×P×M[M]×M[M]		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 12229	1830	インゲンゾウ	上顎骨	[m]×m×m×m		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 12723	1830	インゲンゾウ	上顎骨	[m]×m×m×m		1	I
HC	V層	具塚群	5層	T15 4482	2045	インゲンゾウ	上顎骨	[M]		1	I
HC	V層	具塚群	5層	A16 12741	1540	インゲンゾウ	上顎骨	[m]×m		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 12723	1500	インゲンゾウ	上顎骨	[m]×m×m		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 4221	1274	インゲンゾウ	上顎骨	[P]×P×M[M]×*		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 12237	1841	インゲンゾウ	上顎骨	[P]×P×M[M]×*		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 12233	1832	インゲンゾウ	上顎骨	[P]×P×M[M]×*		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 12233	1843	インゲンゾウ	上顎骨	[P]×P×*		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 4642	1843	インゲンゾウ	上顎骨	[P]×m]×m]×m]×M]×P]×m]×m]×m]×M]×M]×*		1	I-R
HC	V層	具塚群	5層	T15 12290	1749	インゲンゾウ	上顎骨	[m]×m]×m]×*		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 12236	1862	インゲンゾウ	上顎骨	[C]×P×P×P×*		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 4442	1869	インゲンゾウ	上顎骨	[C]×P×P×P×M[M]×M[M]×*		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 4375	1448	インゲンゾウ	上顎骨	[M]×M]×*		1	R
HC	V層	具塚群	5層	S14 12227	1636	インゲンゾウ	上顎骨	[M]×M]×*		1	R
HC	V層	具塚群	5層	S14 4672	1813	インゲンゾウ	上顎骨	[m]×m]×*		1	R
HC	V層	具塚群	5層	S14 12723	1828	インゲンゾウ	上顎骨	[m]×m]×*		1	R
HC	V層	具塚群	5層	S14 4375	1847	インゲンゾウ	上顎骨	[m]×m]×M]×*		1	R
HC	V層	具塚群	5層	T14 12279	1635	インゲンゾウ	上顎骨	[m]×C]×P×M]×M]×*		1	R
HC	V層	具塚群	5層	S14 4319	1792	インゲンゾウ	上顎骨	[P]×P×M]×*		1	R
HC	V層	具塚群	5層	S14 12723	1499	インゲンゾウ	上顎骨	[P]×P×M]×*		1	R
HC	V層	具塚群	5層	S14 12723	1819	インゲンゾウ	上顎骨-側頭	R		1	I
HC	V層	具塚群	5層	S14 12277	1838	インゲンゾウ	上顎骨-側頭	R		1	I
HC	V層	具塚群	5層	A16 11827	1606	インゲンゾウ	上顎骨-側頭	R		1	I



第100表-9 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

＊種別記載と異なるものは脚注の表を参照

種別	層	群・用途	調査年	発掘 層位	骨 種別	部位	保存状況*	左右	数	備考		
HC	V層	貝塚群	測	S14	12798	1488	インシニア	上肢骨(掌骨)	H	L		
HC	V層	貝塚群	測	S14	12723	1521	インシニア	上肢骨(掌骨)	H	L		
HC	V層	貝塚群	測	S16	12581	1609	インシニア	上肢骨(掌骨)	H	L		
HC	V層	貝塚群	測	S14	12719	1500	インシニア	上肢骨(掌骨)	H	L		
HC	V層	貝塚群	測	S14	12723	1522	インシニア	上肢骨(掌骨)	C	L	①	
HC	V層	貝塚群	測	S15	12282	1611	インシニア	上肢骨(掌骨)	C	L	①	
HC	V層	貝塚群	測	S14	12263	1548	インシニア	上肢骨(掌骨)	C	R	①	
HC	V層	貝塚群	測	S14	4524	1349	インシニア	上肢骨(掌骨)	C	R	①	
HC	V層	貝塚群	測	S15	12282	1530	インシニア	上肢骨(掌骨)	C	R	①	
HC	V層	貝塚群	測	T14	12726	1661	インシニア	上肢骨(掌骨)	M	L		
HC	V層	貝塚群	測	T14	12729	1663	インシニア	上肢骨(掌骨)	M	R		
HC	V層	貝塚群	測	S14	12232	1694	インシニア	上肢骨(掌骨)	M	L		
HC	V層	貝塚群	測	S14	12248	1665	インシニア	上肢骨(掌骨)	M	L		
HC	V層	貝塚群	測	A15	11910	1683	インシニア	上肢骨(掌骨)	M	R		
HC	V層	貝塚群	測	S15	12283	1685	インシニア	上肢骨(掌骨)	M	R		
HC	V層	貝塚群	測	S15	4762	1455	インシニア	下骨	[H1E]×CP2P3P4*	L		① 同一個体
HC	V層	貝塚群	測	S15	4762	1455	インシニア	下骨	[H1]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	12248	1483	インシニア	下骨	[H1E]×D×C×M×m2×m3×M	L		① 同一個体
HC	V層	貝塚群	測	A15	3666	1511	インシニア	下骨	[H1×]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	A15	3666	1511	インシニア	下骨	[H1×E]×D×CP2×P3P4×M1×M2M	R		① 同一個体
HC	V層	貝塚群	測	S14	12233	1548	インシニア	下骨	[P2P3P4M1M2×M3]	L		① 同一個体
HC	V層	貝塚群	測	S14	12233	1548	インシニア	下骨	[P4M1M2M3]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	S15	2979	1536	インシニア	下骨	[H1×E]×D×CP1×P2×P4×C	L		①
HC	V層	貝塚群	測	S15	2979	1536	インシニア	下骨	[H1×E]×D×C	L		① 同一個体
HC	V層	貝塚群	測	A15	4172	1263	インシニア	下骨	[H1]H2]	L-R		
HC	V層	貝塚群	測	S14	4579	1465	インシニア	下骨	[H1E]×D×C×M×m2m3M1	L		①
HC	V層	貝塚群	測	A15	8000	2197	インシニア	下骨	[P1×P2×P3×P4M1M2M3]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	A15	3587	2198	インシニア	下骨	[P2×P3×P4M1×M2×M3]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	4760	1725	インシニア	下骨	[C×M1×m2×m3×M1×P4M1M2M3]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	4760	1725	インシニア	下骨	[C×M1×m2m3M1M2]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	4630	1471	インシニア	下骨	[C×M1×m2m3M1M2]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	12230	1768	インシニア	下骨	[C×P1×P2×P3P4×C]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	12232	1990	インシニア	下骨	[C×P1m1×m2m3M1M2]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	12236	1536	インシニア	下骨	[C×P2×P3×C]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	A15	4171	1828	インシニア	下骨	[CP2×P3P4M1M2M3]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	4572	1513	インシニア	下骨	[CP2×P4]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	T15	12382	1745	インシニア	下骨	[H1×E]×D×C×M×m2m3M1]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	A15	4066	1474	インシニア	下骨	[H1E]×D×C×C]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	12230	1630	インシニア	下骨	[M1]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	12231	1531	インシニア	下骨	[m1×m2×m3M1]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	12236	1822	インシニア	下骨	[m1×m2M1M2]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	T15	12382	1548	インシニア	下骨	[m1×m2M1M2×C]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	T14	8622	1788	インシニア	下骨	[M2M3]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	4380	1760	インシニア	下骨	[M3]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	T15	8532	1753	インシニア	下骨	[M3]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	T15	4482	1772	インシニア	下骨	[M3]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	T15	4723	1832	インシニア	下骨	[M4]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	S15	4584	1547	インシニア	下骨	[M5]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	12231	1468	インシニア	下骨	[P1]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	4512	1436	インシニア	下骨	[P2×P3P4M1M2M3]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	4347	1330	インシニア	下骨	[P2×P3P4M1M2M3×C]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	A15	11910	1643	インシニア	下骨	[P3]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	S15	4723	1506	インシニア	下骨	[P4M1M2M3]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	S15	4584	1547	インシニア	下骨	[P4M1M2M3]	L		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	4571	1468	インシニア	下骨	[H1E]×D×C×m1×m2×m3×M1×C]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	12233	1539	インシニア	下骨	[C]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	12230	1715	インシニア	下骨	[C×m1×m2m3]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	T15	12383	1813	インシニア	下骨	[C×P1×C]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	T14	4313	1475	インシニア	下骨	[C×P1×C×P2×P3×P4×M1×M2M3]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	S15	4771	1512	インシニア	下骨	[C×P2×P3×P4M1M2M3]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	T14	12719	1501	インシニア	下骨	[C×P2×P3×C]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	S15	2969	1766	インシニア	下骨	[C×P2×P3×C]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	T14	4152	1762	インシニア	下骨	[C×P2×P3×C]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	S15	12289	1878	インシニア	下骨	[C×P2×P3×P4×C]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	S15	4583	1464	インシニア	下骨	[C×P2×P3×P4×M1×M2M3×C]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	4576	1441	インシニア	下骨	[C×P2P3P4M1M2M3]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	12228	1800	インシニア	下骨	[H1×E]×D×C]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	T14	12290	1804	インシニア	下骨	[H1×E]×D×C×P1]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	T14	4547	1821	インシニア	下骨	[H1E]×D×CP1P2×P3P4M1M2M3]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	12231	1644	インシニア	下骨	[M1M2]×C]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	8638	1452	インシニア	下骨	[M1×M2M3]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	12234	1629	インシニア	下骨	[M1×M2M3×C]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	T15	12383	1813	インシニア	下骨	[M1M2]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	S15	4595	1793	インシニア	下骨	[M1M2M3]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	T14	4079	1748	インシニア	下骨	[M2M3]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	T15	12383	1812	インシニア	下骨	[m2×m3M1]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	8632	1624	インシニア	下骨	[M2M3]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	S15	12293	1653	インシニア	下骨	[M2M3]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	T14	4238	1751	インシニア	下骨	[M2M3]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	T14	12282	1634	インシニア	下骨	[m3]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	T15	4633	1730	インシニア	下骨	[M3]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	A16	11929	1645	インシニア	下骨	[m3×M1M2M3]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	12229	1632	インシニア	下骨	[m3M1M2M3]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	S15	12290	1565	インシニア	下骨	[m3M1]×M1]×C]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	T15	12381	1767	インシニア	下骨	[P1×P2×P3P4×C]	R		①
HC	V層	貝塚群	測	S14	12235	1542	インシニア	下骨	[P3]	R		①

第V章  
1

第100表-10 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

\* 残存位置と類に関する凡例は第99表を参照

種別	層位	群・地区	遺跡名	ボタジツ	目録 番号	骨 種別	部位	残存位置*	左右	類	備考
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12244	1281	イヌシノブク	下顎骨		[PKMI X]	
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12252	1810	イヌシノブク	下顎骨		[PKMI X]	
HC	V層	貝塚群	5層	A16	11905	1601	イヌシノブク	下顎骨		II	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12225	1023	イヌシノブク	下顎骨		II	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12225	1516	イヌシノブク	下顎骨		II	
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12275	1603	イヌシノブク	下顎骨		II	
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12276	1603	イヌシノブク	下顎骨		II	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12227	1605	イヌシノブク	下顎骨		II	
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12276	1623	イヌシノブク	下顎骨		II	
HC	V層	貝塚群	5層	A16	11940	1636	イヌシノブク	下顎骨		II	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12226	1639	イヌシノブク	下顎骨		II	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12278	1628	イヌシノブク	下顎骨		II	
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12252	1619	イヌシノブク	下顎骨		II	
HC	V層	貝塚群	5層	T14	12280	1116	イヌシノブク	下顎骨		II	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12223	1518	イヌシノブク	下顎骨		II	
HC	V層	貝塚群	5層	A16	11940	1284	イヌシノブク	下顎骨		II	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	4327	1279	イヌシノブク	下顎骨		C	
HC	V層	貝塚群	5層	T14	4744	1249	イヌシノブク	下顎骨		C	
HC	V層	貝塚群	5層	D16	11947	1342	イヌシノブク	下顎骨		C	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12251	1251	イヌシノブク	下顎骨		C	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12251	1254	イヌシノブク	下顎骨		C	
HC	V層	貝塚群	5層	T14	4457	1253	イヌシノブク	下顎骨		C	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12222	1274	イヌシノブク	下顎骨		C	
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12278	1625	イヌシノブク	下顎骨		C	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12212	1694	イヌシノブク	下顎骨		M1	
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12287	1747	イヌシノブク	下顎骨		M1	
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12286	1695	イヌシノブク	下顎骨		M2	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12222	1713	イヌシノブク	下顎骨		M3	
HC	V層	貝塚群	5層	T15	4364	1470	イヌシノブク	下顎骨		M4	
HC	V層	貝塚群	5層	A15	11816	1718	イヌシノブク	下顎骨		M	
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12286	1746	イヌシノブク	下顎骨		M	
HC	V層	貝塚群	5層	D15	3851	2360	ウシ	肋骨		L	
HC	V層	貝塚群	5層	A16	3620	2215	ジュゴン	前肋骨		B	
HC	V層	貝塚群	5層	A16	3620	2217	ジュゴン	前肋骨-後肋骨-後肋骨		L	
HC	V層	貝塚群	5層	A16	3620	2222	ジュゴン	後肋骨		後肋骨	
HC	V層	貝塚群	5層	A16	3620	2224	ジュゴン	後肋骨		後肋骨	
HC	V層	貝塚群	5層	A16	3620	2213	ジュゴン	肋骨		肋骨	
HC	V層	貝塚群	5層	A16	3620	2214	ジュゴン	肋骨		肋骨	同一個体
HC	V層	貝塚群	5層	A16	3620	2196	ジュゴン	肋骨		肋骨	
HC	V層	貝塚群	5層	A16	3620	2225	ジュゴン	肋骨		肋骨	
HC	V層	貝塚群	5層	A16	3620	2212	ジュゴン	肋骨		肋骨	
HC	V層	貝塚群	5層	A16	3620	2216	ジュゴン	肋骨		肋骨	
HC	V層	貝塚群	5層	A16	3620	2211	ジュゴン	肋骨		肋骨	
HC	V層	貝塚群	5層	T15	4367	3033	ジュゴン	肋骨		肋骨	同一個体
HC	V層	貝塚群	5層	T15	4827	1826	ジュゴン	上肋骨		w	
HC	V層	貝塚群	5層	T14	12277	1325	ジュゴン	円筒骨		B	
HC	V層	貝塚群	5層	A15	4368	2183	ジュゴン	肋骨		w	
HC	V層	貝塚群	5層	T15	4664	2068	ジュゴン	肋骨		p(骨)	
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12278	2066	ジュゴン	肋骨		m	
HC	V層	貝塚群	5層	T14	12278	1942	ジュゴン	肋骨		m	
HC	V層	貝塚群	5層	T15	4663	2180	ジュゴン	肋骨		m	
HC	V層	貝塚群	5層	A15	4899	2181	ジュゴン	肋骨		m	
HC	V層	貝塚群	5層	D15	11946	2534	ジュゴン	肋骨		m	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	4426	2092	ジュゴン	肋骨		m	
HC	V層	貝塚群	5層	D15	11946	2057	ジュゴン	小骨		B	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	4372	1836	イカ	椎骨		椎骨	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	4511	1855	イカ	椎骨		椎骨	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	4511	1836	イカ	椎骨		椎骨	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12215	1719	イカ	椎骨		椎骨	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12211	1709	イカ	椎骨		椎骨	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12296	1673	哺乳類	歯		哺乳類	
HC	V層	貝塚群	5層	A16	12741	1672	哺乳類	歯		哺乳類	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12283	1667	哺乳類	歯		哺乳類	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12285	1666	哺乳類	歯		哺乳類	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12285	1670	哺乳類	歯		哺乳類	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12226	1677	哺乳類	歯		哺乳類	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12228	1674	哺乳類	歯		哺乳類	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	4666	1675	哺乳類	歯		哺乳類	
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12286	1122	哺乳類	歯		哺乳類	
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12286	1076	哺乳類	歯		哺乳類	
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12286	1121	哺乳類	歯		哺乳類	
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12287	1071	哺乳類	歯		哺乳類	
HC	V層	貝塚群	5層	S15	12271	1072	哺乳類	歯		哺乳類	
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12276	969	哺乳類	歯		哺乳類	
HC	V層	貝塚群	5層	T15	12286	1128	哺乳類	歯		哺乳類	
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12226	1022	哺乳類	歯		哺乳類	
HC	V層	貝塚群	5層	A15	11926	1884	未同定	未確認			
HC	V層	貝塚群	5層	A16	11921	1899	未同定	未確認			
HC	V層	貝塚群	5層	A16	12741	1862	未同定	未確認			
HC	V層	貝塚群	5層	A16	11927	1901	未同定	未確認			
HC	V層	貝塚群	5層	A16	11905	1899	未同定	未確認			
HC	V層	貝塚群	5層	A16	11927	1897	未同定	未確認			
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12285	1153	未同定	未確認			
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12226	1923	未同定	未確認			
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12226	1922	未同定	未確認			
HC	V層	貝塚群	5層	S14	12251	1906	未同定	未確認			

第100表-11 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

\* 種別記載と異なる凡例は添付表を参照

種別	層位	群・地区	調査期	プロット	行番	骨の種類	部位	保存状況*	左右	数	備考
HC	V層	貝塚群	調査	S14	12750	1096	未同定	未確認		1	
HC	V層	貝塚群	調査	S15	12262	1963	未同定	未確認		1	
HC	V層	貝塚群	調査	S15	12261	1895	未同定	未確認		1	
HC	V層	貝塚群	調査	S14	12750	881	鳥・哺乳類同定不可	四肢骨	m	1	
HC	V層	貝塚群	調査	T14	12775	959	鳥・哺乳類同定不可	四肢骨	m	1	
HC	V層	貝塚群	調査	T14	12775	879	鳥・哺乳類同定不可	四肢骨	m	1	
HC	V層	貝塚群	調査	S14	12728	267	鳥・哺乳類同定不可	四肢骨		1	
HC	V層	貝塚群	調査	T14	12726	263	鳥・哺乳類同定不可	四肢骨		1	
HC	V層	貝塚群	調査	T14	12265	836	鳥・哺乳類同定不可	脛骨		1	
HC	V層	貝塚V群	b		12651	141	アオビダイ鳳	前上肢骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A13	11423	186	アオビダイ鳳	脛骨	右	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A13	11423	213	アオビダイ鳳	脛骨	右	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B15	11466	1176	ハマヅメノカサ	前上肢骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C13	11369	550	ハマヅメノカサ	前上肢骨	右	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C14	11363	900	ハマヅメノカサ	前上肢骨	右	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C14	11365	846	ハマヅメノカサ	前上肢骨	右	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A15	11434	82	アズナギダイ	上肢骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A15	11432	83	アズナギダイ	上肢骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A16	11448	326	アズナギダイ	上肢骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B15	11460	87	アズナギダイ	上肢骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C14	11366	81	アズナギダイ	上肢骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A15	11434	157	アズナギダイ	上肢骨	右	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C14	11366	159	アズナギダイ	上肢骨	右	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A13	11423	1162	アズナギダイ	上肢骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B15	11460	1211	アズナギダイ	前上肢骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B15	11462	1160	アズナギダイ	前上肢骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B15	11460	1166	アズナギダイ	前上肢骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C13	11369	1156	アズナギダイ	前上肢骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A16	11448	1207	アズナギダイ	前上肢骨	右	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A13	11423	2	アズナギダイ	脛骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A16	11448	7	アズナギダイ	脛骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C14	11360	4	アズナギダイ	脛骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B16	11317	172	アズナギダイ	脛骨	右	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A15	11439	40	アズナギダイ	脛骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C13	10236	216	アズナギダイ	脛骨	右	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B15	11468	362	アズナギダイ	脛骨	右	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B14	2572	160	シロハラノウサギ	下顎歯骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C15	11696	98	シロハラノウサギ	下顎歯骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C15	1814	275	シロハラノウサギ	下顎歯骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A13	11420	2	アオビダイ鳳	下顎歯骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C15	2034	106	アオビダイ鳳	上顎歯骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A12	11410	88	アオビダイ鳳	上顎歯骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A16	11448	52	アオビダイ鳳	上顎歯骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C13	10736	49	アオビダイ鳳	下顎歯骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A13	11421	279	アオビダイ鳳	前上肢骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B15	11461	278	アオビダイ鳳	前上肢骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C13	11372	254	アオビダイ鳳	前上肢骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C14	11369	148	アオビダイ鳳	前上肢骨	右	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B15	11468	326	アオビダイ鳳	脛骨	右	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A13	11421	30	アオビダイ鳳	前上肢/脛骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B14	1728	22	アオビダイ鳳	前上肢/脛骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C13	2228	444	アオビダイ鳳	前上肢/脛骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A13	11423	240	コナギ	脛骨	右	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C16	11627	121	アザギ	前上肢/脛骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C16	2794	164	ハリセンボン科	前上肢骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A12	11410	1912	ハリセンボン科	前上肢骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A13	11410	2030	ハリセンボン科	前上肢骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A13	11423	1909	ハリセンボン科	前上肢骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A15	12730	1928	ハリセンボン科	前上肢骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A16	11446	2001	ハリセンボン科	前上肢骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B15	2574	1930	ハリセンボン科	前上肢骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B15	11467	1967	ハリセンボン科	前上肢骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B16	11361	1924	ハリセンボン科	前上肢骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C14	11369	1900	ハリセンボン科	前上肢骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C14	11369	1896	ハリセンボン科	前上肢骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C16	11628	1928	ハリセンボン科	前上肢骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A13	11423	1170	ハリセンボン科	脛骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A13	11423	1201	ハリセンボン科	脛骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C12	2649	1295	ハリセンボン科	脛骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A15	1749	167	ハリセンボン科	前上肢/脛骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B14	2898	1858	ハリセンボン科	前上肢/脛骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C13	10228	1128	ハリセンボン科	前上肢/脛骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B15	11468	222	猪(骨髄抽出)	脛骨	左	1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A13	2829	2522	ウツギ	未同定		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B15	11466	2520	ウツギ	脛骨板		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B16	2951	2124	ウツギ	肋骨板		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B16	2859	2129	ウツギ	肋骨板		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C16	11634	2122	ウツギ	肋骨板		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	B14	10259	2566	ウツギ	肋骨板		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C16	2734	2222	ウツギ	肋骨板		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A15	2296	2272	ウツギ	肋骨板		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	A16	11448	2222	ウツギ	肋骨板		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C14	11602	2229	ウツギ	肋骨板		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C16	2892	1275	ウツギ	脛骨		1	
HC	後期層	A-C/72-16	-	C13	11320	2152	ウツギ	脛骨板	右	1	(1)
HC	後期層	A-C/72-16	-	C14	3762	2522	ウツギ	脛骨板	右	1	(1)

第100表-12 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

※ 採集位置と照らす凡例は第99表を参照

種別	層序	群・地区	観測号	プロット	位置	種類	部位	保存位置*	左右	数	備考
HC	後周層	A-C/12-16	-	C14	3702	5516 ウシガメ	腹甲板	B		1	(13)
HC	後周層	A-C/12-16	-	A14	11420	2334 ウシガメ	甲板	B		1	(13)
HC	後周層	A-C/12-16	-	A16	11443	2331 ウシガメ	甲板	B		1	(13)
HC	後周層	A-C/12-16	-	B14	11475	2315 ウシガメ	甲板	B		1	(13)
HC	後周層	A-C/12-16	-	B15	11487	2288 ウシガメ	甲板	B		1	(13)
HC	後周層	A-C/12-16	-	C12	11480	2290 ウシガメ	甲板	B		1	(13)
HC	後周層	A-C/12-16	-	C13	12736	2279 ウシガメ	甲板	B		1	(13)
HC	後周層	A-C/12-16	-	C14	11500	2255 ウシガメ	甲板	B		1	(13)
HC	後周層	A-C/12-16	-	C15	11616	2139 ウシガメ	甲板	B		1	(13)
HC	後周層	A-C/12-16	-	A16	11447	1845 ウシガメ	未確認			1	
HC	後周層	A-C/12-16	-	C12	11460	1849 ウシガメ	未確認			1	
HC	後周層	A-C/12-16	-	C12	11460	1853 ウシガメ	未確認			1	
HC	後周層	A-C/12-16	-	C13	11373	1854 ウシガメ	未確認			1	
HC	後周層	A-C/12-16	-	B12	11458	2296 ウシガメ	未確認			1	
HC	後周層	A-C/12-16	-	B13	11361	2171 ウシガメ	未確認			1	
HC	後周層	A-C/12-16	-	C12	11363	1696 ウシガメ	上腹板		裏	1	
HC	後周層	A-C/12-16	-	C13	11626	1597 ウシガメ	腹甲板			1	
HC	後周層	A-C/12-16	-	C13	1929	1666 イブ	上顎骨			1	
HC	後周層	A-C/12-16	-	B16	2272	5505 イノシシ	前歯骨	[PMIME]		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B14	836	2218 イノシシ	切歯骨	[(H)12-DX]		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C14	2249	1479 イノシシ	上顎骨	[PPM(M)M]		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C15	1791	1467 イノシシ	上顎骨	[PMIME]		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C12	2051	1739 イノシシ	上顎骨	[PPM(M)M]		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C12	361	1749 イノシシ	上顎骨	[PMIME]		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B14	494	1466 イノシシ	上顎骨	[P]		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	A12	11438	1681 イノシシ	上顎骨歯茎	M3		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B13	4035	1477 イノシシ	下顎骨	[C×P2×P3×P4×MIME]		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C16	11635	1332 イノシシ	下顎骨	[CP2×P2×X]		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C14	2965	1732 イノシシ	下顎骨	[M1M2]X		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	A16	1158	1466 イノシシ	下顎骨	[Inf×Inf3d]		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C16	816	1319 イノシシ	下顎骨	[M2M3]		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C16	2955	1462 イノシシ	下顎骨	[InfM]		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	A16	2819	2319 イノシシ	下顎骨	[[H]P1×P2]		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C16	2954	1454 イノシシ	下顎骨	[M2M3]		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B16	1522	1791 イノシシ	下顎骨	[M2M3]X		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C16	2740	1442 イノシシ	下顎骨	[M2]		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B15	11485	1796 イノシシ	下顎骨	[M3]X		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	A13	11421	1819 イノシシ	下顎骨	[P2×P2×X]		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	A15	11436	1618 イノシシ	下顎骨歯茎	Inf		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B12	11439	1615 イノシシ	下顎骨歯茎	Inf		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	A16	11449	1200 イノシシ	下顎骨歯茎	C		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B14	11471	1238 イノシシ	下顎骨歯茎	C		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C14	9616	1627 イノシシ	下顎骨歯茎	C		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C14	11576	1336 イノシシ	下顎骨歯茎	C		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	A13	11423	1711 イノシシ	下顎骨歯茎	M2		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C15	367	1736 イノシシ	下顎骨歯茎	M2		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B14	442	1764 イノシシ	下顎骨歯茎	M3		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B16	2271	1723 イノシシ	下顎骨歯茎	M3		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B15	11488	1743 イノシシ	下顎骨歯茎	M3		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B16	2274	1822 ブク	下顎骨	上顎角 根節突起		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B15	2279	587 ウシ	前歯骨	角叉		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C13	1786	2546 ウシ	歯骨			L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B15	1811	2628 ウシ	歯骨			R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C15	376	2349 ウシ	歯骨			R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B16	2429	2427 ウシ	上顎骨	[Inf3Inf4M1]		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C14	2561	2459 ウシ	上顎骨	[P4]		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C14	1011	2457 ウシ	上顎骨歯茎	Inf1		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B14	736	2427 ウシ	上顎骨歯茎	Inf1		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C14	2586	2423 ウシ	上顎骨歯茎	Inf1		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C16	234	2356 ウシ	上顎骨歯茎	P2		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B14	491	2438 ウシ	上顎骨歯茎	P3		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B14	2890	2425 ウシ	上顎骨歯茎	M1		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B16	1069	2431 ウシ	上顎骨歯茎	M1		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C14	1138	2432 ウシ	上顎骨歯茎	M1		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B13	11464	2411 ウシ	上顎骨歯茎	M1		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B14	481	2406 ウシ	上顎骨歯茎	M1		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C13	872	2408 ウシ	上顎骨歯茎	M1		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C15	978	2436 ウシ	上顎骨歯茎	M1/M2		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C15	1008	2426 ウシ	上顎骨歯茎	M1/M2		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B14	209	2413 ウシ	上顎骨歯茎	M2		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B14	2122	2428 ウシ	上顎骨歯茎	M3		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C14	1092	2384 ウシ	下顎骨	[Inf3Inf4M3]		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B14	1061	2346 ウシ	下顎骨	[[1]-D3×C×P2×P3×P4×M1M2] 下顎角		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C12	2201	2372 ウシ	下顎骨	[[1]-D3×C×P2×P3×P4×M1M2]		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C14	2416	2374 ウシ	下顎骨	[[1]-D3×C×P2×P3×P4×M1M2] 下顎角		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	A13	2832	2613 ウシ	下顎骨	根節突起		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C14	1032	2383 ウシ	下顎骨	[Inf3Inf4]		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	A14	311	2614 ウシ	下顎骨	根節突起		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	A14	512	1986 ウシ	下顎骨	根節突起		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B12	466	2371 ウシ	下顎骨歯茎	Inf1		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C13	1027	2369 ウシ	下顎骨歯茎	Inf1		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C16	2246	2496 ウシ	下顎骨歯茎	Inf1		R	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	A12	11411	2336 ウシ	下顎骨歯茎	切歯		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	A14	1722	2369 ウシ	下顎骨歯茎	切歯		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	C14	11486	2364 ウシ	下顎骨歯茎	切歯		L	1
HC	後周層	A-C/12-16	-	B14	481	2692 ウシ	下顎骨歯茎	切歯		R	1

第100表-13 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

※種名指定と数に関する凡例は裏面表を参照

遺跡	層位	群・地区	採り出し ブロック	目録 番号	骨 の種類	部位	存在位置*	左右	数	備考
HC	後期	A-C/12-16	-	A13 11455	1087ウシ	下顎骨	M1		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B12 466	2390ウシ	下顎骨	M1		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C14 1017	2388ウシ	下顎骨	M1		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C16 2263	2389ウシ	下顎骨	M1		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	A13 11465	2332ウシ	下顎骨	M1		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B13 439	2338ウシ	下顎骨	M1		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B14 792	2351ウシ	下顎骨	M1		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B16 2406	2330ウシ	下顎骨	M1		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B15 871	2343ウシ	下顎骨	M1/M2		1	2343のみM2
HC	後期	A-C/12-16	-	B13 1863	2363ウシ	下顎骨	M2		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C16 823	2360ウシ	下顎骨	M2		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B14 227	2341ウシ	下顎骨	M2		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	A13 11423	2376ウシ	下顎骨	M3		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C15 980	2277ウシ	下顎骨	M3		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B13 2909	2378ウシ	下顎骨	M3		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C15 348	2367ウシ	下顎骨	M3		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C15 1161	2394ウシ	上/下顎骨	11層		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C15 364	2387ウシ	上/下顎骨	11層		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C16 2366	2396ウシ	上/下顎骨	11層		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C16 2260	2392ウシ	上/下顎骨	11層		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B15 1177	2072ウシ	尺骨	m		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B15 1137b	1269ウシ	手骨			1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B15 863	1104ウシ	手骨			1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C16 796	2349ウシ	M骨	m		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	A13 1027	2345ウシ	脛骨	p		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B14 1234	2345ウシ	脛骨	Op-3		1	スライデルクラクチャー
HC	後期	A-C/12-16	-	B14 903	2345ウシ	脛骨			1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C14 2971	2394ウシ	脛骨	L		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C16 829	2574ウシ	中足骨	m		1	スライデルクラクチャー
HC	後期	A-C/12-16	-	B13 872	1708ウシ	中足骨	w		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C15 1162	1328ウシ	末節骨	o		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C15 1006	2547ウシ	脛骨			1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C16 2270	2575ウシ	上顎骨	dm29		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C14 3066	2667ウシ	上顎骨	dm27		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B16 1068	2668ウシ	上顎骨	dm3		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C15 364	2366ウシ	上顎骨	dm29		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B16 2434	2601ウシ	上顎骨	P2		1	dm2が属する可能性がある
HC	後期	A-C/12-16	-	C13 1797	2584ウシ	上顎骨	P2		1	dm2が属する可能性がある
HC	後期	A-C/12-16	-	C15 3383	2683ウシ	上顎骨	P2		1	dm2が属する可能性がある
HC	後期	A-C/12-16	-	C15 352	2586ウシ	上顎骨	P2		1	dm2が属する可能性がある
HC	後期	A-C/12-16	-	C15 876	2630ウシ	上顎骨	11層		1	P2→M2のみ? 11層
HC	後期	A-C/12-16	-	C13 1796	2631ウシ	上顎骨	11層		1	P2→M2のみ? 11層, dm2を含む可能性がある
HC	後期	A-C/12-16	-	C15 2262	2655ウシ	上顎骨	11層		1	P2→M2のみ? 11層, dm2を含む可能性がある
HC	後期	A-C/12-16	-	C16 925	2654ウシ	上顎骨	11層		1	P2→M2のみ? 11層, dm2を含む可能性がある
HC	後期	A-C/12-16	-	B15 1811	2679ウシ	上顎骨	11層		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B16 1068	2666ウシ	上顎骨	11層		1	P2→M2のみ? 11層
HC	後期	A-C/12-16	-	B15 833	2663ウシ	上顎骨	11層		1	P2→M2のみ? 11層, dm2を含む可能性がある
HC	後期	A-C/12-16	-	C14 1613	2688ウシ	上顎骨	11層		1	P2→M2のみ? 11層, dm2を含む可能性がある
HC	後期	A-C/12-16	-	C14 2967	2667ウシ	上顎骨	11層		1	P2→M2のみ? 11層, dm2を含む可能性がある
HC	後期	A-C/12-16	-	B16 2423	2661ウシ	上顎骨	11層		1	P2→M2のみ? 11層
HC	後期	A-C/12-16	-	C15 3384	2615ウシ	下顎骨	[P2×P3×P4×M1×M2×M3×]		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B15 2260	2614ウシ	下顎骨	[P2×P3×P4×M1×M2×M3×]		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	A13 2397	2598ウシ	下顎骨	括弧外- 微細突起		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	A12 1694	2618ウシ	下顎骨	滑車部	11層	1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C16 2253	2587ウシ	下顎骨	dm27		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C16 1042	2430ウシ	下顎骨	dm27		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B16 2432	2603ウシ	下顎骨	dm3		1	
HC	後期?	A-C/12-16	-	B16 1000	2604ウシ	下顎骨	dm3		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C14 2765	2576ウシ	下顎骨	dm3		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B16 2405	2593ウシ	下顎骨	dm27		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C13 2571	2611ウシ	下顎骨	dm27		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B13 489	2439ウシ	下顎骨	P2		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	A14 1834	2593ウシ	下顎骨	11層		1	P2→M2のみ? 11層
HC	後期	A-C/12-16	-	B13 496	2392ウシ	下顎骨	11層		1	P2→M2のみ? 11層
HC	後期	A-C/12-16	-	B16 2276	2595ウシ	下顎骨	11層		1	P2→M2のみ? 11層
HC	後期	A-C/12-16	-	C14 748	2591ウシ	下顎骨	11層		1	P2→M2のみ? 11層
HC	後期	A-C/12-16	-	C16 2282	2609ウシ	下顎骨	M3		1	P2→M2のみ? 11層
HC	後期	A-C/12-16	-	B14 852	2615ウシ	上/下顎骨	切痕		2	
HC	後期	A-C/12-16	-	A12 1142	2643ウシ	上/下顎骨	切痕		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B13 472	2639ウシ	上/下顎骨	切痕		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B14 11470	2624ウシ	上/下顎骨	切痕		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B14 453	2647ウシ	上/下顎骨	切痕		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B16 11881	2648ウシ	上/下顎骨	切痕		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C14 11379	2646ウシ	上/下顎骨	切痕		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C15 354	2625ウシ	上/下顎骨	切痕		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C15 365	2634ウシ	上/下顎骨	切痕		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C15 839	2635ウシ	上/下顎骨	切痕		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C15 381	2632ウシ	上/下顎骨	切痕		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C16 2252	2612ウシ	上/下顎骨	切痕		1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B14 306	2569ウシ	手・足骨			1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B15 793	2529ウシ	手・足骨			1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B15 828	2565ウシ	手・足骨			1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B16 2428	1311ウシ	趾2/4中手・中足骨			1	
HC	後期	A-C/12-16	-	C16 1162	1558ウシ	趾2/4中手・中足骨			1	
HC	後期	A-C/12-16	-	A13 3056	1317ウシ/ウシ?	脛骨(踵骨)			1	
HC	後期	A-C/12-16	-	B13 1118	2395ウシ/ウシ?	脛骨	微突起		1	

第100表-14 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

※種名位置と題に関する凡例は表の裏面を参照

遺跡	層序	群・地区	採り方	プロット	層位	種名	種別	測位	保存位置*	左	右	備考
HC	後期層	A-C12-16	-	B15	11402	1272	ウシノコ	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C14	11365	2084	ジュゴン	幼骨	f		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	A16	11440	2085	ジュゴン	幼骨	f		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	B15	11402	2080	ジュゴン	幼骨	f		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C16	966	2082	ジュゴン	幼骨	f		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	B15	2280	2082	ジュゴン	幼骨+	f		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	A15	11433	2106	ジュゴン	骨片	f		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C16	825	2055	ジュゴン	上顎骨	m	♀(子体)	1	込献
HC	後期層	A-C12-16	-	B16	3334	2073	ジュゴン	骨片	m	♀(子体)	1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C15	11617	2136	ジュゴン	骨片	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C15	967	2132	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C16	3030	2182	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	A16	11443	2148	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	A16	1263	2101	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	B13	11462	2130	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	B14	11470	2144	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	B15	11468	2112	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	B15	11467	2163	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	B16	2772	2099	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C13	10749	2223	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C13	11069	2134	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C13	12778	2115	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C13	10251	2184	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C15	11067	2206	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C15	11069	2114	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C15	11066	2112	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C15	11612	2141	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C16	1001	2192	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	A15	11436	2048	ジュゴン	幼骨	m		1	埋
HC	後期層	A-C12-16	-	C13	428	1249	ジュゴン	幼骨	m		1	埋
HC	後期層	A-C12-16	-	A15	1510	2091	ジュゴン	幼骨	m		1	埋
HC	後期層	A-C12-16	-	A15	1370	2001	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	A15	1509	2047	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	B17	3000	2067	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	B15	11491	2100	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C13	1040	2084	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C13	11366	2190	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C14	1051	2050	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C14	263	2002	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C14	2198	2162	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C15	247	2093	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C16	977	2076	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C16	924	2065	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C16	11623	2187	ジュゴン	幼骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C14	2300	2080	ジュゴン	不明	f		(C)	
HC	後期層	A-C12-16	-	A15	11436	2055	ジュゴン	不明	f		(C)	
HC	後期層	A-C12-16	-	C14	11396	2034	ジュゴン	不明	f		(C)	
HC	後期層	A-C12-16	-	C15	11613	2075	ジュゴン	不明	f		(C)	
HC	後期層	A-C12-16	-	C15	11604	2138	ジュゴン	不明	f		(C)	
HC	後期層	A-C12-16	-	C14	894	1710	イルカ	骨片	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C14	10403	1556	哺乳類	前歯	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C16	2742	998	哺乳類	骨体	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C13	11365	1782	鳥・哺乳類同定不可	骨片	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	B16	11311	1108	鳥・哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C12	475	1362	鳥・哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	A15	11433	259	鳥・哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	B16	11365	256	鳥・哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C15	11616	255	鳥・哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	後期層	A-C12-16	-	C16	1833	261	鳥・哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	後期層	C-E7/8-11	-	C16	11608	211	ハシロコノコ	骨片	m		1	L
HC	後期層	C-E7/8-11	-	C16	11339	1208	アヒカゲイ科	前上肢骨	m		1	R
HC	後期層	C-E7/8-11	-	C16	11336	352	アヒカゲイ科	前上肢骨	m		1	L
HC	後期層	C-E7/8-11	-	C11	11336	290	アヒカゲイ科	骨片	m		1	
HC	後期層	C-E7/8-11	-	C16	3409	1809	ハシロコノコ	前上肢骨	m		1	
HC	後期層	C-E7/8-11	-	C11	11351	1877	ハシロコノコ	前上肢骨	m		1	
HC	後期層	C-E7/8-11	-	D10	11608	1200	ハシロコノコ	骨片	m		1	
HC	後期層	C-E7/8-11	-	C16	11320	1126	ハシロコノコ	前上肢/歯骨	m		1	
HC	後期層	C-E7/8-11	-	D10	11608	1217	ウツガメ	縁骨	m		1	
HC	後期層	C-E7/8-11	-	D10	11608	2231	ウツガメ	縁骨	m		1	
HC	後期層	C-E7/8-11	-	C16	11342	2166	ウツガメ	甲殻	f		(C)	
HC	後期層	C-E7/8-11	-	C16	11337	2333	ウツガメ	甲殻	f		(C)	
HC	後期層	C-E7/8-11	-	C16	11325	2160	ウツガメ	甲殻	f		(C)	
HC	後期層	C-E7/8-11	-	C16	11332	2285	ウツガメ	甲殻	f		(C)	
HC	後期層	C-E7/8-11	-	D10	11607	2312	ウツガメ	甲殻	f		(C)	
HC	後期層	C-E7/8-11	-	C11	11346		ウツガメ	不明	f		(C)	
HC	後期層	C-E7/8-11	-	C16	11336		ウツガメ	不明	f		(C)	
HC	後期層	C-E7/8-11	-	E10	11727	1891	イヌ	下顎骨	m		1	[P2XFPX]
HC	後期層	C-E7/8-11	-	D11	11678	1992	イヌ	下顎骨	m		1	L
HC	後期層	C-E7/8-11	-	D11	2628	2287	イヌ	骨片	m		1	L
HC	後期層	C-E7/8-11	-	D11	2367	1765	イシノボリ	下顎骨	m		1	[M]
HC	後期層	C-E7/8-11	-	C16	729	1367	イシノボリ	下顎骨	m		1	[CPM/MUM]
HC	後期層	C-E7/8-11	-	C16	729	1368	イシノボリ	下顎骨	m		1	[L]
HC	後期層	C-E7/8-11	-	C10	11345	1286	イシノボリ	下顎骨	m		1	L
HC	後期層	C-E7/8-11	-	C10	11345	1256	イシノボリ	下顎骨	m		1	R
HC	後期層	C-E7/8-11	-	D11	11678	1716	イシノボリ	下顎骨	m		1	L
HC	後期層	C-E7/8-11	-	C11	11321	1741	イシノボリ	下顎骨	m		1	M

第V章  
1

第100表-15 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

\* 保存位置と数に関する凡例は表の表を参照

遺跡	層	群・地区	採集層	JPNコード	目録	骨種	部位	保存位置*	左右	数	備考
HC	発掘層	C-15/9-11	-	D9	1149	3236	ウシ	下顎骨	左	1	
HC	発掘層	C-15/9-11	-	CH	1122	2345	ウシ	下顎骨	MI/AM	1	2016年CM2
HC	発掘層	C-15/9-11	-	D11	2472	2470	ウシ	肋骨	p	1	
HC	発掘層	C-15/9-11	-	D11	1948	2430	ウシ	大顎骨	m	1	カウママーク
HC	発掘層	C-15/9-11	-	D11	1942	2561	ウシ	肋骨	l	1	
HC	発掘層	C-15/9-11	-	D9	1146	1217	ウシ	肋骨	l	1	
HC	発掘層	C-15/9-11	-	D10	11665	2467	ウマ	下顎骨	dm2	1	
HC	発掘層	C-15/9-11	-	D9	2055	2570	ウマ	手・足骨	l	1	
HC	発掘層	C-15/9-11	-	D11	1947	2541	ウシ/ウマ	胸椎	MI/AM	1	
HC	発掘層	C-15/9-11	-	E10	706	2508	ウシ/ウマ	肋骨	m	1	
HC	発掘層	C-15/9-11	-	E11	1226	1829	ジュゴン	肩甲骨	(p-d)	1	
HC	発掘層	C-15/9-11	-	E11	1227	1928	ジュゴン	肩甲骨	(p-d)	1	
HC	発掘層	C-15/9-11	-	E11	1228	1927	ジュゴン	肩甲骨	(p-d)	1	
HC	発掘層	C-15/9-11	-	D9	11655	1555	ジュゴン	中手骨	l	1	
HC	発掘層	C-15/9-11	-	D11	11877	2165	ジュゴン	肋骨	m	1	
HC	発掘層	C-15/9-11	-	CH	2215	2096	ジュゴン	肋骨	l	1	
HC	発掘層	C-15/9-11	-	C11	11550	2140	ジュゴン	不明	b	1	(1)
HC	発掘層	C-15/9-11	-	D9	11654	2053	ジュゴン	不明	b	1	(1)
HC	発掘層	C-15/9-11	-	C11	2552	2671	イノシシ	腰骨	l	1	
HC	発掘層	C-15/9-11	-	E10	1265	1383	海狸/狸/狸目定不可	四肢骨	l	1	
HC	発掘層	C-15/9-11	-	CH	11322	265	海狸/狸/狸目定不可	四肢骨	l	1	
HC	発掘層	C-15/9-11	-	CH	11329	264	海狸/狸/狸目定不可	四肢骨	l	1	
HC	発掘層	C-15/9-11	-	D11	11515	1401	海狸/狸/狸目定不可	肋骨	m	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D12	11668	25	アオビゾノ	歯	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D14	9747	311	アオビゾノ	歯	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D12	1091	1413	アオビゾノ	歯	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D14	11790	1183	ハマフエズメ類	前上顎骨	l	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D14	2235	174	フユアキダテ科	前上顎骨	l	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	F15	11367	89	フユアキダテ科	前上顎骨	l	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D12	11669	1214	フユアキダテ科	前上顎骨	l	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D16	11721	2203	フユアキダテ科	前上顎骨	l	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	F14	11781	1210	フユアキダテ科	前上顎骨	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D16	11721	19	フユアキダテ科	歯	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D12	11679	41	フユアキダテ科	内骨	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D16	219	166	フユアキダテ科	肋骨	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	E14	2690	91	シロカクヒ型	下顎骨	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D14	1123	143	アオビゾノ	下顎骨	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D14	2332	69	アオビゾノ	下顎骨	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	F13	1361	168	アオビゾノ	下顎骨	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D13	1044	1131	アオビゾノ	前上顎骨	l	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D14	11782	356	アオビゾノ	前上顎骨	l	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D14	9577	244	アオビゾノ	前上顎骨	l	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	E12	11740	342	アオビゾノ	前上顎骨	l	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D14	11785	284	アオビゾノ	前上顎骨	l	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D14	9577	144	アオビゾノ	前上顎骨	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D12	1890	113	アオビゾノ	歯	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	E15	11788	120	アオビゾノ	歯	l	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	F13	2182	1637	ハシセンゾノ科	前上顎骨	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	E14	2661	1162	ハシセンゾノ科	前上顎骨	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D14	2791	1303	ハシセンゾノ科	歯	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	E14	2660	1293	ハシセンゾノ科	歯	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	E14	11732	1775	真骨鱗(保原)	前上顎骨	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D14	11790	322	真骨鱗(保原)	前上顎骨	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D12	11712	176	真骨鱗(保原)	前上顎骨	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	E14	2651	218	真骨鱗(保原)	前上顎骨	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	E15	2632	2205	アユウシギ	下顎骨	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D12	11682	2268	ウツガ	甲殻	b	1	(1)
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D12	2535	2151	ウツガ	甲殻	b	1	(1)
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D14	2561	2135	ウツガ	甲殻	b	1	(1)
HC	発掘層	D-F/12-16	-	E14	11792	2239	ウツガ	甲殻	b	1	(1)
HC	発掘層	D-F/12-16	-	E14	11732	2298	ウツガ	甲殻	b	1	(1)
HC	発掘層	D-F/12-16	-	E15	1649	1848	ウツガ	甲殻	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	E15	11781	2044	ウツガ	甲殻	1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D12	11694	1876	イヌ	上顎骨	C	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	E14	11730	1807	イヌ	下顎骨	[MI X ME X ME X]	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D12	11806	1995	イヌ	下顎骨	[PI X PI X MI X ME X MI X]	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D14	2524	1772	イヌ/ゾウ	上顎骨	C	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D14	9747	1637	イヌ/ゾウ	上顎骨	dm2	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D16	940	1724	イヌ/ゾウ	下顎骨	[MI]	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D12	1089	1754	イヌ/ゾウ	下顎骨	[MI X ME]	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D16	1141	1740	イヌ/ゾウ	下顎骨	E1	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D12	1084	1280	イヌ/ゾウ	下顎骨	C	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D12	11713	1638	イヌ/ゾウ	下顎骨	C	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D12	1090	1238	イヌ/ゾウ	下顎骨	ME	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	E16	1074	1481	イヌ/ゾウ	下顎骨	ME	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	E15	11767	2432	ウシ	上顎骨	PI	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	E14	2662	2433	ウシ	上顎骨	MI	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D14	2803	2430	ウシ	上顎骨	ME	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D12	2527	2403	ウシ	上顎骨	ME	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D12	2861	2465	ウシ	上顎骨	ME	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D15	355	2536	ウシ	下顎骨	[MI X ME X ME X ME X]	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	E15	1169	2466	ウシ	下顎骨	[MI X ME]	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D15	1730	1802	ウシ	下顎骨	MI/AM	1	
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D14	2347	2244	ウシ	下顎骨	MI/AM	1	2016年CM2
HC	発掘層	D-F/12-16	-	E15	801	2338	ウシ	下顎骨	MI/AM	1	2016年CM2
HC	発掘層	D-F/12-16	-	D14	11791	2362	ウシ	下顎骨	1	1	

第100表-16 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

\* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照

遺跡	層	群・地区	調査年度	プロット	目録番号	種別	部位	残存位置*	左右	数	備考	
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D14	1174	2462	ウシ	上/下顎歯床	口蓋	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D14	2792	2391	ウシ	上/下顎歯床	口蓋	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D16	799	2550	ウシ	歯根	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D15	1130	1208	ウシ	手骨		1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F16	1668	2553	ウシ	肩骨(肋骨)	真	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F17	1121	2474	ウシ	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D13	2584	2444	ウシ	肋骨	右	1	スライデルクラクチャー	
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D16	800	3473	ウシ	中足骨	右<左>	1	スライデルクラクチャー	
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D13	1093	2443	ウシ	中足骨	右<左>	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D14	2366	2585	ウシ	上顎歯床	PG	1	歯2が落ちる可能性あり	
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D15	332	2582	ウシ	上顎歯床	PG	1	歯1が落ちる可能性あり	
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D12	1874	2636	ウシ	上顎歯床	口蓋	1	歯1が落ちる可能性あり	
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D14	2366	2651	ウシ	上顎歯床	口蓋	1	歯1・歯2が落ちる可能性あり	
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D14	2779	2630	ウシ	上顎歯床	口蓋	1	歯1・歯2が落ちる可能性あり	
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D14	2402	2678	ウシ	上顎歯床	口蓋	1	歯1・歯2が落ちる可能性あり	
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D14	2786	2639	ウシ	上顎歯床	口蓋	1	歯1・歯2が落ちる可能性あり	
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F16	1623	2679	ウシ	上顎歯床	口蓋	1	歯1・歯2が落ちる可能性あり	
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D13	2442	2619	ウシ	下顎骨	下顎臼	1	歯1が落ちる可能性あり	
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D12	2542	2600	ウシ	下顎骨	関節突起	1	歯1が落ちる可能性あり	
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D15	236	2438	ウシ	下顎歯床	PG	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	E32	1180	2418	ウシ	下顎歯床	口蓋	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D14	639	2602	ウシ	下顎歯床	M3	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D13	1168	2640	ウシ	上/下顎歯床	切歯	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D13	1168	2644	ウシ	上/下顎歯床	切歯	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D14	2323	2632	ウシ	上/下顎歯床	切歯	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D16	219	2642	ウシ	上/下顎歯床	切歯	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D13	2354	2627	ウシ	上/下顎歯床	口蓋	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F14	2637	2339	ウシ	踵骨		1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D14	2326	2481	ウシ	中足骨	d	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D16	1171	1247	ウシ	手足骨		1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F15	1034	2562	ウシ	手足骨		1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D13	1979	2698	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D13	1985	2697	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D14	2780	2531	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D14	2382	2679	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D14	9792	2651	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F14	3122	2533	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D14	2795	2008	ジュゴン	肋骨	右<左>	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D16	935	3977	ジュゴン	肋骨	右	1	腫	
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D12	9763	2164	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D15	1151	2179	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D15	1170	2132	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D16	1170	2210	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D16	1121	2195	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D16	1635	2145	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	E32	1140	2209	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F14	1132	2118	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F14	1147	2116	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F15	1176	2123	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F14	1175	2112	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F15	1640	2119	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D14	2794	2184	ジュゴン	肋骨	右	1	腫	
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D13	424	2186	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D15	1199	2330	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F14	2642	2098	ジュゴン	肋骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F16	2918	2096	ジュゴン	小腸	右	1	(1)	
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F15	2684	1857	イルカ	椎骨	椎体	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F15	2684	1861	イルカ	椎骨	椎体	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F15	1172	2572	未同定	未確認		1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D16	962	1157	鳥/哺乳類/両生/魚	骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	D15	1176	1086	鳥/哺乳類/両生/魚	骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F13	1174	906	鳥/哺乳類/両生/魚	骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F16	1170	624	鳥/哺乳類/両生/魚	骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F14	1177	613	鳥/哺乳類/両生/魚	骨	右	1		
HC	埋蔵層	D-F/12-16	-	F14	1176	256	鳥/哺乳類/両生/魚	骨	右	1		
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G13	1181	133	ウツクシ	肋骨	左	1		
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G13	1459	1129	アオブダイ	上/下顎骨	右	1		
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G13	1526	108	シロクワ/ウツクシ	下顎骨	右	1		
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G13	1444	1366	アオブダイ	下顎骨	右	1		
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G13	1454	231	アオブダイ	前上顎骨	右	1		
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G13	1270	1313	アオブダイ	歯	右	1		
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G13	1454	369	アオブダイ	方骨	左	1		
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G13	1586	1383	ハルビシ/ウツクシ	骨	右	1		
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G13	1482	252	黄骨魚(保原)	未確認		1		
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G13	1179	769	ウツクシ	尺骨	右	1		
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G13	1176	2292	ウツクシ	甲殻	右	1	(1)	
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G13	1480	2170	ウツクシ	未確認		1		
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G13	1454	292	ウツクシ	骨	右	1		
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G13	1179	1396	イモ	[MIME×MIM]	右	1		
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G16	1189	1611	イシノブ	上顎歯床	口蓋	1		
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	F16	1636	1450	イシノブ	上顎歯床	M3	1		
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G13	1586	1334	イシノブ	下顎骨	[CP1×]	右	1	腫
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G13	1176	1640	イシノブ	下顎骨	[P1]	右	1	
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G12	1176	1277	イシノブ	下顎歯床	C	左	1	腫
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G13	1484	1386	イシノブ	下顎歯床	C	左	1	腫
HC	埋蔵層	G-1/12-16	-	G13	1436	1481	イシノブ	下顎歯床	M2	左	1	



第100表-17 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

※ 検体位置と異なる凡例は裏面の表を参照

種別	層位	群・地区	検出層	ナトリウム	分析	骨の種類	部位	検出位置*	左右	数	備考
HC	後期層	G-1-12-16	-	G14	1443	1453	インシニアブタ	L1下顎歯槽	M	1	
HC	後期層	G-1-12-16	-	H14	1171	2366	ウシ	T下顎歯槽	dml	R	1
HC	後期層	G-1-12-16	-	J15	1633	2026	ウシ	中肋骨			
HC	後期層	G-1-12-16	-	H4	208	2616	ウマ	T下顎	[H=>H X]	L	1
HC	後期層	G-1-12-16	-	H4	208	2616	ウマ	T下顎	[H=>H X PPPPMI X MI X MI T下顎] 共存	R	1
HC	後期層	G-1-12-16	-	G15	1659	2537	ウシ/ウマ	肋骨	p	1	
HC	後期層	G-1-12-16	-	H12	1826	2480	ウシ/ウマ	肋骨	p	1	
HC	後期層	G-1-12-16	-	G15	1659	3509	ウシ/ウマ	肋骨	m	1	
HC	後期層	G-1-12-16	-	G13	1349	1825	ジュゴン	上腕骨	68-1	R	1
HC	後期層	G-1-12-16	-	G13	1462	2070	ジュゴン	肋骨	p m	1	
HC	後期層	G-1-12-16	-	G13	1348	2071	ジュゴン	肋骨	p m	1	
HC	後期層	G-1-12-16	-	G13	2097	2678	ジュゴン	肋骨	[9-1]	1	
HC	後期層	G-1-12-16	-	G13	1463	2100	ジュゴン	肋骨	m	1	
HC	後期層	G-1-12-16	-	G13	1437	2107	ジュゴン	肋骨	m	1	
HC	後期層	G-1-12-16	-	G13	1466	2143	ジュゴン	肋骨	m	1	
HC	後期層	G-1-12-16	-	G13	1347	2188	ジュゴン	肋骨	m	1	
HC	後期層	G-1-12-16	-	G14	1442	2099	ジュゴン	肋骨	m	1	
HC	後期層	G-1-12-16	-	G14	1443	2100	ジュゴン	肋骨	m	1	
HC	後期層	G-1-12-16	-	G14	1254	2191	ジュゴン	肋骨	m	1	
HC	後期層	G-1-12-16	-	G13	1459	1405	イルカ	肋骨	5	1	
HC	後期層	G-1-12-16	-	D6	1636	1449	哺乳類	側頭骨	岩壁面	1	
HC	後期層	G-1-12-16	-	G13	1461	1320	哺乳類	歯槽		1	
HC	後期層	S-T-13-16	-	T15	11864	1188	アヌキダイオウ	口蓋骨		R	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	T13	11863	24	アヌキダイオウ	歯骨		R	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	S15	11830	142	アオダマシ	歯骨		1	
HC	後期層	S-T-13-16	-	S13	11839	1925	ハシセンボン科	前上顎骨		1	
HC	後期層	S-T-13-16	-	T13	11840	1868	ハシセンボン科	前上顎骨		1	
HC	後期層	S-T-13-16	-	T13	11836	1930	ハシセンボン科	前上顎骨		1	
HC	後期層	S-T-13-16	-	T14	11838	1888	ハシセンボン科	前上顎骨		1	
HC	後期層	S-T-13-16	-	S16	11841	1882	ハシセンボン科	歯骨		1	
HC	後期層	S-T-13-16	-	S14	11877	1127	ハシセンボン科	前上顎骨		1	
HC	後期層	S-T-13-16	-	T15	1262	284	ハシセンボン科	前上顎骨		1	
HC	後期層	S-T-13-16	-	S14	11838	767	ウシ/ウマ	上腕骨		1	
HC	後期層	S-T-13-16	-	T13	11833	1094	ウシ/ウマ	甲殻	9	(1)	
HC	後期層	S-T-13-16	-	S14	1096	1647	ウシ	T下顎	[H X MI X MI X CP2]	R	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	S15	11841	1993	ウシ	T下顎歯槽	C	L	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	T14	1099	1947	インシニアブタ	T下顎	[MI]	L	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	T13	11843	1581	インシニアブタ	T下顎	[P4 MI MI X MI X]	R	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	T13	11840	1821	インシニアブタ	T下顎歯槽	H	L	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	T13	11840	1278	インシニアブタ	T下顎歯槽	C	R	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	T14	2145	1255	インシニアブタ	T下顎歯槽	C	R	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	T15	1754	1737	インシニアブタ	T下顎歯槽	M3	L	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	T15	11840	1217	インシニアブタ	T下顎歯槽	M1	L	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	T15	1903	2424	ウシ	上顎骨	[PPSPH]	R	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	S15	1706	2401	ウシ	上顎歯槽	dml	L	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	S16	11836	3454	ウシ	上顎歯槽	P2	L	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	S15	1678	2451	ウシ	上顎歯槽	P4	L	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	S15	1681	2435	ウシ	上顎歯槽	M1	L	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	S13	518	2412	ウシ	上顎歯槽	M2	R	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	T15	1758	2402	ウシ	上顎歯槽	M2	L	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	S15	1759	2357	ウシ	T下顎歯槽	切歯	L	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	T15	1651	2356	ウシ	T下顎歯槽	P3	R	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	T14	1741	2397	ウシ	T下顎歯槽	P4	L	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	S15	1629	2499	ウシ	T下顎歯槽	P4	R	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	S14	546	2249	ウシ	T下顎歯槽	M1	R	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	T14	11840	2364	ウシ	T下顎歯槽	M2	L	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	T14	11840	2378	ウシ	T下顎歯槽	M3	L	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	T15	1650	3553	ウシ	肋骨		L	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	S13	509	2446	ウシ/ウマ	肋骨	m	R	1
HC	後期層	S-T-13-16	-	T13	2843	2078	ジュゴン	肋骨	p	1	
HC	後期層	S-T-13-16	-	T13	11840	2113	ジュゴン	肋骨	m	1	
HC	後期層	S-T-13-16	-	T16	1262	2103	ジュゴン	肋骨	m	1	
HC	後期層	S-T-13-16	-	T14	11835	878	鳥・哺乳類/爬虫類	四肢骨	m	1	
HC	後期層	-	-	T12	891	283	シロアラビヤウシ	T下顎骨		1	
HC	後期層	-	-	T13	11837	1917	ハシセンボン科	前上顎骨		1	
HC	後期層	-	-	D18	1172	1344	インシニアブタ	T下顎歯槽	C	1	1
HC	後期層	-	-	R12	1175	7203	ウシ	肋骨		1	1
HC	後期層	-	-	R11	1194	2653	ウマ	上顎歯槽	[1]	L	1
HC	後期層	-	-	T12	281	2612	ウマ	T下顎歯槽	P2	L	1
HC	後期層	-	-	R11	11494	3645	ウマ	L1下顎歯槽		1	
HC	後期層	-	-	F11	1340	2544	ウシ/ウマ	大腿骨	d	1	
HC	後期層	-	-	G11	1602	2097	ジュゴン	肋骨	m	1	
HC	後期層	-	-	A13	11468	2566	鳥・哺乳類/爬虫類	肋骨	m	1	
HC	SK01	-	-	R10	12790	1283	インシニアブタ	T下顎歯槽	C	L	1
HC	SK02	-	-	C9	12786	1947	ハシセンボン科	前上顎骨		1	1
HC	SK02	-	-	C9	12786	1608	ウシ	T下顎歯槽	C	R	1
HC	SK02	-	-	C9	12786	1816	インシニアブタ	T下顎	[P4 MI X MI X]	R	1
HC	SK02	-	-	C9	12786	1229	ウシ	中肋骨	m	1	
HC	SK02	-	-	C9	2207	2139	ジュゴン	小骨	9	(1)	
HC	コムイ	-	-	F12	1828	318	アヌキダイオウ	歯骨		1	
HC	コムイ	-	-	F12	1323	2468	ウシ	上腕骨	m-d	R	1
HC	コムイ	-	-	F12	1219	2476	ウシ	肋骨	m	L	1
HC	コムイ	-	-	G12	1854	2056	ウシ/ウマ	側頭骨	側頭面	1	
HC	コムイ	-	-	G12	1859	2104	ジュゴン	肋骨	m	1	
HC	覆土	-	-	R12	1260	26	ウシ/ウマ	歯骨		L	1
HC	不明	貝塚群	-	A13	11891	134	ウシ/ウマ	前上顎骨		L	1

第100表-18 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

\* 残存位置と類に関する凡例は巻頭表を参照

遺跡	層位	群・地区	調査期	グリッド	目録 番号	骨 番号	種別	部位	残存位置*	左右	数	備考
HC	不明	-	-	F14	12062	473	ハマヅメフキ型	前上顎骨		L	1	
HC	不明	-	-	C14	12017	11279	ハマヅメフキ型	前上顎骨		L	1	
HC	不明	具塚群	-	A15	11889	406	ハマヅメフキ型	前上顎骨		R	1	
HC	不明	具塚群	-	F14	12062	183	フズキダイ属	口蓋骨		R	1	
HC	不明	具塚群	-	A16	11890	152	フズキダイ科	上顎骨		L	1	
HC	不明	具塚群	-	A15	11888	114	フズキダイ科	上顎骨		R	1	
HC	不明	具塚群	-	A15	11888	126	フズキダイ科	上顎骨		R	1	
HC	不明	具塚群	-	B15	11897	128	フズキダイ科	上顎骨		R	1	
HC	不明	-	-	C14	12015	12115	フズキダイ科	前上顎骨		L	1	
HC	種仏	-	-	A15	12676	14	フズキダイ科	歯骨		L	1	
HC	不明	具塚群	-	F14	12062	1	フズキダイ科	歯骨		L	1	
HC	不明	具塚群	-	-	12678	23	フズキダイ科	歯骨		R	1	
HC	不明	具塚群	-	A15	11887	15	フズキダイ科	歯骨		R	1	
HC	不明	-	-	F14	12062	43	フズキダイ科	内骨		R	1	
HC	不明	-	-	-	不明	2022	マイ銀	種骨			1	
HC	不明	-	-	B14	292	99	シロクマハシ型	下顎骨			1	
HC	不明	具塚群	-	S15	12474	102	シロクマハシ型	下顎骨			1	
HC	不明	具塚群	-	A15	11888	73	ハシ科	前上顎骨		L	1	
HC	不明	-	-	A15	11865	1	イロダイ属	下顎骨			1	
HC	不明	-	-	F14	12062	282	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	不明	-	-	C14	12017	143	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	
HC	不明	具塚群	-	B15	11897	231	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HC	不明	-	-	J17	13196	1270	センガクハシ科	歯骨		L	1	
HC	不明	具塚群	-	T12	12178	28	ウツギ科	前上顎骨		L	1	
HC	種仏	-	-	B15	12661	1981	ハシセンボン科	前上顎骨			1	
HC	種仏	-	-	T11	12082	2005	ハシセンボン科	前上顎骨			1	
HC	不明	-	-	B15	11889	1809	ハシセンボン科	前上顎骨			1	
HC	不明	-	-	C16	12023	1934	ハシセンボン科	前上顎骨			1	
HC	不明	-	-	D14	12046	1944	ハシセンボン科	前上顎骨			1	
HC	不明	-	-	F17	12091	1946	ハシセンボン科	前上顎骨			1	
HC	不明	-	-	J14	12129	1929	ハシセンボン科	前上顎骨			1	
HC	不明	-	-	T12	12176	2004	ハシセンボン科	前上顎骨			1	
HC	不明	具塚群	-	A16	11890	1914	ハシセンボン科	前上顎骨			1	
HC	不明	具塚群	-	S15	12160	1880	ハシセンボン科	前上顎骨			1	
HC	不明	具塚群	-	S15	11906	1263	ハシセンボン科	歯骨			1	
HC	不明	-	-	-	不明	1487	ハシセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HC	不明	-	-	-	不明	1806	ハシセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HC	不明	-	-	-	不明	618	ウツギ	上顎骨			1	
HC	不明	具塚群	-	S14	2791	1376	ウツギ	肋骨			1	
HC	不明	具塚群	-	B14	469	233	ウツギ	末節骨			1	
HC	不明	-	-	A12	827	1412	ウツギ	肋骨			1	
HC	不明	-	-	C14	541	2127	ウツギ	肋骨			1	
HC	不明	-	-	C12	12028	2155	ウツギ	肋骨			1	
HC	不明	-	-	-	不明	2236	ウツギ	肋骨			1	
HC	不明	具塚群	-	T14	3278	2126	ウツギ	肋骨			1	
HC	不明	具塚群	-	A15	11889	2232	ウツギ	肋骨			1	
HC	不明	具塚群	-	B16	11896	2234	ウツギ	肋骨			1	
HC	不明	具塚群	-	T14	22562	2234	ウツギ	肋骨			1	
HC	不明	具塚群	-	E11	209	2128	ウツギ	甲殻	θ		(C)	
HC	不明	具塚群	-	A15	11888	2209	ウツギ	甲殻	θ		(C)	
HC	不明	具塚群	-	A15	11882	2267	ウツギ	甲殻	θ		(C)	
HC	不明	具塚群	-	S15	12166	2274	ウツギ	甲殻	θ		(C)	
HC	不明	-	-	-	不明	1851	ウツギ	椎体			1	
HC	不明	具塚群	-	B15	11890	1212	ウツギ	椎体			1	
HC	不明	具塚群	-	A15	11888	2287	ウツギ	椎体			1	
HC	不明	具塚群	-	A15	11890	1201	ウツギ	椎体			1	
HC	不明	-	-	D12	12023	1064	ホズク	上顎骨	m-d	L	1	
HC	不明	-	-	D12	12023	1076	ホズク	丸歯	sp.→m	L	1	
HC	不明	-	-	J15	12141	1650	ホズク	鱗骨	m	R	1	
HC	不明	-	-	E16	12065	1697	イヌ	上顎骨/歯骨	C	R	1	
HC	不明	-	-	D12	12023	1209	イヌ	下顎骨	[M] X[M]	R	1	
HC	不明	-	-	H20	12121	2886	シカ	種骨	sp.→d→	L	1	
HC	不明	-	-	J14	516	2491	イシノブナ	前歯骨/頰歯骨		R	1	
HC	不明	-	-	F17	269	1308	イシノブナ	上顎骨	[C×P]m[m]3[P4]M×	L	1	
HC	不明	-	-	-	不明	1023	イシノブナ	上顎骨	[P]SP4	L	1	
HC	種仏	-	-	D11	12068	1535	イシノブナ	上顎骨	[M]M2	R	1	
HC	不明	-	-	-	不明	1853	イシノブナ	上顎骨	[M]	R	1	
HC	不明	-	-	G11	12067	1549	イシノブナ	上顎骨	[ss]M1	R	1	
HC	不明	-	-	-	不明	1997	イシノブナ	上顎骨	[P]1[P]2	R	1	
HC	不明	-	-	C11	11999	1667	イシノブナ	上顎骨/歯骨	dent	L	1	
HC	不明	-	-	B14	11982	1610	イシノブナ	上顎骨/歯骨	H	R	1	
HC	不明	具塚群	-	A15	11887	1351	イシノブナ	上顎骨/歯骨	C	R	1	
HC	不明	-	-	C14	12011	1639	イシノブナ	上顎骨/歯骨	[M]	R	1	
HC	不明	-	-	C11	11999	1662	イシノブナ	上顎骨/歯骨	M1	R	1	
HC	不明	具塚群	-	S12	3492	1455	イシノブナ	上顎骨/歯骨	M3	L	1	
HC	不明	-	-	K14	12136	1684	イシノブナ	上顎骨/歯骨	M4	R	1	
HC	不明	-	-	F16	12061	1642	イシノブナ	下顎骨	[M]	L	1	
HC	不明	-	-	E19	159	1289	イシノブナ	下顎骨	[M]M[M]M×	L	1	
HC	不明	具塚群	-	S15	12162	1472	イシノブナ	下顎骨	[L×a]3[m]M1×	L	1	
HC	不明	具塚群	-	T14	12163	1641	イシノブナ	下顎骨	[M]	L	1	
HC	不明	具塚群	-	S14	3488	1756	イシノブナ	下顎骨	[M]	L	1	
HC	種仏	-	-	B15	12064	1809	イシノブナ	下顎骨	物種	R	1	
HC	不明	-	-	H14	209	1476	イシノブナ	下顎骨	[Cust]m2[m]3[P]4	R	1	
HC	不明	-	-	E16	12065	1654	イシノブナ	下顎骨	[M]	R	1	
HC	不明	-	-	-	不明	1545	イシノブナ	下顎骨	[ss]M1[M]	R	1	
HC	不明	-	-	R16	124	1771	イシノブナ	下顎骨	[P]P-04	R	1	

第100表-19 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

※ 検出位置と異なる凡例は実数を参照

遺跡	層位	群・地区	検出層	発掘期	骨種	種別	部位	検出位置*	左右	数	備考
HC	不明	貝塚群	-	T14	1700	1906	イノシシ	下脛骨		1	[P2M1M2]
HC	不明	貝塚群	-	T13	4001	1431	イノシシ	下脛骨		1	[Cw1n2n3P3M1M2X]
HC	不明	貝塚群	-	T13	4001	1466	イノシシ	下脛骨		1	[M1M2]
HC	不明	貝塚群	-	T13	4001	1335	イノシシ	下脛骨		1	[M1M2X]
HC	不明	-	-	K14	12160	1606	イノシシ	下脛骨		1	dnd
HC	不明	-	-	B14	17065	1608	イノシシ	下脛骨		1	dnd
HC	不明	-	-	G18	12160	1622	イノシシ	下脛骨		1	F11
HC	不明	-	-	J17	55	1715	イノシシ	下脛骨		1	F12
HC	不明	-	-	-	12670	1613	イノシシ	下脛骨		1	F12
HC	不明	-	-	K16	359	1417	イノシシ	下脛骨		1	F12
HC	不明	-	-	D11	331	2620	イノシシ	下脛骨		1	C
HC	不明	貝塚群	-	A16	2675	1382	イノシシ	下脛骨		1	C
HC	不明	貝塚群	-	A15	2696	1246	イノシシ	下脛骨		1	C
HC	不明	貝塚群	-	T14	12503	1126	イノシシ	下脛骨		1	C
HC	不明	-	-	D12	13030	1600	イノシシ	下脛骨		1	P2
HC	不明	-	-	-	4期	1650	イノシシ	下脛骨		1	P4
HC	不明	-	-	B17	191	1472	イノシシ	下脛骨		1	M3
HC	不明	貝塚群	-	T14	2473	1463	イノシシ	下脛骨		1	M3
HC	不明	-	-	C11	11969	1241	イノシシ	上/下脛骨		1	M4
HC	不明	-	-	-	4期	161	イノシシ	上/下脛骨		1	M4
HC	不明	-	-	G20	12180	1337	ウシ	前脛骨		1	肉叉
HC	不明	-	-	K14	456	3404	ウシ	上脛骨		1	dnd
HC	不明	貝塚群	-	S13	12160	2405	ウシ	上脛骨		1	dnd
HC	不明	-	-	C16	271	2433	ウシ	上脛骨		1	P2
HC	不明	-	-	B14	1186	3405	ウシ	上脛骨		1	P2
HC	不明	-	-	J14	216	2434	ウシ	上脛骨		1	L
HC	不明	-	-	B14	590	3407	ウシ	上脛骨		1	M1
HC	不明	-	-	F17	12060	3409	ウシ	上脛骨		1	M1
HC	不明	-	-	J14	290	3410	ウシ	上脛骨		1	M1
HC	不明	-	-	G17	133	2437	ウシ	上脛骨		1	M2
HC	不明	-	-	I18	49	3429	ウシ	上脛骨		1	M2
HC	不明	-	-	J18	35	3444	ウシ	上脛骨		1	M3
HC	不明	-	-	-	4632	2368	ウシ	下脛骨		1	[dnd3n3n4M1]
HC	不明	-	-	C14	555	2382	ウシ	下脛骨		1	[dnd3n3n4]
HC	不明	-	-	F11	232	2383	ウシ	下脛骨		1	[dnd3n3n4]
HC	不明	-	-	I19	31	2397	ウシ	下脛骨		1	低突起・低突起
HC	不明	貝塚群	-	A15	2739	2392	ウシ	下脛骨		1	[H14C16P1P3P4M1M2M3]
HC	不明	貝塚群	-	A15	3770	2396	ウシ	下脛骨		1	低突起・低突起
HC	不明	-	-	C14	546	2370	ウシ	下脛骨		1	dnd
HC	不明	-	-	E12	574	2365	ウシ	下脛骨		1	dnd
HC	不明	覆土	-	B12	13662	2503	ウシ	下脛骨		1	切痕
HC	不明	-	-	E14	1200	2621	ウシ	下脛骨		1	切痕
HC	不明	-	-	I18	12123	2501	ウシ	下脛骨		1	切痕
HC	不明	-	-	C14	566	2355	ウシ	下脛骨		1	P2
HC	不明	-	-	F11	264	2500	ウシ	下脛骨		1	L
HC	不明	-	-	D14	563	2354	ウシ	下脛骨		1	M1
HC	不明	-	-	C17	120	2339	ウシ	下脛骨		1	M1/M2
HC	不明	-	-	I14	257	2240	ウシ	下脛骨		1	M1/M2
HC	不明	-	-	I18	45	2362	ウシ	下脛骨		1	M2
HC	不明	-	-	C14	559	2342	ウシ	下脛骨		1	M2
HC	不明	-	-	E19	1070	2330	ウシ	下脛骨		1	M3
HC	不明	-	-	E18	101	2400	ウシ	上/下脛骨		1	口蓋
HC	不明	-	-	H15	258	2399	ウシ	上/下脛骨		1	口蓋
HC	不明	-	-	I14	6	2460	ウシ	上/下脛骨		1	口蓋
HC	不明	-	-	J14	12162	2396	ウシ	上/下脛骨		1	口蓋
HC	不明	-	-	J15	252	2395	ウシ	上/下脛骨		1	口蓋
HC	不明	-	-	K14	12160	3461	ウシ	上/下脛骨		1	口蓋
HC	不明	-	-	K14	413	2393	ウシ	上/下脛骨		1	口蓋
HC	不明	貝塚群	-	S13	3340	2440	ウシ	上脛骨		1	スベテラルフラクチャー
HC	不明	-	-	E12	570	2441	ウシ	上脛骨		1	「p」
HC	不明	-	-	D10	144	2373	ウシ	中手骨		1	スベテラルフラクチャー
HC	不明	-	-	C18	249	2471	ウシ	中手骨		1	m
HC	不明	-	-	H20	29	3472	ウシ	中手骨		1	スベテラルフラクチャー
HC	不明	-	-	J14	261	1403	ウシ	中手骨		1	m
HC	不明	-	-	D11	567	3479	ウシ	寛骨		1	L
HC	不明	-	-	C16	125	2488	ウシ	寛骨		1	F1
HC	不明	-	-	K13	312	2485	ウシ	寛骨		1	L
HC	不明	-	-	D12	214	2443	ウシ	膝骨		1	L
HC	不明	-	-	F19	61	3475	ウシ	膝骨		1	m
HC	不明	-	-	G18	1096	1244	ウシ	距骨		1	R
HC	不明	-	-	G20	12122	1326	ウシ	足指骨		1	
HC	不明	-	-	B17	162	2442	ウシ	中足骨		1	p
HC	不明	-	-	J14	615	2327	ウシ	中足骨		1	
HC	不明	-	-	F18	296	2549	ウシ	寛(趾)骨		1	
HC	不明	-	-	C14	547	2465	ウシ	上脛骨		1	dnd?
HC	不明	-	-	E14	326	2581	ウシ	上脛骨		1	P2
HC	不明	-	-	D16	233	2652	ウシ	上脛骨		1	口蓋
HC	不明	-	-	H14	268	2694	ウシ	上脛骨		1	L
HC	不明	-	-	H14	1391	2630	ウシ	上脛骨		1	L
HC	不明	-	-	H13	1190	2676	ウシ	上脛骨		1	R
HC	不明	-	-	F16	224	2660	ウシ	上脛骨		1	R
HC	不明	-	-	J14	311	3672	ウシ	上脛骨		1	R
HC	不明	-	-	I18	78	257	ウシ	下脛骨		1	低突起
HC	不明	-	-	C16	272	2588	ウシ	下脛骨		1	L
HC	不明	-	-	C14	1204	2606	ウシ	下脛骨		1	dnd
HC	不明	-	-	C17	1210	2590	ウシ	下脛骨		1	dnd

第100表-20 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

＊種名が直之類に関するものは裏の表を参照

遺跡	層序	群・地区	採集層	目録 プロット	目録 番号	種類	部位	保存状況*	左右	種	備考
HC	不明	-	-	D11	613	ウマ	下顎歯槽	shot		馬	
HC	不明	-	-	K14	413	ウマ	下顎歯槽	1口歯		馬	IP3→M2のハマゾルカ
HC	不明	貝塚墓群	-	T13	8041	ウマ	下顎歯槽	1口歯		馬	IP3→M2のハマゾルカ
HC	不明	貝塚墓群	-	T13	8852	ウマ	下顎歯槽	1口歯		馬	IP3→M2のハマゾルカ
HC	不明	貝塚墓群	-	T13	8856	ウマ	下顎歯槽	1口歯		馬	IP3→M2のハマゾルカ
HC	不明	-	-	H13	488	ウマ	下顎歯槽	1口歯		馬	IP3→M2のハマゾルカ
HC	不明	貝塚墓群	-	T14	3142	ウマ	下顎歯槽	M3		馬	
HC	不明	-	-	C14	554	ウマ	上/下顎歯槽	切歯		馬	
HC	不明	-	-	A12	525	ウマ	上/下顎歯槽	切歯		馬	
HC	不明	-	-	H14	594	ウマ	上/下顎歯槽	切歯		馬	
HC	不明	-	-	C14	566	ウマ	上/下顎歯槽	切歯		馬	
HC	不明	-	-	C14	12014	ウマ	上/下顎歯槽	切歯		馬	
HC	不明	-	-	C14	12015	ウマ	上/下顎歯槽	切歯		馬	
HC	不明	-	-	D12	139	ウマ	上/下顎歯槽	切歯		馬	
HC	不明	貝塚墓群	-	T14	3126	ウマ	上/下顎歯槽	切歯		馬	
HC	不明	-	-	J14	457	ウマ	肩甲骨			馬	
HC	上層部	-	-	T15	12715	ウマ	中手骨	p-1(骨)		馬	
HC	不明	-	-	D14	583	ウマ	大腸骨	p		馬	
HC	不明	-	-	D11	147	ウマ	脛骨	m		馬	オウソマータ・ス・レイラム・フラクチャー
HC	不明	-	-	E12	142	ウマ	手/足指骨	m		馬	
HC	不明	-	-	G14	308	ウマ	手/足指骨	m		馬	
HC	不明	-	-	J14	448	ウマ	肋骨			馬	
HC	不明	-	-	E13	387	ウマ	中手骨	m		馬	ス・レイラム・フラクチャー
HC	不明	-	-	F16	225	ウマ	肩胛骨			馬	
HC	不明	-	-	F16	229	ウマ	肩胛骨			馬	
HC	不明	-	-	A13	8850	ウマ	胸椎			馬	
HC	不明	-	-	C12	164	ウマ	胸椎			馬	
HC	不明	-	-	J14	238	ウマ	椎骨	椎体		馬	
HC	不明	-	-	C12	534	ウマ	上腕骨	△(骨)		馬	
HC	不明	-	-	A12	525	ウマ	脛骨	m		馬	
HC	不明	-	-	R18	169	ウマ	脛骨	m		馬	
HC	不明	-	-	E14	226	ウマ	脛骨	靭帯腔		馬	
HC	不明	貝塚墓群	-	A15	11887	ウマ	肋骨	p		馬	
HC	不明	-	-	D13	12034	ウマ	肋骨	m		馬	
HC	不明	-	-	E12	572	ウマ	肋骨	m		馬	
HC	不明	-	-	H11	12032	ウマ	肋骨	m		馬	
HC	不明	-	-	K15	17402	ウマ	肋骨	m		馬	
HC	不明	貝塚墓群	-	12712	2149	ウマ	肋骨	m		馬	
HC	不明	-	-	H15	11887	ウマ	肋骨	m		馬	
HC	不明	-	-	C12	12063	ウマ	肋骨	m		馬	
HC	不明	-	-	C14	585	ウマ	肋骨	m		馬	
HC	不明	-	-	E12	372	ウマ	肋骨	m		馬	
HC	不明	-	-	G16	25	ウマ	肋骨	m		馬	
HC	不明	貝塚墓群	-	H15	11898	ウマ	肋骨	m		馬	
HC	不明	貝塚墓群	-	A15	2607	ウマ	肋骨	m		馬	
HC	不明	貝塚墓群	-	A15	11889	ウマ	肋骨	m		馬	
HC	不明	貝塚墓群	-	A15	2608	ウマ	肋骨	m		馬	
HC	不明	貝塚墓群	-	T12	12061	ウマ	肋骨	m		馬	
HC	不明	貝塚墓群	-	T12	12060	ウマ	肋骨	m		馬	
HC	不明	貝塚墓群	-	F14	12062	ウマ	不明	m		馬	(C)
HC	不明	貝塚墓群	-	T15	4050	ウマ	前骨	p		馬	
HC	不明	-	-	-	不明	ウマ	哺乳類			馬	
HC	不明	-	-	-	不明	ウマ	哺乳類			馬	
HC	不明	-	-	D12	12021	ウマ	椎骨	m		馬	
HC	不明	-	-	K14	277	ウマ	椎骨	椎体		馬	
HC	不明	-	-	A12	527	ウマ	四肢骨	m		馬	
HC	不明	-	-	E12	231	ウマ	四肢骨	m		馬	
HC	不明	-	-	K13	12155	ウマ	四肢骨	m		馬	
HC	不明	-	-	H16	11266	ウマ	四肢骨	m		馬	
HC	不明	-	-	D13	12029	ウマ	四肢骨	m		馬	
HC	不明	-	-	H15	12062	ウマ	四肢骨	m		馬	
HC	不明	貝塚墓群	-	T14	3534	ウマ	四肢骨	m		馬	
HC	不明	貝塚墓群	-	T16	11879	ウマ	四肢骨	m		馬	
HC	不明	-	-	-	161	ウマ	同定不可	椎骨		馬	
HC	不明	-	-	-	不明	ウマ	同定不可	椎骨		馬	
HC	不明	-	-	F16	12094	ウマ	同定不可	椎骨		馬	
HC	不明	貝塚墓群	-	A15	617	ウマ	同定不可	椎骨		馬	

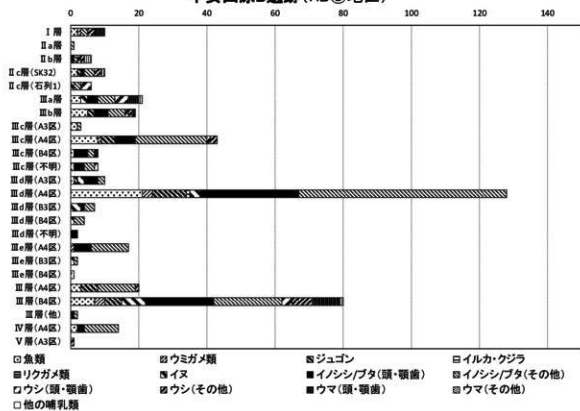
第101表 平安山原B遺跡(HB③地区)における脊椎動物遺体の組成(NISP)

\* 4種、イノシシ/ブタ、ウマ、ジャコウは同定が不確定な資料(第99表、第100表の番号に7をつけて示したものを除く)。< >はMSP算定対象外の資料。

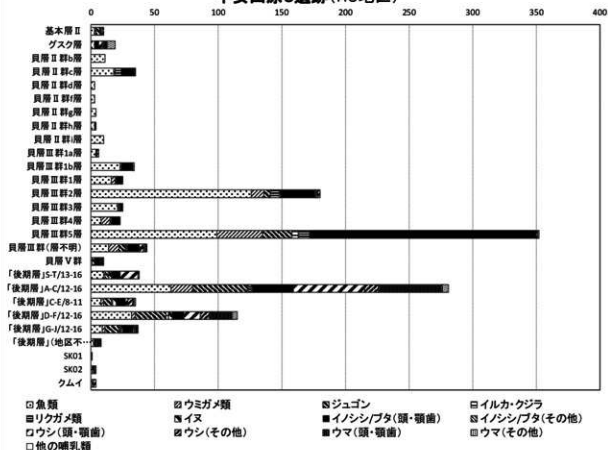
種別	平安山原B																			不明	合計							
	I層	IIa層	IIb層	III層		IV層				V層					VI層			不明										
				3K区	G区1	A3K	A1K	B1K	不明	A3K	A1K	B3K	B4K	T層	A1K	B2K	B1K		A1K			B1K	他					
オオ鹿																											0	
ヒヨク																												0
ウツシ科																												1
マナブシ																												0
スシツラ																												0
イノシシ																												0
ウサギ																												0
アツシ																												0
フクロギ																												0
ウサギ																												3
ヨロヤマカウマ																												0
トウゾク																												1
キツネ																												2
フクロギ																												0
ウサギ																												3
フクロギ																												0
ウサギ																												0
シロツラ																												0
シロツラ																												2
ウサギ																												0
ウサギ																												1
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												0
ウサギ																												



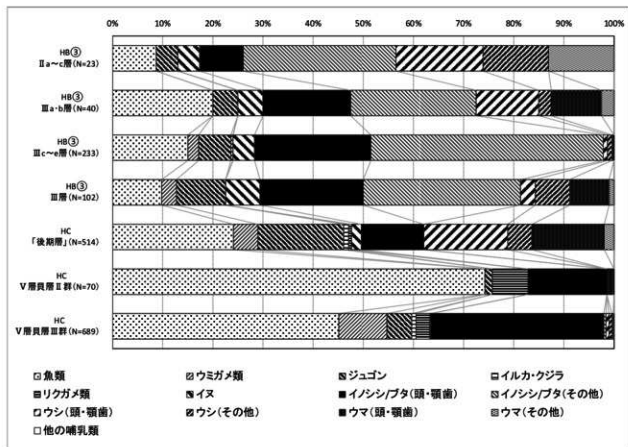
### 平安山原B遺跡(HB③地区)



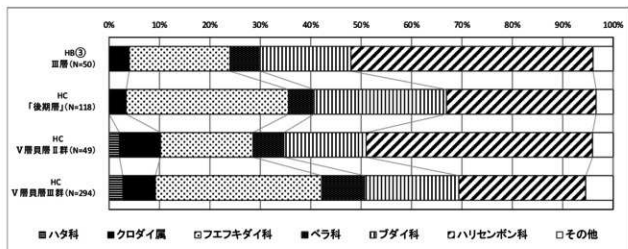
### 平安山原C遺跡(HC地区)



第186図 平安山原B遺跡(HB③地区)・C遺跡(HC地区)における脊椎動物遺体の層別出土数と組成(NISP)。



第187図 平安山原B遺跡(HB③地区)・C遺跡(HC地区)における脊椎動物遺体の地区・層位別組成(NISP比)。  
\* N≧20の地区・層位のみを表示した。



第188図 平安山原B遺跡(HB③地区)・C遺跡(HC地区)における魚類遺体の地区・層位別組成(NISP比)。  
\* N≧20の地区・層位のみを表示した。フェエキダイ科はヨコシマクロダイ1点を含む。





エイ上目 1 尾椎 ウツボ科 2 歯骨 (L) ハナ科 3 第1歯骨 4 歯骨 (L) アン科 5・6 椎骨 7 上上顎骨 (R) フェダイ科 8 前上顎骨 (R) 9 歯骨 (R) クロダイ属 10 前上顎骨 (R) 11 歯骨 (L) ヨコシマクロダイ 12 前上顎骨 (R 不明) フェフキダイ属 (ハマフエフキ型) 13 前上顎骨 (L) フェフキダイ科 14 口蓋骨 (R) 15 歯骨 (R) 16 歯骨 (R) 17 上上顎骨 (R) 18 角骨 (L) フェフキダイ属 (キツネフエフキ型) 19 前上顎骨 (L) ペラ科 20 歯骨 (L) 21 前上顎骨 (L) 22 角骨 (L) ペラ科 A 23 下顎歯骨 ペラ科 B 24 下顎歯骨 ペラ科 (シロカワペラ型) 25 上顎歯骨 (R) 26 下顎歯骨 ペラ科 (タキペラ型) 27 下顎歯骨



イロブダイ属 28 上顎歯骨 (R) 29 下顎歯骨 ブダイ科 30 方骨 (L) アオブダイ属 31 前上顎骨 (R) 32 同 (L) 33 上顎歯骨 (L) 34 同 (R) 35・36 下顎歯骨 37 歯骨 (L) 38 同 (R) コナ科 39 歯骨 (R) モンガラカワハナ科 40 前上顎骨 (R) フグ科 41 歯骨 (L) 42 前上顎骨 (R) 歯骨 43 前上顎骨 (L) ハリセンボン科 44 歯骨 45 前上顎骨 サメ目 46 椎骨

図版 130 脊椎動物遺体 1 (魚類)



ウミガメ類 1 上腕骨 (R) 2 同 (L) 3 末節骨 6・7 肋骨板 8 背甲板 (加工品?) 9 髯骨板 12 縁骨板  
アオウミガメ 4 下顎骨 (L) 5 剣状腹板 (R) リクガメ類 10 上腹板 (R) 11 内腹板 13 剣状腹板 (R)



イヌ 1・2・4 下顎骨 (R) 3 上顎骨 (L) 6 上腕骨 (L) 7 尺骨 (L) 8 大腸骨 (R) 9 同 (L) 10 脛骨 (L)  
イヌ? 5 上腕骨? (LR 不明、加工品?) ネズミ科 11 上腕骨 (L) 12 大腸骨 (L) 13 脛骨  
図版 131 脊椎動物遺体 2 (上段: ウミガメ類・リクガメ類、下段: イヌ・ネズミ科)



ウマ 1 下顎骨 (L) 2 肩甲骨 (R) 3 距骨 (R) 4 踵骨 (R) 5 中手骨 (R) 6 同 (L) 7 中節骨 8・9 基節骨



イノシシ/ブタ 1 側頭骨 (L) 2 下顎骨 (R) 3 同 (L) 4 上顎 C (R, オス) 5 下顎 C (L, メス) 6 同 (L, オス) 7 環椎 8 軸椎 9 肩甲骨 (L) 10 上腕骨 (L) 11 尺骨 (R) 12 橈骨 + 尺骨 (L) 13 橈骨 (L)

図版 132 脊椎動物遺体 3 (上段: ウマ、下段: イノシシ/ブタ)



イノシシ/ブタ 1 大腿骨 (L) 2 脛骨 (R) 3 腓骨 (L) 4 踵骨 (R) 5 距骨 (L) 6 第4中足骨 (R) 7 第3中足骨 (R) 8 中趾骨 9 末趾骨 10 基趾骨 11 寛骨 (R)



イノシシ/ブタ 1・2 下顎骨 (L・R) 3 下顎骨 (R) 4 上顎C (R, オス) 5 下顎C (L, メス) 6 同 (R, オス) 7 肩甲骨 (L) 8 上腕骨 (L) 9 尺骨 (L) 10 桡骨 (L) 11・12 大腿骨 (R) 13 同 (L) 14・15 脛骨 (R) 16 脛骨 (L) 17 距骨 (L) 18 寛骨 (R) 19 下顎骨 (R)

図版 133 脊椎動物遺体 4 (イノシシ/ブタ)



ウシ 1・2 前頭骨 (角芯) 3 肋骨 (L) 4 下顎骨 (L) 5 上腕骨 (L) 6 橈骨 (R) 7 脛骨 (R) 8 同 (L) 9 距骨 (R) 10 同 (L)



ウシ 11 寛骨 (L) 12 中手骨 (R) 13 同 (L) 14 中足骨 (R) 15 同 (L) 16 踵骨 (L) 17 同 (R) 18・19 中趾骨 20 基趾骨 21 末趾骨

図版 134 脊椎動物遺体 5 (ウシ)



ジュゴン 1 切歯骨 (R) 2 切歯骨 (L) + 上顎骨 (L・R) 3 前頭骨 + 頭頂骨 + 後頭骨



ジュゴン 1 肋骨 2 椎骨 3 肩甲骨 (L) 4 上腕骨 (R) 5 同 (R、肋軟) 6 橈骨 (L) 7 中手骨  
イルカ類 8 椎骨 9 連合頰椎

図版 135 脊椎動物遺体 6 (ジュゴン・イルカ類)

## 第2節 平安山原B遺跡と同C遺跡の貝類遺体および本地域の遺跡出土貝類のまとめ

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

平安山原B遺跡およびC遺跡は沖縄島中部西岸・北谷町に位置する沖縄貝塚時代後期から戦前までの遺跡であり、大面積の発掘調査が行われた地域に存在し、本遺跡もそのひとつである。平安山原B遺跡の貝類遺体に関しては、島袋（2008）と黒住（2015）により報告されており、今回のデータは新たに報告される地区のものである。興味深い本遺跡群の貝類遺体を検討する機会を与えて頂いたので、ここに簡単にではあるが結果を報告したい。また、両遺跡を含む本地域（キャンプ桑江北側地区）の遺跡出土貝類遺体に関する概略的なまとめも行った。報告に先立ち、種々お世話になった北谷町教育委員会の島袋春美・山城安生・東門研治の各氏、大量の貝類遺体の同定・集計・入力を行って頂いた資料室の方々に御礼申し上げる。

### 1. 平安山原B遺跡と同C遺跡

#### A. 対象サンプルと調査地点について

今回の報告対象サンプルは、平成21年度調査のHB③地区から平成21年度のHC地区にわたり、ピックアップ法によって得られたもので、土壌サンプルから抽出された遺体は含まれていない。得られた貝類は種の同定・出土部位・生死等を記録して、各グリッドの包含層および遺構ごとに集計され、第112表（CD収録データ）に示されている。報告者は、大部分の種の同定を行い、一部の誤同定と考えられる種に関しては沖縄の類似種に修正した。データが膨大であったため、前報の平安山原B遺跡と同様に（黒住，2015）、出土数は同定標本数（NISF）として処理した。同定標本数の場合、チョウセンサザエ等は殻とフタ・破片が、二枚貝では左右殻と破片が、それぞれ1として集計され、破片の多くなる大形種や二枚貝で、最少個体数よりも過大評価となってしまう。ただ、今回のデータ間での比較には大きな影響を与えないと考えられる。

各時代の土器や他の人工遺物等で分布集中域が認められており、貝類でもグリッドを単位として、第190図に示したように、平安山原B遺跡（以下、平安山B；また適宜、遺跡を除いた）は①～④を、同C遺跡はⅡ群・Ⅲ群を分析の対象とした。各地区の考古年代は、主に取りまとめ時の御教示による。なお、これらの分析対象以外からも当然貝類は出土しており、図版には分析対象の地区以外から出土した種も掲載している。

#### B. 結果

今回、総合計として290,718個体と膨大な数の貝類遺体が出土しており、他の地点とも併せて本遺跡からは海産腹足類38科167種、海産二枚貝類22科68種、淡水産腹足類4科8種、陸産腹足類3科9種が確認された。第105表に、今回の出土貝類のリストと生息場所類型を示した。

##### a) 優占種

今回報告の6地区の貝類で、いずれかの地区で全体の1%以上を占めるものを優占種として、第103表の左側に示した。なお、この23分類群が平安山Cの貝層Ⅲ群で約69%（上部）と約74%（下部）とやや低いほかは、全体の85%（④）から92%（Ⅱ群）とほとんど全てを占めていた。

6地区のうち、貝層Ⅲ群では、下部の5層が貝塚時代後1期後半の大当原式期の貝層として認識され、上部の1・1a・1b・2層は貝塚時代後2期前半のアカジャンガー式期のものと考えられてい

る。両者を比較すると、下部でイソハマグリ  
の割合が高く、マガキガイ・シラナミ類等も  
多く、チョウセンサザエ・サラサバテイラの  
割合は低かった。一方、上部ではイソハマグ  
リが減少し、マガキガイ等が多くなり、チョ  
ウセンサザエ・サラサバテイラの割合が増加  
していた。貝層Ⅱ群は、アカジャンガー式期  
だが、Ⅲ群下部に類似し、イソハマグリがき  
わめて優占していた。平安山Bの3地区(①  
~③)は大当原式期とされ、その組成は類似  
し、マガキガイ・シャコガイ類(シラナミ類等)  
が優占し、サラサバテイラも多く、イソハマグ  
リは少ないという傾向が認められた。



図版 136 ホシダカラ破損状態

また、この貝層Ⅲ群を中心に優占種とはならなかったが、ホシダカラも多く出土しており、その中には背面を人為的に欠かさせているもの(図版136)も、199個体確認された(完形個体は554個体)。ホシダカラの背面部は、中部太平洋等ではタコ捕りのルアーに用いる例が知られているが、本遺跡群を含め沖縄の先史遺跡では普通には知られていない(本報告書第40表「貝製品出土量」)。そのため、図版136は軟体部一身を取り出すための定式化した破損形態を示していると理解されるのであろうが、単に食用とするだけであれば、背面からの強打や殻口からのテコの応用による半截を行うと想定され、このような破損形態にはならないようにも思われる。今後、背面除去方法の検討や、背面部利用例の確認等が望まれる。

貝塚時代後期と近世のものを分析した結果、いくつかの傾向が認められた。一つ目は、イソハマグリの割合の変化で、平安山Cでは7.8%以上で半数を占めるものもあったが、平安山Bでは6.9%未満に、さらに近世では2%未満に激減している傾向である。次いで、イソハマグリ以外では、マガキガイを中心にシャコガイ類等のサンゴ礁のイノの貝が多く採集されていたこともわかる。一方で、平安山Bの貝塚時代後期と近世では河口干潟のアラスジケマンの割合が高かった。さらに、近代では、カワラガイ・リュウキュウシラトリ等の内湾の種の割合も増加していた。また、沖合の干瀬のチョウセンサザエと礁斜面のサラサバテイラは、どの時代を通して採集されており、むしろ近世で高い割合を示した。

**サイズ組成:** 主な優占種およびヒレジャコ・シレナジミの合計10種の大当原式期(HC貝層Ⅲ群5とHB③)とアカジャンガー式期(HC貝層Ⅲ群1~2)のサイズ組成を第189図に示した。今後、時代差や本地域の遺跡、あるいは他の遺跡との詳細な検討を行える詳細なデータを提供できている。

前報の平安山Aも結果(黒住, 2016)も加味して、いくつかの点を指摘しておきたい。サラサバテイラは小形の個体も多いものの、平安山Aと比較すると貝塚時代後期で大形のものが多い(黒住, 2002も参照)。シラナミ類ではサイズは大きく変わらないが、大当原式期で8cm程度に明瞭なピークが認められている。ヒメジャコでは大当原式期からアカジャンガー式期にサイズが小形化しているようであり、この傾向は伊江島の具志原貝塚でも認められている(黒住, 1997)。マガキガイも不明瞭だが、同様にサイズ減少が認められるようである。なお、前報の平安山Aでは、本種の“殻高”としてしまったが、「殻径」の誤りである。その他、アラスジケマンのように平安山Bでは明瞭なピークを有するものの、他では不明瞭な種も存在していた。



## 2. キャンプ桑江北側地区における遺跡出土貝類組成の変化

これまでに本地域では長期間にわたる大規模な発掘調査が行われてきた。報告者はその多くにかかわらせて頂いてきており、ここでは後兼久原遺跡から平安山原A遺跡・大作原古墓群までの地域に存在する遺跡から出土する貝類遺体から想定される貝類利用と周辺環境の推定の概略を示しておきたい。

以前に示した本地域の遺跡から出土した暫定的な貝類遺体の変遷の表(黒住, 2014a)に、時代の明確ではなかった伊礼原B貝塚(中村, 1989)のカワラガイ・ヒメリュウキュウアサリの優占する自然貝層を除くなどの修正を行い、貝塚時代前期と新たに分析された平安山原地区のデータを追加して、第104表を作成した。この表では、各遺跡の層序認識の相違によって理解が全く異なることや、土器等で示される人工遺物の年代とその層に含まれる貝類遺体の時代が存在する可能性もあるが、暫定的なまとめとして提出しておきたい。以下は、この第104表に従って記述を進める。

### A. 海産貝類の組成変化

**a) 貝塚時代前期:** 本地域の伊礼原遺跡において、琉球列島として年代が古く、さらにまとまった貝類遺体群の稀有な例である前2期中葉の曽畑式期の貝層が報告されており、沖縄から絶滅したハイガイ(セイタカハイガイ型)が多く、サンゴ礁域のマガキガイ・チョウセンサザエ・サラサバテイラも優占する組成であった。その後、伊礼原Eでオキナワヒシガイが優占する自然貝層にチョウセンサザエ等の食用廃棄貝類が少数混じる堆積層が知られ、この層は前2期後葉の可能性もあると考えている。前3期の面縄前庭式期の土坑からはダテオキシジミが主体となり、マガキガイも多い遺体群を報告した。前3~4期と考えられるものは伊礼原Eのサンゴ礁層から得られており、マガキガイ・チョウセンサザエ等の多いものであった。後続する前5期の貝類群はうまく認識できていない。ただ、本地域では、前期の各時期で貝類の認められている遺跡数は少ない。

**b) 貝塚時代後期:** 後1期初頭の阿波連浦下層式期の遺跡は少ないが、シャコガイ類・アラスジケマン等が多い例が報告されている。継続する後1期前半の浜屋原式期になると遺跡数・貝類出土量は増加し、イソハマグリが多く、マガキガイが次ぐという例が多い。後1期後半の大当原式期では遺跡数は多く、出土量はさらに増加するようで、マガキガイが主体で、イソハマグリが優占するもの(平安山C/Ⅱ群・Ⅲ群下部:第103表)、マガキガイ・アラスジケマンの多いタイプ(平安山B:第103表)、アラスジケマンが卓越する遺跡(小堀原)も見られ、優占種の類型が多様化するようである。後2期前半のアカジャンガー式期になると遺跡数は前の時期より減少し、マガキガイが優占するが、やはりイソハマグリやアラスジケマンの多い地区も存在する。後2期後半のフェンサ下層式期と明瞭に示されたものはなく、遺跡数は稀になっていると考えられる。報告者の判断で、台地上の大作原古墓群と、“後期終末〜グスク初頭?”と教示を受けた海浜部の平安山BのIV層F~H地区2遺跡がこの時期の可能性があると考えたが、マガキガイ主体の状況に変化はなかった。

**c) グスク時代:** この地域ではグスク時代初期の遺構と遺物を有する重要な遺跡が発掘されている(後兼久原[山城・島袋, 2003; 片桐, 2004]、小堀原[山城・島袋, 2012])。この時期では貝類遺体は極めて稀で、混入の可能性を否定できないが、やはりマガキガイが散見されている。グスク時代の主体期には遺跡は増加し、やはりマガキガイが多いものの、リュウキュウシラトリやウミニナ類の内湾の貝類が優占する遺跡も認められている。

**d) 近世~近代:** 全体としては、やはりマガキガイが優占する遺跡が多く、シャコガイ類やリュウキュウシラトリ等が続く例が認められる。その具体例として、平安山Aで、近世以降で確実な地区の組成第103表に示した。同じ表の平安山Bの④地区も含めて検討すると、マガキガイが最多の

ものが6地区中の4つを占め、リュウキュウシラトリ・アラスジケマンが各1となっている。サンゴ礁のシャコガイ類・チョウセンサザエ・サラサバテイラも多いが、カワラガイ・マスオガイ・ヌノメガイ等の内湾の種が優占種となっている地区も多い。詳細に検討すると、シャゴウはかなり減少しており（第103表）、現在では沖縄島での生息が認められないハマグリ類（後端の丸いハマグリ類似種と尖るトッドウマリハマグリ）の両種も近代に減少していた可能性がある。

②組成変化のまとめ：貝塚時代前2・3期には、優占種として、ハイガイ・ダテオキシジミが認められたが、それ以降は、戦前までマガキガイ・シャコガイ類・イソハマグリ・リュウキュウシラトリ・アラスジケマンが主体となり、チョウセンサザエ・サラサバテイラ・カワラガイが次ぐというパターンが、およそその時代でも共通していた。ただ、a) 後期にイソハマグリ割合が高い、b) 後1期後半にアラスジケマンが大半を占める遺跡が存在する等、優占種のパターンが多様化するようになる、c) グスク時代以降に内湾のリュウキュウシラトリ等の種が優占種となる遺跡が増加するという変化は示されたと考えている。

## B. 変化要因の検討

### a) 環境変化

遺跡出土の食用海産貝類の変化を前述したが、ここでは、自然環境に関して考察する。

古い時代に優占していたハイガイとダテオキシジミは、泥質の潮間帯に生息する種であり、当時のナガサ川河口干潟が生息であったと考えられる。松田（2007）の示した地形分類図の河川右岸の後背湿地が想定され、河口の沖合には砂州が形成され、泥が堆積しやすい状況だった可能性が高い。

一方、前2期の可能性があったとした伊礼原Eの自然貝層は砂丘前面の潮上帯に形成されたものと推定され、貝類の組成は現在の内湾域のものと同様で、一帯が波当たりの弱い湾で、海側に砂丘等は形成されていなかったと考えられる。また、絶滅種や温暖種等はほぼ存在せず、現代と同じ海況であったことがわかる（黒住, 2014bも参照）。琉球列島における絶滅種であるハイガイ（セイタカハイガイ型）は、当初曾畑式期頃に分散・定着し、短期間に絶滅したと考えていたが（黒住, 2006）、その後の発掘資料から本地域では早く消滅したようであるが、沖縄島全体としては貝塚時代後期頃までは残存していたようであることもわかっている。その後、大当原式期の小堀原でアラスジケマンが極めて優占する組成が認められており、遺跡前面の旧ナルカー（山城・島袋, 2012）の海側にアラスジケマンの生息できるような干潟が存在していたと思われる。この部分を含め地形分類図の丘陵側の後背湿地の一部はグスク時代には淡水巻貝・ヌノメカワニナの多産する水体となっていたことがわかる。

曾畑式期からチョウセンサザエ・サラサバテイラ等のサンゴ礁の干瀬・礁斜面に生息する種が優占種として出土しており、遺跡の周辺には現在と類似した形状のサンゴ礁が形成されていたとされている（黒住, 2002等）。ハイガイ等の泥質干潟の種の出土や干瀬の貝類が多くならないこと等の遺跡の貝類から、本地域の前面ではなく、これらの種は干瀬が岸から近い砂辺周辺で採集された可能性が高いと考えている。

このように考えると貝塚時代前2期後葉かと考えた時代以降、本地区の前面には“干瀬まで幅広いノーを有する海域環境が形成されており、それ以降に大局的な変化はなかった”と考えられる。

陸域環境では、曾畑式期の貝層からはパンダナマイマイ等の人が改変した草地等の開放地に生息する種は認められず、林への人為的な影響はかなり小さかったと考えられている（黒住, 2007a）。その後も貝塚時代前3・4期には、北谷町には分布していないアマノヤマトカマイマイが発掘で発見さ

れており（黒住, 2007b）、花粉分析でもアカガシ亜属・マテバシイ属の多いことが報告されて（バリノ・サーヴェイ, 2014）、またグスク時代に絶滅した可能性のあるカツレンマイマイ（黒住, 2011）もやはり貝塚時代後期までは確実に抽出されていることから、後期までは斜面部の森林に大きな変化はなかった可能性が高い。ただ、後1期前半にはパンダナマイマイの割合が増加しており、海浜部では浜堤等の形成や、遺跡数の増加に伴い開けた環境が拡大したことも想定される。

## b) 貝交易

弥生時代以降に北部九州へゴホウラやイモガイを供給した貝交易（例えば木下, 1989等）に関して、本地域の発掘調査では、複数の貝集積や様々な形式を含めた貝輪加工品、あるいは交易に関連したと推測できるダイミョウイモの出土（島袋, 2010, 2014; 山城・島袋, 2012）等、多大な成果が挙げられている。

この貝交易と関連して貝塚時代後1期の遺跡数および貝類出土量は前後の時期より増大しており、“活況を呈していた”ことが顕著に示されたと思われる。多くの貝交易に関係したと想定される遺跡が小地域に連続する状況は伊江島南岸と類似する。伊江島南岸の遺跡群に対して、“礁斜面から上がってくるゴホウラを得るために、集団間に干瀬の切れ目（方言名：クチ）を単位とするテリトリーが存在したのではないかと考えたことがある（黒住, 2013）。本地域では、前述のように干瀬の貝は少なく、幅広いイノーが存在し、クチも少数（ハンジャングチ）であり（北谷町, 2005）、クチをテリトリーとしていた状況ではなかったと考えられる。一方で、貝交易の拠点集落等で出土する三翼織・ガラス玉等の威信財的な搬入品（例えば新里, 2001; 安座間, 2011）は、大規模で高い精度の調査が行われた本地域では確認されていない。

本地区では、大当原式期からアカジャンガー式期にゴホウラとアツソデガイが比較的多い平安山Cのような例も知られている（本報告書第40表）。しかし、第103表で示したように、この時期にも干瀬のチョウセンサザエの割合はそれほど高くなく、上述のクチを主要な採集空間としていたとは考えにくい。ただ、この時期に礁斜面のサラサバティラは増加しており、全く隣接地の干瀬を意識しなかった訳ではないのかもしれない。

また貝塚時代前1期前半から後2期前半の時代に、このイソハマグリとアラスジケマンの優占度が小堀原・伊礼原・平安山原の遺跡群間やこの時期内で異なっていた。この相違は遺跡前面の小地形（砂浜/河口干潟）によることが大きい、イソハマグリを好むというような“地点の相違ではなく、集団の違い”という可能性も想定される。貝製品の出土量の相違等も、集団の違いということで説明されるのかもしれない。前述の干瀬のクチをテリトリーとした集団の違いとは考えられないので、持ち込まれるゴホウラ等の量およびその利用状況が異なっていたのかもしれない。もちろん、上記の遺跡群は同一集団を形成するものであり、各遺跡は加工址等の違いによるものという説明もできるであろう。今後、土器の器種組成による遺跡での生活の在り方や土器形式の細分化による遺跡の並立状況の検証等が行えれば、より詳細な比較が行えると考えられる。

以前にも少し議論したが（黒住, 2009, 2012）、本地域は、これまで知られていたゴホウラの採集地に遺跡が存在する様式とは異なるゴホウラ等の集積地ということが想定されよう。そして、ゴホウラと同様な礁斜面下部に生息するアツソデガイ・大形ナルトボラ類・マンボウガイ等の死殻も得られている。前述の砂辺地区を含め、遺跡前面以外から貝が集められたものと思われる。その要因を、現時点では遺跡が継続して形成され、沖縄諸島以外の“人々の側の交流の程度”が大きかったために、ゴホウラ生息地以外に集積地として成立していたと考えている。このことは、伊礼原D

や小堀原の貝塚時代後期には、他の後期遺跡とは異なり、狩猟で得たイノシシが卓越するという状況(桶泉, 2008, 2012)も傍証になるかもしれない。先に「後期終末〜グスク初頭?」と教示を受けた平安山BのIV層F~H地区をフェンサ下層式期ではないかとしたが、これらの地区では貝類の出土量は多く、ある程度の活発な人間活動があり、もしかすると、このような遺跡が存在していたことも、本地域にグスク時代初期の遺跡が形成されたことにつながっているのではないだろうか。

また、貝交易の活発だった時期でも、「沖縄に分布しないヤマト(≒本土)の貝は全く確認されていない」。具体的には、食用のシジミやハマグリ、あるいは製品として利用できるタマキガイやツキヒガイ等は精度の高い発掘でも出土していない。当然持ち込まなかったということであろうが、ヤマトの人々の滞在程度の「低さ」を示しているのではないかと考えている。

### c) 農耕

本地域では沖縄諸島の中で、直接的な出土穀類の炭素年代で最も古い年代(10世紀)が知られている(高宮・千田, 2012)。農耕開始に起因する出土貝類遺体の在り方について、ここで簡単に触れておきたい。

貝塚時代からグスク時代にかけての、穀類農耕の開始(例えばTakamiya et al., 2015)・権力者の出現による農耕の強制によって、食用貝類遺体はサンゴ礁域の種から内湾/河口干潟のカンギクやアラスジケマンに変化するというのが沖縄島のグスク本体での発掘調査の結果ら得られている変化であるが(例えば黒住, 2002, 2011)、本地域では上述のように、大きな変化は認められていない。同様な例は、沖縄島南部の垣花遺跡でも知られている(黒住, 2008b)。

現時点では、この両時期の組成に劇的な変化のない状況は、「庶民層」の遺跡であること等の遺跡の有する性質に起因するのではないかと考えている。ただ、今回報告の平安山Aでも明らかのように、リュウキュウシラトリ等の内湾の二枚貝類の割合が高くなっていることも認められており、全く農耕従事に伴う海域の貝類採集活動に変化がなかったという訳ではない。

穀類農耕開始期の小堀原遺跡から抽出された例では、粟が大半を占めており(高宮・千田, 2012)、水田稲作は時期的に後続するようである。後兼久原等のグスク時代層では、淡水性のヌノメカワニナが大量に出土しており、報告者は「水イモ栽培に伴うものではないか」と考えた(黒住, 2003b)。その後の詳細なデータでも、本地域ではカワニナ類は貝塚時代前2期から抽出されているものの、その中にはヌノメカワニナは含まれておらず(黒住, 2007a)、沖縄諸島へは早ければ貝塚時代前4期に南から持ち込まれた可能性を指摘した(黒住, 2007c)。この考えでも、沖縄の先史社会の生活様式を激変させるものでなかったことも議論し、高宮・新里(2013)も同様な取扱いをしている。本地域においては、ヌノメカワニナで想定した水イモ水田から、水田稲作への変換の時期は未だ明瞭ではなく、この点ではマルタニシがメルクマールになるのではと考えているが(黒住, 2002)、未だ詳細な時期を示せていない。

### 開墾に伴う海域環境変化

今回対象としている時代の中では、上述のグスク時代の穀類農耕開始と近世中後期の屋取による開墾により、土壌の流出が生じ海域に土砂の堆積するという影響が考えられる。後者に関しては、近世中後期の屋取集落が台地上に入植し、その開墾の結果、土壌流出の生じたことが発掘で確認されている(中村, 2007, p. 34-35)。これまでに示してきたように、サンゴ礁のマガキガイや体内共生藻の光合成産物を利用しているシャコガイ類やカワラガイでもグスク時代から近代まで激減している訳ではないことから、少なくともサンゴ礁に壊滅的なダメージを与えていないと考えている。ただ、近世・近代に内湾の種が優占種となっていることの要因の一つは、土砂流出によるイノー内の

環境変化（泥の堆積等）とも考えられる。

#### d) 社会・“政治体制”の変化

貝交易と農耕の問題を前述したが、それ以外の出土貝類を通してみた社会の変化と想定される事象にも簡単に触れておきたい。

#### ア. 先史時代

本地区では九州から曾畑式土器をもたらしたヤマトの集団の渡来が想定される。ヤマトの縄文時代前期ではハマグリやカキ等の内湾の貝類を利用する場合がほとんどであり、外海岩礁域の貝類利用例はほとんど知られていない。しかし、伊礼原遺跡では、サンゴ礁の干瀬等の岩礁域の貝類が優占種となっており、ヤマトからの渡来集団があったとしても、同地の伝統的な干潟の貝類利用からかなり早くサンゴ礁の貝類を食用に利用するように転換したと考えられる。

貝塚時代後1期前半から後2期前半に、遺跡ごとに異なるが、イソハマグリが増加が認められた。筆者はこの現象が海域環境の起因するものではなく、理由・状況は不明だが、出汁の利用としての食生活の変化により本種が増加したのではないかと想定している。

#### イ. グスク時代初期の貝類の少なさ

陶磁器等の人工遺物では、貝塚時代からグスク時代の変換期を示すことはできつつあるが、貝類遺体を含むある程度の厚層を持つ良好な包含層・遺構は沖縄諸島ではほとんど知られておらず、本地域でも同様であった。これは発掘精度の問題ではなく、廃棄・堆積にかかわっている事象であろう。堆積時間の短さも想定されるが、“魚介類の利用が低調で、廃棄の絶対量が少なかった”という可能性も想定されよう。穀類農耕を行っていた訳であり、周年定住であったことは確かだと考えられ、貝塚時代とは生活様式が激変していたのかも知れない。

#### ウ. グスク時代・近世・近代の貝類利用の在り方

本地域で興味深い点のひとつとして、一箇所でグスク時代から近代の遺跡が連続して発掘されたことが挙げられる。平安山Aでは、グスク～近世とされたものが22地区のうち7地区と1/3を占めており、出土個体数も比較的多かった（黒住, 2016）。その優占種はマガキガイやリュウキュウシラトリであり、これまで示してきたものと極めて大きな相違はないと判断している。詳細な考古年代は分割されていない訳であるが、逆にみると、“連続的な地点も多い”と理解することも可能であろう。グスク時代と近世を区分するのは、1609年の「薩摩の琉球入り」であり、琉球王国の社会体制、さらには地方の庶民層へも年貢等の形態で大きな変化の生じたことは多くの研究で明らかになっている。しかし、両時代の貝類遺体組成の変化が明瞭でなく、また貝類廃棄も連続する可能性があることから、少なくとも本地域の貝類採集活動では、グスク時代から近世にかけての変化は劇的でなかったとも考えられる。

同様に、近世から近代にかけても、貝類遺体の組成変化は明瞭ではなかった（第103表）。むしろ、近世・近代の優占種のバラツキは、もしかすると、“各家庭の相違”を示しているのかもしれない。一方で平安山Aの集落域では貝類遺体は比較的多く、海域を利用する生活であったこともわかった。

近世遺跡では、沖縄島南部の垣花遺跡の近世期土坑ではマガキガイが60%を超え、貝塚時代後期やグスク時代のカンギクやアラスジケマンの優占する組成とは大きく異なっており、“ヤコウガイ漁”を含む漁撈活動が中心であったと想定した例もある（黒住, 2008）。漁民と伊平地区で示してきた農耕民の貝類利用の相違、さらには内陸部の農耕民の貝類利用との比較等、今後も各地で庶民層の貝類を含む動植物遺体の詳細な検討により、文献だけでは知り得なかった生活の実態がより明らかになっていくものと考えられる。本地域での結果は、今後の沖縄での研究に大きく寄与するものと言

えよう。

本報告の一部には、科学研究費（15H05966、代表：金原正明；15K02990、代表：樋泉岳二）を用いた。

#### <引用文献>

- 北谷町（編）. 2005. 伊礼原C遺跡保全整備基本構想策定業務報告書. 51+11.
- 安座間寛. 2011. 貝塚時代琉球列島の交流・交易史—列島南縁の島嶼世界にみる交流の風景—. In 高宮広士・伊藤慎二（編）, 先史・原始時代の琉球列島〜ヒトと景観〜, 189-216. 六一書房.
- 片桐千亜紀（編）. 2004. 後兼久原遺跡, 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書, (22): 1-198, 6 pls.
- 木下尚子. 1989. 南海産貝輪交易考. In 横山浩一先生退官記念事業会（編）, 生産と流通の考古学. 203-249. 横山浩一先生退官記念論文集刊行会, 福岡.
- 黒住耐二. 1997. 沖縄県具志原貝塚出土の貝類遺存. In 岸本義彦（編）, 伊江島具志原貝塚発掘調査報告書, 沖縄県文化財調査報告書, (130): 195-223.
- 黒住耐二. 2002. 貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活. In 木下尚子（編）, 先史琉球の生産と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—, 67-86. 熊本大学文学部.
- 黒住耐二. 2003a. 貝類遺体. In 山城安生・島袋春美（編）, 後兼久原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (21): 264-268.
- 黒住耐二. 2003b. 沖縄における貝類遺体からみた湿地堆積物の検討—後兼久原遺跡のコラムサンプリング調査—. In 山城安生・島袋春美（編）, 後兼久原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (21): 401-405.
- 黒住耐二. 2003c. 貝類遺体. In 山城安生・島袋春美（編）, 大作原古墓群, 北谷町文化財調査報告書, (22): 163-171.
- 黒住耐二. 2006. 琉球列島において絶滅した完新世ハイガイ類（軟体動物門：二枚貝綱）の分類学的検討と生存年代. 千葉中央博自然誌研究報告, 9(1): 24-30.
- 黒住耐二. 2007a. 貝類遺体からみた伊礼原遺跡. In 中村 暉（編）, 伊礼原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (26): 535-555.
- 黒住耐二. 2007b. 沖縄島固有種の陸産貝類アマノヤマタカマイマイの完新世における分布域の縮小. 沖縄生物学会誌, (45): 57-60.
- 黒住耐二. 2007c. 胎生淡水産貝類からみた先史時代の沖縄諸島における根栽農耕の可能性. 南島考古, (26): 121-132.
- 黒住耐二. 2008a. 伊礼原D遺跡から出土した貝類遺体. In 東門研治・島袋春美（編）, 伊礼原D遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (28): 168-183, 197-200.
- 黒住耐二. 2008b. 垣花遺跡から得られた貝類遺体. In 城間宣子（編）, 垣花遺跡, 南城市文化財調査報告書, (3): 98-113, 180-185.
- 黒住耐二. 2009. 小堀原遺跡から出土した貝類遺体. In 東門研治・島袋春美（編）, 小堀原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (30): 201-212.
- 黒住耐二. 2010. 伊礼原E遺跡から得られた貝類遺体. In 山城安生・島袋春美（編）, 伊礼原E遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (31): 41-56.
- 黒住耐二. 2011. 琉球先史時代人とサンゴ礁資源：貝類を中心として. In 高宮広士・伊藤慎二（編）, 先史・原始時代の琉球列島〜ヒトと景観〜, 87-107. 六一書房.
- 黒住耐二. 2012. 小堀原遺跡の貝塚時代後期層から出土した貝類遺体. In 山城安生・島袋春美（編）, 小堀原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (34): 335-348.
- 黒住耐二. 2013. ナガラ原東貝塚の貝類遺体. In 木下尚子（編）, ナガラ原東貝塚の研究, 340-362. 熊本大学文学部.

- 黒住耐二. 2014a. 伊礼原遺跡(国指定外)・伊礼原A遺跡の調査で得られた貝類遺体. 伊礼原遺跡(国指定外)・伊礼原A遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (36): 397-428.
- 黒住耐二. 2014b. 貝類遺体からみた沖縄諸島の環境変化と文化変化. In 高宮広土・新里貴之(編), 琉球先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究, 研究論文集, 第2集, 琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷, 55-70. 六一書房.
- 黒住耐二. 2015. 平安山原B遺跡の調査で得られた貝類遺体. In 島袋春美(編), 平安山原B遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (37): 388-404.
- 黒住耐二. 2016. 平安山原A遺跡の調査で得られた貝類遺体. In 島袋春美(編), 平安山原A遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (38): 408-423. 北谷町教育委員会, 沖縄.
- 松田順一郎. 2007. 伊礼原遺跡砂丘区の堆積物・埋没地形と中央区・南区にみられた古地震痕跡. In 中村 恵(編), 伊礼原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (26): 44-60.
- 中村 恵(編). 1989. 伊礼原B遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (8): 1-54, 24 pls.
- 中村 恵(編). 2007. 伊礼原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (26): 1-573.
- バリノ・サーヴェイ. 2014. 伊礼原遺跡・伊礼原A遺跡の自然科学分析. 伊礼原遺跡(国指定外)・伊礼原A遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (36): 429-437.
- 島袋春美. 2008. 貝類遺体. In 東門研治・島袋春美(編), 平安山原B遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (29): 104-114.
- 島袋春美. 2010. 貝製品. In 山城安生・島袋春美(編), 伊礼原E遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (31): 261-323. 巻頭図版22.
- 島袋春美(編). 2014. 伊礼原遺跡(国指定外)・伊礼原A遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (36): 1-459.
- 新里貴之. 2001. 物流ネットワークの一側面-南西諸島の弥生系遺物を素材として-. 南島考古, (20): 49-66.
- 高宮広土・千田寛之. 2012. 小堀原遺跡出土の植物遺体. In 山城安生・島袋春美(編), 小堀原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (34): 349-358.
- Takamiya, H., M. J. Hudson, H. Yonenobu, T. Kurozumi and T. Toizumi. 2015. Extraordinary case in human history: Prehistoric hunter-gatherer adaptation to the islands of the Central Ryukyus (Amami and Okinawa Archipelagos), Japan. The Holocene. / DOI: 10.1177/0959683615609752
- 高宮広土・新里貴之. 2013. 琉球列島貝塚時代における社会組織の変化, 古代文化, 64(4): 98-110.
- 樋泉岳二. 2010. 伊礼原E遺跡出土の脊椎動物遺体. In 山城安生・島袋春美(編), 伊礼原E遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (31): 57-79.
- 樋泉岳二. 2012. 小堀原遺跡2008～2009年度調査で採集された脊椎動物遺体. In 山城安生・島袋春美(編), 小堀原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (34): 322-334.
- 樋泉岳二. 2008. 伊礼原D遺跡第3・4トレンチ出土の脊椎動物遺体. In 東門研治・島袋春美(編), 伊礼原D遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (28): 184-196, 202.
- 樋泉岳二. 2012. 小堀原遺跡2008～2009年度調査で採集された脊椎動物遺体. In 山城安生・島袋春美(編), 小堀原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (34): 322-334.
- 山城安生・島袋春美(編). 2003. 後兼久原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (21): 1-413, 6 pls.
- 山城安生・島袋春美(編). 2012. 小堀原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (34): 1-387.

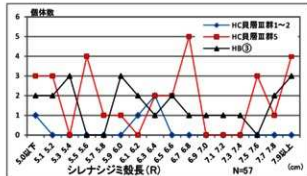
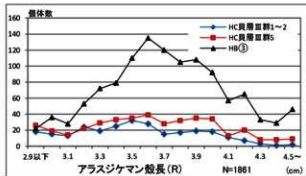
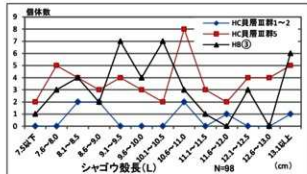
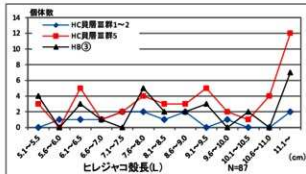
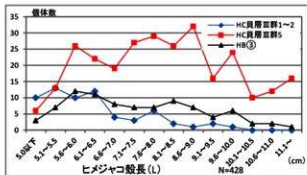
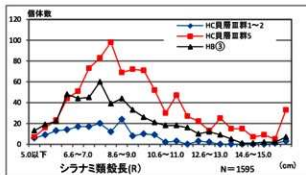
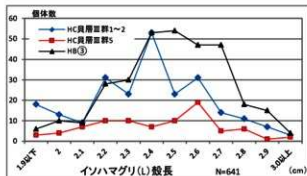
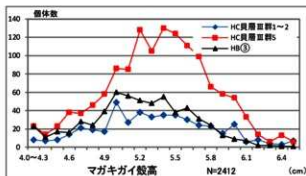
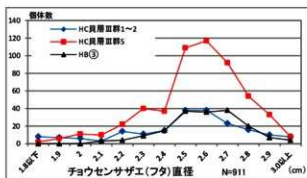
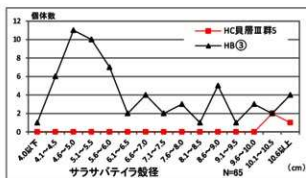
第103表 平安山原C遺跡・B遺跡の新規報告分およびA遺跡の近世以降の優占種.

地区名等	平安山原C										平安山原B										平安山原A(近世以降で確実なもの)																																																					
	貝層Ⅲ群					貝層Ⅱ群					①		②		③		④		イ		ヌ		リ		ト		チ																																															
	下部:貝層後期 【大島原】		上部:貝層後期 【7かシヤンガー】			貝層後期 【7かシヤンガー】		貝層後期 【大島原】		貝層後期 【大島原】		貝層後期 【大島原】		近世/SK32		近世		近世		近代		近代~		近代~																																																		
N=35745		%			N=82459		%		N=3565		%		N=4588		%		N=15882		%		N=1641		%		N=1904		%		N=2032		%		N=893		%		N=955		%		N=4988		%																															
サンゴ礁域/岸前潮間帯(I-1)															サンゴ礁域/岸前潮間帯(I-1)																																																											
イノハマグリ	13288	37.2	2388	7.8	49185	59.8	205	5.8	317	6.9	573	3.7	27	1.8	52	2.7	4	0.2	5	0.7	9	0.9	34	0.7																																																		
サンゴ礁域/イノ内(I-2)															サンゴ礁域/イノ内(I-2)																																																											
マガキガイ	3488	9.8	3147	10.2	8224	10.0	612	17.2	973	21.2	2868	18.3	164	10.0	506	23.3	876	4.3	170	24.5	175	18.3	794	16.0																																																		
クモガイ	733	2.1	932	3.0	1290	1.9	346	9.7	401	6.7	1455	9.3	79	4.8	72	3.8	114	5.9	24	3.5	65	6.8	78	1.8																																																		
シナミズミ	2296	6.4	3856	12.5	1835	2.2	593	16.8	699	15.2	1804	11.5	115	7.0	69	3.8	37	1.8	16	2.3	19	2.0	14	0.3																																																		
ヒシヤコ	402	1.1	1063	3.5	443	0.5	100	2.8	18	0.4	188	1.2	28	1.7	45	2.4	14	0.7	11	1.8	12	1.3	11	0.2																																																		
シヤコウ	210	0.6	351	1.1	243	0.3	92	2.8	90	2.0	217	1.4	12	0.7	17	0.9	10	0.5	1	0.1	0	0.0	5	0.1																																																		
中形イモガイ類*2	728	2.0	373	1.2	3460	4.2	186	5.2	126	2.7	394	2.5	12	0.7	28	1.5	22	1.1	7	1.0	10	1.0	52	1.0																																																		
ヤナギシボリイモ	199	0.6	319	1.0	314	0.4	24	0.7	38	0.8	119	0.8	4	0.2																																																												
アンボンクワフ	188	0.5	278	0.9	251	0.3	71	2.0	68	1.5	223	1.4	23	1.4	7	0.4	5	0.2	6	0.9	26	2.7	46	0.9																																																		
オノノソガイ*3	123	0.3	161	0.5	740	0.9	45	1.3	95	2.1	290	1.8	26	1.8	31	1.8	106	5.2	23	3.3	15	1.8	74	1.5																																																		
イトマキホウ	153	0.4	215	0.7	296	0.4	48	1.3	58	1.3	199	1.3	27	1.8	27	1.4	22	1.1	9	1.3	7	0.7	19	0.4																																																		
寛珠貝類*4	185	0.5	455	1.5	805	1.0	2	0.1	3	0.1	48	0.3	3	0.2	13	0.7	0	0.0	0	0.0	3	0.3	4	0.1																																																		
サンゴ礁域/干瀬(I-3)															サンゴ礁域/干瀬(I-3)																																																											
フウセンサザエ	483	1.4	1539	5.0	1234	1.5	74	2.1	96	2.1	483	3.1	72	4.4	110	5.8	71	3.5	25	3.8	6	0.8	29	0.8																																																		
サンゴ礁域/礁斜面(I-4)															サンゴ礁域/礁斜面(I-4)																																																											
ササハマイワ	826	2.3	2687	8.7	1830	2.2	186	5.2	222	4.8	901	5.7	130	7.9	172	9.0	58	2.9	20	2.9	23	2.4	56	1.1																																																		
内海域(II)															内海域(II)																																																											
ガラガイ	465	1.3	472	1.5	847	0.8	36	1.0	104	2.3	478	3.0	118	7.2	101	5.3	16	0.8	28	3.8	31	3.2	142	2.9																																																		
ホリスジイモ	440	1.2	257	0.8	414	0.5	15	0.4	53	1.2	500	3.2	68	4.1	40	2.1	26	1.3	14	2.0	22	2.3	88	1.8																																																		
リュウキュウシラトリ	65	0.2	308	1.0	194	0.2	6	0.2	29	0.6	170	1.1	68	4.1	64	2.9	65	3.2	36	5.2	117	12.3	1630	32.8																																																		
リュウキュウマスホ	220	0.6	247	0.8	483	0.6	40	1.1	42	0.9	191	1.2	40	2.4	41	2.2	33	1.8	13	1.9	23	2.4	113	2.3																																																		
マスガイ	120	0.3	240	0.8	194	0.2	7	0.2	25	0.5	173	1.1	66	4.0	140	7.4	27	1.3	55	7.9	107	11.2	150	3.0																																																		
リュウキュウサルボホ	288	0.8	412	1.3	160	0.2	71	2.0	71	1.5	250	1.8	23	1.4	55	2.9	37	1.8	24	3.5	32	3.4	91	1.8																																																		
ヌノガイ	367	1.0	443	1.4	457	0.6	43	1.2	56	1.2	300	1.9	14	0.8	84	4.4	114	5.9	38	5.5	26	2.7	111	2.2																																																		
河口干瀬-マングローブ域(III)															河口干瀬-マングローブ域(III)																																																											
アラシヤマン	1186	3.3	1021	3.3	1271	1.5	314	8.8	593	12.9	2099	13.4	341	20.8	33	1.7	41	2.0	3	0.4	14	1.5	40	0.8																																																		
陸域(V)															陸域(V)																																																											
ハンダナマイイ*5	73	0.2	15	0.0	1269	1.5	0	0.0	5	0.1	24	0.2	1	0.1	79	4.1	2	0.1	3	0.4	0	0.0	0	0.0																																																		
40% ≤															20% ≤ < 40%															10% ≤ < 20%															5% ≤ < 10%															2% ≤ < 5%														

\*1: [ ]内は想定される土器型式。\*2: 平安山原(A)では中形イモガイ類とヤナギシボリイモを含めた種。\*3: 平Aではオノノソガイ科一括で、もしかするとウミニナ類も含まれている可能性がある。

\*4: クロチョウガイ・アコヤガイ・ミドリアオリ・ウグイスガイ科を全て含めた種。\*5: 平Aでは陸産貝類全体の値。





第189図 平安山原B・C遺跡から得られた優占種のサイズ組成変化

第104表 キャンプ桑江北側地区における各遺跡出土海産貝類遺体の時代別変遷(暫定)

時代	土器形式等	地点数	貝類出土量	主な遺跡等と優占貝類
近代～戦前	[戦前]	普通	居住域:多 その他:少	平安山原Bb/II層/サータナ(少:マガキガイ・シヤコガイ類)
				伊礼原D/4-7/戦前遺構(少:マガキガイ,カワラガイ)
				?平安山原Ba/②層(少:イノハマグリ,マガキガイ)
	[近代]			?伊礼原(指定外)II層(普:マガキガイ・シヤコガイ)
近世				平安山原A/ト・チ(普通:マガキガイ・内湾域)
				平安山原A/リ(普通:マガキガイ・内湾域)
				平安山原Bc/④(普通:マガキガイ・内湾域)
				平安山原A/イ・ヌ(普通:マガキガイ・内湾域)
				伊礼原D/前半?4-7・8(普:マガキガイ,マオカガイ) 後半?4-9・10(少:マガキガイ,カワラガイ)
グスク時代の主体期	13-16世紀	多	居住域:多 その他:少	伊礼原E/集石(稀:マコガイ)
				伊礼原E/第三期(少:マガキガイ)
				伊礼原/?少:リュウキョウシラトリ・ウニナ類
				伊礼原D/4-5・6(多:マガキガイ,内湾域)
				伊礼原(指定外)/III層(多:マガキガイ・シヤコガイ)
グスク時代初期	掘立建物址/ 3点セット	少	稀?	伊礼原E/第一期(稀?:マガキガイ)
				伊礼原E/第二期(多:マガキガイ・ウニナ類)
				伊礼原E/第一期(稀?:マガキガイ)
貝塚時代後2期後半	くびれ平底土器期(フエサ下層土器期)	稀?	少?	小堀原(極稀?)
				伊礼原E/第一期(稀?:マガキガイ)
貝塚時代後2期前半	くびれ平底土器期(アサシヤカ'式土器期)	普通	普通	伊礼原E/第一期(稀?:マガキガイ)
				伊礼原E/第二期(多:マガキガイ・ウニナ類)
貝塚時代後1期後半	大当原式土器期	多	極多	伊礼原E/第二期(多:マガキガイ)
				伊礼原E/第三期(多:マガキガイ・シヤコガイ)
				伊礼原E/第二期(多:マガキガイ)
				伊礼原E/第三期(多:マガキガイ・シヤコガイ)
				伊礼原E/第三期(多:マガキガイ・シヤコガイ)
				伊礼原E/第三期(多:マガキガイ・シヤコガイ)
				伊礼原E/第三期(多:マガキガイ・シヤコガイ)
貝塚時代後1期前半	浜屋原式土器期	多	多	伊礼原E/第三期(多:マガキガイ・シヤコガイ)
				伊礼原E/第三期(多:マガキガイ・シヤコガイ)
				伊礼原E/第三期(多:マガキガイ・シヤコガイ)
				伊礼原E/第三期(多:マガキガイ・シヤコガイ)
				伊礼原E/第三期(多:マガキガイ・シヤコガイ)
貝塚時代後1期初期	阿波速連下層式土器期	少	普通	伊礼原E/第三期(多:マガキガイ・シヤコガイ)
				伊礼原E/第三期(多:マガキガイ・シヤコガイ)
貝塚時代前3期	[3-4期]	稀	普通?	伊礼原E/第三期(多:マガキガイ・シヤコガイ)
	面縄前庭式土器期	稀	少	伊礼原E/第三期(多:マガキガイ・シヤコガイ)
貝塚時代前2期後葉?	室川下層式土器期?	稀	稀?	伊礼原E/第三期(多:マガキガイ・シヤコガイ)
貝塚時代前2期中葉	曾畑式土器期	稀	普通	伊礼原E/第三期(多:マガキガイ・シヤコガイ)

?は不確実なもの: 文献: 伊礼原E(黒住2003a), 伊礼原E(黒住2003b), 伊礼原E(黒住2009,2012), 伊礼原E(黒住2010), 伊礼原A(黒住2014a), 伊礼原(指定外)(黒住2014a), 伊礼原(黒住2007a), 伊礼原D(黒住2008), 平安山原C(本報告), 平安山原Ba(島袋2008), 平安山原Bb(黒住2015), 平安山原Bc(本報告), 平安山原A(本報告), 大作原古墓(黒住2003c).

第105表 平安山原BおよびC遺跡出土貝類遺体の分類学的位置と生息場所類型

和名	学名	生息場所 環境 類型	図説 番号	和名	学名	生息場所 環境 類型	図説 番号
軟体動物門 Mollusca				リュウキュウヘビガイ	Serpicorbis trimereurus	I-2-a	74
腹足類 Gastropoda				ヘビガイ類	"Serpicorbis" sp.	I-2-a	75
<b>ツタノハ科 Patellidae</b>				<b>スズメガイ科 Hipponioidae</b>			
オオツタノハ	Scutellaster optima		VI	アツキスズメ	Sabia acuta	I-3-a	76
ツタノハ	Scutellaster flexuosus	I-3-a		<b>タカラガイ科 Cypraeidae</b>			
<b>ヨメガサ科 Nacellidae</b>				ヘビツタノハ	Cypraea (Monasteria) moneta	I-1-a	78
オホツツウガサ	Cellana testudinaria	I-1-a		ヘビツタノハ	Cypraea (Monasteria) annulus	I-1-a	
<b>ユキノサ科 Littididae</b>				コムダガカ	Cypraea (Erosaria) eros	I-2-b	
リュウキュウワノアシ	Patelloida saccharina	I-1-a	4	ナツモドネ	Cypraea (Erosaria) eros	I-2-b	
<b>ミミガイ科 Haliotidae</b>				ハナマルユキ	Cypraea (Fav.) capuscaperitis	I-3-a	
ミミガイ科の一種	Haliotidae gen. et sp.		I	ヤクシムダガカ	Cypraea (Arabis) arabica	I-2-a	
<b>スカンガイ科 Fissurellidae</b>				ホソヤウシメダガカ	Cypraea (Arabis) eglantina	II-2-a	84
スカンガイ科の一種	Fissurellidae gen. et sp.		I	ホシダガカ	Cypraea (s.s.) tigris	I-2-c	85
リュウキュウ科 Turboidae				ヒメツタノハ	Cypraea (Lycina) lynx	I-2-b	
コムダガサゼ	Turbo (Marna) stercorum	I-2-a	8	ホシキヌタ	Cypraea (Mystacopoda) vitellus	I-2-a	
チョウセンサザエ	Turbo (Marna) angustatus	I-3-a		ハラダガカ	Cypraea (Leptocypraea) mappa	I-4-a	
リュウテン	Turbo (Turbo) petholatus	I-4-b		<b>ウミウサギ科</b>			
ヤコウガイ	Turbo (Lunatia) mamoratus	I-4-a	12	ウミウサギ	Ovula ovum	I-2-a	
カンクウ	Lunella moniliformis	II-1-b		<b>タマガイ科 Naticidae</b>			
オオウラツス	Astralinum rhodostoma	I-2-a	16	トガイ	Palinurus tumidus	I-2-c	91
<b>ニシキウズ科 Trochidae</b>				ヘビノキトシガイ	Palinurus flemingianus	I-2-c	
ニシキウズ	Trochus (Trochus) maculatus	I-2-a	8	リスガイ	Maremma melanostoma	I-2-c	
ギンタカハマ	Trochus (Tectus) pyramis	I-4-a		ネズミガイ	Maremma siniae	I-2-c	
コムダギンタカハマ	Trochus (Tectus) triseriatus	I-4-a	19	ホウシュノタマ	Notochelonic gaultiana	II-1-c	
サラサトビウラ	Trochus (Rochia) nitidus	I-4-a	20	<b>ヤウシロガイ科 Tonnoidea</b>			
オキナフシダタミ	Mondatia labio	II-1-b	21	トナ	Tonna perdas	I-2-c	
<b>アマオホネ科 Neritidae</b>				スズクズフ	Tonna opa	I-2-c	98
コムダガサゼ	Nerita (Rena) striata	I-1-b		ヒメツタノハ	Melae (Guinea) ponum	II-2-c	99
キマヤマガイ	Nerita (Rena) plicata	I-0-a	23	<b>フジツガイ科 Ranellidae</b>			
フスシアマガイ	Nerita (Rena) costata	I-0-a		フジツガイ	Cyathium (Lotaria) lotarium	I-4-a	101
アマオホネ	Nerita (Thelyostyla) abicula	I-1-b		ミツカボラ	Cyathium (Mon.) ricobaricum	I-2-a	102
マルヤマオホネ	Nerita (Thelyostyla) squamata	II-1-b	26	サツマボラ	Cyathium (Monoplex) aquatile	I-2-a	103
オオマルヤマオホネ	Nerita (Thelyostyla) chameleon	I-1-b	27	シノマキ	Cyathium (Monoplex) pilare	I-4-a	104
ヒコヤマオホネ	Nerita (Thelyostyla) planipora	II-0-e		シヨウボク	Cyathium (Gul.) munitum	I-2-a	105
ニホキアオホネ	Nerita (Anaplectaria) gulfia	I-1-c		<b>オオノコガイ</b>	Cyathium (Ruschia) yema (Linnaeus, 1758)	I-4-a	106
カノコイ	Cithon soewhianus	II-0-e		ホウガイ	Charmia tritona	I-4-a	107
イガコ	Cithon corona	IV-5	31	<b>オネニシ科 Buridae</b>			
ムラクモカノコ	Neritina variegata	IV-5		オネニシ	Bursa (s.s.) bufois dunkeri	I-3-a	
シノカ	Neritina (Vittina) tumita	III-0-e	33	シウクナルトボラ	Tufufa rebeta	I-4-a	
トビウカノコ	Neritina plumbea	IV-5		オオナルトボラ	Tufufa bulo	I-4-a	110
フスアノコイ	Septaria porcellana	IV-5	35	トボラ	Tufufa bulo	I-4-a	
<b>タニシ科 Viviparidae</b>				<b>アツキガイ科 Muricidae</b>			
マルタン	Chapanopeludina chinensis	IV-6		チココス	Cicoreus burmeus	I-2-a	
<b>ヤマタニシ科 Cyclophoridae</b>				チココス	Cicoreus ramosus	I-4-a	114
オキナフヤマタニシ	Cyclophorus turgidus	V-8		チブレイシ	Thais (Stramonita) savignyi	I-1-a	
<b>オニノツガイ科 Cerithiidae</b>				コウモシ	Thais (Serrinucula) squamosa	II-1-a	116
オニノツガイ	Cerithium (Cerithium) modulosum	I-2-c	39	シラクモガイ	Thais (Stramonita) armigera	I-3-a	117
ハンナツツガイ	Cerithium rostratum	II-2-c	40	ツルムツシ	Mancinella hippocastanum	I-1-a	
トウガカニコ	Rhododiscus sinensis	I-2-c	41	ツルムツシ	Mancinella tuberosa	I-3-a	119
クノカニコ	Clypeomorus chemnitziana	I-1-b	42	コボテツルムツシ	Mancinella intermedia	I-3-b	120
カヤノカニコ	Clypeomorus bifasciata	I-1-b	43	ウネレイシダガカ	Conia margaritella	I-1-b	121
イウノカニコ	Clypeomorus batillariaefomis	II-1-b	44	ヨウクウレイシダガカ	Conia fucella	I-2-a	122
<b>ヘナダリ科 Cerithiidae</b>				レイシダガカ	Morus granulata	I-1-a	123
ヘナダリ	Cerithidea (Cerithiopsis) cingulata	II-1-c		レイシダガカ	"Conia" sp.		
フヘナダリ(小ホナ)	Cerithidea (Cerithiopsis) merchii	II-0-d		ハナツルムツシ	Nassa vesulum	I-3-a	125
セウノコ	Tekapoanus tekapoanus	I-2-c	47	ムツギキイレイシ	Drapa (s.s.) morum	I-3-a	108
マドモチウミナ	Tembora sulcata	II-1-c	48	シロガレイシ	Drapa ricinus abobolus	I-3-a	109
キハウミナ	Tembora parviter	II-1-c		アカイレイシ	Drapa (Scintilla) rubusoides	I-3-a	
<b>ウミナシ科 Batillariidae</b>				ホソジツツボウ	Purpura persica	I-1-a	129
リュウキュウウミナ	Batillaria flectosiphonata	II-1-c	50	<b>オニコシ科 Vasidae</b>			
イボウミナ	Batillaria zonalis	II-1-c		オニコシ	Vasum ceranicum	I-3-a	131
<b>ゴマフナシ科 Planaxidae</b>				ニオコシ	Vasum turbellum	I-2-a	
ゴマフナシ	Planaxis sulcatus	I-0-a		<b>フトコロガキ科 Columbellidae</b>			
<b>トウガタカワニ科 Thiaridae</b>				フトコロガイ	Epifra vesicolor	II-2-a	133
トウガタカワニ	Thais scabra	IV-5-6		<b>エソバ科 Buccinidae</b>			
シノカワニ	Melanodius tuberculata	I-4-b		シノガイ	Engina (Pusiostoma) medicata	I-1-a	134
スグカワニ	Stenomelania uniformis	IV-6	56	シノガイ	Engina (Pusiostoma) medicata	I-1-a	135
ヨシカワニ	Stenomelania plicaria	IV-6	57	シノガイ	Japhethia cingulata	II-1-b	135
イボヤカワニ	Tarbia granifera	IV-6		<b>オリイレイシ科 Nassariidae</b>			
<b>カワニ科 Plicuroceridae</b>				ヒメオレイシムシロ	Nassaricus sp. of nodifer	I-2-c	136
カワニ	Serrisulcopira benozii	IV-5-6	59	アムシロ	Nithea semiaulata	I-1-b	137
<b>スイシヨガイ科 Strombidae</b>				アムシロ	Notha albescens	I-2-b	
ムシシヨガイ	Strombus (Canarium) mutabilis	I-2-c		<b>イトマキボラ科 Fascioliidae</b>			
フスシヨガイ	Strombus (Canarium) labiatum	II-2-c		イトマキボラ	Pleurocloa trapezium	I-2-b	
オハグロガイ	Strombus (Canarium) ureum	II-2-c	62	ナガイトマキボラ	Pleurocloa filamentosa	I-2-a	140
ネジマキガイ	Strombus (Gibberulus) g. gibbosus	II-1-c		ベニマキ	Berenikia festiva	I-2-a	141
マダキガイ	Strombus (Comorus) luhuanus	I-2-c	64	ツツマドモネ	Litulus balchii	I-3-a	142
イボツツガイ	Strombus (Lentigo) lentiginosus	I-2-c		リュウキュウツツマダ	Litulus polytronus	I-3-a	143
マノノチガイ	Strombus (Eugomphus) australis Linnaeus, 1758	I-4-c		マノノチ	Muccozona sinuoplicata	I-1-a	
アツツガイ	Strombus (Tricornis) theristes	I-4-c		ナトボラ	Fusinus nicobariensis	I-2-c	
ゴホウ	Strombus (Tricornis) laticostatus	I-4-c		<b>マクガイ科 Olividae</b>			
クモガイ	Lambis lambis	I-2-c	69	マクガイ	Olivia annulata	I-2-c	148
ラダガカ	Lambis truncata sebae	I-4-c	70	フヂガイ	Mitra mitis	I-2-c	
スズギガイ	Nerapa chirsiga	I-2-c		フヂガイ	Pterygia dactylus	I-1-b	148
<b>ムカサガイ科 Vermetidae</b>				<b>ムシシヨガイ科 Costellariidae</b>			
フタモチヘビガイ	Dendropoma maximum	I-2-a	73	オオシノムシガイ	Vexillum plicarium	II-2-c	150

和名	学名	生息場所 階級 番号	和名	学名	生息場所 階級 番号
<b>イモガイ科 Conidae</b>					
マサリキ	<i>Conus (Viroconus) abraeus</i>	I-1-a	ツキガイ	<i>Codakia sigera</i>	I-2-c 24
サヤガイタモ	<i>Conus (Viroconus) fulgurum</i>	I-1-a 152	クヂキツネガイ	<i>Codakia punctata</i>	I-2-c
ジュズガサヤガイタモ	<i>Conus (Viroconus) coronatus</i>	I-1-a 153	ウラツキガイ	<i>Codakia papyronum</i>	II-2-c
イボシマイモ	<i>Conus (Virgiconus) lividus</i>	I-2-a 154	ヒメツキガイ	<i>epidokia bella</i>	I-2-c
イボカイモ	<i>Conus (Virgiconus) distans</i>	I-2-c	カブラツキガイ	<i>Andorita edentula</i>	II-2-c 28
ヤキヤンボリイモ	<i>Conus (Rhizoconus) miles</i>	I-3-a 156	カゴイモ	<i>Fimbria soerbei</i>	II-2-c 29
ササヤシイモ	<i>Conus (Rhizoconus) capitatus</i>	I-4-b 157	<b>トマサガイ科 Cardiidae</b>		
イタチモ	<i>Conus (Rhizoconus) mustelinus</i>	I-4-b	カドヒメ	<i>Cardita leana</i>	II-1-a 30
カミナシ	<i>Conus (Rhizoconus) vexillum</i>	I-4-b 159	<b>キウザル科 Chamidae</b>		
ヤキモ	<i>Conus (Pinoconus) magus</i>	I-2-c	シロザル	<i>Chama brassica</i>	I-4-a 31
サササモドキ	<i>Conus (Dascioconus) vitellus</i>	I-2-c 161	ヒレインコ	<i>Chama lazarus</i>	II-2-b
ヒコナキモ	<i>Conus (Dascioconus) planorbis</i>	I-2-c 162	キウザル	<i>Chama sp.</i>	II-2-a
アソコモ	<i>Conus (Darioconus) perroncetii</i>	II-2-c	<b>ザルガイ科 Cardidae</b>		
タダヤシナシ	<i>Conus (Darioconus) textile</i>	I-2-c	リュウキュウザルガイ	<i>Vasticardium flexum</i>	II-2-c
ニシキナシ	<i>Conus (Streoconus) striatus</i>	I-2-c 165	カワウガイ	<i>Fragum ungu</i>	II-2-c 35
アンボイナ	<i>Conus (Gastriidium) geographus</i>	I-2-c	オオヒシヤク	<i>Fragum fragum</i>	I-2-c
シロアンボイナ	<i>Conus (Gastriidium) tulpa</i>	I-2-c 167	<b>シヤコガイ科 Tridacnidae</b>		
タンゴウクワミナシ	<i>Conus (s.s.) maromorus</i>	II-2-c 168	シヤクミ	<i>Tridacna maxima &amp; rosea</i>	I-2-a 37
ヒメシヤク	<i>Conus (Rhoebus) imperialis</i>	I-2-c 169	ヒレシヤク	<i>Tridacna squamosa</i>	I-2-c 38
アサシヤク	<i>Conus (Leptoconus) anemalis</i>	I-2-c	ヒメシヤク	<i>Tridacna crocea</i>	I-2-a
ナガササミナシ	<i>Conus (Leptoconus) litoglyphus</i>	I-2-c 171	シヤゴウ	<i>Hippopus hippopus</i>	I-2-c 40
ゴマフモ	<i>Conus (Puncticulatus) pulcherrus</i>	I-2-c	シヤコガイ類	<i>Tridacna</i> spp.	I-2-c
コンシヤク	<i>Conus (Puncticulatus) amenatus</i>	I-2-c 173	<b>バカガイ科 Macrodidae</b>		
タビシヤクモ	<i>Conus (Clavulus) leucoides</i>	II-2-c	マクニョウババガイ	<i>Mactra maculata</i>	II-2-c 42
コナゴザキモ	<i>Conus (Lithoconus) eburneus</i>	I-2-c	タマキ	<i>Mactra cuneata</i>	II-2-c 43
アンボンクワザメ	<i>Conus (Lithoconus) litatus</i>	I-2-c 176	ユキガイ	<i>Meopelta nicobarica</i>	II-2-c
クワモドキ	<i>Conus (Lithoconus) leopardus</i>	I-2-c 177	リュウキュウアンボイナ	<i>Mactra merra</i>	II-2-c
<b>タネノコガイ科 Terebridae</b>			<b>チドリマスオガイ科 Mesodematidae</b>		
ウンノノ	<i>Subula areolata</i>	I-2-c 182	イソノマグリ	<i>Actiodes striata</i>	I-1-c
リュウキュウタケ	<i>Subula maculata</i>	I-2-c	クダシコソウ	<i>Devla plana</i>	I-1-c
ヒメタケ	<i>Subula similata</i>	I-2-c	<b>フジバナナガイ科 Donacidae</b>		
<b>ナツメガイ科 Bullidae</b>			リュウキュウナシロコ	<i>Latona faba</i>	I-1-c
ナツメガイ	<i>Bulla vermicosa</i>	I-2-c	ナシロコガイ	<i>Latona cuneata</i>	II-1-c 49
コナツメガイ	<i>Bulla punctulata</i>	I-2-c	<b>ニッコウガイ科 Tellinidae</b>		
<b>タマゴガイ科 Atyidae</b>			ニッコウガイ	<i>Tellina tellina</i>	II-2-c
タマゴガイ	<i>Alicestratum cylindricum</i>	II-2-c 185	ヒメツキガイ	<i>Tellina stansibi</i>	II-2-c
<b>アムツギ科 Aplysiidae</b>			リュウキュウシヤク	<i>Quidipapys pulatum</i>	II-1-c
タツナシガイ	<i>Dobellia auricularis</i>	I-2-b 188	スノノチヨウシヤク	<i>Pistis capisoides</i>	II-1-c
<b>ミスガイ科 Hydatinidae</b>			サメザラ	<i>Scoutarcopage sobriata</i>	I-2-c 54
ミスガイ科の一連	<i>Hydatinidae</i> gen. et sp.	I-2-a	モチヅキザラ	<i>Cyclotellina menes</i>	I-2-c 55
<b>カラマツガイ科 Siphonariidae</b>			<b>アサヅガイ科 Semelidae</b>		
ニゴゾウカサメ	<i>Siphonaria leciniosa</i>	I-0-a	サメザラ	<i>Semele canalicor</i>	II-1-c 56
<b>オホシロガイ科 Eliocheilidae</b>			<b>イソシロガイ科 Pannophididae</b>		
クビシロシノミ	<i>Pythia pachydon</i>	III-0-a 191	リュウキュウマスオ	<i>Asaphis violaceus</i>	II-1-c
ツヤハシシノミ	<i>Melanopus flexus</i>	V-10 192	マスオガイ	<i>Pannonea elongata</i>	II-1-c
<b>モノアラガイ科 Lymnaeidae</b>			<b>シジミ科 Cyrenidae</b>		
オウツノモアウガイ	<i>Luchis swinhoei</i>	IV-6 193	シシムシ	<i>Gekina erosa</i>	III-0-c 59
<b>キセルガイ科 Ctenidiidae</b>			<b>マルスズメガイ科 Veneridae</b>		
ツヤキセル	<i>Radiachaedusa p. praecleara</i>	V-8	シシムシ	<i>Pemphigeta puerpera</i>	II-2-c
オキナギキセル	<i>Phaedusa valida</i>	V-7	アラスノメガイ	<i>Pemphigeta reticulata</i>	I-2-b 61
<b>ナンシロマイガイ科 Camsaridae</b>			ホソシジメ	<i>Galfrum pectinatum</i>	I-1-c
シロシロマイ	<i>Satsuma (s.s.) m. mercatoria</i> var.	V-8 196	アラスジクワン	<i>Galfrum tumidum</i>	II-1-c
カシラシロマイ	<i>Satsuma (s.s.) m. satsumensis</i>	V-7	ユウゴウババガイ	<i>Pitar striatum</i>	II-2-c
ヤンバルシロマイ	<i>Satsuma (s.s.) "m." atrata</i>	V-7	ウスマツガイ類	<i>Pitar</i> sp.	II-2-c 65
オキナヤマタカマイ	<i>Satsuma (Luch.) eucosmia</i>	V-8	ケショウオホシエシ	<i>Pitaripinarinabbiatum</i>	II-2-c 66
<b>オナヅマイガイ科 Bradybaenidae</b>			オイノカガミ	<i>Bonaranea histrio</i>	II-2-c
ハシダナマイ	<i>Bradybaena circulus</i>	V-8	リュウキュウアサザリ	<i>Tapes literatus</i>	II-2-c 68
オキナフウカフマイ	<i>Acusta d. discreta</i>	V-8 201	ヒメツキアサザリ	<i>Tapes belcheri</i>	II-2-a
			ヒメツキ	<i>Ruditapes variegata</i>	II-1-c 70
			スズメハマグリ	<i>Katayama japonica</i>	II-1-c 71
			トドムマリハマグリ	<i>Meretrix</i> sp. cf. <i>lamarcki</i>	II-2-c 72
			ハマグリ類総称	<i>Meretrix</i> sp. cf. <i>lusoria</i>	II-2-c
			ダテオキシジメ	<i>Cyclina orientalis</i>	II-1-c 73
<b>二枚貝類 Bivalvia</b>			<b>生息場所階級 (Habitat)</b>		
<b>フネガイ科 Arcidae</b>			I 外洋—サンゴ礁域		
オオタコハ	<i>Arca ventricosa</i>	I-2-a	II 内海—乾石域		
エダ	<i>Barbatia (Barbatia) trapezina</i>	I-1-a	III 河口干潟—マンゴローブ域		
ハニエガイ	<i>Barbata (Ust.) amygdalotumtum</i>	I-2-a 3	IV 淡水域		
リュウキュウサルボオ	<i>Anadina (Anadina) antiquata</i>	I-2-b	V 陸域		
ハバガイ(イサ型)	<i>Tegillarca granosa f. obesa</i>	III-1-c 5	VI その他		
<b>イガイ科 Mytilidae</b>			0 潮間帯上部ではノッチ, 皿ではワゴロフ)		
リュウキュウハリ	<i>Modiolus auriculatus</i>	I-1-a 6	1 潮間帯中・下部		
<b>ウグイスガイ科 Pteridae</b>			2 潮間帯中上部ではイノノ		
クロショウガイ	<i>Pinctada margaritifera</i>	I-4-a 9	3 干潮域のみ適用		
<b>シムコクアガイ科 Isognomidae</b>			4 礁域及びその下部		
カシラガイの一連	<i>Isognomon</i> sp. cf. <i>pama</i>	II-1-a 12	5 止水		
シムコクアガイ	<i>Isognomon isognomon</i>	II-2-b	6 流水		
<b>ハボウキガイ科 Pinnidae</b>			7 林内		
ハボウキガイ	<i>Pinna (Subtopinna) sp. cf. bicolor</i>	II-2-c	8 林内・林縁部		
<b>イタヤガイ科 Pectinidae</b>			9 林縁部		
リュウキュウオウキ	<i>Comptopallum redus</i>	II-2-c 8	10 海浜部		
<b>ウミズキ科 Spondyliidae</b>			11 打ち上げ物		
メノガイ科	<i>Spondylus</i> spp.	I-2-a 14	12 化石		
<b>ペッコウガキ科 Plicodentidae</b>			a. 岩壁/岩盤		
シヤコガキ	<i>Hytissa hytiss</i>	I-2-c 15	b. 乾石		
<b>イタボガキ科 Ostreidae</b>			c. 磯/岩窟		
オウゴロガキ	<i>Saccostrea mardonii</i>	I-1-a 17	d. 植物上		
ニセガキ	<i>Saccostrea circumuta</i>	II-1-b 18	e. 流木の流入する礁域		
オウゴロガキモドキ	<i>Crossostrea</i> sp.	III-1-a			
マガキ類	<i>Dendostrea folium</i>	II-2-a			
ウニガキ	<i>Dendostrea sandwicensis</i>	II-2-a 21			
コナギガキ	<i>Ostrea fucigera</i>	II-2-b 22			
シロシロマイガキ					
<b>ツキガイ科 Lucinidae</b>					







HB地区																									HC HIS 合計		
①					②					③					地区外					105 合計							
1	2	3	4	計	1	2	3	4	計	1	2	3	4	計	1	2	3	4	計		1	2	3	4	計		
																									1		
				1	1				1	1											1	1	1	1	4	16	23
2	2			4					4												4	449	46			474	
																							1	1	1	3	
																							16		16	16	100
																								1	1	1	1



第106表-3 平安山原C遺跡・平安山原B遺跡出土貝類遺体の詳細

遺体番号	地区 別	HC地区																				計	貝層 IV・V 群	地区 外・不 明	I 層	II 層	III 層	IV 層	計							
		貝層群										貝層群																								
		1+2 3b	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20															
93	赤川シムノタマ	2	4			1					9	1	6	20	2	3	3	3	10	7	7	66	1	3					2	62						
94	タマガイ貝																						1							1	1					
97	ウズラガイ			1	1						2						1						1	2			1			4	10					
98	スサノオガイ				1						1												1							1	1					
99	イワサツトキワ																											1	1	2						
100	ヤツシロガイ貝																																			
101	アソビガイ			1		2					3																			4	7					
102	ヒツナガイ			5	1		20				26												2				1	5	2		3	30				
103	サツマボラ	1									2													1								4				
104	シノナキ					1					1													1								2				
105	シボボラ	1				1					2													1				2				2	7			
106	オオノウガイ																								1								1			
107	赤ウガイ	18	23	4	10	32	7	94			4	9	1	1	6	1	10	3	5	40	13	12					1	37	217							
108	オキコシ	6	11		3	29	3	32	1		6	6	1		6	1	8	12	3	46	13	8					1	26	144							
109	シボナチナルトボラ																															1	1			
110	オオナルトボラ	1				1					2													1								1	4			
111	シボナルトボラ					1					1																					2	3			
112	ナルトボラ類																																			
113	ゲンゼキボラ	25	32	7	14	61	19	186	5		19	23	18	5	40	10	46	45	25	286	53	37		1		4	111	680								
114	ナンダガイ					1	1	2																1	2	2							6			
115	ケツレイン	49	58	4	5	91	4	211			4	8	4	3	6		3	6		34	15	7		2		2	19	200								
116	コウコシ																																3			
117	シボウガイ	4	7	1	2	24	2	40	1																			1	26	162						
118	ウアラツレイン					3	7	10			2																					27	42			
119	アフルイン	18	36	4	25	154	35	272	11		29	111	31	6	91	25	67	102	55	526	28	54		2		21	172	1089								
120	コイボタワレイン																																1	1		
121	クモレインダマン																																1	1		
122	ウラウラインダマン																																1	1		
123	レインダマン																																1	1		
124	レイン類																																			
125	ハチワレイン																																	6		
126	ムクサキガイレイシ					3	1	4																1	1	1	1						5	12		
127	シロイガイレイシ					1																												6		
128	アカイガイレイシ	5	7	1	6	26	4	40			4	12	2																				21	130		
129	赤ノスジウツボラ																																	1		
130	アソビガイ貝																																			
131	オコロブン			2		2	3	1	10																									2	13	30
132	ウサコサブン	27	59	1	6	83	15	191	3		22	33	14	1	33	8	67	44	13	258	56	28		1		6	138	660								
133	アコロガイ	1																																2		
134	ムシガイ																																		4	
135	シマハシロウバイ	8	1		1	4	1	12			4	23	1	2	11	2	8	11	3	65													77			
136	ヒメササリムシロ	1				3		4																										6		
137	アナムシロ																																		1	
138	アナムシロ																																		1	
139	イナキボラ	68	85	16	35	115	47	466	1		28	78	18	8	41	17	29	36	29	296	168	90						7	326	1291						
140	ナボイノキボラ					1																												1	5	7
141	ベニマキ																																		1	

















## <巻貝>

**ユキノカサ科** (4 リュウキュウノアシ) **リュウテン科** (8 コシダカサザエ 12 ヤコウガイ 16 オオウラウス) **ニシキウズ科** (19 コシダカギンタカハマ 20 サラサバテイラ 21 オキナワシダタミ) **アマオブネ科** (23 キバアマガイ 26 マルアマオブネ 27 オオマルアマオブネ 31 イガカノコ 33 シマカノコ 35 フネアマガイ) **オニノツノガイ科** (39 オニノツノガイ 40 ハシナガツノブエ 42 クワノミカニモリ 43 カヤノミカニモリ 44 イワ(ウミニナ)カニモリ) **ヘナタリ科** (47 センニンガイ 48 マドモチウミニナ) **ウミニナ科** (50 リュウキュウウミニナ) **トウガタカワニナ科** (56 スグカワニナ 57 ヨシカワニナ) **カワニナ科** (59 カワニナ) **スイショウガイ科** (62 オハグロガイ 64 マガキガイ 69 クモガイ 70 ラクダガイ) **ムカデガイ科** (73 フタモチヘビガイ 74 リュウキュウヘビガイ 75 ヘビガイ類) **スズメガイ科** (76 アツキクスズメ) **タカラガイ科** (78 キイロダカラ 84 ホソヤクシマダカラ 85 ホシダカラ 89 タカラガイ科) **タマガイ科** (91 トミガイ) **ヤツシロガイ科** (98 スクミウズラ 99 イワカワトキワ) **フジツガイ科** (101 フジツガイ 102 ミツカドボラ 103 サツマボラ 104 シノマキ 105 シオボラ 106 オオゾウガイ 107 ホラガイ) **オキニシ科** (110 オオナルトボラ) **アツキガイ科** (114 テングガイ 116 コイワニシ 117 シラクモガイ 119 ツルレイシ 120 コイボテツレイシ 121 ウネレイシダマシ 122 ヨウラクレイシダマシ 123 レイシダマシ 125 ハナワレイシ 129 ホソスジテツボラ) **オニコブシ科** (131 オニコブシ) **フトコロガイ科** (133 フトコロガイ) **エソバイ科** (134 ノシガイ 135 シマベッコウバイ) **オリイレヨフバイ科** (136 ヒメオリイレムシロ 137 アツムシロ) **イトマキボラ科** (140 ナガイイトマキボラ 141 ベニマキ 142 ツノマタモドキ 143 リュウキュウツノマタ) **マクラガイ科** (146 サツマナビ) **フデガイ科** (148 イモフデ) **ミノムシガイ科** (150 オオミノムシガイ) **イモガイ科** (152 サヤガタイモ 153 ジュズカケサヤガタイモ 154 イボシマイモ 156 ヤナギシボリイモ 157 サラサミナシ 159 カバミナシ 161 サラサモドキ 162 ヒラマキイモ 165 ニシキミナシ 167 シロアンボイナ 168 ナンヨウクロミナシ 169 ミカドミナシ 171 ナガサラサミナシ 173 コモンイモ 176 アンボンクロザメ 177 クロフモドキ) **タケノコガイ科** (182 ウシノツノ) **タマゴガイ科** (185 カイコガイ) **タツナミガイ科** (188 タツナミガイ) **オカミミガイ科** (191 クロヒラシイノミ 192 ツヤハマシイノミ) **モノアラガイ科** (193 タイワンモノアラガイ) **ナンバンマイマイ科** (196 シュリマイマイ) **オナジマイマイ科** (201 オキナワウスカワマイマイ)

## <二枚貝>

**フネガイ科** (3 ベニエガイ 5 ハイガイ (セイタカ型)) **イガイ科** (6 リュウキュウヒバリ) **イタヤガイ科** (8 リュウキュウオウギ) **ウグイスガイ科** (9 クロチョウガイ) **シュモクアオリ科** (12 カイシアオリの一種) **ウミギク科** (14 メンガイ類) **ベッコウガキ科** (15 シャコガキ) **イタボガキ科** (17 ニセマガキ 18 オハグロガキモドキ 21 ノコギリガキ 22 シロヒメガキ) **ツキガイ科** (24 ツキガイ 28 カブラツツキガイ) **カゴガイ科** (29 カゴガイ) **トマヤガイ科** (30 トマヤガイ) **キクザル科** (31 シロザル) **ザルガイ科** (35 カワラガイ) **シャコガイ科** (37 シラナミ類 38 ヒレジャコ 40 シャゴウ) **バカガイ科** (42 リュウキュウバカガイ 43 タママキ) **フジノハナガイ科** (49 ナミノコガイ) **ニッコウガイ科** (54 サメザラ 55モチツキザラ) **アサジガイ科** (56 サメザラモドキ) **シジミ科** (59 シレナシジミ) **マルスダレガイ科** (61 アラスノメガイ 65 ウスハマグリ類 66 ケショウオミナエシ 68 リュウキュウアサリ 70 ヒメアサリ 71 スダレハマグリ 72 トッドゥマリハマグリ 73 ダテオキシジミ)

貝類遺体名称 (図版 137 ~ 139)



図版 137 貝類遺体 1 (巻貝)

(番号は第 105 表と一致)



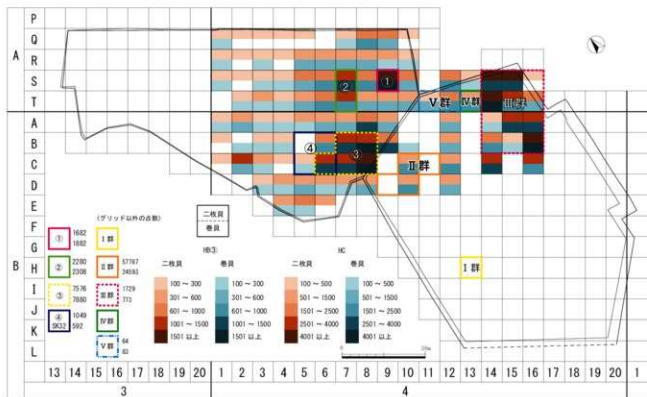
図版 138 貝類遺体 2 (上段: 巻貝、下段: 二枚貝)

(番号は第 105 表と一致)



図版 139 貝類遺体 3 (二枚貝)

(番号は第105表と一致)



第 190 図 平安山原B・C遺跡 貝類遺体分析地区名

## 第3節 平安山原B遺跡・平安山原C遺跡の年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

北谷町に所在する平安山原B遺跡、平安山原C遺跡は、沖縄本島中部の東シナ海に臨む海岸低地に位置する遺跡である。平安山原B遺跡は、これまでの調査で貝塚時代後期から戦前までの遺構や遺物が確認されている。一方、平安山原C遺跡は貝塚時代後期と想定される貝層が検出された。

本報告では平安山原B遺跡のR-8、T-5、Q-8グリッドから出土した炭化材6点と平安山原C遺跡の土坑や貝層より出土した獣骨4点と土器付着炭化物1点の放射性炭素年代測定を実施し、遺構および遺物包含層の年代に関わる資料を作成する。

### 1. 試料

平安山原B遺跡の試料は、R-8グリッドⅢe(15)層から出土した炭化材4点、T-5グリッドⅢd(14)層から出土した炭化材1点、Q-8グリッドⅢe(15)層から出土した炭化材1点の合計6点である。

平安山原C遺跡の試料は、HC-SK03より出土したウマ下顎骨1点と貝層Ⅲ群より出土したイノシシ下顎骨3点、土器付着炭化物1点の合計5点である。

## 2. 分析方法

### (1) 放射性炭素年代測定

分析試料はAMS法で実施する。木材や炭化物は、試料表面の汚れをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する(酸-アルカリ-酸処理:AAA)。

骨試料はコラーゲン抽出(Collagen Extraction)を行う。試料を超純水の入ったガラスシャーレに入れ、ブラシ等を使い、根・土壌等の付着物を取り除く。試料をピーカー内で超純水に浸し、超音波洗浄を行う。

0.2Mの水酸化ナトリウム水溶液を試料の入ったピーカーに入れ、試料の着色がなくなるまで1時間ごとに水酸化ナトリウム水溶液を交換する。その後、超純水で溶液を中性に戻す。試料を凍結乾燥させ、凍結粉砕用セルに入れ、粉砕する。リン酸塩除去のため試料を透析膜に入れて1Mの塩酸で酸処理を行い、超純水で中性にする。透析膜の内容物を遠心分離し、得られた沈殿物に超純水を加え、90℃に加熱した後、濾過する。濾液を凍結乾燥させ、コラーゲンを得る。

試料を燃焼させたあと、真空ラインで不純物(水など)を取り除き、CO<sub>2</sub>を精製する。これを鉄で還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、小型タンデム加速器にて測定する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も行うため、この値を用いてδ<sup>13</sup>Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0(Copyright 1986-2016 M Stuiver and PJ

Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正は、CALIB7.1.0のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。暦年較正は北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

### 3. 結果・考察

同位体効果による補正を行った測定結果を第107表、暦年較正結果を第108表に示す。

平安山原B遺跡の試料の測定年代(補正年代)はR-8グリッドIII e(15)層検出の4点(Dot2199、Dot2200、Dot2201、Dot2427)は1,010±20BP、1,100±20BP、1,100±20BP、970±20BP、T-5グリッドIII d(14)層(Dot2219)が1,070±20BP、Q-8グリッドIII e(15)層(Dot2323)が1,080±20BPの値を示す。また、測定誤差をσとして計算させた暦年較正の結果は、R-8グリッドIII e(15)層検出の4点(Dot2199、Dot2200、Dot2201、Dot2427)がcalAD997-1,027、calAD899-979、calAD899-977、calAD1,021-1,146、T-5グリッドIII d(14)層(Dot2219)がcalAD 975-1,013、Q-8グリッドIII e(15)層(Dot2323)がcalAD901-994であった。

分析試料6点の測定年代(補正年代)は970±20BP～1,100±20BPのまとまった値を示した。暦年較正年代は10世紀から12世紀半ばを示した。試料の炭化材6点は鉄製の鍔が出土した層の上下から出土し、分析目的は農具に関する間接的情報を得ることとしている。年代測定の結果から鍔の出土層の年代は10世紀から12世紀半ばに収まるものと推定される。

第107表 放射性炭素年代測定結果

遺跡名	遺構 グリッド 層位	試料の種類 (樹種同定)	補正年代 BP	δ <sup>13</sup> C (‰)	測定年代 BP	Code No.
平安山原B遺跡	R-8 III e(15)層 Dot2199	炭化材 広葉樹(散孔材)	1,010 ± 20	-28.76 ± 0.19	1,070 ± 20	IAAA-152578
	R-8 III e(15)層 Dot2200	炭化材 広葉樹(散孔材)	1,100 ± 20	-28.05 ± 0.25	1,150 ± 20	IAAA-152579
	R-8 III e(15)層 Dot2201	炭化材 炭質物	1,100 ± 20	-29.44 ± 0.18	1,180 ± 20	IAAA-152580
	T-5 III d(14)層 Dot2219	炭化材 未同定	1,070 ± 20	-30.08 ± 0.19	1,150 ± 20	IAAA-152581
	Q-8 III e(15)層 Dot2323	炭化材 マツ属複雑管束葉属	1,080 ± 20	-29.36 ± 0.21	1,150 ± 20	IAAA-152582
	R-8 III e(15)層 Dot2427	炭化材 マツ属複雑管束葉属(節)	970 ± 20	-30.11 ± 0.19	1,060 ± 20	IAAA-152583
平安山原C遺跡	HC-SK03	ウマ 下顎骨	560 ± 20	-15.68 ± 0.47	410 ± 20	IAAA-160029
	T15-42 貝層Ⅲ群-1層	イノシシ 下顎骨 R	1,140 ± 30	-23.22 ± 0.57	1,110 ± 20	IAAA-160030
	S15-51 貝層Ⅲ群-1層	イノシシ 下顎骨 R	1,340 ± 30	-21.87 ± 0.52	1,290 ± 20	IAAA-160032
	S15 貝層Ⅲ群-5層	イノシシ 下顎骨 R	1,890 ± 30	-21.97 ± 0.44	1,840 ± 20	IAAA-160031
	貝層Ⅲ群-5層 土器付着炭化物	炭化物	1,800 ± 30	-22.45 ± 0.57	1,750 ± 20	IAAA-122320

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第108表 暦年較正結果

遺跡名	試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)						相対比	Code No.
平安山原B遺跡	R-8 III e (15)層 Dot2199	1,012 ± 21	σ	cal AD 997	- cal AD 1,006	cal BP 953	- 944	0.263	IAAA-152578	
			2 σ	cal AD 1,011	- cal AD 1,027	cal BP 939	- 923	0.737		
	R-8 III e (15)層 Dot2200	1,102 ± 22	σ	cal AD 989	- cal AD 992	cal BP 1,051	- 1,018	0.438	IAAA-152579	
			2 σ	cal AD 947	- cal AD 979	cal BP 1,003	- 971	0.562		
	R-8 III e (15)層 Dot2201	1,104 ± 21	σ	cal AD 899	- cal AD 923	cal BP 1,051	- 1,027	0.455	IAAA-152580	
			2 σ	cal AD 946	- cal AD 977	cal BP 1,004	- 973	0.545		
	T-5 III d (14)層 Dot2219	1,065 ± 21	σ	cal AD 975	- cal AD 1,013	cal BP 975	- 937	1.000	IAAA-152581	
			2 σ	cal AD 901	- cal AD 921	cal BP 1,049	- 1,029	0.110		
	Q-8 III e (15)層 Dot2323	1,081 ± 21	σ	cal AD 951	- cal AD 1,020	cal BP 999	- 930	0.890	IAAA-152582	
			2 σ	cal AD 901	- cal AD 920	cal BP 1,049	- 1,030	0.303		
	R-8 III e (15)層 Dot2427	973 ± 21	σ	cal AD 961	- cal AD 994	cal BP 989	- 956	0.697	IAAA-152583	
				cal AD 897	- cal AD 926	cal BP 1,053	- 1,024	0.266		
2 σ			cal AD 942	- cal AD 1,015	cal BP 1,008	- 935	0.734			
			cal AD 1,021	- cal AD 1,045	cal BP 929	- 905	0.581			
σ			cal AD 1,097	- cal AD 1,119	cal BP 853	- 831	0.379			
			cal AD 1,143	- cal AD 1,146	cal BP 807	- 804	0.470			
平安山原C遺跡	HC-SK03 ウマ下顎骨	560 ± 23	σ	cal AD 1,018	- cal AD 1,051	cal BP 932	- 899	0.740	IAAA-160029	
			2 σ	cal AD 1,081	- cal AD 1,151	cal BP 869	- 799	0.530		
	T15-42 貝層Ⅲ群-1層 イノシシ下顎骨 R	1,140 ± 25	σ	cal AD 1,326	- cal AD 1,343	cal BP 624	- 607	0.450	IAAA-160030	
				cal AD 1,394	- cal AD 1,413	cal BP 556	- 537	0.550		
			2 σ	cal AD 1,314	- cal AD 1,356	cal BP 636	- 594	0.498		
				cal AD 1,388	- cal AD 1,423	cal BP 562	- 527	0.502		
	S15-51 貝層Ⅲ群-1層 イノシシ下顎骨 R	1,340 ± 25	σ	cal AD 882	- cal AD 905	cal BP 1,068	- 1,045	0.300	IAAA-160032	
				cal AD 916	- cal AD 967	cal BP 1,034	- 983	0.700		
			2 σ	cal AD 778	- cal AD 791	cal BP 1,172	- 1,159	0.044		
				cal AD 804	- cal AD 843	cal BP 1,146	- 1,107	0.078		
	S15 貝層Ⅲ群-5層 イノシシ下顎骨 R	1,887 ± 25	σ	cal AD 859	- cal AD 979	cal BP 1,091	- 971	0.878	IAAA-160031	
				cal AD 655	- cal AD 679	cal BP 1,295	- 1,271	1.000		
2 σ			cal AD 647	- cal AD 695	cal BP 1,303	- 1,255	0.903			
			cal AD 700	- cal AD 710	cal BP 1,250	- 1,240	0.022			
貝層Ⅲ群-5層 土器付着炭化物	1,795 ± 26	σ	cal AD 746	- cal AD 763	cal BP 1,204	- 1,187	0.074	IAAA-122320		
			cal AD 77	- cal AD 132	cal BP 1,873	- 1,818	1.000			
		2 σ	cal AD 63	- cal AD 179	cal BP 1,887	- 1,771	0.922			
			cal AD 186	- cal AD 213	cal BP 1,764	- 1,737	0.078			
		σ	cal AD 144	- cal AD 153	cal BP 1,806	- 1,797	0.064			
			cal AD 169	- cal AD 194	cal BP 1,781	- 1,756	0.289			
2 σ	cal AD 210	- cal AD 255	cal BP 1,740	- 1,695	0.509					
	cal AD 300	- cal AD 317	cal BP 1,650	- 1,633	0.147					
σ	cal AD 134	- cal AD 259	cal BP 1,816	- 1,691	0.800					
	cal AD 281	- cal AD 324	cal BP 1,669	- 1,626	0.200					

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0 (Copyright 1986-2016 M Stuiver and P.J. Reimer) を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算と比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である

5) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

農耕に関する近隣遺跡の情報として、小堀原遺跡から検出された栽培植物のアワ、オオムギ、イネの年代測定が実施されている(高宮・千田, 2014)。補正年代は920 ± 20BP ~ 1,030 ± 30BP、暦年較正年代(2σ)は10世紀半ばから12世紀半ばとされる。今回の年代測定の結果と調和するものである。

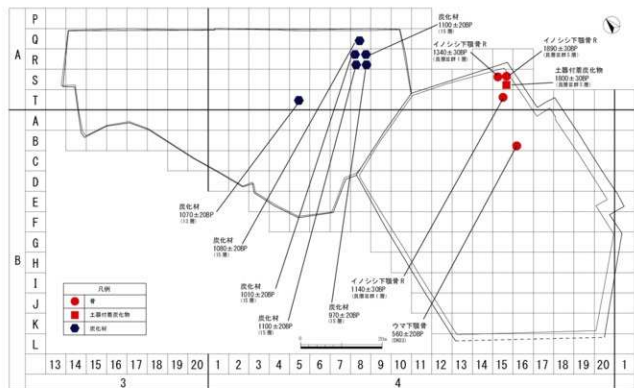
平安山原C遺跡の試料の測定年代(補正年代)は、HC-SK03 ウマ下顎骨が560 ± 20BP、貝層Ⅲ群-1層イノシシ下顎骨2点が1,140 ± 30BPと1,340 ± 30BP、貝層Ⅲ-5層イノシシ下顎骨が1,890 ± 30BP、土器付着炭化物が1,800 ± 30BPを示す。測定誤差をσとして計算させた結果、暦年較正年代はHC-

SK03 ウマ下顎骨が calAD1,326-1,413、貝層Ⅲ群-1層が calAD882-967、calAD655-679、貝層Ⅲ群-5層のイノシシ下顎骨が calAD77-132、土器付着炭化物が calAD144-317 である。

この測定結果を考慮すると、HC-SK03 ウマ下顎骨は14世紀前半から15世紀前半頃のグスク時代のもものと推定される。貝層Ⅲ群-1層より出土したイノシシの下顎骨の2点は9世紀後半から10世紀半ばと7世紀後半で、貝塚時代後期後半頃と推定される。また貝層Ⅲ群-5層のイノシシ下顎骨は1世紀後半から2世紀前半、土器付着炭化物は2世紀半ばから4世紀初頭頃で、貝塚時代後期前半と推定される。この結果は土層の累重関係と調和する。さらに調査所見によると、HC-SK03のウマ下顎骨は南宋銭の大銭と伴し、貝層Ⅲ群-1層は6世紀から10世紀、貝層Ⅲ群-5層は1世紀から5世紀と想定され、土器付着炭化物はゴホウラの腕輪と伴するとされる。いずれも年代測定の結果と調和するものであった。

#### <引用文献>

高宮広士・千田寛之, 2014, 琉球列島先史・原史時代における植物食利用, 高宮広士・新里貴之編, 琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集第2集, 琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷, 六一書房, 127-142.



第 191 図 平安山原 B・C 遺跡 試料採取箇所



## 第4節 平安山原B・C遺跡より出土した人骨資料について

藤田祐樹（沖縄県立博物館・美術館）

平安山原BおよびC遺跡から出土した人骨は、総数も少なく、いずれも断片的で破損も著しい。そのため、計測に耐える資料や、形態学的に特徴を議論できるような資料はない。しかしながら、その保存状況からこうした断片的な人骨の埋没した背景について若干の示唆が得られるため、本稿ではこうした点に注目して議論する。なお、平安山原C遺跡から出土した人骨のほうが多く、平安山原B遺跡の資料は数点にとどまるが、両者を明確に区別する必要性はないと思われるため、両者を一連の資料として捉える。

資料には、堆積物の付着などはほぼ認められなかった。そのため、クリーニングはブラシ等で簡単に砂を物理的に除去するのみで終え、破損した資料の接合には、アセトン可用性の接着剤（Vutbar, Polyvinyl Butyral Resin, Eastman Chemical Company, USA）を用いた。全ての資料について部位、年齢、性別等を検討したが、結果として性別を明らかにできる資料はなかった。年齢はサイズを主な手がかりとして成人か幼児かの判定を行ったが、その確度は不明であるため不確定の場合には「成人サイズ」などと記載するにとどめた。

### 出土状況および残存状況について

平安山原B・C遺跡より出土した人骨は、四肢骨、特に下肢骨の骨幹部が大半を占める。破片は小さく、最長の破片でも22cm以下である。出土位置は、広範囲にまばらに散乱しており、人骨の集中や個体のまとまりなどといった特定の傾向を見いだすことはできない。したがって、人骨はいずれも、それぞれの出土位置周辺に埋葬されたわけではなく、ある程度の距離を移動してきたものと推測される。地層中には流路とみなせる痕跡もあるが、こうした水流や、砂自体の移動によって、離れたところにあった埋葬が動かされ、その人骨が分散した結果、平安山原B・C遺跡一体に広がったものと考えられる。

大半の骨で骨表面の傷みが著しく、破断面も磨滅しているといった特徴も、こうした仮説と矛盾しない。水流や砂の動きを頻繁にうけて、骨表面や破断面が小さな破損を繰り返した結果、こうした磨滅が生じたのであろう。

下肢骨が比較的多く認められているが、その理由は人為的なものではなく、人骨が自然の営為によって移動するプロセスで、大半の骨が破砕消失するためと推測される。大腿骨や脛骨の骨幹部は、骨格の中でも特に骨壁が厚く、比較的頑丈である。そのため、こうした部位は自然の営為によって破壊されにくかったのであろう。

性別を推定できる資料はないが、成人サイズと判断される資料が多い。しかし、乳歯や、ほぼ未咬耗の永久歯（上顎中切歯）、明らかな幼児大腿骨も、わずかながら含まれている。したがって、成人サイズが多い理由も、やはり人骨が移動するプロセスで比較的キャシヤな幼児人骨のほうより破損消失しやすかったためと考えるべきだろう。そうであれば、もともと人骨があった場所には、成人も幼児も埋葬されていたかもしれない。

最後に、もともとの埋葬場所はどこかという疑問が残るが、これについては本遺跡の資料からは推測することが難しい。水流の影響で運ばれたのであれば、その上流部が候補として考えられるものの、人骨出土位置は必ずしも流路と一致しない。また、磨滅の程度が比較的軽い資料もあり、全

てが同じ要因によって同一箇所から運搬されていないかもしれない。現状では、遺跡周辺であろうとは推測されるものの、残念ながらその正確な位置はおろか方角すら、推測するのは困難である。

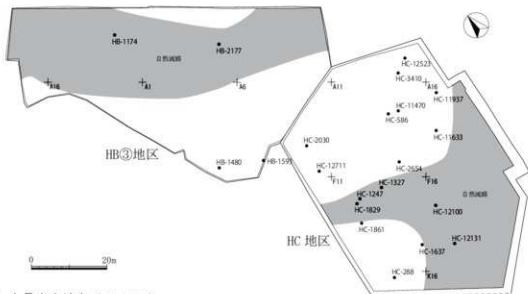
第109表 平安山原B遺跡および平安山原C遺跡から出土した人骨片一覧

図版番号	Site	No.	Grid	層位・遺構	部位	左右	年齢	性別	保存程度					備考		
									近位端	近位骨幹	中央骨幹	遠位骨幹	遠位端		全体	
1	HC	台11470	B14	V	大腿骨片	L?	成人サイズ	ND	0	1	0	0	0	1	骨壁厚く男性的な印象をうけるが、表面の傷み激しく、詳細不明。サイズは普通。	
2	HC	F2030	D9	V	脛骨	R	成人サイズ	M?	0	1	1	1	0	2030と同程度のサイズ。ひらめ筋線や骨間線の発達は弱い。シャフトはやや細く、組織の発達も弱い。腎筋筋面は中程度。骨表面の傷みや目立ち、破断面も摩滅している。		
3	HC	F1637	I15	V	脛骨	R	成人サイズ	ND	0	1	1	1	0	3	程度の咬耗。遠心の歯頸部に程度のカリエス。歯石は認められない。	
4	HC	F2654	E14	V	大腿骨片	R	成人サイズ	ND	0	1	1	1	0	2	程度の咬耗。遠心の歯頸部に程度のカリエス。精削にわずかに歯石が付着。	
5	HC	台11937	A16	貝層Ⅲ群5	上顎第二大臼歯	L	成人	ND						3	程度の咬耗。遠心の歯頸部に程度のカリエス。精削にわずかに歯石が付着。	
6	HC	台11633	C16	V	上顎第二大臼歯	L	成人	ND						5	ほぼ未咬耗。歯根は摩滅しており、どの程度形成されていたか不明。小児である可能性高い。	
7	HC	台12131	I17		上顎中切歯	L	小児	ND						3	骨表面が滑らかなので成人と推測されるが詳細不明。	
8	HC	台12523	S14	貝層Ⅲ群2	機骨	R?	成人サイズ	ND	0	0	1	0	0	1	サイズから成人と推測されるが、骨表面の傷みがやや詳細不明。	
9	HC	台12711	-	SX002	膝骨	ND	成人サイズ	ND	0	0	1	0	0	1	扁平であり若い個体を想起させるが、表面の傷み激しく詳細不明	
10	HC	F288	K14	dot	頭頂骨片	ND	成人サイズ	ND						<1	4 強度の咬耗。遠心に程度のカリエス。精削にごく少量の歯石。	
11	HC	F3410	T14	貝層Ⅲ群	上顎第二乳臼歯	R	小児	ND						4	比較的しっかりした印象があるが、表面の傷み激しく、破断面摩滅し。詳細不明。	
12	HC	F586	B14		大腿骨	L	成人サイズ	ND	0	1	1	0	0	2	1 骨壁あつく、やや扁平。表面および破断面の摩滅が激しい。	
13	HC	F1829	H12	Ⅱc	脛骨	R	成人サイズ	ND	0	0	1	0	0	1	3 破断面はフレッシュ。	
14	HC	台12100	G16	Ⅳ	大腿骨	R	幼児	ND	0	1	1	1	0	3	2 表面および破断面の摩滅が激しい。冠状縁部が明瞭であることから若い個体と推測されるが詳細不明。	
15	HC	F1861	H12	V	脛骨	R	成人サイズ	ND	0	1	1	1	0	3	3 表面および破断面の摩滅が激しい。	
16	HC	F1327	G14	V	脛骨	R	成人サイズ	ND	0	0	1	1	0	2	4 表面および破断面の摩滅が激しい。	
17	HC	F1247	F12	Ⅱc	脛骨	R	成人サイズ	ND	0	0	1	0	0	1	4	5 表面および破断面の摩滅が激しい。
18	HB③	台1174	R19	Ⅲd(14)	大腿骨片	ND	成人サイズ	ND	0	0	1	0	0	0	1	6 表面および破断面の摩滅が激しい。冠状縁部が明瞭であることから若い個体と推測されるが詳細不明。
19	HB③	台1480	E5	Ⅲ	尺骨	R	成人サイズ	ND	0	1	1	1	0	0	3	7 表面および破断面の摩滅が激しい。左右に扁平。
20	HB③	台1593	-	不明	頭頂骨片	ND	成人サイズ	ND						<1	8	
21	HB③	D2177	R5	Ⅲd(14)	大腿骨?	R?	成人サイズ	ND	0	1	0	0	0	0	1	9

保存部位は、各所で残存している場合を1、残存していない場合を0とし、全体は完形を5として1～5の5段階で評価した。

性別および左右欄のNDは判定不能

「遺構」Ⅱc:クムイ Ⅳ:流路内



第192図 人骨出土地点 (S=1/1000)



(番号は第109表と一致)

図版 140 HC・HB ③人骨片

## 第VI章 まとめ

### 第1節 平安山原における遺物平面分布

本書は、北谷町宇伊平小字平安山原における本格的発掘調査の最終報告となる。「平安山原」を冠する3遺跡、即ち平安山原A～C遺跡はそのいずれもが隣接しているため、これらを統合した内容を俯瞰することで、平安山原全体の更なる理解が進むものと思われる。本節においてはまず、種別ごとの遺物平面分布を提示し、そこから看取・推定できる事象を確認してみたい。

平面分布図の作成方法については、『平安山原A遺跡』（2016）第V章第3節「各期遺物の平面分布の検討」を踏襲し、各出土遺物の点数（破片数）を基にした。しかし、器種や帰属時期によっては破片数の絶対量が大きく異なるため、平面的変遷を相対的に比較できるように、分布の疎密表示をするにあたっては、表計算ソフトMicrosoft Excelを用いて以下のような調整を行った。

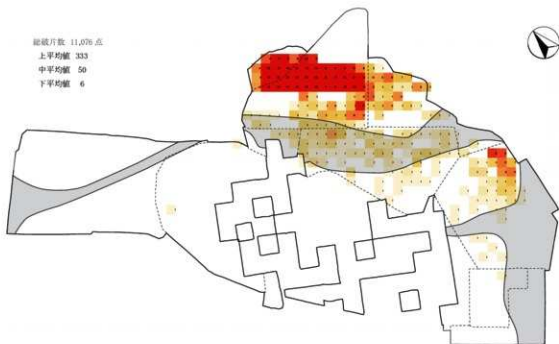
- ① 各遺物の破片総数を、遺物が出土したグリッド数で除し、これを「中平均値」として設定。
- ② 中平均値を上回る点数が得られたグリッドに限り、その破片総数をグリッド数で除し、「上平均値」を設定。
- ③ 中平均値を下回る点数が得られたグリッドに限り、その破片総数をグリッド数で除し、「下平均値」を設定。
- ④ セルの書式スタイルに3色スケールを用い、得られた3値をそれぞれ最大値・中間値・最小値として入力。
- ⑤ この結果、上平均値が最濃に、中平均値が中間色に、下平均値が最淡に塗り潰されることになり、併せて突出した大小値が除外される。

これまでの調査成果から確認された、平安山原現地人による活動開始は貝塚時代後期前半（弥生時代頃）であり、1945年に米軍が上陸し当地が接収されるまで、その活動は連続と続いたことが分かっている。この2千年以上にわたるこの期間を下記のように区分し、その時期に帰属する各遺物をカウントした。なお近代の動向については、『平安山原A遺跡』（2016）にて詳しく検討したので、本書ではこれを割愛することとする。

平安山原-貝塚Ⅰ期(貝塚時代後期前半①)……	土器(阿波連浦下層式・浜屋原式)
平安山原-貝塚Ⅱ期(貝塚時代後期前半②)……	土器(大当原式)
平安山原-貝塚Ⅲ期(貝塚時代後期後半)……	土器(くびれ平底土器)
平安山原-グスクⅠ期(11～14c、宋・元代)……	グスク土器・カムイヤキ・白磁・青磁
平安山原-グスクⅡ期(14～17c、明代)……	白磁・青磁・染付・本土産陶器
平安山原-近世期(17～20c、清代)……	白磁・青磁・染付・本土産陶磁器

### 平安山原-貝塚Ⅰ期:破片数11,076点(全て土器)

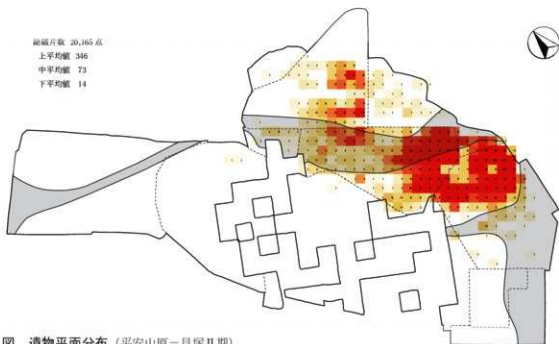
岩崖を背にするようにして土器が密集しており、その範囲は平安山原B遺跡に概ね収まる格好となっている。第一浜堤先端にもやや強い分布が認められるため、既に第一浜堤の形成が始まっていたとも考えられるが、周辺は恐らくビーチロックを底とした潮間帯であり、水流の影響で拡散したものであろう。



第193図 遺物平面分布 (平安山原-貝塚Ⅰ期)

### 平安山原-貝塚Ⅱ期:破片数20,165点(全て土器)

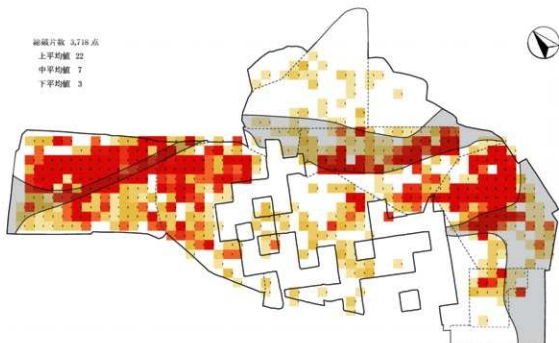
第一浜堤の形成を物語るように、大当原式土器の分布域は岩崖から離れ、平安山原C遺跡を中心とした浜堤先端へと完全に移行する。得られた資料数は各期を通じて最も多い上に密集率も高いため、廃棄場所への固執及び廃棄活動の活発さを感じさせる。



第194図 遺物平面分布 (平安山原-貝塚Ⅱ期)

### 平安山原-貝塚Ⅲ期:破片数3,718点(全て土器)

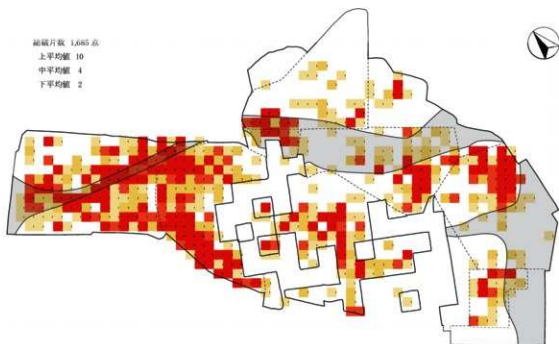
第一浜堤の成長とともに、くびれ平底土器の分布域も拡大する。古相のアカジャンガー式及び新相のフェンサ下層式の両方が認められるが、平安山原A遺跡では後者のみとなっている。従って貝塚Ⅱ期に後続したのは平安山原C遺跡やHB③であったことが分かる。



第195図 遺物平面分布(平安山原-貝塚Ⅲ期)

### 平安山原-グスクⅠ期:破片数1,685点(グスク土器1,236、カムイヤキ143、白磁114、青磁192)

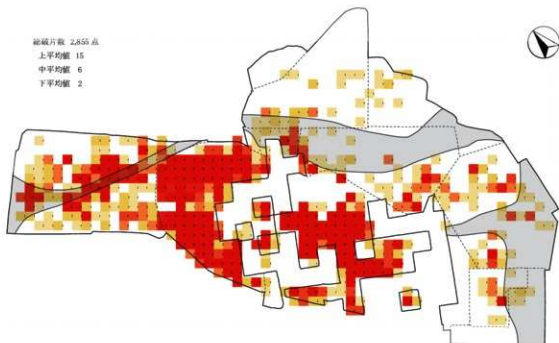
貝塚Ⅲ期に比べると分布域が僅かに海側へ広がるが、カウントされた破片の絶対数は各期を通じて最も少なく、人々の活動が低調であったことが見て取れる。この頃盛期を迎えていた南方の小堀原遺跡と対比すべき様相であろう。



第196図 遺物平面分布(平安山原-グスクⅠ期)

**平安山原-グスクⅡ期: 破片数2,855点(白磁278、青磁1,968、染付584、本土産陶器25)**

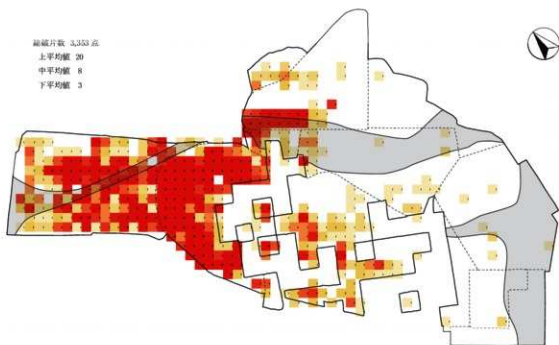
遺物分布の主体は平安山A遺跡に移行する。特にこれまで疎であったHA④では、当該期の土坑・ピットが高い密度をもって検出されており、破片数から考える以上に繁栄した様相を窺わせる。田B流路である耕作域では、分布の空白が目立つようになる。



第197図 遺物平面分布(平安山原-グスクⅡ期)

**平安山原-近世期: 破片数3,353点(白磁287、青磁91、染付1,923、本土産陶磁器1,052)**

遺物分布の主体は、やや北側のHA②・③に移動する。この分布域は戦前集落域とほぼ重なっており、平安山村の端緒とみなすこともできる。



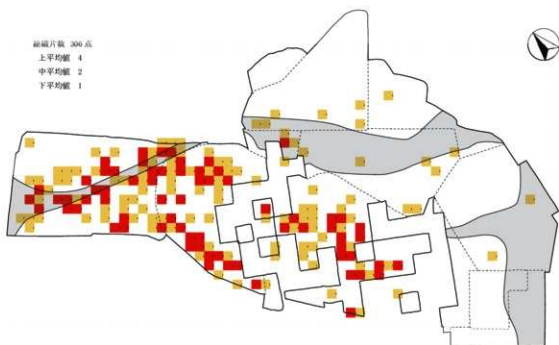
第198図 遺物平面分布(平安山原-近世期)

### 平安山原-グスク I 期の検討

当該期の白磁・青磁はその9割以上が13c以降のものであり、石鍋流入の影響下に誕生したと考えられるグスク土器よりやや後出的なものと言える。よって、この両者の分布が重ならない部分は、13c以前にも人々の活動があった範囲と推定することができよう。平安山原-貝塚Ⅲ期の項にて既述したように、フェンサ下層式期の分布主体部は平安山原A遺跡に移動しており、これは平安小海進に伴う高標高地への移動ではなかったかと考えられる。その後のグスク初期にはHC・HB③に移動するものの、14c頃には再度居住域を東遷したという想像が可能である。



第 199 図 グスク土器平面分布 (平安山原-グスク I 期)



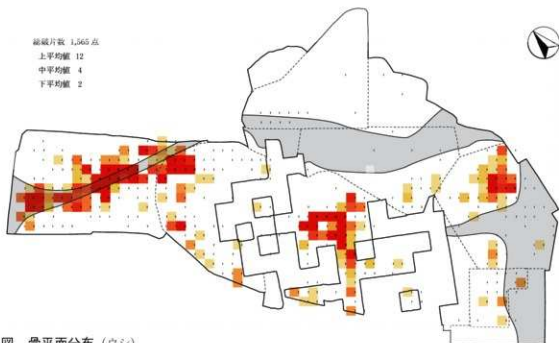
第 200 図 白磁・青磁平面分布 (平安山原-グスク I 期)



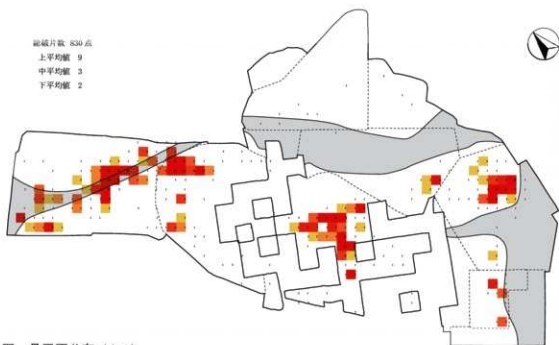
## 脊椎動物骨の分布

### 1. ウシ (1,565点)・ウマ (830点)

『平安山原A遺跡』(2016)でも述べた通り、この両者は非常に類似した分布を示している。HA④で強い密集が認められることから、平安山原-グスクⅠ・Ⅱ期との親和性が感じられるため、平安山原におけるウシ・ウマは、グスク期には一定数が飼養されていたと考えられる。ただし使役目的の動物であり、最終的に食用とされたにしてもかなりの大型であるため、他の食用動物とは骨の廃棄のされ方に違いが生じることは留意しなければならない。ウシ・ウマ幼体骨が埋納されていた土坑(HC)や、近世期に構築された石列近く(HA①・HC)でも局所的に分布が認められた裏には、これらが集団で行う土木作業や祭祀等に深く関わる動物であったことを示唆するものである。



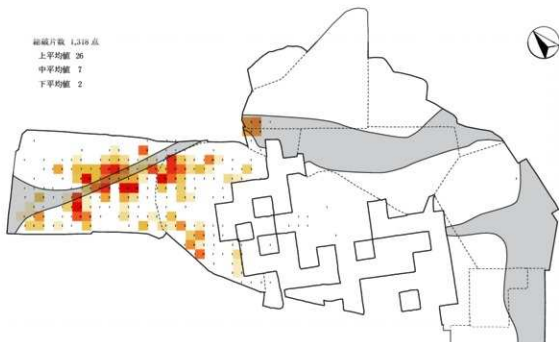
第201図 骨平面分布(ウシ)



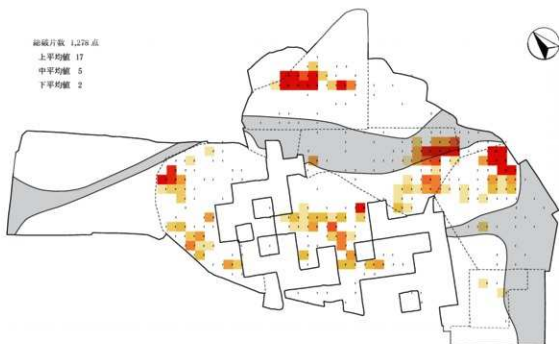
第202図 骨平面分布(ウマ)

## 2. ブタ (1,318点)・イノシシorブタ (1,278点)

前者は家畜化による骨の形状変化が認められたものであり、後者はそれが認められないものである。従って後者には、イノシシ或いは古いブタが多く含まれていると考えて大過ない。両者の分布の違いは非常に明瞭であり、ブタの分布域は近世期以降の平安山集落範囲と完全に一致している。これに対してイノシシorブタは、平安山原-貝塚Ⅰ・Ⅱ期及びびぐスクⅠ・Ⅱ期との親和性が認められるが、注目されるのは貝塚Ⅲ期、特にHA③とは全く重ならないことである。つまり、くびれ平底後半期には、イノシシの利用が全く低調であったことが予想されるのである。



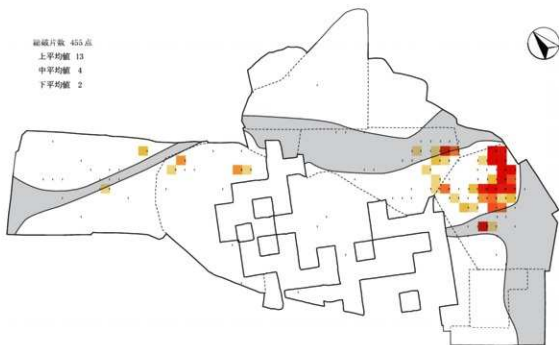
第 203 図 骨平面分布 (ブタ)



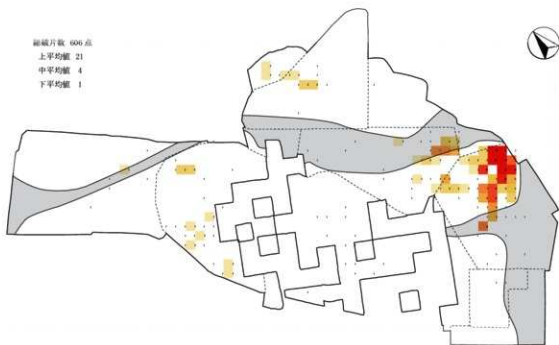
第 204 図 骨平面分布 (イノシシ or ブタ)

### 3. 海獣類 (455点)・魚類 (606点)

海獣類とはクジラ類・ジュゴン・ウミガメを指す。共に漁撈で得られる海獣類・魚類の分布もまた、非常に類似した様相を示している。平安山原-貝塚Ⅱ期と強く調和しており、当該期の漁撈が活発であったことが窺える。しかし一方で、それ以外の時期にはこれらの海産脊椎動物の利用が全く低調であることもまた、海浜近くに立地する遺跡としては特記される事象と言えよう。



第 205 図 骨平面分布 (海獣類)

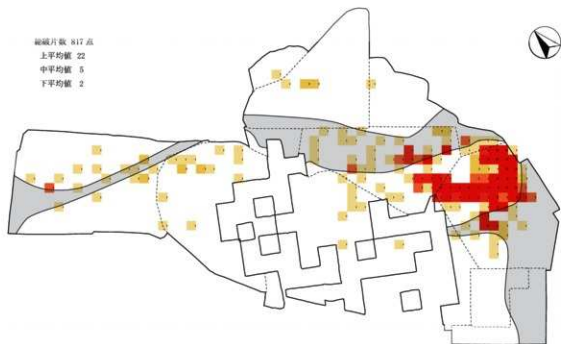


第 206 図 骨平面分布 (魚類)

## 貝製品・自然貝（素材？）の分布

### 1. シャコガイ類製有孔製品（817点）

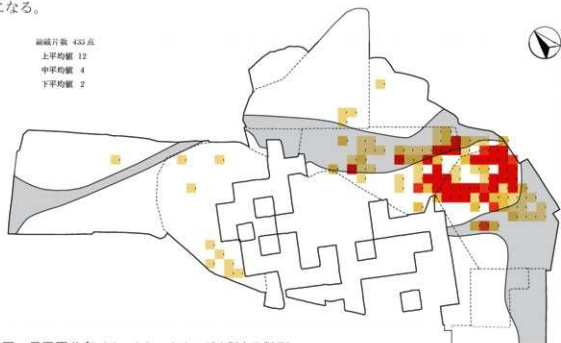
魚類骨との分布の一致が目立つ一方で、平安山原-貝塚Ⅲ期における傾向にも共通性が認められるが、食料残渣と漁具の廃棄場所は必ずしも一致する訳ではないことを留意しておきたい。貝層Ⅲ群の下層・上層や後期層（V層）それぞれから定量出土しているため、貝塚Ⅱ・Ⅲ期に盛行した可能性が高いことは考えられる。



第207図 貝平面分布（シャコガイ類製有孔製品）

### 2. リュウキュウサルボオ製有孔製品（433点）

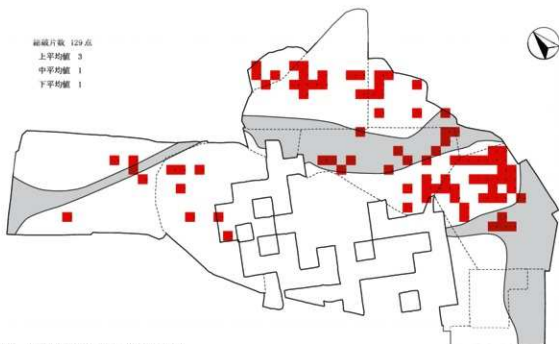
シャコガイ類に次いで点数が多いのが本製品である。平面分布はシャコガイ類と類似するが、僅かに分布範囲が狭い。しかしながらこの両者は生息域が異なるため、素材の獲得方法が全く異なることになる。



第208図 貝平面分布（リュウキュウサルボオ製有孔製品）

### 3. 大形イモガイ (129点)

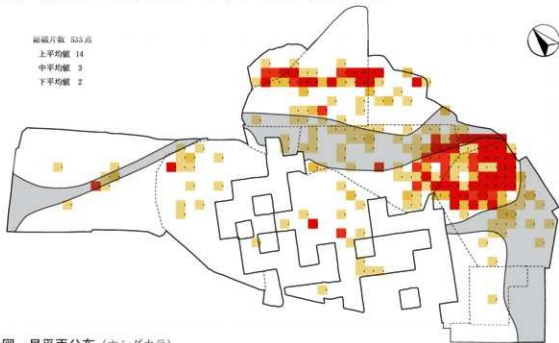
アンボンクロザメ等の大形イモガイは、貝輪・貝符の素材として時折集積された状態で見つかるが、平安山原においてイモガイ集積は検出されず、グリッドあたり6点というのが最多であった。従って、平面分布図にも全く濃淡が現れない結果となった。それでも平面分布からは、平安山原-貝塚Ⅰ・Ⅱ期で比較的多く得られたものと考えられることはできそうである。



第209図 貝平面分布 (大形イモガイ)

### 4. ホシダカラ (533点)

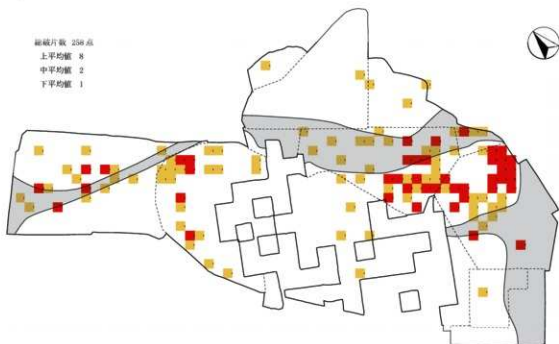
今回多く得られたホシダカラは、背面に抜き割られたような穴を持つものが殆どであるのに対して、その背面を素材とした製品・未製品は僅少であった。そのため食用として身を摘出する際の痕跡である可能性があるが、これほどホシダカラへの執着が認められるのも珍しい事例ではないかと思われる。平面分布からは、大形イモガイとの調和が認められた。



第210図 貝平面分布 (ホシダカラ)

## 5. ヤコウガイ (258点)

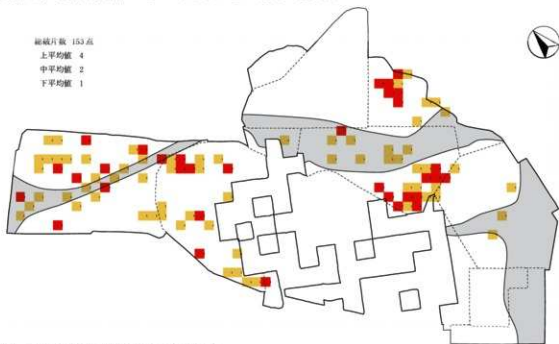
貝匙や螺鈿の素材であるヤコウガイのうち、加工痕跡のない自然貝を取り扱った。素材に向かないような小形のものが認められるため、純粹に食用として獲得されたものが含まれていることが考えられる。それでも平面分布からは、平安山原-貝塚1期及びびグスク2期における利用は低調であったことが看取でき、ヤコウガイ交易が盛行した貝塚II期〜グスクI期の産物とみても大過ないものと思われる。



第211図 貝平面分布 (ヤコウガイ)

## 6. 小形タカラガイ製鍾 (153点)

ハナマルユキを主体とする小形タカラガイの殻底と螺軸部分を利用した貝鍾で、近年までその利用が知られているため、沖縄における貝鍾の中では新相を示すものと考えられる。平面分布からも、平安山原-近世期以降のものであることが看取できる。

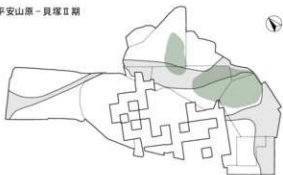


第212図 貝平面分布 (小形タカラガイ製鍾)

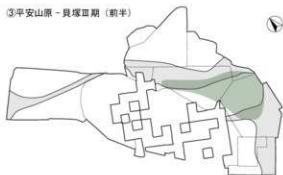
①平安山原 - 貝塚Ⅰ期



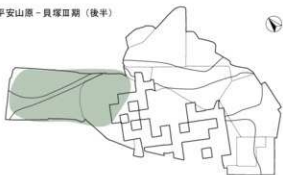
②平安山原 - 貝塚Ⅱ期



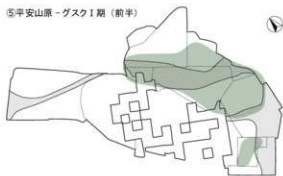
③平安山原 - 貝塚Ⅲ期 (前半)



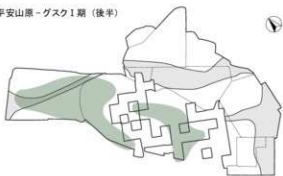
④平安山原 - 貝塚Ⅲ期 (後半)



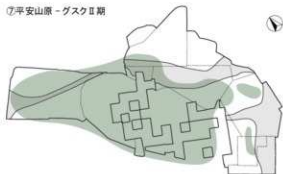
⑤平安山原 - グスクⅠ期 (前半)



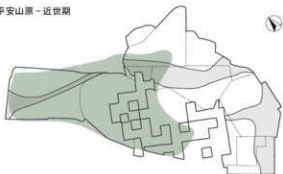
⑥平安山原 - グスクⅠ期 (後半)



⑦平安山原 - グスクⅡ期



⑧平安山原 - 近世期



第 213 図 各期遺物平面分布 (模式)

## 第2節 平安山原の地形と生活空間の変遷

小字平安山原において、これまで実施された発掘調査及び整理・分析作業から得られた知見は多様・豊富である。前節で述べたような遺物の平面分布に加え、各時期遺構配置の疎密、試掘・下層調査含む土層観察、有機遺物の年代測定等の結果を多角的に検討し、当地に人間が定住するに至った経緯やその後の地形変化、戦前に至るまでの生活空間の変遷を推定する。

### 1. 縄文時代

平安山原北東には切り立った岩崖があり、現在でもその標高差は15mほどある。縄文時代以前にはこの崖際まで海岸線が迫っており、水深も比較的あったものと思われる。人間が居住できるスペースは殆どなく、現ナガサ川を挟んで南方に位置する「伊礼原」が当時の人々の生活拠点であった。伊礼原E遺跡の調査知見から、縄文時代中頃に遺跡が大津波に襲われたことが判明しており、海浜に近かった同遺跡は、引き波によって遺跡立地面をなしていた砂を失っている。

この津波によって縄文遺物を含む大量の砂（調査現場では「枝サンゴ砂層」と通称）が平安山原にもたらされ、海水面付近まで堆積した。ここにナガサ川から淡水が供給され続けた結果、層上位の固結が始まる<sup>21</sup>。以後数百年かけてこの平坦な凝結範囲（ビーチロック）は広がっていき、汀線が後退する原因となった。ビーチロックには、縄文時代前期曾畑式・室川下層式や中期船元式・仲泊式等の水磨した土器片が多く含まれている。この大きな自然作用によって、その後の平安山原には居住可能な環境が形作られていくことになる。

註：『平安山原A遺跡』（2016）第IV章第5節「平安山原A遺跡ビーチロックの年代測定」によると、枝サンゴ層が平安山にもたらされた後に生息していた可能性が高いマスオガイ（二枚の貝が揃った状態の自然貝）の測定結果から、少なくとも3109±26BP（補正年代、縄文時代後期に該当する）には固結が始まっていたものと思われる。

### 2. 弥生時代前半～

崖肌の崩落を機に、岩崖前に小規模な砂浜が形成され、平安山原において確認し得る人々の最初の活動が始まった。定住と呼ぶには小規模であるが、崖を背にしたほぼ変わらぬ場所において盛んに燃焼行為を繰り返している。出土した土器から、阿波連浦下層式～浜屋原式期のことである（HB②）。この砂丘の前にはビーチロックが広がっており、第一浜堤はまだ成長半ばであったと思われる、周辺にはアカテツ属等の低地林もみられた<sup>22</sup>。

註：『平安山原B遺跡』（2015）第IV章第3節「平安山原B遺跡の自然科学分析」によると、第一浜堤下に潜り込む泥炭土壌中のアカテツ属樹木片の年代測定結果から、2133±25BP（補正年代）の値が得られている。

### 3. 弥生時代後半～

砂浜の拡大に伴い、大当原式期の人々の活動範囲も広がっていく（HB①）。ビーチロック上で発達した第一浜堤先端では、非常に活発な廃棄活動がなされる（HC貝層Ⅲ群-4・5層<sup>23</sup>）。浜堤後背に発生した自然流路は、何らかの原因で下流側が閉塞したことによって止水し、湿地状となる<sup>22</sup>。



HA②は、抜歯風習をもつ人々の埋葬場所ともなった<sup>213</sup>。ナガサ対岸の伊礼原では、同時期のイモガイ集積遺構が構築されている（『伊礼原D遺跡』(2013)）。

註1：本書第4章第3節「放射性炭素年代測定」によると、HC貝層Ⅲ群-5層出土のイノシシ下顎骨・土器片付着炭化物の年代測定から、それぞれ1,887±25BP及び1,795±26BP（いずれも補正年代）の値が得られている。

註2：『平安山原B遺跡』(2015)第4章第3節「平安山原B遺跡の自然科学分析」によると、B流路最下層である泥炭層中の広葉樹炭化材の年代測定から、概ね5c初頭～6c前半という暦年較正年代を得ている。この頃、B流路の本格的な埋没はまだ始まっていなかったことになる。

註3：抜歯人骨は3体見ついているが、その帰属時期は判然としていない。今後の重要な検討課題としたい。

#### 4. 6世紀～

B流路上流部では砂洲が形成される（HC貝層Ⅲ群-3層）。この砂洲が成長を遂げた結果、流路への水の供給が遮断され、B流路の自然埋没が始まる。平安山での人々の活動の場は完全に第一浜堤上に移り、窪地への廃棄行為が行われている（HC貝層Ⅲ群-1・2層<sup>214</sup>）。唐銭「開元通宝」・「乾元重宝」も当該期に流入していた可能性あり<sup>215</sup>。また対岸の伊礼原では、抜歯を伴わない8世紀前半ごろの開脚屈葬人骨が認められている<sup>216</sup>。

註1：本書第4章第3節「放射性炭素年代測定」によると、HC貝層Ⅲ群-1層出土のイノシシ下顎骨2点の年代測定から、1,340±25BP及び1,140±25BP（いずれも補正年代）の値が得られている。

註2・3：伊礼原D遺跡における唐銭・人骨については、未刊報告書での報告内容となる。

#### 5. 10世紀前後

完全に埋没したB流路粘質シルト上に、溝や炭溜りが構築される。その後、同じ範囲にて耕作土壌が作出され、平安山で最初の農耕が開始されることになる<sup>217</sup>。第二浜堤の誕生とともに平安山の人々の活動範囲も広くなり、伊礼原では廃棄行為も盛んであった<sup>218</sup>。HA②からは人骨が見つかっており、埋葬場所であったことが推定される<sup>219</sup>。

註1：農耕の開始時期については耕作土壌Ⅲd・Ⅲe層の解釈如何で変化するものであり、本書随所において様々な可能性があることを述べてきた。10～11世紀に農耕が開始されたと断じている訳ではないが、文脈上本箇所にてこの事象の記述を行った。

註2：『伊礼原D遺跡』(2013)における遺構4409SX-5層を参照。

註3：『平安山原A遺跡』(2016)第4章第4節：「平安山原A遺跡の自然科学分析」によると、第一浜堤上で検出された人骨05の年代測定から、1072±23BP（補正年代）の値が得られている。

#### 6. 11～14世紀

ナガサ河口兩岸にて「第二浜堤」が発達を遂げ、大きく陸地が拡大する。しかし人々の活動は比較的低調で、カムイヤキ・グスク土器が散在するものの、滑石製石鍋・玉縁口縁白磁の出土はごく僅少であり、南方の小堀原遺跡に集約された感すらある<sup>220</sup>。旧流路範囲での耕作は行われていた可能性があるため、小堀原への生産物供給の場であっただろうか。平安山原におけるウシ・ウマの骨の平面分布は、当該期のそれに近似している。特筆すべきは、HA②と伊礼原D遺跡で1体ずつ、伏

臥屈葬の人骨埋葬が認められることである<sup>112</sup>。

註1：主に『小堀原遺跡』（2012）での報告内容となる。また、小堀原遺跡の特異性については、宮城（2016）に詳しく示されている。

註2：前者は、『平安山原A遺跡』（2016）第IV章第4節「平安山原A遺跡の自然科学分析」によると、人骨11の年代測定から、829±24BP（補正年代）の値が得られている。後者は未刊報告書での報告内容となるが、その帰属年代については前者と大差ない測定結果となった。

## 7. 14～16世紀

ナガサ沿岸で、人々の活動が最活発化する（平安山原ではHA④に集中）。砂丘平坦地において数千基の柱穴を構築しており、同時期の耕作範囲も認められているため、居住・生産域の明瞭な区別があったものと考えられる。また、この頃から砂丘地上においても、黒系有色包含層が堆積するようになってくる。HA④にて刀が刺さったままの遺体が1体検出されているが、これはイレギュラーな状況と考えられ<sup>111</sup>、当時の通常墓域として使われていた範囲がどこであったかは判然としない。

註1：『平安山原A遺跡』（2016）にて報告している。「イレギュラーな状況」とは、①遺体が20代前半の女性であること、②刀が刺さったまま白骨化の過程で埋葬されている、等の事由による。

## 8. 近世前半ごろ

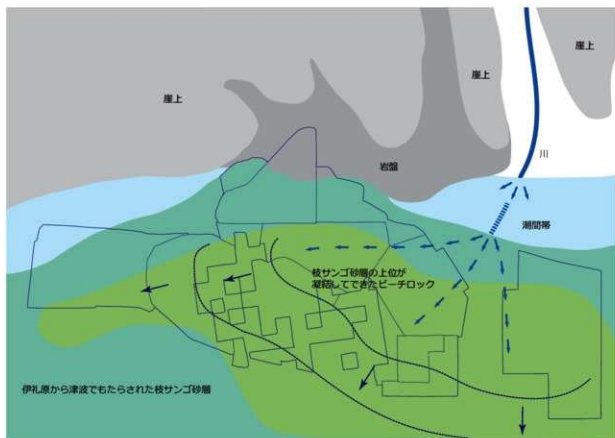
ナガサ沿岸域に構築された石列は、土留めによる地盤上昇をもたらした。その結果、川筋は安定し、その後の広大な耕作域の形成の基点となったものと思われる。

## 9. 近世後半ごろ

集落は、これまでのHA④から「サカイミチ」以北のHA②へとその中心が移動し、近代集落へと引き継がれる。また、B流路の下流部に当たるS-640の人為的埋没が進む。

## 10. 近代

沖縄県土地整理事業を受けて、「サカイミチ」以北の再整備が進められる。S-640は完全に埋め立てられて「ウラムチ」となり、「祝女殿内」を中心として新たな屋敷割りが行われる。

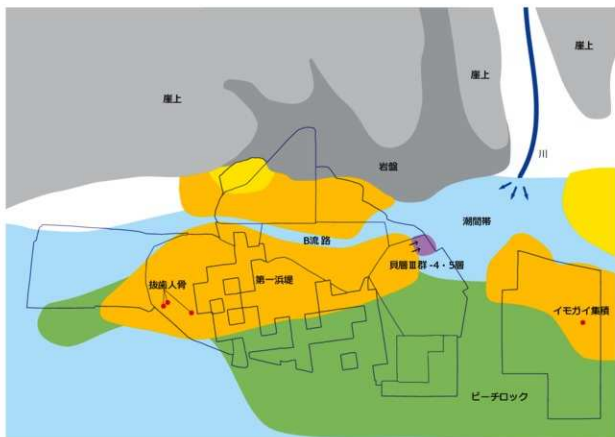


1. 縄文時代

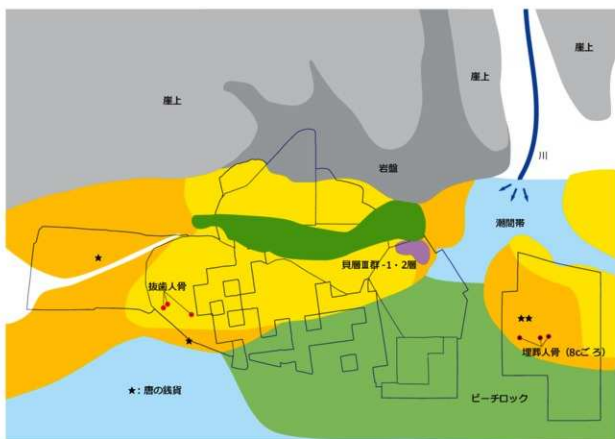


2. 弥生時代前半～

第 214 図 平安山原周辺遺跡 変遷 (1)

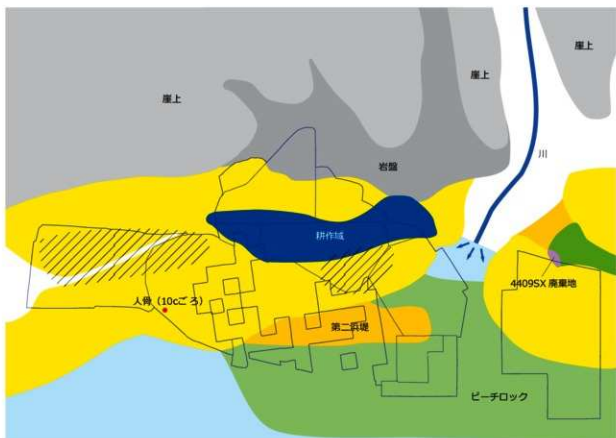


3. 弥生時代後半～

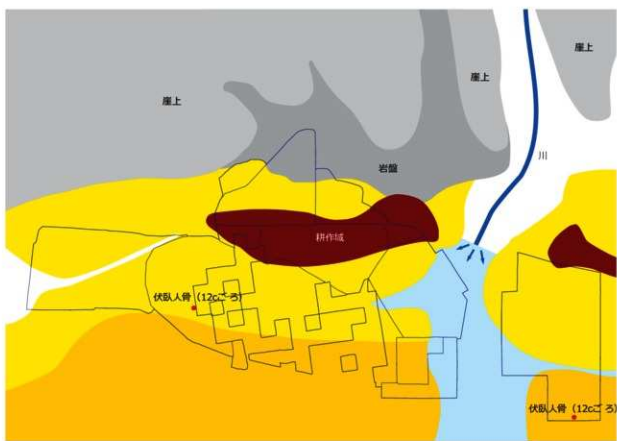


4. 6世紀～

第215図 平安山原周辺遺跡 変遷 (2)



5. 10 世紀前後



6. 11～14世紀

第216図 平安山原周辺遺跡 変遷 (3)



7. 14～16世紀

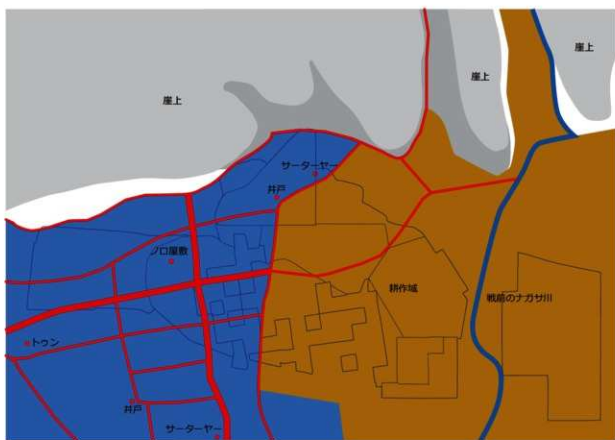


8. 近世前半ごろ

第217図 平安山原周辺遺跡 変遷 (4)

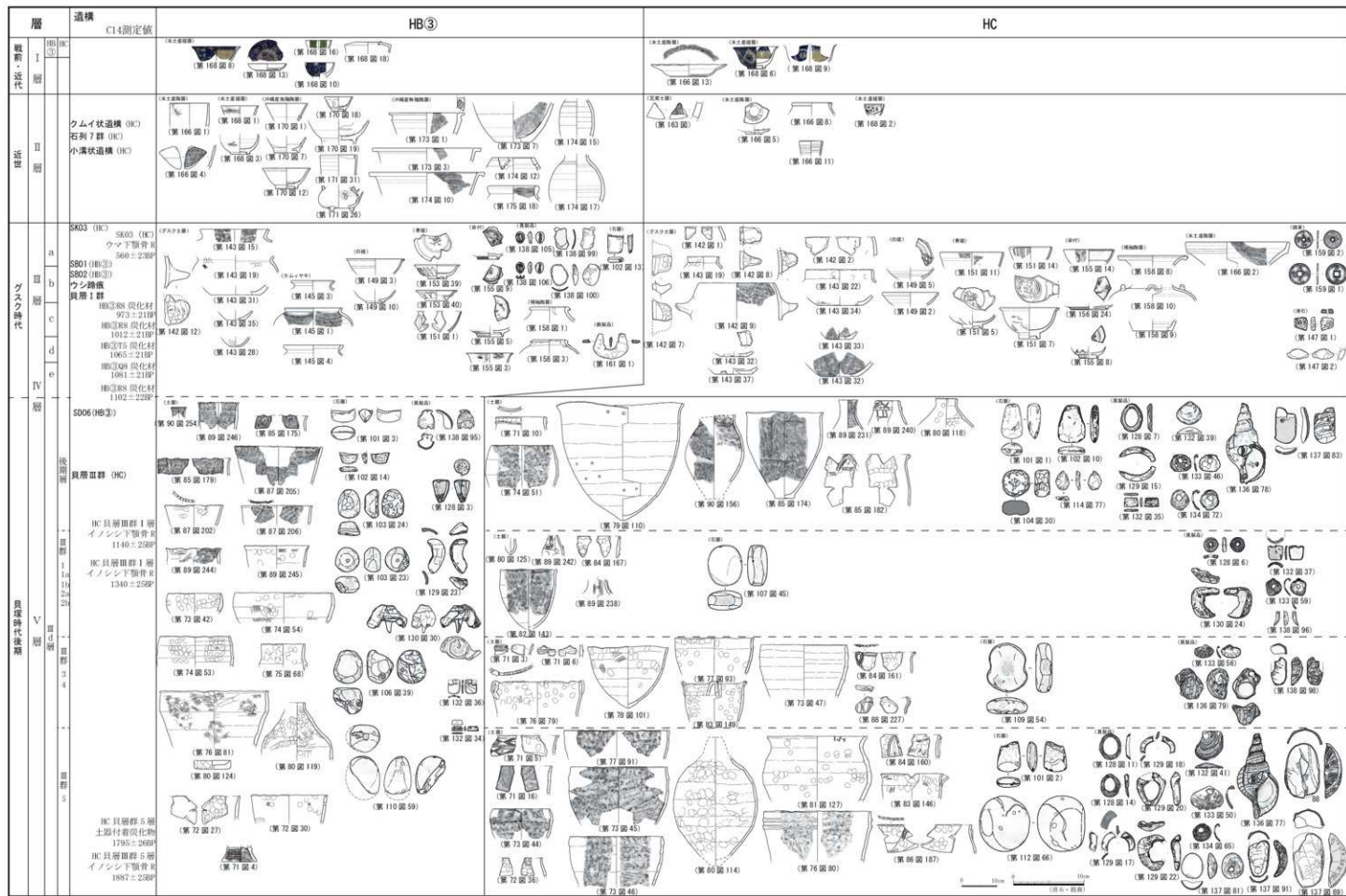


9. 近世後半ごろ



10. 近代～戦前

第218図 平安山原周辺遺跡 変遷 (5)



第219図 時代別出土遺物変遷



### 第3節 平安山原B・C遺跡の遺構と遺物

第1章で述べたように平安山原B・C遺跡の調査で、平安山地区の発掘調査報告は完了する。今回の調査では貝塚時代後期の大当原式土器・アカジャンガー式土器・フェンサ下層式土器が大量に出土し、第110表に示した平安山地区で空白だった時期についての土器分類や、第四章第1節で示した平面分布により、貝塚時代後期以後の浜堤の形成、それ以後の流路の形成や閉塞、それに伴うグスク期の耕作域の展開などが明らかにされた。沖繩先史人のサンゴ礁域における生活が、浜堤砂丘の形成と深く関係し展開していくというひとつのモデルといえよう。ここでは、平安山原C遺跡(HC)・平安山原B遺跡(HB③)の遺構・出土遺物の成果をまとめた。本遺跡は前項の遺物平面分布の状況から6期に分けられ、古い順に略述する。

#### 貝塚時代後期以前

第110表 平安山原地区の主な器類 出土量

種別 地区	貝塚前		阿波連通		大当原		アカジャン		フェンサ		グスク		カマイ		漂石		白磁		青磁		埴付		精緻		本磁		本磁		先高		片断		陶質		本磁		本磁				
	期人	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式	土層式				
HB①	186	214	5,657	740	100	83	7																																		
HB②イ	171	600	5,052	10	30	2	2																																		
HB②ロ				10	27	88	44	3																																	
HB②不明	1	12	7																																						
HB②イ	3	3	189	56	19	17	3																																		
HB②ロ				10	349	17	1																																		
HB②不明				1																																					
不明	2	3	28	1																																					
HB③						1,107	345	83																																	
HA①						497	379	20																																	
HA②						169	91	10																																	
HA③						52	40	5																																	
HA④	1																																								
HB②	6		187	13,442	862	378	147	16																																	
HC	3		159	7,069	216	164	180	7																																	

凡例：土器は既存の形式に属し、産地は含まない。HA、後層土器(アカジャンガー式/フェンサ下層式)でまとめた。白磁・青磁・埴付の時代をまとめた。地区不明は含まない。

縄文時代の船元系土器・室川下層式土器、縄文時代後期の面縄東洞式土器、縄文時代晩期の有文のカヤウチバンタ式土器及びチャート製品が各々1～3点出土している。出土層位はV層(後期層)や貝層Ⅲ群からの出土であるが、縄文時代に属する伊礼原遺跡(2007)・伊礼原E遺跡(2010)の遺物が高波により、広く平安山地区まで及んだためと思われる<sup>(註1)</sup>。

#### 貝塚時代後期：Ⅰ・Ⅱ期

**遺構：**第23図の廃棄貝層の分布で示したように貝塚時代後期の貝層群は貝層Ⅲ群を中心にⅡ～V群が確認された。HB③やHCでも浜堤の高まりに遺物が分布し、B流路やC流路の存在が明らかになった。特にHC貝層Ⅲ群は最も厚い所で125cmを測り、上と下層で土器の相異の可能性が考えられ、上層(1・2)と下層(5)のイノシシ下顎骨で放射年代測定した。その結果、貝層Ⅲ群下層(5層)が1,890±25BP、貝層Ⅲ群上層(1層)から1,140±25BP及び1,340±25BPの値が得られた。上層の貝層Ⅲ群1b層下位より軽石の水平堆積も検出され、同層以前に、汀線だった可能性も確認出来た。  
**出土遺物：**土器の平面分布(第63図)や接合の範囲(第66図)をみると、上位の近代からグスク期の攪乱を受けているが、大方は遺跡形成時のままと判断された。下層で尖底土器(大当原式土器)、上層でくびれ平底土器(主にアカジャンガー式土器)が主体をなし、従来いわれている土器の新旧関係について上・下層で放射性年代測定によると約400年の差が確認された。第22表の底部の出土量や第64図貝層Ⅲ群とV層(後期層)の土器変遷にも示すように、土器形式が徐々に変化するのである。下層からは有文(第71図5)・片口注口(図146)・外反口縁(図127)など、大当原式土器やアカジャンガー式土器の範疇に含まれないものが得られ、その出自は今後の検討課題である。粘土接合面の隆起が特徴である大当原式土器と、それに後続する器面調整のよいアカジャンガー式土器は、土器の製作技法においても顕著な異なりをみせる。両土器の系譜は他の遺物や外的要因

第111表 東日本系土器出土一覧(南九州～沖縄)

島	遺跡	型式	備考	時期	資料等	図定・報告	報告年
鹿児島	千広遺跡	加賀利B1式段脚	注口土器(実谷形個人?)	縄文時代後期中葉～後葉(輪+幅式・市来式)	自然遺跡	前田亮一	2003
鹿児島	上加世田遺跡	東日本の雲脚知を伴った土器	双口土器, 在地型	縄文時代晩期(上加世田式・入缶式)	出土地点不明	河口貞徳	1990
種子島	大瀧遺跡	文行1～Ⅲa式	深鉢形, 浅鉢形, 台付皿形(個人品)	縄文時代晩期後半～晩期中葉	表採	宮崎卓吉・設楽博己	1989
種子島	大瀧遺跡	大瀧C2式段脚	広口土器, 在地型	縄文時代晩期～弥生時代前期(一湾簀式・大瀧黒川系)主体	A地点・大瀧黒川系近隣	青嶋和幸 東 和幸	1999
奄美大島	千広遺跡	大瀧C2～A1段脚	浅鉢, 在地型	貝塚時代後1期初頭(阿波連浦下層式)	ほぼ単独型式	石川日出志	1986
奄美大島	ウツラ遺跡	大瀧C2～A1段脚	在地型	貝塚時代後2期初頭(阿波連浦下層式)	ほぼ単独型式	石川日出志	2002
嘉手苺島	個人蔵	大瀧C2～A1段脚	在地型?		表採		
徳之島	トマチン遺跡	浮羅文土器段脚?	在地型	貝塚時代後3期末(仲原式)	ほぼ単独型式	伊藤隆二	2013
沖縄島	平安山原B2	大瀧A1式	浅鉢器台	貝塚時代後2期(阿波連浦・糸屋原式土器)	阿波連浦下層式に關係小・設楽博己・他		2016

(注) 上加世田遺跡: 設楽・小林・水之江のコメントがある(木下2001)、水之江のコメントを表記。平安山原B2: 設楽博己の図定は写真によるもの

なども含めて考えるべきであろう。また、くびれ平底(Ⅳ・Ⅴ類)の中でもⅤ類(フェンサ下層式土器)はHC D11～14に纏まるようで、HA③・②の平面分布と総合すると時期的には第1節で示した平面分布(第195図)のようにHAにも広がり、後述のグスクⅠ期の平面分布に連続するようである。

HB③では、東日本の亀ヶ岡系の浅鉢の器台(第71図4)が出土した。設楽博己氏に写真を確認していただいたところ「東日本の大洞系土器で大洞A1式併行の可能性が高い」<sup>(註2)</sup>とのコメントであった。東日本系土器の出土は沖縄島では初例で九州との関連を見るため、第111表に鹿児島以南の東日本系土器の出土一覧を示した<sup>(註3)</sup>。これによると在地産を含め、7件が確認され東日本を起源とする土器が九州島から島伝いに連続して見られる。器台の部分は鹿児島県上加世田遺跡の双口土器に類似するが、同品は文様が施されていない<sup>(註4)</sup>。大洞A1式土器は本土においては縄文晩期後半に位置づけられるもので、平安山原の内陸側のHB②イでは阿波連浦下層式・浜屋原式土器が主体をなし、弥生式土器も数点確認されていることから同地区に由来する可能性が高い。東日本系の縄文土器の出土は、沖縄島で出土する新潟県糸魚川産のヒスイも含め、縄文晩期～弥生前半に新たな文物の交流を示唆しているようである。

石器は磨石が多いようで、他の貝塚時代後期と同様の傾向を示す。サイズを見ると9cm以下(3類)で、楕円形(Ⅲ類)が主体を示す(第34表)ことから手持ちにするためであろう。石皿はすべてHCで出土することから、この時期の生活面はHCが中心であったことを窺わせる。石斧は刃部の出土が多く、使用による破損と考えられ、HB③に多い。

貝製品は人工遺物の中で土器について出土点数が多く、そのほとんどは二枚貝有孔製品である(巻首図版15)。第129図15はゴホウラの半環状製品としたもので一端を挟り、「U」字状の形状からイノシシの牙製品の模造品が想定される。貝製模造品<sup>(註5)</sup>は貝塚時代前Ⅴ期に盛行するものであるが、この時期の遺跡は確認されてない。

第129図15は広田遺跡に見られる点刻文を施した有文具輪である。類似は県内で3例、県外では種子島の広田遺跡、長野県の八丁鏡塚古墳(木下2000)で出土。また、第132図34の貝符(広田下層タイプ)も有文具輪と同時期に属し、木下は有文具輪について「4世紀ごろ沖縄諸島人が広田遺跡人と接触したことで沖縄諸島に広田遺跡の貝製品の影響を受けた種々の貝製品が登場する」としている。HB②イや伊礼原遺跡では南海産貝輪交易初期の諸岡型貝輪(ゴホウラ)が出土しており、本遺跡では小形のゴホウラを用いた背面型貝輪か、あるいはその未製品が出土。貝輪の加工も粗割の後、貝輪自体を水平に研磨する方法が取られている。貝輪にも有文や背面型のみと時期差が認められる。また、ヤコウガイの殻や匙が多く得られており、貝錘(二枚貝有孔製品)が多く、貝符が伴うなど(島袋1999)、奄美諸島の「ヤコウガイ大量出土遺跡」に類するような状況を示す。ヤコ

ウガイは破片が多く、製品も少ないものの、ほかの自然貝をみると内湾性の貝が多いことから、やはり食用としての採集は考えにくい。匙は、有柄と無柄のタイプがあり、匙の形状にも、いくつかのバリエーションが見られる。類例としては伊江島ナガラ原西貝塚・久米島清水貝塚など大当原式土器を主体とする遺跡に多い。

二枚貝有孔製品は1,426点、21種の貝が得られた。出土の多さから各々の貝の平均重量・大きさ・孔の位置を分析した。その結果、係数1.1～1.5のものが最も適していると考えられる。貝塚時代後期に主に出土するシャコガイ類・メンガイ類・リュウキュウサルボオはこの示数に含まれ、網の錘の可能性が高いとした。中には前述の示数からはずれずる貝種もあり、別の用途の可能性も出てきた(第59表)。対象物である魚類遺体の出土は二枚貝有孔製品の出土量と比べると少ないが、他の平安山原地区の中でも多い方である。そのほとんどは二枚貝有孔製品と同じ貝層Ⅲ群の出土である。また、ヒメジャコは二枚貝有孔製品と自然貝の大きさが貝層Ⅲ群の上層と下層では異なり、上層では小形化する。

大形イモガイとホシダカラの平面分布では貝塚Ⅰ・Ⅱ期の遺物と同様の分布(第209・210図)がみられた。大形イモガイは貝集積遺構や貝輪・貝符などの製品に用いられるもので、本遺跡からは広田下層タイプなどイモガイを用いたものが3点得られている。伊礼原D遺跡の集積貝などと大きさを比較すると本遺跡のものは小さい。ホシダカラの背面を除去したもの(図版136)が多数得られているが、ホシダカラ製の貝匙は1点のみの出土である。これらの状況から、大形イモガイとホシダカラは食用として採取したものと思われる。

脊椎動物遺体のうち、HC貝層Ⅲ群5層でジュゴンの頭骨がまとまって得られた。平安山原B遺跡(試掘2008)でも完形の頭骨(2008-第17図)が検出されており、樋泉は意図的な埋納の可能性を指摘している。魚の種類をみるとフエフキダイ科・ブダイ科・ハリゼンボン科が多いようで、中でもハリゼンボン科は棘が多く、岩礁近くに棲息することから網漁には適さないようで、漁網錘と魚種の関係は今後の課題である。

### グスクⅠ期

**遺構**：HB③で建物址SB01・SB02などが検出された。遺物の平面分布をみるとグスク土器はHB③A5・6とHC貝層Ⅲ群上部のS～A15～16に当該期の遺物が一定のまとまりを見せ、明瞭な遺構は検出されていないが、生活面が想定される。その場所はB流路の外縁にあたる。カムイヤキと白磁玉縁口縁碗はグスク土器とは異なりB流路内に見られ、B流路が陸地化した後のものと考えられ、グスク土器との間に若干の時期差がある。

**遺物**：グスク土器・滑石製品・カムイヤキ・白磁玉縁碗があげられる。第69表で北谷町内の4器種の出土量を示した。地区によって遺物の出土量がかなり異なり、その構成比については宮城弘樹氏が4類に分けており、本遺跡は滑石の出土量が少ないことから宮城による3類「移行期集落」に分類される。

しかし、平安山原、伊礼原、小堀原・後兼久原と狭い範囲での4種の構成の差は、集団間のより具体的な役割の検討がなされるべきであろう。

グスク土器は少数ながら鍋Aの滑石模倣土器、鍋Bの羽釜、鍋Cの横耳など、この時期に見られる器種がほぼ得られており、前述のグリッドを中心に接合されている。鍋Aの滑石模倣土器は今回、方形横耳は検出されず、鍋Bの羽釜タイプは形状や胎土から搬入の可能性が高い。鍋Cは横耳を側面に2個配するもので、その断面は斜め上を向き、横耳の機能を示唆するものと思われる。前2者が滑石製石鍋の影響を受けたのは明らかで、鍋Cの横耳のタイプは波照間島の下田原式土器に形状

が類似するとする説<sup>(註6)</sup>がある。滑石製石鍋が波照間島大泊浜貝塚(1986)で出土しており、グスク期には「琉球圏」(安里1991)の枠組みの中にあり、その可能性を留意したい。甕形の頸部が「く」字状を呈し、土師器の影響が指摘され、同様な土器は後兼久原遺跡(2004)や宮古島市住屋遺跡(1999)で出土している。また、底部の立ち上がりは糸数城跡(1991)や稲福遺跡(1983)から出土する土器と類似することから、時期は若干新しくなると思われる。HB③の耕作域(IV層上面)から風呂鉢(第161図)が出土し、その帰属年代をグスクⅠ期と下限とした。風呂鉢の出土はこの時期に農耕が行われていたことを具体的に裏付けるものである。同時期の後兼久原遺跡からは砂鉄が検出されたが、精錬製鉄には向かないよう<sup>(註7)</sup>で、風呂鉢は搬入品の可能性が高い。

### グスクⅡ期

**遺構:** 近世の遺構としては石列群がHCSK03(土坑)の最下層から複数のウシ・ウマの下顎骨と南宋銭が検出され、ウマ下顎骨の放射性炭素年代測定を行ったところ560±20BPの値が得られた。南宋銭の使用年代とほぼ一致する。当該期の遺物の平面分布(第196・197図)からグスクⅠ・Ⅱ期は平安山原A遺跡(2016)に主体がある。

**遺物:** 全体的に出土量は少なく、その平面分布からHB③はHA④の延長部分と捉えられ、HCでは部分的に見られる。青磁・染付・褐釉陶器が得られ、青磁の図39がHA④のものと接合された。青磁は龍泉窯の碗が多く、褐釉陶器は中国産・タイ産が得られている。染付は明代と清代のものに分かれ、明代はHA④側に多い。備前産の播鉢(15c～16c前半)が出土、HA④や伊礼原D遺跡(2013)・後兼久原遺跡でも得られ、中国陶磁器が卓越して出土する時期に一定量の出土がある。また一時期古い備前播鉢は北谷城(2010)や首里城京の内(1998)に出土しており、継続的な搬入が認められる。

腹面利用のヤコウガイ匙・タカラガイ製鍾は平面分布の状況やグスク期の小堀原遺跡や後兼久原遺跡ではみられないことからグスクⅡ期以降に属すると思われる。

### 近世期

**遺構:** HB③で2群、HCで5群の石列遺構、HB③SK04・HCクムイ状遺構、木杭、縄物などが検出された。本遺跡以外にも木杭や石列遺構は伊礼原D遺跡や伊礼原E遺跡でも検出されており、キャンブ桑江北側一帯が低地で水や流路など自然地形を改変するための土木工事が行われていたようである。HB③の土坑群の埋土が平安山原B遺跡試掘の第1号高床式建物址(2008-巻首図版7)とした柱穴の埋土と類似、HB①まで近世遺構が広がっていた可能性が考えられる。

**遺物:** 染付・白磁・瓦質土器・本土産陶磁器や木製品などがあるが、出土数は相対的に少ない。この頃には居住域と耕作域が明確に分かれ、本遺跡部分は耕作域に相当していたようである。瓦質土器の播鉢が1点得られた。本品は平安山原A遺跡(2016)で瓦質b(湧田産)としたもので、その本体はHA④が想定される。少量ではあるが、平安山原A遺跡(2016)では埴も得られ、近接する伊礼原D遺跡でも出土する。

図2の近世有田産の小碗は、良品で「祝女殿内小」(平安山原A遺跡2016)の屋敷近くで得られている。同屋敷の境界部分に遺物が多く、HB②・HB③でも同様の資料が得られていることから本品もその一連の遺物であろう。また、灰釉碗など古手の沖縄産施釉陶器や、口唇に粘土目の残る沖縄産無釉陶器の播鉢などもここからの出土である。

### 近代

**遺構:** 「祝女殿内小」屋敷の雨端(SL03)・石塀(SL04)・SL05・外溝(SD01)などが確認された。瓦もこれらの遺構を中心出土しており、瓦葺きだったことが想定される。これらの遺構はHB①・HB②・HA④で検出された遺構の延長部分で平安山集落の東側部分であることが証左された。

**遺物**：沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・陶質土器・本土産陶磁器・円盤状製品などが出土。これらは主にHB③のS・T・A・Q・R-14・15に集中して得られ、遺構の検出と符合する。

本土産陶磁器の下限としては三重産の硬質スूप皿、国民食器、統制番号の賦された型紙刷りなどが得られた。本土産磁器はHCとHB③の境に多く出土した。戦後の造成により移動した可能性も考えられる。平安山原A遺跡の成果も含め、『北谷町の地名』(2006)で調査されたことが、考古学的に実証された。

以上の状況と、これまでの平安山原A・B・C遺跡の報告から平安山原地区はHB②イ(浜屋原式土器主体)→HB①・HB③・HC貝層Ⅲ群(大当原式土器)→HC V層(アカジャンガー式土器)→HA①・②(フェンサ下層式土器)→HB②・HCⅢ層(グスク土器・カムイヤキ)→HA④(青磁・白磁・染付)→HA②(沖縄産陶器)→HA②・③(本土産磁器(近代))の変遷が遺物からも窺える。平安山原B・C遺跡では貝塚Ⅱ期の大当原式土器、貝塚Ⅲ期のくびれ平底土器の出土で平安山地区の歴史の変遷がつながり、それに伴う浜堤および流路の形成が明らかになった。これにより、沖縄先史時代から近代までの沖積低地での浜堤の展開と人々の暮らしが密接につながっている様子が具体的に明らかになった。

#### <今後の課題>

①今回の調査でも大当原式土器はバリエーションがあり、細分を試みたが、粘土帯の継ぎ目の明瞭な(A・B類)が古く、はっきりしないC類が新しいことがわかったが、出土量が多く、結論を出すまでには至らなかった。

②くびれ平底土器も胎土や形状からアカジャンガー式土器とフェンサ下層式土器を分けたが、その中間タイプもある。土器分類形状を含め、胎土・器面調整など他の遺跡と統一性を図るのは時間を要する。

③縄文晩期の東日本の大洞A系土器の出土で、縄文文化の交流のあり方を見直す必要がある。

④貝塚時代後期における漁撈のあり方(二枚貝有孔製品の量に対して魚骨が少ない)。

⑤大当原式期の貝輪が背面型のみで、貝集積遺構もなく、古墳時代の南海産貝輪交易のあり方を再度検討する時期に迫られている。

⑥風呂鎌の出土からグスク時代初期の農具が明らかになったが、近隣の後兼久原遺跡からは砂鉄や鉄製品も得られており、鉄生産の面から若干の時期差が想定される。また、滑石製品の出土量が平安山原地区と小堀原・後兼久原地区の狭い地域で異なり、グスクⅠ期における集団間のあり方をより詳細に検討できるであろう。

#### <註・引用文献>

註1：伊礼原遺跡では縄文後期に暴浪または高波の痕跡が確認されている。伊礼原E遺跡は縄文中期～後期に津波によって遺跡の半分が破壊され、枝サンゴ等とともに再堆積した遺跡で、その際の遺物が枝サンゴ層に混じって広範囲に出土する。(伊礼原遺跡 2007、伊礼原E遺跡 2010)

註2：2016年9月、来沖していた東京大学の国木田氏を通して、設楽博巳氏に写真を見ていただいた。

註3：第111表 東日本系土器出土一覧(南九州～沖縄)の作成は鹿児島大学 新里貴之・鹿児島県埋蔵文化財センター 前迫亮一氏の教示を受けた。

註4：鹿児島県上加世田遺跡では獣形勾玉も出土。呪術に関する可能性が指摘されている(河口貞徳・木下 2001)

註5：貝製模造品はサメ歯を模造したものがシヌグ堂遺跡やキガ浜貝塚などで縄文後～晩期に盛行する。

註6：国分直一「沖縄グスク式土器と八重山式土器には製作技法において著しい類似」(国分直一1976)、安里嗣淳との論争がある。

註7：後兼久原遺跡の砂鉄は粒子が小さいことから精錬製鉄にはむかない(大澤 2003「後兼久原遺跡」)

参考・引用文献

書名・編名	発行年	編著者・発行機関・集号	参考・引用箇所
『北谷城』	1984	北谷町文化財調査報告書第1集	全般
『北谷城第7遺跡』	1985	北谷町文化財調査報告書第2集	全般
『伊礼原B遺跡』	1989	北谷町文化財調査報告書第8集	全般
『北谷城』	1991	北谷町文化財調査報告書第11集	全般
『玉代勢原遺跡』	1993	北谷町文化財調査報告書第13集	全般
『伊礼伊森原遺跡』	1998	北谷町文化財調査報告書第18集	全般
『後兼久原遺跡』	2003	北谷町文化財調査報告書第21集	全般
『大伴原古墓群』	2003	北谷町文化財調査報告書第22集	全般
『キャンプ桑江五遺に伴う試掘調査』	2005	北谷町文化財調査報告書第23集	全般
『北谷町の地名』	2006	北谷町文化財調査報告書第24集	全般
『伊礼原遺跡』	2007	北谷町文化財調査報告書第26集	全般
『伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡』	2008	北谷町文化財調査報告書第27集	全般
『伊礼原D遺跡』	2008	北谷町文化財調査報告書第28集	全般
『平安山原B遺跡』	2008	北谷町文化財調査報告書第29集	全般
『小嵐原遺跡』	2009	北谷町文化財調査報告書第30集	全般
『伊礼原E遺跡』	2010	北谷町文化財調査報告書第31集	全般
『北谷城』	2010	北谷町文化財調査報告書第32集	全般
『平安山原地区試掘調査』	2011	北谷町文化財調査報告書第33集	全般
『小嵐原遺跡』	2012	北谷町文化財調査報告書第34集	全般
『伊礼原D遺跡』	2013	北谷町文化財調査報告書第35集	全般
『伊礼原遺跡・伊礼原A遺跡』	2014	北谷町文化財調査報告書第36集	全般
『平安山原B遺跡』	2015	北谷町文化財調査報告書第37集	全般
『平安山原A遺跡』	2016	北谷町文化財調査報告書第38集	全般
『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』	2014	高宮広士・新里貴之編 / 琉球列島先史・原始時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集第1集 / 六一書房	環境通史
『沖縄県古島の海岸砂の特徴とその起源』	2013	中井均・中井睦美 / 都留文科大学研究紀要第77集	層序
『稲の日本史』	2002	佐藤洋一郎 / 角川選書337 / 角川書店	層序・鉄製品
『水田土塚』	1976	三上正則 / 株式会社クボタ / URBAN KUBOTA NO.13	遺構
『水田跡に関する疑似畦畔Bと連続耕作—仙台市富沢遺跡の事例から—』	1999	佐藤甲二 / 『人類誌集録1999』東京都立大学考古学報告4	遺構
『琉球列島水田立地論—序説として—』	1998	中鉢良護 / 北谷町文化財調査報告書第18集	遺構
『新城下原第二遺跡』	2006	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第35集	遺構
『那崎原遺跡』	1996	那覇市文化財調査報告書第30集	遺構
『富沢遺跡』	2007	仙台市文化財調査報告書第313集	遺構
『中国唐銭「開元通宝」琉球圏の形成』	1991	安里嗣淳 / 沖縄県教育庁文化課紀要第7号	土器・まとめ
『渡谷村大当原貝塚発掘調査概報』	1993	高宮廣衛・知念勇・原本義彦・仲村健 / 『渡谷村立歴史民俗資料館紀要』第17集	土器
『縄文晩期からの視点』	2004	設楽博巳・小林謙一 / 『季刊考古学』第88号	土器
『沖縄諸島の土器』	2004	新里貴之 / 『考古資料大観12 貝塚後期文化』 / 高宮廣衛・知念勇	土器
『縄文社会の変容と弥生社会の形成』	2007	小林青樹 / 『考古学研究54-2』 / 考古学研究会	土器
『黒川式土器の再検討』	2009	水ノ江和同 / 『新弥生時代の始まり』第4巻 / 雄山閣	土器
『総覧 縄文土器』	2008	小林達雄編 / 『総覧 縄文土器』刊行委員会	土器
『徳之島トマチン遺跡の研究』	2013	新里貴之 / 鹿児島大学	土器
『ナガラ原東貝塚の研究』	2013	木下尚子 / 熊本大学	土器
『九州縄文文化の研究』	2012	水ノ江和同 / 雄山閣	土器
『沖縄文化財調査報告 1956～1962』	1976	沖縄県教育委員会 / 那覇出版社	土器
『恩納村熱田貝塚発掘調査報告書』	1979	沖縄県文化財調査報告書第23集	土器・貝製品
『稲嶺遺跡発掘調査報告書』	1983	沖縄県文化財調査報告書第50集	土器・まとめ
『貝志原貝塚の概要』	1985	沖縄県文化財調査報告書第61集	土器
『下田原貝塚・大泊貝塚』	1986	沖縄県文化財調査報告書第74集	土器・まとめ
『平敷塚トウバル遺跡』	1996	沖縄県文化財調査報告書第125集	土器
『伊江島貝志原貝塚 発掘調査報告書』	1997	沖縄県文化財調査報告書第130集	土器

参考・引用文献

書名・編名	発行年	編著者・発行機関・集号	参考・引用箇所
『真栄里貝塚』	1999	糸満市文化財調査報告書第16集	土器
『具志川グスク1』	2006	うるま市文化財調査報告書第4集	土器
『喜屋武グスク』	1988	具志川市教育委員会	土器
『宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚』	1980	具志川市教育委員会	土器・骨製品
『大堂原貝塚』	2005	名護市文化財調査報告書第17集	土器・貝製品
『住屋遺跡(1)』	1999	平良市埋蔵文化財調査報告書第4集	土器・まとめ
『津堅貝塚』	2005	勝連町の文化財第23集	土器
『伊江島ナガラ原西貝塚 緊急発掘調査報告書 概報編』	1979	伊江村文化財調査報告書第8集	土器
『清水貝塚』	1989	具志川村文化財調査報告書第1集	土器・石器
『糸敷城跡』	1991	玉城村文化財調査報告書第1集	土器・まとめ
『ウツタ田遺跡』	2002	能町町文化財発掘調査報告書(2)	土器
『奄美 神縄 岩石動物図鑑』	1985	加藤祐三 / 新星図書出版	石器
『因説 石器入門事典 - 縄文 -』	1991	鈴木道之助 / 柏書房	石器
『縄文文化の研究 7 道具と技術』	1995	加藤晋平・小林達雄・藤本強編 / 雄山閣	石器
『考古資料大観 第9巻』	2002	北條秀隆・柳宜佳男 / 小学館	石器
『考古資料の岩石学』	2006	五十嵐俊雄 / ハリマ・サーヴェイ	石器
『軽石 - 海底火山からのメッセージ -』	2009	加藤祐三 / 八坂書房	石器
『宇佐浜遺跡』	1989	沖縄県文化財調査報告書第93集	石器
『首里城 - 南殿、北殿の遺構調査 -』	1995	沖縄県文化財調査報告書第120集	石器
『首里城跡 一下之御庭・用物庫跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門発掘調査報告 -』	2001	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第3集	石器
『サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告書Ⅱ』	2015	沖縄県立博物館・美術館	石器
『宝貝の鐘』	1971	岸上興一郎 / 『民俗学研究』35巻4号	貝製品
『螺蓋製貝斧』	1982	三島格 / 『観川光夫先生還暦記念論集』 / 観川光夫還暦記念会	貝製品
『オオツノハの供給地』	1994	黒住裕二 / 『南島考古』第14号 / 沖縄考古学会	貝製品
『割椎雅もつヤコウガイの蓋について』	1996	角田真也・伊藤慎二 / 『史学研究集録』第21号 / 國學院大学大学院 日本史学専攻大学院会	貝製品
『八丁館跡1号墳スジガイ・ゴホウ銅について』『長野県史跡八丁館跡』	2000	木下尚子 / 須賀市教育委員会	貝製品
『装身具から見た広田遺跡』『種子島 広田遺跡』	2003	木下尚子 / 鹿児島歴史資料センター黎明館	貝製品
『奄美・沖縄諸島の魚網錐の形態的研究(その3) - 考古資料 -』	2004	島袋春美 / 『南島考古』第23号 / 沖縄考古学会	貝製品
『沖縄の民具』	1973	上江洲均 / 慶友社	貝製品
『南島貝文化の研究 - 貝の道の考古学 -』	1996	木下尚子 / 法政大学出版局	貝製品
『津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書』	1978	沖縄県文化財調査報告書第17集	貝製品
『北原貝塚』	1995	沖縄県文化財調査報告書第123集	貝製品
『沖縄県伊江島ナガラ原西貝塚の試掘調査』	1977	伊江村文化財調査報告書第3集	貝製品
『具志堅貝塚発掘調査報告書』	1986	本部町文化財調査報告書第3集	貝製品
『備瀬貝塚』	1986	本部町文化財調査報告書第4集	貝製品
『沖縄県・久米島具志川村 清水貝塚発掘調査報告書』	1989	具志川村文化財調査報告書第1集	貝製品
『嘉門貝塚B』	1993	浦添市文化財調査報告書第21集	貝製品
『原純遺跡』	2009	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(143)	貝製品
『広田遺跡』	2007	南種子町教育委員会	貝製品
『化石サメ歯製品について』	1987	島袋春美 / 『南島だより』第37号 / 沖縄考古学会	骨製品
『喜友名貝塚 - 喜友名グスク(1)』	1999	沖縄県文化財調査報告書第134集	骨製品
『琉球列島における農業生産の成立と発展』	2003	新里亮人 / 『考古学研究』49-1 / 考古学研究会	カムイヤキ
『カムイヤキとカムイヤキ古窯跡群』特集 古代・中世の日本と奄美・沖縄諸島	2007	新里亮人 / 『東アジアの古代』130号 / 大和書房	カムイヤキ
『タスク時代初期における出土滑石からみた集団関係』	2016	宮城弘樹 / 『南島文化』沖縄国際大学南島文化研究所紀要第38号	滑石製品・まとめ
『砂辺サーク原遺跡』	1987	沖縄県文化財調査報告書第81集	滑石製品
『後兼久原遺跡』	2004	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第22集	滑石製品
『深堀遺跡』	2004	長崎市教育委員会	滑石製品
『大宰府出土の輸入中国磁器について』	1978	森田勉・横田賢次郎 / 研究論集4 / 九州歴史資料館	白磁・青磁

## 参考・引用文献

書名・編名	発行年	編著者・発行機関・集号	参考・引用箇所
『14～16世紀の白磁の分類と編年』	1982	森田勉・横田賢次郎 / 研究論集4 / 九州歴史資料館	白磁
『首里城跡—御内原北地区—』	2010	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第54集	白磁・青磁・染付・髹輪・近世代陶磁器
『14～16世紀の青磁碗の分類』	1982	上田秀夫 / 貿易陶磁研究NO2 / 日本貿易陶磁研究会	青磁
『15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代』	1982	小野正敏 / 貿易陶磁研究NO2 / 日本貿易陶磁研究会	染付
『朝鮮半島と琉球諸島における銭貨流通と出土銭』	2000	門田誠一 / 同志社大学公開講座2000年度	銭貨
『琉球出土銭貨の研究』	2008	宮城弘樹 / 出土銭貨第28号 / 出土銭貨研究会	銭貨
『日本出土銭貨概覧』	1996	永井久美男 / 兵庫埋蔵文化調査会	銭貨
『久米島下地原洞収集の銀先について』	1980	上江洲均 / 沖縄県立博物館紀要第6号	鉄製品
『古代における鉄製銀先の研究—7世紀後半～11世紀の関東・東北を中心に—』	2010	林正之 / 東京大学考古学研究室研究紀要第24号	鉄製品
『沖縄の暮らしと民具』	1982	上江洲均 / 考古民俗叢書19 / 慶友社	鉄製品
『琉球諸島の民具』	1983	上江洲均・神崎宣武・工藤昌功 / 民族文化双書2 / 未栄社	鉄製品
『日本民具辞典』	1997	日本民具学会編 / ぎょうせい	鉄製品
『沖縄の民具と生活—沖縄民俗誌1—』	2005	上江洲均 / 琉球孤叢書⑩ / 榕樹書林	鉄製品
『考古資料より見た沖縄の鉄器文化』	1997	沖縄県立博物館	鉄製品
『琉球陶器の来た道 合同企画展』	2011	沖縄県立博物館美術部・那覇市立壺屋植物博物館	近世代陶磁器
『九州陶磁の編年』	2000	九州近世陶磁学会	近世代陶磁器
『壺屋古窯群Ⅰ』	1992	那覇市文化財調査報告書第23集	近世代陶磁器
『壺屋古窯群Ⅱ』	1995	沖縄県文化財調査報告書第121集	近世代陶磁器
『渡地村跡』	2012	那覇市文化財調査報告書第91集	近世代陶磁器
『雪山遺跡・猿引遺跡』	2003	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(53)	近世代陶磁器
『梅城跡』	2010	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(155)	近世代陶磁器
『円盤状製品その後の資料』	1989	上原静 / 読谷村歴史民俗資料館紀要第13号	円盤状製品
『考古学からみた沖縄諸島道具史』	2004	上原静 / 『アスク文化を考える 世界遺産国際シンポジウム・東アジアの城郭遺跡を比較して』の記録 / 今帰仁村教育委員会	円盤状製品
『首里城跡—右殿門及び周辺地区発掘調査報告書』	2003	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第14集	円盤状製品
『島瓦の考古学—琉球と瓦の物語—』	2010	石井龍太 / 新典社選書39 / 新典社	瓦
『琉球古瓦の研究』	2013	上原静 / 榕樹書林	瓦
『双口土器と獣形玉』	2001	木下尚子 / 鹿児島考古第35号	まとめ
『脊椎動物遺体からみた琉球列島の環境変化と文化変化』『琉球列島先史・原始時代の環境と文化の変遷』	2014	種泉岳二 / 琉球列島先史・原始時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集第2集 / 六一書房	まとめ
『沖縄考古学についての二、三の感想』	1975	安里嗣淳 / 『南島考古』第4号 / 沖縄考古学会	まとめ

## 参考webサイト

webサイトページ名	アドレス	参考箇所
日経電子版 / 2015.7.30 / 『南島史が塗り替わる 12世紀の製鉄が跡』	<a href="http://style.nikkei.com/article/DGXMZ089843640Y5A720C1000000">http://style.nikkei.com/article/DGXMZ089843640Y5A720C1000000</a>	環境通史
農林水産省 / 農業の匠 / 『沖縄県 金城政雄』	<a href="http://www.maff.go.jp/v/seisan/sizyutu/huku/h.takumi/pdf/okinawa_21.pdf">http://www.maff.go.jp/v/seisan/sizyutu/huku/h.takumi/pdf/okinawa_21.pdf</a>	層序
農林水産省 / 都道府県施設基準等 / 新潟県における土づくりのすすめ方 / 『土壌の基礎知識』	<a href="http://www.maff.go.jp/v/seisan/kankyo/hozen-type/h_sehi_kizyun/pdf/mtut14.pdf">http://www.maff.go.jp/v/seisan/kankyo/hozen-type/h_sehi_kizyun/pdf/mtut14.pdf</a>	層序
『日本銀行金融研究所 中世の日本で流通した銭貨—渡来銭—』	<a href="http://www.imes.boj.or.jp/cm/research/zuroku/2009e_10_29.pdf">http://www.imes.boj.or.jp/cm/research/zuroku/2009e_10_29.pdf</a>	銭貨



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	はんざんぼる いせき						
書 名	平安山原B・C遺跡						
副 書 名	桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成20年度・21年度）						
巻 次	-						
シリーズ名	北谷町教育委員会文化財調査報告書						
シリーズ番号	第40集						
編著者名	島袋春美・土岐耕司・山城安生・上地千賀子・與屋広江・比嘉優子・北條真子 樋泉岳二・黒住耐二・藤田祐樹・(株)パリオ・サーヴェイ						
編集機関	沖縄県北谷町教育委員会						
所在地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-3159						
発行年月日	2016年（平成28年）12月27日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°	′	″	
はんざんぼる いせき 平安山原B遺跡 はんざんぼる いせき 平安山原C遺跡	沖縄県北谷町伊平字平安山原	473260	26°19′30″	127°45′26″	20091014 ～ 20100219  20090331 ～ 20090930	2,595   2,900	土地区画整理事業に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
はんざんぼる いせき 平安山原B遺跡 はんざんぼる いせき 平安山原C遺跡		貝塚時代後期	廃棄貝層 上層：くびれ平底土器 期 下層：尖底土器期 散乱人骨	土器 ・縄文時代晩期大洞A式土器 石器 貝製品 ・広田下層貝符 ・文ゴホウク貝輪 ・二枚貝有孔製品（多量） 骨製品 ・化石サメ歯製骨鏝		貝層Ⅲ群-5層イノシシ下顎骨試料 : 1,887±23BP 貝層Ⅲ群-5層土器附着炭化物試料 : 1,795±26BP 貝層Ⅲ群-1層イノシシ下顎骨試料 : 1,340±25~1,140±25BP	
		グスク時代	願立柱建物址 土坑・ピット・埋納土坑 貝集積・廃棄貝層 耕作関連遺構 溝・杭列・土坑列 燃焼遺構・蹄痕・畦畔	グスク土器・カムイヤキ 滑石製品 白磁・青磁・染付・色絵 陶軸陶器・銭貨・木製品 鉄製品（風呂鍋）		Ⅲ層に含まれる炭化物試料 : 1,104±21~973±21BP Ⅲ4層に含まれる炭化物試料 : 1,065±21BP 埋納土坑内ウマ下顎骨試料 : 560±23BP	
		近世	石列群 大型土坑 クムイ状遺構 小溝状遺構群	瓦質土器・本土産陶磁器 沖縄産陶器・陶質土器 習口・鉄浮・焼土 円盤状製品			
		近・現代	屋敷跡(祝女殿内小) 道路跡(溝・石列)	瓦・軽石・ガラス板			
要 約	<p>平安山原B遺跡・平安山原C遺跡は、平成20・21年度に発掘調査が行われた隣接した遺跡である。浜堤及びそれに挟まれた流路が複数見つかっており、第一浜堤の先端付近では、貝塚時代後期前半～後半にわたる廃棄貝層が重層的に検出された。土器・貝製品等の人工遺物を大量に伴っており、当該期の変遷様相を窺い知る貴重な事例となった。第一浜堤の後背地においては、グスク時代初期ごろの耕作域が検出され、これに関連する可能性が高い遺構（溝・杭列・畦畔状遺構・蹄痕）も複数見つかっている。最下層付近からは鉄製風呂鍋も出土し、これが県内における初めての発掘調査での出土事例となった。同じくグスク期の遺構として、ウシ・ウマの幼体骨とともに南宋銭が出土した、埋納土坑も特記される。近世期の遺構としては、広く構築される石列群が挙げられ、以後の耕作域拡大に寄与した可能性が想定された。平安山原地区における本格的発掘調査の最終報告でもあり、過去の調査成果の総括作業を行った結果、縄文時代から現在に至るまでの環境変化及び集落の変遷について、解明できた部分が多い。</p>						

---

北谷町文化財調査報告書 第40集

は ん ざん ぼろ い せき  
平 安 山 原 B・C 遺 跡

— 桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成20・21年度） —

- 編 集： 北 谷 町 教 育 委 員 会  
発 行 年： 2016年（平成28年）12月  
〒904-0192 沖縄県北谷町字桑江226番地  
TEL 098-936-3159
- 印 刷： 有 限 会 社 金 城 印 刷  
〒901-0305 沖縄県糸満市西崎5-9-16番地  
TEL 098-995-0001
-



北 谷 町